

---

# 戦乙女セーラ

城弾

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

戦乙女セーラ

### 【Nコード】

N9423K

### 【作者名】

城弾

### 【あらすじ】

太古の日本に置ける女ばかりの蛮族。アマッドネス。

動植物の能力を取り込んだ彼女たちに立ち向かった三人の戦乙女セーラ。ブレイザ。ジャンス。

戦いは熾烈を極め戦乙女たちの身を犠牲にした「封印」で平和を取り戻した。

時は流れ現代日本。アマッドネスの魂が現代人に取り付き暴れ回っていた。

その前に立ちほだかるのは戦乙女の転生した三人の少年。  
彼らは戦いのおきに戦乙女として少女へと転ずるのであった。

戦乙女と怪人たちの戦いが現代日本で再び。

## EPISODE 1 「復活」

古代の日本。

戦闘に秀でた女ばかりの部族があった。

その名はアマッドネス。

彼女たちは戦闘能力を高めるため特殊な儀式を用いて動物や植物、昆虫などの能力を取り込み異形と化して行った。

そして次々と村や町に戦を仕掛けては壊滅させて行った。

アマッドネスの次のターゲットとなったのは神殿を頂く都市。

強固な城壁も役に立たず兵士たちもその魔力の前に倒れていく。

だが魔力には魔力。

三人の戦乙女が決死隊となった。

「はあああっ」

髪の毛の短いまだあどけない少女の気合のこもった拳の一撃。

現代風に言うならノースリーブでミニスカートのワンピースというところか。

動きやすさを優先されていた。

右手には真紅の鳥を象った手甲。左腕には蒼いいるかを象った手甲をしていた。

その右手が蜘蛛を思わせるアマッドネスにめり込み倒した。

「ふう。次から次へと切りがない」

「大丈夫ですか？ セーラ様？」

付き従う黒猫が語りかける。

「平気。まだまだいけるよ。キャロル」

得意げに語るがだいたい疲れている。

精一杯の強がりだ。

そしてその疲労ゆえに注意力もなくなっていた。

頭上の敵に気がつかなかった。しかし  
「危ない。セーラさん」

叫び声が上がった直後に風きり音が。  
飛翔した矢がコウモリのような異形を撃ち抜いた。

束ねた髪少女が矢を放ったのだ。こちらはかなり布地が多い。  
ただ激戦の末あちこちが敗れている。

それでも射手らしく直接の攻撃はそれほど受けていない様子。

「大丈夫ですか。セーラさん」

ウエーブの掛かったセミロングの少女が心配して言う。

「はは。ありがと。ジャンス。助かったよ」

「主人の身を案じるなら敵の接近も教えなきゃなあ。使い魔失格だ  
ぜえ。キャロル」

「う…」

「ジャンス」と呼ばれた少女の傍らにはカラスが。これまた人語  
を喋る。

「言いすぎよ。ウォーレン」

空に行く使い魔は主人の弓使いに窘められる。

三人が合流した。鎧に身を固めた少女がピラニアのような異形を  
袈裟切りにしていた。

優雅さを感じさせる金色の長い髪。いわゆる縦ロールがそれを増  
強させていた。

セーラとジャンスが可愛い顔立ちなのに対して、彼女は美人と言  
う感じ。

彼女は剣士である。鎧には返り血がたっぷりについており、それ  
が激戦を物語る。

荒い呼吸を整えて女剣士は二人に注意を促す。

「二人とも。気を抜くな。クイーンは近いぞ」

「ああ。わかってるって。ブレイザ」

三人の少女は108の魔物を打ち倒しながら敵の大将を目指す。

そして…最後の戦いが始まっていた。

ジャンスの放つ弓が最後の一人…敵の大将を撃つ。

「うおおおっ」

血まみれのブレイザが駆け抜け様にそれを斬る。

「はあああっ」

とどめがセーラの拳だ。

それぞれの技が炸裂するがまだ倒れない。

「ふふふっ。その程度か。戦乙女たちよ」

なんと傷がふさがりつつある。さらには彼女に連動しているのか倒されたはずの魔物たちまでが立ち上がりかけている。

特筆すべきはその姿。異形ではない。つまり戦闘形態ではない。

もつともこれは別に侮ったからではない。既に闘いのために戦闘形態への変身も出来なくなっていたのだ。

それでもまだ倒れない。

「なんて奴だ。このままでは負ける」

「あの紋様。魔力で不死身になっているようです」

「女王が蘇えるとコイツらまで…逆に言えば女王を倒せば全てが終わる」

三人は顔を見合わせる。決意を固めた表情だ。

「ブレイザ様。まさか」

剣士の使い魔である黒犬が狼狽して叫ぶ。

「どのみちこのままでは滅ぼされるよ。ドーベル」

「仕方ありませんね…既にこの命は神に返すつもりでしたし」

「奴を倒してみんなを守るにはあれしかない」

のろのろと立ち上がる女王にあえて攻撃を入れない。

一度は灰にしたのにあっさり蘇えたのだ。

むしろ中途半端な方が復活に時間が掛かるようだ。

その隙に三人の戦乙女は女王を取り囲むように正三角形の陣を。

呪文を唱える。その詠唱が終わると三人は一斉に跳んだ。

「はっ」「やっ」「はあああっ」

凄まじい気迫の短い掛け声と共に、全身全霊をこめたキックが炸裂した。

ただのとび蹴りではない。魔力を込めたらしくそれぞれの足が光っていた。

そしてその光がクイーンに注ぎ込まれる。

「ぐぎゃあああっっ。魔力が…魔力を断ち切ったかつ」

悶絶する女王。だが三人は跳ね返された。

それが限界だったかクイーンも膝を折る。

「くくく。この場は負けを認めよう。だがこれでは肉体を滅ぼすだけ。魂までは滅ぼせぬ。封印どまりだ。そして貴様らも我が呪いを受けて…」

戦乙女たちが足からどす黒く変化している。

女王の力の源である魔力が彼女たちに流れ込んできたのだ。

「くっ。こちらと同じ…魂までは屈せぬ。例え蘇えっても我らと同じ魂を持つものが」

最後までいえなかった。

セーラ。ブレイザ。ジャンスの三人は魔力によって爆発。

その肉体は17才の若さで朽ち果てた。

だがそれと同時にアマッドネスのクイーンも爆発を起こした。封印された。

それにより復活しかかった魔物たちも再び倒れた。

神官が叫ぶ。

「急げ。全てを土に返す。埋めてしまふのだ。この場を清める。そして神殿を建てよう。魔物どもを封じ込め、そして戦乙女たちを称えるべく。そうだ。彼女たちは神になったのだ」

幾多の犠牲を払い闘いは集結した。

封印を主目的にしつつ三人の戦乙女…バルキュリアを称えるため

の神殿が建立された。

「神官様。われら使い魔は主達に殉じたいと思います」

黒犬のドーベルが申し出る。

「我々もこの神殿を見守り続けます」

「いい加減疲れちまつたし、寝させてもらうぜ」

黒猫キヤロル。カラスのウォーレンが続く。

「そうか。ならば見守ってくれ。女神たちを」

こうして使い魔たちは神殿を守る存在として奉られた。

長い年月が経ち、いつしか神殿の存在も歴史の闇に埋もれていく。戦国時代にはとうとう神殿も破壊されたが、封印自体は効力を保ちアマッドネスは閉じ込められたままだった。

やがて神殿の存在も忘れ去られ、その土地には街が作られていく。

だが、闘いは終わってなかったのだ。

## EPISODE 1「復活」

現代の日本。東京。

「何の用かな？」

手にしたかばんを肩に担ぐようにしていた少年が余裕のある態度で辺りを見回す。

少年は高校一年にして180センチの長身。体重も80キロと堂々とした体格だ。



短い髪は逆立ち、いやでも威圧してしまう。色黒のラテン系の顔立ちは陽気そうに見えるが。

その後ろではセミロングのセーラー服姿の少女が震えていた。二人の周辺を囲むのはお世辞にも柄がいいとはいえない少年たち。釘を刺したバット。チェーン。ナイフを持っている3人だ。

「へっへっへっ。昨日は仲間が世話になったからよ。御礼に来たのさ」

「ああ。カツアゲしていた奴の仲間か。社会に適應できるように矯正してやったが、わざわざ御礼に来るとは義理堅いな」

「ふざけた態度」に三人は切れた。

「ぬかしやがれ」

三人一斉に攻撃してくる。しかし同士討ちを避けるためどうしてもタイムラグが生じる。

得物の小さいナイフの男の攻撃が最初に届きかける。

襲われた少年はその右手のナイフを左手で払いのける。

防御と同時に右手への攻撃となる水平に薙いだチョップだ。

動きの止まったところでから空きのボディに右の拳がめり込む。

いや。上へと突き抜ける。そのままあごを砕く。

「野郎」

ナイフ男を巻き添えにしまいと攻撃を避けていた釘バット男の攻撃がきた。

野球で言うならレベルスイング。最短距離を薙ぎに来る。

それをなんとジャンプでかわした。

とんでもない跳躍力に目を奪われているとそのままサッカーのオバーヘッドキックのようなケリが脳天に見舞われ気絶する。

残ったのはチェーンの男。がたがた震えている。

「ま…まさかあんた…」

「色々よくない噂もあるようだがな。帰ってくれるんなら俺としても助かるんだが」

あくまで正当防衛。自分から手は出さない。そんな態度。

「既に伝説を築いた男…高岩せいら…」

「誰が『セイラ』だ？」

形相が怒りのものに変わる。チェーンの男をつかまえてしまう。そしてそのまま頭上に掲げ上げる。

「俺の名はな、高岩清良だ」

叫ぶと猛烈な回転を始めた。

回されているチェーンの男は既に目が回っているが本人は平気だ。

「いい加減にしないさい。キヨシ」

少女の怒声で清良は回転を止めた。どことなく肩をすくめているように見える。

ゆっくりとチェーンの男を下ろしてやるが、三半規管がやられてまともに立てない。

「オ…おい。友紀トモキ。先に絡んできたのは奴らだぞ」

「いくら正当防衛でもやりすぎよ。だから変な噂が立つのよ」

「言いたい奴には言わせて置け」

「反省しているの？」

「……………すみません」

母親に怒られた小さな子供のように謝る。しかし心中では

（なんだよ。守ってやったのに。女子高生って最強の生き物じゃないのか？）

などと思っていた。

「何か言った？」

「い…いや。何も」

恐るべき勘である。

三人の不良を残して二人はその場を去る。そして影から出てくる黒猫。

「間違いない。あの人こそ……………」

黒猫は清良の後をつけ始めた。

「あつづ。チキシヨウ。今度あつたらあの野郎……………」

清良に叩きのめされた不良たちは憂さ晴らしとばかりに町へくりだした。

「おい。『サイフ』どうした？」

「ああ。今呼ぶよ」

釘バットの男が携帯電話を取り出した。

約一時間後。気の弱そうな…そして体格も貧弱な少年が三人の不良に金を差し出していた。

「ああ？ これだけかよ。しけてやがんな。もっと持ってこい」

「で…でも、親にばれたら」

「んなこと知るか？ バレねえようにうまくやりゃいいんだよ」

そう言いつつ差し出された札を取り上げる。

「じゃあな。また頼むぜ」

「警察なんぞに駆け込んだら殺すってこと忘れるなよ」

「ひやはははは」

品性のカケラも感じさせない表情と言葉遣いで釘を刺す。

残された少年は悔し涙を流す。

「僕に…僕にもっと力があつたら…あんな奴らに」

(力が欲しいか?)

頭の中に直接声が響く。

「わっ?」

思わず声を出してしまう少年。安楽知由あんらくちよし

その頭上から知由の眼前に蜘蛛が降りてくる。

「わわっ。く…蜘蛛っ」

(怖れることはない。お前と私は近しいものだ)

「蜘蛛が…喋っているの?」

恐怖心が麻痺してきた。否。心を取り込まれてきている。

(私と一つになれ。そうすれば無敵の力を与えてやるっ)

「無敵の…力…」

その甘美な言葉に意思の光が少年の瞳から消える。

彼は蜘蛛を手に乗せる。

それを額に運ぶ。

蜘蛛は額に張り付くと泥沼に沈むように額から少年の頭へと溶け込んで行った。

翌朝。

清良は登校すべくいつもの道を歩いていた。

現在は住宅街。ちょうど誰もいないところ。

彼の前方に黒猫がいるだけだ。

傳っているように見える。それが僅かに心に引っかかるが無視して通り過ぎようとした。

「お待ちしました。セーラ様」

ぎよっとなり彼は立ち止まる。周囲には誰もいない。

(テレビの音か?)

ドラマの台詞が民家から漏れたかと考えた。それ自体は何の不思議もない。

だからまた歩みを始める。

「こちらですよ。私です。キャロルです」

振り返り確認する清良。だがやはり黒猫だけ。

「お会いしたかったです。セーラ様」

「猫が…喋っている?」

至極当然のリアクション。そして次に額を押さえる。

「そうか…疲れているんだな。こんな幻聴があるなんて。学校フケよっかな」

「セーラさま。私を無視しないでください」

カチンときた。

「おい…それはオレに話しているのか?」

「そうですね。先ほどから」

「俺の名はな「たかいわきよし」だ。女みたいな名前で呼ぶな」  
凄まじい形相。元々威圧感がある。たじろぐ黒猫。

「い…今は男の体ですがあなたの魂は太古の戦乙女。セーラ様のそれ。あなたはセーラ様の生まれ変わりなのです」

「戦乙女？ 俺のどこが女だ」

「大丈夫です。戦う時には本来の姿に」

「やかましい。幻覚の分際で口答えするんじゃない」

不機嫌そのままに彼は黒猫・キャロルを無視して学校へと向かう。

「ああ。セーラ様あ」

追いかける。しかしバスに乗られてしまい振り切られた。

放課後。幼なじみの少女。野川友紀が清良に近寄る。

二月である。当然冬服。長袖のセーラー服だ。冬服なのだが白い。

タイの色は赤。

「どうしたの？ 今日は一日ぶすつとしてたけど」

「疲れてるんだよ。朝っぱらから変な幻は見るし」

「なに？ それ？」

「俺にもわけがわかんねえよ」

そんな何気ない会話の途中だ。彼の脳裏に嫌な予感が走る。

「!？」

「どうしたの？」

友紀の問いかけを無視して清良は走る。彼自身もどこに行くのかわかっていない。

ただ心の命ずるままに。

高校の裏側。知由はまた三人組に迫られていた。

「てめえ。いい度胸じゃねえか。俺達を呼びつけるたあよお」

「それとも何か？ 昨日の足りない分でもくれるってか」

昨日までならがたがた震えていたであろう。しかし知由は薄笑いを浮かべている。

「なんだあ？ その人を馬鹿にしたような笑い方は？」

さすがに今は持つていないが釘バットの男が知由を殴る。だが

「い…いてえ。何だコイツ。鉄板でも殴ったみたいだな」

頬を殴り飛ばしたはずなのに。

「痛いじゃないか…」

まるで抑揚のない声で知由は言う。無表情：むしろ狂気を孕んだ目だ。

「これはもうお仕置きが必要だね」

言うなり口をがばつとあける。その喉の奥から大量の「糸」が吐かれる。

「うわああああっ」

これをテレビで見たら特撮のそれと笑い飛ばすが、明らか「人間」がいきなり蜘蛛のように体から糸を出したのだ。

恐怖に駆られるのも無理からぬところ。

だが悲鳴を上げたのが皮肉にも致命的だった。

大きく開けられた口にその「糸」が入り込む。

窒息して悶絶する「釘バット」。そして動かなくなる。

「チエーン」「ナイフ」は恐怖で動けない。

「た…助けてくれ…」

「助けてくれ？ 僕が今まで何度そう思ったと思う？」

言いながら楽しそうな笑顔を浮かべる。

復讐を果たせる喜び。それよりも暴力に酔いしれている。

異変は糸だけではない。平らな胸板がせり出してくる。

筋肉が盛り上がったのではない。いきなり女の豊かな胸になった。

髪の毛も生き物のようにうごめき伸びていく。

顔も女のそれへと変る。ただしただの女ではない。

まるで蜘蛛のように縞模様が入っている。

ワイシャツ越しにでもウエストの括れがわかる。

その上が盛り上がるとワイシャツを突き破って一対の腕が出てくる。

気がつけば下半身も異様になっている。

女どころか人間ですらない。蜘蛛の下腹部だ。

本来の足がそれぞれ二つに裂け四足になる。

例えるならギリシヤ神話のケンタウロス。半人半馬の存在。それの蜘蛛版だ。

その「蜘蛛女」は新たに生えた腕で二人の不良の首根っこを捕まえる。

まるで重さを感じないかのように持ち上げる。

「絞首刑」に処される二人はもがくがやがて手足から力が抜けだらんと垂れ下がる。

その二人を乱暴に投げ捨てる蜘蛛女。

「くくく。安心しろ。このまま死なせやしないよ。お前たちはあたしの奴隷になるのさ」

口を開くと釘バットを相手にやったように口の中に糸を流し込む。

まさにその現場に清良は駆けつけた。

「な…なんだ？ ガキ向けのドラマの撮影か？」

そう思うのも無理はない。女郎蜘蛛のバケモノが人を襲ったのだから。

現実にはありえない。

「見られたか…ならばお前も奴隷となれ」

腕を振るうと襲われた不良三人組がむくりと起き上がる。

その姿が女へと変っていく。

「男が…女に？」

「ふん。下らぬ男など要らぬ。みんな女に作り変えて我らアマッドネスのために働かせる」

発声器官が人と違っていいのかくぐもった声で喋る。

喋っているうちに三人は完全に女へと変化した。そして襲い掛かる。

普段なら何てことないがあまりの非現実的な出来事に清良はパニ

ツクに陥っていた。

「セーラ様。戦ってください。そうすれば本来のあなたに戻れます」  
声はキャロルだった。どうやらバスを追いかけて学校まで来ていたらしい。

そしてその「戦う」と言うキーワードが自己防衛本能と相俟って彼は思わず三人の内の一人を右腕で殴り飛ばしていた。  
吹っ飛ぶ女。吹っ飛ばした右腕に真紅の手甲が。外に向かってひれのようになっている。

反対側を見るといかか鯨の尾ひれをイメージさせる形の蒼い手  
甲が。

「な…なんだあ？」

変化はそれだけではない。学生服の両腕が白く変化している。  
袖が絞り込まれてそのフォルムはセーラー服だ。

白い部分が胸元を侵食し始める。同時に清良の巨体が縮んでいく。  
分厚い胸板が豊満なバストに。

割れた腹筋がくびれたウエストに。  
もともと逞しい腰つきだったが、それが大きく丸いものに。

学生ズボンはどんどん短くなり、そして左右のそれが融合して  
プリーツスカートへと変化する。

反対に靴下が面積を広げて太ももまで覆う。いわゆるニーソックスになる。

穿いていたスニーカーも可愛いピンク色に。  
もちろん顔も変化している。

威圧的な顔立ちが優しく可愛らしく変わる。

太い眉が細くなり、まつげが長くなり本数も増えて目が大きな印象になる。

肌の色も健康的な白さに。

髪は短めだがそれでもうなじまで一気に伸びる。



その変化は僅かな時間で完了していた。

「き…貴様。セーラ。我らの復活に呼応して蘇えたか？」  
明らかに狼狽している女郎蜘蛛。

「なんだよ？ 何が起きたんだよ…この声？ まるで女の…」  
声すらもその容貌に相応しい可愛い声になっていた。

「まさか」

もっと非常識な事態に気をとられた。

自分の体をまさぐる。

柔らかい肌。豊かな胸。無駄毛のまったくない「絶対領域」。細い手足。

「オ…俺…女になっちゃったのか？」

そこにいたのはセーラー服姿の美少女。あまりに非現実的で気絶すら出来ない。

「ああ。まさしくセーラ様」

涙を流しそうな声のキャロル。

拳の戦乙女セーラ。現代日本に復活。

## EPISODE 1 「復活」 (後書き)

### 戦乙女セーラ次回予告

「なんだよ。なんで女の姿になったんだよ？」

「気に入らないな…そんな奴らのために誰かが泣く羽目になるなんてな」

「お前たちのような腕力馬鹿はいい気になって僕のような人間を踏みつけにする。今度は僕がお前らを下におく。お前はその見せしめだ」

「セーラ様。脱ぎ捨てるんですよ。鎧を。そうすれば動けます」

「キャスト オフ」

## EPISODE 2 「変身」

## EPISODE 2 「変身」

清良は太古の戦乙女。ヴァルキリアの一人。セーラの姿になった。「なんだよ。なんで女の姿になったんだよ？」

「それがセーラ様本来のお姿です。ただ衣装だけは現代のそれに合わせてあるようですが」

使い魔のキャラルが説明する。

「わかんねーけど…こうなりややけだ」

わけもわからず突っ込んでいく。そのスピードは一流スプリンターを凌駕する。

(体が軽い?! 女になったんなら筋肉がないはずなのに?)  
疑問を解き明かしている暇はない。

かつては不良の男子だった女たちを軽く突き飛ばして道を作る。

「乱戦の鉄則。大将を叩く」

一目散に蜘蛛の怪物に突っ込んでいく。

だが女郎蜘蛛は口から「槍」を吐き出した。糸を束ねて固めたやりだ。

「うおっ」

避けようとするがその速度ゆえに避けきれない。

清良：この姿ではやはりセーラと呼ぶのが相応しい。

セーラの腹部に「槍」が命中したかと思われた。

ところが槍はまったく刺さっていない。力なく落ちる。

「どうなってるんだ? どてっ腹ぶち抜かれたと思ったのにな?」

「その服は軽いけど魔力で守られた『鎧』です。むき出しの部分も魔力で守られています。そして魔力で腕力や脚力も並の男よりはるかに強くなっています。だから怯まずに戦ってください」

しかし敵もこの槍は本気で撃ったわけではないらしい。単なるけん制であったようだ。

その証拠に糸を吐きビルの屋上へと届かせると、あっという間に

それを使って逃げて行った。

残されたのは気絶している三人の女とセーラー服の少女。そして黒猫。

「説明してくれるんだろうな？」

「そりゃあもうよろこんで」

人間なら笑顔になりそうな口調である。

## EPISODE 2 「変身」

セーラはその姿を利用して高校の中へと入り込む。

もっとも本来はこの在校生なのだ。

そして体育用具室へと入る。

扉を閉めて一息。

「さて…話をする前にだが…どうやったら元に戻るんだ？」

「えー。そのままでもいいのに」

「この姿で家に帰れるか？」

そう。戦乙女セーラは一時的な姿。

本来の高岩清良としての生活もある。それはキャロルも理解していた。

「戻るのでしたら戦う意識を解いてください。それで戻れます。まあ意識を失えばもっと確実にですが」

「寝るにはまだ早いよ」

その台詞から怒気は感じられない。リラックスしようとしている。それが功を奏してかフラッシュした後に一瞬で元の男子高校生に。両腕の手甲は残っていたがそれも一瞬でリストバンドへと変化し

た。右手に赤。左手に青。

「なるほど。さつきは殴った…つまり戦うつもりだったから変身したわけか。で、詳しい話だが」

「はい。説明いたしますです」

人間の女のような声の黒猫は得意げに説明を開始した。

アマッドネスの侵攻。ヴァルキリアと呼ばれる戦乙女の戦い。戦死。封印。それらを全て説明した。

「奴等は肉体は完全に滅んでいるのですが魂は封じてあるだけです。さすがのヴァルキリアたちもあの数はそこまで出来ませんでした。」

封印は効力を維持していたのですがさすがにそれも長い年月で」

「切れかけてきたわけか。しかしそれなら奴等はなんで一編に出てこないんだ？」

「魂だけではさすがのアマッドネスも何も出来ません。そこでヨリシロが必要となるのです。それにも相性がありまして。相性の悪い相手を選ぶともう一度死ぬまでその肉体で過ごす羽目になりますし」

「だから相方探しに時間が掛かるわけか？ あの蜘蛛女も誰かの変身した姿か」

「はい。便宜上スパイダーアマッドネスと呼称しますが、どうやらこの辺りでは最初に相手を見つけることに成功したようです」

「するとそのスパイダーアマッドネスに女へと変えられた連中の方は元に戻るのか？」

「アマッドネスは女だけの一団です。だから配下も女だけです。彼らは残念ながら死ぬまで」

「女として生きる…か…死ぬよりマシだが」

ふと遠い目になる。それまで男として生きてきたのにいきなり女としての人生を歩まされる。

幼い頃から少しずつ『男を愛する覚悟』『体を捧げる覚悟』『妻となる覚悟』『子を為す覚悟』をしてきた生粋の女はいいかもしれない。

だが本来なら一生しなくていい覚悟を背負わされた「彼ら」に同情をしていたのだ。

「こういうのも…暴力って奴だな」

清良は不良のレッテルを貼られて入るが「かたぎ」には手を出していない。

あくまで降りかかる火の粉を払うだけである。

暴力を愛する存在ではないのだ。

「気に入らないな…そんな奴らのために誰かが泣く羽目になるなんてな」

脳裏に幼なじみの少女の姿が。

「セーラ様。生まれ変わってもお優しい」

「それだ。俺が本当にその『バルクリア』とかの生まれ変わりなのか？ まあ実際に女に変身したんじゃ多少は信じざるを得ないが」

「間違いありません。あのお姿。あのお顔。まさにセーラ様」

「ふうん。セーラー服着た巫女ねえ」

「それなんです…セーラ様も魔力で『布の鎧』を着てました。しかしあなたはあの形を選びましたが…それはカモフラージュのためですか？ 心の奥でのこだわりがでるようなんですが」

セーラー服のデザインは清良の通う高校のそれによく似ていた。

唯一違うのは胸元のピンクのリボンが巨大で、まるでプロテクターのようだったことだ。

「…キャロルだったな。この世で最強の生き物を知っているか？」

「へ？」

「それがあの服の理由なんだろうさ」

再び友紀の顔が目に見えかぶ。

（確かにアイツにだけは勝った覚えがない。いつしかセーラー服が苦手になっていたが…まさかこんな形で反映されるとはな）

「はあ。皆さん同じようなことをなさるんですね」

「ん？ 皆さん？ ちょっと待て。やけに事情に強いと思ったが…先に『ブレイザ』『ザンス』ってのが『復活』しているわけか？

だからお前はそれだけ事情を知っていると」

「ブレイザ様にジャンス様ですよ。お二人とも既に蘇えられてそれ  
ぞれの場所で戦っています」

こんな戦いが人知れず既に行われていたのか…彼はそれにも驚い  
た。

「既に108の魔物のうち30体くらいは完全に倒されて浄化して  
います。しかし推測する限りこのエリアには全体の三分の一の36  
体がそのままに」

いつそ気絶したいと清良は願った。

そのころ。安楽知由の姿に戻ったスパイダーアマッドネスは自宅  
に戻っていた。

(まさか高岩清良がヴァルキリア・セーラとはな)

既にスパイダーアマッドネスと知由の意識が混じり合ってきてい  
る。

両者の知識が混在している。だから学校の知識もあるし、太古の  
闘いの記憶もある。

(同胞に教えるか…いや。奴もまだ覚醒したてのようだな。三人の  
戦巫女の一人を葬ったとなればこのタランの評価もさぞかし上がる  
だろう。それにまだ出てきた奴等は少ないしな)

功名心に駆られたスパイダーアマッドネスは情報を流さずにいた。

清良も自宅へと戻る。

そしてベッドに倒れこむ。

「くたびれた…なんて一日だ…」

いきなり魔物に襲われ、そして変身して戦う。しかも女の子にな  
っていた。そりゃ疲労もピークになる。

そのまま眠りにつく。

嫌でも朝は来る。

「おはよう」

友紀が屈託のない笑顔で朝の挨拶をする。  
その顔を見つめる清良。

「ど…どうしたの。じつと見つめて。恥ずかしいじゃない」

「いや。なんでもねえよ」

さり気ない会話。だが彼は決意を固めた。

清良は授業に集中できなかった。

(昨日はあのバケモノの気配が飛び込んできたが今日はまだか)  
それを待つあまり憔悴していた。

結局は何もないまま放課後を迎える。

「あの…」

来訪者は気弱そうな少年だ。

清良とは逆に使い走りで見知らぬ名が知れていた安楽知由だった。

「何の用だ？」

「はい。高岩君を呼んでくるようにいわれて」

ちっ。清良は舌打ちをした。

「こんなときに」と言う思いと、言いなりになっているこの少年に  
対してである。

「わかったよ。相手してやる。どこだ？」

鬱憤晴らしもあり「ケンカの誘い」に応じることにした。

知由の先導で出向いた場所は屋上だった。しかしそこには誰もい  
なかった。

「待ち伏せか？ 呼び出してそれも間抜けだぜ」

「いいや。既に相手を見ているよ。セーラ」

背後からくぐもった女声。

「その声は？」

慌てて振り返るが知由だけ。その姿が変わる。スパイダーアマッ



ドネスへと。

「お前が…まさか？」

貧弱な体の少年が戦闘に向いているとは思えなかった。

「セーラ様。アマッドネスはとりついた相手の肉体を変えてしまいます。元の性別や強さは関係ありません」

さすがは遣い魔。常に寄り添うということかあつという間にバトルフィールドに現れて助言を与えるキャラル。

「そーか。『天敵』の復活したばかりを狙ってきたってわけだ。だが俺は簡単にはやられねえぞ」

戦意を高める。しかし簡単に「変身」は出来ない。

とりあえず逃げるが女郎蜘蛛が迫る。

(くそつ。何かスイッチがあれば…こんなヒーロー物だとまさにそれだが…)

迷っていたら見計らったようにキャラルがアドバイスを。

「セーラ様。戦意を高める儀式を。何かポーズなどを」

(うわ…やっぱりやるのか…変身ポーズ)

恥ずかしくてたまらない。だが躊躇しているうちにスパイダーアマッドネスが迫る。

四本の腕で攻撃をしてくる。四本だけに上下左右だ。

「くっ」

とっさに上の腕を右手で受けた。下の腕は左手で。やや動きの遅れた左右の腕を封じるべくそのまま反時計回りに九十度回す。

ちょうど水平に両手を広げた形だ。

ねじ伏せたものをいきなり離した。両腕を思い切り体にひきつけるとそのまま前方へとクロスさせつつ突き出して攻撃。

そして同時にやけくそで叫んだ。

「変身！」

クロスした赤と青のブレスレットがスパークした。一瞬にして清

良はヴァルキリアになった。

「やった。意識の高揚に成功した」

無邪気に喜ぶキャロル。だがセーラは頬が赤い。

(は…恥ずかしい…)

考えてみればいくら肉体が女でも「女装」しているのである。

どういう原理なのか下着も変わっているらしい。胸元の感触と肩のストラップが存在を意識させる。

むき出しの脚にひらひらとまとわりつく短いスカート。

硬派を気取った少年には耐えがたかった。

そしてさらに「変身ポーズ」を取って、バケモノと戦っている。

(こんな茶番。さっさと終わらせよう)

このセーラー服が無敵の鎧なのは前日の放課後に証明されている。そして同じ相手との闘いだ。

だからお構いなしに突っ込んで行った。

大蜘蛛は槍をむちやくちやに放出してくる。それを度外視して走る。

何しろ自分の力がわからない。身の軽さと防御力だけだ。

間合いのある闘いもわからない。だから腕の届く範囲に接近を試みた。

しかしまともに接近できるはずもなかった。

いきなり体当たりを仕掛けてきた。

「うわっ」

確かに攻撃のダメージは肉体にはないが、物理的に吹っ飛ばされるのまでは防げない。

空に向かって吹っ飛ばされる。何かに引っかかって落下は免れた。だが

「こ…これは？ 動けない？」

槍はセーラの後ろで展開して網になっていたのだ。

セーラはその巨大な蜘蛛の網に貼り付けられていた。

戦闘開始からわずか二分で大ピンチに。

「くくくく。どうだ？ 磔の気分は？」

僅かに声に少年のものが混じる。

「お前たちのような腕力馬鹿はいい気になって僕のような人間を踏みつけにする。今度は僕がお前らを下におく。お前はその見せしめだ」

スパイダーアマッドネスは功名心からセーラを磔にして公開処刑を選択した。

そしていじめられていた安楽知由は屈折した心で復讐心を抱いていた。

「おい。なんだありゃ？」

放課後の運動部の面々が屋上を見上げる。

自分たちの学校の女子制服らしい服装の女の子が、空中に貼り付けられていた。

糸が遠くて彼らには見えなかった。

騒然となるものあまりに非現実的すぎて行動を起こすものがない。

「くそつ。張り付いて動けねえ」

「セーラ様。脱ぎ捨てるんですよ。鎧を。そうすれば動けます」

「脱げッたってどうやって？ 腕もくっついてるんだ」

会話の間にもじわじわと蜘蛛が迫る。

どうやら勝利を確信して弄るつもりだ、

「お忘れですか？ 魔力の鎧です。意識すればはげます。動きやすい服装をイメージしてください」

イメージは浮かんだ。しかしそれはセーラ服からの連想だった。慌ててイメージを切り替えようとする。だが蜘蛛がもう近くに來ていた。選択の余地がなかった。

「イメージしたぞ。後はどうするんだ？」

「動けないならキーワードを叫んでください」

……またか。

げんなりとしてきた。

「ジャンス様やブレイザ様は『キャストオフ』と仰ってます」

「わかったよ。言えばいいんだろ」

殺されるよりマシだ。彼女は可愛らしい高い声で叫んだ。

「キャスト オフ」

その瞬間。セーラー服やプリーツスカートが弾け跳んだ。

その「弾丸」を食らった女郎蜘蛛はもんどりうって倒れる。

そしてセーラは脱出に成功した。

「ふう。自由に…なんじゃこりゃあっ？」

セーラー服が弾け飛んだその後の姿に絶叫した。

丸首の白いトップス。そしてヒップラインもろだしのアンダー。

彼女の姿は女子体操着姿であった。

「た…確かに動きやすいイメージだが…あああ。女になるのが避けられないまでも、せめてブルマは…」

改めて姿を見よう。

頭部には眉間を守るべく赤い鉢巻が。

白い体操着。袖や襟元が紺色で縁取られている。

濃紺のブルマ。白いハイソックス。ピンクのスニーカー。

フィクションではよくあるが、現実には絶滅した女子体操着姿である。

「おのれえっ」

何故か焦りを見せる巨大蜘蛛。

「セーラ様。気をつけて。今度はさっきまでと違って服の部分しか守られていません」

そういわれて慌てて攻撃を回避するセーラ。とんでもないところまで走ってしまう。

「なんだ？ 紙一重で避けたはずがこんな大回りに」

「防御に使っていた魔力が少なくなった分、それが運動能力に回ってます。加減してください」

「それを早く言え。つまりセーラー服姿は防御重視で、こっちは攻撃重視というわけだな」

それを理解したセーラーは猛攻撃を開始した。

常に死角に回り込み攻撃を加えていく。そして確実にダメージを与えていく。

「くそおおおおっ」

大蜘蛛はまさにやけくそで正面から覆いかぶさろうとしてきた。

「このっ」

そのから空きの腹部にセーラーは左腕でチョップを見舞う。

まるで凍りついたように動かなくなるスパイダーアマッドネス。

「やった。アクアフリーズが決まった」

叫ぶ黒猫。女郎蜘蛛はフリーズの名の通りに凍てついていた。

「セーラ様。とどめに右の炎の拳で。中途半端では『氷』が溶けま  
す」

「つまり一気に蒸発させろってわけ。任せて」

動かない相手である。サンドバックにパンチを叩き込むようなものだ。

「セーのお」

セーラーは思い切りスイングして右のアッパーを叩き込む。

それは下腹部を切り裂き、胸を割り、あごを砕いて燃え上がる炎だった。

ちょうど十時のように攻撃を加えた。その真ん中から炎が上がる。

「ぐぎゃあああっっっ」

炎に包まれるスパイダーアマッドネス。もがき苦しむ。

「セーラ…殺す。やってやる。殺す。やってやる。殺す」

呪いの言葉を吐き続ける。だがその肉体が爆発四散する。この戦いは終わった。

「や…やった…いや…やっちゃった」

前半はバケモノ退治。しかしヨリシロとなっていた少年を殺してしまったことが後半の台詞に。

爆発が収まると蛍を思わせる小さな光が天へと登っていく。なんとなくそれを見送ってしまふセーラ。

「あれは？」

「スパイダーアマッドネスの魂です。やっと闘いの呪縛から解かれました」

「そっか…長い年月。人間だったことを忘れるほどの長さ。やっと逝けたわけね…そっか。安楽は？」

自分が殺めたと思った「少年」を探す。しかしそこにいたのは全裸の少女。

「だ…誰？」

どこことなく見覚えがある。

「たぶん…スパイダーアマッドネスに取り付かれていた少年じゃないかと」

「安楽う？ こいつが。女だよ」

心なし口調が少女のそれになっているセーラ。

「魔力の攻撃ですのでダメージはアマッドネスだけに行きます。しかし再生したら遺伝子情報が欠けていて男だった場合みんな女になっちゃうんですよ」

「そっか…」

自分も少女の姿だがそれは戦いの時だけ。この少年だった存在は心の弱さに付け込まれて残りの生涯を女として生きる羽目になった。それを思うと手放して勝利を喜べなかった。

哀愁の漂う背中。しかし

「なんかすごい爆発があつたぞ」

「空中に貼り付けられていた女の子もいたし」

「何があつたんだ」

大勢の気配が。

「いけない。騒ぎで上がってきちゃった」

彼女は生徒たちが全裸の少女に気をとられている隙に階段を駆け下りて逃げた。

(それにしてもこれからどうなっちゃうの?)  
そんなことを思いながら。

長い闘いの幕がまた開いた。

## EPISODE 2 「変身」 (後書き)

### 次回予告

(我らの復活に呼応すべくセーラまでもが蘇えりおったわ)

(これで戦乙女が三人全て蘇えたか)

「あたしよあたし。安楽知由よ」

「けっ。不味い血だ。次はどいつだ？ 人を小物扱いしやがって。あたしがお前らを支配してやるよ」

「ア…熱い」

「セーラ様。それは恐らく妖精の型。現代風に言うならフェアリーフォームとでもいいでしょうか。それならヴァルキリアフォーム以上に素早く動けます」

EPISODE 3 「妖精」



### EPISODE 3 「妖精」

夕闇。それは魔の潜む時間。

(我らの復活に呼応すべくセーラまでもが蘇えりおったわ)

(これで戦乙女が三人全て蘇えたか)

(だが解せぬ。いくら長い年月が経ったといえど奴らの変わり方…  
そもそもなぜ転生は全て男なのだ?)

(うむ。我らが魂だけとは言えど女のままと言うのに、封印したき  
やつらが変わるとは?)

(ふふ。これに関してはわれ等に分がある。何しろ奴ら、古の戦い  
では……)

悪しき魂たちが精神で会話していた。

「ふいーっ。すっかり遅くなっちまったぜ」

男子生徒の一人。高森が慌てて学校を出て行く。既に日も暮れて  
いる。

「まったく。対立する連中の板ばさみ状態で苦労させられるぜ」  
生徒会役員だった。しかし任期満了間際に起きた会長と副会長の  
対立。そして派閥割れ。

高森は両方に取り入って分のあるほうについていた。

そのため会議に付き合いここまで遅くなった。

その背後から「闇」の魂が迫る。一匹のコウモリ。

少年の首筋に噛み付く。硬直する高森。血の気がどんどん引いて  
いく。

そして首からコウモリが溶けて少年の体に。力なく項垂れる高森。

やがて高森は顔を上げる。

小ずるそつな表情だったのが、邪悪な印象へと変貌していた。

E P I S S O D E 3 「妖精」

あのスパイダーアマッドネスとの闘いから三日。

「高岩君。いますか？」

一人の少女が高岩清良を訪ねた。

髪の長い華奢な美少女。赤いメガネが知的であり、可愛らしくもある。

胸は薄い。腕も細い。そしてまるで鶴の様に脚も細い。白い肌が輝いて見える。

うつすらと微笑んでいる。まるで邪気のない聖女のような笑み。

「俺ならここだが……」

怪訝な表情をする清良。

(誰だっけ？ でもどこかで見た覚えが……)

それを知ってか知らずか少女は満面の笑みを浮かべる。

「お話があるので良かったら屋上に来ませんか？」

「ア……ああ……いいぜ……」

戸惑いしつつも断る理由はない。

「む……つつつつ」

何故か不機嫌そのものの友紀。その彼女から逃げるように出て行った。

同行しつつも清良は軽く緊張していた。  
見知らぬ美少女の呼び出し。そして…考えられうるアマッドネス  
の襲撃。

この少女が新たな敵でないという保証はない。

二人は屋上の真ん中に来た。

周囲のどこにも隠れる場所が無い。聞き耳を立てられないという  
理由。

「んーっ。風が気持ちいいね」

少女は爽やかな笑みを浮かべる。まるで子供のようだ。  
だが清良にしてみてもまだ警戒を解ける状態ではない。

「あたしはここで生まれ変わったんだなあ」

生まれ変わる？ ある意味自分もここで女の姿を得たが…。

「……誰だ？」

たまらず清良は尋ねる。少女は悪戯っぽい表情に。

「あたしのこと。わかんない？」

清良は素直に首を縦に振る。少女も納得したように頷く。

「そうよねえ。まるで違ったちゃったからねえ。僕も」

「僕？」

使う女性もいるが清良はあまり女性が自分を「僕」と呼称するの  
は聞いたことがない。

「もう。君はあたしのヌードを見ているはずだよ」

「ぬ…ヌードお？」

この発言には面食らった。自慢じゃないが硬派のつもり。そんな  
ナンパなまねなどしない。

「あたしよあたし。安楽知由よ」

「え？」

しばらく思考が麻痺していたがやっと結びついた。

「えーツツツツ？」

「もう。そんなに驚かなくてもいいじゃない」  
ぶつと頬を膨らませる。

「お前：そう言えば男には戻れなかったが…」  
途端に今度は罪悪感に見舞われる。ある意味、安楽を女性に固定したのは自分なのだ。

「あはは。やっぱり罪の意識持つているね。それを解きに来たのよ」  
「解きにつて？」

清良は混乱している。いくらなんでも吹っ切れすぎじゃないのか？  
「高岩君の立場から行けば正当防衛だもん。仕方ないよ。あたしも死ななかつたし。あのままだったら罪のない人たちまで手にかけていただろうし。罪を重ねる前に止めてくれてありがとう」

「いや…そんな…」

「不思議なほど女になったことは嫌じゃないのよね。死なずにはすんだし。それに自分の心の弱さ。醜さがあんな化け物に付け込まれたのだし。自業自得ね」

清良にはそれが強がりに見えた。

「さすがになっちゃった直後は悲しかったけどもう吹っ切れた。考えてみれば男じゃなくなつたことでいくつか楽になつたこともあるし」

これは想像できる。男なのに体が小さい。力がない。それらがコンプレックスになっていたと。

しかし女の身であればそれらはさほど問題ではない。体格の小ささはむしろ愛らしさになる。

「それでね。高岩君。あたしの経験からだけど…あの化け物。あたしの場合はいじめられていた心に付け込んできたわ。もしかするとそういう気持ちを持つものに取り付くのもかもしれない」

「心の弱さということか」

清良は真顔になる。そういう手がかりがあれば多少は事前に防ぐことが可能かもしれない。

「なにかの参考になるかもしれないと思って。あたしを解放してく

れたお礼。じゃあね」

屋上から去ろうとして思い出した。

「そうそう。あたしの新しい名前は安楽千由美ちゆみです。前の名前の知由ちゆは「ちゆ」なんてからかわれていたから逆そこから取りました。可愛いでしょ？」

まるつきり女の子そのものである。今度こそ知由改め千由美は立ち去った。

「……おい。キャロル。見ていたか？」

使い魔を呼び出す。

「はい。見えました。セーラ様」

どこにいたのか使い魔の黒猫。キャロルが現れる。

「大体はわかったが：なんだあの吹っ切れ方は？ 説明できるか」

「これはブレイザ様。ジャンス様に倒されたアマッドネスたちも同様でした。千由美さんの語るとおりアマッドネスは人間の負の心に取り付き、そしてそれを元に体を作り変えます。しかしセーラ様がそれを倒して浄化したため千由美さん：この場合は知由さんというべきですか。そのネガティブな感情も一時的ですが消え去りました。そのためか肉体が女性に変えられたことも前向きにとらえる傾向がありました」

「それでああまで見事に女になっていたのか」

「まあ怪人体の時点で既に心も女でしたし」

「そういえば俺のほうも時間が経つに連れて女の姿が恥ずかしくなくなつていったんだが…」

ギクツとばかりに硬直する黒猫。

「最初は鬨いに夢中だからかと思つたが：それこそ先に覚醒した奴らにも何かないのか？」

「それはまたいつか……」

人間なら冷や汗をたらしそうな表情。半信半疑だったが話す気がないらしいと判断して話題を切り替える。

「まあいい。それより手がかりにはなりそうだな。もっともネガテ

イブな感情を持たない奴なんているわけないが…あれ。それだと」「  
「そうですね。千由美さんはもう取り付かれることはないと思われ  
ます。もちろん生きていくうちにまたネガティブな感情も蓄積され  
ていきますが、女性化したことでいくつかのコンプレックスが解消  
されたようですし、取り付かれるほど強大にはならないでしょう。  
何よりもスパイダーアマッドネスが取り付いたということは、他の  
アマッドネスとの相性はそんなによくないと思われそうです」  
「あいつはもう心配ないということか…それなら良かったよ」  
「このときの清良は男の姿でありながら女性のような優しい表情だ  
った。」

夜。清良の通う高校。

その生徒会室では未だに生徒会役員が残っていた。いわゆる会長  
派である。その中に高森の姿もあった。

「もうじき任期満了だが…それでも副会長の案を通して『負の遺産』  
とするわけにはいかない」

意見というより個人的に対立している様子が窺える。

細身の肉体は神経質な印象を与えていたがそれは事実であった。

七三わけもいかにもエリートな印象。

「そつだ。奴らの横暴を許すな」

意気が上がるその場の面々。高森だけは乗れていないが「芝居」  
で合わせている。

「それで…副会長のほうはどんな感じなんだい。高森君」

見透かしたような会長の視線。

「は？　なんで俺がそんなことを」

すつとぼけるが内心では冷や汗物。

「とぼけなくていいんだよ。君があちらとこちらを歩き来している  
というのわかってっているんだ。そう。例えるなら童話で動物と鳥の  
間を歩き来したコウモリのようにね」

いきなり両脇から腕を掴まれる高森。

「な…何のマネです？」

それには平手で答える会長。

「とぼけるなど言った筈だが？ 薄汚いスパイ野郎が」

厳密には誰かに情報を流しているわけではないのでこれは不正解。ただの罵りである。

「調子のいいまねしやがって」

「制裁が必要だな」

リンチに発展しかかる。しかし

「制裁？ 笑わせるな」

声が変わった。女のような声に。

そして高森の肉体も目に見えて変化する。

どんどんと細くなる。狭くなる肩幅。腹部。脚。

腕だけは太くなる。皮膜が生成されコウモリのツバサに。

顔もコウモリのそれに。さらに言うなら女性的な印象に。

それは大きくせり出した胸部が強く印象付けていた。

「ば…化け物」

パニックに陥る生徒会メンバー。我先に扉へと急ぐが、取り押さえていた生徒を怪力で振りほどいた『高森だった化け物』は、今度は身軽に飛んで出口を塞ぐ。扉に手をかけていた生徒会長の首を掴む。

「生徒会長さんが真つ先に逃げ出すとは感心しないなあ。制裁が必要だな」

「た…助けて…」

それに耳を貸さないコウモリの化け物は会長の首筋に牙を立てた。

「はあああっ」

まるで吸血鬼そのもの。やがて血を吸われて倒れふす。

「けっ。不味い血だ。次はどいつだ？ 人を小物扱いしやがって。

あたしがお前らを支配してやるよ」

惨劇が続く。

清良は学校へと走っていた。普通にくつろいでいたらまたあの「嫌な感じ」がしたのだ。

「セーラ様。これは？」

いつの間にか併走していた黒猫が尋ねる。

「ああ。また出たようだ。くそつ。ふざけやがって」

そして彼はしゃにむに走る。

学校はまだ生徒会メンバーが残っているため校門が開いていた。だから苦もなく走り抜ける清良。

「セーラ様。敵は恐らく既に変化しています。こちらでも戦闘態勢に」  
「そうだな。それに安楽のときは目の前で変身して後で苦労したしな」

敵前での変身を避けるため先に姿を変えることにした。

夜のため無人の廊下で一度立ち止まる。戦う意識を高めたことで両腕のブレスレットが手甲に変化。

そして右手を天に、左手を地にかざしてそれを水平に。

両脇にひきつけ前方へと突き出してクロス。

「変身」

スパークしたと思うとセーラー服姿の小柄な少女へと変貌していた。

戦乙女セーラ。エンジェルフォームと呼ばれるその姿に。

「セーラ様。そのポーズは？」

「るっさいな。この前蜘蛛やろうと戦った時に偶然このポーズで変身したんだよ。スイッチみたいなものだ。それにこういう『儀式』をするようにしとけば、街のチンピラに絡まれて闘志をあげすぎた女になつたりしないですむだろ」

「そうですね。緊急事態でポーズ取れないケースもありそうですが、そういう時は念じるだけで充分に変身できそうですしね」



「さあ。急ぐぞ。気配は生徒会室からしている」

セーラー服の少女は迷うことなく生徒会室へと駆けつける。

そして見たのは一面に転がる生徒会役員の面々。

「貴様……」

理不尽な暴力に対しての怒りがこみ上げる。

勢力拡大を狙いとしているアマッドネス故に死んではないと思われ。

だがスパイダーアマッドネスにやられたもの達がそうだったように……

「お前はセーラ?! 先に実体化したはずのタランの姿がないと思ったら、お前に倒されていたのか?」

「ふん。さしづめお前はバットアマッドネスというところか? どうやら遠慮はいらねえな。安楽の様に同情できる部分はないようだ」

「ギギ。私はノロマなタランのようにには行かんぞ。やれ」  
横たわっていたもの達が号令で起き上がる。

血を吸われたところから見ていたら「ゾンビ」のイメージだろう。くしくも男だけいたはずのこの日の会合。学校の男女比が元々男子校だったこともあり、かなり男子よりなのでこうなった。

ところがセーラに迫り来るものたちがどんと女へと姿を変える。

「くそつ。こいつらもか。安楽の様に完全に吹っ切れるならともかく、この先ずっと男の心と女の肉体で苦しむ羽目に」

こちらでは同情してしまふ。変身した少女の肉体が精神にも影響していたセーラ。

狭い室内でもみくちやにされる。

「ぎぎーっ」

そこをひらひらと頭上から攻撃を仕掛けてくるバットアマッドネス。

「ちつくしょう。おい。キャロル。キャストオフしてもこいつらは

大丈夫か？」

現在の姿から攻撃力に特化した姿になることができる。

その際に現在のセーラー服が散り散りに飛散する。

「加減すれば威力は調整できます。この場合パンチ一発程度に抑えるつもりで」

「よし。邪魔だからな」

セーラは乱戦の中で両腕を突き出す。再び手甲をあわせる。

「キャストオフ」

飛散したセーラー服の「破片」が雑兵と化した元生徒会役員たちに当たる。

散弾銃に例えるとわかりやすいか。

中には「打ち所が悪くて」気絶したものもいる。

体操服姿のセーラ・ヴァルキリアフォーム。攻撃力に特化。そしてエンジェルフォームと比べて格段に運動性能がいい。

それでも状況は変わらない。

狭い室内。まとわりつく雑兵。そして変則的なバットアマッドネスの攻撃。

巧にかわすが攻撃できないセーラ。

（くそつ。外に出るか？ いや。ここなら奴も高く飛べない。狭さは何もこちらの不利とは限らない。しかし…もつと素早く動いたら…）

その思いが出たら右手の手甲。ブレイズガントレットが赤く光る。そして何かをアピールするように熱を帯びる。

「ア…熱い」

思わず左手で右のガントレットを抑えてしまうセーラ。

その刹那である。体操着が輝いたかと思うとまた散り散りになる。「うわあっ」

いきなり一糸まとわぬ姿になり驚くセーラ。半ば本能的に左手で

胸元。右手で股間を隠す。

(あ…柔らかい…本当に女なんだな…俺)

Cカップはある胸の感触に場違いなことを考えてしまう。

散り散りになった体操着が再び体に。恐ろしく薄い素材。それも光沢のあるピンク。

若干薄めではあるが女性のシンボルの膨らんだ胸。細い腰。安産型のヒップというラインをもろに強調する。

短めだった髪は女性的にセミロングに。

「な…なんだ？ 何が起きたんだ？ もう体操着にまでなったのにさらに変身？」

セーラ自身が混乱していた。

「セーラ様。それは恐らく妖精の型。現代風に言うならフェアリーフォームとでもいいでしょうか。それならヴァルキリアフォーム以上に素早く動けます」

すかさず黒猫の解説が入る。

「素早くって…この姿…レオタードお？」

そう。変身を超える変身。超変身した姿。フェアリーフォームは俊敏性に特化していた。

そして根底にあったイメージで動きやすそうな「新体操」のスタイルに…

恥らっていたり戸惑ってられない。

レオタード姿のセーラは闘いを終わらせるべく、バットアマッドネスに向かって行った。

### EPISODE 3 「妖精」(後書き)

#### 次回予告

(意思を奪われ、化け物の言いなりとはな。さらに性別まで変えられて…いや。その「化け物」も弱い心に付け込まれたといえど同じ「被害者」か)

「あーははは。のろい。のろいよセーラ。翼も持たない蛆虫が」

「セーラ様。今こそフェアリーのもう一つの力を」

#### EPISODE 4 「飛翔」

## EPISODE 4 「飛翔」

レオタード姿のセーラは軽快に動き回る。まさに縦横無尽。それこそ新体操の選手のようなだった。

「こいつはいい。レオタード。しかもピンクつてのが恥ずかしいが、それさえガマンすりゃヴァルキリアフォーム体操着姿より素早くていい。今度からいきなりこれで行こう」

しかし得るものがあれば失うものもある。

セーラはピヨピヨと跳ね回りバットアマッドネスに迫る。

バットアマッドネスも迎え撃つつもりらしく逃げようとしなない。

そしてセーラはその懐に飛び込んだ。

「もらったあつ」

雨アラレと容赦なく豊満な胸元を中心に拳を見舞う。だがバットアマッドネスは平然としている。

「な…なんだ…この力のなさは…」

愕然とするセーラ。

「セーラ様！ 妖精の型。フェアリーフォームは身軽になりますが、そちらに魔力を裂いただけ腕力が犠牲になってます。腕だけは普通の女の子程度で」

「そ…それを早く言え！」

懐に飛び込んで力任せに叩くつもりだったが当てが外れた。

愕然としているうちにバットアマッドネスがセーラの腹部に一撃を見舞う。

「かはっ」

強烈な一撃なのはあるが、それにしても防ぎきれていない。

(な…なるほど。身軽になった分は打たれ弱くなるのか…)

意識が遠くなりかけるのを無理やり思考でつなぎとめる。だがその間にコウモリ女にとらわれた。

「今度はこっちの番だよ。さあ。その綺麗な首筋を見せてもらん」

血を吸うつもりだ。ぐいぐいと引き寄せていく。

「はなせ。離しやがれ」

じたばたもがくが抜け出せない。軽さを身上とする点では敵も同じだろうにびくともしない。あまりに非力。

腕がだめならと脚をばたつかせる。

それが密着していたバットアマツドネスの腹部に当たる。

「ギギ」

怯んだ。セーラはその跳びはねた強靱な脚力に賭けた。

コウモリ女の腹部に脚をかけ、思い切り蹴り飛ばす。

それが功を奏してバットアマツドネスは吹っ飛ぶ。

だがそれが窓だったのはセーラの不運。そのまま逃げられた。

もつとも戦況を考えればむしろ助かったともいえなくはないが…

「う……」

指揮官を失った元生徒会役員たちの女がばたばたと倒れていく。

闘いは痛みわけで終わり、レオタード姿のままではあるがセーラは緊張を解いた。倒れた「女たち」を見渡す。

「こいつらに聞けばあのコウモリ野郎の正体もわかるだろうぜ。しかし…このレオタード姿。逃げや接近には使えそうだが…」

セーラはため息をついた。

翌朝。清良はこれまた当てが外れた。

前夜に女性化したのだ。当然入院である。前夜の被害者は誰一人として登校していなかった。

（ちっ。もともと生徒会の連中なんてロクに知らなかったが、その上に女になつていたらなおさら誰が誰だかわからんな。そうなるとう誰が消えたか…つまりアマッドネスに取り付かれていたかわかりやしねえ）

自分の教室で考えている。そしてつい声にも出してしまふ。

「それなら病院に乗り込んで聞いて見るのが手っ取り早いから」

（セーラ様。残念ながらそれは難しいかと）

「キヤロル？」

頭の中に黒猫の声が響き驚きの声を上げる。それに対して注視が慌てて携帯を出して通話のふりをする。

「人の頭の中を覗いているのか？」

小声であるが声に出して言う。携帯電話のカモフラージュは絶大で誰も注目しなくなった。

むしろ通話のじゃまをしないように気遣われている。

（そんなことをしたらセーラ様に疎まれます。だからお声に出したもので読ませていただいています。もっとも声に出さなくても私に意識を向けてくださればどんな遠くでも呼びかけにいつでも応じますよ）

（だったら電話の真似は止めだ）

彼は携帯を無造作にポケットにしまふ。そして「会話」を続ける。

（それで…なんで無駄なんだ？）

（スパイダーアマッドネスの時もそうでしたが、支配されてしまふと絶対服従になります。だからまず口を割らないと思います）

（なるほどな…しかし…よ…そりゃ生きているといえるのか？）

怒りの炎が燃え上がる。不良といわれている彼だが、理不尽な「暴力」に対しての怒りはある。

(意思を奪われ、化け物の言いなりとはな。さらに性別まで変えられて…いや。その「化け物」も弱い心に付け込まれたといえど同じ「被害者」か)

アマツドネスと同化したものは解放されても女として生きていくことを強要される。

生まれついでの子ならいざ知らず、途中で暴力により変えられるのだ。その苦痛は想像を絶する。

「気にいらねえな」

暴力的な気持ちを持ち上がる。

「どうしたの？ 昼間怖い表情してたけど？」

帰り道。幼なじみの友紀との下校。それを聞いてこられた。

「なんでもねえよ。ちよつとむかつく野郎がいてな」

「もう。またケンカ？」

「ケンカ…か。確かにな」

ただ相手が人間とは言えないが。

「話し合いで何とかならないの？」

女性らしい意見である。

「なれば楽だろうけどな。あんな思いもしなくていいし」

これは安楽知由を「やってしまった」時の感情。

「けどな…話してどうこうできる相手じゃねえんだ。結局、コイツで語ることになる」

拳を見せる。

「わっかんないなあ。男って」

当然の友紀の言葉。

(男じゃなくて体だけなら女同士だがな…ついでに言うなら俺も暴力を振るっているには違いないか…)

軽く落ち込んできた。

自分のやっていることが「正義」といえるのか。結局は「同じ暴力」じゃないのかと。



「どしたの？」

きよとんとした表情の友紀。愛らしい顔立ち。それを見ていたら  
気持ちが定まった。

「なんでもねえよ」

ぶいと横を向く。

「あーっ。また。清良の悪い癖」

ぎゃあぎゃあわめくが関係なし。清良は心の中で決意を繰り返す。

(ああ。悪と悪のぶつかり合いでも関係ねえ。ただ俺は…)

夕方。生徒会長派の男子を襲った高森は思案していた。

(さて、先にセーラをどうにかすべきか。だが誰がセーラなのかわからないしな。向こうもこのあたしがアマッドネスとは知るまいが) 目が血走る。

(わからなきや出向いてもらうか。もうじきあたしの時間だしね) 冬の夕日が沈もうとしていた。

惨劇の現場となった生徒会室は封鎖されていた。

だから臨時の会議室を与えられていた「副会長派」。その中高森もいた。

「謎の集団性転換事件で会長一派は『気の毒にも』ほとんどが被害にあっている。もはや生徒会の職務を遂行できる状態じゃない」

インテリ風の少年が言葉だけは鎮痛に言う。彼が対立していた副会長だ。

そしてその一派が揃って首を項垂れていた。だがそこから笑いが漏れてくる。

「くくく…」

「ふはは…」

とうとう耐え切れず哄笑する一同。

「あはははは。バカどもめ。天罰というものだ」

「ざまあみろ」

なんと言うことか。この少年たちは被害者に対して同情どころか侮蔑の言葉を投げつけた。

「諸君。それでは彼ら…おっと。もう『彼女ら』か。その代わりに職務を立派に果たそうじゃないか」

たっぷりと皮肉をこめて言う。

「おおーっ」

氣勢が上がる。だが一人がいきなり倒れた。高森のとなりの少年だ。

「な…なんだ？」

「ふふふ。腐っているね。こっちも。どちらもあたしが統べてやるよ」

学生服を切り裂き巨大な皮膜をつけたコウモリのツバサが出現する。

胸はせり出し女性的なフォルムへと変化する。バットアマッドネスへと変化した。

「た…たかも…高森。お前が化け物だったのか？」

「ふふ。恨みはないがセーラをおびき出すためにあんたらの血をもらうよ」

清良は走っていた。学校へと。

「セーラ様。やはり？」

「ああ。この前と同じ気配だぜ。あのコウモリやろうだ」

前回と違うのは彼がバッグを抱えていることだ。

「セーラ様。それは？」

「とにかくあの非力じゃどうしようもねえ。せめてもの苦し紛れの対策よ」

そして校内に突入するといきなり変身。そしてキャストオフ。体操着の少女は惨劇の現場へと駆けつけた。

ところが今度は先手を打ってバットアマッドネスが飛び出してき

た。

「ま…待ちやがれ」

慌てて追いかける体操着の少女。

夜の学校。無人の校庭。星のきらめく夜空。セーラはしかめっ面をしていた。

（やられた。狭さがない分やつは自在に動ける。そういう狙いか）  
「ぎぎ。セーラ。ここでお前を倒してやる」

宣言するなりバットアマッドネスは空中から攻撃を仕掛ける。

間一髪でかわしたつもりだったがやはり遅い。

むき出しの腕を傷つけられて苦悶の表情に。

「あーははは。のろい。のろいよセーラ。翼も持たない蛆虫が」

ホバリングしたままあざ笑うコウモリ女。

「くっ。調子こいてんじゃねえぞ」

セーラは前回同様に右のガントレットを左手で抑えて叫ぶ。

「超変身」

変身を越える変身。

ヴァルキリアフォームより素早く動けるフェアリーフォームへと変化した。

「それがどうした？ 子供並みの腕力でどうやってあたしを倒す気だい？」

「へっ。対策ならあるぜ」

ここでセーラは持参したバッグからチェーンを取り出す。

「非力はこれで補う。リーチもな」

ところがその無骨なチェーンがあつと言う間にピンクのリボンに変化してしまう。

「な…なんだアツ？」

「いえ。セーラ様。それでいけます。その『布の鎧』がもともと男

の服だったように、太古のセーラ様は紐のようなものを鞭に変える力をお持ちでした。それにより非力さを補うために」

「これでも得物かよ？」

不安そうなセーラの表情。そのチャンスとばかりにバットアマツドネスが突っ込んでくる。

「わ…わわわっ」

半ば反射的にリボンを差し向ける。それがまるで蛇のように相手に絡みつく。

「ギ…ギギーツツ」

締め付けられて苦悶の声を上げるバットアマツドネス。

「こ…これは？」

当のセーラ本人が驚いていた。

「当然ですっ。ただのリボンだと思いましたが。だからほね。応用すれば」

キャラルが石ころを蹴りだす。投げるのにちょうどいいサイズのそれを。

「そうか。わかってきたぜ」

セーラはそれを弄んでいた。そのうちに石礫はボールへと変化する。

「いいわね。行くわよ」

ピンク色のボールをなげつける。若干狙いがそれたがカーブして命中する。意思の力でコントロール可能だったのだ。

「ぎぎ」

当たったボールが思いのほか効果的だったらしい。さらに悶絶する。

「セーラ様。こちらは？」

バグを勝手にあさるキャラルだがセーラは気にしない。

「それ頂戴」

言われて短い鉄棒を渡す。それがやはり新体操で使うクラブへと変化する。

「えい。えい」

見た目はむしろ弱々しくなったが、どうやら威力は鉄棒以上だ。非力といえど得物をもたれてはたまらない。いいように殴られていた。

しかしそれが逆に脱出を促した。リボンの戒めが緩んだのだ。

(しめた！)

優勢でセーラが油断した隙を突いて抜け出した。

「あっ!?!」

「ふふふ。セーラ。この借りは必ず返してやる」

言葉は勇ましいが逃げに掛かった。

「セーラ様。今こそフェアリーのもう一つの力を」

「もう一つの力?」

「追って下さい」

キャロルのその言葉に一つの可能性をみたセーラはいわれるがままに地面を蹴った。

物凄いジャンプ力かと思いきや、背中に生えた妖精の翅が彼女を宙に舞わせていた。

「こ…これは…?」

「妖精の名は伊達ではないです。その姿の時は空の支配者です」

「よ…よし」

セーラは意識を飛翔へと向けた。

まるでロケットのように勢いよく飛び出した。

よろめきながら空を逃げるバットアマッドネス。

(ギギ。まさかあの姿であそこまで。やつの覚醒が本格的になる前に…)

思考は中断された。猛スピードで飛んでくる「何か」のせいで。

(まさか?)

コウモリ女は恐怖に支配される。そしてその嫌な予感的中していた。

ピンクのレオタード姿の少女が空を追ってきたのだ。

「な…なんてしつこいやつだ」

慌ててスピードを増すがフェアリーフォーム。フライングモードのスピードにはかなわない。

あつと言つ間に「追い抜かれる」

(セーラ様。追い抜いてどうするんですか?)

「見えてんのかよ? あたしの目と連動しているってところ? まあいいわ。腕がだめなら…脚よっ」

今度は脚から突っ込んでいく。高度を利用してのキックが狙いだつた。

しかしかなスピードで負けていても回避行動は取れる。寸前にかわす。

「あーっ」

飛び過ぎて行き過ぎた。再び追いかける。

(うーん。この腕じゃパンチも効き目ないし、しかしキックをするには間合いがいるけど、それをとつても回避される。それなら間合いの関係ない追い抜いた瞬間のキックだけど…あつたわ。いい手が)

セーラはまた猛然と空を飛んで追いつがる。そしてまたバットアマッドネスを追い抜く。

だが今度はその場で回転した。ちょうどオーバーヘッドキックの形だ。

バットアマッドネスもさすがに避けきれずそのキックに自分から突っ込んでいく形に。

脳天に致命的な一撃がカウンターで決まった。

「ギギーッッッッ」

断末魔の悲鳴を上げつつバットアマッドネスは落ちいく。そして…爆裂。

邪悪な魂が天へと昇る。そして残された哀れな「元・少年」の少女が落ちていく。

「大変!」

慌てて回り込み支えるセーラ。

「お…重いいいいい」

だが地面激突は避けられた。

「ふう。本当に非力だけど。足の力で何とか勝てたわ…って、ちょっとキヤロル。あたしまた言葉遣いが女になっているわよっ。どういうことっ？ あんた何か隠しているでしょう？」

（そ…それはいずれまた…）

念波怯えているのが感じられた。

「まったく…この調子じゃまだ秘密がありそうね。けど…」

そうだ。そんなことは瑣末事。

この少女とか犠牲者たちは残りの人生を女として生きなくてはならない。

（あたしはただ、守りたいものを守るだけよ）

その脳裏に高岩清良としての幼なじみの少女の笑顔が浮かぶ。

## EPISODE 4 「飛翔」 (後書き)

### 次回予告

「人魚の型と呼んできましたが…現代風にあわせるならマーメイドフ  
ォームというところでしょうか」

「あの屈辱…あんな思いはもうたくさんだ」

(ほう…それがお前の望みか?)

「でるわけないか…だったらこっちから出向いてやるまで！」

「超変身」

EPISODE 5 「人魚」



## EPISODE 5 「人魚」

闇の中。邪悪な魂たちが会話をしていた。

(タランに続いてチスまでが)

(空飛ぶ戦乙女も…セーラの覚醒が進みつつある)

(まずいぞ。このまだともう一つも…)

(ふん。ならばこのリーナの定番だね)

(しかしお前ではなおさら奴のもう一つの姿には)

(策はあるよ)

日曜日。清良の自宅。彼は風呂場から体重計を持っていこうとしていた。

「あーっ。お兄ちゃん。そんなのどこにもって行くのよ?」

ショートカットの生意気そうな少女。

小柄の上に幼い顔でサイドに「ボンボン」をつけた姿が可愛くて小学生に見えそうだが、これでも中学生の高岩理恵に見つかる。

ギクツとばかりに硬直する清良。

「ア…まーちよつとな…」

彼は曖昧にごまかすと体重計を抱えて二階の自分の部屋に逃げ帰った。

「ちよつと? お兄ちゃん。もう」

鍵をかけて密室にする。そして「ふう……」とため息を一つ。

「セーラ様。お持ちになりました?」

事務的な確認に過ぎなかったのだが逆鱗に触れた。

「るっせえ。お前が変なもの持ってこさせるから、妹におかしな目で見られたろーが」

八つ当たりである。人間だったなら首をすくめそうなキャラル。

「す…すいません。しかしアマッドネスとの戦いの前にもう一つの

姿についての説明をするために入用だったんですよ」

そういわれては仕方ない。

三月に入り随分と春めいてきた。この日は気持ちのいい風が吹いていて、換気のためにあけていた窓。

それを閉じてさらにカーテンまで。その上で清良は変身した。

## EPISODE 5 「人魚」

まずは変身直後のセーラー服姿のエンジェルフォーム。妹と同様の愛らしい姿で体重計に乗る。

「44キロ…このサイズにしちゃあるほうなのかな？」

つぶやく声も可愛らしい。とてもではないが変身前の大男と同一人物とは認識できない。

「ところでキャロル。俺は元々の体重は80はあるんだが、なくなつたぶんはどうなってんだ？ 身長もだけどな」

「さあ？」

首をかしげる黒猫。

「さあつて……お前は太古の昔から『セーラ様』に仕えてきたんだろっつ？」

「その声で大声を出さないでください。それに理恵様以外の『女子』の声がしてはまずいのでは？」

セーラは慌てて口を閉ざす。落ち着いたところでキャロルが語る。「私がつかえていたセーラ様は元々女性です。だからそんな大きな変化はしませんでした。だから今のセーラ様のそれについてはわか

らないんですよ」

「…無責任だな……」

しかし言い分はもつともだ。

「まあどこかに行っちゃったということだ」

「いい加減だな。おい。まあいい。続けるぞ。次は……キャストオフ！」

いつもより小声で言う。セーラー服が爆せて…というより霧散して体操着姿に。そして体重計に。

「46キロ……」

何故か2キロ増が嫌なセーラだった。『女心』？

「これは昔のセーラ様もそうでした。恐らくは筋肉のぶんだと」

「変わるのは魔力だけじゃないのか？」

「多少は身体能力そのものも上がっているんですよ」

「なるほど。んじゃ次で…超変身」

右の赤いブレイズガントレットを抑えるとピンクのレオタード姿に。そして

「うそ？ 35キロ。随分と減ってない？ 道理で非力になるはずだ」

体重が乗るとは言うがそれを言っているのではない。筋肉力の減少を指摘している。

そして問題の「残りの一つ」である。

「セーラ様。イメージは固まりました？」

セーラー服。体操着。新体操のレオタード。そして残りの一つである。

あらかじめ特性を聞かされていた。それが余計にイメージを固めてしまっていた。

「ああ。こつちの青いのを押さえりゃいいんだな？」

コクリと頷く黒猫。

レオタード姿のセーラは左手のアクアガントレットを右手で押さ

えてつぶやく。

「超変身」

一瞬にしてレオタードが体操服に再構築される。それがまた散り散りになりセーラの裸体にまとわりつく。

濃紺の水着。そう。いわゆるスクール水着だ。

「ああ…やっぱりこのイメージか」

嘆くセーラ。しかし今までで一番体格がいい。

フェアリーフォームだと薄くなる胸が、こちらの姿では逆に大きくなった。

エンジェルフォームでBカップ。ヴァルキリアフォームでCカップ。フェアリーでA。

そして今はEカップだった。

目立つ特徴はむしろ髪の毛。今度は腰に達するスーパーロングヘアになっていた。

(何かまとわりつきそうだな)

「まずはセーラ様。ハシラに」

「ああ」

これは身長を計っていた。ちなみにフェアリーは身長もかなり低くなる。それに対して

「随分でかいな…ヴァルキリアより4センチは上回っている。俺の元の身長がこの辺りだから…」

何しろ自室である。自分の頭の位置などは充分把握してある。

「大体164くらいか？」

一般的な女性としては低くはない部類。

「セーラ様。目方のほうも」

身長が高くなっている。胸も大きくなっている。それを考えると予測はつく。

「51キロ……」

元々80キロの男子高校生である。それでもどういうわけか「大台突破」がシヨックだった。

「身長が増加。これは副産物で全体的に筋肉量が増えています。水の中でこそその真価を発揮しますが、陸上でも充分に戦えます」

「水中戦用フォームか」

「人魚の型と呼んでましたが…現代風にあわせるならマーメイドフォームというところでしょうか」

「そいつはいいが…なんか体が重いな…直前まで（軽い）フェアリーフォームだったのもあるんだろうけど」

「パワーは一番ですが、そのかわりに俊敏性がなくなってしまうのですよ。フェアリーの逆ですね」

「だったら打たれづよくなるのか？」

セーラにしてみたら皮肉のつもりだった。

「はい。その衣装はもちろん布の鎧ですが、体自体も頑丈になります」

「あ、そ」

皮肉が通じなくて無然とする。

「そしてフェアリー同様に補えます。『長きもの』を手にすれば」伸縮警棒を手渡す。フェアリーフォームの時は『叩くもの』としてクラブに変化した。

セーラは警棒を伸ばして意識をこめてみた。

それはあつと言う間に槍に変化した。

「なるほど。怪力で力任せにということか？」

「陸の上ではそうなります。しかしあくまでも真価は水の中」

「ふーん。でもこの一本がフェアリーでもマーメイドでも使えるなら、いつも持っていた方がよさそうだな」

そのころ、清良の通う高校にある温水プール。

休日返上で自主トレをしている生徒がいた。

彼の名は魚住平。

ダイナミックにクロールで泳ぎきる。しかし諦めたようにやめてしまう。

「くそつ。どうしてもタイムが伸びない。このままじゃまた平田にレギュラーの座を取られちゃう」

実力の拮抗するライバルが同じ水泳部にいた。

しかし魚住は精神面の弱さを指摘され大会において補欠に甘んじたことがある。

「あの屈辱…あんな思いはもうたくさんだ」

（ほう…それがお前の望みか？）

突然女の声が響く。魚住は驚いて辺りを見渡す。しかし誰もいない。

事務員などはいるがこんな女の声ではない。

（ふふふ。こちらだ）

声のしたほう…プールの中を見ると一匹の「ピラニア」が。

「わあっ」

実際はそうでもないといわれるが人食い魚として知られるそれだ。驚いてプールサイドに上がろうとする。

しかしその前に「ピラニア」が魚住に食いつく。

そしてそのままずぶずぶと魚住の体内に。

月曜。そろそろ学年末試験に入ろうかという時期。

ケンカは多いがちゃんと授業を受けている上に、成績もそんなに悪くない清良は進級自体は問題なかった。

この日も友紀と共に登校してきた。すると見慣れない女子たちが出迎えるように校門に整列していた。

「なにかしら？」

怪訝な表情をする友紀。

この学校は男女比が9：1で男子の方が多かった。

しかしスパイダーアマッドネス。バットアマッドネスの事件を経て「女子」が一気に増えた。

それでも少ない女子だ。見覚えくらいありそうだが、誰にも見覚えがなかった。

「登校中の皆さん。おはようございます。元生徒会長の一場です」「私は副会長だった二岡です」

その言葉に驚く生徒たち。奇異の目で見るものもいるが、一同は堂々としている。

やはりあの事件の犠牲者で女性化していた。やっと退院してきたらしい。

「醜い争いをしていたあげく、天罰というべき報いを受けました」「私たちはそれを深く反省して、新しい会長の下で出直します」

ようするにそのアピールだったのだ。

「さあ。新会長。どうぞ」

一場に促されて出てきたのは高森雅也だった少年。

彼…彼女もまたバットアマッドネスに囚われていたため、解放されても女性のままだ。

「お…おはようございます。このたび新たに生徒会長をさせていただくことになりました高森みやびです」

女性化してしまい真新しいセーラー服の一団。その最先端で挨拶をする。

(あ…アイツもやっぱり安楽みたいに)

スパイダーだった少年は女性化を無造作に受け入れた。

そして高森だった少女も女性としての生を受け入れた。

もちろん泣き喚いても元には戻れないのもあるが。

「二人の先輩の強い推薦で着任となりました。未熟者ですががんばりますのでどうか助けてください」

この推薦には色々と裏がありそうだ。清良はそう思った。

バットアマッドネスとなった高森を畏怖して。

あるいはその際の支配がまだ残っている。

逆に女に変えた責任をとる意味でやる羽目になった。

(ま…ある意味では望みどおりだったらしいな。大変かもしれないがな。今度は二つの派閥をふらふらなんてわけにもいかんしな)

仕方ないとは言えど女にしてしまった…「やってしまった」その思いが清良に年齢に似つかわしくない「哀愁」を漂わせた。

しかし反面、前向きに「女として」生きていくこの面々にエールを送りたい気持ちもあった。

放課後。そろそろ試験期間になり部活も休止。

最後にもうひと泳ぎと言う水泳部の面々であった。

その中には魚住に代わってエースとなった平田歩ひらたあゆむの姿も。

泳いでターンというところで魚住の存在を認めた。

学生服姿のまま。泳ぐスタイルではない。

「なんだ？ 休みじゃなかったのか？」

両者の関係はもとより良くない。だからこそ魚住はことさら悔しがっていた。

「ああ。遅れてきただけだ」

抑揚のない声で喋る魚住。

「別に来なくてもよかつたんじゃないか？ どうせ補欠だろ」

「勝者」の歪んだ余裕。見下した態度。

しかしこれは自分の死刑執行にサインをした形。

「お前さえ…いなければ…」

その憎悪が取り付かれた原因だ。

手のひらに皮膜が生成される。水掻きになる。

そして学生服を切り裂いてウロコにまみれた肉体が出現する。

豊かな胸元は貝殻をあてたようになってる。

顔も女の…人魚と言うより半魚人のそれになる。

「う…うわアツ。ばけものっ」

プールは大パニックになった。



清良はプールへと走っていた。

「セーラ様」

いつの間にか付き添う黒猫。

「ああ。でやがった。くそ。ウチの学校は頻発地帯か？」

アマッドネスが怪人体になると清良の脳に電気が走る。

そして本能的に現場へと駆けつける。

人のいなくなったところで立ち止まり精神を集中させる。

紅いブレスレットが鳥の意匠のブレイズガントレットに。蒼いブレスレットが魚の意匠のアクアガントレットに変化する。

真紅の手甲を真上に。蒼いそれを地に。そのまま水平になるように回す。

両脇にひきつけると前方に突き出してクロス。

「変身」

掛け声と共にスパークすると清良は一瞬にしてセーラー服姿の少女戦士へと変わる。

「よし。とりあえずこの姿。敵のタイプがわからないしな」

だが場所がプールだけに水中タイプの敵ではないかと予想していた。

そしてそれは的中していた。

ピラニアの特性を持つアマッドネスは既に一人を毒牙にかけていた。

しかしどうやら恨みが先走り、他の面々に目もくれなかったため犠牲者が一人なのは不幸中の幸い。

「昨日の今日でいきなり水中タイプかよ。とにかく上がって来い！」

セーラはそう叫ぶが敵はプールから出てくる様子はない。

「でるわけないか…だったらこっちから出向いてやるまで！」

セーラはその場でキャストオフ。そして左手のアクアガントレッ

トを押さえる。

「超変身」

体操服が散り散りになり濃紺の水着となって再構築される。

足元は青いサンダル。かかとまで抱え込むものだ。

セーラ・マーメイドフォームの実戦復帰。しかしそれこそがピラニアアマツドネスの狙い。

覚醒直後でまだ一気に目的のフォームに変身できない。

どうしてもヴァルキリアフォームを経ないと成れない。

そのために隙が生じる。

そしてその隙になんとピラニアの化け物は絶対有利なはずの自分のテリトリーから出た。

そのままセーラに襲い掛かる。

「このっ」

反撃を試みるが今までのどのフォームより明らかに動きが重い。

陸上では鈍重になるこのフォームの弱点を突かれた。

故に「布の鎧」に守られていない脚を狙われて、物の見事に噛み付かれてしまった。

「うわあああっ」

セーラの愛らしい声で悲鳴が響き渡る。

## EPISODE 5 「人魚」 (後書き)

### 次回予告

「最近変な事件が立て続けに起きていますでしょ。恐くて…でも…  
して新体操をしているとそれを忘れられるの」

「やっぱり…不安に立ち向かうには勇気しかないでしょ？」

(くくく。臆病者め。敵ではないわ)

「そうよね。勇気をもらおうよっ」

## EPISODE 6 「竜巻」

## EPISODE 6 「竜巻」

セーラのふくらはぎを狙ったピラニアアマッドネスの噛みつき。だが浅い歯型がついただけに終わった。

「このっ」

大振りのパンチをかわして水中に戻るピラニアアマッドネス。

「な…なんだ？ 女のクセになんて固いんだ…噛み千切ってやるつもりだったのに」

一方のセーラは足にダメージを負い膝をつく。

（増強した筋肉のおかげでもっていかれずにすんだか…それにしても思ったより鈍重。いくら水中用でも敵も水中をテリトリーとする魚型。アドバンテージはなしで競り負けるんじゃない…）

考えているとまたピラニアが飛ぶ。

「ド…ドレスアップ」

とっさにエンジェルフォームに戻る。そのおかげでカバーが間に合い難なきを得た。

「ちっ」

攻撃をはずしたところで舌打ち。半魚人は再びプールに飛び込む。ものすごい勢いで反対側に。

「ま…待ちやがれ！」

追うべく走り出すがピラニアの異形はセーラー服の少女がプールサイドを走るより早く泳ぎきり、そしてそのまま窓をつき破って逃走した。

「キャストオフ」

ヴァルキリアフォームに。そしてフェアリーフォームに超変身。空を飛んで追いかけるが既に茂みの中に。

「チキシヨウ。まだそうは遠くに…」

しかし空中に浮かぶレオタードの少女が注目されないはずもない。慌ててセーラも飛んで逃げた。

E P I S O D E 6 「竜巻」

人気のない校舎裏に降りてとりあえずエンジェルフォームに戻る。ガントレットはリストバンド状に変えた。

「セーラ様。ご無事ですか？」

キャロルが来たからだ。本来の高岩清良の姿で一緒のところを見られたくなかった。

幸いこのフォームの時はガントレットを収めた今では、一見した限り在校生の女子に見える。

「ああ。逃げられちまったがな。こっちも逃げたが…」

逃げたのは目撃者からか？ それとも闘いから？

「それよりキャロル。やはりあの姿は使えないんじゃない？」

鈍重さを突かれて攻撃を許したことをさしている。

「そんなことはありません。陸の上での動きの鈍さは他の姿を利用すればカバーできます。それに水の中では無敵です。毒素にも強いのです。現にほら。アマッドネスが奴隷を作り出すエキスも無害」

セーラははつとなる。言われて見ればこれまでの「被害者」は何かをされて女性化のうえに一時的でも支配されている。

ところが噛み付かれた足の傷がない。

「あれ？ 怪我したはずなのに……」

「一瞬で男が女に変わるほどです。肉体が瞬時に再構築されているのですよ。だから普通の人においての軽傷などは一度チェンジすれば消えます」

「チェンジか……」

ふと遠い目になるセーラ。

「一度ヴァルキリアを通さないと超変身できないというのは不便だな。一氣にいければフェアリーの非力をマーメイドで。マーメイドの重さをフェアリーでカバーできるんだが」

「そうですね。まだ覚醒が完全じゃないからかと。ところでセーラ様。先ほどの『ドレスアップ』とは？」

言われて頬を染めるセーラ。少女の姿だけに可愛らしい。

「あ……あれか。いや足を狙われていたからそこまでカバーされているフォームになりたかったんだ。エンジェルフォームに戻るというのはまだやってなかったから、気持ちを込めるために言ってみた」

「あ……よろしいかと。とつさのガードには」

後は黙り込む。セーラがマーメイドフォームに対して低い評価をしたことを覆そうにも、本人がその利点を認めないといけない。

それには何より使って見ることで大ピンチに陥って「怖気づいている」のも感じ取れた。

結局それを克服するには……

一方、本来の男の姿に戻った魚住はほくそえんでいた。

（これでセーラはあの姿はしばらくは使えない。何も倒さなくてもいい。奴が水に入れないようにさえすれば。後は川沿いを中心に家来を増やしていけばやがてみんなが復活した時にも便利だ。セーラがきたら川の中に逃げればいい。何しろ奴は人魚になれないのだからな）

それこそが狙いだっただ。

今度は被害者が一人だったため怪人の正体が特定できた。

「魚住か…だが…」

渋い表情の清良。そう。正体が割れたし目的である恨みも晴らした。

そしてセーラにも正体がばれていると知れば学校にはくるまい。

「くそっ」

やるせない気持ちで清良は歩き出す。

また被害者が出たということとで部活は中止になっていた。

そのはずなのに体育館から音がする。

不思議に思った清良が覗き込むとそれは新体操の練習中の友紀だった。

練習中だがレオタード。たださすがに本番と違い地味なもの。

華麗なテクニックで舞う。

しばらく魅了されていたが

「なにしてんだ？ 騒ぎがあったからみんな引き上げたろ」

知った相手と言うこともありはいつていく。

「清良…うん。知ってる。でも練習したかったの」

「試合が近いのか？」

友紀は首を横に振る。

「最近変な事件が立て続けに起きています。恐くて…でもこうして新体操をしているとそれを忘れられるの」

この時点でこのエリアにおいての「犠牲者」は男子のみ。

だからといって女子が犠牲にならない保証もない。

その不安と友紀は戦っている。

（俺はなにやってんだ…ちょっと攻撃された程度でびびっちゃまって女がこうしてがんばっているのに…奴らと戦える俺が逃げてどうする？）

「なあ。ちょっと話いいか？」

「……………うん？」

二人は体育館の床に直接座り込む。清良はあぐら。友紀は足を横に投げ出す座り方。

「例えばさ、お前が新しい技をマスターしたとする」

「うん」

新体操の話と友紀は解釈した。

「それを試合で使うのは恐くないか？　今までの技で無難にやってみようとか思わないか」

「うーん。怖いと思うよ」

真面目な表情だったこともあり友紀も真面目に返答する。

「でもやるしかないもん。そうしなきゃ次にいけないし」

「問題はそこだ。どうやってその最初の一步を踏み出すんだ？」

恐ろしく真剣な表情。それも当然。いわば敵前逃亡。その屈辱…いや。それよりもみんなを守る力を持ちながら臆したことがその険しい表情をさせていた。

「やっぱり…不安に立ち向かうには勇気しかないでしょ？」

当たり前のように、だが本人も自分に言い聞かせるように言う。

だが忘れてしまったことを思い出させた。

清良は優しい表情で語りかける。

「勇氣…か。お前の名前と一緒にだな」

「なによ。真面目に答えているのに」

頬を膨らませる。

「いや。違うよ。お前は命の次にそんない名前を親からもらったんだなと思ってさ」

「……うん。この名前好きよ」

微笑む。その笑みが清良に再び守るための闘いを決意させる。

「わかった。俺が送ってやるから好きなだけ続ける」

「ありがと。でも…清良。何かあったの？」

不安が出ていたようだ。それを悟られぬように清良はことさらぶつきらぼうに言う。

「なんでもねえよ」



翌日。予想通りに魚住は登校して来ない。

(いくら俺に負けられない自信があるといつても、わざわざ邪魔者のいるところには来ないか。どうする？ この様子じゃ家にいるとも思えない。奴が行動を起こしてからいくしかないな)

昼休みに学校の屋上でパンを食べながら考える清良。

食べ終わるとそのままごろんと横になる。

すでに午後の授業開始。誰も他にはいない。

昼過ぎ。春めいてきた川沿い。水遊びにはまだ早い。河川工事の作業員などがいる。

その一人が川の中央を指して「おい。あれを見る」と叫ぶ。

まだ水遊びの出来ない季節なのに学生服姿の少年が立ち泳ぎをしている。

「なにしている。この水温でそんな格好じゃ死ぬぞ」

親切心の忠告に薄ら笑い。

そして少年はピラニアアマッドネスに変化した。獲物を見つけて舌なめずりをしていた。

「ば…化け物！っつ」

作業員たちは我先に逃げ出したが遅れた一人が噛み付かれ、哀れにも性別を反転させられた。

学校の屋上。教室にいと飛び出して不審に思われる。

幸か不幸か「不良」のレッテルを貼られている。初めからいらないなら「サボリ」で片付くだろう。

何より人前で「変身」したくなかった。

待っていた清良の脳裏に「電流」が走る。

「きやがった」

清良は跳ね起きると肩幅に足を開いて立つ。同時に右手を太陽に。

左手を屋上に向ける。

紅と蒼のリストバンドがガントレットに変化。

右手を12時から9時の位置に。左手を6時から3時の位置に。それを体にひきつけ前方でクロス。

「変身」

一瞬にしてセーラ・エンジェルフォームに。立て続けに

「キャストオフ」

体操着姿に。現状ではこれを経ないといけないのがもどかしい。

それを態度で示すかのように走り出す。走りながら紅い手甲を叩くように触れる。

「超変身」

ピンクのレオタード姿になると宙へと舞う。

妖精の翅が彼女を高速の世界へと誘う。

そしてセーラは「嫌な感じ」の走ったほうに飛んでいく。

情報が伝わらず逃げ遅れた男たちを、次々と文字通り毒牙にかけるピラニアアマッドネス。

だが飛来した天敵を察知する。

「今日はこのくらいにしとくか」

まるで一仕事終わったかのような言い草。余裕綽々である。

「ふん。お前は水の中には入ってこれまい。捕まりはしない」

ぐんぐんと接近してくるセーラをあざ笑う。そしてからかつように水の上に撥ねてまで見せる。

「このっ」

加速するが川の中に逃げられる。

「くっ」

さすがに躊躇する。そしてそのまま飛んで追跡を続ける。

「未確認生命体」出現に人々が避難したといえど幾人かはいる。

その面々は空飛ぶ少女に面くらい、中には指まで指すものもいる。しかしセーラにはそれを気にしている余裕がない。

水を…正確にはマーメイドフォームを恐がらせることに成功したのをピラニアアマッドネスは確信した。

何しろ人目につこうが空を飛び続けるのがいい証拠。

(くくく。臆病者め。敵ではないわ)

完全に余裕を持ったピラニアアマッドネスはわざと水面近くを泳いでいる。

そして川が二つに分かれているところまで来た。

さらに弄ることを思いついた。その寸前であえてもぐったのだ。

「ア…アイツ…キャロル。ピラニアどっち行っただかわかる？ あた

しの方はアイツがもぐったら感じが途絶えちゃったのよ」

変身してから10分以上。既に言葉遣いに変化している。セーラはそれに違和感を感じていない。

「わ…わかりません。やはり水中でないと」

「水の中…」

嫌な汗が出る。マーメイドで傷つけられた思い出が。

空中に浮いたまま下を向いてしまう。己の服に目が行く。

「レオタード……」

新体操をして不安と戦っていた少女を思い出す。

「そうよね。勇気をもらっわよっ」

セーラは飛び込む角度で降下する。

「超変身」

左腕の手甲を押すとレオタード姿から体操着姿。そして濃紺の水着姿にと変わる。

美しいスタイルの「人魚」は魔の潜む川の中へと飛び込んだ。

それははるか500メートル先に行くピラニアアマッドネスを驚愕させるには充分だった。

(馬鹿な：まずい。飛び込んだらその性能に気がつく)  
その焦りが皮肉にも信号となってセーラに居場所を教えていた。

飛び込んで3分以上。「素潜り」なのに息が続くのにやっと気がついた。それほど違和感がなかった。

(何で息が続くのかしら?)

(セーラ様。聞こえますか?)

(キャロル?)

遠く離れた使い魔だ。

(その姿の時は長い髪がえらのように酸素を取り込みます。だから水中では行動に制約がありません。それにほら。陸の上より体が軽く感じませんか?)

(あ：いわれて見れば)

(水中には鯨など大型の生物がいますからね。それからわかるように水が支えてくれます。そして足元をご覧ください)

言われるままに足を見るとサンダルのはずが足ひれになっていた。

(棒を武器にするくらいならこのくらいありよね)

そして同じ水中に飛び込んだことで、空中ではわからなかったピラニアアマッドネスの位置も感じ取れた。

彼女は猛追を開始した。

下流へと逃げるピラニアアマッドネス。

だがその動きが鈍くなる。

(な…なんだ？ この水は…苦しい)  
ついにはもがき苦しみ止まってしまつう。

その間に見えるところまで追いついてきた。

(何で逃げないのかしら？ まだ馬鹿にしているのかしら？)

(いえ…恐らくは海水のせいかと)

(あつ。ピラニアって淡水魚)

川と海の両方をテリトリーとする魚は鮭などがいる。しかしピラニアは違う。

(まっつて。もしかしてここつて東京湾に近いのかしら？)

水。そしてそれ以上に汚染された海底。その毒素にピラニアアマツドネスは苦しめられている。

(皮肉なものだわ。環境破壊に助けられるなんて)

だが同情は無用。セーラは持つていた伸縮警棒を伸ばす。

その「長きもの」は水中ゆえか銚へと変化する。

小さいものの先端は海神ポセイドンの三叉の矛のようになっていた。

陸の上では苦しめられた鈍重さを作り出した元凶の筋肉。

それがここではバネとなり、銚を弾丸のように撃ち出した。

止まつたのである。その狙いは外れない。

毒素。そして銚のダメージでもう逃げられない。

やつとセーラが追いついた。

ピラニアアマツドネスを捕まえると海底に潜る。そして海底にしっかりと二本の足で立つ。

(さあ。あなたを解放してあげるわ。ちょっと痛いけどガマンしなさいね)

念で伝えるとセーラはその膂力でピラニアアマツドネスを担いだ状態で、力任せにぐるぐると回転しはじめる。

やがて渦へと変化する。海中だが竜巻のようになる。

回転が最大になったところでピラニアアマッドネスを放す。否。渦の中に放り投げる。

下から上に。錐もみ状態で舞い上げられる。

そのまま海中から飛び出し、回りながら水面に叩きつけられる。

叩きつけられた衝撃の水柱。その後でピラニアアマッドネスの爆発による水柱が出来た。

(やりましたね。セーラ様)

(うん。それもユウキのおかげ)

(えっ？ 友紀様？)

(ふふっ。それもあっているわね)

セーラは不安を解消したことで自然な「女性的な笑み」を浮かべていた。

(さあ。魚住君を…もう魚住さんね。助けないと)

優雅な足捌きはプロポーションも手伝い本当に人魚のように見えた。

EPISODE 6 「竜巻」(後書き)

次回予告

「女の子にはいっぱい秘密があるんですよ」

(そうなのよ。でも……今は女の子でいたい。そんな気分)

(あああっ。やっぱりっ)

(だめ…触るのが気持ち悪いかも)

(このラブレが力を貸してやろう。お前に追いつけるものはいなくなる)

EPISODE 7 「残響」

## EPISODE 7 「残響」

夕暮れの東京湾。

汚れた海だが夕日が水面に映るとさすがに美しい。

ある人はぼんやりと海を眺め。

ある人は港での作業の一部で海を見ていたりしていた。

「ん？」

そんな一人が気がつく。誰かが泳いでいる。気がついたものが仰天する。

暖かくはなつてきたもののまだ三月。とてもじゃないが『水遊び』の季節ではない。

それなのに女の子が泳いでいたからだ。それもスクール水着姿。

「なんだ？」

そう思っていたら巡視艇がやってきた。

警告をする前にその女の子：セーラから近寄ってきた。

「すいませーん。この子を助けてあげてくれますう？」

可愛らしい声で甘ったるい口調。いかにも女の子と言う感じの喋り方だ。

「あ…ああ」

少女に似つかわしくない豊満な二つのふくらみにその乗組み員は目のやり場に困る。

視線をはずすともう一人の存在に気がつく。ぐったりしている。

溺れたのかと巡視艇のクルーは思う。

とにかく引き上げる。ところが驚いた。全裸だ。なおさら目のやり場がなくなる。

そう。彼女は魚住平と言う少年だった存在。アマッドネスの犠牲者の例に漏れず女性化してしまった。

「お…おい。毛布だ。毛布を持ってこい」

水難事故から救助した人のために用意してあった。保温の意味で



も包まれる。

「ああ。良かった。あたし一人ならいいんですけど、さすがに抱えて泳ぎ続けるのはきつくて」

天真爛漫な女性的な笑顔のセーラ。

「抱えて泳ぐって…一体東京湾で泳いでどうするつもりだ？」

セーラはにっこり笑って言う。

「女の子にはいっぱい秘密があるんですよ」

それだけ言うと水中に消える。あつと言つ間に港にたどり着く。

「は…速い。まるで魚…いや。人魚だ」

呆然と見送るだけだった。

## EPISODE 7 「残響」

港につくとセーラは水から上がる。

当然だが注目を浴びる。

そりゃそうだ。東京湾をスクール水着姿の女の子が泳いでいればいやでも目立つ。

「うーん。仕方ないわね。えい」

目の前で体操服姿になったので驚く面々。その中をヴァルキリア

フォームの俊足で抜け出した。

適当なところでエンジェルフォームに。ガントレットはブレスレットに戻してある。

「便利だわ。フォームチェンジしたら乾いちゃった」  
分解して再構築されるのだ。その際に余計な水分などは散らされる。

それより口調がいやに柔らかい。そちらの方が問題だった。

（セーラ様。ご無事ですか？）

頭の中に従者の声が響く。

（あつ。キャロル。うん。平気よ）

（「平気よ」って…セーラ様。その口調）

（どこか変？ ごく普通の女の子の喋り方と思うけど）

（「普通の女の子」って…あの、ご自分のお名前いえますか？）

（何よ？ あなたが言ってるでしょ。セーラだって。あ、でもハーフにも見えない顔だから「セーラ」よりは「せいら」と名乗るところかしら。あたしの本名も読みは「キヨシ」じゃなく「せいら」が本当だし）

（えっ？ そうなんですか？）

これはキャロルも知らなかった。

（うん。女の子みたいとからかわれて反発してトレーニングを続けて鍛え上げられちゃったのよね。さらに反発して「不良呼ばわり」）  
（それであんなに立派な体格なんですね）

（そうなのよ。でも…今は女の子でいたい。そんな気分）

（あああつ。やっぱりっ）

どうやら何か懸念していた事態に直面したらしい。

（何が「やっぱり」なの？）

（い…いいえ。なんでもありません）

（ふーん。まあいいわ。それよりこれから帰るわね。今更学校にも戻れないからウチにそのまま帰るわ。幸いお金はあるし、フェアリ

ーで飛んで帰ると目立つから電車で帰るわね。そろそろ寒くないし、散歩がてら)

鼻歌でも歌いだしかねないセーラ。そして通信を打ち切ってしまった。

「さあて…その前にこの服をどうにかしたいわね」

セーラー服自体は自分の学校の女子制服がモデル。ただこの辺りに学校がない。目立つことこの上ないのだ。

(そういえばこの服もイメージで出来たものとキャロルが言っていたわね。もしかして)

人気のないところに行くとセーラは別の服のイメージを浮かべてみた。

するとセーラー服が見る見るうちに春物のピンクのワンピースに変わっていく。

いたるところにフリルとレース。リボンがありまるでパーティードレス。

街を歩くにはぎりぎりだった。

「きゃーっ。やっぱり。こういうことが出来るのね。もしかしたら他のフォームでも違う服になれるのかしら？ マーメイドでスク水じゃなくてビキニとか」

浮かれきったセーラの口調。高岩清良としての男っぽさどころか、普段の戦闘時の凜々しさもない。

そこにいるのはどこにでもいそうな可愛い女の子。

「どこかに鏡ないかしら？」

彼女は自分の姿を見るべく歩き出す。

大通りに出るとけたたましいサイレンの音が。そしてパトカーが走り去っていく。

人々の注目がそちらに集まる。セーラとて例外ではない。

「なにかあったのかしら？ でもアマッドネスの気配は感じないし、

おまわりさんにお任せしましょ。今のあたしは『か弱い女の子』だし」

鼻歌交じりに歩き出す。

そのころ、サラ金強盗をした男。馬場が路地裏で荒い呼吸を整えていた。警察は彼を追っていた。

「や…やったぜ。サツは行っちまったな。逃げ切つてやる。絶対に大金の入ったバッグを抱えて馬場はなるべく普通に振舞い歩き出した。」

戦闘後でもありすでに夕方。

軽く空腹感を覚えたセーラは、幸いサイフを持っていたため喫茶店に入ってケーキセツトを注文した。

余談だがサイフも変身の影響が可愛らしい女の子むけデザインに変化していた。

「お待たせいたしました」

ストロベリータルトとアッサムという組み合わせである。

紅茶を一口飲んで口を湿らせ、タルトを一切れほおぼる。

その表情が歓喜に変わる。グルメ番組のリポーターになれそうなくらいに『美味しい』と表情で語っていた。

(甘くて美味しいー。あたし普段(男のとき)は甘いのが苦手なはずなのに何故か注文しちゃったけど食べてみたら美味しい。やっぱり味覚も女の子のそれになつていいのかしら?)

セーラは何も考えずにケーキセツトを平らげて、幸せな気分になった。

店を出る前にトイレに入る。

何の迷いもなく座って用を足す。スカートをまくるのもショーツを下ろすのも、そして股間に何も無いことにも違和感を感じない。手を洗うために洗面台に。そして鏡を見る。それで思い出した。

自分がどんな姿をしているか見るといふ目的のほうを。

「うわぁ…自分で言うのもなんだけど似合っているわ。服が可愛いし。でも…もうちょっと胸があってもいいよね。今度（Eカップの）マーメイドフォームで試してみようかな？」

そして改めて鏡で顔を見る。まだあどけない少女の顔。ふと閃きが。

大胆にも馬場はネットカフェに入る。人のやたら多いところまぎれるというのは考えても、まさか不特定多数と共に過ごすネットカフェは警察としても盲点である。

もつとも過去に宿を取った犯罪者が皆無でもないが。

まだ非常線が張られているだろう。朝を待ちラッシュにまぎれて電車で移動と言うつもりだった。

駅前の100円ショップ。

そこでセーラは口紅など化粧品を買い込んだ。手持ちではこれがいいところ。

また初めてでありためしである。いきなり高いものは買えない。

「うふふ。お家に帰ったら楽しみだわ」

彼女はようやく家路につく。

帰宅したのはいいものの、ここばかりはさすがに女の子のままでは入れない。

「仕方ないわね。じゃ」

セーラは意識を変える。ここでやっと清良の姿に戻る。苦虫を噛み潰した表情に。

「うええ。やっぱりむさくるしいわ。男の姿は。でもお家に入るまでのガマン」

清良は喋ると女っぽさが出るため無言で家に入る。

「あら。せいら。お帰り」

品のいい中年女性が出迎える。多少はふけているが美人といえる顔立ち。長い髪を纏め上げている。

時間とエプロン姿であることから夕食の準備中か。

「お母さん。ただいまあ」

つい「女性的に愛想良く」答えてしまう清良。

「あらあら。ご機嫌ね。それに今日は『せいらい』と呼んでも怒らないのね。それにいつもは『オフクロ』なのに」

「え…だって本当の名前だし」

いつもの清良のように無骨な口調にしたいのだが、意識が女の今ではそっちの方が無理がある。

「そうね。待っててね。もうちょっとでご飯できるから」

「ああ」

短く答えてごまかすようにトイレに。

(ふうー。ばれなかつたかしら。なんかトイレに入ってほっとしたら本当にしたくなってきた。ついでに)

清良はズボンのジッパーを下ろしてパンツの前を開いて…そこから先が出来ない。

(だめ…触るのが気持ち悪いかも)

あろうことが自分の肉体の一部である『男のシンボル』に触れない。グロテスクに感じる。

(なんでえ？ 体の一部なのに…あああ。漏れそう。仕方ないわ) 瞬間的にセーラー服姿に「変身」。そして間に合った。

(ふう。なんだか今はスカートの方が違和感ないのよね)

2重の意味でほっとする。

再び男に『変身』して何とかごまかして夕食を済ますと自室に閉じこもる。

鍵までかけてから女に『戻る』。

「あー。なんかこっちの方が落ち着くわね。ついでに」

戦闘服であるセーラー服から街を歩いていたのとは違うタイプの

可愛いワンピースに。

そして買い込んだ化粧品でメイクを楽しみ始めた。

「な…何をなさっているのですか？ セーラ様」

従者が来たのはまさにそんな時。

「あ。キャロル。どう？ 似合う？」

いきなり尋ねるセーラ。今度はもう少し落ち着いた緑のワンピース姿。

服は地味だがルージユが華やかな印象を与えていた。

「お…お似合いです。セーラ様」

口ごもったのはごまかしに掛かったからではなく、かつてのセーラを思い出したから。

「やはり魂は同じですね。かつてのセーラ様も髪こそ戦いの邪魔にならないように短くしてましたがおしゃれな方でした。紅を差すことも珍しくなく。お懐かしい」

だからか「高岩清良」がしたことない化粧が「初めて」で見事に決まっている。

「うふふ。ありがとう。さあ。服の変化ができるとわかったのならちよつとしたファッションショーね」

その言葉どおりセーラは次々と衣装を変えて楽しんでた。

そのどれもが可愛らしいデザインの服であった。

さすがに疲れて眠る時もネグリジエに変化させるほどである。

眠りに落ちた瞬間に、つまり意識を失ったら本来の高岩清良に戻る。服も帰ってきてからの部屋着に。

メイクは寝る前に落としていたので問題ないが、もしかしたらこれもなくしていたかもしれない。

「ふう。目が覚めてから大変だろうな」

憂鬱になるキャロル。

深夜のネットカフェ。馬場はバッグを抱えたまま眠っていた。

日雇いの仕事を得ているホームレスが宿とするのは珍しくない。だから馬場もそんな一人と思われる。通報はされていなかった。

朝。清良はまどろんでいた。

（あれ？ 俺いつのまに部屋に…えーつと…ピラニアやろうを追って、川に飛び込んで何とか勝って…それから…）

ぼんやりした頭で前日の行動を思い起こす。

そう。可愛いワンピースに喜び、甘いケーキに浮かれ、自発的に化粧までしていた前日の行動を。

「……！？」

清良は猛烈に恥ずかしくなり布団にもぐりこんだ。

さらに時間が経つ。朝食の時間で家族が起こしに来るが彼は一向に出ようとしない。

キャラルには理由がわかっていた。

諦めて去って行ったところにキャラルがちょこんと布団の側に。

「えーとですね…セーラ様は最初に肉体が女性になります。時間と共に精神もシンクロしていくのですよ。それが進むと心と体が一致して強さを増すのですが、ある一定を過ぎると過剰にシンクロして『女性としての意識』が勝ってしまうのですよ。戦闘終了後に言葉になっっているのはその表れで」

布団の中に引きこもる主の傍らで説明を続ける従者。

「それでも10分程度なら解除すればリセットされるのですが、昨日の場合は長すぎて完全に自意識が女性になってしまいいわば『基本が女性で男に変身する』形になってたんですね。あのセーラ様？ 聞いてます？」

「うるせえうるせえうるせえーつつ」

あくまで布団を被ったまま怒鳴る。

「あんな恥ずかしい思いはもうたくさんだ。俺はもう変身しねえぞ」

（ああ。こうなるのが見えていたから言いたくなかったのだが）



人間だつたらため息をつきそんなキャロルである。

そのころ、何とか夜を明かした馬場は非常線とかも回避したのに職務質問に引つかかって警察官に追われていた。

(チキシヨウ！ あと少しだったのに。何とか逃げ切れれば)

(ふふ。その足では無理だろう)

馬場はぎよつとなつた。警察官に追いつかれて耳打ちされたかと思つたが違う。

(このラブレが力を貸してやろう。お前に追いつけるものはいなくなる)

その「悪意の塊」は馬場の返事も聞かずに体内にもぐりこむ。

「うつつ」

馬場は立ち止まる。

「？」

転んだとかならぬ知らず立ち止まるとは…自首も考えにくいがとにかく警官は追いつく。

ところが立ち止まっていた強盗は膨らんでいく。

顔は長くなりチエスのナイトを彷彿とさせる。

下半身は異様に膨らむ。そして馬の胴体と脚を作り上げる。

遅しい肉体だが豊富な乳房が辛うじて女であることを示していた。

「な…なんだあーッ」

パニックに陥る警官たちの前にはギリシャ神話の半人半馬。ケンタウロスがいた。

## EPISODE 7 「残響」 (後書き)

### 次回予告

「うるせえ。もう変身なんざしねえって言ってるだろ」

「セーラ様！ それでいいんですか？ あなたのお気持ちは一時的ですが、アマッドネスの犠牲者はこの先ずっと女性として死ぬまで過ごすんですよ。ヘタしたら命を落とす人もいるかもしれない」

「キャロル…これがお前の…」

「よし。突っ走るぜ。キャロル」

EPISODE 8 「天馬」

## EPISODE 8 「天馬」

半人半馬…ホースアマッドネスと化した馬場はそのまま俊足を飛ばして逃げ出した。

「ま…待て！」

警官が威嚇射撃で地面を撃つが完全に無視。走り去る。

「こちら警ら。職務質問をした馬場と思われる男が…その…馬の化け物に」

無線で言っていて照れる言葉であるがそれどころではない。

「恐らくは頻発する性転換事件の重要参考人と思われれます。応援願います」

いきなりな結びつけだが清良の通う高校以外にも、二つのエリアで男が女になるケースが続出していた。

そう。先に戦闘エリアとなったブレイザとジャンスの守るあたり。段階を踏まえずば一瞬で性転換である。超常現象と結びつけるのも無理はない。

さらには怪物に襲われて意識をとりもどしたら女になっていたという証言も多数。

そしてその「怪物」がいたのだ。しかも男だったはずの馬場が明らかかな女に。

街は、そしてホースアマッドネスの行く道は大騒動になる。

「！」

清良はアマッドネス出現を感じ取った。それはキャロルも同様。

「セーラ様！ また現れたようです」

「うるせえ。もう変身なんざしねえって言ってるだろ」

長時間の変身で、意識まで女性化してしまったのを恥じている。変身を拒否していた。怖れてもいた。

「ああ。やっぱり……」  
「キャロルはため息をついた。」

## EPISODE 8 「天馬」

どこにでもある住宅街。その中の庭付きの二階建て一軒家。  
その二階には空き部屋と清良。理恵の部屋が。

清良は自分の部屋、さらには布団の中で引きこもっていた。

「セーラ様！ それでいいんですか？ あなたのお気持ちは一時的  
ですが、アマッドネスの犠牲者はこの先ずっと女性として死ぬまで  
過ごすんですよ。ヘタしたら命を落とす人もいるかもしれない」

「……」

天岩戸は開かない。

「セーラ様がちょっとだけガマンしてくだされば救われるんですよ」  
「……ジャンスとかブレイザってのがいるんだろ。そいつらに頼め  
よ」

「いえ。恐らくお二方には出現がわかってない可能性があります」  
「どうということだよ？」

意外だったのか気をひいた。

「この感じ取る能力。当然ながら限界があります。現代の単位で言うなら半径三キロ程度」

「ああ」

それもそうだ。そうでないなら清良はブレイザやジャンスの戦いも感知しているはずなのだ。

つまり感知できないほどの距離となる。

「気がついたセーラ様が駆けつけるしかないんですよ。私も協力しますからお願いしますよ。セーラ様」

「……………チキシヨウ」

渋々ではあったがやっとでてきた。

「こうなったらアマッドネスの野郎をぶちのめして鬱憤晴らした」  
変身ポーズを取ろうとする。

「待ってください。セーラ様」

今まで散々急かしていたキャロルが制止する。

「しかし急がないとまずいんだろが。フェアリーで飛んでいくからよ」

「いえ。それではいささか目立ちすぎます」

前日のピラニアアマッドネスとの闘いを思い出す。川沿いに飛んでいるところを晒していた。

「あれはちと拙かったか……………」

「それに協力もするといいましたよ。なるべく変身時間が少なくなるように、かつ目立つのを避けるため私がアマッドネスのところまで運びます」

「は!?!」

どう重く見ても5キロもなさそうな猫がどうやって?

そう感じていると思われる表情を読み取った。にやりと笑う黒猫「セーラ様。戦乙女のお話をご存知ですか?」

厳密には当事者に聞いている。「覚えてますか」が正解だろう。

「いや。しらねえ」

清良は素直に答える。

これはキャロルも予想していたらしく特に反応はなく、説明を始める。

「戦乙女は天馬…ペガサスにまたがって戦っていたのですよ。ペガサスたちは戦乙女の足となり、戦場を駆け抜けたのです」

「それがどう…まさか…俺が変身するように…お前もか？」

「正確には『戻る』と言いたいところですが」

ぴよんと跳ねると窓際に。そして庭に飛び降りた。

黒い輝きすら放つ毛並みが灰色を経て白に。

大きさも大型犬程度のサイズになってそして馬のそれに。

輝く白い背中から神話のように羽根が出現する。

清良は思わず階段を駆け下りていた。そして庭に。

「キャロル…これがお前の…」

「本来の姿なのですよ。セーラ様」

声は変わらない女の声のまま。

しかしその姿は神話の世界に生きているはずの天馬。天かけるペガサスだった。

「さあ。私の背にお乗りください」

「い…いや…これはもつと目立つんじゃないか？」

さすがに躊躇する清良。

「なぜです。ただの馬ですよ。女の子が空を飛ぶより目立たないでしょう」

神話の世界に生きてきたキャロルとしてはもつともな主張。

「ダーツツツ！ 空飛ぶ馬も目立つに決まってるだろが。それに馬で行き来する奴なんざこの東京にゃいないぜ」

「それもそうですね。では…」

姿が再び変わる。

天馬の顔がカウルのように。四肢は前輪と後輪に。巨大な胸は細くなって楽にまたがれるように。

鋭角な白いカウルの右に紅く、左に蒼いウイングが。

「鉄の馬ならいかがです？」

キャロルは一台のオートバイへと姿を変えていた。

「お前つて…いつたい…」

「私はいわば人造生命体なのですよ。だから悠久のときも超えることが出来たのです。このくらいの変化はわけがありません。いかがです。このオートバイなら」

「ああ。これならいい。XR250か。何とか操れるだろう」

「前にセーラ様が雑誌でこの鉄の馬を見ていたのでモデルにしてみました」

「それでか」

清良はキャロル・バイクモードにまたがる。

実際は必要がないのだが右ハンドルのアクセルを回す。

段々と気持ちが悪くなる。

「よし。突っ走るぜ。キャロル」

「はい。しっかりつかまっていますよ」

中型と思っていた清良は面食らった。もっと大きなバイクの加速だったのだ。

ホースアマッドネスはひた走る。

ベースとなった馬場の「逃げる」と言う意識か？

それとも何かの作戦か。

追跡するパトカーは振り切られてきた。白バイ隊員だけが追跡を続行している。

こちららも警察とチェイスしている清良。

そりゃあそうだ。ノーヘルで乗り回しているのだ。しかも明らかにスピード違反。ついでにナンバープレートがない。

ホースアマッドネスをおっているのか、警察から逃げているのかわけがわからなくなっていた。

走り続けたホースアマッドネスは停車中の暴走族の一団を見つけ

る。

「なんだ？」

怪訝な表情をする面々の中突っ込む。そして二本足の姿に。

「てめえ。なんのマネだ？」

それに対してホースアマッドネスは大型の剣を胸に突き刺すことで返答とした。

ことここに至ってそれが特撮の撮影でもなければコスプレでもないと悟る。

「人殺し」から逃げようとするが次々と刃を突きたてていく。

そうやって立ち止まっていたために清良は追いついた。いや。待ち伏せをされていた。

「野郎……」

瞬間的に血が沸騰するのがわかる。

自分をおびき寄せ、数で叩くという作戦。

そのためだけに無関係のものたちを毒牙に……

「確かに……恥ずかしがっていらねえな」

清良は心の女性化を恐れるのをやめた。

「キャロル。命預けるぜ」

彼は走るバイクでそのまま立つ。その両腕のリストバンドが戦闘意欲に応じてガントレットに。

「セ……セーラ様？ なにを」

キャロルは慌ててバランスを保つ。

「こっからはさすがに変身しないときつそうだからよ」

そして右手を天に。左手を地にかざす。水平に運び、腋にひきつけ前方に繰り出す。

「変身」

スパークする赤と青のガントレット。清良はセーラー服姿の少女



へと変身した。

「よし。このまま奴等突っ切るぞ」

「あの…それは良いのですがセーラ様？ 下着が見えてますが」

「えっ？」

立った状態で変身した。いつもなら静止しているからスカートも下に向かっていているが今回は走るバイクの上。

前はともかく後ろの方が盛大にまくれ上がっていた。

セーラは思わず両手でスカートを押さえ、シートに座る。そして追跡していた白バイ隊員たちをにらむ。

白バイ隊員たちも目の前で少女へ変わり、さらに盛大な「サービス」をしたので戸惑っている。

「うーっっっ」

涙目になっている。白バイ隊員たちも罪悪感が。追い討ちをかけるように

「見たなあ。スケベ」

頬を染めて甲高い声で叫ぶセーラ。

(セーラ様：それはまるつきり女の子ですよ)

さすがにそれは言わないキャロル。代りにアドバイスを。

「ポーズはあくまで儀式です。意識さえ向かえばハンドルを握っていても変身できますよ」

「くそっ。そうだったな。チキシヨウ。知らなかったから思いつきりサービスしちまったぜ。嫁にいけない……」

「いくんですか？」

これには戦闘中ということをおぼろげに忘れるほど面喰らった。

「ただのジョークだ。それよりキャロル。飛べるか？」

戦闘に気持ちを切り替えたセーラが尋ねてくる。

「お任せを」

迫り来る元暴走族の女たち。その直前でバイクが跳ねる。

まるでモトクロスのようにジャンプしてその一団をかわす。

ところが後続の面々はあらかじめ方向転換に入っていた。

セーラが突っ切るか飛び越すのを見越して追撃を用意していた。さらには第二波がきた。挟み撃ちだ。

「キヤロル！ 合図したらいいな」

「了解です」

ホースアマッドネスの目的は初めからセーラ抹殺。

覚醒の不完全なうちに叩くつもりだった。

そのためおびき出してセーラが手の出せない人間を差し向けた。少なくとも困り込むことは出来ると。

ところがセーラは右のガントレットを叩くと、まず体操着姿のヴァルキリアフォームに。それは途中経過。一気に超変身をしていてフェアリーフォームに。

キヤロルのほうも瞬間的に黒猫に戻る。

それを抱えて飛んで逃げた。

なまじ間を離していたのがホースアマッドネスにとって裏目に出た。

十分な距離を置いた状態でキヤロルがバイクモードに。そしてセ

ーラも非力なフェアリーからヴァルキリアに。

「充分接近したらクロスファイヤを叩き込む」

もちろんそれが通るとは思っていない。

案の定ホースアマッドネスは疾走体になる。

（逃げる？ それとも）

もし逃げたらその背中に飛び乗って決めるつもりだった。

暗殺が目的だ。向かってきた。

「おもしれえ。変則のチキンレースだぜ」

ぐんぐんと接近していく両者。

ホースアマッドネスの右手に剣が。左手には盾。

セーラは左手のガントレットを叩く。相対距離が十メートルでマ

ーメイドフォームに。

（馬鹿め。腕力があってもノロマの人魚では）

馬鹿にしたのが油断に繋がった。人魚姫の手に伸縮警棒が。

(しまった！ 鈍重さはバイクがカバーしている)

慌てて方向を変えようとするがスピードが乗っていたため止まりきれない。

逆に速度を落とすことなくマーメイドランスを抱えたセーラが駆け抜ける。

ホースアマッドネスは左手の盾でガードしようとしたが、マーメイドの腕力と、バイクのスピードで弾かれそのまま胸をなぎ払われた。

「ぐおおおっ」

叫びを聞くまでもない。手ごたえが物語っていた。セーラはバイクを止める。

そして芝居がかって口上を。

「戦乙女。聖なる武具。天馬。三位一体。名づけてスプラッシュブル」

ホースの断末魔が響き渡る。

「悪よ。泡のように消え去れ」

決め台詞にあわしたかのように爆発した。

司令塔がなくなり支配されていた暴走族たちも意識を失う。

白バイ隊員が救急車を手配して「馬の化け物」を追ってみれば、そこには異様な光景が。

「あっ。おまわりさん。もう終わりましたよ」

白バイ隊員たちは目が釘付け。

「？」

怪訝に思ったセーラが改めて自分の姿を見る。

そりゃあバイクにまたがるスクール水着の女の子なんて、奇異の目で見られて当然であろう。

「いやぁーん」

セーラは慌てて体を隠す。

(あ…もう女の子モード入っちゃったみたい)  
警官の前なので無言だったキャラルはバイクの姿のまま苦笑した。

## EPISODE 8 「天馬」 (後書き)

### 次回予告

「怪物の呼称ですが、証言にあつた名前。アマッドネス。それを用います。アマッドネス。それが敵の名前です」

「良二、貴様は飛田の家の跡取りの自覚はあるのか？」

「そんなのは品行方正な翔一様のもだろう。双子の弟なんざカスみてえなモンだ。ほんのちよつと生まれるタイミングが違うだけで」

「ああ。妹よ。我らは再び肉体を得たのだ。こうしてお前を抱き締めることが出来ようとは」

(まさか…もう一体?)

EPISODE 9 「兄弟」

## EPISODE 9 「兄弟」

試験休み。そして春休みに突入するが、まるで花が咲く季節に合わせたかのようにアマッドネスが次々と現れる。

そうは言えど一日おき程度の上に単体。

変身。そして戦闘にもなれた清良・セーラはこれを次々と屠っては行く。

だがセーラには撃退することはできても予防することは出来ない。常に後手に回り、必ず女性へと転換させられる犠牲者が出る。

清良の住む福真市。そしてそこにある警察署。

ここ福真署に捜査本部が設置され、対策会議が練られていた。

「それでは一城君。始めてくれ」

「はい」

一城と呼ばれた女性は短く返事をする。

彼女の名は一城薫子。髪の毛の短いボーイッシュな印象の女性警察官である。

彼女は女性と言うことで「被害者」たちの事情聴取に駆りだされていた。

本来は男性の「犠牲者」たちも、女性相手に心を開くのか雄弁になる。

そして警察が掴んだのは…

\*半人半獣の化け物の存在。

\*それに襲われると意識を失い、とりもどしたときには女になっていた。

\*その怪物を倒す少女がいるらしい。

それだけであった。どうにも手の打ちようがない。何しろ神出鬼

没。

だが最後の少女については「川沿いをレオタード姿でとんでいた」とか「人魚のように素早く東京湾を泳いでいた」とか眉唾物の証言が。

とは言えど後の方は巡視艇の乗組員の証言。

やはり集団性転換事件の時に現場に居合わせた「スクール水着姿でオートバイに乗る少女」は、身内である白バイ警官が見ている。しかも暴走行為をしていた高校生男子と思しきものが変身したとまで。

「どうにもこうにも…子供のドラマみたいな話だな」

本部長。末倉がぼやいてみせる。

「本部長。怪物の呼称ですが」

「ああ。そうだな。一城君。その未確認生命体だが」

「それなら所属不明機に引っ掛けて『アンノウン』ってのは？」

挙手もせずに会議に出ている刑事が言う。

「単純にモンスターでいいじゃん？」

「男として死んで女として生き返ったようなもんだろ？ ギリシャ神話からオルフェ。それともエノク……めんどくせえ。まとめてオルフェノクってのは？」

「死んでないと言うならアンデッドとか？」

「魔が化ける魍魎で…魔化魍？」

「人間社会に虫食うんだからワーム」

「想像上の産物じゃないのか。イメージーション……イメージンとかで」

好き勝手に言い出す。

やはりあまりにも現実離れしていて気持ちが入りにくいからだろう。

「じほん」

薫子がわざとらしく咳払いをした。全員それで会議中と思い出した。

「怪物の呼称ですが、証言にあつた名前。アマッドネス。それを用います。アマッドネス。それが敵の名前です」  
とりあえず名前がわかった。  
それだけでも実像がおぼろげに見え、気持ちも入る。

## EPISODE 9「兄弟」

春。新学期。高岩清良も二年生に進級した。

「はあ…春休みはまったく遊べなかつたな」

登校中にぼやくのも無理はない。

清良は春休み中は二日に一度の割合でアマッドネスたちを倒していたのである。

遊ぶ暇などあるうはずもない。

（しかしこれでだいぶ数を減らしました。まだまだ小物ですがそれでも被害を防いでいます）

頭の中に従者の声が響く。

（やつらあまり相性のいい相手がここにはいないのか、まとめては



出てこないのが助かる)

(もしそうならブレイザ様やジャンス様にも応援をしていただきましよう。そろそろブレイザ様のいる王真市や、ジャンス様の百紀市の出現頻度が低くなってきていますし)

(逆に言えば手ごわいのが残っているんだろう。こっちは俺一人で何とかするさ)

「キヨシ。聞いているの?」

幼なじみの怒声で我に返る。

隣ではセーラー服姿の少女。野川友紀が頬を膨らませていた。

「ああ。悪い悪い。何だっけ?」

「もう。春休み中はいっつも留守で。久しぶりに会えたのに上の空なんだもん」

「ごめんごめん」

秘密を保持するのは想像以上に労力を要する。いっそ本当のことを打ち明けられたら。

この幼なじみを「騙し続ける」のは倍以上の労苦を要する。

だがこんな秘密を打ち明けるなど出来ない。ましてや女の姿で戦っているなんて……。

「よう。仲が良いな。お二人さん」

大半の生徒には見慣れない制服。紺色のブレザーだがそれをラフにきくずしている。

顔は端正な部類に入るが、それはあくまで普通にしていれば。

あまりにも威圧的。特に目つきが悪かった。髪もオールバックで年齢より老けて見せている。

難を怖れて福真高校の生徒は遠巻きに見ている。

「てめえ…こんなところまできやがったか」

清良が歯噛みする。

「知り合いなの?」

友紀の質問。

「ああ。ま……『お仲間』と言う奴だ」  
清良の返答。

「へっ。すつとぼけんのもいい加減にしろよ。果し合いの約束を春休み中無視しやがって」

それで乗り込んできたらしい。

「こつちにも事情があるんだよ」

もちろん誰にも言えない事情である。

「テメーはワルのクセに変に律儀なところがあるからな。新学期の初日は登校して来ると思ってたぜ」

待ち伏せだった。清良は苦々しい表情になる。

（春休み潰してアマッドネスとケンカしてたのに、今度はこつちでかよ……）

だがその苦悩は意外な形で解消される。

「良二」

一人の少年の怒声だった。こちらは福真高校の制服を着ている。第一印象は真面目に見える。めがねがさらにそれを際立たせている。

だがそれより驚いたのはその姿。今までは意識などしなかったが……  
飛田君……この人とそっくり」

友紀の指摘どおり。飛田と言う少年と良二と呼ばれた不良は瓜二つであった。

髪型や全体的な印象の違いで、不良少年だけ見ていたらわからなかったが、二人揃うとすぐにわかった。

「へへへ。思ってたより早かったな。兄貴」

「良二、貴様は飛田の家の跡取りの自覚はあるのか？」

「そんなのは品行方正な翔一様のもんだろう。双子の弟なんざカスみてえなモンだ。ほんのちよつと生まれるタイミングが違うだけでよ」

「それがくれた言い訳になると思っているのか」

「なるさ。誰も俺を認めないならこつちいう形でも認めさせてやる」

いつの間にか兄弟げんかになっていた。

「おい。テメーら。兄弟げんかなら家でやれ。それに俺を巻き込むな」

アマッドネス相手には「正義の味方」でも、さすがにこの場では普通の少年としての本音が出た。

「高岩君。僕にいわせれば君もこの愚弟と差はない。生活態度を改めることを推奨する」

いかにも委員長らしい言い回しだが、実際に彼は風紀委員を一年のときは勤め上げていた。

その若干やりすぎなほど潔癖なところは問題視されたが、誰よりも校内の風紀に気を使っていたのは万人の認めるところ。

「けっ。白けちまったぜ。ほんとは高岩をぶちのめして、その後で兄貴に自慢してやるつもりだったがな。順番通りに行かなかったぜ」

勝手に来た不良は勝手に帰路につく。

「今日のところは見逃してやるぜ」

足早に立ち去る。

「待て！ 話はまだまだぞ。良二」

だが予鈴が鳴っては追うわけにはいかない。

よもや風紀委員が自ら校則を破ることは出来ない。

立ち去ったこともありこの場はそれで終わりだった。

それぞれ校内へと入っていく。

清良やキャロルでも感知しにくい魂のままのアマッドネスが2体。

(姉上。これはかつこうのよりしろ)

(うむ。双子とは好都合。だがあの翔一とか言うほう。少々惜しい。ヨリシロや奴隷などではなく、我らに子種を提供する存在になれそうだが)

不老不死に近いアマッドネスではあるが、子孫を残したいと思う思いは辛うじて残っている。

それも長年の封印で「化け物」としての部分が強くなった昨今で

は希薄になり、子孫繁栄を無視して全ての男を女性化させ、自分たちの奴隷としようとしていた。

しかしこの2体。シヨウとリヨウは「姉妹」と言う「人間らしさ」を残していたためか、僅かにそこに考えが及ぶ。

（なに。そんな奴だからこそ姉上の肉体に相応しい）

（そうか。リヨウがそこまで言うのであれば）

2体は時を待つ。

始業式のみで終わった故に飛田翔一も早々と帰宅する。そして部屋の扉を開ける。

「よう。兄貴。待ってたぜ。さすがは双子。俺が珍しく家にいるとわかつたらしいな」

「ああ。貴様とまったく同じ顔と血を持つこの肉体が恨めしい」

飛田家は名家であった。それゆえ跡取りには気を割いていた。

生まれた男児は双子のみ。

これが例え年子でも年齢が違えばそれを理由に長男に後を継がせる事になる。

だがその差がない双子である。

一応は兄・翔一にその権利が行った。

しかしそれが劣等感につながり、弟・良二は見事にくれた。

翔一はそれに心を痛め、さらには跡取りとしてのプレッシャーでめったに笑わなくなった。

そして本来は助け合うはずの兄弟は互いに憎しみ合うように。

兄は手間をかけさせ、そしてプレッシャーと無縁に勝手にしている弟に対して。

弟は僅かな差で全てを手に入れた兄に対して。

互いの感情は朝の一件で爆発寸前。言い換えれば負の感情が最大限になっていた。

（いまだ）

二つの魂は二つの肉体に同時に飛び込む。

双子の兄弟は同時に体を痙攣させ、硬直する。  
やがてそれが解けると顔を上げて見合わせる。

両者の目に熱い涙がこみ上げて、どちらからともなく抱き合った。  
「姉上。暖かい。暖かいです」

「ああ。妹よ。我らは再び肉体を得たのだ。こうしてお前を抱き締めることが出来ようとは」

二人は肉体を得た喜びに涙を流して喜んでいた。

「さあ。姉上。今宵は祝いましょう」

「ああ。妹よ。そしてそれを済ませたら我ら二人でセーラを打ち果たそうぞ」

「二人でないと何も出来ないと馬鹿にした奴等め。ことごとく返り討ちではないか」

「見ているがよい。お前たちが馬鹿にした双子が天敵であるセーラを倒す様を」

翌日。入学式でまたもや早くに帰路に着く清良の前に飛田良二が立ちはだかった。

「高岩。昨日の続きをしようぜ」

「……テメーが勝手に帰ったんだがな」

どうやら避けられないと悟って相手することを決意した。

「友紀。お前は早く帰れ」

「そうだ。他にいたんじゃ邪魔だ」

清良はこれを不良なりの意地とみなした。だからあくまでも人質などとらないと。

闘いの場所は福真高校の屋上選ばれた。

(ここは安楽を完全な女にしちゃった場所ではないな思い出がなあ)  
清良が嫌がったのはそれだけではない。

いわば清良のホームグラウンドであるこの場でどうしてわざわざ仕掛けるのか。

どこか罫を仕掛けた場所に連れて行った方が良さだろうと。逆に不気味だったのだ。

「さあて。回りくどいのは止めにしておくか。高岩。俺には新しくやる事が出来た」

「だったらそれをやりにいけよ」

「その最中だ。俺は戦乙女。セーラを倒さないといけない」

もし何かを飲んでいたら咽たのは間違いない清良。

「な……なんだって？」

「だが奴が普段はどこにいるのか。あるいはどんな姿なのかもわからない。正体を知った奴は片っ端からあの世に行っているからな」

(それじゃ俺の方が悪党みたいじゃねーか)

「だから高岩。まずはお前を血祭りにあげて、セーラに対する狼煙とする」

おびき出しに利用するつもりと判明。

セーラがこの学校の関係者とは絞れたが誰かわからない。だからこの場で戦うことにした。そうとった。

「むんっ」

良二は両腕を左横に突き出す。それを円を描くように上に。

「邪魔くさいな」

一旦動きを中断させ、シャツを開く。

そしてそれから元の位置に戻し、右腕は天をつくように。左腕も折りたたんで胸の前に。

「はあっ」

気合と共にジャンプする。逆行で見えないが姿が変わっているのは気配でわかる。

そして高々と飛んだ頂点から清良目掛けて降りてくる。

「うわっ」と

さすがに距離がありすぎて何とか避けられた。

「失敗か。初めて……いや。『久しぶり』だったからな」

良二だったものは異形へと姿を変えていた。  
全身が黒みがかった緑。節足動物を思わせる四肢。何よりも赤黒い巨大な複眼と屹立する二本のアンテナが昆虫……バツタのイメージを持たせた。

「ちっ。アマッドネスに魂売り渡しがったか」  
正体を隠すなんていつてられない。清良はポーズを取る。

「変身」

スパークするとセーラー服姿の戦士に。

「高岩！？ 貴様がセーラだったのか？」

「ああ。そうだよ。お望みの決着をつけようじゃないか」  
軽口を叩きつつも脳内では通信を送っていた。

（キャラル。今どこにいる？）

（そちらに向かっています。何しろ小さい肉体ではなかなか）  
従者は普段は黒猫の姿をしている。これならどこにでもいる存在だが本来の姿は純白の天馬。そしてそれを現代風にしたオートバイ。  
イ。

しかし天馬は論外。無人のオートバイが走るのも注目される。黒猫の小さな姿のまま駆けつけていた。

（そうか。なるべく早く来てくれ。敵はバツタの特徴のアマッドネスだ）

戦闘が始まった。

出方を探るべく防御形態のエンジェルフォームで戦っていたが、バツタの意匠だけに強靱な足を生かした戦法だ。

（フェアリーならスピードに対抗できるが非力すぎる。マーメイドは話にならない。やはりヴァルキリアか）

そこからなら瞬時に別のフォームにいける。

「死ね」

バッタ…ホッパーアマッドネスが迫る。そこにカウンター気味に

「キャストオフ」

セーラー服を散り散りに飛ばす。

「ぎゃっ」

まともに食らってもんどりうつホッパー。

「よし。クロスファイアでとどめ」

動きの止まった相手の懐に飛び込む。しかし強烈な悪寒がセーラーの動きを止めた。

(まさか…もう一体?)

そして視界に入る飛田翔一の姿。

「危ない。逃げる」

相手がこの少女の姿を知らないのも忘れて叫ぶ。完全に意識が離れている。

そこにホッパーの強烈な蹴りが入る。

「くわっ」

一応は「布の鎧」に守られているがそれでも効いた一撃。たまたらず後退する。

その間に翔一はゆっくりと歩み寄ってくる。

「ば…バカヤロウ。これはマジなんだ。逃げる」

「ああ。知っているさ。何しろ可愛い弟。そして妹だからね」

「なに？」

弟と言うのはわかる。しかし「妹」と言う表現は？

翔一はそれに構わず右手を左上に突き出す。

それをやはり円を描くように右上に運ぶ。そしてそこにたたんでいた左腕を突き出し、右手を折りたたむ。

瞬間的に姿が変わる。やはりバッタの怪物。僅かな違いと言えば色がやや明るいこと。

「お…お前ら…兄弟揃ってアマッドネスに…」



「ふふ。我らもまた姉妹」

「二人でないと何も出来ない」と蔑まれていた地獄の姉妹」

「だが二人でないと倒せない相手もいる。セーラ。まずはお前を血祭りにして同胞たちを見返してやる」

（まずい…同時に2体なんて不利もいいところ。しかも魂も素体も双子じゃ相性がよさそうだ。一人ずつにしないと…だがどうやって）  
その逡巡が命取りだった。

2体のホッパー。姉のほうを1号。妹のほうを2号と便宜上名づけるが、同時に飛び上がった。

太陽を背にして姿をくらます。

その同時に急降下してのキックがセーラの腹部をめがける。

「ホッパーダブルキック」

息の合った二人のキックが見事に炸裂する。

「ぐわああっっっ」

さすがのセーラもこれではたまらない。

吹っ飛ばされて意識を失い高岩清良の姿に。

そして屋上から落ちていく。

## EPISODE 9 「兄弟」 (後書き)

### 次回予告

「仕方ねえ。キャロル。このまま『逃げる』ぞ」

「ふふふ。雑木林で戦いたかったのだろうがそうは行かない。我らに不利だからな。反対側の造成地に行ってもらおうか」

「従わないと手当たり次第にそこいらの車を襲うことになるがな。車ごと襲われては女になるのではなく、そのままくたばることになるが?」

「俺の名は高岩清良。そして…拳の戦乙女の魂を継ぐもの」

EPISODE 10 「姉妹」

## EPISODE 10 「姉妹」

黒猫が福真高校に到着したのは、まさに清良が落下するところだった。

「セーラ様！」

とっさにキャロルは封じた姿を解き放つ。

眩い光を放ち突然現れたペガサス。

周辺がそれに驚愕するのにも構わず、忠実なる僕は天へと駆け上がり主を背中で受け止めた。

「セーラ様！ セーラ様しつかり」

「……う……キャロル？ 空に……えっ？ 変身もしてないのに？」

混乱している。直前まで変身していたことを失念するほどだった。変身が解除されたのを見てわかるとおり、一瞬とはいえど気を失っていた。

それほどまでに強烈なキックだった。

「しつかりしてください。わたしが支えているのですから」

「あ……」

ここでやっと天かける馬に救われたことを理解した。

「助かったぜ」

安堵の息をつくが下では多くの生徒が見上げて騒いでいる。

「……欲を言えばもうちつと目立たないやり方で願ったがな」  
「無理を言わないでください」

そうは言うものの注目を浴びてしまっている。

「仕方ねえ。キャロル。このまま『逃げる』ぞ」

「えっ？ 敵は無視ですか？」

「向こうがほつとかねえよ」

事実だった。ホッパー姉妹はその強靭な脚力で校舎の屋上からひとつとびで校庭に。

そしてそのまま跳躍力を生かして天空の清良たちに攻撃を仕掛け

てきた。

それはとりあえずかわす。

校庭の方は着地した二体の異形に大パニック。ペガサスの存在など忘れ去られた。

「ここじゃ他の連中が邪魔だ。奴らをどこか適当な場所に誘導してそこで叩く」

「わかりました」

指示を受けたキャロルはわざとゆっくりと空を飛び移動する。

「ふん。我らを誘うか。良いだろう」

「我ら姉妹と貴様らだけと言うのは望むところ」

地獄の姉妹は跳びはねて追跡を開始した。

## EPISODE 10 「姉妹」

とりあえず目立たない場所に着地。

いくら誘導といえど空を飛んでは目立ちすぎて、いらぬ他者まで巻き込んでしまう。

だから途中からはバイクモードにスイッチしての「逃走」になる。

一方、追っ手は……

「ふむ。車道はちと跳ぶのに面倒だな」

そう判断した双子の怪人は跳躍中にちょうど停車中のバイクを見つけた。

「姉上。あれならすぐいけるな」

既にそれぞれアマッドネスとしての記憶と、飛田兄弟の記憶が混じり合っていた。

だから運転できる良二に取り付いた妹の方はいけると判断した。

「私にはこの知識がないな」

姉・シヨウウが取り付いた翔一はバイクの免許どころか二輪に興味がなかった。

「わたしが教えてあげますよ」

「そうか。頼むよ」

空中でその会話を終えたときに着地。着地するとそのバイクの側による。

「ん？」

バイクの運転者は歩み寄る異形に気がついた。そう。バッタをそのまま人間の女にしたようなそれを。

「うわあつ。化け物」

すぐさままたがっていたバイクを発進させて逃げようとするが、捕まって引き摺り下ろされる。

隣の友人と思しきバイカーも同様に。

不幸中の幸いと言うべきは彼女たちが清良追跡にのみ気を裂いて、そのため奴隷の女性とされずにはすんだ事である。

これはアマッドネスに関わった人間の中ではかなり幸運な「被害者」である。

だが彼らではなくバイクが変化した。

彼女たちがまたがると異様な生物間のあるデザインに変化して、

そして250ccとは思えない加速で飛び出して行った。

清良は誘導が目的のため流すように走らせていた。

だが接近を察知した。ミラーで確認するとノーヘルライダーが二人。飛田兄弟である。

近くまではホッパーアマッドネスの姿だったが、清良を目視できたので人間の姿とバイクに。

そのまま抜けてきたのだ。

「きやがったな」

清良は当初からねらっていた雑木林へ進路をとる。

障害物でジャンプ力を削ぐ狙いだ。

だが二台のバイクは急加速をしてキャロル・バイクモードを挟み込む。

「こ…こいつら」

とつさに変身を試みる清良。それに語りかける飛田翔一。

「ふふふ。雑木林で戦いたかったのだろうがそうは行かない。我らに不利だからな。反対側の造成地に行ってもらおうか」

「従わないと手当たり次第にそこいらの車を襲うことになるがな。車ごと襲われては女になるのではなく、そのままくたばることになるが？」

追隨する飛田良二。取り付かれる前の仲の悪さがウソのように息があっている。

「く…くそう…」

脅迫ではあるが二人が真っ向勝負を第一に考えているのが理解できた。

(どうやらこいつらの目的は俺をただ殺すだけじゃなくて、「正々堂々と殺す」のが狙いらしいな。二人がかりで正々堂々もないが、その方が被害を出さないですむ。なら)

まだ畏にかかった方がマシだった。

「わかったよ……」

清良はおとなしく二人にしたがうことにした。

工事中の土地。どうやら平日であるものの休日らしい。

「ほう。調べたイメージ以上だな」

翔一が感心したように言う。

「これだけ開けていれば思う存分飛べるし、走れるな」

「おいおい。リョウ。手の内を明かしてどうする」

「あ。ごめん。でも奴は一人だし、ハンデと言うことで」

「まったくしょうがないなあ」

恐ろしくのん気に会話する二人。それが逆に異常性を醸し出していた。

「おい。テメーら二人で俺をおびき出して、その間に学校襲撃なんて落ちじゃねーだろうな？」

戦略としては充分考えられる。

「ふざけるな！」

清良も驚くほどの激昂ぶりだ。

「我らが陽動？ 格下扱いだと？」

どうやらそれが逆鱗に触れたと理解した。

「確かに我ら二人は常に一緒に戦ってきた。故に一人では何も出来ないなどと同胞からも蔑まれている」

「だがその蔑んだ奴らはどうだ？ 片っ端からたった一人の貴様に返り討ちだ」

「その貴様を我らのコンビネーションで倒す。それが奴らを見返すことになる」

「だから他の人間などどうでもいいのだ」  
「なるほどな」

うそと言う可能性もないわけではないが、清良は妙に信じてしまった。

あまりにも心を揺さぶる魂の叫びだったのだ。

「だったら相手になってやる。むしろ他に手を出さないだけありがたいぜ」

「ふふ。では」

メガネを外して翔一が姿勢を正す。

「我が名はシヨウ。バツタの力を持つ女」

言うなり姿が異形へと変わる。

「我が名はリヨウ。シヨウの妹。同じくバツタの力を持つ女」

不良男子生徒がバツタ女へと姿を変える。名乗りをあげたのは自分たちが倒したことを明確にする目的だ。

「いざ。勝負」

2対1なのに何故かそれほど卑怯に感じない。

今までの暗躍していた連中と違い、真正面から戦いを挑んできたからである。

「だったら応えてやる」

清良は右手を天に。左手を地に向けた。天に向けた腕に真紅の。地に向けた腕に蒼いガントレットが出現する。

「俺の名は高岩清良。そして…拳の戦乙女の魂を継ぐもの」

腕を水平にして両腕をひきつけ思い切り前方へと突き出す。



「変身」

スパークするとその姿がセーラー服姿の少女戦士へと変る。  
少女戦士は突き出した腕を体に引き寄せ、右腕を斜め下に薙ぎ、  
左腕を折りたたんで拳を上に向けた。

「戦乙女えっ！ セーラあっ！」

その名乗りと同時に左腕を腰だめに。右腕を折りたたんで拳を上  
に向けたポーズへと変えた。

「行くぞ」

互いに戦闘形態となった三者。

口火を切ったのは兄：姉であるホッパー1。バイクを変化させて  
突っ込んでくる。

「おっと」

とっさに避けてバイク姿のままだったキャロルにまたがる。

「とりあえず姉貴から片付けるぞ」

「はい」

バイクバトル勃発とは行かなかった。ホッパー2がジャンプして  
襲ってきた。

つまり地上。平面戦闘は姉と。空中。立体戦闘は妹と戦うことに。  
さらにはバイク戦に集中しようとするれば立体攻撃を妹が仕掛けて  
くる。

ならばと一旦空中戦に応じようとしても、こんどは姉が二段変身  
のチャンスを与えない。

（くっ。二段構えか。エンジェルフォームなら持ちこたえるがらち  
があかねえ。一か八か）

なんとセーラはバイクを駆るホッパー1に突っ込んで行った。

「なにっ？」

さすがにこれは想定外。しかも走るセーラが姉に突っ込んでいくのでは妹のほうも攻撃できない。

スカート姿のまま大きくジャンプ。防御一辺倒といえど並みの男…そう。変身前の清良すら軽く凌駕するパワーがある。

そして膝をホッパー1に向けて跳んでいた。キャロルもそのまま突っ込んでいく。

さすがにたまらず回避するホッパー。その間に

「キャストオフ」

戦闘形態であるヴァルキリアフォームへと姿を変えた。そして戻ってきたキャロルに再びまたがる。

防御は多少薄くなったが格段に運動性能が上がった。

「へへ。2対1が絶対不利と言っただけでもないか。好みじゃないが片方を盾にする手も有るってこった」

まだ男の精神が残っていて男の口調で挑発するように言うセーラ。  
「小癪な」

能面のようなバツタ女たちだが口調は明らかに憎悪をたぎらせている。

（これで仲間割れでもしてくれたらしめたものだがな）

そういう思いからわざわざこんな台詞を発していたセーラ。

「ふん。何とでも言え。我らは常に二人で戦ってきたのだ。封印にすら二人で耐えてきた。この絆。貴様に断ち切れるものか」

姉。ホッパー1が叫ぶ。

「姉上。その通りです。二人力をあわせて奴を倒しましょう」

逆に結束を高めることに。

（くっ。悪といえど肉親の絆はあると言うことが。取り付かれる前の二人の仲の悪さを考えるとなかなか皮肉だな）

先刻の台詞と反するが複数相手にすることにセーラは不安を感じ始めてきた。

(いや：盾にするだけではないな！)

それを考えている内にホッパー2もバイクにまたがった。そのまま急発進してセーラを襲う。

「おっと」

運動神経も格段に向上しているため難なくかわしたが姉の方が次を仕掛けてきた。

これをおかすと妹が。波状攻撃だ。

(ただっ広い場所を選ぶはずだぜ。この攻撃を狙ってやがったな。しかしアマッドネスが馬ならともかくバイクに乗れるとはな)

(恐らくは取り付かれた飛田兄弟の知識と技術でしょう)

(兄貴の方がバイクに乗っていたというのは意外だったな。それでストレス発散でもしてたのかしら?)

そろそろ変身時間が長くなり精神の女性化が始まり言葉遣いに現れる。

その間にも攻撃の手は緩めないホッパーアマッドネスたち。

同士討ちを避けるためタイミングはシビアではないが、それでもセーラはかわしているのが精一杯。

(どちらかを何とかしないと……今は上ががら空きだわ)

セーラは思いついたことがあり右のガントレットを叩く。

「超変身」

体操服姿からレオタード姿に。俊敏性に特化したフェアリーフォームに。

妖精が華麗に舞い上がる。

「バカめ。引つかかったな。わざと空けていたとも知らず」

ここぞとばかりにホッパー2が跳ぶ。だがセーラは真正面のホッパー1目掛けて「飛んだ」。

「し……しまった」

文字通り「跳んだ」ホッパー2には着地地点はコントロール出来

ても跳んでいる間は何も出来ない。

だが「飛べる」セーラは姿勢を変えていた。相手はホッパー1のみ。

「くっ」

正面衝突を避けて姉も跳ぶ。だが攻撃力は低くても俊敏性では勝っているフェアリーフォームにあっさりと捕獲される。

強靭な脚力で胴を挟み込まれて地面に叩きつけられるホッパー1。  
「ぐううう」

いかに魔物といえどこれではたまらない。ふらついて立つ。ヴァルキリアに戻ったセーラがその懐にもぐりこむ。

左腕を水平に風ぐ。アクアフリーズで動きを止めた。

とどめの右のアップパーを繰り出そうとしたが

「姉上。危ない」

着地したホッパー2がその身を盾にして姉を守った。セーラを蹴り飛ばそうとしたが、とつさのこと故に目測を誤り姉を。

その姉は遠くに飛ばされてとどめの一撃を回避できたから結果的に守れたが、本人が無防備なところに右の一撃を食らった。

ともに不完全な攻撃だったものの明らかに動きの鈍くなるバツタ姉妹。

(このまま妹にとどめを刺したいけどまた邪魔が入るんじゃないかしら？ 二人同時に：そうだね。今なら)

セーラは素早く左のガントレットをたたきパワーファイターであるマーメイドフォームへと変身した。

そしてふらつくホッパー妹を担ぎ上げた。そのまま猛烈に回転を開始する。

本来は水中で渦潮を起こしてその中に敵を放り込み粉碎する技。

「トルネードボンバー」だ。

「させるか」

先に食らっていたため何とか回復した姉が妨害で飛び込んできた。しかしそれこそが狙い。その姉目掛けて妹を投げつけた。

「ぎゃっ」「ぐわっ」

鉢合わせになる姉妹。片方を盾ではなく「凶器」として使用した。姉妹は前の攻撃のダメージは消滅したが改めて叩きつけられて動けない。

その瞬間に右のガントレットを叩く。マーメイドでジャンプしていううちにヴァルキリアに変化。

そしてフェアリーで高く舞い上がる。

(奴らの十八番。高度を伴ったキック。これなら)

十分な高度をとり、そこからフェアリーのスピードで足から突っ込んでいく。

(いけない。フェアリーじゃ軽すぎてパワーが足りないわ。それなら)

既に心と肉体がシンクロしているせいか思っただけで変化が。

ふらふらしながらやっと立ち上がった姉妹の直前で、バランスのとれたヴァルキリアフォームに。

精神の高揚がセーラに思わず叫ばせていた。

「ヴァルキリイイイイイキイイイイツツクウウウ」

十分な高度を取りスピードの乗ったキックが姉妹に炸裂する。

吹っ飛ばされる二人。セーラ自身もこの場の思いつきで放った技ゆえか着地に失敗。

だが効果は抜群だった。皮肉にも自分たちの必殺技がとどめになったホッパー姉妹。

立つことも出来ない。しかし這い上がりながら前へと進む。

「ま…まだやる気？」

立ち上がっていたセーラだがさすがにげんなりしてきた。しかし両者はセーラのことなど目にはいつていない。

ただひたすらお互いだけを目指している。

「あ…姉上…」

「妹よ…」

既に闘志はない。死を受け入れた表情に見える。

二人は消え行く命の炎を燃やして歩み寄り、そして抱き締めあった。

「これまでずっと二人だった」

「そして死ぬときも同じ」

「ふふ。悪くない。礼を言うぞセーラ」

どちらが先でもなく同時に爆発して果てた。残されたのは女性へと変えられた飛田兄弟…もはや姉妹。

爆発した衝撃があるのに、人間の体に復元された時は互いの手がしっかりと握り締められていた。

「なんでよ!」

セーラは激しい衝動を受けた。

「そんな肉親を思う気持ちがあるなら…そんな優しい気持ちがあるのに…どうして侵略戦争なんて起こしたのよ!」

憤りのままに叫ぶ。

「セーラ様…」

黒猫の姿に戻ったキャロルがつぶやく。

「その優しさと思いやりを他者にも向けていれば…あんな化け物として死なずに済んだらうに…人として生きられたでしょうに」

勝利したのにどうしようもないやるせなさの残るセーラだった。

数日後。

福真高校の女子制服であるセーラー服。真新しいそれに身を包んだ飛田が登校してきた。

既に何人かが同様の状態にあるとはいえどやはり注目されてしま

そんな中を堂々と歩いていった。

髪はストリートロング。それを切り揃えて美しく。

女物のメガネをしている姿は頭脳派を印象付ける。

それでいて雰囲気の柔らかい女性的な笑み。それを廊下で清良に投げかける。

「お前：飛田か？ もう体はいいのか」

「おかげ様で。再生されると女性化するけど、その際に悪いところも修復されるらしい。むしろ以前より健康ですよ」

これもいつものことだが取り付かれていたものが正気に戻ると、同時にいつさいの邪気がなくなる。だから皮肉の意図はない。

「その割にはメガネが？」

「ああ。ずっとつけていたからないと落ち着かなくて。伊達ですよ」  
柔らかい声で言う。時折笑みを浮かべて女性的に見える。

「天罰が下ったんでしょう。肉親といがみ合っていた僕：わたしにでも：肩の荷が下りた気がします」

女になったということとで跡継ぎの話は白紙撤回。プレッシャーから解放されたのだ。

「今の私はただの女。飛田翔子です。それに：もう一つ。あの怪人たちの置き土産が」

「アマッドネスの置き土産？」

そんなものが？ 清良は怪訝な表情をした。

まるでタイミングを計るように外から声がする。

「お姉さまーっ」

「あら？ 良子？」

（良子？ お姉さま？ と言うことは…）

予想自体は的中していた。やはり女性化した飛田良二改め良子だった。

ただ制服のブレザーを清楚に着こなし、スカートを風に遊ばせ、長い髪を整え柔らかい笑みを浮かべるその少女が「元・不良男子」

とは結びつかなかった。

「良子？ 大丈夫なの。退院したばかりでしょ？」

翔子と清良は良子の待つ校門に出向いた。

「それならお姉さまだって。あたしもう心配で」

（ちよ…ちよつと待て。今までも女になった奴はいたがここまでギヤップの激しい奴は珍しいぞ。「お姉さま」って）

軽く眩暈のする清良。それに向かって頭を下げる良子。

「高岩さん。あたしが男のときは本当にご迷惑をおかけしました。

ごめんなさい」

それがますます清良をくらくらさせる。

「あたし馬鹿でした。『兄』を憎んで世を憎んで。でもその『良二』は死にました。今のあたしは素直に姉を慕えます。だって…同じ境遇の二人なんですもの」

鬱屈した感情ゆえに不良となっていた。それがアマッドネスを倒した時に同時に取り払われた。

その反動でここまでなったのだろうかと清良は考えた。

「良子。一緒に帰りましょう」

「ええ。お姉さま」

二人は仲良く幼子のように手をつないで帰途に着く。

その際に翔子は「わかつている」とばかりにウインクする。正体を口外しないと言う意味に清良は取った。

「雨降って地固まる…か。これがアマッドネスの姉妹の置き土産か…それも良いな」

二人をみていてすがすがしい気分になった清良であった。そして（キャラル。これからもああいっう連係プレーをしてくる奴らが出てくるだろうな）

頭の中で遠くにいるであろう従者に呼びかける。

（はい。姉妹だと体質ゆえか同じ能力を取り込むことも考えられません。第2のホッパーたちが現れても不思議はありません）

（そっか…）



短く応えて黙考。そして決意した。

(キャラル。俺もちょっと逢っただけあって見るよ。ブレイザとかジヤンスにな)

それは一人の戦いの限界を感じた故の発言かもしれないと、キャラルは感じていた。

## EPISODE 10 「姉妹」 (後書き)

### 次回予告

「キャラル。前の鬪いの時のセーラ。ブレイザ。ジャンスは同胞で親友だったかもしれないが、俺はその伊藤礼いとつれいと言う奴はまったく知らないんだよ」

「釜本とか言ったかな？ それで何を切るんだ？ リンゴか」

「決まってるだろ。副会長様の心臓だよ」

「ふんつ。やはり憑かれたか。ちよつと隙を見せると簡単に乗ってくるよな」

「変身」

「剣の戦乙女！ ブレイザ」

EPISODE 11 「自尊」

## EPISODE 11 「自尊」

清良が覚醒するより早く戦場と化していた王真市。

そこに存在する王真高校に続く道。その人気のないところで一人の少年が三人の少年に道を阻まれていた。

「数をそろえれば勝てると思ったか？」

ブレザー。黒いスラックスの少年。オールバックゆえに年齢より上に見える。

行く手を阻まれた少年は小ばかにしたように笑う。

三人のガクランの少年は意思のない瞳をしていたが、憎悪に近い光をたたえて異形の女へと姿を変える。

小柄な少年。三条はつばめによく似たそれに。

大柄な少年。亀井は名の通り陸ガメの異形に。

二人の中間くらいの少年。鹿島は小さな角の鹿の怪人へと。

「アマッドネスに魂を売り渡したか。だが貴様らザコでは話にならん」

ブレザーの少年は右腕を肩の高さで突き出し、同時に左手をへその位置に。

すると光の渦が発生。中から「刀」のつかが出現。それを引き抜き持ち替えて左の腰だめに。

瞬時に右手をつかにかける。

「変身」

刀を抜いた。その瞬間の隙を狙ってスワロー。タートル。ガゼルのアマッドネスたちは襲い掛かる。

スワローアマッドネスは高々と舞い上がり高速を生かして襲い掛かる。

タートルアマッドネスは強固な甲羅で防御に自信があるので、怖

れず立ち向かう。

そして身の軽さで攻め立てるガゼル。

だが変身したブレザーの少女に小太刀で簡単に遮られる。

「キャストオフ」

さすがに3体相手ゆえに早くも攻撃重視の姿に。

小太刀が変化した通常サイズの刀でガゼルに一太刀を浴びせる。

そのままタートルの甲羅に守られていない部分を斬りつけ怯ませる。

「超変身」

姿を変えた。目にも留まらぬ速さのスワローアマッドネスがそれに迫る。

だが微動だにしない。

すれ違う刹那。刀を抜いて一閃。ぐるりと回して円を描く。

それがスワローの首。そして足を断ち切る。文字通りの「つばめ返し」だ。

そのままタートルに迫る。とっさに甲羅に首と手足を引っ込めて守りに入るタートル。

少女剣士は再び姿を変えた。刀も巨大なそれに。

それを大上段に振り上げ、一気に力任せに甲羅ごと叩き切る。

さらにキャストオフ直後の姿。ヴァルキリアフォームへと戻ると、カゼルアマッドネスに続け様の剣撃。

存分に斬りつけると、血を払うように一振り。

刀を鞘に収めた瞬間に三体のアマッドネスは爆発した。

少女剣士はその姿のままつぶやく。

「貴様ら如きにこの剣の戦乙女。ブレイザを討ち果たせるものか」

EPISODE 11 「自尊」

翌日。学校が終わってから清良は王真高校へとキャロル・バイクモードで出向いていた。

当初は黒猫の姿のまま道案内だけさせるつもりだったが、有事の際に側にいた方がよいのと、直接運んでしまった方が手っ取り早く清良をその背中に乗せた。

学校が見えてとところで停車。他校生がバイクで乗り付けてはトラブルが起きないほうがおかしい。

ましてや何かと突っ掛かってくる相手の多い清良の見てくれもある。

ノーヘルで走っていて警察まで相手にする羽目になった経験から、きちんとヘルメットを着用している。

フルフェイスヘルメット。その口元の部分を外して彼はつぶやく。「ここか」

被っていたヘルメットを脱いでバイクの上に置くと、それが一瞬にしてバイクと同化する。

キャロルが自分の一部を分離してヘルメットにしていたのである。だから市販されているものより軽くて強い。視界も広く確保されている。

「あの……セーラ様？ ブレイザ様も何かとお忙しくていわゆる『アポなし』ではあえるまで時間が掛かると思いますが」

「アポなしの方がいいんだよ。初めから俺が行くとわかっていれば身構えるだろうからな」

またがっていたバイクから降りる。

「しかしそんな試すようなマネを」

キャロルも瞬間的に黒猫の姿に。

一人での戦いに限界を感じた清良は仲間を欲した。

せめて情報交換。そして同じ身の上の相手を見たかった。

「キャロル。前の鬪いの時のセーラ。ブレイザ。ジャンスは同胞で親友だったかもしれないが、俺はその伊藤礼いとうれいと言う奴はまったく知らないんだよ」

伊藤礼。それがブレイザの普段の姿の時の名前。

清良同様に男として生を受け、その名と性別で高校二年まで生きてきた。

「だから素の状態を見たい。仲間にするかどうかはそれから決める。大体キャロル。お前何か隠してないか？ ジャンスとあうのを止めていたが」

「そ……それはおいおい。ところでセーラ様。それならどうやって？」

「決まっている。このまま乗り込む」

大またで歩き出す清良をキャロルが慌てて止める。

「そんなことをしたらそれこそトラブルの元ですよっ」

「だからいいんだよ。怒ればそれだけ素の状態が見える。どんな奴

か良くわかる。お前の話じゃ一年のときから生徒会の副会長をしているそうじゃないか。そんな奴ならケンカ売りにきた奴にも対応するだろ」

「印象をいきなり悪くしてどうするんですっ？」

「じゃどうすんだよ？」

「そうですねえ」

どうも初めから別案があったらしい。

それを提案された清良は苦虫を噛み潰した表情になるが、その方がより伊藤礼を観察できると考えて、嫌々ながら案を受け入れた。

物陰に隠れていつもより素早くポーズを取る。

「変身」

声もはるかに小さい。一瞬にしてセーラー服姿の美少女に。

「それから」

その容姿に相応しい可愛らしい声でつぶやくと、セーラは下校している女子生徒たちを観察した。

意識をこめる。福真高校の女子制服に似たセーラー服が、王真高校の女子制服のブレザーに変化する。

エンジェルフォームの時は衣類を自在に変えられるのを利用して変化させた。

ガントレットも目立たないリストバンドに変化させ、さらに袖に隠れる。

「どうだ？」

「はい。とつてもお似合いです。セーラ様」

「違うよ。間違いないかと聞いてるんだ？」

「問題ありません。その姿なら校内に紛れ込めます」

「下校する連中ばかりなのにわざわざ戻る女もいるかって気はするが……」

「普段のお姿。しかも他校の制服で乗り込むよりはよほど目立ちませんよ」

「それもそうか」

「私は校内に入ると目立つので外から念話でサポートしますが」

「ああ。じっくり観察するさ」

作戦遂行。セーラは王真高校へと歩き出す。

校内に入ったら女子生徒のふりをして「副会長はどこ？」と尋ねて探すつもりだったが当てが外れた。

手間が省けたというべきか。

何しろ当の本人が校門の前にいた。

身長は高い。恐らくは180はあるだろう。

細身で細面。歳に似合わぬオールバック。だがそれが知的な印象を醸し出している。

しかしたたえた笑みがいささか小ばかにした印象があるのは性格なのか。

服装は当たり前だが制服であるブレザー姿。

まだ春先と言うこともありワイシャツの上からベストを着込んでいる。

その上から濃紺のジャケットを着ている。スラックスは黒。革靴。服装はオーソドックスだが手にした木刀が異様な印象を与える。

だがそれもやむなしと言うことは理解できる。

なにしろナイフを手にした暴漢が相手なのだから。

「釜本とか言ったかな？ それで何を切るんだ？ リンゴか」

皮肉のたっぷりこもった一言。遠巻きに見ている生徒たちが笑う。釜本と呼ばれた男はやはり学生服。病的に細身の男。人相も悪い。

「決まってるんだろ。副会長様の心臓だよ」

先に暴漢が「切れた」。脅しではなく本気で心臓をえぐるべく襲い掛かる。

「やばい」



瞬間的にセーラは変装をとりてエンジェルフォームで止めに入る  
うとする。

だが無用だった。

振りかざしたナイフを礼は正確に右手首を叩いて落した。

比較的華奢な手首を振り下ろしたところに振り上げた木刀が直撃  
してはたまらない。

「うぎゃああーつつつつ」

悲鳴を上げる。だが容赦なく次の攻撃。胸のど真ん中を木刀で突  
く。

「がはっ」

上体を突かれた為にそのままのけぞって後方に倒れる。哀れにも  
白目をむいて気絶する。

その途端に歓声が沸きあがる。彼がこの高校でのヒーローである  
ことを示している。

(す………すげえ)

セーラは素直に感心した。だがなんとなく礼を好きになれそうも  
ないのも感じていた。

「ふん。返り討ちにされ続けて逆恨み。単身乗り込んできた度胸は  
褒めてやるが、大方は部下にも愛想をつかされたのだろう」

死者に鞭打つという一言。そういう部分が原因だろう。

彼は木刀を自分の足に寄りかからせると、ポケットからウェット  
ティッシュを取り出して丁寧に手をふき始めた。

直接触れていないのにやるところを見ると相当な潔癖症だ。嫌味  
なほどに。

「剣道部の助っ人がある。後始末は任せるよ」

彼は踵を返して校内へと。セーラもこっそりと後をつける。

そこから後の「大活躍」はセーラもあきれ果てた。

剣道部の試合では大将に座り、敵の先鋒に副将までが破れたところ  
から、逆に五人抜きをしてのけた。

それから急いで着替えて野球部の助っ人。  
代打ホームランを決めると交代して、軽音楽部の校内ライブに  
曲だけ参加。

見事なギターテクニクを披露。  
果ては漫画研究会の同人誌に（さすがに事前に製作だが）プロ級  
のイラストを提供する。

（ああいう人を完璧超人って言うのね）  
既に女性化してしまったたていたのもあり、女の目で見ていたセー  
ラの評価である。

縛られて警察に引き渡すのをまっていた釜本。  
だがそこにアマッドネス。ティスの魂が。

「かはっ」  
びくつと痙攣する。一同が注目する中で釜本が変化する。  
よどんだ目が巨大な複眼へと変化する。

頭の形も逆三角形に。  
元々細身だったが、さらに細く。  
女性のシンボルと言つべき大きな胸が盛り上がる。

「ば…化け物」  
監視していた生徒もさすがに逃げ出す。

釜本：マンティスアマッドネスは強力で戒めを振りほどいて校内  
へ。

「その君。見かけない顔だが、どうして俺を付回す？」  
人気のない廊下で背中を向けたままセーラに声をかける礼。  
（いけない。ばれてたんだわ）

逃げようかとも思ったがむしる人間性を見るにはちょうどよい。  
そのまま対応する。

「あはっ。ごめんさなあい。あたし、会長のファンなんですっ」  
自分でビククリするほどの「ぶりっ子」。

普段の反動か。セーラは女性の精神になると過剰に可愛らしく振舞うところがある。

「あ。ごめんなさい。副会長でした」

「大した問題じゃない。いずれは生徒会長にもなるからな。俺が落ちるはずもない」

（うつわー。自尊心の塊。あまり好きになれないタイプだわ）

完全に女性化しているのか「タイプ」とまで考えるセーラ。

「それより君。俺のファンか。それなら」

瞬時に距離を詰め左腕でセーラの華奢な腰を抱き寄せる。

そして右手でそのあごをひよいと持ち上げる。

「俺とこうなりたいと思っていたんじゃないか？」

（あ…ああ…）

いい男に間近で色気のある声でささやかれ、セーラの中の「オンナ」が大きくなる。抵抗できない。

礼の唇が近寄ってくる、女としてのメカニズムで自然と目を開けていられなくなる。

（だ…だめ…あたしは…）

女としてキスをしてしまうのは清良としてのアイデンティティの崩壊になりそうな気がしていた。

救いは意外なところからきた。

「伊藤ーつつつつ」

どうやら校門からジャンプして窓を突き破り教室に。

そして手当たり次第に探すつもりで扉を切り裂いて出てきた。

「ふんっ。やはり憑かれたか。ちよつと隙を見せると簡単に乗ってくるよな」

言うなり「囹」としていたセーラを「安全地帯」に突き飛ばす。

そして左手をへその前に。右手は肩の高さで前方にまっすぐと。

礼はへその前に出現した光の渦から出現したつかを取ると引き抜く。

そのままマンティスマッドネスの攻撃に対して弾くように振る。意外に強力な一撃で弾かれるカマキリ女。その隙に手にした小太刀を持ち替えて腰ために突き出していた右手をつかひかけ

「変身」

声と同時に抜くと光り輝く刀身が。その眩い光の中で礼が変わる。

精悍な顔が美女のそれに。

オールバックの黒髪がブロンドのロングヘアに。

縦ロールまであるせいか「お嬢様」の印象だ。

プロポーシヨンも変わるのだが身長と比較すると胸元は若干寂しい。

左前だったブレザーが女子用の右前のものに。

ネクタイがリボンに変化。

ストラップスがどんどん短くなり融合。赤いプリーツスカートへと変化する。

革靴がローファーに変化していた。

変身を完了した彼女は剣を高々と掲げ上げて名乗りをあげる。

「剣の戦乙女！ ブレイザ」

## EPISODE 11 「自尊」 (後書き)

### 次回予告

「お前が俺にほれば利用しやすくなる。前線タイプだからな。『盾』なり『矛』なり使い道はある」

「……こんな奴らじゃ物足りねえ。伊藤。やはりあの野郎を切りた  
い…伊藤おおおおおつ」

「高岩。そこでよく見ている。貴様と俺の実力の違いをな」

『剣撃乱舞』 (スラッシュダンス)

EPISODE 12 「剣士」

## EPISODE 12「剣士」

王真高校生徒会副会長・伊藤礼は、金色の髪を持つ優雅なる少女剣士。ブレイザへと姿を変えた。

「さあ。どうした」

小太刀を突き出して挑発する。

わざわざ間合いを教えるのだ。これは挑発以外の何物でもない。

それに乗せられたのかマンティスアマッドネスは、威嚇するように両手を挙げる。

肘から先の腕が、肘の部分から割れる。

本来なら手首に当る部分で繋がっている。割れた部分はまさに力マキリの腕そのものだ。

「ふん。アマッドネスの中でもさらに化け物じみているな」

挑発と言うより単純な感想か。

マンティスアマッドネスは高々と振り上げた腕を二本同時に振り下ろす。

「ふんっ」

それを小太刀で素早く敵の腹を薙ぐ事で防御した。

(いけない)

すっかり乙女モードになっていたセーラだが、戦闘となると目つきが変わる。

服装こそ未だ王真高校女子制服だが、瞬時に紅と蒼のガントレットを出現させる。

慌てたのはマンティスアマッドネス。

「な…何？ そのガントレットはセーラか？ どうしてここに？」

「なんだ？ 今頃になって気がついたのか」

クールに言い放つブレイザの台詞はセーラにも衝撃を与えた。

「ぎぎ。いくらなんでも戦乙女を二人同時に相手に出来ん。出直すまでだ」

負傷もある。マンティスは飛び込んできた窓から外に出て逃走した。

「ちつ。案外逃げ足が速かったか。まあいい。どうせまた来る。そのときにな」

さほど悔しくもなさそうに言うブレイザ。

それに詰め寄るセーラ。

「さっきの台詞。どういうこと？ あたしがあなたと同じ戦乙女とわかっていたということ？ それでいながらキスを迫ったというの？」

セーラとブレイザ。最悪の出会い…否。「再会」だった。

## EPISODE 12 「剣士」

「決まっているじゃないか」

ブレイザはあつと言う間にもとの男子高校生の姿に戻る。

セーラはだいぶ時間が経ち今は女の心に。だから女子の服のままだ。

「お前が俺にほれれば利用しやすくなる。前線タイプだからな。」

盾』なり『矛』なり使い道はある」

「な？」

セーラは絶句した。

「そ…そんなことのために乙女の純情を弄んだって言うの？」

すっかり女になりきっている。傍目に見ると痴話げんか。

長身の礼を下から上目遣いで睨む可愛い顔などまさに女のそれ。

「世の中には2タイプの人間がいる」

よくあるせりふである。

「俺が使える人間と、そうでない奴だ。後のほうには『敵』も含まれる。お前もそっちに回るか？ 使えないほうに」

ふたたびセーラのおごを持ち上げる礼。

「それとも…愛されるのを代償に俺に尽くすか？」

どうやら品行方正な生徒会副会長と言う顔と裏腹に、女の子の扱いは心得ているらしい。

同時に「戦乙女」達が時間経過と共に心まで女性化するのも理解している。

だからこそあくまで「女」として扱い、そして利用しようとしている。

セーラは瞬間的に頬が熱くなり、照れと怒りの混じった複雑な感情に見舞われる。

「ばかあっ」

平手を見舞う。いくらエンジェルフォーム。そして変装用に通常とは違う姿と言えど変身しているのだ。

同じ戦乙女といえど変身前の礼はかわせずまともに食らう。小気味よい音を立てて「ピンタ」が炸裂する。

「それが返事か？」

ゆらりと鬼気迫る表情の礼。

叩かれたことで戦闘意欲が沸いたのか「儀式」である変身ポーズ抜きでブレイザに姿を変える。

「女の敵！」



セーラも本来のセーラー服風の戦闘服に。

セーラー服とブレザーの美少女同士の対峙。一触即発だったが何をしているんですか？ セーラ様？ ブレイザ様？」

さすがに怒気を孕んだキャロルの言葉。

アマッドネス出現で駆けつけてきていたのだ。

「邪魔が入ったか」

ブレイザは男の姿に戻る。紅くなっていた頬は一度変身したことでダメージがなくなっていた。

「……………」

女の目をしてセーラは怒る。

「帰るわよ。キャロル」

従者に告げるとつかつかと歩き出す。

「ま…まってくださいよ。セーラ様」

怒りのオーラを撒き散らすセーラを必死で追いかける黒猫だった。

「まったく。なんて奴なのかしら」

すっかり女モードのセーラは、女としての怒りを抱いていた。

「キャロル。本当にあんなのが『聖なる戦乙女』だったって言うの？」

「はい。ですが…かつてのブレイザ様は高潔でプライドの高いお方ではありましたが、それだけに手段は選ぶ方でした。いくら転生を繰り返したといえど、かつての同胞を唇を奪ってしもべにしようなんて考えは…」

だがここでキャロルは考えた。そしてそれを素直に口にした。

「しかしセーラ様。それを仰るならセーラ様もお変わりになられます。かつてのセーラ様は闘志を前に出しはしても、喧嘩っ早くはありませんでした」

これは高岩清良のそれを指している。

「何万年も転生してりゃ性格だって変わるわよ。アイツもきつとそうなんですよ」

納得したのかさばさばと。だが一転して怒りが蘇える。この感情の急転は「女」そのものだ。

「それにしても腹が立つわ。やけ食いよ。キャロル。パフェ食べに行くわよ。『女同士』付き合いなさい」

「猫の姿で飲食店に入れませんよ。それにたしか甘いものは御嫌いだったのでは？」

清良はそう告げたことがある。

「男のときはパフェなんてかつこ悪くて食べられないけど、今は女の子だもん。おかしくないわよ。パフェよりケーキバイキングがいかな」

どうやら本来は嫌いじゃないが、体裁が悪いので嫌いなふりをしていたらしい。

（甘いものだけで機嫌が直るなら……しかしこれはこれで明日の朝が……）

見事に女性化しているのを見てキャロルはため息をついた。

翌朝。案の定ふとんから出てこない清良である。

（ああ。やつぱり）

予想していたものの主の態度にため息の従者。

「あの……セーラ様？」

「うるせえっ。ああ。恥ずかしい。今までも女になりきったのはあったが、キスを迫られ女っぽく怒り、拳句の果てにパフェのやけ食いだなんて……」

そりゃ恥じ入りもするか。さすがにキャロルも同情する。

それでも何とか説得して登校にはこぎつけた。

ただしそれは礼に対して報復したい気持ちが入った故に成立した話。

そう。放課後に再び乗り込むつもりだった。

繁華街。当て所もなくさまよう釜本。

見た目からして「悪そう」な彼である。

普通の人々は彼を避け、悪い奴らは突っ掛かる。

だがふらふらと焦点の定まらない瞳で夢遊病者のようにさまよう彼はひたすら不気味であった。

だからか「悪い奴ら」ですら無視に掛かっていた。

いかにもの奴らが三人。釜本とすれ違う。

ほんの一瞬。釜本の両腕が動いた。

まるで居合いの達人のような速さである。

何事もなかったかのような三人の不良。

その背中に釜本は語りかける。

「振り向くな！」

「あ？」

無視した相手だが「変なこと」を言われたので注意する。

だがその途端に三者同時に胸板から血を吹いた。

ぱっくりと大きな傷が開いていた。

「え？」

痛みもない。それほど鋭利に切られていた。しかも三人同時に。

「きゃあああつ」

通りすがりのOLらしい女性が悲鳴を上げる。突然の凶行にその場はパニックに陥る。逃げ惑う歩行者。

切られた三人は失血死確実と思われたが血が止まった。

切られた傷から肉が盛り上がり塞ぐ。

それどころか豊かなバストへと変貌する。

アマッドネスの被害者の例に漏れず三人も奴隷としての女性に変化した。

「……こんな奴らじゃ物足りねえ。伊藤。やはりあの野郎を切りた  
い……伊藤おおおおおつ」

その異常な「切ること」に対する執着に目をつけられて、人間で

なくなった現代日本の切り裂きジャック。  
彼は礼のいるであろう王真高校へと走り出す。

その王真高校では校門の前で大柄な不良生徒を生徒会副会長が迎え撃っていた。

この高校では恒例の光景を遠巻きに見ている生徒たち。

その注目の中で芝居のように伊藤礼が口を開く。

「君は……初めて見る顔だな？」

疑問形なのはどことなく「雰囲気」に覚えがあるからだ。

「ああ。この『高岩清良』の姿じゃ確かにな」

不良男子…清良は鬼ですら逃げそうな笑みを浮かべる。

そして右手を突き出して見せる。既に不死鳥を象った真紅のガンレットが具現化している。

「……なるほど。高岩といったか。君がそうだったのか。雰囲気でわかったがとんでもない姿のギャップだな」

「また唇を狙われちゃたまらねえからな」

清良としては素直に口にしたただけだが

「唇？」

「男同士で」

「副会長。そんな趣味が……」

清良のこの発言に八割が引き、二割が喜ぶ（90%は女子）

「それで…今度は何をしに来たんだい？ 一人じゃ手に負えなくなつたから助けて欲しいとでも？」

この発言は凶星だけにカチンと来た。

どことなく…否。間違いなく見下ろした態度。

確かにプライドは高そうだ。そしてどうやら好きになれそうもない。清良がそう結論付けた時だ。

「伊藤おおおおおつ」

釜本が再び現れた。

走りながらマンティスマッドネスへと変身する。

「怪人」の出現に悲鳴を上げて逃げ惑う王真高校の生徒たち。もちろん礼。そして清良はそんなことはない。

だが戦おうにもこの場はまずい。

前日の人気のない廊下ならまだしも、ここでは多数の目がある。(くそつ。こいつらが全部逃げるか、アマッドネスをどこかに連れ出さないかと戦えない)

しかしさすがに『フランチャイズ』の伊藤。この辺りの地理も知り尽くしている。

だから連れ出す先も心当たりがある。問題はその誘導手段だが：

「ドーベル」

礼は彼の従者を呼び寄せる。

名前の通りドーベルマンの姿をした従者は、走りながら一台のサイドカーへと変化した。

単車の右側にサイドカーがある。黒と言うか濃い紫のサイドカー。それはマンティスアマッドネスを跳ね飛ばす。

したたかにダメージを受けた怪人をサイドカー部分に無理やり乗せた。

無数の鉄格子が出現して逃亡も攻撃も防ぐ。

そして礼も単車部分にまたがりどこかへと走り去る。

「追っぞ」

清良もキャロルに言う。

「はい」

十分に理解しているので黒猫もオートバイへと姿を変える。

礼達を追っていく。

マンティスアマッドネスに乗せて走るドーベル・サイドカーモーター。

それが止まったのは河川敷。

急停車して怪人を前方に投げ出す。

「ぐわっ」

だみ声の悲鳴を上げて放り出される。礼はゆっくりと降りる。そして清良も駆けつけた。

役者が揃ったのを見て礼は言う。

「高岩。そこでよく見ている。貴様と俺の実力の違いをな」

マンティスアマッドネスは投げ出されてやっと立ち上がり始めたばかり。

その間に礼も戦闘体制に変わる「儀式」を。

右手を肩の高さで前方に突き出し、左手をへその位置に運ぶ。

へその前に光の渦が現れる。そこから「つか」が出現。それを引き抜く。

持ち替えて左の腰に。右手もつかにかける。抜刀術の体勢になる。

「変身」

言うなり刀を抜く。

小太刀が眩く輝くと礼の姿が少女剣士へと変貌していく。

ワイシャツはブラウスに。ブレザーは左前から右前のそれに。

ズボンが融合して短くなりスカートへと。

全体的に華奢な体躯に。胸元は薄い。

優しい女の顔に。同時に金髪の縦ロールへと髪も変わる。

肉体的には完全に女である。

変身が完了した彼は…彼女は宣言する。

「剣の戦乙女！ ブレイザ」

さすがにマンティスも立ち上がり襲い掛かる。

今度は右腕だけの攻撃。左腕はガードに徹している。

「ふん。そこまで馬鹿でもなかったか」

変身しても上から見下す態度は変わらない。

だがそれはポーズとも取れる。

右腕一本だが意外に素早い。

前回は肉体が馴染みきつてなかったということか。時間経過で段違いに動きがよくなっていた。

「やばいな」

援軍を求めてきた清良は、逆に加勢すべく変身する。

「高岩。いや。セーラ。そこで見ていると言ったはずだ！」

甲高い女声で叫ぶブレイザ。どことなく高飛車なお嬢様と言う印象の声。

「くっ」

セーラ自身相手が一体でこちらが二人と言うのに抵抗があった。それゆえぎりぎりまで手を出さないことにした。身を守るための変身になった。

実力に絶対の自信を持つ彼女は、加勢を拒んだ。

しかし意外に攻めあぐねる。

ガードが思ったより固いのだ。

「仕方ないな。それじゃ」

攻めていたが動きを止める。再び抜刀術の体制に。わなか？

そう思うマンティスマッドネスだが、素体となった釜本の礼への怨念が動かしした。

ガードにまわしていた手も振り上げて切りかかる。

「キャストオフ」

女子ブレザーが散り散りに吹っ飛び、マンティスマッドネスを吹っ飛ばす。

ブレザー。スクールブラウスの下にも着込んでいたというのだろうか。

剣士らしい和装である。

下もたたんでスカートに隠していたのか袴である。

金髪縦ロールと言うのが恐ろしく違和感。

それほど見事な和装。剣士姿であった。

武器も日本刀へと変化。

それがブレイザ・ヴァルキリアフォームだった。

セーラー服の少女は呆然とつぶやく。

「なんでアイツは体操着じゃないんだ？」

「セーラ様は肉弾戦タイプですからね。それゆえに動きやすさであるの服をイメージなさいました。ですがブレイザ様は元々が剣士」

「なるほど。アイツのイメージじゃ剣を振るうならこの姿と言つてとか」

吹っ飛ばされたマンティスマッドネスはやつと立ち上がるが、そのときにはもうブレイザが攻撃態勢に入っていた。

切先を肩に入れる。

「ぎゃああああっ」

激痛に悲鳴を上げるカマキリ女。

それを無視してもう片方の肩に小さな動きで素早く傷をつけるブレイザ。

セーラがヴァルキリアフォームになったときと同様に、こちらも運動性能が格段に向上していた。

素早く、そして正確だ。

マンティスマッドネスにゆらりと迫るブレイザ。

一方腕が上がらず攻撃を封じられたマンティスマッドネス。勝負はあった。

「た…助けて。もう人は襲わない。あなたにも手を出さない。どこかでひっそりと暮らすから…」

命乞いである。



ブレイザはそれを無視して右上に刀を振り上げ、そして一刀両断。斜めに振り下ろす。

「ぎゃあああああっ」

袈裟切りにされて悶絶するマンティス。

そのまま振り下ろした位置から横に尻ぐ。

さらにそのまま反対の肩口へと切り上げる。

大上段から真つ二つ。唐竹割。

とどめとばかりに胸に深々と突き刺す。それを一瞬と云っていいスピードでやってのけた。

『剣撃乱舞』

(スラツシュダンス)

深く刺さった剣を引き抜く。そのまま背中を向けて歩き出すブレイザ。

結果など見るまでもないと言っことか。

マンティスはもう立っている力もなく、膝を折る。

ブレイザは刀を一振りして血を振り払い、鞘に収める。

それと同時にマンティスは倒れ、爆発を起こした。

不健康に細い全裸の少女。それがアマッドネスから解放された釜本の今の姿。

「ふん。女になってしまえばもう付きまとはくるまい」

いくら凶行を繰り返したといえど、こいつも取り付かれたあげく女になった。

仮にも「犠牲者」に対して言う台詞ではない…セーラはそう思った。

余裕の笑みのブレイザと、睨みつけるセーラ。

「なにか文句でもあるのかい？」

「ああ。いくらなんでもむごくないか？」

「ふっ」

鼻で笑うブレイザ。これはまともにセーラの怒りに火をつける。

「随分と優しいな。遠慮していたら死ぬのは自分だというのに」

「だがもうケリはついていただろう。あそこまでやる必要は」

「甘いな。俺たち戦乙女はアマツドネスにとっては鬼でなくてはいけない。姿を見ただけで震え上がるほどにな。だからなるべくむごたらしく倒す。それが俺のやり方だ」

「な？」

呆気にとられていたら、ブレイザは元の姿に戻りサイドカーにまたがってさっすいていく。

セーラも男の姿に戻り、その走り去った方向を見ていた。

(俺…アイツとは絶対にうまくやれない気がする…)

清良本人がそんなことを思うほど、相性の悪い両雄であった。

## EPISODE 12 「剣士」 (後書き)

### 次回予告

「とりあえず例の『変身美少女』というのにあって見たいわね」

「いいえ。僕の一存です。お願いします。高岩さん。副会長はずっと一人で戦ってきたんです。同じ戦乙女として、ぜひ助けてあげて……」

「レイ。君は優秀な教え子だ。だがそんな風に他者を見下すのは悪い癖だ」

「なぜ……あなたが……」

## EPISODE 13 「恩師」

## EPISODE 13 「恩師」

警視庁。

アマツドネスの被害者に接触することの多かった一城薫子は、そのままこの事件の特捜班に加入していた。

「とりあえず例の『変身美少女』というのにあって見たいわね」

「……それ、本気で信じているんですか？」

後輩の男性刑事が胡散臭そうに尋ねてくる。

「化け物がいて、それを倒す子がいるのは事実でしょ？ 少なくとも男があつと言う間に女に変わるなんて現実ではありえないし。常識と言うのを捨てて掛かった方がいい事件みたいね」

「それにしてもどうやって探すんです」

「バイクね」

「バイク？」

「白バイ隊員が見たという変身の現場。バイクもちよつと変わったデザインだったみたいだし。カスタムしているならバイクショップから繋がるかもしれないわ」

「つまりそのバイクの特徴を聞きに？」

「そういうこと。ナンバープレートがなくて、陸運局に問い合わせようがないんじゃない、違法改造の線かもしれないけどね」

薫子は器用にウインクして見せた。

薫子が探すバイク：キャロルが走る。

特撮のスーパーヒーローが駆るようなデザインのカウル。

爆音を上げているがこれは偽装。

ガソリンを使って走っているわけではない。魔力でタイヤを回転させている。

しかし無音のバイクというのも不審に思われるので、あえてノイズを発生させていた。

目的の建物。伊藤礼の通う高校が見えてきた。そのまま王真高校へと入っていく。

やはりカモフラージュで駐輪場に。

人気のないのを確認してからキャロルは黒猫の姿に変化した。

「また、ここに来るとはな」

苦々しくつぶやく清良。

「いいじゃないですか。あんなに頼まれてましたし」

「確かにな。ほっといたら土下座しかねなかったぜ」

前日の話である。

珍しく何のトラブルもない…つまりアマッドネスも出現しなかった一日を終えて、清良が下校しようとした時だ。

「高岩せいらさんですね？」

びく。清良のこめかみに血管が浮き上がる。

次の瞬間には呼びかけた少年の胸倉をつかんでいた。

「俺をその名で呼ぶな。呼びたきゃ「キヨシ」と呼べ！」

鬼ですら逃げそうな形相である。名前は相当なコンプレックスのようだ。

「は…ハイ。高岩さん。すみません」

「……………わかりやいいんだよ」

納得したので手を離す清良。

頭に血が上ったのでよく見てなかったが、制服がまるで違う。ブレザーだ。

「お前、王真高の生徒か？」

「はい。もりもとかなめ森本要です」

まず170ないのは確実な身長。もしかしたら160ないかもしれない。

清良に対して敬語を用いたことから年下と推測。それでもまるで小学生のような童顔だった。

「それで。オレに何の用だ？」

「はい。副会長に協力していただきたくて、お願いに上がりました。九十度曲げていそうな一礼。深々と頭を下げる。

「王真の副会長……………あの伊藤のことか？」

清良の脳裏に苦々しい記憶が。

「あの野郎の差し金か？」

「いいえ。僕の一存です。お願いします。高岩さん。副会長はずっと一人で戦ってきたんです。同じ戦乙女として、ぜひ助けてあげて

……………

「バ、バカ野郎」

清良は慌てて口を塞ぐ。そして小声で言う。

「こんなところでそんなことを言うな。イタイ奴だと思われるぞ」  
もちろん秘中の秘だから黙らせたのは言うまでもない。

頷いたので手を離す。

「すみません。副会長があなたの心証を悪くしたと言うのなら、代わって僕が謝ります。だからどうか。せめて和解の話し合いだけでも」  
段々とエキサイトしてきて、それが周囲の注目を浴びる。

「わ、わかった。わかった。明日の放課後に出向いてやるから。それでいいだろ」

「あんなことを言うんじゃないやな。正直あの野郎と顔あわすのは気がすすまねえ」

「確かにブレイザ様も気位が高いお方ですが…それでも太古の戦ではセーラ様。ジャンス様と力をあわせて戦っていました。それがあのように拒むとは」

「俺のほうも願ひ下げだが」

「一体この転生を繰り返す間に何があつたのでしょうか？」

「さあな。『生まれる前』のことなんでわかんねーよ」

二人は校舎へと歩いていく。

それを校舎の窓から見ている人物がいた。

男女共にブレザーが制服の王真高校。いわゆるガクランの清良は目立つことこの上ない。

じろじろと不躰な視線を浴びせられていたが、救いが現れた。

「高岩さん。着てくれたんですね」

「おう。森本だっけ？」

会談を懇願しに来た少年が出迎えに来たのだ。それで「来客」と理解して、生徒たちは興味を失う。

生徒会室。

「誰かと思えば…なんの用だ？ お前の助けなぞ要らないと言った筈だが？」

いきなりこれである。さすがに清良もむっと来る。それに追い討

ちをかける伊藤。

「むろん俺もお前を助ける気はない。まあそっちのエリアで全部片付ける前に貴様が倒されたら、ついでに残りの奴ら片付けてやってもいいがな」

「副会長。そんなことをいわないでください」

「森本。お前の仕業か？」

背の高い伊藤が小柄な森本を上からにらむ。ますます小さくなる森本。

「おい。こいつはお前の心配をして、オレのところに来たんだぜ」

「それが余計だというんだ。お前が俺の意のままにならないなら、むしろ邪魔だ。消えろ」

「なんだと？ この……」

(セーラ様。落ち着いて)

校舎内では目立つので生徒会室に一番近い木に登り、そこに待機していたキャロルが窺める。

しかしそれも虚しく伊藤の方が挑発的にニヤニヤと笑う。

一触即発：だったが闖入者によってその場は収まる。

「ケンカはいかん」

中年の男性であった。

遅い体躯。顔の下半分を覆いつくす顎鬚。短いクセっ毛。そして、青い瞳。

「ドクトル・ゲーリング！」

伊藤の声が上ずる。そちらに驚いて清良は毒気を抜かれた。

「レイ。君は優秀な教え子だ。だがそんな風に他者を見下すのは悪い癖だ」

「はっ。申し訳ありません。以後気をつけます」

これにはもつと驚いた。

相手が年上。そして恐らくは教師といえど、この傲岸不遜な男が自分の非を認め頭を下げるとは。



「うむ。やはり君は優秀だ。ところで、君  
「オレ？」

「矛先が自分にむくとは考えてなかった清良。」

「あのライダーは君かね？」

「ライダー？」

（ライダーのことでは？ セーラ様）

「従者が助け舟を出す。」

「あ…ああ。確かにオレだけど」

「我が校はバイク通学は禁止している。外部の人間でもバイクでの来校は認めていない。次から気をつけたまえ」

「偽装であげていたエキゾーストノートがたたって目をつけられていた。」

「ブレザーが制服のこの高校でガクランが目立ったから簡単に居場所が特定できたのだろう。」

「む……」

「言葉に詰まる清良だが言い分は理解できる。」

「わかったよ」

「高岩。貴様は言葉遣いを知らないのか？ 目上の方には敬語を使え」

「半ば怒りを含んで伊藤が言う。これも言い分はわかるので改める。」

「申し訳ありません。気をつけます」

「うむ。君も理解が早い。優秀だ」

「満足したかのように彼は立ち去る。」

「どうやら目的はその注意だったようだ。」

「しかし意外だな。お前が敬語を使う相手がいるとはな」

「心底感心したように、そして若干の揶揄をこめて清良は礼に對して言う。」

「お前のような無頼漢と一緒にするな」

「返答はまさしく「伊藤礼」という印象のそれだ。」

「ドクトル・ゲーリングとか言ってたな？ 外人か」

「ドイツから来た物理の先生だ。日本文化に興味を持っておられてな。それが縁でウチの学校に来た」

饒舌な礼。清良は驚くが、森本は慣れているらしく微笑んでいるだけだ。

「随分と尊敬しているようだな」

「それに値する人物だ。本当の意味で頭が良く、高潔だが決して威圧的ではない。温厚で人間的にもすばらしい。あれはあの人から学問以外にも人としていろんなことを教わった。この世で唯一尊敬できる存在といってもいい。貴様のような野蛮人とは雲泥の差だ」

こういうものの言い方をする男。訛りのように仕方ないものと割り切るつもりだったが、清良には無理だった。

「悪いな。森本。やっぱコイツとは無理だわ」

「そ…そんな。高岩さん」

「オレからも願い下げだ」

自分が会談前に礼に対して使った言葉を、それと知らずに返されて一瞬はむっとなる。しかも無関係と割り切れたか、それだけだ。

「ふん。森本くらい従順で可愛げがあれば露払いにしてやるつもりだったかな」

「へいへい」

すっかり興ざめした清良は続く言葉に反論すらせず、ドアを開いて生徒会室を後にする。

「副会長。なんてことを」

「あんな奴は要らん。足を引っ張るのが落ちだ。それにドクトルに對してのあの態度も気に入らん」

どれほど心酔しているかを表した台詞である。

意外なほどさばさばとしている清良。

もともとそれほど乗り気でもない。

「予想通りの決裂」というわけだ。

一応は学校を出てから変化させたキャロル・バイクモードで帰路に着く。

その最中だ。「いつもの」感触が来た。

「ちつ。そっぴや王真の辺りもアマツドネス頻出エリアか」

彼は感覚の命ずるままにバイクを走らせる。

王真高校。

こちらでも感知して外に出ようとする礼。そしてついてくる森本。

「副会長。出たんですか」

「ああ。いつものように頼むぞ」

「はい。留守はお任せください」

伊藤礼が戦乙女ブレイザとして覚醒したのは、高校一年生の夏の頃。

そして最初に助けたのがこの森本である。

当時は中学生。不良グループに絡まれていたが、その中のひとりがアマツドネスに変化。

たまたまその不良グループを成敗に来ていた礼が、そこでブレイザとして覚醒。

いきなり女性に変化して戸惑いつつも、剣士としての心構えが物をいいアマツドネスを撃破。

それ以来、助けられた恩から森本は礼のサポートをしている。進学先を王真高校に変更したほどである。

あるいは「ブレイザ」に一目ぼれしたのかもしれない。

礼にとって一番大きいのは秘密の共有である。

他者に弱みを見せない礼だが、森本にだけはたまにそれを見せる

時がある。

それで随分と助かっていた。

清良との共闘を拒む背景には「この関係」に「邪魔者」を入れたくない部分も少なからずあった。

「感覚」が消えた。

これは最低でもアマッドネスが戦闘形態から、人間形態に戻ったことを意味する。

とりあえず清良はバイクを止める。そして辺りを見回す。場所は河原。

陽気は良かったが、グラウンドは使用されていなかった。無人である。

小鳥の鳴き声だけが聞こえる。後は遠くの車の音。

「くそつ。オレの接近に気がついたか？」

それでも彼は地面に立つ。キャロルもバイクモードのままだ。警戒していた。

そこにボールが飛んできた。反射的にキャッチしてしまう清良。それは軟式野球のボールだった。場所が河原のグラウンドだけにボールが飛んでくること自体は異常というレベルの話ではない。

ただし、人が見当たらない。

「おい。それ投げてくれよー」

ジーンズにTシャツというごく普通の青年が、下のほうから声をかけてきた。

ボールを手に怪訝な表情になる清良。だが笑顔を作る。

「ああ。いくぞ」

清良はボールを持った右手を真上に。左手を真下に向けた。

その刹那に「青年」が異形に変化して「撃つてきた」

だが清良はそれを見越していたので難なく避けられた。

さらに既に変身の体勢だった。

「変身」

スパークしてセーラー服姿に。そしてキャロルにまたがり土手を駆け下りる。

魚を人間にしたようなアマッドネスと対峙する。まるで西部劇のガンマンのようないでたち。

「ちっ。油断してボールを投げたところを撃ってやるつもりだったのになっ。何でわかった？」

「バカか。一人で壁に投げるボール遊びもあるが、ここはそんな垂直の壁は無いだろっがよっ」

土手なのでなだらかな斜面である。土地勘がなくともそれくらいはわかる。

「ちちいつ。そういうことか。まあいいさ。射程距離からちと離れていたしな」

言うなりアマッドネスは左腕を変化させる。生物らしさはあるが、まるで銃口のような形になる。

そして凄まじい勢いで「水」を打ち出す。放水ではなく、僅かな量の水を射出する。

「おっと」

セーラは慌てて避ける。キャロルも瞬時に小さな黒猫の姿になり、直撃を回避。

いくら防御形態のエンジェルフォームでも直撃は避けたい。

毒が有る可能性もあるし、何より体内からの射出というのが気分的に嫌だった。

そして避けたのは正解。土手の土をえぐったのだ。

「なに！？」

「へへん。水鉄砲と馬鹿にしない方がいいよ。工業用に使われているが、細い口から高圧で噴出すれば鋼鉄だって切れるんだ。それを

弾丸のようにして打ち出すのがこのあたしさ」

「……どうやらテップウオオのアマッドネスらしいな」

飛び道具かよ……セーラは歯噛みしていた。

「ひやははは」

アーチャーフィッシュアマッドネスは、調子に乗ってセーラの足元を撃ちまくる。

食らいはしないが完全に足止めをされていた。

校舎から下駄箱に向かう渡り廊下にいた礼と森本。

ここを抜けて下駄箱から外に出たら使い魔であるドーベルと合流。そして直行するのが毎度のパターンだった。

「それにしても絶妙のタイミングで出てきましたね」

「ああ。まるで高岩が帰るのを狙ったかのようだ」

「君は優秀だがその答えは半分しかあつてないな」

その声に思わず足を止める礼。振り返るとドイツ人教師がそこにいた。

「ドクトル。それは一体……」

何でこの人がそれを理解できる？

秘密を知る者の中にこの人はいないはずなのに？

「狙ったのは彼でない。君だよ」

「何を言っているのかわかりません」

ウソだった。礼は認めたくなかった。だがその可能性が非常に高くなってきた。

「ほらほら。躍れ躍れ」

まさに調子に乗っているアーチャーフィッシュ。

セーラは短いスカートをひらひらとさせて、その言葉どおりに待っているようだ。

「調子に……乗ってんじゃねえ！ キャストオフ」

身を守る鎧でもあるセーラー服をばらばらに吹き飛ばす。

防御は手薄になったが、代りに運動能力は格段に向上。だがもつと上を目指す。

セーラは右のガントレットを叩く。

「超変身」

その姿がレオタードの妖精に。セーラフェアリーフォームは身軽さを身上とする。

さらには飛ぶこともできる。

「へん。テツポウウオに狙い撃ちされるチョウチョってところ……」  
だが身の軽さは伊達ではない。

連射をことごとく避けて接近していく。

しかしアーチャーフィッシュも後方へと走りながら撃っている。  
弾丸を避けながらだけに距離が詰められない。

「アバヨ」

言うなりアーチャーフィッシュは川に飛び込む。高速で逃げている。

セーラにはマーメイドフォームという水中モードがある。

しかし追跡を躊躇った。どうにも行動が妙だと。

(もしかして……足止めが目的?)

だとしたらターゲットは自分ではない。

陽動と思われたアーチャーフィッシュは無視。

非常事態と判断したセーラは、人目につくのも構わずにキャロルを抱えて、フェアリーフォームで王真高校に飛んでいく。

その王真高校。

師弟関係だった二人が、戦おうとしている。

「万が一にも助けに入られては厄介だからね。彼が三人目の戦乙女というのは先日見て知っていた」

マンティスアマッドネスに急襲された一件か。例は瞬時に理解した。それしか清良がここで変身した姿を見せたことはない。

「なぜ……あなたが……」

「妬ましかつたんだよ。本当に優秀で、しかも若い君が。さらには神から守護神としての力を与えられて。本当に妬ましかつた」

尊敬している恩師の独白。礼は足に力が入らなくなっていた。

「いつのころからかな。君に対して殺意すら抱いていた。その醜い心に付け込まれてね。私は悪魔の力を手に入れたのだよ」

それを言い終えると彼は変わる。

ヒゲで覆われた顔が女のそれに。

頭にはまるでヘルメット。その上に鎮座するサソリ。そのシッポが「お下げ」のように見えた。

全身は鎧武者のようだ。いたるところにサソリのレリーフが。

そして自分の外骨格の一部を変化させたものなのか。

同様にサソリの彫り物のある盾を左手。そして戦斧を右手に持っていた。

「死ね。ブレイザー」

放心状態の礼の頭上から、スコープオンアマッドネスが繰り出す恐怖の斧が振り下ろされる。



EPISODE 13 「恩師」(後書き)

次回予告

「言った筈だ。お前の助けなどいらんと。ましてや俺とドクトルの間の問題。誰にも邪魔はさせん」

(私の中に悪魔がいる)

「……決着をか……」

「案外ドクトル・ゲー……………スコープオンアマッドネス！ お前の墓場かも知れんぞ」

EPISODE 14 「決別」

## EPISODE 14 「決別」

まさに目にも留まらぬ速さでセーラ・フェアリーフォームが空を行く。

あまり早くて逆に目撃されていない。

「セーラ様。速過ぎますう」

セーラに抱きかかえられている黒猫。キャロルが思わず言うほどである。

しかしセーラは真摯な表情で口を真一文字に結び、ひたすら飛んでいた。

何故かキャロルを抱きかかえる右手には、アーチャーフィッシュアマッドネスが作戦で投げたボールが握り締められている。

寝ていて災害が発生して枕を抱きかかえて逃げるようなものか？

とにかくひたすらに飛ぶ。目指すは王真高校。嫌な予感がする。

## EPISODE 14 「決別」

「死ね。ブレイイザ」

放心状態の礼の頭上に恐怖の斧が振り下ろされたその刹那。

ありえないカーブを描いてボールが真横から斧に直撃。

振り下ろしていたためそのまま地面に派手な音を立ててめり込む。

「誰だ？」

邪魔をするものを見回すスコープピオンアマッドネス。

しかし目の前には相変わらず目の焦点のあっていない礼と、付き従う森本だけ。

かすかに聞こえる呼吸音を察知して見上げると、セーラが息も絶え絶えという感じで空中にたたずんでいた。

「ま…間にあつたあ」

セーラ・フェアリーフォームは球状のものを自在にコントロールして投げられる能力がある。

だからありえないカーブで斧に当たつたのである。

もちろんアマッドネスを感知できてもそれがどんな相手かまではわからない。

だがとりあえず妨害するための「飛び道具」としてボールを捨てておいたのである。

「く…役立たずめ。足止めすら出来んか」

さらには先刻の派手な音が生徒を集めていた。

スコープピオンアマッドネスはドクトル・ゲーリングの姿に戻り、礼を一瞥した。

それはまるで別れの挨拶のように見えた。

感傷に浸る間もなく「彼」は生徒たちの中に逃げていく。

「待ちなさいよ」

瞬時にエンジェルフォームに戻り、さらに王真の女子制服に。

これなら自在に校内を移動できる。さらに言うなら礼とはもめてもいるのを見られている。

この「襲撃」が自分のせいにならなくてはたまらないというのもあった。

後を追ったセーラだったが、さすがに地の利は教師であったドクトルに働き逃げ切られた。

「ああんっ。もう」

悔しがるが感知できない。敵は人の姿のままのようだ。諦めて彼女は元の場所へと戻る。

そこではまだ礼が蹲っていた。

スコープオンアマッドネスが穿った地面の穴を見ている。

それは確かに敬愛する師匠が自分を殺そうとした証。

「……ドクトル」

「副会長……」

付き従う森本もなんと声をかけていいかわからない。

セーラにもわからない。だから見守ることしか出来なかった。

「あ…あの…元気だしなよ。これは仕方ないことだよ。誰にだって弱い部分があるし」

「キサマに何がわかる!」

あまりと言えばあまりの礼の言い方にむっとしたセーラは、思わず反論する。

「わかんないわよ。男のクセにうじうじして」

時間経過ですっかり女の方が基準になっていたのでこの台詞。

売り言葉に買い言葉。だがこれが逆に幸いした。

落ち込んでいた礼の心を引っ張りあげた。

「言った筈だ。お前の助けなどいらんと。ましてや俺とドクトルの間の問題。誰にも邪魔はさせん」

強くて、憎らしい表情が戻ってきた。

「ふーんだ。泣いて頼んでも知らないから」

悪態をつきながらもセーラは笑顔だった。

(これなら大丈夫そうね)

そう判断した彼女は森本に任せて立ち去ることにした。

普通に校門から出て、人目につかないところで別の女の子に成りすまして帰るつもりだった。

「高岩さん」

その背中に呼び止める声。

「森本君？ 礼はいいの？」

女性化したためか呼称まで変わっている。

「いえ：そうとうにシヨックだと思えます。本当にドクトル・ゲールリングを尊敬してましたから」

そんな相手に殺されかけた。さらには宿敵であるアマッドネスになつてである。

その衝撃は計り知れない。

「そうよねえ」

顎に右手の人差し指を当てて、可愛らしく相槌を打つセーラ。

「だから高岩さん。どうか…」

言葉を続けようとする森本の口に、自分の顎に当てていた人差し指を「黙って」というように当てる。

「この姿の時はセーラって呼んでちょうだい。ね。わかった？」  
「っこりと」「お姉さん」な微笑を。

「あ。はい。わかりました。セーラさん」

礼：ブレイザという存在に近いからか、清良とセーラのギャップも理解できるらしい。

「それでセーラさん。副会長に何かあつたら連絡をしたいので」

「わかったわ。番号とメールアドレス交換しましょ」

彼女はスカートのポケットからピンクの可愛い携帯電話を取り出した。

「セーラさんだとそんな風になるんですね」

「どうやら礼がブレイザになった際も持ち物が女性的に変化するらしい。

「あ。ブレイザもやっぱりあたしみたいに服を変えられるのね」

「はい。副会長は大人っぽいのを好みます」

「どうせあたしはお子ちゃまですよーだ」  
舌を出してみせる。

傍目には男の子と女の子の微笑ましいやり取りだが……

すっかり女性化した中身で帰宅。

またもや妹の理恵が首をひねる中で食事を取り、自室にこもるともはや趣味になりつつあるファッションやメイクの研究に。

疲れて眠りリセットされて、朝起きて…

「セーラ様。学校が始まりますよ」

「知るか！ ああ。またやっちまったああああ。何だあの『先輩女子』ぶりはよおおおお？」

またもやカメのようにふとんに包まっていた。

翌日。予想通りではあるがゲーリングは学校に来ない。連絡もない。

当然だ。既に正体を礼に知られているのだ。来るはずがない。

誠実な夫と父の顔で家庭に戻っていたゲーリングは、学校に行くと言い残して家を出た。

しかし行かずに海岸で佇んでいた。

(私の中に悪魔がいる)

相性の問題なのか意識が完全に混じり合わずにいた。

(悪魔と呼ぶか。いいさ。だがお前はこの「強さ」の代りに魂を差し出したのだ。今更何を躊躇う)

こちらはスコピオンアマッドネス…スストの意識だ。

(違う。私の呼ぶ「悪魔」とはレイに対する殺意のことだ)

若くして優秀な伊藤礼。

その才能を認めた故にゲーリングは彼を教え子とし、同時に才能に嫉妬して殺める決意までした。

（やればいい。奴がお前より優秀というならお前は返り討ちにあうだろう。出来ないなら、それまでだ）

（むづ……）

その文字通りの悪魔のささやきが彼を動かした。

携帯電話を取り出してメールの文章を打ち込み始めた。

「……決着をか……」

三時限目の終わった頃にメールを受け取った礼は悲壮な表情になる。

神奈川県之三浦海岸で3時に待つ。

それがゲーリングからの文面だった。

彼は携帯電話を懐にしまおうとして落とすが、既に気持ちゲーリングのことに向いていたので気がつかないまま。

まだ四時限目以降の授業があるというのに、彼は足早に外へと向かう。

福真高校。いい加減に女性化しての行動にも慣れた清良は、ちゃんと登校出来るほどにはなっていた。

しかし恥じ入っているのか、ひたすら沈黙を保っている。

王真高校。

「あれ？ 副会長いないんですか？」

2年の教室を訪ねてきた森本は不在と聞かされて首をかしげる。

「ああ。珍しく忘れ物までしてやがる」

応対した同じ生徒会の2年か礼の落とした携帯電話を見せる。

「副会長が忘れ物？」

人間だから忘れ物くらいするであろうが、それでも珍しいのは確

かだった。

「ちよつといいですか？」

そう言われて先輩男子は携帯を手渡す。受け取った森本は躊躇いなくディスプレイを見る。

「バカ！ 他人の携帯を見る奴があるか」

それもあり誰もゲーリングからのメールを見ていない。

嫌な予感で思わずメールを確認した森本はその文面に青くなる。

彼は自分の携帯を出して清良に電話する。

「なんだと！？ 三浦海岸で伊藤が決闘？」

相手がアマッドネスというならいつものこと。しかし

『はい。ですが相手がドクトル・ゲーリングでは副会長が平常心でいられるとは思えません』

それを案じて清良に救いを求める森本。

「あの馬鹿が…」

電話を切ると清良も学校を飛び出した。

テレパシーでキャロルを呼び出し、合流する。

そして猛スピードでバイクモードを走らせる。

スピード違反で白バイに追われるがこれも振り切る。

だがその追跡時に「手配」の有ったバイクと判明し、連絡が薫子のところに行く。

すぐさま振り切られた場所へと車を走らせる薫子。

もちろん神奈川県警に連絡するのも忘れない。

三浦海岸。

まだ五月下旬では海水浴客などいるはずもない。

さらに言つなら遊泳禁止エリアゆえにマリンスポーツをする者もない。

誰もいないし、建造物もない。



ブレイザも遠慮なく剣を振るえるであろう。そういう狙いでの場所の指定である。

「レイ。ここがお前の墓場となる」

「そいつはどうか？」

つぶやきに対して答える声。待ち人来る。礼が到着していた。

「案外ドクトル・ゲー…………… スコーピオンアマッドネス！ お前の墓場かも知れんぞ」

ドクトルの名を呼ぼうとして彼は思いなおした。

目の前の存在は敵だ。師匠ではないと。それに徹した言い方に変えた。

そして彼はいつものように対峙する。

「ばか者め。なぜ先に变身しない？」

その言葉と同時にゲーリングはサソリ女へと変貌する。

礼には躊躇が有った。

いかにアマッドネスに取り付かれたといえど師匠。それと対決することに。

それゆえ戦闘形態になるのを先送りしていた。

しかし相手が殺意をむき出しではそうも言っていられない。

礼は右手を前に。左手をへその位置にかざす。だがスコーピオンアマッドネスの斧がそれを邪魔する。

「そうやすやすと变身などさせんぞ」

アマッドネス出現の感覚をキャッチした清良は、車が少なくなっただけでもあり变身した。

とりあえずはエンジェルフォーム。

セーラー服姿でバイクを走らせる。

感覚に従い探していると、スコーピオンアマッドネス。そして礼を見つけた。

砂浜に入り込むバイク。

魔力で走るだけに砂で空転もせず問題なく走る。

走りながらキャストオフ。そしてマーメイドフォームへの超変身。彼女はバイクから降り立つと、伸縮警棒をランスに変えて、その怪力で力任せに放り投げた。

「むっ」

飛来物を察したスコープオンアマッドネスはとっさに盾で防御する。

その隙に礼は右手を前に。左手をへその位置に。

へそに出現した光の渦から小太刀を引き抜き腰ダメに。右手はそのつかにかける。

「変身」

キーワードとも言つべきその言葉と同時に、鞘から引き抜く。

眩い光と共にブレイザへの変身を完了した。

「ちっ」

舌打ちも同時だった。

スコープオンにしてみれば戦闘形態にしてしまったことに対して。

そしてブレイザにしてみればそのランスがセーラのものだと認識したことで。

だがそれを気にしていることは出来ない。

「キャストオフ」

相手も強固な盾を持っている。小太刀では文字通り太刀打ちできない。

戦闘に特化したヴァルキリアフォームへと変化。激しく剣を振るうが全てその盾によって防がれる。

(なんて硬い盾だ。これを破るには…だがその暇が)

「なにやってんだか。じれったいな」

とりあえずこちらもヴァルキリアフォームのセーラである。体操着姿の女子がこの時期の海岸というのも奇妙だが、スポーツのトレーニングで足腰に負担の掛からない砂浜を走るのはよくある話だけに理解はできる。

彼女はブレイザの言葉を守り、手を出さないでいた。見殺しという意味ではない。納得の行くようにぎりぎりまでやり合わせるつもりだった。

危なくなったらいつでも割って入るつもりだった。

打ち合っていたら波打ち際まで来てしまった両者。

「ふふふ。その刀では我が盾は敗れんぞ」

くぐもった女声で話すスコープIONアマッドネス。

どうやら意識はアマッドネスの方が強くなっているようだ。

「くっ」

まず動きを止めようと足を狙うが、大きな盾をとんでもなく軽々と扱いブロックする。

そして動きを止めると斧で攻撃を仕掛ける。

さらには弁髪のように見える「サソリの尻尾」が素早い動きで毒を注ぎ込もうと迫り来る。

「ええい。ちょこまかと目障りですわ」

戦闘時間が長くなってきて、ブレイザの心も女性のそれへとシンクロしていき、言葉に表れる。

彼女はその「尻尾」を止めるべく狙うが、そちらは斧が防御に転じてガード。

「むん」

剣を止めたスコープIONは、左手の盾で思い切りブレイザを突き飛ばす。

「きゃあっ」

十数メートルも吹っ飛ばす。派手に転落するが砂浜ゆえに事なきを得た。

その体勢の乱れを見逃してくれる相手ではない。

斧を横手で放り投げる。それがブーメランのように回転してブレイザを襲う。

彼女はとっさに刀でその軌道をそらした。

まともに受け止めると折れかねない。だから僅かに当てて受け流したのだ。

意思の力でコントロールされているらしい斧は、撃墜はされずにスコピオンのところに戻っていく。

今なら攻撃手段がない。

「ドーベル」

待機していた黒犬を呼ぶ。

走りながらサイドカーに変化する従者。

そのサイドカー部分に乗り込むブレイザ。右利きの彼女は左が死角になる。

故にそれをバイク部分でガードする目的。

そしてまたがるより、サイドカー部分に足をつけた方が「踏ん張り」が利くのもある。

ブレイザが乗り込むその途端に走り出す。

「超変身」

甲高い声でブレイザが宣する。

着流し姿に。髪も無造作に留めた状態に。

相変わらず胸が薄いが、体格は一回り大きくなった。

刀に至っては巨大な刀剣に。

敵の駆る馬そのものを斬る目的で作られた漸馬刀に変化した。

「ブレイザも超変身できるの？」

実際はブレイザ。そしてジャンヌの方が先なのだが、目の当たり

にして驚きのセーラ。

「はい。あれは臂力に長けたガイアフォームです。ブレイザ様にはもう一つ。正反対のスピードと感覚に特化したアルテミスフォームがあります」

「何よそれ？ 女神さまの名前をつけるなんてどんだけ傲慢なのよ」  
ちなみにパワータイプゆえに大地のイメージで大地の神の名を。

そして感覚に勝るため狩猟のイメージで、狩猟の神でもあるアルテミスの名を頂いている。

「うおおおおっ」

それまでの上品なイメージと打って変わって、雄たけびと共に突っ込む。

それをまともに食らうはずもなくひらりと避けるスコープイオンアマッドネス。

大回りしてしまい、距離の離れるブレイザ・ガイアフォーム。

「ふふふふ。その巨大な剣ではさすがに防ぎきれない。だったら避けるだけだ。さあ。そんな無理な姿がいつまで持つかな」

ブレイザに焦りの色が滲む。

「どうということなの？」

セーラが尋ねる。

自分の超変身はする。

フェアリーは速いし俊敏性がある。さらに器用になるらしく、技も使える。

だが決定的に腕力が足りない。さらに身軽さを得るためもっとも防御力の弱いフォームである。

対するマーメイドは怪力。そしてエンジェルフォームに次ぐ防御力であるが、とにかく動きが鈍い。

水中ではいいのだが、水の助けのない場所だと全フォーム中もっとも鈍い。

そういう「弱点」は存在するが、それは頭の使い方カバーできる。

だがブレイザの超変身は事情が違うようだ。

「ブレイザ様のあの姿は、セーラ様のマーメイドフォーム以上のパワーと思われませう。しかしそれだけに負担が大きく、約3分程度しか続かないのです。アルテミスフォームに至っては、極限まで研ぎ澄まされた五感が30秒しか持ちません」

「それじゃその間逃げられたら」

「その辺りはドーベルがフォローすると思いますが…」

仲間を信用しているキャロルだが、それでも不安だった。

「くくく。さあどうした。来たらどうだ」

挑発するスコープIONアマッドネス。

その表情が凍てつく。

「う…動けん…どういつつもりだ？」

芝居ではなく、金縛りにあつたらしいスコープIONアマッドネス。

「急げ。レイ。もう…持たない」

「ドクトル!？」

ゲーリングの意識が僅かに勝ち、動きを止めたのだ。

「持たない」は自分のことだが、同時にガイアフォームの限界時間も指摘していた。

「レイ。私の中の悪魔を殺してくれ!」

悲痛な叫びが彼女に届いた。

「ドクトル…今、楽にして差し上げますわ」

再び猛スピードで走り出すドーベル・サイドカーモード。

すれ違う刹那、巨大な剣を横薙ぎにする。

「くっ」

土壇場でスコープIONの防衛本能が勝り盾をかざす。

その盾ごとスコープIONアマッドネスを一刀両断。

上半身と下半身が分断されていた。

「見事…だ…レイ。やはり君は優秀だ…」  
笑ったように見えた。

そして大爆発を起こし、悲しい対決は幕を下ろした。

歩み寄るセーラ。彼女もやるせない戦いを経験していたので、ブレイザの心情は理解できた。

「さあ。帰りましょう。ブレイザ。ドクトルも病院に運ばないと」  
アマッドネスを倒して分離させる。

その際に一度肉体は破壊されるが再生される。

ただしその際には必ず女性になる。

元がひげを蓄えていたため、壮年の女性と化した今は、ビジュアル的にはかなりのギャップである。

爆発の際に千切れたゲーリングの服を、女性ものとして再生していたブレイザが、それをゲーリングに着せていた。

セーラはそこに優しく手を差し伸べる。

ブレイザは凄まじい目つきでセーラを睨みつけると、その左頬を強烈に叩いた。

「きゃあつ」

思わず波のほうに倒れこむセーラ。

「何をするのよ？」

抗議の声を上げるその目前に、限界時間が来てエンジェルフォームに戻ったブレイザが小太刀の切先を突きつけていた。

「一度ならず二度までもわたくしのプライドを踏みにじるなんて…  
…もう許せませんわ。アマッドネスの前にあなたを成敗して差し上げます」

## EPISODE 14 「決別」 (後書き)

### 次回予告

「あなたはわたくしの誇りを踏みにじった。それで充分ですわ」

「変身した…あれがもしかして例の『正義の味方』?」

「高岩。ちょっと用がある。出来れば誰もいない場所に行きたい」

「一発ぶん殴って、目を醒まさせてやる!」

### EPISODE 15 「激突」



## EPISODE 15 「激突」

(……まさかセーラが現れるとはなあ)

三浦海岸の沖ではウェットスーツに身を包んだ男。矢追が舌を巻いていた。

(悪いね。ススト。あたしも命が惜しいからな。ブレイザはともかく、セーラは飛べるし水中じゃ活動限界のない体にもなれるしな) アマツドネスの邪悪な魂が勝っていたとき、スコープオンアマツドネスが伏兵としていたのがこのアーチャーフィッシュアマツドネスだった。

水中からの狙撃が目的。

命中すればよし。外れてもスコープオンアマツドネス相手に致命的な隙を見せる。

それを狙った布陣だった。

しかし計算外なのがセーラの乱入。ブレイザの性格から行けば助っ人を頼むはずがない。そういう読みだったが外れた。

それでもまだ二人がかりでスコープオンと戦えば自分には気づかれにくい。

そこを背後から撃つ手もあった。

しかしただひたすら待機している状態。これまたブレイザの「ブライド」が物を言っていた。

いくら沖とはいえどこのタイミングで「変身」などしようものなら、感知してたちどころにこちらに向かってくるだろう。

それで躊躇しているうちにスコープオンが倒された。

しかしさらに信じられない光景が展開している。

ブレイザが仲間であるはずのセーラに平手のみまい、そして切先

を突きつけている。

EPISODE 15 「激突」

「どづいづつもり？」

仲がいいとはお世辞にも言えない両者。

しかし仮にも同志である。

刀を突きつけられる筋合いはない。

ましてやこんな殺気満々で。

「あなたはわたくしの誇りを踏みにじった。それで充分ですわ」

その目は本気であることを物語っていた。

「それでこんなことをするのか？ おかしいじゃない！」

未だ立ち上がらせてもらえないセーラが抗議する。

「問答無用」

ぐっと小太刀を突き出し、むき出しの部分である顔に突き刺そうとする。

大きく振り上げれば隙が出来るからだ。

傷をつけて動けなくする。恐らくは狙いは目。視力を奪い、行動をできなくしてからとどめを刺す気だ。

（仲間割れとはいいぞ。セーラを倒してくれるなら好都合。あとはラストとの闘いで疲れきったブレイザをここで）

矢追はアーチャーフィッシュアマッドネスへと変化した。

元となっているテツポウウオは海水と川の水が交じり合う「汽水」では生きられるが、純粹な海水となると無理である。

だから一発だけ。もししくじったら即座に逃げる。

人の姿でいる内はウェットスーツで耐えられるが、当然泳ぐ速度はがた落ちである。

だから欲張らずに一発放ったら即座に逃げて、限界まで距離を稼ぐ。そのつもりだった。

『本部より。三浦海岸で爆発音を聞いたとの通報あり。付近の移動は急行されたし』

神奈川県警の無線を傍受した薫子の覆面車。

例のバイクもこの付近に来た。

もし話に聞く『化け物を倒す存在』なら無関係ではないかもしれない。

いく価値はある。そう判断した薫子は三浦海岸へと車を走らせる。

「むっ!？」

狂気に取り付かれても戦乙女。アマッドネス出現の感知をした。

もちろんセーラもだがこの状態ではままならない。だがブレイザに隙が出来た。

「キャストオフ」

「きゃあっ」

ばらばらに吹っ飛んだセーラー服がブレイザを跳ね飛ばす。

突き飛ばした形のセーラーはそのままフェアリーフォームへと超変身。沖へと飛翔する。

再びヴァルキリア。そして水中モードのマーメイドへと変化して海中に。

水中なら淡水でも海水でも問題ないマーメイドフォームと、海水では難のあるアーチャーフィッシュ。

勝負は見えていた。

「ちつ。無粋なこと」

ブレイザには水中や空中に行く能力がない。

そこに逃げられてはどうしようもない。だからあっさりと諦めた。

「日を改めますわ。帰るわよ。ドーベル」

興奮したブレイザは、サイドカーにドクトル・ゲーリングだった女性を乗せて帰路に着く。

精神が完全に女性化したため女のままである。

「一城さん。あれ」

同乗した若い刑事が指し示すほうを見ると、海中と思しき場所から竜巻が。

「行つて見ましよう」

いよいよはつきりした目的地へと向かう。

到着すると爆音が。

舗装路の路肩に車を止め、ドアロックももどかしく現場と思しき砂浜に駆け下りる。

走ることを前提としている職業がらかかとの低い靴なので、何とか砂浜も歩ける。

爆音の有ったほうを目指していくとスクール水着姿の少女と、気絶した全裸の女性がいた。

「え？ なんなの？ これ」

あまりにシニールな取り合わせであった。

まだスクール水着は理解できるが、全裸の女性というのが不可解だ。

死体遺棄の際に身元判明を避けるため衣類を剥ぎ取ることは多々有るが、どうやら生きている様子。

「それ、もしかしてあなたが？」

こちらは「職業病」とでも言うべきか。つい尋問する調子に。

「あ…あの…」

それに気圧されたわけでもあるまいがあとずさるセーラ。

確かに爆発も竜巻もこの少女が原因。

魔物退治といえど少々後ろめたい。

「ねえ。教えて。ここで何があつたの？」

おびえている「少女」に出来るだけ優しく語り掛ける薫子。

しかしもう一人の青年刑事。桜田がさり気なく挟みうちのように移動していた。

そこに一台のバイクが走ってきた。薫子の背後から。桜田には前方。

直視した桜田は仰天した。そのバイクが無人走行。しかも音を立てていない。

言うまでもなくキャロルである。

すれ違い様にひらりとまたがるセーラ。瞬時にエンジェルフォーム。セーラー服を模した戦闘服に戻る。

「その人のこと。お願いします」

鈴を転がすような声で言う走り去って行った。

とつさに彼女はデジカメで写真を撮った。

「変身した…あれがもしかして例の『正義の味方』？」

爆発。竜巻。無人のバイク。変身した少女。ここまでそろつと眉

唾物とも言つてられなくなってきた。

翌日。

大学病院へゲーリングの見舞いに礼が訪れた。

アマッドネスの被害者の病室は可能な限り他の女性患者とは離す様になってきていた。

元々女性の患者は別に気にしないのだが、まだ自分が女性化したのになじんでいない『被害者』達のほうに配慮してである。

これにはアマッドネスに変身していた人物も『被害者』扱いである。

経緯はどうあれ魔物のせいでの性転換させられたのだ。

余談だがアマッドネスに変化してからの『犯罪行為』は立証自体が難しく、さらにはいわば『心神喪失状態』とみなせほとんどは不起訴であった。

ただしホースアマッドネスの馬場や、マンティスアマッドネスの釜本のように取り付かれる前に犯罪をしていたものは別で、同一人物と判明したら起訴に流れていた。

邪心がアマッドネスに吸い尽くされているので、喜んで罪の償いに応じるものがほとんどである。

馬場は既に刑が確定。問われたのは取り付かれる前の強盗のみ。既に収監されているが模範囚となっている。

ドクトル・ゲーリングの場合、礼に対する殺意が命取りで取り付かれた。

しかしそれゆえ他の人間には手を出さず。

また邪心が少なかったのか自我も失わなかったのも理由だ。だから礼が訴えないことにより刑事罰はない。

それでも深く後悔しているゲーリングだった。  
そして止めるためとはいえど自分の手で師に刃を向けた礼も。

「ドクトル。お体は？」

「ああ。大丈夫だよ。医者もそういつていた」

男のときは深く渋みのある声であったが、今はやや細く高い女の声である。

年齢ゆえか優しげな顔つき。当然だがトレードマークのひげは微塵もない。

「私は大丈夫だが、妻がね」

様々な方法でゲーリング本人である証明は為された。

それは同時にゲーリング婦人の「夫」がいなくなったことを証明していた。

「この体になった以上、妻とは別れなくてはなるまい」  
法律上の話である。

子宮や卵巣もある完全な女性の肉体。そんな二人での「夫婦」は成立しない。

ゲーリングの戸籍が女性に変わればなおさらである。

「ドクトル…俺は…」

「なにも言わなくていい。よくやってくれた」

一つの家庭を崩壊させた罪悪感に悩まされる礼。

それに対して本心から感謝するゲーリング。

「しかし…俺は正々堂々とは戦いませんでした。望まないといえどあんな奴との二人がかりだなんて」

異様な激怒はその思いが原因である。

「待て！ レイ。何で君たち二人はそんなに仲が悪いのだ？ 私に取り付いた悪魔が語っていたが、君とあのライダーは太古の昔は盟友だったという。それがどうして」

「正直、俺にもわかりません。しかし……どうにもこうにもアイツと顔をあわせていると怒りや憎悪がこみ上げてくるんですよ」

相性の悪さというレベルではない。

「やはりアイツは許せない。俺とドクトルの一対一の神聖な戦いに土足で踏み込むようなマネを」

「レイ。その考え方はおかしいぞ！」

思わず男の口調で窘めるゲーリングだった女性。

しかしブレイザの腹づもりは決まってしまったらしい。

次の日。

一城薫子は撮影した写真を元にセーラ。そして彼女のバイクの手配図を作成していた。

「女の子の方は可愛いけどこのくらいならほかにもいるわね。けどバイクは別ね」

「そう言えば一城さん。白バイ隊員は高校生らしい男子が、この女の子になったといっただけじゃありませんか」

既に桜田は出会った少女をセーラと決め付けていた。事実そうでは有るが。

「そうね。まずは裏を取りましょうか」

彼女たちは証言を取るべく所轄の交通課に向かった。

さらに翌日。

「……まさかテメーのほうからこっちに来るとはな」

登校した清良を福真高校の正門前で伊藤礼が待ち構えていた。

以前の逆で学生服とセーラー服の福真の生徒たちの出入りする校門に、ブレザーの礼はかなり目立つ。

遠巻きに見ながら校舎へ入る生徒たち。

しかし退治している相手が清良と見ると「また喧嘩か」で片付いてしまう。

「生徒会副会長様がサボリとは関心しないな」



傍らの友紀も不思議そうに見ている。

今までも清良を待ち伏せてここにいた不良はいたが、この男はいかにも真面目そうだ。

もつと的確な言葉としては「エリート」といえた。

（こんな真面目そうな人が：最近のキヨシ。なんだか変だわ。色々隠し事が増えたし。もしかしてみんなが見たというペガサスとか怪人が関係あるのかしら？）

新体操部の彼女は基本的に体育館での活動。

屋外の事件を直接目撃するケースは少ない。

「高岩。ちょっと用がある。出来れば誰もいない場所に行きたい」  
その口調はとても「話し合い」という雰囲気ではない。それは清良も察した。

「わかったよ……」

荒事には慣れている彼である。理解できた。

「こいよ。ちょうどいい場所がある」

「いいのか？」

背中を向けた清良に礼が言葉を投げかける。

「ああ。副会長様と違ってサボりなんざしよっちゅうだ」

自嘲気味に笑いながら言う。

「今生の別れになるぞ」

その言葉で自分の見立てが甘いことを知った。

喧嘩じゃない。殺し合いだと。

振り返った清良の視界に不安そうな友紀の顔。

「心配すんなよ。後で行くからよ」

精一杯の「ウソ」だった。

町外れの廃工場。機械などは既に撤去されているが、老朽化した建物は取り壊しを待つばかりだ。

一部鉄骨など横たわっていた。解体も始まっているようだ。

天窓もすすけて薄暗い。むろん照明などもない。有るのはほこりにまみれた薄汚い空間。

その中央に二人は対峙していた。まるで西部劇のガンマンの決闘のようだ。

傍らにはそれぞれの従者。

「おい。本気か？ 協力しないのはともかく、戦う理由もないだろう。俺たちが戦って喜ぶのはアマッドネスだけだぜ」

ついでに言うなら一部プロデューサーと脚本家とおもちゃメーカーでもある（笑）

「言っただけだ。踏みにじられた誇り。それだけで充分」  
威圧的…もはや狂気の漂う目でにらむ礼。  
臆したりしないが、ため息をつく清良。

「なら仕方ねえ」

彼は右手を真上に。左手を真下に向けた。

「やっとその気になったか」

礼は右手を方の高さで真正面に。左をへその位置に。

「一発ぶん殴って、目を醒まさせてやる！」  
ゆっくりと腕を水平にする。

「それが貴様の遺言か？」

出現した小太刀を腰だめにして、右手をかける礼。  
両者が同時に叫ぶ。

「変身！」

清良は腋につけた腕を前方に突き出してクロスさせる。  
礼は小太刀を引き抜く。  
共に眩い光を放ち、戦乙女へと姿を変える。

「うおおおっ」

どちらからともなく相手に突進して行く。

ぎりぎりまでひきつけて小太刀で一撃を加えるつもりブレザー  
美少女。

しかしそれはセーラー服美少女の拳の間合い。

「目え醒ましやがれ！」

渾身の力を込めて真紅のガントレットがブレイザの頬げたを砕きに掛かる。

それをスウエー。後方にかわすというのが長年の喧嘩三昧で鍛えた勘が出した予想だった。

当然目線が外れる。そこに左の膝を腹部に叩き込むつもりだった。手段を選ばないのなら股間が近い。ましてや無防備なスカート。いくら「男の泣き所」が消失しているといえど、痛いことはいたはずである。

そうでなくても『男の習性』で反射的に身をかわす。  
だがそれはしないセーラ。むしろ「清良」か。

ところが予想外。ブレイザは小太刀を盾にした。ご丁寧に刃をセーラに向けてである。

ガントレットは拳まではカバーしてない。自分で自分の拳を切り裂くことに。

「うおお。危ない。えげつねえ真似しやがって」

「お前なぞに手段を選ぶ必要はない」

挑発は理解していても頭に血が上るには充分だった。

左手を軽く顎目掛けて振りぬく。

顎の先端にヒットしてこの原理で顔面全体をブレイザから見て

左に振り向かせる。

たまらず後ろによろける。

体勢の崩れたところで追い討ちとばかりに飛び掛るセーラ。だが

「キャストオフ」

「うわっ」

散り散りに飛散したブレザー風戦闘服に吹っ飛ばされる。

「自分が使った手に引っかけるとは、並外れた馬鹿だな。死なないと治らんなら殺してやる」

和装のヴァルキリアフォームになったブレイザは、一回り大きくなった得物で横薙ぎにセーラを「斬る」

これはエンジンフォームのセーラー服風戦闘服が「鎖帷子」のようにブロックした。

「このやるう…本気で斬りつけやがったな」

「何度言えばわかる。殺すといっているだろう」

完全にセーラも逆上した。

一方、キャロルははらはらしてみていた。

両者共に呼ばれるまで加担しないことになっていた。

だがキャロルにしてみれば見ちゃいられない。

「ああもう。ドーベル。どうしてそんなに落ち着いているのよ。早くブレイザ様を止めないと。それ以前にどうして窘めなかったのよ？」

さすがに同様の存在相手となると若干砕けた口調になる。

「膿は出してしまった方がよいと思ってな」

「膿？」

「ああ。私の考えが正しければお一方…いや。ジャンス様もみな…」

セーラもキャストオフして服を飛び散らせる。その間に間合いを

取る。

放置されていた錆びた鉄骨のところまでマーメイドフォームに。まるで空き箱でも持ち上げるかのように鉄骨を持ち上げ、そして投げつける。

これを避けないとセーラは読んでいた。ブレイザはそういう性格とわかってきた。

予想通りブレイザはガイアフォームに超変身して、鉄骨を空中で真っ二つにする。

その隙にヴァルキリアを経てフェアリーフォームになったセーラが飛ぶ。

その俊敏性と飛翔能力で背後を取る。どう見てもパワーのみのタイプと見立てたからだ。

それが最初からの狙い。

例え読まれていても相手もまだ見せぬ「俊敏性のフォーム」になるのに隙ができる。と。

それは甘い予想だった。

「超変身」

着流しが巫女装束に。どことなく雰囲気も清楚な、それでいて引き締まった表情の巫女姿にブレイザは変化した。

(えっ？ ブレイザは直接別のフォームになれるの？)

自分が必ずヴァルキリアフォームを経るので、ブレイザもそうだと思います。こんでしまった。

「にこい」

不気味に笑うブレイザ・アルテミスフォーム。

完全にセーラの動きを見切っていた。

(とりあえずすり抜けるしかない)

だがその動きすら見抜かれていた。

筋肉の動き。気の流れで読めるのである。

そしてブレイザの刀が一閃された。

## EPISODE 15 「激突」 (後書き)

### 次回予告

「そ……それは、わたくしに対する嫌味ですか？」

「これは全て私の推測でしかありませんが……」

「この辺りも怪人頻出地帯なのよね」

「結論から申し上げます。ブレイザ様。セーラ様。ジャンス様。お三方には恐らく……」

EPISODE 16 「真相」

## EPISODE 16 「真相」

空からぐんぐんとブレイザの間合いに接近するセーラ。

一閃される刀。回避不能。居合いの間合いだ。

とつさにむき出しの部分をガントレットでカバーする。

それがヤイバをブロックして、ブレイザの愛刀を弾き飛ばす。

「ちちいっ」

本人ものけぞり攻撃態勢が崩れる。

そのまま逃げるかと思われたセーラだったが、それが癩だったらしく再び向かってくる。

ブレイザが慌てて刀を拾いにゆくそこへと。そして

「ドレスアップ」

瞬時に防御形態エンジェルフォームに戻る。

エンジェルフォームに戻ったことにより当然飛行能力は消失するが、そのまま勢いで突っ込んでいく。

「え？ え？！ ええーっ」

まさかそのまま突っ込んでくるとは！？ さすがのブレイザも慌てる。

反射的に逃げようとして向けた背中に、逆に直撃を受ける羽目に。



「きゃあっ」

とても本来は男とは思えない可愛らしい悲鳴を上げ、もつれ合っ  
て倒れこむ両者。

「ほっ」

最悪の場面を回避して安堵の息をつくキャロル。  
相変わらず微動だにしないドーベル。

「いったあーい」

セーラが肘を押さえながら立ち上がりかける。  
膝を閉じたまま「スカートの中身」が見えないようである。  
言葉遣いだけでなく仕草もだいぶ女性的になってきていた。

「あたたた」

こちらは腰を押さえた状態で立ち上がるブレイザ。  
逃げようとした背中に直撃されたのだ。

愛用の刀はその際に遠くへ放り出してしまった。  
限界が来たのもあり、エンジェルフォームに戻っている。

「もう。思い切り胸を打ちつけたから痛いじゃない。やるんじゃない  
かったわ」

びく。

セーラのその言葉を聞いたブレイザの顔に血管が浮き上がる。

「今、なんて？」

「え？」

ケンカの最中と言うのを忘れている間抜けな表情のセーラ。

「何て仰ったと聞いているんです」

「だから…胸を打ったって」

もしかしたら戦闘中より凄まじいかもしれない形相のブレイザ。

「そ……それは、わたくしに対する嫌味ですか？」

「は？」

何のことかわからずセーラは思わずブレイザを見る。上から見て、胸の辺りで視線が止まる。

一瞬にして察した。

一方のブレイザはうかつにも「弱み」を見せたことに気がつくが後の祭り。

にやつと嫌な笑みを浮かべたセーラが、からかうように言う。

「あー。そっかあ。あんたペタンコだもんねえ」

ストレートに言い放つ。精神攻撃というならかなり効いた。

言葉どおりブレイザの胸は恐ろしく薄い。

ブラジャーのサイズで言うとあってもAカップ。フォームによってはAAAというのもあった。

「そこだけ変身してなくて、男のままなんじゃないのお？」

何しろ殺されかけている。出てくる言葉も辛らつになる。

言われたブレイザとしては最大の泣き所だ。

そして精神が完全に女性化していたので、コンプレックスになっていた。

男の胸がいくら薄くてもまったく関係ない。

気にするということはそれだけ女の精神状態という証拠だ。

だから思わず口で反撃する。

「こ…この…カマトト。腹黒ぶりっ子女!」

「な!」

しかしセーラは身に覚えがあった。

変身時間が長くなり、精神が完全女性化すると、かなりかわいらしく振舞うようになる。

既に「中身」が女で帰宅したときは、寝るまでファッションとメイクの研究というのがパターン化していたし、その際も可愛い衣装を好んでいた。

的中したのを察してブレイザに余裕が戻る。

上からの物言いになる。

「あら。凶星ですね。それで何人の殿方をたらしこんだのかしら?」

もちろんそんなことはあろうはずがない。

しかしかなりの侮辱にキレかけてきた。

「セーラぶりっ子なんかじゃないもん。取り消しなさいよ。つるべた女!」

「お…大きければいいってもんでもありませんわ。このでか尻」  
「なんですつてえ」

二人同時に飛び掛るが、アマツドネス相手の闘いとまるで違う、低レベルなケンカだった。

髪を掴み、引っかき、そして主体となるのが女ならではの言葉による攻撃。

甲高い声を上げながらキャットファイトを展開していた。

「な。心配いらなかつたらう」

人間だったらウインクしかねないドーベルの口調。

「……………ええ……………」

いろんな物にキャロルは脱力して、もはや止める気にもなれな

った。

散々に罵りあい、攻撃しあって疲れ果てたところで止めに入ったドーベル。

話し合いを提案する。

疲労もあり、意外なほどあっさりその案に乗る二人。

工場の床であるがきちんと正座しているブレイザ。

その傍らにドーベルが座っている。

対面には同様のキャロル。そして割座。いわゆる「ペタンコずわり」のセーラ。

「おやおや。とても可愛い座り方ですこと。さすが『ぶりっ子の第一人者』。それにその座り方ならお尻がはみ出さないですわね」

まだ口の方は続いていた。むっとなるセーラ。それまでヒップは気にしていなかったが、急に気になってきた。

それをごまかすのと反撃で一言。

「ブレイザは和服がよく似合うわよねえ。やっぱり胸がない方が着物は似合うもんね」

「なんですって？」

「やる気？」

またやりだしそうな二人。だが力が続かない。代りにブレイザは従者を見る。

「ドーベル。何か考えがあつてわたくしを止めませんでしたね」

「は。お二方にはまことに失礼をいたしました。しかしこれでご理解いただけたかと思えます」

「何をよ？」

「これは全て私の推測でしかありませんが…」

太古の昔。前世のセーラ。ブレイザ。チャンスは攻めてきた魔物軍団。

アマツドネスを迎え撃っていた。

彼女たちの聖なる力はかつては人間だったものの、今や魔物と化した者たちには有効であった。

しかしそれもクイーンアマツドネスが倒れたアマツドネスに力を与えて復活させて切りがない。

意を決した三人は最後の技でクイーンを封印するが、自らも「封印」されてしまう。

「ここまでではよいですね」

「ええ」

「キャロルから聞いているわ」

「現代の戦いにおいてブレイザ様たちに倒されたアマツドネスが復活できないのは、恐らくはクイーンがまだ完全には封印を解けていないからと思われます」

「『恐らく』と『と思われます』って、推測が重なっているわよ。ドーベル」

「実際に推測だからな。もしかしたら完全に蘇えっているかもしれない。どちらともいえないよ。キャロル」

真面目な印象のドーベルも、キャロルの前では若干だが砕ける。

「奴らも前の闘いでは本来の肉体を持ってました。しかし長い年月でその遺体も朽ち、誰かに取り付いて乗っ取ることばかりその復活を成し遂げられます。それを断ち切られるともう奴らには昇天するしかないのです」

「朽ちる前に焼いてもいたけどね」

「待ってキャロル。遺体を焼いてって…爆発したんじゃないの？」

「いえ。セーラ様たちの戦いはどちらかというところ『お払い』でして奴らの魂にダメージを与えて切り離す際に一度肉体はあのように爆発します。しかし当時のオリジナルの肉体を持っていた彼女たちだと普通に死んでましたから爆発はしてません」

「爆発というより拡散かしら。奥底まで魔物に取り付かれたのを払うとなると、一度ああやってばらさないといけないみたい。ただ聖なる力で再生はされるけど、取り付かれていたときに女性化していたせいか、必ず女性になるようね」

ここは潤滑に進めるため、ブレイザも補足だけにとどめる。  
セーラも素直に聞いていた。

他にはアマッドネスにより体を作り変えられた者たち。

それが再生される際に男である遺伝子情報が伝わらず、必ず女性化してしまうのもある。

言うまでもなく元が女なら問題はないが、それでも作り変えられているのには違いない。

その頃。

薫子と桜田は王真高校にきていた。

授業中で生徒に話が聞けないので、空き時間で待機している教師に話しを聞くべく職員室に。

キャロルバイクモードの情報を足がかりにしていたら、二度ほどここにそのバイクが来ていたと証言を得た。

そしてそれがどうやら王真高校生徒会副会長。伊藤礼に合う目的だったらしいとも。

「この辺りも怪人頻出地帯なのよね」

データが頭の中に叩き込まれている薫子が言う。

「うちの方でも『着物姿の女剣士』が倒したなんていう話が出てますがね」

苦笑混じりに中年男性の教師が言う。

「着物？ レオタードや水着じゃなくて？」

「なんですかそりゃ？」

セーラ・フェアリーフォームを見たのは礼。森本。そしてゲーリングだけであった。

(こっちにもいるのね。でもそれより空飛ぶ美少女の方が捉まえ易そうだわ)

話しをさらに聞き、どうやらバイクの主は男。そして福真高校の生徒らしいと判明した。

二人は福真高校へと移動することにした。

再び廃工場。

昼下がりがだが四人の話し声だけが響く。

まさに喧騒から切り離された空間。

「さて。セーラ様。あなたが覚醒したのは確か二月とか」

「え…ええ。そうよ」

黒猫のキャロルが喋るのにはもうすっかり慣れたが、名の通りド―ベルマンの姿の従者が人語を話すのはまだ慣れないセーラだった。

「ブレイザ様は夏だったんでしたっけ？」

入れ替わるようにキャロルがブレイザに確認する。

「そうですね」

「そしてジャンス様がその前の春。四月と聞きます」

「ねえ。もったいぶつた言い方やめない？」

痺れを切らしてセーラが言う。

「順序があります。それに…この方が冷静にお聞きいただけるかと思いいい」

渋みのある男の声で言い聞かせる。

その声に含まれた響きにただならぬものを感じてセーラは引き下がった。

「わかったわ。続けて」

「結論から申し上げます。ブレイザ様。セーラ様。ジャンス様。お三方には恐らく、クイーンの魂のカケラとでも言うべきものがございます」

「!?!?!」

セーラ。そしてブレイザも衝撃を受けた。

「どういうこと。ドーベル。何の根拠があつて」

かすかに震える声でブレイザが尋ねる。

「私、キャロル。それとウォーレンの遣い魔たちは先代の亡くなつた後、転生を待ちました。皮肉にも『クイーンのカケラ』のおかげですぐにわかりました。そう。先代のブレイザ様たちがなくなつた17才に近づくとそれが強くなるのです」

「それでキャロルはあたしのことがわかつたのね」

「はい」

「しかし我々は何度も絶望しました。幾度転生しても男にしか生まれず。さらには粗暴な存在になつてました」

果てしない時を乗り越えて、そして転生を繰り返す。

生まれ変わるのは全て男児。だが少しずつ善性を増していった。た。

「恐らくはクイーンのカケラが戦乙女としての転生を阻害してました。ゆえに男にしかなれず。また性格にも難が」

「それであなたはあんな不良になつたんですのね」

ここで再び見下すような視線を。

この仲の悪さも『カケラ』の影響らしい。

アマッドネスは人間の負の感情をエネルギーとして実体化するが、この『カケラ』は逆に負の感情を増幅していると思われた。

だから礼は『不良学生』の清良を心底見下し、清良も反発したためあの鬨いに至つた。

「なによ。それならブレイザだって高飛車じゃないのよ」

「そうなのですよ。本来のブレイザ様はむしろストイックなお方で、



喋り方もそういう風でした。それが何故かどこかの姫君のような」

「セーラ様も随分と可愛らしくなってしまうますし」

「おそらく伊藤礼としての女性像。高岩清良としての同じく女性像が出るのではないかと」

「幼女シユミなのかしらね？」

意地の悪い目つきで笑うブレイザ。

「ふんだ。あんただって王女というより女王様じゃない」

それを口にしてセーラはあることに気がついた。

「キャラル。どうしてあたしとブレイザじゃこんなに違うの？ それに覚醒時期も」

「これも推測なのですが…」

代わって答えたのは黒犬だった。

「呪い自体はクイーンのカケラが大きいです、その前にセーラ様は奴らを拳で倒してます。つまり直接触れているのが最も多いのです。それだけに奴らの影響を受けたものと思われまます」

「だからあたしが最後まで覚醒が遅れたのね」

「なるほど。わたくしは剣士ゆえに返り血は浴びても、直接の接触は少ない。それなら遠距離攻撃のジャンスがあなのも納得ですわ」

「ねえ。そう言えばジャンスってどんな人なの？」

まだ見ぬ三人目。厳密には一人目に興味を抱くセーラ。

嫌なことを訊くな…そんな表情のブレイザ。

「ご自分で確かめたらいいですわ。わたくしはあまりあの人の話をするのは気が進みません」

(なんか性格に問題あるみたいね)

それ以上追求するのはやめにした。

話はさらに続く。

「クイーンに攻撃した時に呪われたわけね。でもそれがどうして今頃」

「長い年月が経ちましたからな。少しずつ薄れていきます。ただ恐らくはそれは奴がとりもどしているから」

「それで今になってアマッドネスが復活したのね」  
「少しずつ話が見えてきた。」

「それにしてもピンと来ないわね。どうしてもその太古の戦いが思いつき出せなくて」

「癪ですがそれに関しては同意いたしますわ。わたくしもさっぱり」  
「それはあなたの方の覚醒が不完全だからです。肉体は再現出来てますが、精神はまだ途中で」

「だからかつてのセーラ様やブレイザ様と性格が違うのね」  
「引つ掛かりの取れたキャロルの相槌。」

「ですがあなたの方の中からクイーンのカケラがなくなれば、本来の姿と記憶をとりもどせるかと思われませぬ。それに皮肉にも人間を怪人に変えるあの力のおかげで、現代の戦乙女は姿を変える力を獲得しています」

「わたくしのは必殺技のためだけですわ。それで充分」

「漸馬刀を振るうために筋力が強化されガイアフォーム。」

「居合いのため五感が研ぎ澄まされるアルテミスフォームのブレイザ。」

「あたしは前線タイプだからどこでも戦えるようにか」

「ただ先代のセーラ様は『気』を用いて僅かながら宙を舞えました」

「なんだ。空の支配者だなんて大げさに言うから」

「とんでもない。あの時代では10メートルも上に行かれたら絶望するしかなかったですよ」

「ははは。そうかも」

「つまりこういうこと？ 『クイーンのカケラ』があり、それが本来の戦乙女に戻るのを妨害していると」

「それにわたくしたちが共闘しないようにする効果もあるようです」

わね」

「それゆえ先ほどはあそこまでの死闘を演じました。ですからセーラ様。今はまだ無理のご様子。援軍には時期尚早です。なにとぞご容赦を」

頭をたれるドーベル。

「あん。いいわよ。色々わかってすつきりしたわ。それにそういうことなら森本君もわかってくれるでしょ。あたしとしてもこのつるぺた女とはそりが合わないから構わないわよ」

「……………何かいいまして？ カマトト」

再び険悪な空気が流れる。

「言ったわよ。それがどうしたってのよ」

セーラも謝るつもりは毛頭ない。

「よくもぬけぬけと」

互いに相手の頬にビンタを。それが見事にヒットした。

「「はう」「」

激闘の疲労もあり、それがとどめとなって気を失った。

「やれやれ」

キャロルもどつと疲れが。

昼下がり。

さっさと学校に戻った礼に対して、清良はのんびりしていた。いや。学校に行くのを渋っていた。

思わず声をかける従者。

「セーラ様。のんびりしてていいんですか？ 学校に行くのではありません？」

「この精神状態でいけるか！ ああ。まったく。なんだって女になりきるとああまでぶりっ子になるんだ？ 『セーラぶりっ子じゃないもん』って…どこの幼稚園児だよ」

それゆえ落ち着くまで学校に戻らないことにしたのである。

「まあ伊藤の野郎もかなり恥ずかしい思いをしてくれると思うがな。お嬢様口調で貧乳を気にしてたんじゃ、男として恥ずかしいわな」

それゆえか逃げるようにこの場から消え去った。

「しかしこんなな仲が悪いのでは、協力して敵を叩くどころか背中から斬られかねませんね」

キヤロルも若干落胆している。

「それじゃとてもじゃないが一緒には戦えねえ。当面はお前とだけでがんばるがな」

とはいえどそれはあまり楽観視出来ない。その証拠に僅かに共闘できないことを惜しんでいる。

「まあ険悪なものもカケラとやらがなくなってしまえば……」

ここで重大なことに気がついた。

「待て？ それがなくなつて『本来の戦乙女の姿と記憶を取り戻す』

…確かドーベルはそういつていたよな」

「はい……あつ？」

キヤロルはその時点で言葉の意味を察した。

「それつてつまり…クイーンのカケラがなくなつたら完全な女にいや。俺の記憶や人格も消え、セーラになつてしまつて事か？」

それは即ち『高岩清良』の消滅を意味していた。

EPISODE 16 「真相」 (後書き)

次回予告

「ロゼ様」

「何用だ？ 大賢者・スズ」

(そろそろ目障りになってきた…一城薫子が)

「今の娘。誰？ 友紀の顔見て驚いていたけど」

「……どれでもない。アマッドネスさ」

EPISODE 17 『遭遇』

## EPISODE 17 「遭遇」

太古の昔、アマッドネスがセーラたちの守る都市の直前ではった陣。

そのひとときわ豪華な一角に手に杖を持ち、ローブをまとった人物が訪れた。

警護のものと会話を交わし、そして警護が中の人物に取り次ぐ。許可が下り中に入るローブの女。

彼女は中にいた人物に一礼した。

現代風に言うならソバージュのロングヘア。

美人だがきつい印象の顔立ち。

まるでバラのような真紅の唇が印象に残る。

着ているものも現代で和服と呼ぶもの。ただしこれまた血の色のような赤。

「ロゼ様」

「何用だ？ 大賢者・スズ」

スズと呼ばれた女はローブのフードを取る。

年のころなら20代前半。化粧つけがなく少々地味だが、すつきりした美人といえる。

ローブで体形がわからないが、ところどころでメリハリが利いているのを垣間見ることができる。

髪は編みこんで後ろに垂らしてある。

「神聖都市・ミュスアシへの侵攻。思いとどまれませんか？」

「スズ。お前はわらわを笑わせに来たのか？」

「私は真剣です。どうかこれ以上の殺戮はもうおやめください。共存共栄。それこそがこれからの生き方ではありませんか？」

「くだらん！ 弱ければ奪われるだけの話。命も。財産もな。強ければよいのだ」

「奪うばかりでは何も産みません。これ以上虚しい闘いをするのは

どうか考え直して……」

「くどい！」

ピシヤリと跳ね除けるクイーンアマッドネス。ロゼ。

「どうしてもお考えを改めませんか。ならば仕方ありません」

スズは杖の仕込み刀を抜いた。

「お命頂戴して、この戦を止めるまで」

微動だにしないロゼに切りかかる。

## EPISODE 17 「遭遇」

激しい金属音。止めたのもまた刀。ただしこちらは仕込などではなく、厚く拵えた本格的なもの。

いわゆる半月刀だ。

長い髪を無造作に後方で束ねた鎧姿の女が受け止めていた。

「そこをどけ。將軍」

「クイーンの盾。そして剣となるがわが使命。キサマこそ気でも違  
ったか。スズ」

「私は本気だ。この無益な闘いを止めたい。どかぬとあらばガラ。  
お前から倒す」

「戯言を」

將軍が力に物を言わせてスズを弾き飛ばす。むしろスズが間合い  
を取ったというべきか？

「儀式」のために。

スズは左手を腋にひきつけ折りたたむ。握りこぶしの手の甲が下  
に向けた状態。

その手首に右手の手首を合わせている。

それを反対側へと移動させ、それから真ん中へ。ゆっくりとそれ  
を突き出して伸びきったところで右手の甲を下へ。左手の甲が上  
なるように回転させる。

異形へと変化する儀式だった。

スズは異形へと変化する。

黄色を基調とした全身。ところどころに黒い模様が走る。

特に釣りあがった黒い複眼が擁す顔が仮面のようだ。額からは触  
角が伸びている。

ウエストの極端な括れで、異形となったのにどこか女性的。

彼女はスズメバチの能力を付与されていたのだ。

「その力とてクイーンに頂いた物だろう。恩知らずめ」  
將軍。ガラも変化する。

金色に光る大きな目。全身にウロコが。

ガラ將軍の戦闘形態はガラガラヘビのそれであった。

そして衛兵はそれだけではない。



さらに六人が現れた。それぞれが異形へと変化する。これでは暗殺どころではない。クイーンの前から引き離され、表での闘いとなる。

七対一ではあったが逆に言えばスズの実力を示していた。賢者では有るものの同時に戦士としての実力もあった。

一人ずつ確実にしとめて行く。空を飛べるのが何よりも有利だった。

しかし疲労はある。やっと六人を倒したところで、指揮をしていたガラが参加してきた。

「貴様、部下たちを捨て駒に？」

「それがどうした？ 戦とはそういうものだろう」

「許せん」

再び切り結ぶ。実力は互角。だがスズが空へと浮かぶ。

「逃さん」

ガラのわき腹から左右三本ずつの肋骨が肉を突き破って出てくる。そしてなんとそれをミサイルのように打ち出した。

それを空中で全て回避するスズ。高度を取ったの切込みである。だが

「ぐあつ」

六発は避けた。しかしひそかに背中から発射された「七発目」が六発全て回避した直後で無防備な心臓を串刺しにした。

「お…の…れ…」

落下して地面に倒れ伏すスズ。それでも剣の先をガラに向ける。それを撃ち出した。

「ふん。猿真似か」

断末魔と思ひ余裕で避けた。そこに油断があった。刀身がリモートコントロールされて、ガラを串刺しにした。

「き……きさまあつ……」

ドボドボと流れ出る血。いくら異形でもまず助からない。両者共

に異形から人の姿へと戻る。

「ふ…ふふふ…クイーンにはもう届かないが、せ…せめて盾であり剣であるお前をしとめれば考え直してくれるかも知れぬ…」

スズは勝利したかのように微笑んで絶命した。そしてガラも息絶えた。

口ひげの中年男はそこで目を覚ました。ひどい寝汗である。

（あのと時の夢か…それは私ガラ。お前との同化が進行してきたから見たものか？

それともそうではなくお前の記憶を横から見たということか？）

（どちらかな。私にもわからん。しかしミュスアシの民の末裔に、我々に近いものがいたとはな。だからお前は自我を保ちながら私と肉体を共有できるのか）

（ふ。光荣だな）

男はパジャマを脱ぎ捨てシャワールームへと向かった。

その頃、福真高校の校門では伊藤礼が高岩清良を待ち構えていた。その時間の話。

スーツに着替えた男は職場へと出向く。

その際にも頭の中での「会話」が続く。

（しかしあの時の夢をまだ見るとは…さすがに自分を殺した相手のことは忘れられないか）

（もう一度あつたら今度はやつだけ殺してやりたいものだ。もっとも奴は我々と考え方が違っていたから、お前たちの言う「欲望」を糧として実体化は出来まい。出来るとしたら自分を捨てて民のことを考えるようなバカ相手くらいだが）

（そういう「バカ」に一人だけ心当たりがあるがな）

（……そんな奴がいるのは望ましくないな）

（わかっている。それに奴はやたらに精力的にこの事件に首を突っ

込んでくる。そろそろ目障りになってきた…一城薫子が)

昼下がり。

清良は重い気分で高校へと向かっていた。

本人が歩いてではなく、キャロルバイクモードが運んでいる形だ。ドーベルの仮説。それが自分の消滅を示すもの。気が重くなるのも無理はない。

「セーラ様。ドーベルの言った事は単に仮説ですから、あまり気になされてはお体に触りますよ」

「まあな。だが…：…気にするなつてのは無理な相談だ」

どちらかというと言ったと豪快なほうに入る性格の清良だが、これはさすがに考え込む。

ガラと同化した男は「職場」で思案していた。一人だけの部屋。

「消しておくか」

彼はインターホンで一人の男を呼び出した。

やがて呼び出された人物が現れた。

何の変哲もない青年。メガネくらいしか特徴がない。

しかしぞつとするほど冷たい目。

その反面。まさに犬のような忠誠心を表情が物語っていた。

「ガラ將軍。アヌ。ただ今参りました」

「ここではミュスアシの言葉を使い」

アマツドネスは自分たちが滅んだ都市。ミュスアシの後に出来たこの町。東京をミュスアシと同一視していた。

一応は潜伏している身である。カモフラージュは徹底しないといけない。

「失礼しました。三田村警部。ご用件は？」

「適当な奴らを見繕ってこの女を始末させる。いいな。軽部」

盗聴を嫌い主語を省く。見せた写真は薫子のそれ。

「はっ」

疑念すら抱かない。彼もまたアマツドネスに取り付かれた存在。そして太古にスズによって斬られた者。

警視庁の警部。それが今のガラ將軍の社会的地位であった。

福真高校の近くのファーストフード。

いくら聞き込みの最中とはいえど食事はする。

桜田がエンジンをかけ、薫子が車に乗り込んだときにちょうど清良が通り過ぎた。

(いた！ 例のバイクの目撃情報がここにもあったから来たけど、いきなり本人に出会うなんて)

清良は気乗りしないこともありゆっくりと走らせている。

だから発進が間に合った。

横に並ぶと呼びかける。

「ねえ君。ちょっと話がしたいの。いいかしら」

「はあ？」

最初に連想したのはいわゆる逆ナン。

しかしよく見ると三浦半島で出会った女の顔だと思い出した。

心配事など吹っ飛んだ。とうとう自分のところまでたどり着いたか。

迷ったが逃げるよりむしろ学校に入ることにした。

確かにケンカなどはしよっちゅうだったが、ここ最近ではアマツドネス相手に忙しく、普通の人間まで相手にしてられなかった。

つまり警察に追われる理由もない。

だから校内に逃げ込めば放課後までは踏み込めない。

清良は決断するとスピードを上げて校内に。

「もう。でもその態度。もしかして」

核心に近いものを感じた二人は張り込むことにした。

本当は乗り込みたいが、何しろ「正義のヒロインがここにいるはずです」などといえるはずもない。

だから出て来るのを待つことに。

バイクで逃げるなら正門から。だから薫子は車で正門に。裏門は桜田が張っていた。

警視庁内の留置所。様々な被疑者が拘留されている。

そこに軽部は現れた。中までは行かず、入り口前でたむろしている。

（ふん。催眠術を悪用した医者。そして放火魔か。どす黒い感情は持っているようだ）

そして人の目には見えない二つの「魂」に「イオ。エバ。行け」と命じる。

やせこけた放火魔・斎川の中にイオと呼ばれた魂が。

太った悪徳中年医師・鯖江の中にエバと呼ばれた魂が入り込む。

斎川はイカの特性を持ったスクイッドアマッドネスに。

そして鯖江はハエの特性を持ったフライアマッドネスに変化した。

（行け。お前たちの使命は一城薫子の抹殺だ）

怪物の出現に恐慌に陥る留置所だが、他の拘留者には目もくれず、二人は窓の鉄格子を破り脱獄した。

放課後。清良は帰るに帰れなかった。

明らかに待ち伏せしている。

不良相手なら深く考えずに蹴散らす、さすがに警察相手にはやりたくない。

「しゃーねーな」

清良は屋上に出た。

飛んで逃げる手もあったが、そんなことをしたらここにセーラがいると教えているようなものである。

幸い（？）自分は不良のレットルを貼られている。

だから警察から逃げ回るのは不自然でもない。

なんとか目をくらませたかった。

屋上で誰もいないことを確認。そして変身した。

それからガントレットをリストバンドに変えて校舎内へ。

女子トイレに飛び込む。そして伸縮警棒を取り出す。

「応用で出来るかな？」

意識をこめてみたらメガネへと変化した。

「やって見るもんだな。それなら」

二本持っているもう片方を今度はカチューシャへと変化させた。

前髪を全て後ろへ長し、それをカチューシャで止める。

「結構印象変るな。おっと。いけね」

タイの色を変化させる。この年の一年の使う白である。ちなみに

三年は黄色。

一年女子に変装したセーラは下駄箱へと。

そこで新体操部に向く友紀たちと出くわした。

さすがに驚いた表情が出たが、知らぬ顔で通り過ぎた。

「今の娘。誰？ 友紀の顔見て驚いていたけど」

「さあ？ タイが白いし、一年じゃ。誰か知り合いと見間違えたの

かもね」

友紀はセーラを見ていない。だからごまかされるのも無理もない話しである。

そして拍子抜けするほどあっさりと脱出成功。

変装と言えば顔を隠すイメージがある。まさか額を見せて顔がよく見えるようにするのは、薫子も考えなかった。

ある程度過ぎてから

「ふう」

ため息を吐き出すセーラ。人目がないのを確認してから一気に元

の姿に戻る。

「あぶねえあぶねえ。あのまま続けていたらまた心が女になってい  
たぜ」

商店街でキャロルと落ち合うつもりで連絡する。そこでの時間つ  
ぶしが必要になった。

定時連絡で薫子が福真高校を張り込みしているのは知れている。  
だが薫子はセーラを追っているらしい。つまりこの高校にセーラ  
がいる可能性もある。

ここでなくとも近隣にいる可能性は無視できない。

そのそばで事を起こせば邪魔されるのは目に見えている。

「どうやってここから連れ出すかな」

物陰に隠れて薫子の覆面車を見ている斎川がつぶやく。

「そうだな。こんなのはどうだ？」

自信満々な鯖江が反対方向に歩き出す。

学校をサボったと思しき若者が商店街でたむろしていた。

それを見つけた鯖江は真っ直ぐに歩み寄る。

無関心だった三人の若者は、その鯖江の態度に異常を感じ取った。

「なんだ？ てめえ」

「ポリか。それとも補導員か」

威圧的に顔を近寄せてくる。それに対してにやりと笑う鯖江。

「……どれでもない。アマッドネスさ」

目が光る。その途端に三人の男は意識……むしろ意思を失う。

催眠術で操作したのだ。そして三人の暴力に対するリミッターと、  
物欲に対するリミッターを解除した。

つまり……無差別な強奪が始まった。

「本部より入電。福真署官内の 商店街で強盗発生。付近の移動  
は急行されたし。繰り返す」

こんな事件がおきては清良の張り込みどころではない。  
薫子は車を発進させて裏に回り桜田を乗せる。そして現場へと急  
行する。

その頃、清良は当の商店街の端っこのほうにいた。  
そうしたら騒ぎが起きている。

（「感触」はねえからアマッドネスじゃないか。だが何か揉め事か  
？）

ちょうどそのときにキャロルが到着した。小さな猫の姿では何か  
と無理がある。

（行きますか？ セーラ様？）

（しゃーなーな）

すっかり「正義の味方」が身についたせいも、キャロルともども  
とりあえず見に出向いた。

薫子の駆る車が現場に着いた。

「やめなさいっ」

甲高い声で叫ぶ。まるでそれが合図かのように、糸の切れた操り  
人形のごとく崩れ落ちた。

「なんだ？ こいつら」

桜田がつぶやく。しかし異変は序の口。

「ちよっと……どうしたんですか？ 皆さん」

八百屋。魚屋。パン屋。本屋。スーパーの店員。学生。主婦と思  
しき人物もいる。

それが二人をぐるりと取り囲んでいる。

「ふふふふ。一般市民に取り囲まれては、手荒な真似も出来まい」  
鯖江が現れた。

「お前……いつのまに脱走した!？」

刑事だけに最近の逮捕者の顔くらいは覚えていた。

「ふふふ。こっちにもいるよ」



「お前は…連続放火魔の齋川!？」

一体誰が警視庁に拘留されている二人を逃がしたというのだ？

「エバ。ここからはあたしがやるよ」

齋川はイカを思わせる異形へと変化した。

「あ……アマッドネス？」

被害者は数多く見たが、怪人そのものは初めてだ。恐怖する薫子と桜田。

その恐怖を倍化させる行為にスクイッドアマッドネスは出た。

口から火炎放射器のように火を吐いたのだ。

「まったく。イカ墨に相当する物がガスになって燃料となるとは、アマッドネスの中でも変わり者だ」

勝ち誇ったもう一体。いつの間にか変化したフライアマッドネスが、巨大で不気味な複眼をぎらつかせて言う。

「力」を得て得意げな犯罪者たち。「肉体」を得て浮かれているアマッドネスたち。油断があった。

リングの外での音に気がつかなかった。

操られている面々を飛び越えてバイクが飛び込んできた。そしてそのままスクイッドアマッドネスの後頭部に車輪を当てる。

「ぎゃっ」

さすがにたまらずつんのめり、攻撃を中断。

「何してんだよ。こんなところで」

飛び込んできたのは清良だった。二人の刑事に怒鳴りつける。

「知らないわよ。暴動が起きているというから駆けつけたらこれだもん」

「ちっ。はめられたか。俺か？ それとも」

清良の姿のまま戦う羽目に。

さすがに商店街で変身は出来ず、キャロルバイクモードで走っていたらアマッドネスを感知。

とりあえず飛び込んだのである。

「げ。二体かよ」

アマッドネスの常套手段として、まず人を襲い「戦闘員」に。そして仕上げが自分自身。が多い。

清良もそうだと思いこんでいたが、これは全てフライアマッドネスの催眠術によるコントロール。

ちらつと二人の刑事を見る。

「仕方ねえ。この周りは操られて正気じゃないようだし。あんたらだけならな」

清良は右手を天に。左手を地にかざした。その手にガントレットが出現する。

「くおお」

この間にスクイッドアマッドネスはやっと立ち上がった。

何しろバイクで後頭部を蹴り飛ばされたのだ。普通の人間なら死んでいる。

清良は両手を水平にすると、思い切り腋に引き寄せ、

「変身！」

両腕を突き出して交差させる。

眩い光と共に大柄な少年は、小柄な少女戦士へと変わる。

「や……やっぱりあなたがあの……」

目を見開いて興奮したかのようにつぶやく薫子。

それを肯定するかのようにセーラは、アマッドネスたちに宣戦布告代わりに名乗る。

「戦乙女えっ！ セーラあっ」

## EPISODE 17 「遭遇」 (後書き)

### 次回予告

(最優先は一城薫子。だがセーラが邪魔なら始末しろ)

「ええ？ 狙われていたのってあたし!？」

「アマッドネス？ あたしたちがコードネームとして呼んでいた名前だけど、それは正式名称なの？」

「いえ。セーラ様。警察の協力をおおげれば、随分と戦いやすくなるはずですよ」

## EPISODE 18 「相棒」

## EPISODE 18 「相棒」

「ほう」

スクイッドとフライ。

二人のアマッドネスの成果を見届けるべく、通りすがりを装ってその場を見ていた軽部は軽く驚く。

本命はあくまで一城薫子の始末。

しかしその場にセーラが飛んでくるならいざ知らず、目の前で変身して素性を明かしてくれるとは。

（もつともこの場で倒してしまえば意味はないか。さて。命令どおりに一城を始末か。それともセーラからか？）

当然ながら暴動の起きている地区に警官が集まる。

いくら多人数といえど制圧されるであろう。

（最優先は一城薫子。だがセーラが邪魔なら始末しろ）

結局こういう指令しか出せない。

180を越える大男が160もない小柄な美少女へ。  
変身するとはきいていたものの、漠然と同性と思いこんでいた薫子である。

(まさか正体が男だなんて……でも三浦半島で見たときはちゃんと胸もあつたし、プロポーションも声も女の子だったけど)  
探し当てた「正義の味方」は想像の斜め上ではすまない存在だった。

ジリジリと輪が狭まる。

フライアマッドネスの触角がせわしく動いている。

決め付けるのは危険だが、かなりの確率でこれでリモートコントロールしている。

そうセーラは考えた。

「セーラ様。お気づきですか？」

「ば…バイクか？ AIでも搭載しているのか？」

周囲に警戒しつつも桜田は驚いた。

「ああ。わかっているよ。『男』がいるよな」

男をくだらない存在と考えるアマッドネスは、優秀な男だけ「種」として残し、それ以外は殺していた。

やがて術を操れるようになると、殺すと言う非生産的な行為でなく女に作り変えるようになった。

したがってアマッドネスに襲われた男はみな一部を除いて女になる。

だがこの取り囲んでいる連中には男がいる。  
学生。中年。老人。年齢もバラバラだが、まごうことなく男である。

つまりアマッドネスの「奴隷」ではない。

「催眠術か何か？ くそ。奴隷になった状態なら多少ぶつ飛ばしてもそんなにひびかねえが、ただの男じゃ怪我させちまう……」  
さりとて自分たちが代りにやられる道理はない。

サイレンが迫る。程なくしてパトカーが到着した。

暴動となると機動隊の出番だが、相手は武装勢力というわけではない。

商店街とあつては威嚇射撃とも行かず怒鳴って威嚇する。

しかし意思を奪われたものたちはまるで相手にしない。  
ならばと実行使。取り押さえに来る。

十数名の「暴徒」と6名の警官。

人数は不利でも鍛えている。だから輪を崩せた。

「ええい。サツに構うな。一城薫子を殺せ！」

「ええ？ 狙われていたのってあたし！？」

何てことだ。狙われている自分から畏に飛び込んだと。

「そういうことか。だったら話は早い。キャロル」

「はい」

既にコンビを組んで長い。意思が伝わるようになってきた。

キャロルは本来の白い天馬に戻る。またがっていたセーラは飛び降りると、薫子をいわゆる「お姫様だっこ」で抱えキャロルの背に。そのまま空を飛ぶ。輪から脱出するとバイクモードに。

バイクに追いつける人間はいない。催眠で操られていた人間たちはほったらかして二体のアマッドネスは追跡を開始した。

解体中のビル。その三階部分に二人と一匹はいた。

セーラは若干躊躇ったが、薫子の目前で元の姿に戻った。

「……驚いたわ。関係者かもとは思ってたけど、まさか本人とは」

さすがに薫子も壁を背にへたり込んでいる。その横に座る清良。

「俺も驚いたぜ。こつちを追っていたあんたが、今度はアマッドネスの標的だ」

「アマッドネス？ あたしたちがコードネームとして呼んでいた名前だけど、それは正式名称なの？」

ひそひそ声だが女の声。結構響く。

「大昔からの由緒ある名前らしいぜ」

清良の方は男らしい太く低い声。

「大昔？ 何でそんな奴らとあなたが戦っているの？」

職業柄か、どうしても尋問調になってしまふ。

「それは……あいつらが気にいらねえからだよ」

ウソではない。

男としての人生を歩んできたものを、勝手に女に変えてしまう「暴力」に怒りを感じていた。

もっとも本音としては「実は太古の戦乙女の生まれ変わり」などと説明する気にはなれなかった。

「私が補足しますね」

ちよこんと座る黒猫が、女の声で喋る。

「バイクと思えばペガサス。そして今はネコの姿…なんだか頭がこんがらがるわ」

まったくの本音であった。

「キャラルと申します。以後よろしく」

「おい。何のつもりだ？」

「いえ。セーラ様。警察の協力をあおげれば、随分と戦いやすくなるはずです」

「……」

確かにそうだ。色々やりやすくなる。ましてやブレイザやジャ

ンスの協力を期待できない今ならなおのこと。

「勝手にしろ」

ふてくされたように横になる。彼らしい照れ隠しだ。

「ではお言葉に甘えまして」

キャロルの説明が始まった。

その頃、人の姿に戻った斎川と鯖江。

鯖江が催眠の力で人々を操り、薫子たちを探させていた。

今度はランニングしていた大学の空手部や、作業中の肉体労働者など腕に覚えの面々をえりすぐって支配した。

そして廃ビルに入ったと言つのを突き止めた。

薫子も警官である。

相手が自分に不利なことを喋らないのは百も承知していた。

それでもキャロルの話は信じて見る気にさせた。

本当に戦ってきたものゆえの迫力ということか。

ましてや辻褄が合う。これまで幾人もの『被害者』を見てきたのだ。

キャロルの話はぴったり一致するのだ。

「いいわ。協力しましょ」

「な」

期待していなかったと言えはうそである。

しかしこんな軽く言われるとは清良も予想してなかった。

思わず跳ね起きた。

「マジか？ あんた。見ただろう。あの化け物どもを」

「ええ。見たわよ。別に怖くはないわよ」

「強がりはやせ」

思わず声が強くなる清良。それでも薫子は怯まない。それどころか微笑む。

「あんな見た目で悪そうな奴ら。わかりやすくして良いわ」



「何を言っただ？ あのなあ」

面倒そうに説得する清良。それを遮り、落ち着いた声でつぶやく薫子。

「本当に恐いのはね、善人のような顔をして、簡単に自分の弱い心に負けて平気で暴力を振るう相手よ」

犯罪者相手の警察官である。人間の闇の部分を見てきた。

綺麗な顔をどれだけ無念で歪ませたのか。

心の弱さから悪に走る。

その点ではアマツドネスに取り付かれたものたちもそれに近い。

薫子はそれを相手にしてきた。

そのせいか清良は同様に戦ってきた薫子に親近感を覚えた。

薫子が手を差し伸べる。躊躇うが清良も手を合わせる。

「これからはパートナーよ。仲良くしましょ。相棒」

「……相棒って言うな」

気配を隠そうともせずフライアマツドネスの操る男たちが迫る。奴隷として作り変えていないので、セーラとしても簡単に手を出せないのが狙い。

もちろん薫子の抵抗を封じる目的ある。

気配をむき出しなのはいぶりだす作戦だ。

ある意味狙い通り。薫子や清良にも気配が伝わる。

「ちっ。見つかったか。ちと目立つが空から逃げる手も」

「それよりこんなのはどうかしら？ ああ。変身した方がいいかな」

薫子の提案は……

階段は一つしかない。

それを鯖江が先導して登っている。

三階に迫る。甲高い女の声が二つ。罵り合っている。

「ああもつ。あんななんか探すんじゃないわ。とんでもない目に合わされて。この責任どう取ってくれるのよ?」

「それはこっちのせりふだ。足手まといのクセに首突っ込みやがって」

既にヴァルキリアフォームのセーラと、薫子が罵り合っている。「?」

怪訝な表情になる斎川と鯖江。

(いぶり出しの効果が出たか?)

恐怖から恐慌に陥ったと解釈した。

(他愛もない)

笑いたいのをこらえて斎川たちは「変身」した。

全員を突入させる。驚いた表情になる二人の女。

「くくく。ははは。これが戦乙女。そして民を守る存在か。片腹痛い」

本気で笑っていた。

自分たちが絶対の有利と確信しているからだ。

「なんとも言いなさいよ。やってられないわ」

セーラはフェアリーフォームになると、窓から飛び去った。

「逃げた。戦乙女が我らに恐れをなして逃げやがった」

ますます笑いがひどくなる二人。

「おい。一城はあたしが始末するから、あんたはセーラを追いな」

「わかった。なあにあんな腑抜け。あたし一人で充分さ」

フライアマツドネスも空に舞う。

「ふふふ。さあて。女刑事さん。戦乙女に裏切られ、絶体絶命の気分はどうだい?」

「絶体絶命? どこが」

薫子の強気な微笑。とても相手に責任を擦り付け合っていたとき思えない。

「強がりはやせ。ここは三階。そしてこの人数相手にどうやって逃

げる気だ？」

「あたしが戦うのはあなただけよ」

「忘れたか。この男たちはエバの催眠で……」

スクイッドアマッドネスはハツとなる。

指令を与えるフライアマッドネスはセーラを追って行った。

つまりこの男たちは誰の命令もきかない状態。

「あなたの『相棒』の『催眠』。どれくらいの距離まで有効なのかしらね？」

本物の催眠術なら術者がいなくてもきき続けよう。

だがフライアマッドネスは指令を与える際に触角を動かしていた。

つまり何かしら「電波」のようなものを出していた。

その「有効距離」である。ましてやここはビルの中。遮蔽物もある。

「さ…さては、我らを分断するために芝居をしたな？」

「大当たりい。ほんと単純で助かるわ」

「お…おのれえ」

逆上して火を吹くスクイッドアマッドネス。だが薫子は柱に隠れる。

「伊達にここに逃げ込んだわけじゃないわ。ここなら柱に逃げられるわ」

その頃、十分な高度を取ったセーラはフライアマッドネスに向き直った。

コンビの「相棒」をチラッと見るが青い空があるだけ。

「…しまった。ここでは一対一かつ」

「そういうこと。彼女の迫真の演技に騙されて、勝ち誇ったのがあなたの敗因よ」

既に時間が経過して精神の女性化が始まっているセーラ。

「くっ」

こうなると逆に男どもが邪魔だ。

スクイッドに襲い掛からないまでも、薫子はその混乱を利用して逃げることは考えられる。

(コントロールせねば)

ついフライアマッドネスは下へと意識が向いた。それが命取りだった。

セーラ・フェアリーフォームがもともと頭上。それがそのまま脳天目掛けて蹴りを見舞う。

「ライトニングハンマー」

いかに軽量で非力のセーラ・フェアリーフォームでも、脳天に全体重を。しかも加速つきでかけられてはたまらない。

フライアマッドネスは脳震盪を起こしてふらつく。

なんとか姿勢を保ち、墜落を免れている「だけ」のフライアマッドネスが多大な隙を見せている。

その機を逃す手はない。

「今ね」

セーラは伸縮警棒を取り出した。それをいつものようにクラブへと変える。二本ともだ。

そして高速で飛翔して横薙ぎにする。薄い羽根を引き裂く。

「ぐああっ」

これで空中の自由を失った。

さらにセーラは追い討ちとばかりに触角を叩き潰した。

これでリモートコントロールも絶たれた筈だと考えるセーラ。

立て続けのダメージで、ふらふらと地上へと落下し始めたハエ女。「あつと。まだよ。空中で人間に戻ったら地面に落ちて死んじゃうわ。そうならないように」

セーラが地面に押し込むように運ぶ。

廃ビルの中。

「あれ？ 何だここ？」

「確か走りこみの最中だったはず？」

フライアマッドネスのコントロールが完全に切れ、正気に帰った男たちが辺りを見回す。そして

「わああっ。何だコイツ」「イカの化け物だああああっ」

我先に逃げ出した。残されたのはスクイッドと薰子とキャロル。

「ば…バカなあ…」

狼狽していたら窓から「相棒」が飛び込んできた。

ただしセーラに押し込まれて。そのままスクイッドに激突。

「ぐあああっ」

フライアマッドネスはその衝撃で断末魔をあげ爆発四散。中年女だけが残った。

スクイッドは辛うじて昇天を免れた。

「ああ。なるほど。この調子で増えるわけか」

やっとそれを理解した薰子。

「きさまあ」

逆上したスクイッドは火炎放射でなく、生体ナパームとして「イカ墨」を使う。

闘いの場数を踏んでいるセーラはそれを見越して既にヴァルキリアフォームに。

発射されるものを回避。あるいはガントレットで防御しつつ接近。そのうちに生成の限界が来た。

「し……しまった」

「もらったわっ」

セーラの左手がスクイッドの胴を尻ぐ。凍りついたように動きが止まる。

そこに右手の強烈な大振りアップー。

十字を描いたそこから炎が吹き上がる。

苦悶の声を上げるスクイッド。しかし仰向けにひっくり返ると「相棒」同様に爆発して果てた。

戦いの一部始終を見ていた薫子は驚いていた。  
そしてセーラが人類の味方と認識した。

「やったわね。相棒」

「相棒なんて呼ばないでください」

すっかり「女の子」の性格になったセーラが、上目遣いで薫子に言う。

「セーラって呼んでください。お姉様」

「お…お姉さま？」

「うふ。頼もしい味方ですう。もうキャロルとだけ戦わなくてもいいんですね」

セーラは幼子のように薫子の胸に飛び込んだ。

薫子の「母性本能」が刺激をされて、思わず抱き締める。

「もう。可愛いんだからっ。でもどうしていきなり？」

「あー。それはたぶん」

今回は傍観者になっていた形のキャロルが、ここぞとばかりに説明を開始する。

「太古のセーラ様は孤児でして、しかも最年長でした。厳しく指導してくれる師匠はいても、甘えさせてくれる存在はいませんでしたからね。それに孤独な闘いを強いられてましたし。それではないかと」

「そっか……あたしでよければお姉さんでもお母さんでもなっただけよ」

「嬉しいです……お姉さま」

きらきらと潤む瞳で見上げるセーラ。

（よかったですね。セーラ様。味方が出来て……明日の朝が大変だけど）

従者の杞憂を他所に「姉妹の契り」を交わした二人の抱擁は続いていた。

警視庁。軽部の報告をきいていた三田村。

「警部。一城薫子はどうします？ また誰かを」

「かまわん。蘇えるかどうかもわからん『強敵』より、確実にいる敵を倒す。まずは変身前の素性を洗え。そこから糸口が見つかるはずだ」

標的はセーラその人でなく、周辺にあった。

EPISODE 18 「相棒」(後書き)

次回予告

「頼んだわよ。相棒」

「ならば六武衆が一人。ルコではいかがでしょう。まだヨリシロが見つかっておらず魂のままです」

「えい。へんしーん」

「じゃあ本当にお兄ちゃんなんだ？」

EPISODE 19 「家族」



## EPISODE 19 「家族」

5月の終わりごろの日曜日。まだ午前中。

疾走するキャロル・バイクモード。当然ながら乗っているのは高岩清良。

極力変身時間を短くする。そして目立たせぬため移動に飛翔能力のあるフェアリーフォームにならなくて済むように、キャロルはこの姿をとる。

太古の昔は翼の生えた天馬。姿は違えど戦乙女の足となっていたのには違いがない。

追っているのは車の屋根から屋根を移っているサルの意匠のアマツドネス。

仮の名としてモンキーアマツドネスと呼ぶ。

その身軽さで飛び移り続け、清良に攻撃チャンスを与えない。

だが清良の戦い方が変わった。

個対個ではなく組織がかりである。

その証拠というか封鎖をかけられて、車の流れ自体がモンキーの意図せぬ方向に誘導されている。

その行く先に林が見える。

得意の立体戦闘でセーラを倒す。あるいは逃げ切ると決めたモンキーはそこでの決着を選択した。

むろんこれは薫子の差し金で、警察が検問などで封鎖をかけている。

まんまと戦場へと誘導された。

EPISODE 19 「家族」

林に飛び込むモンキーアマツドネス。

それを追って無造作に突っ込んでいくバイクを駆る清良。

「頼んだわよ。相棒」

「相棒って言うなああああっ！」

走るバイクと地に立つ人の中で瞬時にそのやり取りだから、薰子も並大抵ではない。

それを閉じ込めるかのようにパトカーが取り囲む。これは他の封鎖から駆けつけてきたため遅くなった。

故に中に清良たちが飛び込んだのを見ていない。

見ていたなら当然それを静止する。そうならないようにタイミン  
グを見計らって薫子が連絡した。

ここまで何度か協力してアマッドネスを退治している。  
だいぶ息が合ってきた。

「さてと」

彼女は清良だけに闘いを任せるつもりは毛頭ない。  
覆面車にのせていた「武器」を取り出した。

音もなく走り、そして止まるキャロル・バイクモード。

本来はこれでいけるが、騒音をまかないバイクはない。

偽装のため普段はあえてノイズをばら撒いて走る。

ここでは偽装が無用だったので、静かに走り止る。清良はひらりと飛び降りる。

格好をつけているわけではない。のろろしていたら襲われるからという理由。

「頼むぞ」

「お任せください」

これは変身中に襲われることを念頭においてある。

一番の無防備。そこを襲われてはたまらない。

だから従者に守りを任せる。

キャロルはバイクの姿から天馬の姿へと変わる。これこそが彼女の本来の姿。

そして威圧か牽制。あるいは探索で首を動かしている。

その間に清良は「儀式」に取り掛かる。

脚を七三に開き、右手を天に。左手を地に向ける。その刹那。

「きしゃーつつつつ」

奇声を上げてモンキーアマッドネスが頭上からロッドを振り下ろしてきた。

しかしそのための天馬姿。キャロルが跳躍してモンキーアマッド

ネスを突き飛ばす。

「このやるう」

「変身ポーズ」はスイッチである。

しかし戦う心積もりが出来れば、瞬時に切り替わることができる。皮肉にも襲われたことで、瞬間的に戦乙女セーラへと変身した清良である。

「けけーっっっ」

サルの能力だけに俊敏性が並大抵ではない。

バックジャンプをしたかと思えば、そこからいきなり前へ跳びセーラに襲い掛かる。だが

「キャストオフ」

瞬時にセーラー服を模した「布の鎧」を吹っ飛ばす。

その「破片」がモンキーに命中して怯ませる。

この隙にセーラは右手のガントレットを叩く。

「超変身」

変身直後のセーラー服姿が便宜上エンジェルフォームと呼ばれている。  
これは防御重視の形態。また特殊能力として衣類を自在に変化させられる。

続いたのがヴァルキリアフォームと呼ばれる運動性能重視の形態。そのイメージで女子体操着姿なのである。

エンジェルフォームと違い、着衣の部分だけしかガードされていないのだが、その分の「魔力」が攻撃に回っている。

またバランスがよいが、言い換えれば特化した部分がない。

そしてセーラはその特化した形態へのチェンジをなそうとしてい

た。

瞬間的に体操服が散り散りになり、レオタードとして再構成される。

新体操の選手を連想させるこの姿は、フェアリーフォームと呼ばれる。

攻撃力。防御力を犠牲にはするが、すべての形態でもっとも速く、そして俊敏な姿であった。

身の軽い相手に対抗するにはこれしかない。

薫子は長い包みを手にして林の中を走る。

フェアリーフォームは他のフォームにはない飛翔能力がある。

しかしこの雑木林では樹木が邪魔で飛行に難がある。

結局は枝から枝へとモンキーアマッドネスとの鬼ごっこだ。

身軽さでは一番だけに遅れは取らないものの、つかまえるのはさすがに骨だった。

モンキーが跳ぶ。そこへ目掛けてセーラも跳ぶ。しかしそのときには既にモンキーも次の枝へと飛んでいる。

狙いは二通り。

セーラがミスした瞬間に逃げるか。あるいは攻撃を仕掛ける。

そんな鬼ごっこが延々と続く中、薫子が現場に到着した。状況を把握する。

跳んでくるモンキー。それを追うセーラ。ちょうど一直線。

薫子はさらに確認する。この延長線上にある樹木を。

ちょうど「通り道」にある木。そしてそこから飛び移る枝が前方にしかない木。

薫子はそこに狙いを絞った。

「このお。待ちなさいよ」

時間が経ち、セーラは既に女性精神へと変わっていた。枝から枝へと跳びはねるモンキーアマッドネス。セーラを振り切るうと試みるが食らいついている。

逃走を諦めたか飛び移った枝で反動をつけてセーラに向かってジャンプ。

同時に隠していたロッドを取り出して、2メートルまで伸ばした。「ききーっっ」

両手で持ち突きを見舞う。

「おっと」

防御力の弱いフェアリーではあるが、ひらりとかわして直撃を避ける。

そのままモンキーとの間合いを詰めて、手にしたクラブの「射程距離」に。

ジャブのように繰り出す、これをロッドで受け流して防御するモンキー。

「如意棒のつもり？」

孫悟空のそれである。

ふたたび逃走を開始するモンキー。留まっていると警官隊に囲まれる。林の中に突入したものたちもいるのだ。

銃弾は通じないといえど撃たれたくはない。枝から枝へと逃げ出す。

ところが飛び移ったはずの枝が砕け散った。自分で砕いたわけではない。薫子が狙撃したのだ。

素早く動くモンキーを撃つのは至難の技でも、止まっている枝ならさほどでもない。

これにはキャロルのアシストもある。

彼女が状況を伝えたために薫子に現状が伝わり、そして先回りしてモンキーの飛び移る枝を予測して狙撃できた。

哀れモンキーは空中の落とし穴にはまり地面に落下。したたかに

体を打ち付けて動きが止まる。

そこを目掛けてセーラ・フェアリーフォームが蹴りを見舞う。寸前でヴァルキリアフォームになる。

「ヴァルキリイイイイツキイイイツクウウツ」

「きゃきゃーつつつつ」

まともに食らったモンキーは爆発四散。若い女へと再生される。

「やったわね」

薫子が親指を突きたてて「首尾は上々」とばかりにサムズアップ。

「はい」

すっかり女の子モードになったセーラは、頼れる助っ人に花のような笑顔で答えた。

爆発音を聞きつけて警官が集まってきた。

セーラはふたたびフェアリーフォームになると、天高く飛び上がって行った。

林の中だ。木々や枝が視界を遮り、あっと言う間にセーラを追う事は出来なくなっていた。

……だったのだが、セーラが薫子の前に現れた。

一応は服を変えている。ピンクのブラウスと赤いプリーツスカートだ。

薫子を撒こうとしたときに困ったので、今では髪を留めるためのゴムも持ち歩いている。

それでショートツインにしていた。

「お疲れ様。後は私たちが始末しておくわよ」

「あの……お姉さま。ここ、どこなんでしょう？」

無我夢中でモンキーを追ってきたのである。どこを走っていたかはわからなかった。

これはキャロルも同様。天馬の姿で空に駆け上がれば何とかかわかるのだがあまりに目立つ。

「送るわ。住所教えて」

カーナビに入力してルートを出すためだ。

その頃、警視庁では三田村が軽部に尋ねていた。

「セーラの潜伏先はわかったか？」

「はっ。あの風貌。どうやら相当に目立つらしく、一城の聞き込みした高校で証言が取れました。名前は高岩清良。既に住所も調べてあります」

ケンカによる補導暦。そこで住所が判明した。

「よし。セーラを倒す。あるいは邪魔をさせないための兵を選べ」

「ならば六武衆が一人。ルコではいかがでしょう。まだヨリシロが見つかっておらず魂のままです」

六武衆とは太古の戦のときにクイーン。ロゼを守った兵たちのことである。

軽部に憑いたアヌ。ブレイザに倒されたスコーピオンアマッドネス。ススト。

そしてこのルコ。他にも三体が存在するが状況ははっきりしていない。

ちなみに全てがスズの手により斬殺された。

報告を聞いた三田村は満足そうに頷く。

「良いだろう。ルコをこの高岩という小僧の近親者に憑かせる。そうすれば手出しできまい」

覆面車の中。セーラはいつにもましてハイテンション。そして饒舌だった。

何度もアシストを受けてすっかり薫子を信頼している。

それ自体はいいことである。ただ若干「甘えん坊」の印象が。



薫子もこの状態のセーラを妹のように可愛がっていた。

「あの……セーラ様。少しお休みになられては？」

「平気よ。このくらい疲れた内に入らないわ」

「いえ。そうではなくて眠ってリセットをしないとちょっとまずいことよ……」

しかしセーラも薫子も話に夢中になり、聞いていなかった。

セーラにしてみたら秘密を共有できる相手。

反省の意味もあるが、どうしても口数が多くなる。

とうとうそのまま高岩家に。さらにそのまま玄関に。

「たっだいまあーっ」

快活な少女の声が響き渡る。悪いことに理恵も課題の関係で日曜というのに自宅にこもっていた。

つまりそんな少女の音がするはずはないのである。

「ちょ……ちょっと。セーラちゃん!？」

さすがの薫子もこれには焦る。しかしすでに遅く清良の母・直子が玄関に。

声の感じから反射的に中学生の娘と思いこんだが、よく思い返すと既に自宅にいた。

「あら？ どなた？ 理恵のお友達かしら。理恵ー」

理恵の友人と思つた母は理恵を呼ぶ。

「なあに？ お母さん……誰？ お兄ちゃんのガールフレンド？」  
当然ながらセーラのことを知るはずもない。

兄の女友達というのが一番納得できる答えだった。

「あ。いつけない」

セーラは可愛らしく自分の頭をこつんと叩く。舌を出してる様が理恵には「ぶりっ子」に見えた。

「えい。へんしーん」

まだ何とかごまかせたがもうだめだ。母と妹の前で清良の姿に戻ってしまった。

声も出ない両者であった。

頭を抱える薫子。ため息のキャロル。

「な……何なの？ お兄ちゃんに化けたって？」

「違うわよお。理恵。こつちでいいのよ」

男の姿で野太い声で女言葉……自分で顔をしかめる。

「やっぱ落ち着かないわね。えい」

精神状態が既に女ということもあり、儀式抜きで女の姿に。

「あらあら。不思議なことが」

「それで済む問題？」

おっとりとしている母と、ヒステリックに叫ぶ妹。

「あのー。その件については私から説明させていただきます……」

おずおずとキャロルが切り出す。

「ねこが喋った!？」

こちらも充分に驚愕の事実である。

ダイニングキッチン。いつもは四方に一人ずつでちよつどのテーブル。

今回は薫子がいるので清良……セーラが自分の椅子を譲った。キャロルはテーブルの上に座り、説明を続けている。

むろんのこと薫子は警察官の身分を明かしている。事情聴取の名目で本部に連絡してこの場にいる。

清良の父・秀昭の左隣が直子。秀昭の向かい合わせが薫子。直子の向かい合わせが理恵という位置だ。

「まるでSFだな……」

とはいえど本当に変身して見せている。

証明すべく質問して、清良の子供時代の事を訪ねるがきちんと答えられる。

人格こそ女性化しているが、記憶は継続されてそのままなのだ。

だからこそ男性人格に戻ったときに、女性化していた時点でのあ

まりに女性的な振る舞いにとても恥ずかしい思いをするわけだが。

「じゃあ本当にお兄ちゃんなんだ？」

「うん。でも今はお姉ちゃんと呼んでもらえると嬉しいわ」

「いいの？ あたし前からお姉ちゃんが欲しかったのよね。妹はともかくそれは無理な相談だったけど、こんな形で叶うなんて」

「えーと、理恵様。私が言うのもなんですが、現代の人からしたら突拍子もない話。簡単に信じられるのですか？」

難航を予測していた。だからアマッドネスに伝わらないように秘密保持もあり黙っていた。

ただそれが想像以上に清良にストレスを与えていたのかもしれない。

薫子を相手におしゃべりだったのも、そしてこうして自分からばらすようなマネをしたのもそのせいかな……キャロルはそう思った。

「だって現実に変身して見せたじゃない。そっかあ。たまにお兄ちゃんがるで違う感じになっていたけど、それはこういうことだったのね」

「そうねえ。あの時は嫌いなグリーンピースもちゃんと食べていたし。仕草も細かったものね」

「まあ悪さをしているのではなく、人に害なすものを退治しているというなら仕方あるまい」

「え？ それじゃ」

薫子が期待している表情に。

「ええ。信じますよ。この子が清良と。親が子を信じないでどうします」

「最初から娘がもう一人いたと思えばいいだけの話」

「お父さん。お母さん。理恵。それじゃあたし」

「ああ。もう隠さなくていい」

父の笑みはその言葉が本心であることを物語る。

「良かった。これでセーラ様の心の安らぎがますます得られます。以前は私だけと秘密を共有してたので」

「あら。そう言えばあなたのお部屋もいるわね」

直子がキャラメルに言う。

「いえ。私は猫の姿をしますが生命体ではないので。セーラ様の部屋にいさせていただければ充分です」

「これですべて解決か。いや。女物の着替えを用意しないといかんのか」

「あ。それならこっちの姿で戻ってきたときはあたしの貸してあげるよ」

「いえ。心配には及びません」

言つとセーラは衣類を変えて見せる。感覚が麻痺したと思っただがやはり魔法そのものに驚く家族。

「すつごーい。それにしても正体がお兄ちゃんと思えないほどオシャレね」

「ええ。この姿で戻ってきたときは夜中にファッションとメイクの研究をしていますから」

「お化粧品もしてるの？」

これには薫子も驚いた。

「ええ。百円ショップで買ったものですけどね」

にっこりと微笑むセーラ。その肩をがっしりつかむ薫子。

「ダメよセーラちゃん。お肌に直接つけるのだから、もっとちゃんとしたものをつけないと」

「え？」

明らかに何かスイッチの入った薫子相手にたじろぐセーラ。

「よし！いつも協力してくれているお礼。あたしがちゃんとした化粧品を買ってあげる」

「だったらあたしが案内してあげる」

理恵もノリノリだ。さすがにたじろぐセーラは直子に救いを求める。

「理恵。七時にはお夕飯にするから、それまでには帰ってきてね」  
「はい」

その頃、軽部は付近のビルの屋上から高岩家を窺っていた。  
(どうだ?)

魂のままのアマッドネスと会話できる軽部は、つれてきた「ルコ」に尋ねる。

(だめだな……全員否定どころか受け入れてしまった。しかも好意的だ)

(そうか。家族相手では手も出せまいと思ったが、それでは逆に前が感化されかねないな)

セーラ「清良と突き止めた軽部は、清良の身内をアマッドネスにするつもりで訪れた。」

ところがセーラを完全に家族のように扱っている。

これでは話にならない。

半ばこの作戦を諦めかけている。だが

午後四時。六月も近いだけにまだ日は高い。

それだけに知り合いに会いたくないセーラはまた変装した。

薫子をまくときにやった力チューシャとめがねである。

これは武器となる伸縮警棒を携帯する目的もある。

理恵を先頭にセーラ。そして薫子が出てくる。ちょうどそこで日曜の部活から友紀が帰ってきた。

「理恵ちゃん。この人たちは？」

普通ならそんな詮索はしない。だがセーラの姿が以前に見た「一年生」そのもの。

(何でこの娘がここにいるの?)

自分の心がちょっと灰色に染まりかける友紀。

「あーっと……」

返答に詰まる理恵。助け舟として薫子が身分を明かした。

「警視庁の一城薫子です」

「刑事さん！？ 清良何かやったんですか？」

あんまりと言えはあんまりだが、不良学生で通っているだけにこれも仕方ない。

「ああ。違うのよ。えーと。そう。この娘を助けたの。それできたのよ」

この娘とはもちろんセーラのこと。友紀にとって唯一正体不明の一年生。

「この娘は？」

知らないうちに尋問口調に。

「えとね……そう。お兄ちゃんの大事な人。心も体もおにいちゃんのものなの」

「！！！！！！？？」

ウソはついてないが、完璧に誤解を招く言い回しであった。

「それじゃ友紀ちゃん。あたしたち用事があるから。またねー」  
ごまかしきれずに逃げるように立ち去る。

セーラとしても家で秘密を話せる相手は欲しかったが、学校ではばれる危険性が高いので友紀には打ち明けたくなかったので黙っていた。

三人が立ち去った後で友紀は打ち震えていた。

（なんなのよ？ 今の娘。清良の大事な人？ 身も心も？）

姉と弟のように思っていた幼なじみ。恋愛感情はないと思っていた。

しかし今、嫉妬を感じている。

（おっ？）

屋上ではそれに気がついた軽部たちが注目していた。

（どうだ？ ルコ）

（ああ。あの小娘。いいな。セーラに対してどす黒い感情を抱いて

いる。使えるな

EPISODE 19 「家族」 (後書き)

次回予告

(お前の望みを言え。それをかなえてやろう)

「ははははっ。私はふたたび肉体を得たぞ」

(ハヤブサのアマツドネス？ 相手が鳥なら私の出番かしら)

「セーラ。私はお前を憎むもの。そしてお前を殺すもの」

EPISODE 20 「嫉妬」



## EPISODE 20 「嫉妬」

セーラたちが去り、友紀が家の中に入る。

その様子を窺っていた軽部。そして魂だけのルコ。

(この感情は……嫉妬か？ 面白いな。この娘。小僧とセーラが同一人物とは知らないらしい。小僧を愛すれば愛するほど、セーラに対する嫉妬が高まる。それを殺意に、そして力に変えてくれる)

(ならばルコ。意識の共有はまずいな。あの娘が高岩清良がセーラと知ればその気持ちも薄れる)

(ふっ。太古より私の役目はクイーンの守護と同時に、敵から味方を守りに駆けつけること。今回はセーラになったときだけ目覚めればよいな)

それだけ言うところルコは人には見えないが『光る玉』となって野川家に。

家の人間が誰もいない。

父は会社のゴルフ。母も買い物のように。話し相手がいない。

面白くない感情を抱いて二階にある自分の部屋に戻る。

扉を閉めて制服を脱ごうとして違和感。何かがいる。

なんとなく床を見て『ひっ』小さな声を上げる。

そこには半透明の怪人が。鳥の頭を持ち、全身が羽毛で覆われている。

鋭いくちばし。爪。その腕を組み、半身だけを床から出していた。コミュニケーションをとるため、あえて人に近い姿をとった。

(お前の望みを言え。それをかなえてやろう)

EPISODE 20 「嫉妬」

自分の目を疑う友紀。

それはそうだ。もっとも安全であるはずの自宅の自室。

そこにこんな奇怪な存在がいたのだ。白昼夢と考えても不思議はない。

（ふふふ。それは差し詰めあの男を取り戻したいというところかな）  
「なっ!？」

直前までそれを意識していたのだ。すぐに思いが行く。

「何よあんた? どうしてそれを?」

こんな鳥女と普通に会話を交わしている。既にルコの術中にはま

った証だ。

(わかるさ。顔に書いてある。あの男が欲しい。あの女が邪魔だと)  
「あの女」。ルコがさすのはもちろんセーラ。そして友紀が思い描くのは「1年の女子」

「だからなんなのよ!? そんなの清良が選ぶことだし!」  
自然と口調がきつくなる。イライラがピークに達しつつある。  
もちろんルコは意図して負の感情を高めている。

(簡単なことだ)

さらっとルコが言う。こんな胡散臭い相手の言葉に聞き入る友紀。  
(消してしまえよ。できないというなら、私が力になるっ)

「バカなこといわないで!」

消してしまえ。これが何を意味するかは誰だっかわかる。

(いいのかな? 放っておけば愛しい男はあの娘に身も心も奪われるぞ。お前は惨めな敗北者になる)

「奪われる……」

幼なじみとの思い出が蘇える。小さい頃は清良の「お嫁さんになる」と言ったこともあった。

もちろん深い意味などわかっていなかった。しかし言葉にはしていた。

いつか離れ離れになるなんてことは考えもしなかった。

その幼なじみが遠くなる。

知らない女の元に行ってしまう。

二人で手を取り、笑みを交わし、歩いていく。

自分は一人取り残される。

そんなことを考えたら無性に寂しさが募ってきた。そして

(あの娘さえいなければ)

はつきりと嫉妬を自覚した。

(今だ！)

その刹那にルコは友紀の中へと飛び込んだ。

「はあっ」

全身が痙攣したようになる友紀。のけぞって、そしてがっくりと頭をたれる。

やがてその顔を上げる。優しい目つきが鋭くなっていた。釣りあがっている。

それがやがて猛禽類を思わせる目つきに。

突き出した唇が硬質化し、嘴を形成する。

顔。腕。脚などむき出しの部分に無数の羽毛が。

背中が盛り上がったかと思うと、制服を突き破って大きな翼が出現する。

手足すべての指が鳥のようなそれに。

「はあっ」

気合を入れると制服。下着などがすべて吹き飛ばす。

隠れていた部分も羽毛で覆われている。

胸元の一部だけ人の肌のままだ。

「ははははっ。私はふたたび肉体を得たぞ」

アマッドネス特有のくぐもった声。しかしどこか友紀に似た甲高い声でルコ……ファルコンアマッドネスは復活宣言をする。

その頃のセーラたちは2駅となりのデパートにいた。

気に入ったものがなくてここまで来ていた。

感知できる範囲を超えてしまい、友紀がアマッドネスとなったことを知り損ねていた。

ファルコンアマッドネスは窓を開けると、跳躍。そして大きな翼を広げてあっと言う間に高い空に消えて行った。

あまりの速さに誰も目撃できてない。

そしてハヤブサの特徴を持つ女は、新しい肉体の具合を見るべく

高速で大空を駆け巡った。

空を行く鳥たちは自分たちと同類のような、地を行く人のような存在に戸惑い、逃げるのみだ。

しかしただ一羽。厳密には生命体ではない存在がその魔物を認識していた。

（大変だぜえ。なんだか強そうなアマツドネスが出やがったぜ）  
主に対してとてもそうは思えぬ口調で報告する「作られたカラス」

ジャンパースカートと制服をまとった少女。メガネと三つ編みお下げが印象的だ。

その手には奇妙にもピンクと黒に塗り分けられた「弓」が。  
デザインも奇妙で、まるでオートマチックトリボルバーの拳銃。

そのグリップを真つ直ぐにしてジョイントさせたようなデザインだ。  
（ハヤブサのアマツドネス？ 相手が鳥なら私の出番かしら）

その彼女と距離を置いた先には鳩の能力を持つピジョンアマツドネスが横たわっていた。

「く…くそ…」

全身に弾痕。まさに蜂の巣であった。

「あら。いけない。ウォーレン。それは後で聞くわ」  
まるで電話を切るように通話をきる。

そして「弓」を構える。弦は張られていないが、光る線が見える。  
「矢」も光で出来ているようだ。

狙いを定めて振り絞り、そして放つ。

虫の息だった。ピジョンアマツドネスの眉間に命中。

「ぐぎゃああああっ」

それがとどめとなって爆発四散。浄化され残されたのは全裸の女。  
「ふう。とどめを刺し忘れるなんてうっかりしてたわ」

おっとりとしているもののどこか毒気のある。そんな印象の口調であった。

彼女の名はジャンス。射抜く戦乙女。最初に蘇えった少女だ。

「ふはははは。風が心地よい。冷たく暗い土の下にくらべて、やはり空は良い」

肉体を得たルコは心そのままに飛んでいた。

納得したのか元の部屋に戻る。

その際にも目撃をされないほどのスピードだ。

それでいながら減速無しに瞬時に停止できる。

友紀の部屋で翼をすぼめ、ふわりと着地する。

「ふふふ。現代の言葉に関する情報だけはもらった」

「ミュスアシの末裔」たちとコミュニケーションをとる上で必要だ。

「後はセーラが戦いの場に来るのを待つだけだ。それまでまた眠るとしよう」

その目を閉じると翼が引っ込み、そして嘴も引っ込み唇に戻る。

全身を覆う羽毛が潮が引くように消えていき、少女の白い肢体が

あらわに。

指が元に戻ると同時に、吹っ飛んだ衣類がビデオの逆再生のように体にまといつき、元の姿に戻る。

そしてそのまま床の上に倒れこむ。

「くしゅん」

可愛らしいくしゃみで友紀は目を覚ました。その目は優しいものに戻っている。

「あれ？ あたし何してたんだっけ？……やだ！ 制服のまま寝ちゃった。皺になっちゃうじゃない」

普通の少女の反応。何も覚えていない。

当然だ。その出会いが記憶にあれば自分がルコと肉体を共有していることに考えが及ぶ。

だから記憶を改ざんした。

月曜日。

二人で登校する清良と友紀。

「なんだ？ 妙に疲れた顔しているが」

「うーん。なんか昨日から調子悪いのよね。ところで清良。あんたは今朝は何でこねていたの」

「い……良いだろ」

まさか自分から家族にばらしたあげく、デパートで女刑事と妹に遊ばれていたとは口が裂けてもいえない。

家族相手に隠さなくてよくなったのは良いが、事情をすっかり理解した母に

「学校行かないなら今日は買い物に付き合ってくれる？ これ着て」と、フリフリのワンピースを出されたので逃げてきたのだ。

夕方。

とある公園。

子連れの主婦たちがたむろしている。子供たちを遊ばせておき、自分たちは井戸端会議だ。

犬を連れているものもいる。

そこにひとりの男が現れた。

何日も風呂に入っていない汚い肌。服もボロボロ。

目つきだけがぎらつき、ふらふらと入ってくる。いわゆるホームレスだ。

主婦たちは露骨に眉をしかめる。公共の場であるのに、不法侵入者を見るような目つきだ。

「ああ。腹へったなあ……」

きわめて普通の発言ではある。

「犬って、美味いかな」

こうなると普通ではない。

犬も何かにおびえたようにホームレスに吠え続けている。  
「うるさいな」

ホームレス。鳴海星一は瞬時に犬のそばに接近する。  
つかまえると異形へと変化する。

それはヒトデ。五つの触手が両手両足。そして頭部に当たっていた。

捕まえた犬を腹部に運ぶシースターアマッドネス。

犬がどんとんと吸収されていく。食われているのだ。

「ひいいいっ」「きゃあああっ」

主婦たちは子供を連れて我先に逃げ出した。

「出やがった!」

思わずつぶやく清良。

「え? 何が」

放課後の学校。今日は部活がない日。一緒に下校すべく待ち合わせしていた友紀。

「悪い。一人で帰ってくれ」

「ちよつと!? 何よ清良」

抗議する友紀に謝り清良は走っていく。

「セーラ様!」

この頃になると学校そばで待機するようになったキャロルである。

「いくぞ」

「はい」

瞬時にバイクモードに転じたキャロルにまたがり、清良は走っていく。

飢えを満たす。それが意識を占めているシースターアマッドネス。「生餌」を求めて野良犬や野良猫を探していたのだ。だから動き自体はそんなに迅速ではない。



人々が逃げて無人の町を我が物顔で歩く。  
その前に駆けつけた清良が立ちほだかる。

もちろんキャロルが薫子に連絡しているのではあるが、彼女とて暇ではない。

たまたま別件で動いていたため対処が遅れた。

今のところ薫子だけを通じて警察のバックアップを受けている。

ましてやセーラも薫子も知らないが、上層部にはアマッドネスの大幹部。スネークアマッドネス。ガラ將軍こと三田村がいる。

彼が操作しているため、警察は後手に回るケースが多い。

薫子が別件に駆り出されていたのも三田村の策略である。

要するに今回は援軍が期待できない。

「なんだあ。お前。人間は食いたいとは思わんぞ」

アマッドネスが人を襲うのは勢力拡大が目的である。

彼女たちの信条として「男は無価値」というのがある。

だから排除と同時に自分たちの仲間にするべく女の肉体に作り変える。

ただし例外として子孫繁栄のための「子種の提供者」がいる。これまた一種の奴隷。

捕らえられたが最後。子種を提供するタメだけに生き永らえることに。

「食事優先でまだ人には手を出してないか。だが野放しにはできねーぜ」

清良は右手を天に、左手を地に向けた。右手に赤い、左手に青いガントレットが出現。

それをゆっくりと水平に。

腋にひきつけ、両腕を思い切り突き出す。

「変身！」

スパークするとそこにはセーラー服をまとった小柄な美少女がいた。

「セ…セーラ！？」

明らかに恐怖しているシースターアマッドネス。

「？ コイツとは初対面のはずだが？」

「ミュスアシ侵攻の際に私はお前に殺されたのだ。またやる気か？」

「ミュスアシ？」

「私たちのいたかつての都市の名前です。セーラ様」

「じゃコイツは……そのときの記憶があるってこと？」

「どうやら」

だから恐怖している。先手必勝とばかりにジャンプする。そして五体を手裏剣に見立てて高速回転して突っ込んでいく。

翼を持つアマッドネスなら警戒するパターンの攻撃だが、まさかヒトタイプでこう来るとは読めずまともに食らうセーラ。

防御形態のエンジェルフォームだから耐えられた。

だがセーラはあえてキャストオフした。

運動性能が格段に向上した体操着姿。ヴァルキリアフォームで攻撃に転じた。

「もう一度食らえ」

シースターアマッドネスがふたたび飛ぶが、今度は簡単にかわした。

身が軽くなったのと、二度目で見切れたからだ。

そして鈍重なシースターに対して嵐のように打撃攻撃を見舞う。

（た…助けてくれ）

一度殺されていて苦手意識のあるシースターは思わず助けを求めている。太古の戦のようだ。

「!?!」

ひとりで下校中の友紀の頭に電気が走る。その瞬間、彼女の意識はブラックアウトした。

既にルコの意識と切り替わっている。人気のない場所へと出る。右手を斜め下に向けると羽根を模した短剣が。

それを曲芸のようにくると三度回しながら眼前にかざす。

刃の部分が光り、友紀はファルコンアマッドネスへと変身した。

「ふふふ。だいぶ馴染んできたな。一瞬で変身できるようになったおっと。一部だけ友紀の心は残さないと。嫉妬心。それから来る憎悪が私のエネルギーだ」

つぶやき終わると空へと。

シースターアマッドネスを圧倒するセーラの首筋に「もう一体」の来襲を告げる信号が。

（救援かよ！）

それはどんとどんと強くなる。気がつくのと目の前にそれはいた。

全身を覆う羽毛。鋭いくちばし。鳥そのものの目。両手両足の爪も鳥の物だ。

大きな翼を折りたたみ、セーラに対して余裕を示すがごとく一礼してみせる。

「ルコ。お前が助けに来てくれたのか？」

心底ほつとしたような声を出すシースター。

「それが任務だからな」

悪の救世主。ダークヒーロー…否。ダークヒロイン降臨。

「お前は？」

2対1で闇雲に突っ掛かるほど無鉄砲ではないセーラ。とりあえず敵を知るべく尋ねた。

「自己紹介させてもらおう。私の名はルコ。隼の力を持つものだ」

セーラの直感が告げていた。こいつは強いと。

ルコが続けた言葉はセーラの予想通りのものだった。

「セーラ。私はお前を憎むもの。そしてお前を殺すもの」

セーラは知らない。

この「強敵」が幼なじみの少女の変わり果てた姿であることを。友紀は知らない。

この「恋敵」が幼なじみの少年のもう一つの姿であることを。

「嫉妬」が悲劇を呼んでいた。

EPISODE 20 「嫉妬」(後書き)

次回予告

「我が名はルコ。六武衆がひとり」

(何？ コイツ？ なんであたしのことをこんなに。コイツも過去に因縁が)

「アレがハヤブサのアマツドネスか。戦っているのはセーラさんってこと？」

「あれ？ あたし今なにしてたの？ それに……」

EPISODE 21 「強敵」

## EPISODE 21 「強敵」

空中散策がてらにアマッドネスを探していた人造生命体・ウォーレンは、アマッドネスの気配を感じ取りその上空へと飛ぶ。

戦乙女たちは概ね三キロ四方のアマッドネスの『波動』をキャッチできる。

だがサポートを目的とされたウォーレン。キャロル。ドーベルという人造生命体たちは、その姿を模した動物の能力なのかもっと広範囲をサーチ可能だった。

ましてや強敵と思しきファルコンアマッドネスの出現を先行して捉えていたのだ。

意識していても当然である。

その現場を遠距離から確認した。

アマッドネスたちもセーラも対峙していた為にウォーレンの存在に気がつかない。

それを幸いとばかりにカラスはその場を離脱する。

既に連絡をしていた彼の主。ジャンスに変身する押川順と合流するためである。

「我が名はルコ。六武衆がひとり」

太古の戦の名残なのか、きちんと名乗りをあげる。恐らくは武功争い。自分の功績をはつきりさせるために名乗る。

「六武衆？」

また知らない単語が出てきた。セーラは顔はルコに向けたまま、瞳だけをキャロルに向け情報を求める。

だが従者も初めて見るアマッドネス。当然である。

かつてのミュスアシ侵攻をめぐりクイーンと対立した大賢者スズ。そのスズのクイーン暗殺を阻止する際に六武衆はすべて打ち倒された。

だからミュスアシ侵攻には將軍・ガラも六武衆も存在していなかった。知らなくて当然。

補足するならばそれがミュスアシで壊滅した原因である。

それまでの闘いで優秀な軍師である將軍・ガラ。そして六武衆の存在は多大だった。

それを戦の前に失い統率が取れなかったために、戦乙女たちに各個撃破されて敗れ去り、長い封印をされることに。

この時点でクイーンはアマッドネスを蘇生させる術を得ていたが、

それには多くの時間や手間を要する。

しかしそれをしていたらその間にミュスアシに堅固な陣を張られてしまう。

神に祈り続けるだけの都市と侮っていたのもあり、後からゆっくりとばかりに侵攻を優先した。

しかし結果として全軍を失い、そして自らも長きに渡る封印をされる羽目になったクイーンアマッドネス。ロゼである。

「私に与えられた任務は仲間の援護。そしてセーラ。貴様を殺すこと！」

羽根の一枚を抜くとそれを手裏剣として投げつけた。

「おっと」

それをかわし切れないのでガントレットを盾として受けた。

ルコの目的は最初からそれ。どうしても出来るその隙を狙い、襲い掛かる。

「死ねえ！」

大振りでありながら凄まじいスピードで剣が振り下ろされる。

セーラはそこに闘志よりも憎悪を感じ取った。

（何？ コイツ？ なんてあたしのことをこんなに。コイツも過去に因縁が）

初対面なのに憎しみで漲っている。しかし疑問を解く暇がなかった。

矢継ぎ早に攻撃が来る。かわしたり防ぐので手一杯だ。

「早く逃げる。私がコイツを止めているから」

「わ…わかった」

正直セーラに対して苦手意識を持っていたシースターアマッドネスは、攻撃に参加しろといわれなくて安堵した。遠慮なく逃亡する。

「あ。待て」

目の前で逃げていくのを見過ごせなく、つい叫ぶ。

「どこを見ている。お前の相手は私だあ」



ますます剣のスピードの上がるファルコン。だが太刀筋はめっちゃめっちゃになってきた。

「この」

スピードが乗り切る前にあえてガントレットで受け止めて、そして突き飛ばす。

鳥形の宿命かとにかく軽い。パワー負けした。

そのころ、押川順はバイクでセーラとルコの鬪いの場を目指していた。

バイクはウォーレンの変形したもの。そのまま案内も務めている。

公園。間合いを取った両者。互いに息が荒い。

「この憎悪…半端じゃないわ。初対面なのに。もっともあたしはかなりの数のアマッドネスを倒したわけだから、憎まれても当然だけど」

それだと合点が行く。しかしルコはそれを否定する。

「そんなことじゃない。お前は私の大事なものを奪おうとしている。許せない。殺してやる」

「はあ？」

セーラにはワケがわからない。

(だれかコイツの仲のよかったアマッドネスを倒して、その敵と狙われているのかしら?)

そう解釈した。しかし違う。

そう。野川友紀の肉体を依代として復活したファルコンアマッドネス。

他のアマッドネスと違い、意識は分離させてある。

友紀に自分の持つ情報が伝わってはいけないからである。

その理由は友紀が抱いた嫉妬の心。それこそがルコが取り付いた媒体。

そしてその嫉妬の対象は目の前のセーラ本人。

セーラを清良と別人だと思っている。だから友紀にとってセーラは恋敵なのである。

その嫉妬心をエネルギーにしているから、ファルコンアマッドネスの攻撃は激しく熱い。

だから分離してある意識だが、嫉妬心だけは混ざり合っている。友紀の嫉妬。ルコの同胞の敵という意識が、セーラに対する殺意という形になっている。

遠くからパトカーのサイレンの音が聞こえる。

シースターの件で通報がされていた。それがおっとり刀で駆けつけていた。

いくら三田村が警視庁で権力を持っていても、市民からの110番通報を無視するようには指示を出せない。

「騒がしくなってきたな。どうだ？ あっちで続けないか？」

上空を指し示すルコ。

「……」

敵のテリトリーである空中。セーラが迷うのも無理はない。だが「わかったわ。空なら誰にも迷惑は掛からないし」

「ふっ。ならばこい」

ファルコンは瞬時に高く上る。

「セーラ様。敵の誘いに乗ることは……」

ましてや空中戦ではどうしてもキャロルのアドバイスも遅れる。

「でも、このまま逃げてもたぶん奴は襲ってくる。それくらいなら空で決着をつけた方がマシよ」

言うなり彼女は右手の赤いガントレットを叩く。

初期からくらくらべて服の再構成が早くなった。

ほんのちよつと揺らいだかと思うと、体操着がレオタードになっていた。

その背中に妖精の翅が。セーラも空へと舞い上がる。

空中で向かい合うルコとセーラ。

セーラにしてみたらこの場ではフェアリーフォーム限定となる。エンジェルの防御力。ヴァルキリーの運動性能。マーメイドの耐久力とパワーを生かす闘いが困難だ。

だが同じこと。敵が空を選んだ以上ここが戦場だ。

「喜べ。太陽の下で葬ってやる」

「あなたこそ地面に叩き落してやるわ」

セーラにしてみればいきなり現れて自分に憎悪を叩きつけてくる相手。

釣られたわけでもないが、セーラも怒りを感じていた。

羽根をナイフのように投げるファルコンアマッドネス。

それがゴングだった。

二本同時に投げたので左右どちらにも避けにくい。

普通なら上か下。だがセーラは真っ直ぐファルコンに向かって来た。

それだけ表面積が小さくなり飛び道具をかわせた。そのまま攻撃をすべく間合いを詰めるセーラ。

それは予想の範疇だったらしいファルコン。ひきつけて右手の剣を振る……と、見せ掛け左手の爪で素早く胸元を凪ぐ。

「きゃっ」

精神が既に完全に女性のそれになっているセーラは、闘いの場にはおよそ不似合いな可愛い悲鳴で後ろへと下がる。

そこに追い討ちとばかりファルコンの足が見舞われる。すべてはこの攻撃のための布石だった。

避けきれずまともにわき腹に食らう。

セーラのウエストは戦う肉体のせいにか引き締まって肉が薄い。

そのためキックのパワーが緩衝されず、肋骨にもろに響いた。

息が詰まり、呼吸困難に陥る。動きの止まったところに、脳天から剣を振り落とすファルコン。

だが空中の闘い。「下」という逃げ道がある。  
瞬時にルコの足よりも低い位置に下がり剣をかわす。そして出来た好機を逃さない。

「ライニングハンマー (ラムダ)」

フェアリーフォームの時の脚力を生かして全身で見舞うキックをライティングハンマー。雷の鉄槌と呼称している。

基本は脳天目掛けての空中からのキックか、ジャンプしてのオーバーヘッドキック。

こちらは「ライティングハンマーV」と呼ばれる。つまり足の動く方向のイメージで分けられている。

「は下から上への攻撃。本来なら空のジャンプで、降りる時に攻撃するのだが、そのジャンプそのもので蹴りを見舞う。

こちらも下がった分だけやや届かず。腹部をかすただけに留まる。

「きさまあ」

「おあいこでしょ。胸とかお腹という女の子の大事なところばかり狙ったあんたの方が、よっぽど性質が悪いわよ」

憎悪をぶつけ合う二人の女。しかしそれは本来なら仲のよい幼なじみの男子と女子なのである。

互いに姿を変え、戦場で拳を交えているとは思ってもよらない。

知っているのはルコとアヌ。そしてガラだけだ。

「おい。ジャンス。いたぜ。空だ」

主を呼び捨てにするウォーレンだが、順は気にした様子もなく上を見上げる。

「アレがハヤブサのアマッドネスか。戦っているのはセーラさんってこと？」

両者に面識はない。互いに情報だけである。

順にしても、自分のエリアでの戦いが主で、セーラの援軍までは手が回らない。

このときもむしろ利用していた形だ。

「今ならやれるんじゃないか？」

ウォーレンも理解していて言葉を投げかける。

「ぎりぎりだけど、ここなら察知されないかな」

ここでやることにした。それにもかかわらずバイクは走り出す。

走りながら人気のないところで変身。そしてキャストオフ。超変身を。

戦乙女。ジャンスがその特異な姿で元の場所に戻ると、未だに両者が空中で対峙していた。

ルコが動かさず、格好の標的だ。

「待っててねえ。セーラさん。今助けてあげるから」

心にもないことをつぶやき、銃を構えて狙いを定め、トリガーを引いた。

激しい闘志がフルコンアマッドネスを救った。

それまで動かなかったのが攻撃に転じた。

そのためジャンスの狙撃から逃れた。

「なんだ？ キャロル。もしかして」

セーラが考えたのは残るひとりの戦乙女。ジャンス。

ブレイザには遠距離攻撃の手段がない。単純に考えればそうなる。

アマッドネスの仲間割れという線もあるにはあるが、それは甘い考えなので捨てた。

(恐らくはジャンス様でしょう。ウォーレンの気配も感じますし。

ただそこから500メートルはありますから、セーラ様に確認は出来ないかと)

「そんな先から狙撃？」

それじゃいくらかでかいといえど、ここまでの精度の方が驚異的だ。

「あつちやー。動くならもつと早く動いてよ」

勝手なことを言うジャンス。既に衣装がジャンパースカートの子学生服のようになっていいる。

それがジャンス・エンジェルフォームだ。

「もう無理ね。とりあえず逃げるわよ」

「承知」

ウォーレンバイクモードは猛然と走り出し、その場から離脱した。ジャンスが逃げたのはファルコンの逆襲というより、自分を利用したセーラが怒るのを嫌ってである。

「くっ。なるほど。いつの間にか連絡を取り合っていたらしいな。

狙撃とは」

どこか侮蔑を含んだ言い回しのルコ。

「し…知らない。あたしはそんなの知らない」

正々堂々を身上とするせいか、律儀に否定してしまうセーラ。

「何を恥じ入る必要がある？ 敵を倒すためにどんな手段でも使え

ばいい。それでこそ、殺し甲斐がある」

言葉とは裏腹に小刻みに動き、標的となるのを避けている。

ルコにはこの距離ではジャンスの気配を察知できない。

何しろ眼前にセーラがいる。それにかき消されて探知できない。

だから既にもかかわらず、狙撃を警戒してこの行動だ。

「今日のところは挨拶代わり。いずれまた、お前を殺しに現れる。

恐怖に震えて眠ればいい。それが報いだ」

それだけ言う文字通り消えた。

とんでもない位置から攻撃してくるのを警戒していたセーラだが、本当に立ち去つたらしいと思いとりあえず元の場所へと戻る。

ファルコンは元の場所に人気がないのを確認してから着地して、そして友紀の姿に戻る。

ルコが眠りにつき、友紀が目覚める。

「あれ？ あたし今なにしてたの？ それに……」

誰かとケンカしていた気が……そんな思いが頭をよぎる。

嫉妬心が不可欠なため、意識の一部はルコと繋がっている。

つまり臍気に戦っていた記憶が「夢」のように残っている。

「やだ。立っただまま寝てた？」

繋がっているのは一部だけ。セーラ＝清良と知ってしまうと、肝心の嫉妬心が消える。

それどころか愛しい男を殺しかけていたとなる。それでは戦意に繋がらないため、他のアマッドネスとは違い意識を融合させず分離させている。

友紀は怪訝な表情をしながら家路に着く。

そして帰宅するなり、ベッドに倒れこみ、夕食まで眠ってしまう。当然だが戦闘の激しい疲労が原因である。

一方のセーラ。既に意識が女性化してしまい、男の姿のほうに抵抗が。

結局そのまま女の子の姿で服だけ変えて家に。

既に家族にはばれているので、そのままである。

部屋に入ると服を楽なワンピース状の部屋着に変化させ、そのまま床に転がる。

「ああもう。ワケのわかんない相手だったわ」

確かに敵対しているとはいえど、明らかに個人的な恨みに思えたファルコンの襲撃。

しかしそれが何故かわからない。

「もしかして依代のほうに何か遺恨でもあるのではないのでしょうか？」

キャロルが推理を口にする。

「……………それだとなおさら相手がわかんないかも」

何しろケンカが多い清良である。恨んでいる相手特定するのは難しかった。

夕食の前に入浴となる。

もはやばれているので、そのまま女として浴室に行くセーラ。

「セーラお姉ちゃん。あたしも良い？」

「理恵ちゃん……良いも何ももうほとんど脱いでいるじゃない。あたし一応正体はあなたの兄なのよ。いいの」

「だってそうは見えないもん。どう見てもお姉ちゃんだし」  
なに考えているのかわからないまま理恵に押し切られる。

「うわあ。本当に女の子なんだあ」

今は理恵がセーラの背中を流しているところである。

裸になったらなおさら女にしか見えず、セーラも女の子に対して同性を見る感覚になっていたため抵抗がない。

「それにお肌すべすべ。本当に元はおにちゃんなの？ 二人いてあたしのことからかってない？」

「そんなわけではないよ」

実際に妹なのである。そして現在は女同士。姉と妹。自然と口調も女らしくなっていくセーラ。

「ねえ。理恵ちゃん」

「なあに？ お姉ちゃん」

「自分に覚えがなくても、誰かに激しく憎まれることってあるのかしら？」

「うーん。あるんじゃない？ なんか誤解とか。ただ単に友達の彼氏と授業の内容を話してただけなのに、それを浮気と勘違いされたり」

「勘違いねえ」

セーラが気にしていたのはルコの激しい憎悪。

どう見ても同胞の敵というだけではない。



個人的に恨みがある。

そしてルコに対して見覚えがないのであれば、それは取り付かれた相手の可能性が強い。

それにしても殺意まで抱かれているとなると、女性精神になっているセーラにはさすがに気にせずにはいられなかった。

「でも勘違いならそのうちわかってくれるんじゃない？ だからお姉ちゃんまで感情的になっちゃだめだよ」

「ふふ。ありがと」

口でこそ笑っているが、既に感情的になっていた。

（あたしの中にも、アマッドネスたちと同じ黒い感情が……大昔の戦いで犠牲になったあたしたちを神官たちは女神とたたえたって言うけど、こんな感情を抱くなんてとてもじゃないけど……）

「うーん。なんか暗いなあ。えい。くすぐり攻撃」

「ちょ……ちよつとやめて。理恵ちゃん。あんつ。くすぐりたい。きやははははつ。あつ。そんなところ」

自分がとことん女の肉体を有していると思いき知らされたセーラであつた。

些細な誤解から付け込まれ、幼なじみ同士で殺し合いをしているとは夢にも思わない清良と友紀であつた。

EPISODE 21 「強敵」 (後書き)

次回予告

「セーラ。今度こそお前の命をもらっぞ」

「いえ……ただあいつとの戦いはいつにもましてすっきりしなくて

「セーラちゃん。もしあたしがアマッドネスに取り付かれたらどうする?」

(そうだな。せつかくこの姿を得たのだ。これも一興)

EPISODE 22 『愛憎』

## EPISODE 22 「愛憎」

商店街。本来なら人でごった返すはずのそこには誰もいない。みんな逃げた。

そこにいたのは一人の少女。学校で着るような体操服姿。今のご時世にブルマである。

特異なのがその腕につけたもの。右腕には夕日のような赤い、左腕には海のような青のガントレットをつけていた。

彼女。セーラはショートカットというにはやや長い髪をなびかせて軽やかに躍るように異形へと攻撃を叩き込む。

両手両足。そして頭部が触手となっている。ヒトデのような姿の異形。

便宜上シースターアマッドネスと呼ばれるその出現が商店街から人を追い出した。

しかしそれを見つけたセーラが駆けつけて倒しに掛かっている。「さあ。とどめよ」

左腕を水平に風ぐ。まるで凍てついたようにシースターの動きが止まる。

相手の動きを止めて、続く攻撃を確実に当てる技。アクアフリーズである。

「あひいいいいっ」

恐怖の悲鳴を上げるヒトデの怪物。だがセーラは攻撃をしない。

「セーラさまっ」

傍らでアシストしていた黒猫の姿の従者。キャロルが警告を発する。むろんセーラにもわかっている。

「くるっ」

彼女は新手のアマッドネスの襲来を察知した。

その刹那。羽根を用いた「手裏剣」が背中から雨あられと降り注ぐ。

「きゃっ」

可愛らしい悲鳴を上げて彼女は反射的に避けた。そして振り返り天空をにらむ。

ハヤブサの能力を持つファルコンアマッドネスがホバリングしていた。

「セーラ。今度こそお前の命をもらっぞ」

「また出たわね……」

聖なる戦士にあるまじき感情。憎悪を隠そうともしない拳の戦乙女。

ハヤブサの異形も殺意をむき出しにしている。

それが互いに幼なじみの変貌した姿と知らずに

にらみ合いを続けるうちにシースターアマッドネスの硬直が解けた。

(た…助かった)

前世でセーラに倒されて苦手意識を持つシースターはファルコンの加勢など考えず逃げに掛かる。

ファルコンも咎めない。そもそも眼中にない。邪魔でしかない。だから遠慮無しに逃げ出した。

そしてそれに気づかないセーラ。既に天空の相手にのみ目が向いている。

やがて第2ラウンドのゴングとばかりに左腕のガントレットを叩く。

瞬時にしてその姿がスクール水着の少女へと変貌する。

髪は腰に達するほど長く。これは魚のえらと同様に水中の酸素を取り込める。だからセーラはこの『マーメイドフォーム』でいる限り水中では活動限界がない。

水中という高負荷のエリアで活動するためこれまですべてのフォームでもっとも筋力があり怪力を誇る。

その代償として鈍重ではあるが、それは鉄壁の防御力でカバーできる。

「ふん。守りに入ったか」

蔑むように言うファルコン。

自分の世界である空中に來ないことにいらだっている。

「わざわざあなたになんかに付き合う必要はないわ」

言つと携帯している伸縮警棒を取り出す。それに念をこめると「槍」へと変化した。

セーラはこの姿のときは「長くて振り回せる棒」を槍へと変えることができる。

ちなみに水中では話になる。同様に現在はサンダルである履物も、水中では脚ひれへと変わる。

「さあ。きなさい」

ぐるんと槍を振り回し、右手の腋に柄を納める。

「虫けらのように地上を這い蹲りたいと言っなら、望みどおり上から殺してくれるわ」

右腕を一閃すると、いつの間にか手にしていた羽手裏剣を降り注がせる。

「それも対策済みよ」

マーメイドランスと名づけられた槍をバトンのように高速回転させてすべて叩き落した。

次のファルコンの攻撃は意外にも羽手裏剣の追撃ではなく、本人が高速で突撃して来た。

ファルコンの側からしたら予定の行動だが、わざわざ槍の「射程距離」に飛び込むのはセーラとしては予想外だったらしい。

慌ててしまい対処が遅れる。ただでさえ陸上では鈍重な人魚姫。爪がのどもとに迫る。

「危ない」

とつさにキャロルが飛ぶ。ペガサスの姿でもバイクの形態でもなく、文字通り「盾」となる。

直径1メートルほどの真円の盾はファルコンアマッドネスの攻撃から主を守る。

「キャロル。その姿？」

「私は人造生命体です。複雑な部品の組み合わせであるバイクになることを思えば、鉄の塊である盾になることなど造作ありません。ただし当然ながらそれなりの強度のために重量も増える。」

扱えるのはセーラの場合このマーメイドフォームだけだが、基本的に防御力が高いフォームなので今までならなかったのである。

「もう少しセーラ様の『乙女心』が本物になれば、切り札とも言っべき形態にもなれるのですが……」

このつぶやきはセーラには聞こえていない。  
既に空中でホバリングしたファルコンとにらみ合いになっている  
からだ。

遠くからサイレンが聞こえる。

元々シースターアマッドネス出現がきっかけで起きた戦闘。  
通報されていたのでここでパトカーが到着した。

「ちっ。勝負はお預けだ」

邪魔者の到来に舌打ちするとハヤブサのアマッドネスはいずこか  
へと飛んでいってしまった。

「ふん」

憎らしそうにそれを見送っていたセーラ。深追いはしない。敵の  
得意エリアである空での戦いを避けた。

闘いは終わっている。いつまでもこの場にいると警察相手にもや  
やこしいことになる。

とりあえず一気に基本形態。エンジェルフォームへと戻ると、そ  
の場からさりつつその服を普通の女の子らしく変化させる。

戦いの跡を鑑識が調査している。

物陰で薫子とセーラが話しをしていた。

「またアイツ？」

「はい。あのハヤブサのアマッドネスでした」

確認してはいるがむしろ「確信」していたと思われる薫子。

何しろ散弾銃を手にしている。

普通の鳥相手ならそれでいいが、人間サイズとなるとどれほどの  
ダメージか怪しい。

それでもライフルで拘束飛行する相手を狙うのは至難の技。

とりあえず動きを止めることを考えこの武器だったが空振りに終  
わった。

「一つだけ救いなのはアイツはセーラちゃんを殺すことだけに執着

しているからね。他の人間は無視しているのは助かるわ」

「ええ」

どうにも齒切れの悪いセーラの返答。

「元氣ないわね？ 怪我してんの？」

「いえ……ただあいつとの戦いはいつにもましてすつきりしなくて「まあ中には罪のない人が取り付かれて、あなたがそれを倒したことでその人は残りの人生を女としてやり直す羽目になる。それですんなり浮かれていないというのは理解したわ」

セーラとしてはアマッドネスを放置できない。すればますます強制的に女へと変えられる男が増えるだろう。

ましてや「奴隷」だと自我が消える。そうなつては死んだも同然。大元である幹部とも言うべきアマッドネスを倒すしか解放の手段はない。

しかし結果として取り付かれたものの残りの人生を大きく変えることになる。

「それは割り切るしかないわね。女になるのは避けられなくても死ぬわけじゃないしね」

「わかつてはいるんですけど……」

女性化しているせいでもあるまいがいつも以上に齒切れの悪い。

「セーラちゃん。もしあたしがアマッドネスに取り付かれたらどうする？」

イジワルな質問だ。

「そんなつ。お姉さまに拳を向けるなんて」

「でも『あたし』を倒さないと被害が増える一方よ」

「う……」

それも承知しているはずだが、自分がやはりいつか完全に女にへたしたら存在自体が消えることを意識してからというもの、割り切ったつもりで心のどこかで躊躇があった。

「それに『あたし』も自分が加害者になるのは嫌よ。だからあなたに止めて欲しい」



倒すことは救済だ。そう言い聞かせている。

「まああたしの場合には元から女だから倒されても影響は少ないでしょうけど」

重くなつた雰囲気を察して軽い調子で薫子が言う。セーラは無言である。

「……やっぱり、自分の手を汚すのは嫌？」

民間人に協力させている負い目がその言葉を言わせた。セーラは否定も肯定もしない。

「そうじゃないんです。ただ」

言葉を切る。言いよどんでいるが懺悔のように心情を吐露した。

「あいつと戦っているのとどんどんと憎悪で満ちてくるんです。たぶんあいつの憎悪に影響されてだと思っんですけど」

それでセーラは暗かった。

「憎悪で力を振るう。それってあいつらの暴力と何にも変わりませんよね……」

薫子には何もいえなかった。

野川家。自室のヘッドに制服のままうつ伏せになっている友紀。悪夢により苦悶の表情を浮かべている。

(ここは?)

明らかに教会。制服姿のままの友紀。周りには顔もわからない正装の男女。

やがて荘厳な音楽が鳴り響く。結婚式だとやっと理解した。

扉が開くと真っ白のタキシードを着た清良が、純白のウエディングドレスのセーラを抱きかかえて入場してきた。

二人は幸せそうに微笑み合い前方へと進む。

「清良。ちよつとまってよ。清良」

その呼びかけを完全無視。清良の視線はセーラに釘付けされている。

「もう。あたしの声が聞こえないの？」

「聞こえないわよ」

鈴を転がすような声。それでいて憎しみがこみ上げてくるセーラの口調。

「彼はもう私のものよ。誰にも渡さないわ」

勝利宣言に女のプライドが傷つけられた。

「あんななんかに渡すもんですか」

友紀ははつきりと憎悪を感じた。

ひどい頭痛で目が醒めた。

「……まただわ。何でこんなに疲れてるんだろ？ 今日部活も体育の授業もなかったのに」

原因は言うまでもない。ファルコンアマッドネスとしてセーラと演じた死闘である。

他のアマッドネスと違い記憶が混合されていない。

セーラが清良と知っては繋ぎとしている「嫉妬心」がなくなる。

だから怪人としての姿の時の記憶はない。

しかし肉体の疲労はそうも行かない。どうしても残るのだ。

「あたし夢遊病とか言うことはないわよね？」

思わずひとり言を言ってしまう。自分で自分を疑っている。

いくら疑っても戦闘の時の記憶はないのだ。

ただ嫉妬心を憎悪と変えるため一部だけ戦闘のときに心が繋がっている。

だからほんの僅かにイメージとしてセーラが憎い女として記憶されている。

それが見せたこの悪夢である。

橋の下。浮浪者のねぐらとしてはよくある場所にシースターアマッドネスに変化する鳴海星一がいた。

今は「彼」と呼ぶ存在は、缶をコンロ代わりにして調理をしていた。

枯れ木でもゴミでも燃料はある。その燃え盛る炎を見つめて考えていた。

（いまなら……セーラを殺せるんじゃないか？ ルコに協力してもらえりゃ倒せるんじゃないか？ そうすりゃいつまでも逃げ回らないですむんじゃないのか？）

ささやかなプライドが思考をそちらに回した。そして決意を固めた。

打って出る決意を固めたシースターはセーラを探すことにした。これまで遭遇した場所を中心に探すが見つからない。記憶を手繰る。

（そついやアイツ。変身前も学生服だったか？ どこかに学校があったよな）

ふらふらと福真高校へと足を向ける。

清良も友紀も疲労感を覚えつつもこの日は普通に学校生活をしていた。

アマッドネスが出現してそれを迎撃するのが清良。そしてセーラ。それを付けねらうのがファルコンアマッドネスなのである。

最初に出現がない以上は平凡な、そして貴重な平野な日を満喫できる。その放課後。

「友紀。今日は部活か？」

「うん。先に帰ってて。清良」

普通の男の子と女の子。むしろ仲が良すぎるくらいの会話である。とてもではないが殺し合いをしている二人のそれではない。

アマッドネスさえ現れなければだが。

その静寂を破るものがいた。やっとたどり着いた鳴海が正門から

堂々と乱入して来た。

もちろんファルコンの援護を当てにしてである。

(この生徒じゃなくても騒ぎを起こせば向こうからくる)

そう考えていた。

生徒たちはあからさまに不審者。そして浮浪者に嫌な表情をする。軽くにらみつける鳴海だがにらむのではなく清良かどうか確認していた。

「ちっ。やっぱりこっちじゃなきゃダメか」

鳴海はシースターアマッドネスに変化した。

怪人出現にパニックに陥る福真高校。

当然この出現は清良が感知していた。

「セーラさまっ」

待機していたキャロルが清良の元に駆けつけた。

「乗り込んでくるたあな。久々の学校バトルか」  
頻出地帯である。生徒がいる時の闘いも想定のうち。

例えば授業中なら基本的に教室。体育の授業で外にいるものもいるが、それとて体育館。グラウンド。場合によっては学校周辺だがそれでも人のいない場所がある。

そしてこの場合、既に放課後。空いている教室などいくらでもある。

手ごろなところに飛び込み、素早く儀式を開始する。

右腕を天に。左腕を地に向ける。天に紅いガントレット。地に蒼いガントレットが出現する。それを水平に運びぐつと腋にひきつける。

「変身！」

叫ぶと同時に両腕を突き出してガントレットを重ね合わせると激しい閃光。

それが収まるとセーラー服を模した戦闘服に身を包んだ少女戦士がいた。

セーラは感覚の命ずるままに窓に駆け寄る。

新体操部の活動で着替えに向かっていたはずの友紀。だが怪人出現で避難となった。

しかしセーラの登場で意識がブラックアウト。ルコのそれと切り替わる。

(ほっ)

感覚からしてセーラは近い。この学校だろう。そして同胞の感覚もある。つまりここが戦場だ。

(そうだな。せっかくこの姿を得たのだ。これも一興)

彼女は人のいなくなったところを制服姿のままゆっくりと歩いていく。

校庭にまで出たシースターは調子に乗っていた。

「セーラ。どこだ？ 出てこい」

「ここだあっ」

甲高い声が上がって響く。屋上からだ。

別に演出したわけではない。教室にいるところを見られたくなかった。

万が一相手が自分の素性をしらなかった場合、わざわざ教えたくなかったゆえだ。

「むっ。そんなところにいないで降りてこい」

怒鳴る声がよく通る。もっとも通じなくても鬨に降りるわけであるが。

「いわれなくても」

セーラはレオタード姿に転ずると校庭へと舞い降り、基本のエンジェルフォームに戻るとシースターと対峙する。

圧倒していた相手。邪魔さえ入らなければしとめられる余裕。

一瞬でそれが吹っ飛ぶ。シースター越しに見える少女の姿。友紀がいる。

「危ないから逃げろ！」

既に変身しているから正体を知られる危険性はないが、単純に戦闘による巻き添えを怖れた。

変身直後でまだ男としての意識が残ってるから男言葉で叫ぶ。

それに対して友紀はとても彼女とは思えない邪悪な笑みを「いいっ」と言う感じで浮かべる。

斜め下に振り下ろした右手に羽手裏剣が出たのがセーラにもよく見えた。

「ま……まさか!？」

そんなバカな？ 考えたくない。このパターンがあるということを考えるのを拒絶していた。

しかし現実には残酷。

友紀は羽手裏剣をくるくると三回回して顔面に運ぶ。

本来ならもう一瞬で変わるが、ここは心理戦であえてゆっくりと変化する。

優しい目が吊りあがり猛禽類のそれに。

唇が突き出されて硬質化して嘴に。

手の指がすべて鳥類のカギ爪に。

肌が無数の羽毛に覆われ、背中を突き破って巨大な羽根が出現。

着衣はすべて吹き飛んでいた。

すべてを見たセーラは愕然としていた。

効果を見てほくそえむファルコンがゆっくりと歩み寄る。

やっとの思いでセーラが叫ぶ。

「お……お前が、ファルコンアマッドネスだったと言っのか？ ウソだといってくれ。友紀いーっっっっ」

## EPISODE 22 「愛憎」 (後書き)

### 次回予告

(読みどおりだね。さあて。セーラさん。僕が行くまで逃がさない  
てくださいよ)

「やめる友紀。俺はお前とは戦えない」

「セーラを殺すのはこの私だ。他の誰にも邪魔はさせん！ 例え同  
胞でもだ」

「それで……それはあなた自身の喪服ですの？」

EPISODE 23 「奈落」

## EPISODE 23 「奈落」

「ジャンス。でやがったぜ」

福真高校の上空から思念を送るカラス型人造生命体のウォーレン。  
（読みどおりだね。さあて。セーラさん。僕が行くまで逃がさない  
てくださいよ）

押川順は放課後になると即座に福真高校へと出向いた。

ファルコンアマッドネスがセーラに対して並々ならぬ敵意を抱いている。

どうやらセーラに対しての刺客と判断。

そこでウォーレンが先行して福真市を見ていたのである。

そうしたら過去にも出たシースターアマッドネスが暴れだし、そしてそれに呼応すべくセーラが。

さらにファルコンが現れて役者が揃った。

後はそこを狙い撃つ。

高速飛行をされると骨だが、地上での戦闘中なら倒せる。

それで押川順はひたすら待っていたのである。

やがてウォーレンと合流して現場へと急行する。



福真高校の白昼夢。

まさに悪夢だった。いや。夢なら醒めるだけいい。

しかし現実に幼なじみの少女。友紀が宿敵であるアマッドネスに変貌した。

正体を知らないとはいえど憎悪で呼応したセーラ。

それは叩きつけられていた憎悪を跳ね返したもの。

だから愕然となった。

友紀が自分をそこまで憎んでいた？

確かに今の姿では自分が「高岩清良」とはわからないだろう。

それでもアマッドネスに取り付かれるほどの「闇」があったとい

うのか？

そして友紀と殺し合いをしていた。それが一気に襲い掛かりセーラは眩暈がしてきた。

「セーラ。私と戦え」

「やめる友紀。俺はお前とは戦えない」

「どうした？ お前のホームグラウンドだぞ。有利な場所でこないのか」

にじり寄るファルコンとあとずさるセーラ。こう着状態でにらみ合いが続く。

避難途中だった生徒たちも校舎から固唾を呑んで見守っている。

それほど緊迫感だった。

「臆病者め。私が倒してやるわ」

これまでの苦手意識が勝てそうになると一転して攻勢に出るシースターアマッドネス。

これまでなら問題のない相手だったが、茫然自失して戦意喪失のセーラには防御が精一杯だ。

福真高校近くのビル。その裏手に順はいた。「儀式」を済ませてジャンスへと。

そしてウォーレンがその背中にランドセルのように張り付いた。

脚が伸びてベルト状になりジャンスの腕につく。

翼を大きく広げて真上に上昇する。ウォーレン・ロケットモードだった。

一気に屋上になると福真高校の様子を見られる位置に。

あらかじめ狙撃ポイントとして調べていた。

「いたわね」

三者の姿を確認するとキャストオフ。ヴァルキリアフォームへと。そしてひたすらタイミングを待つ。

これまでのお返しとばかりにひたすらセーラを殴り続けるシース

ター。

その背後からいよいよファルコンが接近して来た。  
加勢。否。まったくの予想外の行動。

「邪魔だあつ。消えろあつ！」

ぱつぱつとシースターアマッドネスを一刀両断した。

「あつちやあー。これはまずいわねえ」

のん気な口調で言うジャンス。

「もう。また仕留め損なつたわね」

彼女は更なる姿へと変わる。

そしてスコープを覗き込み……

「な……なぜ？」

信じられないといわんばかりのシースターの言葉。

守ってくれるはずのファルコンがどうして？

「セーラを殺すのはこの私だ。他の誰にも邪魔はさせん！ 例え同胞でもだ」

言葉どおりだった。今まではさっさと逃げていたのでこうならずにすんだのだ。

「いけない。このままでは」

キャロルが焦った口調で言う。しかしセーラは死んだような目をしている。

救いは遠方から来た。

空気を切り裂いて魔力の弾丸。それがシースターに命中。

「ジャンス様！？」

攻撃手段から見て間違いない。

「ぐわあああつ」

ルコに斬られ、そしてジャンスに撃たれた事で致命傷になってい

た。

シースターは力なく倒れ、そして爆発四散した。

「くっ」

ジャンスに気をとられていたためもろに爆発のエネルギーを受けた。

多大なスキを攻撃ではなく逃亡に使ったセーラ。

爆風が収まると鳴海星一だったやせこけた女が全裸で横たわり、セーラはキャロルともどもいなくなっていた。

「ふん。腑抜けめ。臆したか」

ファルコンもその場を離脱した。そして物陰で友紀と入れ替わる。

意識を取り戻した友紀はワケがわからなかった。

「？」

軽く頭を振る。意識をなくす前の光景と違う。

さすがにルコも同じ場所で友紀の姿に戻るのには避けた。

異形になったときは校舎からは刺客になる位置の上に見ていたのはセーラだけだから変身して見せたが、校庭から元の位置に戻って友紀がいれば関係性が疑われる。

ましてやかつてアマッドネスだった女子生徒も幾人かいるのだ。

疑われないほうが不思議だ。

だからわざと飛び去ったように見せかけ、人気のない別の場所で切り替えた。

本人の記憶なら改ざんできる。もっとも戦闘の際に友紀がセーラに抱いた嫉妬心を利用してあるので、戦っている間の記憶が少しずつイメージとして残っている。

そろそろ分離し続けるのも難しくなってきた。

「あたし……何でこんなところに？」

意識が戻ると途端に疑問が。

（本当にどうにかしちゃったのかな？ それに……さっきまで誰かとケンカしていたような……そんなわけないか。話に聞く「怪人」

が出て避難していたはずだし）  
軽い現実逃避もあったか、強引に結論を出してしまった。

そのころのセーラは飛んでいた。キャロルを抱えてひたすら飛んでいた。

ぐすぐすと泣きながらひたすら空を行く。  
どこまでもどこまでも逃げていく。

そんなときでも感知してしまう「信号」。

無意識で彼女はそちらへと進路をとる。

福真市をだいぶ離れている。ここは王真市。そう。ブレイザの守るエリアだ。

ブレイザは手こずっていた。

相手は強敵というより逃げ足が素早かった。

ビルの工事現場。その基礎工事中でほじくりかえされた地面を舞台に戦っているのは鼠の能力を持つラットアマッドネス。

「ええいつ。ちょこまかとおつ」

素早さに物を言わせてブレイザを翻弄していた。

しかしあくまでもブレイザを倒すのが任務らしく逃走だけは選ばない。

攻撃しては素早く物陰に隠れて漸撃を避けている。

「会長。大丈夫ですか？」

「下がっていないさ。森本」

心配してきた相手に対してつれない態度だが、戦闘では足手まといなのは事実。

いわれた通りに森本は引き下がる。しかしそのドサクサでラットの動きを見失った。

「こうなったら……超変身」

ブレイザは巫女装束へと姿を変えた。その名はアルテミスフォー

△。

五感どころか六感まで研ぎ澄まされた超感覚の戦士で、敵の動きを完璧に察知できる。

しかし神経への負担が大きく三十秒が限界である。

それが頭に入っているラットアマッドネスは、文字通り息を潜めて待っていた。

ブレイザの背中中の位置。あまりにミエミエで逆に疑われない位置。しかし

「超変身」

いきなり姿を着流し姿の強力戦士に変貌したブレイザは、振り替えるや否やガイアフォームの膂力で思い切り地面を蹴り上げた。

無数のジャリが散弾のように襲いくる。飛び出せば被弾確定。だから蹲った。

その間に今度はヴァルキリアフォームに戻ったブレイザが駆け寄っていた。

急停止するなり逆手もちの刀を大きくバックスイング。

タメを作りラットアマッドネスを切りつけた。

「ぐぎゃあああっ」

胸から胸にかけて大きな裂傷。致命傷だ。

「ど……どうして潜んでいる位置があんな短時間で？ 息も止めていたのに」

「簡単ですわ。その『不自然さ』を察知したまで」

「に……逃げるべきだったか……」

悔恨を残し鼠のアマッドネスは四散して果てた。後に残るは小柄な女。

根津楽人という名の男性だった存在の変貌した姿。

「やりましたね。会長」

傍らでサポートしていた森本要が駆け寄る。

既に「伊藤礼」としては2年の六月を迎え、生徒会長選が行われていた。

これを圧倒的多数の支持を得て当選。現在の役職は生徒会長であったのだ。

「森本。いつものようにお願いしますわ」

「はい」

言われた少年はあらかじめ探していた公衆電話で救急車を要請する。

携帯では自分の身元が割れかねない。

そうなるとブレイザが伊藤礼と知れてしまいかも知れないという判断だ。

彼は電話の元へと走る。それを見送りブレイザは正反対を向く。

「それで……それはあなた自身の喪服ですか？」

ブレイザの目の前にはセーラが下りていた。

目立たないような服のつもりが黒いワンピースでまさに喪服であった。

心象が如実に現れていた。

「話、いい？」

あまりにも昏い瞳。さすがに戦意も霧散したブレイザ。

「手短に頼みますわ」

あわしたわけではあるまいが薄い色のワンピース姿になるブレイザ。

資材を椅子代わりにして並んで腰掛ける。

「それで。用件はなんですか。戦闘直後で疲れているわたくしと戦おうというなら姑息ですが良い手ですわ。もっともそれなら不意打ちすべきですが」

セーラは否定すらしない。何も考えられない状態だ。

「ブレイザ……前にドクトル・ゲーリングと戦ったときはどんな気持ちだった？」

いわれてブレイザは顔をしかめる。あまり良い思い出ではない。

「なぜ、今頃そんなことを」

「教えて。大事な人を手につけなければならなかったその気持ちを」  
真剣な表情だ。ただならぬ事態を察した。

「最初から話していただけます？」

文字通り最初から。といつてもわかつている内の話で、ファルコンの襲撃からその正体が友紀だったことまでを洗いざらい話した。  
最後のほうでは涙さえ浮かべて。

「なにかと思えば……」

「な！？」

ブレイザの態度は知っていたつもりだったが、これはないだろうと沈んだ心にすら怒りが。

しかしブレイザのマイペースは変わらない。

「良いですか？ ドクトルの場合は男から女へ変わってしまったし、それで離婚にまで行ったので確かに問題でしたわ。けれどその友紀さんは元々女性。一度リセットされるから完全に元通りとはいえないものの、むしろ障害がなくなって都合がいくらいですわ。さらには邪心はすべて吸い尽くされますし」

「でも……相手は友紀なんだよ。友紀に手を挙げるなんて……」

例え死なないとわかっていても。そして再生後は問題がないといえど友紀に手を出すことなど出来ない。

しかし放っておけばファルコンがセーラおびき出しで無差別攻撃をしないと限らない。

そしてよりによって友紀の変身した姿に対して憎悪で戦っていたことが自己嫌悪で落ち込んでいた。

「甘いすわね。自分の手を汚す覚悟もないなんて」

「貴女に何がわかるのッ！？」

思わず立ち上がるほど激昂するセーラ。

「いいこと。わたくしたちが相手にしているのは暴力を崇拝する者



たちなのですよ。そんなけがれた相手と戦うのに自分が綺麗でいられると思っっているんですの？　だとしたら拳の戦乙女はとんだ甘ったれですわ」

確かに綺麗事じゃない。それはわかる。しかし

「質問に答えて差し上げますわ。確かにドクトルとの闘いでは躊躇しました。ですが解放こそが弟子として師匠に対してわたくしのなすべきこと。それについては後悔してません。そして」

「そして？」

「わたくしはいつか完全にブレイザとなってしまい、今の人格でも伊藤礼の人格でもなくなってしまうことを怖れてはいません。既に覚悟を決めています」

「覚悟……」

「そうです。闘いの場に身をおく以上は倒されるのも覚悟のうち。ただその形が『死』ではなく『男としての消滅』というだけの話」

「でも」

「そんな覚悟すらないと言うなら、今すぐ戦場を去りなさい」  
正論だった。しかし今のセーラには受け止めるだけのタフさがない。

また涙を流しながら無言で立ち去る。

それを見届けてから森本とドーベルがでてくる。

「どうやらカケラの影響はだいぶ薄くなっているようですね」

ドーベルの言葉は二人がいきなり戦いにならなかったことをさしている。

「ふん。あんな泣き虫を斬っても刀が嫌がるだけですわ」

心なしか頬が赤い。

「ブレイザさん。やっぱり優しい」

心底感心したように要が言う。

「だから、違うと何度言えばわかるんですか？」

そっぽを向く。セーラの去った方角を。

（個人的には嫌いですが、仮にも戦乙女の一人ならその程度は乗り

越えると信じてますよ)  
彼女なりのエールだった。

翌朝。否が応でも新しい一日が始まる。

清良は登校拒否をしようと思っていた。

無理もない。どんな顔をして友紀に会えばいいのかわからないのだ。

ところがなんとその友紀のほうから家に寄ってきた。昨日の今日だというのに。

それがこの朝はわざわざ玄関で待っていた。

(どういうことだ？ アマッドネスの差し金か？)

今までが今までだ。幼なじみを疑うとは悲しいがこの思考も無理はない。

(そうか…ここは逃げちゃダメな場面ということか)  
文字通り覚悟を決めて友紀に逢うことにした。

玄関で待っていた友紀は無理して笑っているように見えた。

それは殺意を隠した笑みではない。

むしろ隠しているのは自分の不安。そう清良は受け止めた。

短い挨拶の後は黙って歩く二人。

清良にしてみればアマッドネスに取り付かれているのが確実な友紀との登校。

いつ幼なじみと殺し合いになるかわかったもんじゃやない。

しかし友紀の方も過度の不安を抱えているよう見える。

「ねえ。キヨシ。あたし最近変なの……」

意外な一言だった。

確かにアマッドネスに憑かれているのだ。異変は当然。

しかし過去の例から言えば人格が融合している。

つまりわざわざこんなことを言ってくるはずがない。

(まさか…そういやドクトルのおっさんも完全には融合してなかったな。友紀はもつと…)

清良の不安そうな表情を自分への心配という意味にとった友紀は、それを打ち消さずに告白を続ける。

「気がつくとおぼえない場所にいたり、やたらに疲れていたり。それなのに全然その記憶がなくて」

この一言で清良の考えは「ファルコンと友紀の人格は分離している」という方向に定まった。

実は正解だが、そう思いこもうとした産物でもある。

(ということは…奴らに付け込まれる部分はあつたとしても友紀自身は何も知らないということか?)

人間である。どんな…例えば「聖人」と呼ばれる存在にも多少なりとも「闇」がある。比率の問題なのだ。

だから友紀がつけこまれたこと自体は、今にして思えばありえなくはない。

しかしまったく友紀が知らないとなると話が変わる。

つまり本人にまるで罪がないのだ。

ますますもって手を挙げられないと認識したのは皮肉というものである。

「清良。あたし怖いの」

幼子のがはぐれた親を見つけて泣きながらしがみつくように友紀は清良に抱きついた。

「……友紀」

言葉以上に触れ合った肉体が雄弁に胸の内を物語る。

「あたし、どうなっちゃうの?」

不安からその巨軀をきつく抱き締める。その上から清良が優しく腕を回す。

「心配すんな。俺がお前を助けてやるよ」

「……キヨシ……」

例え気休め。いや。ウソでもその優しい言葉と表情が嬉しかった。

ルコにとって皮肉なのは、セーラに対する友紀の嫉妬心を利用。そして増幅した結果、友紀がこの幼なじみに抱いていたほのかな思いを強めたことであった。

このまま時が止まればいい。二人ともそう思っていた。アマッドネスがでなければ友紀の中のファルコンもでてこないはずだ。

直感で清良は感じ取っていた。そうすれば今までどおり。仲の良い幼なじみでいられる。

それは許されない幻想だった。

軽部ことアヌが清良に恨みを持つ不良・針草にサボテンの能力を持つノトの魂を植えた。

それによって誕生したカクタスアマッドネスが、セーラ打倒のために福真高校に向かっていた。

そしてそれは、清良と友紀がまた戦うことを暗示していた。

EPISODE 3 「奈落」(後書き)

次回予告

「よっ。高岩。ちよつと付き合えよ」

「もう二度と変身なんざしねえ」

「ふふふっ。今度こそ殺してくれる」

「キ…ヨシ!?!」

EPISODE 4 「墜落」

## EPISODE 24 「墜落」

平穏な一日であった。

初夏のさわやかさに満ちた一日であった。

普通に授業が進み、たわいないおしゃべりをして、ごくごく普通に過ごしていた。

退屈とすらいえる一日だが、清良はそれを物凄く愛しく思っていた。

(このまま何もなければ)

無理を承知で願ってしまう。

つつい目で追う幼なじみの少女。

不安を隠す。あるいは吹き飛ばすためかこの日はことさらよく笑う。

それがひどく無理をして見えて痛々しかった。

決着をつけるときが着た。その使者が校門で待ち構えていた。

おりしも放課後。下校する生徒がじろじろと奇異の目で見ている。ハリネズミのように頭髪を逆立てた少年。パンクなファッションをしている。

「……………てめえ……………針草」

「よう。高岩。ちよっと付き合えよ」

軽いのりで言ってくる。

「生憎それほど暇じゃねえ」

軽くないなす清良。

「キヨシ……………」

傍らの友紀が不安そうに清良を見上げる。

「くくく。これでもか？」

一瞬。画像の揺らぎのように姿が変わり、そして元に戻った。

「テメエ……………憑かれたと言う訳か？」

幸い大半の生徒は係わり合いを嫌い足早に通り過ぎた。友紀は清良を見ていた。

「変身」を見ていたのは清良だけである。

「付き合わないなら部活中の生徒の皆さんが針の山になるけどな」

清良はしかめっ面をした。だが「覚悟」を決めた。

「付き合ってやる。だが場所は変えるぞ」

## EPISODE 24 「墜落」

河川敷。友紀を先に帰した清良が選んだ場所はここだ。

整備が進んでおらず足元も悪いため運動部が練習に使うこともな

い。

人気がなく戦うにはちょうどよかった。

「あー。いいねえ。俺もあんまりこの姿を見せたくないんだわ」  
軽い調子で言うのと針草は異形へと転じる。

頭部がサボテンといわれて連想するそのままに。

その中に目鼻がある形だ。後は緑色の肌をした女の肉体に、サボテンの針が無数に生えている状態。

「よいしょつと」

軽薄な調子でカクタスマッドネスは武器を出現させる。

サボテンの意匠の棍棒だがことなく野球のバットを連想させる。

「どうしたよ。さっさと変身しろや。戦乙女様によ。それを倒してきたんだからな」

どうやら取り付いたノートもこういう性格らしい。

「……しねえ」

清良はぼそつとつぶやく。

「あ？」

「もう二度と変身なんざしねえ」

言うなり清良は伸縮警棒を抜いて、間合いへと飛び込んで行った。

帰路。友紀は不安な表情をしている。

ただし朝の自分の不安ではなく、幼なじみの安否を気遣うそれ。

「大丈夫かな？ 清良」

清良が他校の不良に絡まれるのはもちろん初めてではない。

そのたびに清良は巻き込まないために友紀を先に帰す。

一度は心配で駆けつけたが、その際に人質にされてしまい清良が大怪我をした。

それからは二度と清良のケンカには自分から付き合わないようになっている。

どれほど心配でもだ。



まさか自分が清良を苦しめているとは知る吉もなかった。

大柄な少年と普通の体格の女。しかし普通の少年と「怪人」では男女のハンデを考えても体力差がありすぎた。

棍棒であっさりと弾き飛ばされて、追撃で全身から生えた針を飛ばして打ち込まれた。

「ぐあああっ」

頭部を守りながら避けたが何発かは命中した。苦悶の声を上げる。「セーラ様。どうして？」

黒猫の姿の従者が駆けつけた。

「どうやらファルコンの野郎は『セーラ』にだけ反応するらしいからよ……それなら俺が変身しなけりゃいいだけのこった。そうすりゃ二度と友紀はあんな姿にならねえ」

「無茶です。セーラ様」

「そつでもないぜ……」

清良の目は一点に注がれていた。

一方のカクタスマッドネスは屈辱に打ち震えていた。

「ふ……ふざけやがって。ひ弱なミュスアシの民如きに、栄誉ある戦士であるこの私を倒せるというなら倒してみろ！」

戦闘用に能力を移植した「改造人間」の誇りをいたく傷つけられた。逆上する。

ふたたび針を飛ばして攻撃する。当然だがいかに広範囲といえど攻撃されていない部分もある。

清良は前方へと飛び込んだ。そしてカクタスの懐に飛び込む。だが攻撃しようにも全身が針で覆われている。

「こいつ！」

カクタスは棍棒を振り上げる。清良はアンテナを収納するように伸縮警棒を縮め、その短い鉄の棒で棍棒を握る拳そのものを狙った。自ら振り下ろした力と、振り上げる清良のパワーで一種のカウンターに。

たまらず棍棒を落としてしまうカクタス。即座にそれを拾い上げ  
「そらよっ」と気合を入れてそのままバットスイングのように思い  
切り降りぬく清良。

「ぐはあっ」

これだと針のガードも関係ない。それどころか自分の肉体の一部  
を変化させて作った棍棒の『針』が刺さり苦しんでいる。

「思った通りだぜ。さすがにグリップにまでは針はねえ。あつたら  
持ちにくいもんな」

獲物を獲て形勢逆転。滅多打ちにする。

どうやら針に守られている分だけ打たれ弱いらしくあつと言つ間  
にグロッキーするカクタス。

「ようし。この調子で全部倒してやる」

清良の決めた覚悟。それは本来の姿のままアマッドネスとの戦い  
を続けると言うものだった。

そしてファルコンを友紀の中に閉じ込めたままにするつもりだっ  
た。

「だ……ダメです。セーラ様っ。払うには戦乙女の聖なる力でない  
と出来ません」

「な……なんだと？」

「ましてやアマッドネスとして死んでしまったら、そのまま取り付  
かれた人間も道連れです」

故にジャンスはファルコン狙撃を諦めて、ルコによって瀕死のシ  
スターを聖なる力で倒すことを優先したのだ。

「……………ちつくしよおーつつつつ」

目論見が外れた清良は、瞬間的にセーラへと転じた。

その刹那、友紀の意識が途絶えた。いれかわり眠る悪魔が目覚  
ました。

「ふふふっ。今度こそ殺してくれる」

邪悪な声でつぶやくそれは既にファルコンアマッドネス。

大きな翼を広げて戦場へと飛んでいく。

それを遠方から察知していたのがウォーレン。

「やっぱでやがったぜえ」

ウォーレンもジャンヌも友紀がファルコンとはわかっていない。

ただファルコンは現場に駆けつける際に必ず高度をとる。

それですぐにわかるのである。

そしてまだセーラを付けねらっているうちに倒してしまおうと考えている順は、逆にファルコンを付けねらっていた。

この日も既に福真市へと向かっていたのである。

出現したので主従は合流へと。

エンジェルフォームになり、すぐにキャストオフでヴァルキリアフォームに。

そして超変身を立て続けに行う。マーメイドフォームだ。

いきなりランスを突きたててとどめを刺す。

「ぐうおわああああっ」

カクタスは連続攻撃に耐え切れず爆裂した。後に残るは全裸の少女。

(よし。奴が来る前に元に戻れば)

間に合わなかった。羽手裏剣が飛んできていた。

守りの堅いマーメイドゆえにダメージは少ない。上空を見上げる。

エジプト神話のホルスを思わせるアマッドネスがそこにいた。

「……友紀……」

「セーラ。今日こそは貴様を殺す。六武衆。飛将の名にかけて」

緩やかに降りながら宣言するファルコン。

六武衆は將軍ガラの下すべて対等。故に肩書きもそれぞれが持ち合わせていた。

セーラは一步も動かない。ただ姿をエンジェルフォームへと戻しただけだ。

「さあ。戦え。セーラあああっ」

刀を抜き襲い掛かるファルコン。セーラは避けるもののその場からは動かない。

「刀だけだと思つなよっ」

ルコの膝が入る。

「ぐっ」

思わずくの字になるセーラ。

一応は女の肉体である。子宮も存在している。ちょうどその位置だ。

「ほらほら。反撃したらどうだ？」

暴力に酔いしれ殴り続けるファルコン。むしろルコが。

「手が…出せるわけないだろ…」

(セーラ様。もうだいぶ経つのに?)

時間がかかりたっているのにもかかわらず、精神が女性化していない。

「なんだと？」

戦闘だけに生きてきたアマッドネスには理解不能の感情だ。

「友紀…：俺はやっぱりお前を殴ったりなんか出来ないよ…：代りに好きなだけ殴れ。俺が何か悪かったのなら、それで俺び代わりだ…：」

友紀への強い思いがセーラの肉体でありながら清良の精神のままでいさせていた。

「世迷言を。好きなだけ殴れと言うならそうさせてもらっわ」

既に狂気の域に達しているルコがなぶり殺しとばかりにセーラを滅多打ちにする。

防御形態のエンジェルフォームゆえに三桁の打撃数にも耐えられている。

しかしそれにも限界はある。  
最後にルコが放った蹴りがセーラを吹っ飛ばす。地面に叩きつけられる。

それで限界を超えた。とうとう気を失う。戦闘中だがファルコンの目前で変身を解除してしまった。

これが運命を分けた。正体を知っているはずのファルコンが驚いた表情になる。

「キ…ヨシ!？」

その声は友紀の澄んだ声だった。

合流した順とウォーレン。とりあえずはバイクモードで移動開始。ロケットモードは目立つので人気のないところか、緊急時だけに絞っていた。

走りながら変身してジャンスに。

一路戦闘区域に。

横たわる清良を見てファルコンが動揺している。

(しまった!! 目の前で正体を知ってはもはや嫉妬を利用できない。こうなれば)

嫉妬心を利用するためそこだけつなげていたのが仇になった。

セーラが清良と気がついてしまったのだ。

そうなればもはや分離の意味はない。意識を融合に掛かる。それが仇となった。

意識が融合したことで友紀はこれまですべてのことを理解してしまった。

もちろん主導権を取れる前提だった。ところがそれが出来ない。

(どづいうことだ? なぜ?)

すべて優位に進めてきたルコが焦る。もう一つの心が叫ぶ。

「いやあああああ。あ……あたし、なんてことを。キヨシを殺そうとしていたなんて」

強い悔恨。罪の意識。それが悪の誘惑とも言つべきルコの心を拒絶していた。

「う……うっ」

時間にして5分程度。それが清良の気絶していた時間。ぼんやりと意識が戻る。

目に飛び込むは苦悩するハヤブサの異形。

「友紀!？」

瞬間的に目が醒めた。よろよると立ち上がる。まだふらついてい

る。  
「キヨシ。来ないで！」

紛れもなく友紀の声で喋る。思わず動きが止まる清良。

「あたし…キヨシにどんな顔して…」

なんと涙を流すハヤブサの異形。そして翼を広げて大空へと逃げていく。

「待てよ！ 友紀」

きしむ体に鞭打って清良は変身した。

エンジェル。ヴァルキリア。そしてフェアリーへと転じたときはもう影も形も見えなくなっていた。

それでもセーラは追いかけて行った。

ここで逃がすと大事なものを永遠になくしてしまいそうだったから。

泣きながら大空を行くファルコン。本来の心は手も足も出ない。散々友紀の肉体を弄んだ報いか。

奪い返された。それどころかアマッドネスの力までのつとられてしまった。

(止まれ。引き返せ。あそこまで追い詰めてなぜ逃げる?)

(黙りなさいっ！ あなたのせいであたしはキヨシにひどいことを完全に主導権を握られた。)

(何てことだ……空の将。飛将とまで言われたこの私が、たかが恋心に敗れ去るとは)

恋心を悪用したしっぺ返しで、自分の能力を乗っ取られるという屈辱を味わう羽目になったルコである。

こんなことをしていたせいか、友紀が能力。あるいはスピードになじんでないせいか飛翔速度は遅かった。それゆえにセーラ。そしてもう一つの存在も追いついた。

前方に回りこんで制止する。友紀が主導権を握るファルコンが停止した。

「キヨシ……」

「友紀。やっと追いついた。さあ。帰ろう」

少女への強い思いがセーラの精神を清良のままにとどめていた。

美少女の顔なのに男の子のように微笑むセーラ。しかし友紀は首を横に振る。

「帰れない。あたし、あなたにとてもひどいことを。勝手に誤解して、勝手に嫉妬して」

「いいんだ。悪いのはみんなアマッドネスなんだから」

いささか軽い印象だが事実ではある。

「さあ。帰ろう。ふふ。随分と遠くまで来たよな」

東京湾沖だった。別に何の根拠もなかった。ただでたらめに飛んでいたらここにいたのだ。

たまたまなのか船舶がない。陸地からもだいぶ遠い。まず目撃される心配はない。

「でも、あたしの中にそのアマッドネスが」

「出さないようにするよ。俺が絶対に」

間違いない女の子の肉体だが、その表情と口調は凜々しい男の子だった。

「キヨシ……」

その気遣いが嬉しくてほんの一瞬、張り詰めていたものが解けた。

それが隙となった。

(今だ。もう一度奪い返す)

しぶとく諦めていなかったルコが主導権を奪い返した。

「死ね。セーラ」

「友紀？」

ファルコンアマッドネスが爪を振り上げて攻撃してくる。しかし今度はファルコンに多大な隙が生じた。

彼女は空気を引き裂く音と共に動きを止めた。背中から入った衝撃が、腹部を蹴散らして抜けて行った。

信じられないと言う表情で大穴を見る。そして怒りや絶望などすべての感情を飛び越して笑いが出た。

「わ…すれて…いた…ジャンスカ」

かなり離れた空。ウォーレン・ロケットモードに支えられてジャンスが狙撃を遂行していた。

別に煙は出ていないのだが超変身をした姿のジャンスは銃口の煙をふくような仕草をした。

「はい。完了。やっとこれで片付いたわね」

「それじゃさっさと逃げようぜ。得物を横取りしたからセーラがカンカンかもな」

「別に文句くらい聞いてあげるわよ。そうねえ。挨拶もまだだし。

しばらくはこっちの学校でセーラさんが来るのを待ちましょるか」

仕事が終わったとばかりにのん気な会話をして、ジャンスはウォーレン・ロケットモードで帰途に着く。

目立たないところで陸地に戻り、バイクモードで帰るつもりだ。

「キ…ヨ…シ」

「これでよかったんだ」とでも言いたそうに微笑みながらファルコンがゆっくりと落ちていく。

「友紀!？」



慌ててつかまえようとするが運悪くその瞬間に爆発。

「ぐっ」

これで完全にファルコンアマッドネスの魂は分離されたが、逆に言えば生身の人間。

海面からかなりの高さである。生身の人間が落下すればただではすまない。

そして爆発でセーラは上に飛ばされ、友紀は下へと加速する。距離が開いた。

「まずい」

高速飛行で何とか落下する友紀より下に出た。

しかし非力なフェアリーでは支えきれない。

(こうなったら)

高揚した故かガントレットを叩かなくてもマーメイドへのチェンジが発動した。

これなら海中でも自在に動けるし、落下衝撃にも耐えられる。

気絶した友紀をきつく抱き締めて頭部を守る。そしてドリルのように回転する。

少しでも落下衝撃を散らせるためだ。

(誓ったんだ。友紀を絶対に守るって)

二人の少女は海を穿ち落ちて行った。それでもセーラは友紀をきつく抱き締めて離そうとはしなかった。

セーラはちよつと躊躇ったものの友紀の口を自らの口でふさいだ。

自分自身は長い髪が魚のえらのように酸素を取り込める。

それを友紀に分け与える目的だ。

全裸の友紀を、それも直前まで怪人だったそれを人前に晒したくない。

海中をセーラは必死に泳ぎ、その場を離脱していた。

警視庁。三田村の部屋。ノック音がする。

「入りたまえ」

許可を出すと「失礼します」と一言いい軽部が入ってきた。一泊の間をおき「飛将が落ちました」と報告した。

「邪将・スストに続いてというわけか。意外に人の心というのは侮れんな」

「どうやら結果を予見していたようだ。」

「もはやその小娘に邪心がないから憑けない。家族もダメか。この手はもう使えんな」

「は」

「とりあえず六武衆を投入するのは待て。恋人を弄ばれた奴の怒りは能力以上の物を与えるだろうからな。返り討ちにあう確率が高い。消耗させるのは得策ではない」

何とか川を遡り、人気のないところまで出た。

体力は限界に達していたが上にあがる。

ふらふらしながらも一度変身を解除するセーラ。

服が再構成されて乾いた状態に。学生服を脱ぎ、ワイシャツの両方の袖を引きちぎる。

それからまたセーラへと変身。

袖だったものをタオル状に変化させて友紀の体の水滴を丹念にふき取る。

終わったら「タオル」を胸と腰に当て、下着へと変化させる。

学生服を羽織らせてワンピースへと作り変える。

「これでヨシ……火が欲しいけど」

不良とはいえどタバコを吸わない清良は火種を持っていなかった。「仕方がない。ある意味じゃ女でよかったかな？」

セーラは友紀を抱き締めた。そしてお互いの体温で冷え切った体を温めていた。

意識を失うと友紀が恥ずかしい格好になるので、睡魔と闘いながら抱き締めていた。

「ん……」

「気がついた？」

さすがは戦乙女というべきか。じっとしているうちに体力が回復していた。それで意識を保ったまま過ごせていた。

「キヨシ……なのね」

口付けが出来そうな至近距離の美少女の顔に問いかける。

「……うん」

もう隠さない。最初から説明をすることにした。

ルコの残した記憶とですべてを理解できた友紀は泣いていた。

「ごめんなさい。本当にどうやって謝ったらいいのか」

「あたしの方こそごめんなさい。巻き込みたくなかったんだけど、逆にこうして辛い思いをさせて」

山場が過ぎたせいか今度は女性化しているセーラの意識。

「あたし……って、キヨシ。そこまで女の子になっちゃうの？」

「うん。だからある意味では取られるというのも間違いないのよね」

「ううん。でもやっぱりキヨシだ。優しいもん」

すべての邪心を吸い上げられた友紀は、これまでの被害者同様に子供のようになっていた。

「それでもないよ。アマッドネスに対しては怒り狂っている」

まさに三田村の危惧した通りだ。だがそれだけではない。

「それに……いくら戦乙女のなすべきこととはいえど、友紀のことを撃ったジャンスにも怒っている」

それまで優しい笑みを浮かべていたセーラの表情が、怒りに歪んでいた。

EPISODE 24 「墜落」(後書き)

次回予告

「俺は太陽の男。番長・岡元！」

(くくく。いいぞ。お前のようなしぶとき。私は気に入った)

「あとそれから。僕が女子制服を着ているのは単純に似合うからです」

「射抜く戦乙女。ジャンス」

EPISODE 25 「飄々」

## EPISODE 25 「飄々」

これはセーラとファルコンに決着のついた日。

百紀市のあるアパートでは老夫婦が困り果てていた。『押し売り』である。

「いえ。市販のもので間に合ってますから」

枯れた男性が弱々しく断りを入れる。

「ダメダメ。市販のは弱くてゴキブリが死なないから。その点これは大丈夫。少しの量ですぐに死ぬから。今なら一本を半額の千円で売りますよ」

どう見ても堅気には見えない男が二人。「セールストーク」を繰り広げていた。

ドアを閉められないように靴の先をねじ込む悪質さである。

「千円!? それはちよつと高いでしょう」

「結果的には安上がりなんです。ほんとに少しですみますから。しかも撒いておけば害虫が匂いを嫌って寄り付かない効果があるんです。ただ人間にはわからない匂いなんですけどね」

この男たちは一時間も粘っている。

他の住人も助けてはくれない。そもそも昼間である。仕事に出ているものも多数で、無職である老夫婦が狙われた。

結局は断りきれず泣く泣くそれを買う羽目になった。しかも二本。二千円でおつぱらうつもりであった。

「まいどありー」

どうやら立場はどうでもよく、とにかく金になればいいらしい。恨みがましい老紳士の視線も気にならないらしい。

意気揚々と出てくる二人組

「あーぼろいな。中身はただの水なんだけどな」

「そりゃ匂うはずありませんぜ」

馬鹿笑いをするチンピラたち。押し売りに加えていんちき商売だった。

季節は夏。上機嫌だったが暑さに顔をしかめる。

「しかし暑いな」

「じゃあ喫茶店にでも」

「バカヤロウ。せっかくの儲けを吐き出す気かよ。どこかの影で直射日光を避けるべく影を探していた。

その二人組みが突然影に覆われた。

「なんだ？ 曇ったのか」

だがそんな様子はない。

「ふむ。日陰者らしく日陰を探しているのか？」

上のほうから野太い声がする。不思議に思い声のほうを見ると悲鳴を上げた。

「のわひゃあああああつ」

二メートルを越える雲突く大男がそこにいたのだ。

いわゆるガクランを着ているが、それでも筋骨隆々なのが見て取れる。

「イカンな。年寄りのなけなしの金を騙し取るとは。今すぐ金を返して謝ってこい。お天道様は見てるもんだ」

まだ若いのに妙に歳の行ったようなことを言う。顎の割れた四角い顔の大男。

「な……なんだあ。てめえは？」

「俺か？ 俺はな……」

大男は間を取ると左腕をひきつけ、右手を左肩に当てる。そしてそれを右下に降りながら高らかに言う。

「俺は太陽の男。番長・岡元！」

EPISODE 25 「飄々」

そしてこの日。入院していた友紀を迎えに（学校をサボって）出向いた清良は、そのままキャロルバイクモードで百紀高校へと出向いていた。

既にファルコンの記憶を一時的に融合されたことで、セーラの従

者であるキャロルについては知識を得ていた。

ちなみに初めての「タンDEM」である。

ただ猫の姿を見ていたので大柄な清良と、そんなに大きくないとはいえど自分の二人ではかわいそうだなと感じていたが。

退院してそのままだから私服のワンピースである。

清良はいつものガクラン。既に衣替えを過ぎているが「着てないと落ち着かない」と着用している。

「ねえ。キヨシ。あたしは本当にいいから。健康状態も問題ないし」「いや。やっぱ奴に撃つたことを謝らせる」

友紀がファルコンに取り付かれていたとき、結果としてそれを解放したのはジャンスの狙撃だった。

手を出せないでいたセーラとしては助けられた形である。

しかし影から友紀を撃つたことがどうしても気に入らず、こうして出向いていた。

交差点で左側の道路からサイドカーが走ってきた。

(あれ?)

最初に気がついたのは同類のキャロルである。

ライトの明滅で「挨拶」をする。それに対してサイドカーも同様に返した。

これはどちらのライダーも関与していない。マシン同士が勝手にやっていた。

そのまま清良から見たら直進の道路でサイドカーと並ぶ。現在は信号待ち。

「あつ。会長。高岩さんですよ」

カーゴにいた森本がはしゃぐように言う。

「高岩だと?」

ヘルメットのバイザーをあげる。その顔は



「げっ。伊藤」

ちなみに清良はちゃんとヘルメットをしていたが、大柄な体躯がヘルメットをしていても判別しやすかったのである。

奇しくも両雄：というか「ダブルヒロイン」が併走することに。

しかしここは負けず嫌いの二人。青になったとたんにもまるでゼロヨンのように飛び出す。

「キャロル。もっと飛ばせ」

「友紀様に乗っているのに無理ですよ」

「ドーベル。こんな奴らとつるむな」

「いやいや。たまにはよろしいかと」

結局、目的地まで仲良く出向いてしまった。

暴走族の集会場所。

「なんだと？ またあのやろうが」

「はい。俺達をぼこぼこにしたあげく金をかえさせ、さらには便所掃除までやらされました」

報告しているのは老夫婦に押し売りを働いたチンピラ二人組み。

「くそお。俺たちの重要な資金源を潰す気か？」

いんちき殺虫剤で金儲けというのは効率が悪いような…

「岡元のやろう。いつも邪魔しやがって。何とかしめてやりたいが」

「無理ですよ。あいつにや並の男が20人がかりでも勝てませんよ」

「くそぞう。力があれば」

まるで自分たちが善玉であるかのようなコメントを発する暴走族ヘッド。五木であった。

(くくく。いいぞ。お前のようなしぶとさ。私は気に入った)

浮遊する邪悪な魂とシンクロしてしまった。それが五木の命取り。例によって例のごとくとり付かれる。

「くおおおおっ」

異形へと転じる暴走族ヘッド。

「ヘッド？」

「いつ……き……さん？」

最初は心配していた者達もその姿を見て我先に逃げ出す。

どうも「怪物」という以前の問題のようだ。

そしてアマッドネスと化した五木は、そのまま自分の配下を手にかけていく。

「ここか。ジャンスの通っている高校ってのは」

百紀高校。これがこの面々の目的地であった。まだあったことのない清良が言う。

「高岩。何をしに来たか知らんが押川に会うと言っなら仕方ない。

『覚悟』をしとけよ」

あまりに珍しい礼の忠告である。それも清良相手に。

「おいおい。随分と副会長様はお優しいな」

「いつの話をしている。もう会長だ」

「ああ。当選すると言ってたからな。おめでとさん」

祝うつもりがカケラもない祝辞である。

そんな会話をしていたら中から山のような大男がのっしのっしとやってきた。まるで怪獣である。

「な……なんだ？」

さすがの清良も引き気味。そして通せんぼをするかのように立ちふさがる。

「なんだあ。誰かと思えば王真の生徒会長か」

通せんぼは豪腕番長。岡元だった。彼はこここの在校生なのである。

「あんたか。ちょうどいい。押川に取り次いでもらいたい」

どうやら周知の仲らしい。ただし友好ムードはない。

「お……おう。俺もその押川に用がある」

清良も負けじと続く。岡元は初対面の清良を一瞥する。

「貴様はダメだ」

「なんでだ？」

「顔が悪い」

どうやら人相で判断したらしい。当然黙ってられない清良。

「て…てめえに人のこといえるのか？」

「ふん。順にあいたきや俺を倒して行け」

(どうしてそうなの？)

この乗りについていけない友紀。それは礼も同様だった。

「まったく、番長とか言われていい気になってないか？　しよせん悪が悪を食っているだけだろう」

どうやら清良だけが礼の悪口雑言の対象ではないらしい。

「確かに。貴様が正義なら俺は悪だ」

礼のそれに対して妙にかっこいい口調で言う「番長」。

「あんたを倒せば逢わせてくれるんだな？」

笑みを浮かべている清良。指を鳴らしてまでいる。

「セーラ様」

相手が一応人間なので窘めるキャラ。照れ笑いの清良。

「いや。こういう相手も久しぶりでな。ちよつと嬉しくなっちゃって」

本気で笑顔である。

「もう。ケンカが好きなんだから」

膨れて言う友紀。

「いえ。違うと思います。きっと高岩さんはあなたを好きで守りたいから戦うんじゃないかと」

「「な!？」」

森本のとんでもない発言に赤くなる清良と友紀。

「だって一緒のバイクですよ。自分がこけたら道連れですよ。それでも乗せるということは絶対に守るんだという思いがあるからですよ。女の人もきつと信頼しているから後ろに乗るんですよ。つま

りお二人は恋人同士なんだと。そうでしょう?」

本人は大真面目である。二人は照れるばかり。

「ば……バカ言うな。コイツはただの幼なじみで」

「そうよ。まだキスもしてないのよ」

(う…確かにアレは呼吸を確保するためだし、しかも女同士だからノーカウントだろうが…じゃなくて気絶していたから覚えちゃいねえだろうけどよ)

友紀を助けるためのマーメイドフォームでの行為を覚えていないことに軽く凹む。

「高岩? お前がうわさに名高い高岩か。面白い。一度手合わせしたいと思ってたんだ」

「ほう。光栄だな。で、あなたの名前は?」

既に本来の目的を見失っている清良。

もっともクレームをつけるつもりでいたから、確かに争うつもりではいたが別の形で発散されそうだ。

「ふむ。名乗らんのも失礼か。ならば名乗ってやろう」

言うなり大男は間を取る。そしてマントを広げるかのようなアクションを取る。

「輝く太陽のエレメンツ。番長・岡元」

「待て。確か『俺は太陽の男』というのが名乗りとも聞いたぞ」

変なところにクレームをつける礼。

「どっちだっていいさ。強いんならな」

「おう。俺の強さは泣けるぞ」

(何で関西弁なのかしら?)

友紀の内なるツツコミ。戦闘開始寸前で

「あ。ばんちよおーつつ。その人たちはいいんだよあ」

ジャンバースカートの生徒が校舎から出てきた。

童顔。丸めがね。髪はやや長めで、襟足を輪ゴムで留めている。胸はまったくくないが女の子走りで駆け寄ってくる。

「順！」

途端に岡元から気合が抜けた。

「順？ コイツが押川順なのか？」

「うん。そうだよ」

スカート姿の生徒は明るく返答する。

「女だったとはな」

突っ込みは入らない。確かにそう見える。

「高岩…信じられないと思うが、こいつは男だ」

礼が訂正する。

「うそっ？」

思わずもう一度見返す清良。華奢な体躯。女顔。

「おいおい待てよ。胸が平たいのが男だってんなら、ブレイザは男だってことになるぜ」

真顔で言い放つ清良。血管が浮き上がる礼。つい反撃する。

「久々に殺してやりたくなってきたな」

「やるか？」

一触即発の雰囲気は漂う。

「あの…どうして男バージョンでそれがけんかの種になるんです？」

キャロルの冷静な突っ込み。我に帰る二人。矛先を元に戻す。

「おい。なんだってこんなふざけたかつこうしているんだ？」

とりあえずの突っ込みどころだった。

「……だって……仕方ないんですよ。戦い続けてそのたびに男としての部分が消えてしまっただけ。今ではもう女の格好じゃないと落ち着かなくて」

「な……なんだって？」

清良にしてみたら懸念を具体化した存在がここにいた。

「それじゃ俺も戦い続けると、いずれこうなるというのか？」

その清良の言葉を聞いて思わず想像する友紀。

「ゆづきいー」

語尾が上がる喋り方で呼びかけるセーラー服姿の「清良」。

「一緒に帰りましょう。それでケーキバイキングにいこうねっ」

くねくねとしながら笑顔で腕を組む「清良」

自分の想像で青ざめる友紀。

「ダメよキヨシ。そんな風になつたらあたし絶対許さないからね」

「ば……馬鹿なことを言うな。俺がこんな風に……」

そこで普段を思い出す。女性化が進むとやたらにぶりっ子になることを。

「ふん。ぶりっ子の第一人者だからな。思い当る節がありすぎるんだろっ」

「ここぞとばかりにやり返す礼。

「黙ってる。扁平胸」

もはや男女問わず泣き所だった。

「なんだと！」

「だからどうして会長の胸が薄いとまずいんです？」

「うるさい。なんか知らないが魂レベルでむかつくんだ！」

「まあまあ落ち着いてください」

笑顔で宥める順。

「お前が言うな！！」

息ぴったしで突っ込む清良と礼。

「すいません。軽いジョークですよ」

「ったく。洒落にならないっつーの」

軽くは言つが未だに女性化に対する恐怖は消えていない。

「あとそれから。僕が女子制服を着ているのは単純に似合うからです」

くるっと回って見せる。スカートがふわりと舞い上がる。

ちなみに借り物ではなくて自前である。  
女の子のようなにっこりとした笑みに、もう突っ込む気もつせた  
清良である。

そのころ、暴走族が岡元への仕返しとばかりに百紀高校へと向か  
っていた。

リーダー以外は精気のない目をしていた。

礼とは周知の仲ということもあり、全員まとめて応接室に通され  
る。

「さて。伊藤さんはいつも情報交換ですね」

とりあえず普通の男子制服に着替えた順が仕切る。

王真高校チームは礼が大股開きで座っている。隣の森本はちゃん  
と膝を閉じて座っている。

福真高校チームは清良がふんぞり返っている。それをきちんと膝  
をそろえた友紀が窘めている。

使い魔たちは学校の外で待機だ。

「ああ。だが高岩と一緒なら日を改めるべきだったな」

「そりゃあこっちの台詞だけ」

一時ほどではないが険悪な関係なのは変わらない。

「まあまあ。高岩さんとは初対面だから先にとりあえずご挨拶を」

一応は初対面の清良に向けて挨拶をする順。

「初めまして。百紀高校2年の押川順です。どうかよろしく」

初対面だからかと同学年相手に敬語で喋る。

挨拶をされたら返すのが礼儀。もちろんそのあたりは女性の方が  
きちんとしている。

「あ。こちらこそ。福真高校2年の野川友紀です」

「同じく。2年の高岩清良だ」

「あ。初めまして。王真高校1年の森本要です。生徒会の書記をし  
ています」

「森本。お前は初対面じゃないだろう」

「いえ。あちらの野川さんとは」

「む…確かに」

珍しく指摘される礼。端正な顔に笑顔のマスク。

「初めまして。王真高校生徒会長の伊藤礼です。以前に一度だけお会いしましたね」

それは礼が福真高校に乗り込んだ時の話。友紀はそれを覚えていた。

そして本来の目的であるクレームとなったのだが

「ああ。やっぱりそれですか」

「てめえ。撃つといてそれか？」

清良はかっかしていた。

「頭に血が上ると敵の思いつぼですよ」

あくまでニコニコとしている順。

「なんだとこの」

対して清良はカリカリしていた。

「やめてキヨシ」

あまりに飄々とした順の態度に清良は切れていた。それを止める友紀。

しかし平然と順は言葉を紡ぐ。

「だってあのままじゃいつまでたっても手を出せなかったでしょう？」

「そ……そりゃあ」

凶星だった。現に変身しないことでファルコンを出現させないつもりでいた。

そしてそれが無理な手というのもわかってはいた。

「だから代りにやったんですよ」

実は大嘘である。



何しろファルコンの正体が友紀とは知らなかったのだから。乗り込んでくるのは現在の得物を取られたことに関してと想っていたのだ。

しかし事情を知るや機転を利かせて口からでまかせ。可愛い顔して腹黒というのが押川順という少年だった。

「ふん。いいようにあしらわれて単細胞め。だから覚悟しておけと  
いったんだ」

「テメエはどっちの味方だ」

やり込められて収まらない清良が怒鳴る。

「少なくともアマッドネスがかまなけりや味方じゃない」

礼の偽らざる本音である。

校庭が騒然となっていた。それも道理。

暴走族が乗り込んできたのだ。

そしてそれを迎え撃つのが番長。岡元三郎。校門で通せんぼして立ちほだかっていた。

「なんだ？ 俺にやられた仕返しにこんな人数で来たのか」

しかも鉄パイプや釘バットなど物騒な得物を持っていた。

「くくく。そうだ。お前は強いからなあ」

「恥ずかしくないのか。一人相手に。まあいい。有象無象がいくらきても俺の敵ではない。むしろ就職活動の方が手ごわい」

岡元は三年であった。

「ふふふ。有象無象がよく見る」

五木の姿が変貌していく。

応接室。「いつもの感覚」を感じ取る三人。

「これは……野郎ッ!? アマッドネスか」

立ち上がる清良。

「いくら岡元が強くともアマッドネス相手じゃ」

続いた形の礼。両者共に戦う顔つきになっている。

既に正体を知るものしかない応接室である。

清良は右手を天に。左手を地に向けた。

「へん。ちょうどいい。いらついていたのをストレス発散させてもらつぜ」

礼は右腕を肩の高さで伸ばした。左手をへその位置に添えた。

「貴様は引つ込んでいろ。悪党成敗は俺の仕事だ」

そう息巻いていたのだが……

「ふふふ。俺は力を得た。最強の生命力をもつ存在になった」

五木の肌が黒く変色していく。腕は節くれだつ。

特攻服を突き破り黒く平べったい甲虫らしい巨大な羽根が出現する。

体長ほどの長さの触角が後方になびく。

夏場に台所によく出るのによく似たその姿は…

応接室。硬直している清良と礼。「変身ポーズ」が進まない。

友紀は五木の変身が完了した途端に目をそむけた。あれを好きな女はまずいない。

「あー。さしあたってコックローチアマッドネスですかね」  
のん気に言う順。

「番長いつてましたっけ。いんちき殺虫剤を売っていた連中をしめたつて。そのあげくゴキブリ怪人だなんて。シヨツカーのゴキブリ男みたいですねえ。あはははは」

どうやら特撮が好きらしい。その能天気な笑いになれているだけ、硬直が解けたのは礼の方が早かった。

「そ、そうだな。ワルはワル同士。互いに殴り合つてストレスを発散させるべきだろう」

へそに出現していた光の渦が消えた。戦う意思が消えたことを意味する。

「お、お前こそ成敗するとか言ってただろうが」  
「こちらも一気にポーズを崩す清良である。  
いくら男でもいやなものはいやであった。にらみ合って進まない。  
ただ先刻と逆で押し付け合いだが。」

「はいはい。触りたくないんでしょ。ここは射撃主体の僕が行きますよ。それに僕の学校だしね」

言うなり順は右手をひきつけ、真上に顔を上げ左手を高々と掲げ上げる。

空間から弓が出現する。弦ははられていない。

それはまだいいとしても黒とピンクに塗り分けられている奇妙なデザインだ。

どうも銃のグリップ同士でジョイントしたようなイメージだ。

黒い部分がリボルバー。ピンクの部分がオートマチックのイメージ。  
ジ。

弓を手にして真正面に運ぶ。同時に右手を伸ばして弓を引くようなポーズを取る。

そしてそれを「ぴいん」と爪弾くように動かす。同時に静かに宣する。

「変身」

姿が変わる。清良との初対面で着ていたジャンパースカート姿に。  
髪が伸び勝手に三つ編みになって行く。根元がりボンで飾られる。  
元々女性的だったが、肌の色がそれとわかるほど白く。

胸も膨らむ。

完了して順。いや戦乙女が名乗りをあげる。

「射抜く戦乙女。ジャンス」

## EPISODE 25 「飄々」 (後書き)

### 次回予告

(セーラが動かずジャンスが出た。もしかしたらあの小僧はブレイザか?)

「うん。やっぱり戦い続けるとシンクロが素早くなるのよね。今では変身した途端に女の子の性格になっちゃったの」

「やれやれ。一匹見かけると30匹いるとは言いが」

「百紀高校の生徒さんにご奉仕しますわ。まずは害虫駆除から」

EPISODE 26 「射手」

## EPISODE 26 「射手」

「むむう。よく見ると」

巨漢の「番長」岡元がうなる。百紀高校正門前。

コックローチアマッドネスの従えていた暴走族メンバーがすべて女になっていた。

「きさま…自分の舎弟たちをその手に」

「ほう。キサマはアマッドネスの理を知っているようだな」

男性を無価値と考えるアマッドネスは、一部の優秀な男性のみ「子種」を提供する「奴隷」として捕らえるがその他は下級構成員として変えてしまう。

第一条件は「女性であること」「ゆえ、その手にかかれたものは魔力により女性へと再構成される。

アマッドネスは子孫を増やすという代りに、それを持って勢力の拡大を図っていた。

「許せん…」

番長などと古い呼称は伊達じゃない。

他人のために怒ることができる。その点でも昔気質だった。

「ほう。許せないならどうするよ」

にたにたと笑っているように見える害虫女。

「むろん成敗する！ それをなすのは俺」

どうも見得を切るクセがあるらしい。ポーズをつけて大声で叫ぶ。

「俺は怒りの王子。番長・バイオ岡元！」

「いや…言ってる意味わかんないから」

あきれ返るコックローチであった。

EPISODE 26 「射手」

百紀高校のそばにある雑居ビルの屋上。

ア又こと軽部は苦虫を噛み潰した表情をしていた。

(チャバの馬鹿め。勝手に肉体を選んでくだらんケンカをするとは)  
六武衆の一人。死将・ア又は肉体の滅した魂だけのアマッドネス  
とコンタクトが取れる。

ア又の目の届く範囲ではヨリシロの管理もその仕事だった。

保留されていたチャバが勝手に肉体を選んだので対処を  
すべくコックローチをつけていたのである。

そしたらジャンスにそっくりの制服の高校に来た。

それで様子を見ていればなんと清良までいる。

さらにはまた違う学校の制服の男子二人も。

（セーラが動かずジャンスが出た。もしかしたらあの小僧はブレイザか？）

チャバの処遇を決める前に、あえて放置して他の戦乙女の出現を待ち構えていた。

応接室。ヤキモキしている清良。そして友紀。

校門でにらみ合いを続けるアマッドネスの軍勢にたった一人で立ち向かう番長・岡元。

さらに变身までしたのに未だに駆けつける様子のない順。いや、ジャンスにもいらだっていた。

「おい。押川。加勢にいかねえのか？」

つい怒鳴る口調になる清良。それに対して右手の人差し指を左右に振って「この姿のときはジャンスって呼んで」と、訂正する始末。「言ってる場合か？」

「あ。でも。このひとの場合キヨシと違ってあまり変化がないよね。もちろん性別が変わっているのだからその意味では大きな変化である。」

しかしビジュアルの落差は清良・セーラや礼・ブレイザよりははるかに少ない。

「あ……ああ。確かに双子の姉か妹といわれたら信じてしまう外見だが……って、そうじゃなくてよ。」

改めてジャンスに向き直りその肩を激しくつかむ清良。

「任せるといっから手をださねえが、いつになったら動くんだ？」

「やだ。乱暴。レディにはもっと優しくするものよ。」

その女の子そのものの口調と声に清良は思わず手を離す。

「ああ。悪い……？　ちよつと待て？　变身して大して時間経ってないぞ。それなのにもう口調が？」

セーラ。そしてブレイザは变身するとまず肉体が女性化する。

そして時間と共に精神がシンクロしていき、女性としての人格が

現れだす。

その時間がおよそ十分だが、今のジャンスは三分も経っていない。「うん。やっぱり戦い続けるとシンクロが素早くなるのよね。今では変身した途端に女の子の性格になっちゃうの」

可愛らしくウインクするジャンス。確かに素で女の子の性格にか見えない。

(じゃ…じゃあ、やはり俺もいつかは)

青くなる清良。見かねて森本が助け舟を出す。

「あの、高岩さん。その心配は要りません。ジャンスさん。これが素ですから」

「な？」

驚いた表情の清良。ふきだしてけたたましく笑い出すジャンス。

「あはははは。ダメじゃない。森本君。こんなに早くばらしちゃ「ころころと可愛らしい声で笑う「小悪魔」。

「て、てめー。おちよくなるために変身したのかよ？」

「ううん。違うよ」

笑顔だが少し真顔になっているジャンス。

「少しでも長いこと女の子でいたいもん」

正門。コックローチの軍勢30に対して現在は岡元だけが防波堤。

「やれやれ。一匹見かけると30匹いるとは言うが」

「余裕もここまでだ。テーマもあたしの奴隷にしてやるよ。ただし意思をなくす前に今までのお礼をさせてもらうがな」

害虫女は右手を掲げる。奴隷たちが得物を構える。

「やれ」

振り下ろしたのが号令だった。

そのころ。薫子は警察病院にいた。

「それではとりつかれていたときの事は覚えていないんですね？」

「はい。ひどくお腹が空いてて、それを満たそうと言う思いだけで」



病院のベッドで語るのは鳴海星一という名前のホームレスだった女性。

まだ新しい名前は決めていない。

シースターに取り付かれていたときのダメージはさほどでもなかったのだが、元々が栄養を摂れていない生活でそのため退院が延びていた。

いかにもホームレスというこ汚い男だったのが、女性として再構成されたら肌が白くなったせいかとてももとの姿を想像できないほどの美人だった。

ただし頬がこけて顔色も悪いのは別としてだ。

薫子はアマッドネスの実態を探るために「元・怪人」の女たちに聞き込みをするのが常になっていた。

新たな「犠牲者」が出ると必ず訪れる。

もちろん話ができる状態になってからである。

(やはりダメか…そのアマッドネスは太古の時代のトラウマを持っていたらしいから、何かつかめるかと思っただけ)

失望が張り詰めていたものを切ったのかも知れない。

薫子は過労もあり、眼前が暗くなりその場でふらつと倒れこんだ。

「一城さん！」

幸運とっていいのか倒れたのが警察病院。そのまま空きベッドにと寝かされ、さらに入院することに。

ベッドの上の薫子。既に意識を取り戻している。

その腕には点滴が。過労に対処するものだ。

「まったく。最近は徹夜続きだったそうじゃないですか」

「心配かけてごめん。桜田君」

素直に謝る薫子。

「いくら三田村警部の命令だからって、自分が倒れるまでやってちゃダメですよ」

そう。これは三田村の陰謀だった。  
怪しまれずに排除するために逆に積極的に聞き込みをさせていた。  
そして過労を理由に捜査から外す算段であった。  
かぎまわられてはたまらない。だが不自然に外せば疑われる。  
ならば徹底的に倒れるまでやらせることにした。  
そしてその結果が入院である。

応接室。静寂が訪れる。

「女の子でいたい？」

またからかわれているのかと身構える清良。だがここだけは雰囲気が違う。

「ドーベルちゃんから聞いてないかな。あの仮説」

「……ああ、聞いたよ」

ドーベルの仮説とは太古の戦乙女たちが男にのみ転生するのはクイーンのカケラとアマッドネスたちの「呪い」と。

そしてその影響は直接拳を交えたセーラ。刀を使うブレイザ。弓による遠距離攻撃のジャンスの順で強い。

逆に言えばジャンス…押川順は男性的要素がもつとも希薄であるのだ。

それが「女装」や「いきなりの女言葉」に出てくる。

「あたしは二人と違ってだいたいの女の子よりなんだよね。そのせいか戦い続けて最終的に男に戻れなくなっても構わない気がする。むしろ……ちよつと望んでいるかも」

「正気かよ？」

ジャンスはにっこりと笑って答えない。

「会長。大変です。岡元さんが」

森本の声で一同が窓から戦況を見る。

一対三十。圧倒的に……岡元が押していた。

「どすこーい」

張り手一発。いくら女といえどアマッドネスの奴隷と化したそれを五人まとめてふっ飛ばしていた。

「わははは。軽い。軽いぞ」

規格外ぶりに啞然とするコックローチ。それでも数に物を言わせて岡元に襲い掛かるが、まるで力士に小学生が挑んでいるようだ。力で叶わないならとにかく群れてくる。蚊がまとわりつくような物だ。

倒しても倒しても群れてくるのにさすがの豪腕番長もいらついできた。

「まったくウジャウジャと。イライラする。イライラするんだよ。

あーっっっ」

戦闘中だというのに首をぐりんと回しているあたり、むしろ余裕を感じるが。

「ええい。もつと大勢でかかれ」

ついに取り巻きが全員岡元に襲い掛かる。つまりコックローチアマッドネスは一人だ。

(掛かった！)

心中で笑う岡元。

「そろそろね」

ジャンスはにやりと笑うと変身アイテムである弓を構える。

本来なら弦のある位置に光の線が現れる。

それをつまむように矢手。即ち右手を添える。

光の矢が出現する。ジャンスの「聖なる力」が矢という形で現れた。

振り絞ると弓の形は変わらないものの光の弦だけは力を漲らせている。

それが解放されたとき、光の矢がコックローチアマッドネスの腹部を目掛けて飛んで行った。

「ぐはっ」

何しろ大きな的である。多少避けた程度ではかわせない。光の矢がもろに命中していた。

「キ……キサマ。私の周りから奴隷たちをひきつけて狙撃しやすく……」

「ご名答。だがさすがにちと遠すぎたか」  
致命傷には至らなかった。

「あー。やっぱり『矢』ではダメか。ちえ。疲れるんだけどなあ」  
どこまで本気がジャンスはばやきつつ応接室の窓へと。

「あつと。お二人はそのままでもいいよ。特にセーラさんには挨拶代わりにあたしの戦いぶりも見てもらいたいし」  
「ぐ……」

そういわれては加勢もしにくい。ピンチになるまで静観となった。

ジャンスは窓から飛び出して行った。

だが既にそのときには奴隷の女たちが射手のいた方向を目指していた。

半数近くに取り囲まれるジャンス。

近距離戦となり、弓をまるで刀のように用いて女たちをなぎ倒していく。

しかし多勢に無勢。ついには輪が狭まり袋叩きの体制に。

「んじゃぼちぼち。キャストオフ」

なんとジャンスは弓を二つに割った。

割れた弓の黒い部分が曲がってリボルバーの拳銃に変化する。

ピンクの部分がやはり変形してオートマチックタイプの拳銃に変化した。

そしてエンジェルフォームである制服を吹っ飛ばした。

ひきつけられていた女戦闘員たちはそれで気絶させられた。

黒に近い紫のワンピース。白いエプロン。茶色のブーツ。僅かに素肌を見せる足を包むニーソックス。

髪型は左右に分けての「ツインテール」に。

頭にはヘッドドレスといわれる装飾が。

そう。ジャンス・ヴァルキリアフォームはメイド姿だった。

応接室。口をあぐりとあけている清良。

「お…おい。伊藤」

ぎこちなく指差して言う。

「慣れる！ ああいうふざけた奴なんだ」

なんとなく礼が順を敬遠している理由を察した清良であった。

「な……なんだ。そのふざけた格好は？」

確かに戦闘形態というにはあまりに場違いだった。

「百紀高校の生徒さんにご奉仕しますわ。まずは害虫駆除から」

そしてメイド姿のジャンスは応接室に自分の姿を誇示するようにむいて見せた。

大きな胸元がぼよんと揺れた。

「伊藤……」

「……なんだ？」

応接室では戦いを見ていた清良が納得したような表情をしていた。

「道理でお前がジャンスのことを嫌っていたはずだぜ。胸か」

「あれだとEカップくらいかしら？」

実際にその数値に触れることの多い女子である友紀の言葉だけに信憑性がある。

エンジェルフォームの時はそれほどでもないが、ヴァルキリアでの胸の大きさはかなりのものだ

「そんなわけあるか。俺がアイツのことをよく思っていないのは、姑息なやり方がだ」

「よく言うぜ。お前だって手段を選ばないだろうが」

「だったらよく見ている。本当の『手段を選ばない戦い方』をな」

半数は気絶したがまだ15名が残っていた。

意思をなくした戦闘員たちはゾンビのように襲い掛かる。

それを二丁拳銃で次々と撃破していく。

別に正確な射撃は必要ない。周りはすべて敵なのだ。適当といつかでたらめでも構わない。

それでも背後から抱きついて動きを止めようとするものもいる。

だがそれは撃たないで硬いグリップで殴り倒す。

向きを変えれば新たな死角が生じるからだ。

場合によっては銃把ではなく自身の肘で殴り飛ばす。

「あーもう。面倒だわ」

まずは左手のオートマチックで前方。右手のリボルバーで右側を撃つ。

統制が乱れた隙を突いて両腕を大きく開き左右の銃を乱射しながら回転する。

襲い掛かろうとしていた戦闘員たちは片っ端から撃たれて倒れていく。

「ええい。こうなったら」

コックローチアマッドネスは自分が前線に飛び込むことにした。

二足歩行から地面をはいずる姿勢に移りしかける。虫そのものの移動方法がより速いらしい。だが

「岡元パアアアンチ」

番長が跳んでいた。コックローチの顔面にヒットしてふっとばす。

「ぐあああつ」

無防備なところに直撃されて大ダメージだ。

「決めるぞ」

番長がふたたび跳ぶ。

「岡元キイイツツツクウウ」

ひねりをくわえたドロップキックがコックローチの腹部に命中していた。

応接室。

「ア……アマッドネスを戦乙女でもない普通の人間が」

清良は愕然としていた。自分も腕っ節には自信があったが、それが崩れてしまいそうだ。

「ふん。あれを普通というのか？ 貴様は」

今回はかしは礼の言葉を全面的に認めるしかない清良であった。

「番長。かつこいい。あたしのヒーロー」

戦闘員に攻撃しながら「黄色い声」で持ち上げるジャンス。

「ヒーロー？ 俺？ それってラッキーじゃん」

硬派に似つかわしくない軽薄な調子で喜ぶ岡元。しかしそれが隙になった。

ダメージを負っていたものの立ち直り、岡元を羽交い絞めにするコックローチ。

「し、しまったあつ」

人質にとられてしまった。

「抵抗をやめる。こいつを殺すぞ」

だがジャンスは戦闘員に対する攻撃をやめない。

「見えないのか？ こいつが」

「見えてるわよ」

ついには最後の戦闘員も気絶させたジャンスが、二丁拳銃をコックローチに向けた。

しかしコックローチは岡元を盾にしている。

「番長。ごめんね。あたしのために死んでちょうだい」  
涙を流してトリガーに指をかける。

「アイツ、まさか味方を撃つ気か？」

清良はたまらず変身ポーズを取りかけた。

「おお。ジャンス。お前の手で死ねるなら本望だ。やれ。構わずにやれ」

何処か芝居がかった岡元の言い回し。

もつとも散々妙な台詞をはいている。そんなものと五木と融合したアマッドネスは解釈した。

そしてその芝居じみた部分から決め付けてしまった。

「はったりだ。撃てるはずがない」

そう言いつつも番長の陰に隠れるアマッドネス。

はみ出た部分はあるが致命傷を受ける位置ではない。

「さよなら」

悲痛に叫ぶとジャンスは二つの拳銃から有りつ丈の弾丸を放った。

その弾丸が岡元の腹部に命中。だが岡元はなんともない。そして

「がはあつ。ば……バカな？ 弾丸がすり抜けるだと？」

ダメージを負ったのはコックローチアマッドネスだけ。

もはや拘束すら出来ず岡元を放してしまう。

「おバカさん。弾丸といつても魔力で出来たものだからアマッドネスには致命傷でも普通の人には殴られた程度のダメージよ。充填も要らないし、普通の人はすり抜けるし。おまけに番長を盾にして身動き一つしないから狙うのも楽だったわ」

「わはははは。俺にとつてはかゆい程度だ」

「だ……だましやがって」



怨嗟の言葉を吐くもののコックローチアマツドネスは数十発の弾丸を食らい文字通り虫の息。

やがて倒れ伏し、大爆発を起こす。

同時に大歓声が起こる。放課後であり少なかつた生徒が、怪人出現で校舎に避難していたが爆発音で闘いの終焉を察して出てきた。

そしてヒーローとヒロインに惜しみない歓声を送る。

「ありがとー。みんなありがとー」

まるでアイドルのコンサートである。

調子に乗ったわけではあるまいが岡元がジャンスを右肩に乗せる。まるで恋人同士だった。

「それが返答かよ。ジャンス」

清良は険しい表情をしていた。

手を出せば友紀をファルコンから解放出来たのにやれなかつた自分。

それに対して躊躇せず岡元を撃ったジャンス。その差が。

「ふん。撃たせた岡元。躊躇いなく撃ったジャンス。あれも一つの信頼関係といえなくもない。だがやはりあの姑息なやり方は好みじゃない」

それに対しても同意する清良であった。

（勝手なことをした自業自得だ。チャバ。だがまだたった一つだけクイーンの役に立てるがな）

払われた魂の行方を見ながら軽部は思う。

（今度はきちんと仕掛けるか。上手く行けばセーラ以外の正体もわかるかもしれない）

人知れず屋上から去る軽部であった。

ジャンスから元の姿に戻った順だが疲労もあり、また清良としてもその気が失せたため解散となった。

帰りはのんびりと電車と徒歩の清良と友紀。そしてキャロル。現在  
は駅から自宅への徒歩。

「あんなに腹黒野郎だったとはな」

「そうかな。悪い人には見えなかったけど」

「おい。お前は撃たれたんだぞ？」

「うん。でもあの人はアマッドネスを撃ったんであって私じゃない  
し」

「そりゃあ……そうだが」

理屈はさておき、なんとなく釈然としない。

話しを続けようとしたら清良の携帯電話にメール着信。それを確  
認して彼は素っ頓狂な声を上げた。

「はあ？ 薫子さんが入院!？」

EPISODE 26 「射手」 (後書き)

次回予告

「わざわざきてくれてありがとう。でも大したことはないのよ。疲れが出ただけ」

「そんなことないです。あたしの心がもっと強ければあんなことには」

(ちきしょお。またアイツだ。いつもいつも邪魔しやがって。あの岡元の野郎さえいなければ……)

「そういうことだ。ふふ。それに奴らにとっては皮肉。ルコの敗因が恋心だが、今度はそれが戦乙女どもを苦しめる」

EPISODE 27 「見舞」

## EPISODE 27 「見舞」

薫子倒れるの報を受けた清良は見舞に出向くことにした。入院先は警察病院でその病室まで桜田刑事が伝えてきた。

桜田も清良が戦乙女セーラと知っているからの話。

「あたしもいくよ。キヨシ」

「頼めるか？」

薫子は過労で倒れた。その程度では一般病室であろう。つまり相部屋。

そして普通は同性でまとめられている。

いくら見舞とはいえど男ひとりではいきづらい。

友紀の申し出は助かった。

一方の友紀は取り付かれていたとはいえど清良を殺しかけている。それが負い目となり、とにかく清良の役に立ちたいと考えていた。

警察病院。急を要するわけではないこともあり、連絡を受けた翌日に一度帰宅して着替えて出向いてきた。

その際に見舞いの品の選出に友紀の意見が役立ったのは言うまでもない。

「わざわざきてくれてありがとう。でも大したことはないのよ。疲れが出ただけ」

水色のパジャマ姿の薫子が気丈に言う。

「ピンク」でも「ネグリジェ」でもないところに彼女のアクティブな部分を垣間見ることができる。

しかし白い腕に刺さった点滴が痛々しい。

「ホントかよ？」

「不良」には不良の体面というものがあるのか？

「体制側」の女性警察官相手ということもありぶっきらぼうな口調の清良。

それでいてセーラとなって精神が女性化すると「お姉さま」と甘えるのだから不思議なものである。

もっともこのぶっきらぼうな態度は清良の「安心感」を示していた。

心配する要素がないと判断したから「いつもどおり」に接することができる。

「ところで……あなたは確か？」

傍らにいる友紀に視線を移す薫子。

制服姿ではともかく私服では印象が変わる。

「野川友紀です。キヨシだけじゃ女の人のお見舞いは難しいと思っ  
てついできちゃいました」

「それはわざわざありがとう。それとも『ごめんなさい』かしら？」  
「えっ？」

友紀。そして清良も露骨なほど顔色が変わる。

実は事前に友紀がファルコンだったことは黙っていようと口裏を  
合わせていた清良と友紀。

厳密には清良が友紀に釘を刺して黙らせた。

邪心がすべて抜けたせいなのかとにかく罪の意識がひどい。

しかし邪心が抜けたということはアマッドネスが友紀につく「つ  
なぎ」がない。ルコの魂も消えうせた。

この話は終わっていたのだ。蒸し返すのは避けたい。

「ああ。やっぱりね」

薫子のこの台詞でふたりは「引っかかった」と察した。

「どうして……」

「セーラちゃん…高岩君のひどい思いつめ方が気になっていたのよ。  
もしかしたら家族でもアマッドネスになったのかと」

病院のベッドに横たわり、天井を見上げながら薫子が言う。

「あのときかよ」

セーラとして相談した時がある。そのときはファルコンの正体は  
知らなかったがどうにもすつきりしない闘いと。

「キヨシ。話すよ」

「待て。友紀」

「話した方がすつきりするよ」

そう言われては黙るしかない。

友紀は自分の異変をすべて喋った。嫉妬からきたどす黒い心につ  
けこまれたことまで。

「あー。それじゃあたしも謝らなくちゃ。誤解を招くようなことを言ってたし」

出会ったときに口走っていたことを思い出していた。

「そんなことないです。あたしの心がもつと強ければあんなことには」

二人して頭を下げている。

「ああ。うぜえな」

このぶっきらぼうな言い回しは当然ながら清良。

「自分の妹を庇う格好になるけどよ、あんな言葉からああなるなんて想像も出来るわけねーよ」

薫子とはかく理恵はアマッドネスの事件についても直前まで知らなかったのである。

対処が甘かったとしても責められない。

「つまりは事故みてーなもの。誰にも責任なんざねえ」

「でも」

「まだ言うか？ だったら悪いのはみんなアマッドネス。それでいいだろ」

強引なまとめ方であった。あまりのむちゃくちゃさに友紀がふいた。

「もう。めちゃくちゃよ」

「なんだよ。笑うなよ」

むくれる清良。それを見て微笑む薫子。

(仲がよくていいわね)

自分もこんな状態だし、蒸し返すだけの事情聴取はやめておこうとそつと心に決めていた。

夏休み寸前の猛暑日ではある。

それなのにガクランに身を包んだ暑さを忘れた男。

その男。貝塚真樹男は百紀高校のそばである人物の下校を待っていた。

「順。さよなら」

幾人もの女子生徒が明るく下校の挨拶をしていく。その「順」という名を聞いて貝塚の心臓は跳ね上がった。

百紀高校の女子制服であるジャンパースカートに身を包んだメガネの生徒。

髪の毛はショートカットでボーイッシュだが、色々と細やかな仕草が誰よりも女性的である。

胸は絶望的にないが気にならなかった。

貝塚はその「女子生徒」に恋をしていた。

(きた！)

緊張する貝塚。

(今日こそ…今日こそ打ち明けて…そして一緒に海に行くんだ。それからビキニ姿の彼女を抱き締めて)

貝塚はホモというわけではない。つまり順を女子と勘違いしていたのだ。

しかし無理もない。

色白の女顔。華奢で小柄。仕草も女性的。しかも自然。

声も若干ハスキーな女声に聞こえなくもない。

接近して初めて実は男とわかるレベルだった。

「今日は大丈夫そうか？ 順」

山のような大男がのしのと歩いてくる。見た目は不良。しかし実態は百紀高校の守護神。番長・岡元だった。

「うん。『気配』も感じないし。平和だね。だからもう帰るよ」

「そ、そうか。なら一緒に行こう」

「うん」

照れながら提案する岡元の左腕にごく自然に腕を絡める順。

傍目にはカップルに見える。

そして二人は貝塚には目もくれず下校した。

(ちきしょお。またアイツだ。いつもいつも邪魔しやがって。あの岡元の野郎さえいなければ……)



トス黒い嫉妬心が浮かび上がる。

それを遠巻きに見ていた三人の男。

「あれなんかいいんじゃない？ アヌ」

端整な顔立ちのファッションモデルのような男が言う。

着ているのはワイシャツではなくブラウスなのだが、それに違和感を感じないほど女性的な印象だった。

もっともその甘い顔立ちと振る舞いで女性にひどい目を見せていた「詐欺師」というのが正体。

取り付かれるのは時間の問題だった。

「さて。ライ。あんな奴につけてなんの意味がある？」

もう一人は痩身の初老の男。何処か狂気を感じさせる。ローブのような服装に身を包んでいるが「プロフェッサー」と呼ばれている。

「いやギル、あの男が憎悪を向ける『番長』はジャンスのパートナーだ。恐らくはあの一緒の小僧（？）が正体だが」

六武衆のリーダー格。死将・アヌが説明する。

彼女……この時点では人間社会で行動している姿と性別に合わせて「彼」と表現するが、ススト。ルコを復活させた後さらに残りの三体を蘇えらせるべく依代探しに奔走していた。

六武衆がそろえば心強い。作戦遂行も格段に進めやすくなる。

とはいえど既に二人までも失っているのは相性の問題。

スストもルコも土壇場でコントロールを奪われるという失態を犯している。

三度目は許されない。飛び切り邪悪な魂を選び、慎重に事を運んでいたら時間が掛かった。

（つまりあの『番長』を襲えばジャンスが現れるというわけだね）

六武衆でただひとり依代の見つかった『剛将』が事情を理解した。

「そついうことだ。ふふ。それに奴らにとっては皮肉。ルコの敗因が恋心だが、今度はそれが戦乙女どもを苦しめる」

貝塚の「横恋慕」を指している。

友紀の嫉妬心を利用したファルコンアマッドネスはぎりぎりまでセーラを追い詰めた。

逆に友紀の恋心がルコから肉体の主導権を奪い返させた。

ふたたびそれを為そうというのである。今度は単純に岡元に対しての憎悪。

それゆえ問題はなかった。

そして岡元を足がかりにジャンス。あわよくばブレイザの正体もつかみたい。それが狙いだ。

余談だが武功争いをしていた名残でターゲットを隠匿する傾向がアマッドネスにはある。

セーラの初陣の相手。スパイダーアマッドネスことタランは独り占めを目論み誰にも話さなかった。

下級戦士なら蔑んでいるのもあり放つて置くのだが、さすがに上級たる六武衆の一員。スストまでブレイザの正体を隠匿していたのには閉口した。

おかげで未だにブレイザの普段の姿が伊藤礼とは確信を持ってない。それもあり以降は知った情報はすべて伝えるように命令が飛んだ。正体を知れば対処法はぐっと増える。

だがアマッドネスも一枚岩ではない。己が欲を優先して勝手な行動を取るものも多く、それゆえ戦乙女たちは各個撃破に成功している。

ガラヤアヌにとって頭が痛いのはそのあたりだ。

(これであれがジャンスカどうかわかる。それを確かめたら次の段階に移ります。ガラ將軍)

この場にはない上官に心中で報告する軽部ことアヌであった。

警察病院。薫子のいる病室に一人の可愛い闖入者が現れた。

「お姉ちゃん」

年齢一ケタ台の少女。いや。幼女か？

もちろんあどけない顔立ちだが、将来は美人になると言われたらほとんどの人間が納得する整った上に愛らしい顔立ち。

ストレートの黒髪が背中まで伸びて「女の子」を演出する。

「あら。葉子ちゃん」

薫子が今までで一番の笑顔を見せた。「お姉さん」らしい表情になる。

「この子は？」

「広瀬葉子ちゃん。患者としてはあたしより先輩ね」

つまりもつと長く入院している。

「お姉ちゃん。遊ぼう」

用件も可愛らしい。

「ごめんね。今日はお友達が来ているからまた今度ね」

僅かな入院期間中に仲良くなっていた。

それは薫子の人柄か。それとも葉子という少女の孤独さか。

「えー。つまんなあい」

葉子は可愛らしく頬を膨らませる。母性本能が刺激されて思わず笑顔になる友紀と薫子。

「じゃあまた今度ね」

慣れているのか物分りはいい。入院患者と思えない軽い足取りで立ち去りかける。

だが立ち止まって清良の顔を見る。

「？　なんだ？　オレの顔に何かついてているのか？」

「キヨシ。相手はちっちゃな子なんだからもつと優しく言いなさい

「よ

「あ、ああ。悪い」

薫子はまた噴出した。

「あははは。あなたたちまるで夫婦みたいよ」

「なっ!？」

瞬間的に赤面する清良と友紀。特に友紀は白い肌だけに赤くなつたのがわかりやすい。

反論したかったがここは病院。騒げないし子供も見ている。

「えーと。なんでもないよ。お兄ちゃん」

清良の顔を見ていた葉子は自分でも自分の行動が理解できないような表情をしていたが、やがて笑顔で立ち去った。

そして入れ違いに一人の中年紳士が入ってきた。ノックをしようにも扉は大部屋で開放されている。

「失礼する」

いくら空調の効いている病院とはいえどスリーピースで平然としているのは奇異に見えた。

オールバック。そして口ひげ。それ以上に印象的な蛇のようなその冷たい目つき。

「三田村警部!？」

薫子が思わず半身を起こしかけるが三田村に制止される。

「お取り込み中だがこちら時間も時間がない。一緒にさせていただこう。二人の同意を得ずにその場に割って入る。

(何だ? このやろう。知り合いらしいが好き放題だな)

清良は半ば本能的に反感を抱いた。三田村も清良たちを一瞥する。しかし鼻で笑っておしまいだった。

カチンときたがこの手の態度には慣れている。何とか抑えた。

「えーと。警部。この二人は私の友人で高岩清良君と野川友紀さん」間に立たされた薫子が潤滑に進めるべく紹介を試みる。

「こちらはあたしの上司。三田村健児警部」

現在は福真署の特捜部に出向いているが、本来は警視庁所属の彼女にとって直接の上司は三田村であった。

「よろしく」

事務的に手を差し出す三田村にとりあえず手を握り返す清良。

情報を得ている三田村は清良がセーラと知っている。

だが三田村がアマツドネスのナンバー2・ガラ將軍とはその場の誰も知らない。

ルコの意識が混ざったことで事情を察した友紀も、ルコが自分をターゲットにした経緯は理解しても三田村がガラの仮の姿であることを知る前に分離したので知らなかったのである。

「うちらこそ」

三田村の冷たい視線を不良である自分に対する蔑みと解釈した清良。

もちろん隠そうともしない「敵意」もその一部と解釈した。

「調子はどうかね？」

「はい。だいぶ体調も戻ってきました」

「そうか。だが無理はいけない。潰れては元も子もないからね」

心配というよりは戦力ダウンを気にしているように見えるが「エリート」というのはそういうものというイメージが誰にもあった。故に気にされなかった。

過労を引き起こすように仕向けたのは三田村自身であるが、がんばりすぎたのは薫子の性分。

三田村にしても、こうまで狙い通りに倒れてくれるとは思ってもいなかった。

「ゆっくり養生したまえ。事件の方は気にするな。我々に任せろ」  
それだけ言々と軽く会釈して病室を後にした。

いなくなったであろう時間が経ってから清良は本音を漏らす。

「気にいらねえ野郎だな」

「まあまあ。ちょっと冷徹に見えるけど警部は凄腕よ。でも、ちょっと印象変わったかな？」

時間がだいぶ経ち、そろそろ引き上げようとなった。

「じゃあ薫子さん。とにかく後は任せてくれ」

「お願い。あたしもとにかく早く退院して復帰するから」

清良たちが警察病院を立ち去ってからもつと時間が過ぎ「本来の目的」を終えた三田村が出てきた。

（あれが「拳の戦乙女・セーラ」か）

聖なる戦乙女。邪なる大將軍の仮の姿同士での「対面」もこうして終了した。

翌日。順が男と知らないまま悶々としている貝塚に剛将・サザが悪魔の誘惑をかける。

抗えない貝塚はあっさりと「悪魔に魂を売り渡した」。

融合した瞬間に学生服を突き破り「トゲ」が出現する。

服を引き裂き本来なら全裸になるところが既に変身済み。

まるで戦国時代の鎧武者。ご丁寧に面までしているように見える。

その鎧はどことなく巻貝。特にサザエを連想させる。

六武衆。剛将・サザの復活。そしてシエルアマッドネスの誕生であつた。

EPISODE 27 「見舞」 (後書き)

次回予告

「アマツドネス。その命、神に返せ」

(高岩清良！ やはり奴か。すると後の二人もか)

「ごめんなさい。お友達でいきましょうね」

「あたしは六武衆の一人。剛将。サザ」

EPISODE 28 「速射」

## EPISODE 28 「速射」

この日はいつもの情報交換会だった。そして今回は清良もメンバーに入っていた。

礼。そして順の性格はあまり好意を抱けなかったがキャロルでさえ知らなかった六武衆のような存在もいる。

それを確認するために参加することにした。

場所は百紀高校。交換会はここで固定していた。

それというのも素性が知られるのを防ぐためである。

ここを訪れる清良と礼は「戦乙女かも？」と疑惑を抱かれるが、残りの一人は百紀高校全員が「容疑者」だ。

つまり会合の場所を持ち回りにしていたら三箇所すべてに現れた人間に絞られる。

それを嫌って百紀高校に固定してある。

同様の理由から喫茶店なども使わない。神経質な礼の提案である。相手がどんな人間についているのか「変身」するまでわからないのだ。伏せておける情報をわざわざ明かす必要もない。

これに関しては清良も賛成していた。スストに関しては偶然だが明らかにルコは自分を狙って友紀に憑いた。

それを考えると他の二人に試さないと言い切れない。だから伏せるのには賛成した。

礼は森本を同行させたが清良は一人できた。

友紀を巻き込みたくない思いゆえである。

「そっぴや番長はどうした？」

どちらかというに近い存在のせいか岡元のことは嫌っていない清良。

「番長ねえ。なんか呼ばれて行つたみたい。また果し合いかな。あ



「はははは」

「おい。笑ってる場合か」

「礼がいらついて怒鳴る。軽く呆れたのが口調でわかる。

「平気だよ。番長強いもん」

「絶大な信頼関係で結ばれている岡元と順であった。」

EPISODE 28 「速射」

同時刻。百紀高校からは2キロも離れていない倒産したボウリング場。

当然のごとく施錠してあるがあっさりと破壊して中に入る貝塚。岡元を招き入れる。

「なんだ。偉くせまつ苦しいところでやるんだな」

照明もつかない。ただし窓はふさいでないためそこから光が入る。夕方に差し掛かるが真夏ゆえまだ強烈な光だ。

「ああ。ここなら邪魔は入らない」

何処か違和感のある喋り方の貝塚だが初対面故に岡元には見抜けなかった。

二人がいるボウリング場を抱えるビルの屋上に軽部がいた。

人間のものではない視力で人気の無い道路を窺っている。

(この位置はジャンスが出現した高校から距離が離れていない。奴らは我々が戦闘形態になるとわかるらしい。駆けつけてきた奴が怪しい。特に高岩清良がいれば確率は跳ね上がる)

岡元の元に向かうには真正面から入るか、さもなきゃ屋上から侵入である。

どちらにしてもここで見張っていればわかる。

「張り込み」を続けていた。

潰れたボウリング場のフロント。レーンを目前にした場所。

「ふふふふつ。ここで存分遣り合おうじゃないか」

「ほほう。なかなか漢気のある奴だ。てっきり兵隊が待ち構えていると思ったらあくまで一対一か。感心感心。男ならそうでないとな」  
うんうんと一人で納得して頷いている岡元。

「はたして『男』かな？」

「何？」

思わず尋ね返す岡元。先日のコックローチアマッドネスが頭をよぎる。

不適に笑つ貝塚。その姿が変つていく。戦国の鎧武者のような姿へ。

その「ヨロイ」は貝を連想させる質感だった。全身を巻貝を彷彿とさせる鎧で固めている。面までしている。

「……やっぱりそうか。オレに単独で挑んでくるのはよほどの大バカか、身の程にあわぬ『力』を手にして調子に乗っているかだ」

自信過剰ではない。実際にケン力無敵である。

「で、オレになんの恨みだ？ 貴様とは初対面だったが」  
面倒くさそうに言う岡元。

挑発して相手の平常心をなくさせる目的である。

内心としてはさすがに怪人相手に焦っているが表情には出さない。やせ我慢に近い意地だった。

「黙れ！ いつもいつも見せ付けやがって。貴様がいなくなれば順は」

「順？ あー……」

実は過去にも順を本当に女の子と思い込みうるちよろしていたものがいた。

岡元が常にそばにいるため諦めるのが大半だが、この貝塚はアマッドネスに魂を売り渡してまで岡元を排除に掛かったと理解した。

「そういうことか。だがまあ化物なら遠慮はいらん」

わざわざ「化物」という表現を用いたのは挑発である。そしてそれを完璧にすべく指をさして言う。

「アマッドネス。その命、神に返せ」

「むっ」「ちっ」「あれ？」

三人が同時に反応した百紀高校の一室。カラス型の人造生命体。ウォーレンも飛び込んでくる。

「コウモリのような動きで飛び回り「来たぜ来たぜ。ジャンスう」とハイテンションに告げる。

「方角は」

もちろん三人とも一致している。清良はこの辺りの地理に疎いのでわからなかったが順は気がついた。

「もしかして番長の決闘している場所？　そこに出現…」

「というより相手がアマッドネスじゃねえのか」

当然の疑問を清良が告げる。

「しかもこの感触。ドクトルに憑いていたサソリ型と同じくらい強い」

「ああ。くそつたれのファルコンなみにな」

「六武衆ってことですか？」

情報交換で順も六武衆について知識を得た。

「まずいな。たぶんこの前のゴキブリ女より手ごわいぞ」

単純にアマッドネス出現。礼。清良にとっては遺恨のある六武衆の一員の可能性。

そしてピンチに陥っているのが知っている人間ということでは誰からとも無く飛び出して行った。

「キャロル」「はい」

「ドーベル」「はっ」

「ウォーレン」「おうよ」

清良と礼は控えていた使い魔たちを呼び出す。順は傍らにいたウォーレンに呼びかける。

三体はそれぞれビークルモードへと転身。それにまたがる三人。一斉に走り出す。

（来た！）

監視をしていた軽部は心中で思わず声を上げる。

その驚異的な視力は道を行く彼らの顔を判別出来た。

（高岩清良！　やはり奴か。すると後の二人もか）

人気が無いのをいいことにその場で乗り物を動物形態に戻したのが決め手になった。

そのまま三体の使い魔は周辺警戒の任務を与えられる。

（やはり残りの二人も戦乙女の現世の姿か。伊藤礼。押川順だったな）

警察官の身分。そしてコックローチアマッドネスの事件を利用して順。そして定期的に来ている「王真高校の生徒」の身元を調べ上げた。

ほとんど確信していたがこれですます確率が高くなる。

（さて。奴らに気づかれぬように）

シエルアマッドネスと岡元が戦っている場所へと移動する。

「岡元!？」

最初に飛び込んだのは清良だった。次が礼。最後が順だった。

ところが蹲る岡元を見て一番驚いたのが順だった。

「番長!？」

「じゅ…順。ふっ。かつこ悪いところを見られたなあ」

彼の両の拳は真紅に染まっていた。血染めの拳だった。

「このやろっ。とても頑丈に出来ている。オレのゲンコツでもダメだったわ」

雑兵相手ではない。さすがの岡元も怪人。しかも中堅幹部クラスのそれを相手には分が悪かった。

攻撃も受けていたので限界を超えて気絶する。

「番長!」

思わず駆け寄る順。だが大きなダメージが拳だけとわかりほっとする。

どうやら固いガードを破れず拳の方が壊れたと。その痛みと疲労で気を失っただけで拳以外にダメージがないとわかり安堵する。

「くくく。やっと気絶したか。どうだ順。コイツに幻滅したか？

さあ。見限れ。そしてオレに乗り換えろ」

口調と声が男のものになる。シエルアマッドネスは人間の男の姿へとシフトする。

「あんたは？」

いつもニコニコしている順にしては冷たく感じる口調で尋ねる。だがいよいよ「好きな女」を目の前にした貝塚は舞い上がって、そんな変化を気にしてられなかった。

「俺は貝塚真樹男。順。ずっとお前を見ていた。お前がす……？ お前：なんでそんな男の格好をしている？」

貝塚は女装した順しか見ていなかった。そしてこの言葉で順は事情を瞬時に察知した。

だから岡元に対する仕打ちの報復できつい一言を選んだ。

「ごめんなさい。お友達でいましょうね」

ある意味一番告白で聴きたくない言葉を恥ずかしげも無く言い放つ順。

「誤解を深くするな！」

清良が突っ込む。

「ま：まさかお前。男だったというのかっ!？」

わなわなと震える貝塚。「裏切られた」というように目を見開いている。

それに対してのほほんとした順のリアクション。これも何処かわざとという印象がある。

「いやー。ほんとは女の子でいたいんだけど。せめて格好だけでも思うんだけどこのお二人に怒られるから男子の格好」

「ゆ…許せん。男の純情を踏みにじって騙しやがってええええっ」

(ちよっとだけ気持ちは理解できる…)

あるうことが同情する清良。

「なるほどな」

礼は推理を進めていた。

「わざわざ俺たちが探知できる距離でやっていたのはおびき出しで

正解か」

「ご丁寧に人目に付かないような場所だ。俺たちがいつでも変身ができるようにということか」

「そのためだけに番長をこんな目に…」

理屈は理解出来た。自分たちの正体を探る。それが目的であると。恐らく別のアマツドネスが監視しているだろうと想像はできる。

しかし実際に岡元が蹲っているのを見たらそんなことを言っただけでなくなつた。

そこに追い討ちをかけるべく貝塚が鎧武者のような巻貝のアマツドネスに変身する。

「あたしは六武衆の一人。剛将。サザ」

「六武衆だと？」

これが確定すると清良。礼も平静ではいられない。

「そうかよ。それじゃファルコンの代りにてめえを殴らせてもらうぜ」

友紀の件で未だに怒りを抱く清良が右手を天に。左手を地に向ける。鬼のような表情だ。

「待て。それならドクトルの件でのオレが先だ」

礼が右手を肩の高さで前方に真っ直ぐ突き出し、左手をへその位置に添える。光の渦から小太刀が出現。

「わあい。ダブル通り越してトリプル変身だね」

岡元の無事を確認したら途端にいつものマイペースに戻った順が左手を高々と掲げて弓を掴む。

「そんじゃ早い者勝ちだ」

清良の腕が水平になってわきにひきつけられる。

「いいだろう。それで公平だ」

小太刀を持ち替えて腰だめに。そのつかに右手をかける。

「相手は強いみたいだから気をつけないと」

左手を真正面へと移動させその「弦」に右手をかける順。

「変身！」

三者が同時に叫んだ。清良は両手を突き出しガントレットをクロスさせる。

礼は小太刀を抜き、順は弦を弾く。

眩い光が三人を包み、それが収まると三人の美少女がそこにいた。

「拳の戦乙女。セーラあつ」

「剣の戦乙女。ブレイザつ」

「射抜く戦乙女。ジャンス」

太古の闘い以来、現世で三人の戦乙女が初めて揃い踏みした瞬間だった。

このボウリング場は1フロアだけで経営されていた。

そのため全体を見渡せる部屋もある。そこに軽部は潜んでいた。

気配を殺して監視せねばならないが、不覚にも笑いがこみ上げてきそうになる。

(こうまで上手く行くとはな。ガラ様は人の心は意外に強いと仰っていたが、案外もろい部分もある。自分たちの正体を探られている危険性よりも我ら六武衆に対する「恨み」が先走るとは。もつともそれはクイーンのカケラの影響かも知れぬが。

ふふ。奴らにしてみればサザを倒してしまえば口封じになるという読みだろすがそう上手く行くかな？ 仮にも剛将の名を持つもの。例え三人がかりでも簡単には倒せんぞ)

サザの第一の任務は戦乙女をおびき出し、その正体を探るもの。だからあえて変身完了を待っていた。

しかしここで倒せば正体など関係ないと思っていた。既に正体判明は果たした。何処かで見ている死将・アヌが既に情報を得ただろう。

だから後は自由だ。三人がかり上等。まとめて相手してやる。そ



う思っていた。

「先手必勝」

元々喧嘩っ早い清良の精神のまま変身したセーラがセーラー服姿で突っ込んでゆく。

攻撃能力は謎だが多少の攻撃はこの「鎧」がはじくと踏んでだ。

シエルアマッドネスも突っ込んでいく。セーラがキャストオフして飛ばした破片もものともしないで突っ込んでいく。

動きを凍結させるべく左腕を叩きつけるセーラ。だが

「いってええええっっ」

しびれた腕を振っている。攻撃どころではない。

「ふふふふ。ミュスアシには『攻撃は最大の防御』という言葉があるそうだね。だがあたしに言わせりゃ『防御は最大の攻撃』。鉄壁の守りは相手を疲弊させるだけ」

「ごたくはそこまでだ」

既にキャストオフして和装のヴァルキリアフォームに転じていたブレイザが刀の切先を突きたてにかかる。

（波状攻撃？ 違うな。むしろ手柄争いでサザの首を取りに掛かっている）

軽部はそう分析していた。

（やはり奴らは太古の時代の『清らかな存在』ではない。付け入る隙はある）

「そこには鎧はあるまい」

ブレイザの狙いは目元。確かにここはガードされていない。

だが突き刺さる寸前で視線を外す。こめかみを守る「貝殻」の部分で受けとめる。

曲面ゆえ受け流されてしまう。

「次はあたしね」

言つなり二丁拳銃を乱射するジャンス。今度はシャッターが閉まるように全身隙がなくなる。

弾丸は虚しく弾き飛ばれる。トゲの一部を破壊したに留まる。

「あらー。言うだけあってガード固いなあ」

飄々としたジャンス。いつものペースだ。

「今度はこちらの番だ。特に順。いや。ジャンス。貴様だけは絶対に殺す」

二人の意識が融合してジャンスに対する殺意が高まる。

（やだなあ。こういうユーモアのわからない相手って苦手なのよねー）

知らずあとずさるジャンス。そこに飛びかかるシエルアマッドネス。

跳んだというより飛んだ。ドリルのように回転して突っ込む。

とりあえず二丁拳銃で撃つが回転もあり弾き飛ばされる。

「ひゃあっ」

慌てて逃げるジャンス。その空間に突っ込んでゆくシエルアマッドネス。

目標を見失い虚しく床に飛び込む。板レインは板張りだがリノリウムで処理されているとはいえどコンクリートで出来た床をめっちゃめっちゃに破壊する「ドリル」

（あ……あんなのに貫かれたらたままないわ。どうせ貫かれるなら……ってそんなこと考えている場合じゃないわね。あのガードを破るには）

「う……」

シエルアマッドネスが突っ込んだ衝動で番長が気絶から醒めた。

ゆらりと不気味に立ち上がるシエルアマッドネス。

「ぐふふ。これでわかっただろう。貴様らの攻撃など蚊ほどにも効かんと。わかったら絶望して死ね」

追い詰めた自信が油断に繋がった。失念していた男の攻撃。

「岡元キック」

戦乙女をおびき出してすっかり「用済み」になり忘れていた岡元。それが目を覚ましてシエルにドロップキックを見舞う。

「ぐああっ」

「ゲンコツがだめなら足だ！」

確かに本体にはダメージはないが衝撃で弾き飛ばされる。

百キロを越す巨漢に食らってはさすがにたまらない。

（そうか！）

セーラはヴァルキリアフォームのまま接近する。その最中にガンレットを叩いていたのでシエルアマッドネスのところにいたときにはマーメイドフォームへと転じていた。

「打撃技がだめなら投げ技よ」

精神の女性化が進み言葉遣いに表れる。戦いが長くなってきた証拠。

シエルアマッドネスをバーベルのように持ち上げその場で回転を始める。

「トルネイドボンバー」

本来は水中で渦巻きを起こしてそれでもみくちやにしたうえで放り出して地面に落下させる技である。

しかしここには天井がある。そこに叩きつけた形になる。

天井で受身が取れるはずもなく、そしてそのまま地面に落下する。だが

「ふふふふ。ちと目は回ったが効かんあ」

確かに若干ふらつくもの見た目にダメージはない。

「な…なんてタフな奴なの？」

その「硬さ」に呆れるというより恐怖に近い感情を抱くセーラ。

「お退きなさい。次はわたくしの番ですわ」

完全に競争になっている。ブレイザはヴァルキリアフォームでジャンプする。

そしてシエルアマッドネスの頭上で超変身。ガイアフォームへと転じる。

斬馬刀を頭上からギロチンの刃のように振り下ろす。  
がきいんっ。

生物相手なのに金属音を出して刃をはじき返す。

「ば…馬鹿な？ このガイアブレードが齒が立たないなんて」

ちなみに通常の太刀はヴァルキリアソード。アルテミスフォームの時の刀はアルテミスサーベルと呼称されている。

ブレイザも恐れを抱いた。

「絶望しろ。攻撃が通じないことに絶望しろ」

まさに鉄壁。セーラとブレイザは手詰まりになる。

「まだあたしがいるわよ」

二丁拳銃を構えたジャンスが言い放つ。

「ふん。そんなに死に急ぐならお前からだ」

可愛さあまつて憎さ百倍。ジャンスが同性と知って怒り狂う貝塚の精神が攻撃優先順位を変えた。

「無理よジャンス。いくらあなたも二丁拳銃でもコイツのガードは意外に後ろ向きなところのあるセーラが暗に逃げると促す。

「二丁もいりませんよ。セーラさん」

ジャンスは黒いリボルバーを真っ直ぐにする。この拳銃はあくまで攻撃のイメージがこの形を取っているだけ。だからこの程度の変形は造作もない。

そのリボルバーをピンクのオートマチックの銃口に差し込みジヨ

イントする。

軽い調子でジャンスが宣言する。

「超変身」

ヴァルキリアフォームの紫のメイド服が漆黒へと変わる。所々に白いフリルやレースが走る。

ジャンスの髪型も短くなる。切り揃えたボブカット。足元のブーツも服と同じ漆黒に。

目を引くのは頭に乗っているもの。ヘッドドレスから猫の耳を模したカチューシャに。

「ご丁寧にスカートのヒップの部分から黒いしっぽが出ている。」

「完成。ジャンス・ロリータフォームう」

「……………」

それまでの絶望感も吹っ飛び口をあんぐりとあけるセーラ。ブレイザのほうを向き直る。

「だから慣れると言ったはずですよ」

しかしそういうブレイザもこのノリはついていけないらしい。

「おお。ジャンス。この姿も可愛いぞ」

岡元は手放して褒め称える。それに投げキッスで答えるジャンス。

これが物の見事に挑発になっていた。衣装よりも岡元に対する投げキッスが。

「ふ…ふざけやがって」

頭に血が上り能力の変化を見極めることができなくなっていた。怒りに任せドリルのように回転して突っ込んでいく。

（狙いはあのとっぺん！）

頭頂部。

トルネイドボンバーで叩きつけられ、ガイアブレードを食らった

ましてや細いのだ。ダメージがない筈がない。

ジャンスは狙いを絞るとトリガーをひく。

無数の弾丸が速射で打ち出される。

ガトリング。マシンガン。バルカン。どの例えが一番しっくり来るか。

とにかく頭頂部を狙って撃ち続ける。ドリル回転の中心だけにぶれも少ない。

つまりそれだけ動かない。狙いやすいのも幸運した。

そして物の見事に的中した。硬い貝殻を破碎した。

守られていた脳天にはそのまま銃弾が打ち込まれる。

脳ミソに銃弾の雨である。勝敗は決した。

ジャンスが射撃をやめ身をかがめてシエルアマッドネスをやり過ぎす。

そのまま壁に叩きつけられる。そして爆発。辛勝だった。

(剛将を失ったのは痛い、代りに奴らの正体。そして弱点がわかった。刺客を選んでわなを仕掛けてくれるわ)

見届けた軽部はアヌとしての姿に転ずると、窓を破って隣のビルの屋上へと飛び移った。

「やっぱり見られていましたわね」

お嬢様口調のブレイザがさほど驚かずに言う。

「あたしはもうばれていたのでいいけど」

「まあまあ。どんな手できても三人で力をあわせれば大丈夫ですよ」  
ニコニコとジャンスが言うがセーラとブレイザはそっぽを向く。

「このぶりっ子女と一緒に戦うなんて無理に決まっていますわ」

「それはこっちの台詞よ。大体あんただけつるべただし」

「む、胸は闘いに関係ないでしょう。胸は」

「うーん。確かにちよつとあたしも大きすぎかなと思つてたんですけどね。女の子になりたいという願望が女性のシンボルとも言つべき胸に現れたみたいで」

「よかつたわねえ。ブレイザ。あんたちゃんと男の心があるみたいだし」

「きいいつ。胸が大きければ偉いわけではありませんわっ」

（大丈夫か。こいつら？）

三人娘がすっかり失念していた元・貝塚真樹男（後に貝塚真紀と改名）の少女を自分のガクランでくるみお姫様抱っこをしていた岡元が不安を覚える。

そしてそれこそがアヌが弱点として捉えた三人の協調性のなさであつた。

## EPISODE 28 「速射」(後書き)

### 次回予告

「それで。奴らの弱点がわかった今、残った僕ら三人で戦うのかい？」

「もしもし。番長？ あたし今ね帝江州プールにいるの。それで応援に来てくれないかな？」

(友紀の前で女としての裸を……)

(くくく。役者が揃ったな。だがまだ仕掛けない。焦らして焦らして。それからだ)

EPISODE 29 「水難」



## EPISODE 29 「水難」

都内のあるガード下。商店街などの近道というわけでもなく人通りもさほどないここで三人の『男』が立ち話をしていた。

一人はホストか役者かというイメージの華やかな美男子。

もう一人はローブを纏った老人。

そしてもう一人はスーツ姿の青年。丸いメガネをかけているが猟犬のような鋭い目つき。きつい印象は緩和されていない。

「それで。奴らの弱点がわかった今、残った僕ら三人で戦うのかい？」

何処か芝居じみた口調の青年。秋野光平が尋ねる。

「いや。我々はない」

答えたのは六武衆のリーダー格・アヌが取り付いた軽部。

「我らでないと言うならだれがきやつらを叩ける？」

ローブの老人。プロフェッサーがゆったりとした口調で問いただす。

「適任者がいる」

「おいおい。もったいぶらずに教えてよ。僕たちそろそろ闘いかと思っただけを確認したくてアヌを呼んだんだから」

「まさか…あの反乱者を差し向けるつもりか？ 危険すぎて六武衆に入れられなかった奴を」

プロフェッサーのその言葉も首を横に振り否定する。

「適材適所。そして相性というものがある」

真夏の太陽が容赦なく地面に降り注ぐ。

影はいっそうくつきりと浮かび上がり、闇を形成していた。

E P I S O D E 2 9 「水難」

六武衆の生き残りの会談から二日。夏休みのとある一日。正午を回ったばかり。

例によって「感触」を味わった清良はTシャツ姿でキャロル・バイクモードにまたがりそれをおっていた。

（あの車の中にアマッドネスがいる。どういふつもりだ？ 変身したままで車に？ 俺を誘っているのか？）

不思議には思うがとにかく追跡である。

敵はまだ行動を起こしていない。そして車道である。こんなところで戦闘をするわけにはいかない。

追跡しつつ様子見であった。

不意に「感覚」が交じり合う。思わず「上」を見上げる。

（もう一体？ やはり待ち伏せか）

そちらに気をとられているうちに追っていた方の感覚が消えた。

とりあえず消えた先の建物。そして新たなる感覚の導くままに入る。彼はヘルメットをまぶしそうに顔をしかめた。真夏の太陽がまぶしい。

「敵」が入ったと思われる建物を見上げる。中から特に甲高い女の子の楽しそうな声が聞こえてくる。

「なんでこんなところに？」

それはレジャー用のプールであった。

「高岩。どうして貴様がここにいる？」

いきなり声をかけてきたのはボーダーの半そでシャツを着た伊藤礼。

「お前こそ。ここはお前のエリアから離れているだろう」

「貴様こそ」

つまり互いにここまで誘導されてきたらしい。

ぞろぞろと入る客に注目されるので言い争いは中断した。小さな声で会話する。

「よーするに俺達はここにおびき出されたと言うわけか？」

「バカか？ わざわざ二人そろえるような手を奴らが使うか？」

清良はむっとしたが正論である。分断して一人ずつ叩くなら納得だが、いかに不仲といえど二人をそろえるとは理解に苦しむ。

「あれえ？ 二人ともどうしてここに」

どうやら周辺をぐるっと回ってきたらしい順が二人を見つけて声をかけてきた。

彼もまたシャツだが長袖。女顔とメガネで女性的なイメージがある。

そのイメージだと長袖も女の子の日焼け対策に見えてくる。

「お前こそ」

「僕は空にアマッドネスの気配を感じてここまで」

「オレは車に乗った奴を追って」

「俺は車じゃないな。たぶん高速で走っていた」

「……………」

「最低でも三体いると言うことか？」

「それが鉢合わせ？」

「やはりここで何かやるんじゃない？」

上空には未だ気配がある。だが

「降りたね」

「それも中だ」

何処か物陰に高速で降り立ったらしい。

「どうする？」

明らかに誘いのわな。しかし無視すれば客に対して何かを仕掛けられそう。思わずどちらというわけなく尋ねる清良。

「ふん。臆病風にふかれたのなら帰れ。足手まといよりマシだ」

「誰がそんなことを言ったよ？」

礼の言葉にカツとなる清良。

「じゃあ中で手分けしてさがしましょうか？」

少女の声。驚いて振り返るといつの間にか順がジャンスになっていた。

しかもいつものジャンバースカートではなく肩と胸の谷間を大きく露出したサマードレスだ。

「なんでいきなり？」

「考えてくださいよ。中でアマツドネスと遭遇したとして、周りに他のお客さんもいるのにいきなり男から戦乙女になったら大騒ぎですよ。その点これなら水着とはいえどエンジェルフォームだから凌げますし、客が逃げてからキャストオフすればいいし。もし別の目的で集結していたとしても、あたしたちを見て敵が作戦を諦めてくれたらそれでもよし。どう転んでもいいほうになりますよ」

「ウソつけ」

「貴様はただ女姿でいたいだけだろう」

とはいえどジャンスの主張もわかる。二人が悩んでいると

「もしもし。番長？ あたし今ね帝江州プールにいるの。それで応援に来てくれないかな？」

ジャンスが可愛いストラップがやたらについているケータいで応援を要請していた。

「まあ岡元なら援軍として頼もしいが」

「そうですね。ブレイザ様のバックアップで森本君を呼んでおきました」

「友紀様もすぐ駆けつけてくださるそうですよ。セーラ様」

「「何勝手に呼んでるんだ。おまえら」」

「ええ？ 何をそんなに怒っているのですか？ ウォーレンは上空から監視できますが犬の姿のドーベル。猫の姿の私ではプールに入れませんからサポートをお願いしたのですが」

それはわかる。だが同時にジャンスの主張も受け入れるとなると女の姿の中に。しかも友紀と一緒に。

それで憤慨していた。

「お待たせ」

友紀と森本。岡元がまとめて合流した。友紀は大荷物を持っている。

岡元は相変わらずの学ラン。森本はワイシャツとスラックス。友紀はキャミソールとキュロットだった。

「おい。電話してからそんなに時間経ってないぞ？ それなのになんでこんなに早く準備してこれるんだ？」

清良の突っ込みどころ。

「そこはそれ。俗に言う井 ワープで」

時空間を飛び越えるといわれているあれである（笑）

森本の言葉に突っ込む気も失せた清良である。

反対にテンションがやや高めなのが友紀である。

「任せてキヨシ。サポートして見せるから」

妙に力が入っていた。

「だめだ。ヤバイから帰れ」

清良としては当然の言葉。それに対して食い下がる。

「そんなことを言わないで。だって……あなたのことを殺しかけているのだし。罪滅ぼしがしたいの」

それで出てきた友紀である。

「あれは操られていたからお前に責任はねえ。わかったなら帰れ」

「そんな……力になりたいのに」

しかられた仔犬のようにしよげ返る友紀。「罪の意識」は深いようだ。

逆に清良の方が罪悪感に囚われてきた。

(セーラ様。ここはお願いし方がよろしいかと)

キャロルに言われる前に清良はそういうつもりになっていた。何より泣かれるのは苦手だ。

「わかったよ。頼む」

いわれてばあっと表情が明るくなる友紀。

「うん。もし戦いになってもいいように道具も持ってきたから」

バッグを開くと新体操で使うクラブやリボン。ボールなどが入っていた。

「いや……場所がプールだからむしろマーメイドフォームの方がありそうだが」

もちろん最後までいえない。

「さあ。二人とも。それじゃ変身を」

結局やたら嬉しそうなジャンスに押し切られて物陰で変身する二人。

セーラはキャミソールにデニム地のミニスカート。サンダルとアクティブな印象。

ブレイザは真っ白なワンピース。胸元に大きなリボンという清純なイメージであった。

変身直後で男の意識が勝っているはずなのに、いきなり薄い胸元を隠すデザインだ。

もちろんエンジェルフォームの能力を使えば一瞬で水着姿になれる。

だがその現場を見られるのもまずいとジャンスが主張して岡元と森本以外は女子更衣室へ。

ちなみにウォーレンは空から。キャロルとドーベルは周辺を警戒している。

ぎりぎりまで男姿でいたのが祟った二人。女子更衣室の中は裸の女子でいっぱいだった。

もちろん銭湯のようにやっているわけではなく、隠しながらではあるがそれでもまだ男の心のままのセーラとブレイザには刺激が強すぎた。

女の肉体を有する二人だが基本的に戦うときののみ。

性的好奇心を満たす目的で変身した事はない。

(さっさと出て行こう)

着替えるふりを続けるブレイザ。ワンピースのスカートから下着を取り瞬時に水着に変化させる。

それを穿いているように見せかけてワンピースを水着に変えていた。

大変なのがセーラである。何しろそこに友紀がいる。

(友紀の前で女としての裸を……)

以前に理恵と入浴した時は完全に女に精神にシフトしていた。

しかし今はまだ男の精神が残っていた。意識すればするほど恥ずかしくてたまらない。

それは友紀も一緒だった。

確かに小さい頃はお隣さんということで一緒に風呂に入ったこともあった。

(でもそれは子供の時の話よ。今じゃ二人とも大人だし)

そこでなんとなくセーラを見てしまう。

白い肌。柔らかかそうな肌。二つの豊かな丘。くびれたウエストライン。細い脚だが健康的な脚線美。

カチンと来た。

「ちよつと？　もしかしてあたしよりスタイルよくない？」

それが羞恥心を吹き飛ばした。

(うわ。まさかここでTSの古典的名台詞を聞けるなんて)

別の列のロッカーで聞き耳を立てていたジャンスが喜んでいた(笑)

「な、何を？」

セーラにしてみれば何で友紀が切れたかわからない。

だが友紀は納まらない。幼馴染みの少年が逞しい肉体になっていると思いきや美しい少女に。

しかもヘタしたから自分よりもプロポーションがいい。

これは女のプライドを傷つけるのに充分であった。確かめないと気がすまない。

「うっわー。このウエストなに？　55切ってんじゃないの？」

べたべたと無遠慮に触りまくる友紀。

女性化して敏感になった肌に友紀の柔らかな指先かセーラに妙な刺激を与える。

「ちよ、ちよつとやめて。くすぐりたい」

「何よ。すっかり女の子じゃない」

ここで今度はいつもの女子同士でのじゃれ合いがでてくる。



セーラのむき出しの胸を揉む。

「や、やめて。そんなとこいじるの」

逃げようとするが力が入らずだめ。

「きやはは。柔らかくてマシユマ口みたあい」

「やめてよおおお」

赤い顔をして荒い息をするセーラ。

数分後。

「あの、ごめん。キヨ……せいら。悪乗りしすぎたわ」

神妙な表情で謝る友紀。反省していた。

ちなみに女の子の姿ゆえに人目を気にして「せいら」と呼ぶことにしていた。

「ううん。いいの。おかげでもう女の子の気持ちになれたから」

それで裸の女子ばかりという状況が恥ずかしくなくなっていた。

「さっ。行こう。森本君たち待っていると思うから」

既に着替えた森本と岡元は女子更衣室から少し離れた場所で待っていた。

「森本。待たせたわね」

ブレイザの言葉に反応できない森本。

彼女は純白のワンピースの水着を着用していた。

最初は競泳用だったのだが途中で女心になったため華麗さをましっていた。

特に胸元の大きなりボンがボリウムを上げていた。

「キ…綺麗です。会長」

本気で見ほれていた要。

「ありがとう。でも」

精神が女性化して、男ならない筈の胸に対するコンプレックスが出てきた。

「大丈夫です。それなら胸元はばれません」

ピク。ブレイザのこめかみに青筋が。

「森本。それじゃまるでわたくしが胸にコンプレックスがあるみたいに聞こえますが？」

ずいと迫るブレイザ。美人だけに凄みがある。

「す…すいません。つい本音が」

「なんですつて？」

「本当のことじゃない。森本君いじめたらかわいいそうよ」

からかい半分。擁護半分でセーラが声をかけた。

紫色のビキニ。セパレートという方が近い。ボトムスにはスカートまでついている。

友紀の方はピンクのワンピース。どうやら新体操のレオタードのイメージがあるらしい。

「おやおや意外ですこと。貴女の事だから盛大にフリルでもつけるかと思いましたが」

ギク。セーラが引きつる。

「……凶星だったんですのね」

女性化するとどうにも可愛い系に走るセーラ。

今回は友紀がいたので辛うじてこの程度で収まっていた。

「二人とも可愛いですよねえ」

最低でもDカップはあるであろう胸を申し訳程度の布地で隠していたジャンス。

下はまだ面積が広いが、黒いのもあってコントラストを強めて裸よりエッチに見える。

髪は二つお下げ。

髪のさほど長くないセーラ（エンジェルフォーム）はそのままだがブレイザは纏め上げていた。

（くくく。役者が揃ったな。だがまだ仕掛けない。焦らして焦らして。それからだ）

悪魔をその身に宿すもの達が不気味に笑っていた。

とりあえず3組に分かれてアマッドネスの気配を探っていた。組み合わせはセーラと友紀。ブレイザと要。ジャンスと岡元である。

セーラのガントレットは例によってブレスレットへと変換。ブレイザとジャンスは変身アイテムである小太刀と弓を取り出した空間に仕舞い込んでいた。

いつでも取り出せるらしい。

「かーのじよたち。俺たちと遊ばない？」

日焼けしている男二人が「美少女二人」に声をかける。女の子目当ての行動だ。

(ちよつとキヨシ。うまいこと追っ払って)

友紀はナンパに乗るほど軽い女ではない。

(うん。任せて)

セーラはウインクで答える。その仕草が女性的過ぎることに不安を覚えるが任せることにした友紀。

「ごめんなさい。あたしたち実は待ち合わせなんです」

「ええっ？ まさか男じゃないよね。女友達だよね」

「残念。男の子たちです。きやはっ」

悪戯っぽく笑いナンパ男二人を置き去りにするセーラ。ついてくる友紀。

「あんた一体どこでそんな女っぽいやり取り覚えたのよ？」

「うん。なんとなくかな。自然と心からわいてくるのよね」

まさしく心の底から女の子になりきっているセーラ。

真夏の暑さのせいではなく冷や汗が出る友紀であった。

歩くたびに揺れ動く巨乳。折れそうにくびれたウエスト。

大きい目のヒップを揺らしてのモンローウォーク。

それでいて清楚なイメージのメガネっ娘。ジャンス。

男たちの視線を独占していたが誰もアプローチをかけない。

後ろから怪獣のような大男がのっしのっしとついてくるからだ。

（うーん。やっぱり番長がにらみ利かせていると男の子が寄って来ないわねえ）

ジャンス本人は女として扱われるのを望んでいるため、むしろナンパされたがっていた。

しかし屈強のボディガードがそれを阻んでいた。

顔を見て凄い美人だと感嘆のため息。

次に胸元を見て絶望的な平野に落胆のため息。

これを繰り返されてブレイザの「女のプライド」はずたずたであった。

もちろん時間経過により完全に女性の精神になっているからの話。

「どう？ 怪しい奴がいた？」

一度集まる。セーラが尋ねる。

「ダメだ。盛りのついたオスネコだらけで」

もちろんナンパ男をさしている岡元の言葉。

「いや。一番盛ってんてのはそのメガネ巨乳だから」

セーラの突っ込み。

「ばんちよおー。男の子がよってこなくてつまんなあい」

口調は砕けているが本気で言っている。

三人の中でもっとも女性よりの順ならではである。

「はいはい。外はどうかしら？ ドーベル」

ブレイザは外を見回っている使い魔に念を送る。

（私は南を見えていますがつりあえず探知できません）

（私は北ですがやはり見つかりません。セーラ様）

同様に問い合わせていたセーラにも返答が来る。

とりあえず一箇所にまとめたり「作戦会議」

「どうしましょ？」とジャンス。

「逃げたんですかね？」と森本。

「確かにこの人ごみで人間の姿で紛れ込まれたら見逃すわね」

何しろ夏休みで猛暑である。まさしくイモ洗いという状況である。

「もう暫くここにいますか？」

ジャンスの提案は一見するともう少し探ってみようと取れるが、実際は「もうこのままプールで遊んじゃおう」という思いを含んでいた。

それを知ってか知らずかまだいることに。

一度緩んだ緊張感はすぐには元に戻らない。ましてや解放的なプールである。

セーラやブレイザも結果としてではあるが「遊ぶため」に女姿である。新鮮な感覚が麻薬のように彼女たちを麻痺させる。

そして精神もすっかり女性のそれになっている。ハイテンションな女子高生そのものになっていた。

「セーラさん。勝負ですわ」

見事に遊びモードのブレイザ。「クイーンのカケラ」の影響で対立状態だがこのレジャー施設という舞台のためその方法もさすがに殺伐としたものではなく泳ぎでの競争だった。

「言っておきますがマーメイドフォームは反側ですわよ」

何しろ水中における活動限界なし。ブレス無用のフォームではそれだけで競泳は有利と言えよう。

「あなたこそ反側じゃない。その水の抵抗のないまっ平らな胸」「ぬわんですつてえ」

何度言われてもこれだけは我慢できない。

「会長。プールです。刃物はやめてください」

後ろからしがみついて制止する森本。暴れるブレイザ。だから弾みで森本の手がブレイザの胸に。

「きゃっ」

顔を赤らめ胸を押さえてしゃがみこんでしまう高飛車女。

「ご……ごめんなさい。会長。でも…大丈夫です。ちゃんと膨らんでました。柔らかかったです」

「そんな感想はいりませんっ」

森本はあくまで真剣にフオーローしている。はたから見えていた友紀が一言。

「それに出産すれば胸は大きくなりますよ」

暑さでやられたらしい天然発言。それを真に受ける下級生。

「出産……そんな。僕というものがあながら他の男なんて。会長の裏切り者……っっっ」

「誰がそんな想像をしるといいましたっ」

大騒ぎであるそんな中。

「赤ちゃんかぁ」

夢見るようにつぶやくジャンスに底知れぬ恐怖を覚える一同であった。

三時ごろ。気温のピークも去って少し遊び疲れが出てくる頃合。

一同はまとまって休んでいた。

セーラと友紀は仲良く並んでアイスクャンデーを口にしている。

セーラがだらけているのに対して友紀は「警戒中なのがいいのかな？」と言っ思いが顔に出ている。

「はい。あーん」

そんな思いをよそにジャンスは岡元にカキ氷を食べさせている。ブレイザに至っては貴婦人よろしく寝そべって飲み物を口にして  
いる。

まるで遊びに来たかのようにだ。

「やっぱりいいねえ」

疲れたようにセーラがつぶやく。その表情が一変する。

「おおー。いいのう。若い娘はやはり」

セーラの尻を大胆にも衆人環視の中で撫で回す老人がいた。頭髪はまったくない。しかし生命力は漲っている肌の色。

「なななななな……何すんのよ？ 誰。あんた」

当然だがセーラには痴漢の被害にあつた経験がここまであるはずがない。

「ワシか？ ワシは三吉晴海というロマンスグレーじゃ」

「どこにグレーがあるのよ？ このタコジジイ」

セーラはその老人を思い切り蹴り飛ばした。勢いよくプールに転げ落ちる老人。

「まったく。油断しているからそんな目に遭うのですわ」

心底バカにしたように冷たい目で言うブレイザ。

「へえ。じゃあんたはセーラと違うってワケだ？」

まったく知らない男の声。ブレイザは瞬時に戦闘体勢をとる。

「お前、何者？ どうしてその名を？」

誰もこの男の前でセーラの名を口にしていない。それを知っていた青年に問いただす。風貌としてはどこにでもいる普通の青年。

この時期だからか普段からかとにかくよく焼けていたのが特徴だ。

「おれ？ 岩下了。ま、あんたらの言い方だとイーグルアマッドネスということになるのかな」

「キサマ」

ブレイザが空間にしまっていた小太刀を取り出して本来のエンジンエルフォームに戻つたのと同時に岩下は驚の特徴を持つアマッドネスへと変貌していた。

「きゃあああーっ」「ば、化物だ」

異形の出現に周囲は大パニック。我先に出口へと逃げていく。

「落ち着け。落ち着いて逃げろ」

「慌てないでくださーい」

誘導をしていたのは岡元と森本。二人ともジャンスなしブレイザと戦い続けて長い。

こういうケースの対処もできていた。

「だ、大丈夫ですから」  
避難誘導に加わる友紀だがそれも上手く出来なくて「自分は足手  
まとい」と思い始める。

「おーし。それじゃ始めるか」

軽い口調でイーグルがいい浮かび上がる。

「意外ですわね。この客たちを人質に取らないとは」

「は。むしろ邪魔なんだよ。あれだけいたらお前らと見分けがつか  
ねえ」

それでわざわざ怪人としての姿をさらし人払いをした。

「戯言を」

小太刀を抜いて切りつけるがさらに高い位置に逃れるイーグル。  
そのまま上昇を続ける。見えなくなる。

「逃げたの？」

仕掛けておいてそれもないだろうと見ていたセーラは思っていた。  
だがそれは間違いだった。はるか頭上から雨あられと羽根手裏剣  
が降り注いできた。

「きゃあつ」

既に水着から本来のエンジェルフォームであるブレザー姿に転じ  
ていたのでまともに食らった部分も弾き飛ばしていた。それで難を  
逃れた。

「ど……道理でプールに誘い込むはず。ここでは遮蔽物がありませ  
んわ」

街中では逃げられるからプールに誘い込んだ。

「待ってて。ブレイザさん」

ジャンスもジャンパースカート姿に転じる。もちろん弓を手にし  
ている。

「よし。キャスト……」

「させるかよっ」

新手がジャンスへと襲い掛かり妨害する。



「きゃっ」

弾き飛ばされるジャンス。敵も止まる。豹柄のチューブトップと短パン。そして豹の仮面を被っている女という印象である。

だがその顔は仮面ではない。

ジャガーアマッドネス。取り付かれた人間の名は兵藤速人。

「へへ。どうだい。あたしのスピード。伊達に豹の能力を取り込んでないところ」

言い終わらないうちにまた高速で攻撃を始める。

「ったく。二人そろってなにやってんのよ」

軽い口調なのは自分が加勢すればどちら相手でも「2体1」と優勢になるという余裕である。

セーラは本来のエンジェルフォームへと戻る。そしてキャストオフ。さらに超変身。

ブレイザを狙い撃つイーグルアマッドネスを叩くにしても、ジャンスを襲うジャガーアマッドネスを迎え撃つにしても飛翔と俊敏性の形態。フェアリーフォームは必然だった。

だがそれは罠。だからこそセーラだけそこまで待っていたのだ。

プールの中から触手が伸び非力な妖精を絡め取る。

「きゃっ?」

ぬめぬめとしたおぞましい感触も手伝い悲鳴を上げるセーラ。

「ぐふふふっ。さっきはよくも蹴飛ばしてくれたな。お礼にたっぷり辱めてくれる」

まるで茹でたタコのような鮮やかな赤。姿もまさにタコのまま。

長い触手が腕となり、他の六本が三本ずつ胸と背中であらうねと動いていた。

「『蹴飛ばしてくれたな?』お前は…まさかさっきのジジイ?」

三吉と名乗った老人もオクトパスアマッドネスだったのだ。

「余裕も今のうちだけだ」

セーラを捉えた触手が彼女の胸と足の付け根に絡みつき、それが動くたびに女ならではの感触を味合わされて赤い顔になるセーラ。

「あ……あああっ」

赤い顔をして息も荒くなる。精神を集中できないし何より片方のガントレットを叩こうにもがんじがらめ。

「こ……この」

何とか闘志を奮い立たせて触手を叩くが元々非力なフェアリーフォームの上に、触手自体が弾力性があり暖簾に腕押しであった。

三対三。だが高所の相手に対抗手段を持たぬブレイザに対するイグルアマッドネス。

射撃中心のせいか他の二人よりは動きが速くないジャンスにジャガーアマッドネス。

非力な姿に転じたところを絡め取った、しかも柔らかい肉体ゆえに打撃がさらに効きにくいオクトパスアマッドネスとかなり相性のよくない戦いを強いられていた。

EPISODE 29 「水難」 (後書き)

次回予告

「遣い魔やミュスアシの末裔ごときに何ができる」

(友紀。あたしの……あたしのこんな恥ずかしい姿を見ないで)

(ああ。キヨシを助けたのに自分には何一つ出来ないなんて)

「友紀様。セーラ様を助けていただけますか？」

EPISODE 30 「連携」

## EPISODE 30 「連携」

警察病院。薫子は退院の運びとなった。

「お姉ちゃん。たいいんするの?」

入院中に仲良くなった幼女につぶらな瞳で訴えられると軽く罪悪感を覚える薫子。

幼女の目の高さまで屈むと優しい声で「ごめんね。葉子ちゃん。今度遊びに来るからね」再会を約束した。

過労が原因の入院である。それゆえ退院後も一週間の自宅療養も命ぜられていた。その間にこられる。

これはかぎまわられるのを疎ましく思った三田村の陰謀。

出入り口をでると見知った顔がいた。

「退院おめでとunggざいます」

迎えに桜田が来ていた。しっかりと警察車両だが。

「いいの? 職務中に」

とか言いつつちゃっかり乗り込む薫子。

「大丈夫ですよ。アマッドネス特捜班ですから奴らが何かしでかさなけりゃ……あ!」

言っているそばから車から無線の呼び出しがなっている。桜田は慌ててそれを取る。短く会話を済ませる。

「出たようね」

「一城さん!」

「行くわよ」

その瞳を見たら降ろす事はできなかつた。

桜田は薫子に乗せて現場へと車を走らせた。

EPISODE 30 「連携」

屋外プールは阿鼻叫喚の図であった。

駆けつけた警官も客を逃がすので精一杯。

またあくまで人命優先でアマツドネスに対抗するのは後回しという指示も出ていた。

これは別に三田村の陰謀ではない。人外の魔物に対抗する有効な手段を彼らは持ち合わせていない。

もちろん実際に相対すれば知力と武力を駆使して戦うが、とにかく一般市民を守るのが最優先であった。

その混乱の最中。主の元に駆けつける使い魔たちがいた。

プールを見渡せるビルの屋上。

軽部。そしてプロフェッサーと秋野光平。

蘇生して地獄へと逆戻りになっていない六武衆の半分がいた。

軽部は監視で鋭い目つきだが秋野は見物というノリだ。

「僕たちより下っ端でも相性によっちゃいい感じで戦えるんだね。

でもなんで三人まとめてさ？ バラバラにすればもっといいいんじゃない」

もっともな疑問をぶつけるホストのような男。

「タイムラグが生じてはまずい。ジャンス。ブレイザ。セーラ。三人同時に襲わないとシノ。ズダ。ヒオの誰かが2対1になりかねない。そのためにはこの手が有効だ」

「ふふふ。考えたものだな。アヌ。まずはブレイザを狙いシノが空から襲う。そしてその場にいればどちらかが助けようとして動き、その刹那に隙が生じる」

補足するように「プロフェッサー」が続ける。

「そう。そこで先に動いたほうをズダかヒオが襲う。さらに生じた隙を残りが狙うというわけだ」

「ふーん。見事な連係プレーだけど、奴らもやれるんじゃない。それくらい」

「いや。奴らは太古のそれとは違う。手を取り合うような感じではない」

それを肌で感じ取った軽部の立案した作戦である。

「戦乙女同士は助け合わないかもしれないけれど、奴らの従者や付き人はどうなんだい？」

「遣い魔やミュスアシの末裔ごときに何ができる」

驕りにすら似た「アマッドネスのプライド」がこの作戦に成功の確信を抱かせていた。

真夏の太陽がセーラの肌を容赦なく焼き付ける。

しかしセーラが苦悶の声を上げているのはそのためではない。

単純にタコの能力を持つオクトパスアマッドネスの触手の締め付けがきついのと、今まで男として生きてきて感じたことのない「感覚」に対する戸惑いである。

前世のセーラたち戦乙女は男を知らぬまま若い命を散らせた。その当時である。17と言えば立派な大人扱いだったにも関わらずだ。

だから正真正銘「初めての感覚」である。

「あ……ああんっ」

明らかに攻撃されているにもかかわらず吐息のように甘い、そして自分で驚くほど艶かしい声が出るセーラ。

オクトパスアマッドネスの髭のような三本の触手。後ろ髪のような後方の三本の触手が大きくなり、腕には及ばないまでも巨大な触手となりセーラを攻め立てていた。

セーラは外からは締め付けられ、そして弄ぶことがもたらす内側からの「女ならではの感覚」が声に出た。

男としても女としても屈辱。赤い顔をして耐えていた。

（友紀。あたしの……あたしのこんな恥ずかしい姿を見ないで）  
屈辱か。それとも苦痛ゆえかセーラの目から一滴の涙が。  
だが願っても虚しく友紀の目は釘付けになっていた。

友紀にしてみれば悪夢であった。目をそらしたくても出来ない。

幼馴染み。そしてほのかに思いを寄せる少年が「女」として顔を赤らめている。

友紀も「まだ」である。けれどセーラが今どんな感覚に内側から攻められているのかはわかる。

（助けなくっちゃ。でもどうやって？）

一刻も早くセーラを解放したいものの友紀には格闘技の心得もない。  
い。

とりあえずセーラのために持参した新体操アイテムをバッグから

取り出す。

「クラブ」を手にオクトパスに敢然と挑んでいく。

「キヨシを離して！」

だが本来の使い方とはまるで違う凶器としての使用。あっさりと空いている触手に弾き飛ばされジャンスが翻弄されているほうに飛んでいく。

「心配せんでもこやつを葬ったらお前も相手してやる」

融合した老人は好色だったらしい。

「変態。あなたも女なんでしょ。女を弄んで楽しいの？」

腕づくがだめなら口先である。挑発して解放させるつもりだったが

「ああ。好きだよ。あたしらアマッドネスは一部を除いて女だけの一族。だから女同士でいい仲にもなるのさ」

完全に「化物」となる前のアマッドネスは普通に子孫繁栄のために男が必要であった。

あくまでも子種を提供する奴隷であり、優秀な男だけが囚われた。残りは殺されるか、肉体労働の奴隷として囚われていた。

そして女だけが優秀であり、男は無価値と考えるアマッドネスは「奴隷」との交わりを否定し、女同士で密接な関係になるものも少なくなかった。

その名残なのか現代に復活したアマッドネスはまず男を中心に襲撃する。

取り付くのも男がほとんどである。

これは当時の人間の体力に比べて現代人は体力がないため、いくら変質できるといえど依り代は非力な女より男を作り変えるほうを選ぶ。

また戦闘民族だけに戦闘意識の高いほうが相性はいい。

例外的に友紀が取り付かれたのは第一に清良に対しての盾としての肉體。

そして新体操部所属の上に若い娘で体力も問題はなかったからで



ある。

ブレイザは動けなかった。まさに釘付けであった。上空遙かな位置からの狙撃。

距離があるだけに正確とは行かないが、それでもいつどこから来るかわからない。

何とか風切り音を直前には察して避けられるが、それでもいくつかはブレイザーを模した魔力の鎧で防いでいる状態。

そして上空の敵に対抗手段がない。セーラは飛べる。ジャンスは撃てる。だがブレイザはどちらも出来ない。

(こ、これではなぶり殺しですわ。皮肉にも遮蔽物がないから風で正確にはわたくしを狙えませんのが幸いですが)

上空を見上げるが敵は見えない。それほど遠い。しかし確実にいる。

(水中に飛び込めば……ダメですわね。音が聞こえないし何よりも動きが鈍りしかも体温を奪われる。長くは無理ですわ)

ちらりと別の方向を見る。タコの化物にセーラが締め上げられていた。

ジャンスの方も見るがジャガーアマッドネスが飛び回り連続攻撃で防戦一方。

とてもではないが救援は期待できない。

「うおーつつ。ジャンスから離れやがれ」

唯一この場にいた遣い魔。ウォーレンがジャガーアマッドネスに突っ掛かっていく。

本物の鳥は実は「蹴り」による攻撃を主体とするが、人造生命体であるウォーレンはくちばしで攻撃を試みる。しかし

「邪魔だ」

スピードにはついていけるが重量差。ジャガーアマッドネスに弾き飛ばされる。

「ぎゃっ」

地面に叩きつけられるが痙攣してびくびくと動いてはいる。「生きて」いる。

「ウォーレン!？」

ジャンスの悲痛な叫び。余裕もなくなっている。

「ほらほらあ。よそ見してていいのかい？」

目線を外したら背後からジャガーアマッドネスが飛び掛ってきた。「くっ」

未だキャストオフも出来ず弓で殴りつけようとするが間に合わない。

キャストオフで吹っ飛ばす手もあるがその隙すらない。

(でもいくら魔物でも生物には違いないわ。「休む」時があるはず。そのスキに)

そしてそれは意外に早く来た。チャンス到来とばかりに弓を正面に運ぶ。

「よし。キャスト…」

上から羽手裏剣がジャンス目掛けて降ってきた。

「きゃあっ」

これでジャンスを逃した。息を整えたジャガーの死角から死角へと移る攻撃が再開される。

「くくくっ。お前らと違ってあたしらは連携ができるんだよ」

やっと客を逃がした岡元と森本が助けに戻ってきた。そして惨状を目の当たりに。

「ジャンス! ウォーレン!」

岡元はウォーレンを拾い上げる。

「おい。しっかりしろ」

激しく揺さぶる。生き物なら脳震盪を警戒してやらないが、そうではないので遠慮無しだ。

それが功を奏したのかウォーレンの意識が戻る。

「う……番長か？ すまねえ」

「戦えるか？」

「当然だぜ。ジャンスを守るのもそうだが、あのスピードキング気取りをぶちのめさないと気がすまないぜ」

「よし。手を貸せ」

「おう」

返答するなりウォーレンは大型バイクへと変化する。

「X4か。これなら」

「あんたはでかいからな。このくらいありゃいいだろ」

またがる前に岡元は転がっていたクラブを拾い上げる。まだシエルアマッドネスとの闘いで痛めた拳が本調子ではない。武器の代りにするのだ。

唸りを上げて走りだす。ジャガーアマッドネスをひき殺すべく突進する。

「アマッドネスのスピードを甘く見るなよ」

避けられた。だがそのままジャンスの周りをぐるぐると回りだす。

「ジャンス。俺たちが壁になっている間に上の奴を」

「OK。キャストオフ」

「させるか」

間一髪メイド姿へと変貌したジャンスに、岡元とウォーレンバイクモードを飛び越えて上から襲い掛かる。

二丁拳銃で撃ち襲撃は防いだ。しかし相変わらず他の助けにはいけない。

「会長！ 僕も戦います」

「森本！ きてはいけません」

ブレイザを案ずる森本の心情と、森本を危険に晒したくないブレイザの心情がかみ合わない。

「で、でも」

「来るなどいつているのです。足手まといです」

助けたいという気持ちは涙が出るほど嬉しかった。だが危険に晒したくないから心を鬼にして「足手まとい」と言い放つ。

これは効いたのか森本も涙目になる。抑えていた思いが爆発する。「会長のバカ！」

「な!？」

思わぬ後輩の罵倒に状況を忘れて驚いてしまう。

「わからずや。石頭。えぐれ胸」

「あ?」

さらつとひどいことを言っている。ブレイザもきちんと反応した。「誰かを守りたいのは会長だけじゃないんです。僕だって会長が大事だから守りたいんです」

ぼろぼろと涙をこぼしながら訴える。その傍らにドーベルがやつと到着した。

「そう。その思いは私もです。ブレイザ様」

ドーベルは姿を変える。サイドカーへと変化する。

「森本君。力を貸してくれ。二人でブレイザ様を助けよう」

「う…うん」

森本はいつものカーゴではなく単車部分にまたがる。走り出したサイドカーはカーゴにブレイザを乗せるとそのままプールサイドを爆走する。

それを追撃するように羽手裏剣が降って来るが追いきれず後からになる。

イーグルアマッドネスもブレイザを狙うべく移動する。

即ちジャガーとオクトパスの助けは出来ない。

苦痛にあえぐセーラを前に友紀は自分の無力感を感じていた。

(ああ。キヨシを助けたいのに自分には何一つ出来ないなんて) 打ちひしがれるが足元の感触で目を開けるとキャロルがいた。

「キャロル……」

「友紀様。セーラ様を助けたいですか？」

なにか覚悟を試すような物言い。

「助けない」

「なら私と共に」

「でもあたしには彼らのように戦えない」

自転車には乗れるがバイクとなると経験がない。それを言っている。

「セーラ様を思う気持ち。つまり慈しみの心。そしてセーラ様を助  
けたい思い。闘志があるなら可能です」

「そんな手が？」

「ええ。ただ本来はセーラ様のためのもの。それでさえ3分程度が  
限度。友紀様とでは一分持つかどうか」

かなりの無理があるらしい。キャロル。そしてセーラにも。友紀  
ではどうなるか。

「やるわ！ その一分にかけるわ」  
即答だった。

「わかりました。では」

キャロルは光ったかと思うといくつかのパーツに変化した。

一つは鳥を模したヘッドギア。羽ばたく翼がこめかみを守り、鳥  
の首が脳天を保護していた。

もちろん胴体部分が眉間をガード。

亀の甲羅を思わせる形状の鎧が胸部を守る。甲羅の部分がちょう  
ど胸の膨らみと合うようになっている。

ウエストガードは龍がぐるりと回ったようなデザインだ。

太ももからつま先までを守る部分は虎の足のように見える。

「こ、これは？ そう言えばセーラが盾を使ったことがあったけど  
あれもあなた？」

「ファルコンに憑かれていたときの話である。」

『はい。あの盾は私です。そしてこれも肉弾戦を主体とするセーラ  
様のための鎧です。防御をすべて私が引き受けた分、セーラ様は攻  
撃に魔力を回せます』

キャロルの声がどこからともなく響く。

「ええっ。でも腕は？」

『申し訳ありません。セーラ様用ですのでそこはセーラ様ご自身のガントレットで守られているから無いのです』

キャロルとしても無理をしているのでパーツは少なめにしたいのである。

『時間がありません。飛びますよ』

「わかったわ」

友紀の瞳が闘志で燃える。その刹那、胸部プロテクターの背面から翼が展開した。

羽ばたきもせず高く飛び上がる。

「きゃあっ」

ジャンプというレベルではない。まさに飛んでいた。驚いて悲鳴を上げる友紀。

以前にファルコンアマッドネスとなっていた友紀ゆえに飛翔は経験済みだが、まさか鎧姿で飛ぶとは思っても見なかったのだ。

「なんだ？」

異様な展開に思わず動きの止まるオクトパス。それを目掛けて友紀がドリル状にスピンしながらキックを見舞う。

「わわっ」

空いている触手すべてでからめとろうと試みるが高速回転で逆に引きちぎられる。

いくら衝撃を吸収するといえど限度があつた。

「ぎゃああああっ」

友紀が勢い余ってプールに飛び込むと同時に、さすがにたまらずセーラを離してしまうオクトパス。

解放されたセーラは自分のことより飛び込んだ友紀を案じた。

「友紀?!」

だがプールから友紀が顔を出した。

普段から新体操で激しい動きに慣れているので、三半規管が回復

するのも早かった。

「あたしは平気。みんなを助けてあげて」

「うん。ありがとっ！」

弄られた怒り。そして友紀にもらった闘志がセーラを高揚させ戦闘モードにあつと言う間に戻した。

友紀の持ち込んだボールを拾うとジャガーアマッドネス目掛けて投げた。

「ふぎやあつ？」

岡元&ウオーレンを掻い潜りながらジャンスに攻撃していたジャガーアマッドネスは、この不意のボールをまともに食らった。

ましてやセーラのコントロールでありえない方向から来たので完全に予想外の攻撃。ダメージはさほどでもないが動きが止まる。

「もらったあつ」

岡元がバイクからジャンプして空中回転。ジャガーの前に飛び降りると手にしていたクラブを思い切り腹に叩きつけた。

「ぐあっ」

内臓をしたたかに打ち付けられて一瞬呼吸すら止まる。怪人といえど女。子宮もある。

「ちよつとしたりボ ケインだな」

憎い相手に得意げな岡元。続いて声高にジャンスに合図をする。

「今だ！」

もちろんジャンスもわかっている。阿吽の呼吸だ。

「超変身」

ピンクのオートマチックをのばして、黒いリボルバーの銃身にジヨイントする。

ロングバレルのライフル銃へと変化する。これでファルコンを撃墜した。

変化したのは武器だけではない。

紫色のメイド服が赤を経て鮮やかなピンクへと変化。ところどころにレースやフリル。

ツインテールはそのままだがヘッドドレスがバニーガールの頭に鎮座する「ウサミミ」に。

赤い靴。ボーダーのニーソックス。メガネはそのまま。

「完成！ ジャンス・アリスフォーム」

名乗りだけは忘れないが時間がない。狙撃用のフォームゆえ五感が倍以上に研ぎ澄まされている。

だから神経の負担で30秒しか維持できない。ちなみに耳は飾りではない。本当に感覚器なのである。

視力も向上しているがメガネはゴーグルとしての役割で残っていた。

彼女は空を探して、敵を見つけた。ちょうどドーベルを追ってプールサイドを一回りしてしてきた。

「い、いかんっ」

寸前で気がついてイーグルも背中を向けた。狼狽から来たとはいえど無防備な背中を見せる痛恨の大失策。

「もーらい」

ジャンスのライフルがイーグルの翼を直撃した。

「ぎゃああああっ」

動く相手ゆえにさすがに難しく心臓とは行かなかったが、撃墜には成功した。

プールに落ちて激しい水柱をあげる。

ドーベル・サイドカーモードはオクトパスアマッドネスの前で停車した。



そして余裕を取り戻したブレイザがオクトパスの前に立ちほだかる。

セーラは岡元に反撃しようとしたジャガーを背後から殴り倒した。そしてアリスフォームで限界までは魔力を使わずヴァルキリアに戻ったジャンスは、ずぶ濡れのイーグルが這い上がるのを待ち構えていた。

「……帰るぞ」

ビルの屋上では軽部が諦めて背を向けていた。

「そうだね。逆転しちゃったし」

秋野もプロフェッサーも興味を失いその場から去る。

セーラに殴られても蹴られても衝撃は吸収できる。ジャンスの射撃も防げる。

だが刃物となるとだめだ。オクトパスは青ざめていた。

そして懸念どおり伸ばした触手を片っ端から斬られてしまう。

「ふん。下衆の末路は哀れなものですわね」

相手は違うがブレイザの報復だった。

「ひいひいひいっ」

たまらず逃げ出すオクトパス。相性のいい相手を目掛けて走る。

興味を失ったように見逃すブレイザ。

(ま。あれだけやっときゃ大丈夫でしょ。それより)

ブレイザは超変身の準備をする。

スピードを誇るジャガーだが、セーラ・フェアリーフォームは上を行く。

散々ジャンスを弄ったが、今度は逆にセーラのスピードに翻弄されていた。

「遅い！」

セーラはジャガーの顔面を蹴り飛ばした。吹っ飛ぶジャガー。そ

の行き先は…

そして姿を変えるセーラ。

今度は自分が弄られる羽目になったイーグル。

畏として誘いこんだプールだが、皮肉にもそこに叩き落されて羽根が重くてなかなか飛べない。

いや。羽ばたけば何とかなるがそれをジャンスがさせない。

翼を盾としているのでどうにか急所を撃たれずにいるがどんどんとポロポロになる翼。

それでも必死に飛び上がる。飛行機の離陸のようになんとか飛び上がる。

そこに誰が待つかも知らずに。

ジャンスはオートマチックの銃身にリボルバーをジョイントした。

辛うじて残った二本の触手でセーラを絡め取るオクトパス。そのままプールの中へと引きずり込む。

「ぐはははは。今度は得意の水中で…」

相性のいいはずの相手と戦うことになって得意だったが青ざめる。セーラは既にマーメイドフォームへと転じていたのだ。

「そうねえ。今度はあたしのバトルフィールドに入ってくるなんてなかなか正々堂々としているじゃない？」

怪力の人魚姫は難なく触手の戒めを解く。その触手を引っ張り手繰り寄せたオクトパスアammadネスをリフトアップする。

「解放されたらそのスケベも治るでしょ。ちょっと痛いけどガマンしなさい」

ミキサーのように回転して大渦を作り出し、そこにオクトパスを放り出した。

怪人はなす術もなく錐もみ状態でダメージを受け落下していく。

蹴り飛ばされたジャガーがよろよろと立ち上がると眼前にはゴシツクロリータに身を包んだジャンスがいた。

「はあい。ちょっと痛いけどガマンしてね」

バルカン砲の様に回転して銃弾が射出される。

蜂の巣となったジャガーはよろよろとあかずさる。

やっとの思いでプールからのテイクオフに成功したイーグルアマツドネス。

だがその線上に巫女装束のブレイザがいた。

青ざめるイーグルだが濡れた翼が重くて高度が取れない。

方向転換はなおさら出来ない。半ばやけくそで高速で突破することを選択した。

しかし超感覚を持つブレイザ・アルテミスフォームの敵ではなかった。

前方への斬でイーグルの首筋を。通り過ぎる前にぐるっと一回転した剣が足元を切り裂く。

巖流・佐々木小次郎のつばめ返しだ。

「痛いですか？ けどガマンなさい。罰です」

奇しくも三人とも異口同音に同じことを口走っていた。

力なく落ちたイーグルの上にオクトパスが落下してくる。そこに重なるようによろよるとジャガーが倒れこみ、三つの爆発音が闘いの終焉を告げた。

セーラたちは困っていた。警官にどうやって言い訳しようかと。

幸い既に三人の「元・アマツドネス」は警察が見つけている。

今までの例から濡れ衣は着せられまい。だが逃げ遅れたにしては不自然だ。

「えーと、その。あのですね」

無駄に女らしくなったセーラが警官相手に口ごもる。ちなみに逃

げ遅れを装うためにまた水着姿になっているが、それを男の警察官に見られているのがたまらなく恥ずかしい「乙女心」だった。

「ああもう。じれったいですわね。わたくしたちが逃げ遅れたから隠れていた。それが信用できないというんですの？」

誰が相手でもブレイザの高飛車は変わらない。警官もたまらなくなってきた。

「ああ、やはりいたのね。あなたたち」

「お姉さま」

天の助け。薫子が駆けつけた。彼女のとりなしで一行は解放された。

一応は着替えるふりをしてから出る。ジャンスはもちろん。既にセーラもブレイザも女の心が基本になっている。

男になる気が失せていた。

キャミソールにキュロットと友紀とまったく同じ格好になったセーラ。ある意味究極のペアルック。

そっとセーラは友紀の手を握る。

「キヨシ……」

「助けてくれてありがとう。でも…もう危ないまねはしないでね」

「うん。でもまさか飛ぶとは思わなかったからビックリしちゃった」

いい雰囲気の二人。しかし今は女同士である。

「それにしてもキャロル。あんな手があるなら普段から使えばいいのに」

恥ずかしくなったのかごまかすようにキャロルにふる友紀。

「いえ。昔のセーラ様なら完全に女性ですから切り札で使えたのですが、今のセーラさまではまだ男の心が残っていてそれがわたしとのシンクロを阻害するんですよ」

「なるほど。だからわたくしたちではあれが出来ないのでね」

「キャロルちゃんもセーラさんも女の子同士だからシンクロできるけど、あたしたちの使い魔は男の子だしねえ」

ジャンスやブレイザの精神女性化が進めば進むほどシンクロできなくなる。

そもそも戦闘スタイルが違う。

「会長があれを使えたらもつと凄いのになあ」

そのつぶやきで思い出したかのように森本をにらむブレイザ。

「そういえば森本。誰がえぐれ胸ですって?」

「す、すいません会長。あれはつい」

いえなかった。森本を優しく抱き寄せてブレイザは自らの胸に森本の顔をうずめさせた。

「これでもえぐれてますか?」

しかしその声には怒気はない。普段の高飛車からは信じられないほど優しい笑みを浮かべる。

「助けてくれてありがとう。そして……これからも守ってくださいか?」

信じられないというように顔を見上げる森本。そして元気よく「ハイツ」と返事した。

「いいなあ。みんなラブラブで」

「ちよつと。あんたが言うの?」

疲れているだろうと岡元がジャンスを「お姫様抱っこ」しているのである。

「ねえみんな。ちよつと提案があるんだけど。敵も連携で攻めてきたことだし」

薫子が切り出した。

翌朝。洗面所で落胆している順。上半身裸。

「あーあ。やっぱ一度変身が解けるとだめかあ。憧れなんだけどなあ。ビキニの日焼けあと」

さすがに水泳の授業は男子の服装で受けている。上半身ムラなく焼けていた。

「お兄ちゃん。夏休みだからっていつまでもふとんに入ってないで出てきなさいよ」

理恵の甲高い声が響く。しかし清良は亀のように引っ込んだままだ。

「理恵様。実は……」

プールでの経緯を喋ってしまうキャロル。途端ににやっという表情になる理恵。

「あー。昨日はずっと『お姉ちゃん』だったんだあ」

「言っくんじゃねえ」

天岩戸が開いた。

そして伊藤家。その玄関先。

「あ。森本さんですか。兄はまたこんな書置きを残して」

礼の妹。瑞穂が事務的に言う。ちなみに胸は歳の割には結構ある。

「ああ。あそこまでしてたから心配してたけど」

「今度は何したんですか？」

「……………ハゲ」

「まったく、そのくらいで兄さんてば」

書置きには「旅に出る」とだけ記されていた。

そのころ、礼は禅寺で座禅を組んでいた。

(……………あんなことまでしてしまうなんて)

清良との不仲は「近親憎悪」もあるかも知れない。

EPISODE 30 「連携」 (後書き)

次回予告

「合宿というから山籠りでもするかと思えば都内では」

「お姉さまと一緒に温泉ですか。いいですねえ」

「夢のようですよ。朝から晩まで女の子でいいなんて」

(ふう。どうやらあれが戦乙女たちらしいな。アヌ様に聞いた通りの特徴。とりあえず報告を)

EPISODE 31 「合宿」

## EPISODE 31「合宿」

警視庁。その一室に薫子が現れた。

ここは本来の彼女の職場。そして三田村警部のまとめる部署。

その「上司」が既にアマッドネス。しかも大幹部とは薫子も考えていなかった。

現に今も退院の報告に来ていたくらいである。

「家でゆっくりしていればよかったのに。また倒れたらどうしようもないぞ」

薫子の身を案じているように聞こえるが、単に邪魔者を遠ざけただけの三田村ことガラ。

「いえ。体がなまっちゃんいますし」

さすがの薫子も三田村の正体に考えが及ばない。

「自宅静養に3日ほどあげたと思ったのだな」

「ええ。ですから温泉に二泊しようかと」

「なんだ。男とか」

一見するとセクハラなジョークを言った様にしか取れない軽部。

これまたアマッドネス。

しかもガラ直属の部下。六武衆のリーダー格。

「まさかあ。可愛い女の子たちですよ」

（女の子だと？ セーラか？ いや…「達」と言っていたな。まさか全員？）

疑念が渦巻く。そして仲が悪いと見た戦乙女たちがまとまりつつある「危険性」を感じた。

「まあ温泉でゆっくりしてきたまえ。可能な限り呼び出しはしたくないが一応宿泊地を教えてもらえないか？」

無難な言葉で軽部から漏れている「殺気」をごまかす三田村。

「はい。それできましたし」



警察官である。呼び出しに備え可能な限り現在地を知らせるのは当然と思っていた薫子は何も疑わずホテルの所在地と名前を伝える。それで用がすんだこともあり彼女は桜田門から離れた。

探りを入れた軽部は、三田村が領いたのを見て薫子の尾行を手配した。

そして彼女が合流した相手はセーラ。ブレイザ。ジャンスの戦乙女たちだった。

都内のある駅前のビジネスホテル。ここに4人はいた。

「合宿というから山籠りでもするかと思えば都内では」

ブレイザが呆れ気味に言う。

ワンピースというよりドレスという印象の服を着ている。

「あたしも本当はそうしたかったんだけど、何かあった場合に駆けつけられるようにしたかったし」

「でもなんでここなんですか？」

サマードレス姿のジャンスが可愛く尋ねる。

「うっふっふ。実はここには都内には珍しく温泉があるホテルなのよ」

真面目な薫子には珍しく含み笑い。

「温泉……」

ブレイザが露骨に嫌な表情をする。

本来は男という意識は全員あるが今の人格は完全に「女の子」。

女湯に入る抵抗ではない。

そう。少女の人格ならではのコンプレックスで裸身。具体的には胸元を晒したくなかったのである。

「それでみんなで親睦を深めましょ」

胸にコンプレックスのない薫子は気楽に言う。

「お姉さまと一緒に温泉ですか。いいですねえ」

若干浮かれ気味のセーラ。キャミソールとミニスカートである。

まったく照れないことからわかる通り、こちららも精神は完全に女性化している。

話はやや遡る。プールでの一件が終わった直後である。

薫子が合宿を提案した。

体力増強。技能向上もあるが最大の目的は親睦を深めること。

例えば短くとも一緒に暮らせば多少なりとも心が通う。

それで少しはいがみ合いをなくせるのではないかと。

メリットはあれどデメリットはない。また静養という部分もないことはなかった。

その時点で長時間変身していたものだからすっかり女の子になり切っていた三人。

「お姉さまの誘いなら」とセーラは二つ返事で飛びついた。

ジャンスも了承。

ブレイザは辞退しようとしたが、結局は薫子に押し切られて渋々了承。

翌朝。元の姿に戻って激しく清良が後悔したのは言うまでもない。だが意外に律儀に約束を守る彼は反故にしたりせず、当日は変身して待ち合わせ場所に来た。

家を出る時に既に変身していたのである。現地に着いたときにはすっかり女の子の性格に。

「それにしてもセーラちゃんもブレイザちゃんも荷物少ないわね」

「『能力』で服を変えられますから着替えはいらないですよね」

「でもジャンスちゃんなんて。ほら」

旅行用のキャリアを持ってきていた。

ピンク色のそれにはシールが貼ってあったり自分の名前が書いてあるので借り物ではないらしい。

「夢のようですよ。朝から晩まで女の子でいいなんて」

普段「女装」に留まっているのは既に男子生徒の押川順が存在しているから。

アマッドネスにやられたことにして常に変身というのも手だが、

何かの時に意識を失い男の姿を見せてはまずい。

それにやはり変身前後で同一人物とばれるようにはしたくなかったので、普段は男で通している。

今回の目的は戦乙女たちをまとめること。だから変身後の姿で長い時間過ごしたい。

寝る時以外は女のまま。それでジャンスが飛びついたのは言うまでもない。

ついでに言うとなさすがに高校生男子を三人引き連れての宿泊は、若い女性である薫子としても体裁が悪い。

女ばかりならなんの問題もないのである。

ちょっと場末の温泉旅館という印象のビジネスホテルに四人は入る。

それを物陰から見ていた男がいた。

夏物のスーツとめがね。どこにでもいるサラリーマンだ。

場所を変えて彼はメガネを外す。そして「カツラ」を外すと見事なスキンヘッドが。

中肉中背。そして髪がないことから変装はお手の物であった。

(ふう。どうやらあれが戦乙女たちらしいな。アヌ様に聞いた通りの特徴。とりあえず報告を)

彼：長島周太は携帯電話で連絡をして指示をあおぐ。

和室の4人部屋。ここで四人は二晩を共にするのである。

「修学旅行みたいですな」

はしゃぐセーラ。普段のぶっきらぼうさが微塵もない。

「信じられませんわ。男と女が二晩もここで」

「今は女の子だけです。ブレイザさん」

お茶を淹れながらジャンスが訂正する。

「みんな。一息入れたら近くの施設へ行くわよ。話は通してあるか

らトレーニングできるわよ」

服をスポーツウエアに「変えた」戦乙女たちは走って目的地へと行く。

関係者に挨拶をし済ませる。そしてまずは柔軟体操。それから基礎トレーニングである。

「それじゃ腕立て伏せを十回ワンセットで4セット」

薫子の依頼した臨時コーチ。武内が指示を出す。

(う…またホルスタイン女ですわ)

この臨時コーチも立派な胸元をしていた。それに対する反発で反論してしまうブレイザ。

「ナンセンスですわ。剣は腕の力で振るのではなくてよ。余計な筋肉は動きを鈍らせるだけ」

「いやいや。筋肉というのはあれで中々太くはならないものなのよ。あたしも散々やったけど大胸筋が鍛えられたせいか筋肉じゃなくてこっちが育ちすぎて」

胸元を強調する。

次の瞬間、一心不乱に腕立て伏せを始めるブレイザだった。

「やるわね。ブレイザちゃん」

薫子もやる。なまっただ体を鍛えなおす目的であるのと、人にだけやらせて高みの見物というのが出来ない性分ゆえ。

「べ、別にバスタップが目的じゃありませんわよ」

告白している(笑)

ここには格闘用の施設もある。

「それじゃ始めようか。ジャンス」

どちらかという戦闘中に近い表情のセーラ。

「うつつ。お手柔らかに頼みますね。セーラさん」

へっぴり腰のジャンス。トレードマークのメガネは外してある。二人はヘッドギアにグローブ。上はTシャツ。下はスパッツという姿でスパーリングを始めようとしていた。

遠距離を得意とするジャンスだが近距離線を鍛えておいて損はない。

それゆえの提案である。

スパーリングパートナーがセーラなのは彼女が徒手空拳を基本とするからである。

言うまでもなくガントレットはブレスレットに変えてある。

「行くわよ」

いきなり飛び込んで左ジャブを入れようとする。

牽制。あるいは相手の視線をずらす狙い。

あまりまともにヒットするとは思ってない。だが

「ぎゃんっ」

ジャンスはまともに顔面で食らった。そのままへたり込む。

「ちょ、ちょっと。避けるがガードしなさいよ」

むしろセーラの方が慌てる。

「ひどいですよお。セーラさん。女の子の顔を狙うなんて」

鼻を赤くして涙目で訴える。上目遣いでセーラに男の心が多く残っていたらクラツときたかもしれない表情。

「なに言ってるのよ。あたしたちの敵は顔どころか心臓をえぐりに来るわよ。ほら。立って」

「うっ。素手は苦手なのに。落としたって手元に戻せるし、こんな訓練いらぬのに」

「なにぶつぶつ言ってるのよ。もう一度行くわよ」

あえてセーラは同じパンチを繰り返す。

それならさすがにまともに食らう無様はないだろうと考えて。だが  
「きゃーっ」

反射的に出したジャンスの右ストレートが油断していたセーラの顔面に直撃。

しかもカウンターという形だ。

「ぎゃっ」

今度はセーラがまともくらいダウンする。

「ああっ。大丈夫ですかあ？ セーラさん」

おろおろとジャンスが駆け寄る。セーラは見事に鼻血をふいていた。

「……やってくれるじゃない。ジャンス。これなら手加減はいらないわよね」

ゆらりと立ち上がる。

「ちよつとまって。セーラさん。目つきが恐いですよ」

あとずさるジャンス。

「問答無用ーっ」

「きゃーっっっっ」

逃げるが捕まるジャンス。キャットファイトが展開されていた。

そのころの薫子とブレイザはテニスウェアでコートにいた。

「行くわよ。ブレイザちゃん」

「いつでもいいですよ」

言われて薫子はテニスボールを真上に放り投げた。

当たり前だが投げるタイミングは一つ一つ違う。そして落ちてくるタイミングも。

それを木刀で全て真上に弾き返す。

空からの攻撃に対する対策での特訓だった。

「あうっ」

全部をはじけず、そしてかわし切れず何個かを食らう。

テニスボールとはいえど当ればそこそこ痛い。

「もっと小さな動きで」

「はいっ。コーチ」

ブレイザも妙な熱血乗りをしていた。

そのころ、長島は四人の姿を頭に叩き込んでいた。  
そのときはまた別の姿をしていた。

(いつもなら僅かでもいいが、こいつらの特殊能力を考えると今日一杯くらいは動けない。とにかく特徴を掴まない)

アヌの送った尾行者はあるときは中年女の姿で。またあるときは中学生くらいの少女の姿で観察を続けていた。

それにもかかわらず戦乙女たちは「気配」をつかめない。  
それはこの尾行者特有の能力が物を言う。

その後も様々な訓練で汗を流した。

そして宿舎であるホテルへと戻る。

「さあ。夕飯の前にお風呂に入りましょ」

薫子の提案に金髪の少女は硬直する。

「きよ…今日は汗をかいてないから結構ですわ」  
露骨なウソをついているブレイザである。

「ダメですよ。ブレイザさん。女の子はいつもきれいにしてないとジャンスが右腕を取った。ちなみに空いている手には女の子らしいポシエツトが。」

「そうそう。あれだけ動いて汗かいてないはずないでしょ。じつとしてても暑いのだし」

セーラは左腕を取った。連行の体制だ。

「だったら後で一人で入りますわ」

抵抗するが木刀を降り続けて腕に力が入らない。振りほどけない。  
「それじゃ親睦にならないわよ。さあ。二人ともつれてきて」

女湯。強制的に剥かれるブレイザ。他に客がいなかったから出来た芸当だ。

洗い場でその胸元に三人の女の視線が。腕でカバーしてもよくわかる「せんたく板」ぶり。

ブレイザは羞恥に顔を赤らめていた。



「うわあー。薄い薄いとは思っちゃいたけど、こりゃ薄いんじゃないかって『無い』わよね」

遠慮なし。それどころか毒入りのセーラのコメント。ブレイザは反論せずに黙り込む。

「だ、大丈夫よ。ブレイザちゃん。まだ成長期だし」

薫子も余裕でCカップだ。フォローに努める。ブレイザは俯く。

「そうそう。ブレイザさん。剣士ですし、むしろその方が戦いやすいですよね」

だいぶ女の子よりのジャンスはフォローに回る。ブレイザの嗚咽が漏れる。

「うっ…うっっ」

明らかに悔し涙という声だ。三人とも黙り込む。

「慰めなんて要りませんわっ」

顔を上げたブレイザの目に涙。さすがにセーラも閥が悪くなる。

「どうせわたくしはつるぺたですわ。高校生にもなつてAカップでパットのいる胸ですわ。でもそのどこがいけないんですの？」

洒落にならない本気泣きだった。

「バカねえ。ブレイザちゃん。あなたそんなに綺麗なのにコンプレックス持っているの？」

薫子がそつと抱き締める。

冷静に考えるとブレイザは本来男だから割と危ない……いや。女同士裸で抱き合う方がもつと危ないか。

「綺麗？ わたくしがですか」

「ええ。とつても美人よ」

「お、お世辞ならいりませんわっ」

「あー。癪だけどそれは認めるわ」

「セーラさん……」

犬猿の仲のセーラの言葉である。逆に説得力があった。

「整い過ぎて冷たい印象を持ってただけだね。あんたも自分のコンプレックスで泣き出すなんて可愛いところあるんじゃない」

上から視線で言うセラ。ラ。

「か、からかわないでくださいっ」  
ブレイザは頬を染める。

「それに心配はいりませんよ。今日の合宿のためにブレイザさんに  
プレゼントを持ってきましたから」

何処かのほほんとしたジャンスの言い草。

「プレゼント？」

そこで客が入ってきた。四人は当たり障りの無い会話に切り替え  
た。

「わあー。まるでコーヒーですね。お姉様」

せつかくなので湯に浸かっていた。ただし都内の宿命かそんな  
は広くない。

「このお湯はずばり黒湯というみたいね」

説明文を読み上げる薫子。

「はあ。肩こりに効くみたいですね」

いつも以上に長い時間を女で過ごしたせい、大きな胸が肩こり  
を招いたジャンスがとろけそうに言う。

ブレイザはバストアップ体操に余念がない。

脱衣所。ここは能力は使わずホテルで用意してある浴衣を着てい  
た戦乙女たち。

「はい。ブレイザさんにプレゼント」

「わたくしに？」

確かに風呂場でしていた話。だから渡されるのはわかるのだが怪  
訝に思いつつも包みを開ける。

「こ、これはっ？」

ブラジャーだった。それも特異なデザイン。

「寝る時もつけててくださいね。寝ている間にバストを成長させる  
ブラですから」

「ああ。こんなものがあるんですか？」

基本的に女の姿になるのは戦闘中だけのブレイザは、こういうアイテムの存在を知らなかった。

「へー。よかつたじゃない。ブレイザ。これで小学生程度にはなるんじゃない」

セーラの素直じゃない祝福だった。

「セーラさんっ」

金切り声を上げるブレイザ。それをよそ目にジャンスはセーラにも包みを差し出す。

「はい。セーラさんにもありますよ」

「あたしに？」

包みを開けるとフリル満載のショーツだった。

「きゃーっ。可愛いーっ」

演技してないのは目の輝きで判った。

「えへへ。やっぱり好きでしたね。そういうの」

「うん。可愛いーっ。ねえ。これ穿いていいの？」

「どうぞ」

セーラはその可愛いピンクのショーツを脚に通すと嬉しそうに姿を見る。

「えへへ。お二人とも喜んでくれて嬉しいです。ね。女の子っていいでしょ。あたしの気持ち、わかってくれます？」

ブレイザとセーラは思わず顔を見合わせる。

確かに今のプレゼントを喜んで受け取ってしまった。強くは否定できない。

「そう…ね」

「確かに。今のわたくしたちは心身ともに女ですし」

認めると意外に抵抗が少なくなる。なんだか楽になった気がした。

食事を済ませ夜の布団に。

しかし少女たちがすんなり寝るはずもない。お菓子を食べながら

のおしゃべりになっていた。

これも親睦の一つと薫子は制止しない。

「ねえねえ。セーラさん。ブレイザさん。誰か好きな男の子います？」

二人にもう少し男の精神が残っていたら殴られていたかもしれない。

だが半日以上女の子として過ごしていた。ましてや互いに女としての裸体をさらしあっている。

かなり女子よりの精神状態になっていた。

それでも答えられる質問ではない。

ちなみにジャンスは憧れの話題だったらしい。こんな女の子トク。

「答えられるわけ無いでしょ」

突っぱねるセーラ。

「そうですね。そうでなくてもこの前は森本にときめいてしまった自分が危ないと思ったのに」

「え？ 森本君とはそういう仲なの？ ブレイザ」

失言だった。セーラにやりたい放題やられている。

「し、知りませんわ。大体ジャンスさん。あなたはどうなんですか？」

「あたし？ もちろん番長だよ」

あっけらかんと言いつつ。仮に元々から女としてもからつとすぎている。

（このまま続くと平気で男を好きになっちゃったりするのかしら？）

セーラはちよつと恐くなってきた。

「はいはい。そろそろ寝なさい。明日も特訓よ」

ここで薫子がストップをかけた。

「はい」

少女たちは素直に従った。本当に寝たのはその姿が男に戻ったこ

とでわかる。

「可愛いものね。さて。あたしも」

体裁は気にするがそれでもこの状態で襲われる心配をしないあたりけっこう薫子の度胸も良い。

翌朝。

寝ぼけつつ清良は廊下にある男子トイレに向かう。

便器に向かい、「だそう」とするが「窓」がない。

段々に意識がはつきりしてきた。自分が何を穿いているのか理解出来た。

尿意が怒気に取って代わられた。

「押川ーつつつつ」

「きゃーつつつつ」

怒鳴り込んだ清良だがジャンスが悲鳴を上げて裸の胸を両手で隠したので氣勢をそがれた。

「もう。『女の子』が着替えてんのよ。ノックくらいしてよねっ」

「わ、悪いっ…て、何でお前（寝て起きたのに）女なんだよ？」

変身が解けないことがあるのかと考えた。

「起きてすぐ変身しただけですよ。夢みたいです。こうして朝いきなり女の子としての支度をできるなんて」

「はいはい」  
すっかり毒気を抜かれた。

「……高岩か？」  
布団の中から声がする。まるで幽霊のような声がする。

「何してんだ？ 伊藤……」  
言いかけて気がついた。自分もよくこうなると。そして礼が風呂場でつけたものは……

「殺せ。殺してくれ。高岩」  
布団を跳ね除けて礼が掴みよる。そのまっぴらな胸にはブラジヤーが。

一方掴まれて浴衣がはだけた清良の腰にはひらひらフリルのショーツが。

「うっ！？」

「高岩。お前もやられたのか」

「ああ。この野郎にな」  
二人でジャンスを睨みつける。

「えー。二人とも喜んでもらってくれたのに」

いつの間にかちゃんとして着けて薄手のブラウスとミニスカト姿になったジャンスが抗議する。

「はいはい。二人とも起きたんなら変身しちゃって。そしたら寝るまではそれも抵抗ないでしょ」

薫子が割って入る。

年長者に入られて渋々と二人は変身する。その直後に目配せするジャンスと薫子。

「それっ」

薫子はセーラに。ジャンスはブレイザに襲い掛かり敏感な部分を中心にくすぐったり揉んだりする。

「ちよつと？ 一体何を……キャハハハ。そこやめて」

「するんですの？ だ、だめですっ。そこはっ」「  
ブレイザの抗議の言葉で二人は動きを止めた。

「うん。こうすると素早く女の子の気持ちになれるみたいだから。心と体が早くシンクロナすれば苦勞も少ないでしょ」

「もう。ジャンス。(知ったのは)プールの更衣室のときでしょ?」  
セーラが頬を可愛らしく膨らませる。

確かに素早く女の子になったようだ。

「確かに気持ちは切り替わったわ。ねえブレイザ」

「そうですね。セーラさん。ここは一つ『お礼』をしないといけませんわ」

「二人とも、目つきが恐いし手つきがやらしいですよ……」

三人の少女のじゃれあいが始まった。

「待つて下さいよおー。みなさん」

ロードワークを兼ねたスポーツ施設への移動中。

大きな胸が崇ってか息が上がってきたジャンス。遅れ気味になる。  
「マイペースで良いわよ。ジャンスちゃん」

遅い者にあわせるとレベルアップにはならない。だからこういう処置になる。

大きく引き離されたジャンス。普段要領よく立ち回っているのがここではダメだった。

(今だ!)

尾行者はその能力を使う。

あまりに離れたためやむを得ず立ち止まって待つセーラたち。

歩道なので邪魔にならないように車道よりに固まっている。  
やがてジャンスが現れた。

「遅い! それじゃ高速の相手には太刀打ちできないわよ」  
セーラが体育会系そのものの言い回しで注意する。

「ふふ」

ジャンスは不気味な笑みを漏らす。

「ちよつと。何がおかしいのよ」

人をバカにした態度に軽くキレたセーラ。真正面からジャンスと向き合う。

「えい」

ジャンスは微笑みながら両手でセーラを車道に突き飛ばした。

大型トラックが迫っていた。



## EPISODE 31「合宿」(後書き)

### 次回予告

「さて。悪ふざけが過ぎるんじゃないやありませんこと？ ジャンスさん

「ブ、ブレイザさんが二人？」

「参ったわね。攻撃されるまでわからないのよね」

「そもそもここにいるのは全員本物ですの？」

EPISODE 32「嫌疑」

## EPISODE 32 「嫌疑」

「セーラちゃんっ」

「セーラさんっ」

激しく狼狽する薫子とブレイザ。そんな中で「ジャンス」は「にいつ」といやな笑みを浮かべていた。

突然飛び出してきた少女にトラックの急ブレーキは間に合わない。「味方」相手に油断していたセーラは無防備でそこに突き飛ばされた。

そして跳ね飛ばされる。やっと止まったトラック。

「だ、大丈夫かっ」

運転手が慌てて飛び降りてくる。騒然となる現場。何台かの車は止まり、ドライバーが状況を確認に来る。

中には携帯電話で救急車を要請しているらしきものもいる。

誰もが即死と思ったが

「あたたたた。なにももう」

なんとジャージ姿の少女が平然と起き上がったのだ。仰天する野次馬たち。

その中には驚きつつも安堵する薫子の姿も。

「セーラちゃん。無事でよかった。でもなんで？」

「お忘れですか？ 一城さん。わたくしたちのこのウェアがエンジンエルフォームのそれということを」

そう。いつもと違うから錯覚するがデザインが違うだけでこれも「魔力の鎧」には違いないのだ。

攻撃力は低いものの顔とか手とかむき出しの部分も守られている。だからトラックに跳ね飛ばされても無事だったのだ。

「さて。悪ふざけが過ぎるんじゃないありませんこと？ ジャンスさん」

冷たい目つきのブレイザ。明らかに「敵」に対するものだ。  
「うふふ」

微笑でかわす「ジャンス」。いきなり走ってきた方向に逃げ出した。

「あつ。お待ちなさいっ」

ヴァルキリアフォームなら追いつけるが姿も変る。野次馬だらけの前で変身は出来ない。

人ごみにまぎれて逃げ切られた。

EPISODE 32 「嫌疑」

一方のセーラは必死に弁明を続けていた。

「大丈夫です。あたしちゃんと受身取りましたから」

「し、しかしもろに直撃だったぞ」

「あー。当る瞬間にフロントを蹴ったんです。自分から飛んでいるからダメージはないです。心配かけてごめんなさい」

トラックの運転手としては最悪で業務上過失致死。

「少女」の一方的な過失と認められ罪は逃れても、人一人轢いてしまったのでは罪の意識もある。

ところが当の少女自身が無事を主張している。

実際にかすり傷一つない。

困惑するがとにかく病院へ連れて行くこうとする運転手。

悪意どころか善意なので強くはでれないセーラ。ましてや突き飛ばされたといえど自分のほうに原因がある。

(こうなったら)

「ごめんなさい。ちょっと離れてくださいね」

周囲から人を離すと

「キャストオフ」

ジャージが吹っ飛ぶ。最低の威力にしたのであればらばらと散るだけで被害なし。

これに驚いた野次馬だがさらにセーラがレオタード姿になったことで思考回路が停止した。

そして飛んだことで「これは夢だ」と結論付けた。

もっと大きなインパクトで上書きしてしまったのだ。

「あれって……正義のヒロイン？」

そんなバカな。子供番組じゃあるまいし。トラック運転手は頭を振った。

パトカーと救急車は薫子が身分を明かして説明。救急車はウター

ン。  
パトカーは形式的に事情聴取。飛び出したのがセーラのほうだし、ブレーキをかけ病院に運ぼうとまでしていたのでトラック運転手は無罪放免であろう。

「ふう。何とかなつたわね」

運動ではない汗をかいた薫子。

「お姉さま」

半そでのスクールブラウスとプリーツスカート。いかにも夏季講習に行く女生徒というような格好に変装したセーラが戻ってきた。

「ああもう。逃げられましたわ」

ブレイザも戻ってきたそこに

「どうしたんですか？ 何の騒ぎですか？ 皆さん」

怪訝な表情のジャンスが現れた。

ジャージ姿の若い女性。ランニングでもしていた印象のそれが人気がない場所に入る。

ほんの一瞬だけ揺らぐと長島の姿になる。

「彼」はケータイを取り出すと通話を開始する。

傍目にはサラリーマンが連絡しているようにしか見えない。

「申し訳ありません。アヌ様。セーラ暗殺に失敗しました」

「かまわん。エボ。お前の任務はやつらに化けてやつらの間で疑惑を持たせること。成功すればよし。失敗しても互いに疑いあえばチームワークどころではない」

報告を受けたアヌは薫子の意図が不明でも、これで連帯意識が芽生えては面倒。

だから倒せないまでも結束させないように妨害を差し向けた。

それがこの擬態能力を持つエボだった。

「はっ。では続けます」

短く通話は終わった。

「さて。今度は」

一瞬だけカメレオンを印象させる異形の姿に。

そしてそこからブレイザの姿へと衣類もろとも変わる。

あまりに素早いためアマッドネスの波動を出すのはほんの一瞬。だから戦乙女たちも感知できない。

この擬態能力は指紋まで一致させることができる。

そしてこれはアマッドネスの姿でないためか戦乙女たちにも感知できない。

だからニセジャンスも気がつかれなかったのだ。

ブレイザの姿を盗んだカメレオンアマッドネスことエボは確認だけして元の姿に戻る。

そしてセーラたちのトレーニングしている施設へと出向いた。

「そんなのあたしじゃないですよ」

無実のジャンスは当然ながら抗議する。

「でもあなたに突き飛ばされたのよ」

『被害者』のセーラにしたら怒りはもっともだ。

「だから知りませんってば」

堂々巡りである。

「ねえ。それじゃジャンスちゃんはどこにいたのよ？」

薫子が言う「よくぞ聞いてくれました」という表情になる。

「途中のお店。ウエディングドレスが展示してあったんですよ。それ見てうっとりしてて」

思い出したのか恍惚の表情になる。

「あなた……嫁に行く気？」

怒りを忘れて突っ込むセーラ。まさか毎日変身して過ごすわけは？

「やっぱり憧れますよねー。女の子ですし」

笑顔で同意を求めるジャンス。どん引きのセーラとブレイザ。薫子は生粋の女性ゆえに花嫁衣裳に憧れる気持ちは理解出来たので引

かないものの

「うーん」

うなる薫子。これがセーラやブレイザだと考えにくいだが、ジャンスとなると否定しきれない。

しかしアリバイはない。

もやもやしたまま訓練に向かう。

前日と同じメニューだった。

対空に難のあるブレイザは薫子をパートナーにその特訓。

残りの二人でスパーリングだった。

「さあて。さっきのうらみもあるからね。ちょっと厳しく行くわよ」

「だから知りませんってば」

「本当かウソかは体に聞けばわかることよね」

取り様によってはかなり危ない台詞である。

(ふふふ。夢中になっているな)

激しくやりあうセーラとジャンス。その激しさにギャラリィが出るほどだ。

それにまぎれてブレイザへと姿を変えるカメレオンアマッドネス。なんとヴァルキリアソードまで出現。能力までコピーできる。

ブレイザの姿で油断させ、接近したところで斬りつける。

失敗しても亀裂は確定。だが

「お二人とも。ちょっと特訓に付き合っていただけです？ やはり

一城さん一人ではどうしても単調になって……」

言葉を失う二人のブレイザ。

ギャラリィは「双子か？」という程度だったがセーラとジャンスも仰天した。

「ブ、ブレイザさんが二人？」

「どういうこと。ニセモノ？ しかしアマッドネスの気配は？」

だから混乱した。アマッドネスの波動を捉えてなかったので『油

断していた』のだ。

動いたのは本物のブレイザのほうだった。アルテミスフォームほどではないが、素早く刀を抜き胴を薙ぎに掛かる。

ニセブレイザはとっさにニセのヴァルキリアソードで受け止めた。その際に胸元がかすかに揺れた。

「わかったわっ。お前がニセモノねっ。ブレイザにしては胸がありすぎるわっ」

真顔で指摘するセーラにブレイザ（本物）が斬りつける。

「貧乳貧乳といつまでもしっこいですわ。胸があるのがそんなにえらいんですのっ？」

「ふふふ。安心していいわよ。世の中にはナイチチ好きな男もいるから」

真剣白羽取りをしているのに憎まれ口を叩くセーラ。

「ああ。そんなことしている場合じゃないのにつ」

人がいなければジャンスも撃つたが事情を知らない人前で発砲は躊躇われた。

そのスキにニセブレイザは逃げた。

スポーツ施設の休憩室。薫子を含めた四人は話し合っていた。

「敵は擬態能力を持つみたいね」

冷静な分析をする薫子。

「あたしに化けたのもそいつですね」

いつもは飄々としているジャンスもさすがに憤慨している。

「参ったわね。攻撃されるまでわからないのよね」

実際にやられかけたセーラが頭を掻きながら言う。

「そもそもここにいるのは全員本物ですのっ？」

ブレイザの余計な一言である。互いに疑惑の目を向ける。

「とりあえずあんたは本物みたいね。ここまで胸がまっ平らな女なんてほかにはいないわ」

何度言われてもカチンと来る一言。ブレイザも青筋を立てながら



言い返す。

「……あなたも本物のようですね。延々同じことをしつこく繰り返すあたり。胸に栄養を全部持つていかれて軽くなったおつむだから同じことしか言えないんですわ」

「何よ？ やる気」

「望むところですよ」

一触即発のセーラとブレイザ。

「やめなさい。敵の思いつぽよ。暗殺というより仲たがいが目的かもしれないわ」

(いつもどおりの気がしますけど……)

薫子の制止をぶち壊さないように心中で思っただけにするジャンス。  
「とりあえず」

薫子は身だしなみ程度の抑えたメイクをしていたが、少し濃い目にしなおした。

これを知らないで薫子に化けたらメイクの差で偽者が判明するということわけである。

「あの……あたしもいいですか？」

おずおずと切り出すジャンス。

「一応は高校生なのよね。ちょっと早いけど今回は非常事態ということ」

「わあっ。ありがとうございます」

「じゃ口紅だけでもね」

大人しくなったジャンスの唇を自分のルージュで彩る薫子。

「お姉さまは詩聖堂のルージュなんですわ。あたしはカゼボウのなんですよ」

自分のポーチからメイク道具一式を出すセーラ。

「あなた、家をでる時はまだ男の精神が残っていたでしょう？ どうしてそんなものを持って来ようと思ったんですの？」

「駅まで歩いているうちにどうしても持ってきたくなってひきかえしたわ」

「……そうまでして自分の化粧道具を持つてくるとは」  
呆れるブレイザである。

「そういわないであなたもやってみなさいよ。女の嗜みよ」

「そ、そうですか？」

実は少々興味がわいていた。

そのころ、留守番である使い魔たち。そして友紀。森本。岡元は  
「自主トレ」中だった。

不在の時にアマッドネスが出現したらまずいのでまだ数多く残る  
と推測される福真市で留守番だった。

何かがあれば念で伝える。

福真市にある倒産したビルの解体現場。

その敷地に広いスペースがある。そこでこちらも訓練中だった。  
爆走するサイドカー。本格的なレーシングスーツの少年が乗っ  
ている。

「森本君。もっと体勢を傾けて」

「こっつ？」

森本はドーベル・サイドカーモードを駆り走り回っていた。  
ブレイザがカーゴ部分に乗っての攻撃をサポートするのを想定し  
てだ。

夏にもかかわらずジャージの上下で肌の露出を防いでいる友紀。  
しかも肘や膝にサポーターをつけている。手袋までしている。

「キャロル。お願い」

「いきますよ。友紀様」

キャロルは鎧のパーツへと変化した。そして友紀の頭部。胸部。  
腰部。脚部を覆う。

翼を展開させて舞い上がる。

セーラのサポートをするためにその持続時間を延ばす目的であっ

た。

そして元々強い岡元は…

「俺の強さにお前が泣いた…：違うな。この場合ポーズはこうか？」  
見栄えのいいポーシングを研究していた。

岡元に言わせるとまず心理戦で優位に立つべく、相手を圧倒する  
目的で名乗りをあげるのだそうである。

闘いは出会った瞬間に始まっているという持論なのだ。

「それじゃジャンスの好みとはあわねえな」

ウォーレンがそれを見て評価していた。

偽者対策で4人まとまることにした一同。だが生理現象はガマン  
できない。

「ちよつとごめんね」

トイレにたつ。そしてその際の危険性を失念していた一同。

(くくく。メイクを変えたところで無駄だ。それもまねることは出  
来るぞ)

エボは薫子と同じ姿に転じるとすぐさま三人のところに行く。

疑っていたとしても薫子の姿で現れればいきなり攻撃はされない  
と読んでいた。だが

「このニセモノ!!」

いきなりセーラがニセ薫子を殴り飛ばした。

「ちょ…何するのよ？ セーラ」

一応とぼけて見る。内心は自信のあった変身が見抜かれて愕然と  
していた。

「お姉さまはあたしのことをセーラちゃんって呼ぶわ」

「いきなり殴られてそんな友好的に出来ると思う？」

言い訳にはなる。

「あなたの口紅。その色だとカゼボウのものね。でもお姉さまは詩  
聖堂のを使っているのよっ」

「……つて、普通そんな違いはわかりませんわ」

自分もその詩聖堂の口紅をさしたブレイザが呆れて言う。

「伊達にメイクとファッションの研究はしてないわよっ」

「さすが。ぶりっ子の第一人者」

今回は胸のことを散々にいじられているせいかいちいち突っ掛かるブレイザ。

「ちよつと。こんなときに喧嘩売る気？」

あまり「ぶりっ子」はありがたくない印象のセーラ。これまでのことも伏線となつてまた火花が散る。

「あああつ。だからそれで逃げられますっつてば」

同じことの繰り返しだった。

水中トレーニングとなつた。一応は更衣室に行く4人。

出てきたのは薰子。ブレイザ。ジャンスだけだった。

(畏か？ だがそのタイムラグが命取りよ)

セーラに化けるエボ。シンプルな競泳用水着で合流する。

「ごつめーん。遅くなつちやつたあ」

女の子走りのセーラがかけてくる。

それにいきなり斬りつけるブレイザ。ばれているケースを想定して逃げることを頭に置いていたので間髪逃れたカメレオンアマツドネス。

「いきなり何するのよ？」

(何でこいつらはこつも躊躇いなく攻撃して来るんだ。ちつたあ迷え)

心中で毒づくエボ。

「ふん。研究不足ですわ。あのぶりっ子女が水着と聞いてそんな地味なデザインにするものですか。最低でもフリルやリボンをつけないと」

「くっ」

そこに本物のセーラがやってきた。ピンクのビキニ。盛大にフリルトリボンをつけて。

あんぐりと口をあけるニセセーラ。

「あれでもまだおとなしいほうですわ」

呆然としているうちに本物の接近を許してしまった。

「あつ。そいつは!？」

いうや否やキャストオフ。体操着姿のヴァルキリアフォームに。だがニセセーラはにやっと笑う。

「キャスト オフ」

なんとこっちもヴァルキリアフォームと転じた。そこまでコピーされたのだ。

「このまねっ子が」

「ニセモノの分際で」

激しい拳の応酬。もはや人目など関係ない。派手にやり合っていた。

「ああつ。どっちが本物かわからないっ」

「こうなったら本物に勝つてもらっしかありませんわ」

不意に片方がプールに飛び込んだ。逃げるなら走った方が速い。

プールを使っていた他の人間の元に向かっている。人質に取るつもりを感じた。

「させるもんですか。超変身」

セーラは飛び込むとマーメイドフォームに転じた。しかしニセモノがにやりと笑う。

「ありがとう。これで全部のフォームを見せてもらっただわ」

「えっ?」

ニセモノは水から飛び上がるとフェアリーフォームに転じた。

「そうか。あのトラックの事故のときにセーラちゃん飛んでいるわ」

それを見られていたのだ。

そしてニセのフェアリーは上半身を浮かせたマーメイドを空中から攻撃する。

飛べないマーメイドでは攻撃を避けるだけだ。

「それなら」

本物も俊敏体へと変化する。ところがニセモノが今度は剛力体へと転換。プールに飛び込む。

「それっ」

水をかける。それもマーメイドの豪腕でのそれである。かなりの水圧になる。

「きゃあっ」

叩き落される妖精。水中をテリトリーとする相手に苦戦は必至。だが時間が長すぎた。

他の利用者がみんな逃げてしまった。

それで戦乙女たちの制約がなくなった。

いくらダメージが殴られた程度といえど当たり所が悪ければ致命傷もありえる。

それを嫌って撃たなかったジャンスだがもうそれも考えなくていい。

「キャストオフ」

わずかな瞬間だけジャンバースカート姿になるがそれをふっ飛ばしてメイド姿に。そして

「超変身」

黒いゴスロリ姿でガトリングを乱射するロリータフォームへと姿を変える。

後は二人を狙うだけ。本物のセーラにはダメージはないも同然だ

が、アマッドネスには大ダメージ。

トリガーを引くと嵐のように銃弾が。

「ぐぎゃああつ」

弾丸をくらいカメレオンの異形としての姿を晒す。

「どうやら化けていられなくなつたみたいね」

セーラはマーメイドフォームになるとカメレオンアマッドネスをリフトアップ。

それをプールサイドにたたき出した。

本人は飛び出してフェアリーフォームで高度を取り、とび蹴りを見舞う。

充分なスピードが乗ったところでヴァルキリアフォームに。

「ヴァルキリイイイイツ、キイイイイツクウウウツ」

銃弾を食らった状態ではよけることもかなわず。

あっさりとキツクの前に散華した大根役者であった。

「恐ろしい敵だつたわ」

一同に合流したセーラが正直な感想を告げた。

「でも片付きましたわ。終わったのでいいですが……セーラさん。

あなた人の胸のことをどれだけけなせば気が済むんですの？」

「あなたこそさつきいきなり斬りつけていたでしょう？ あれは本

物のあたしでも躊躇つてなかったわね？」

「まあまあふたりとも」

「そもそもあなたが腹黒だから付け入る隙が」

「ひ、ひどい。それにセーラさん。人を散々非難したけどニセモノのやったこととわかってても謝ってくれないんですか？」

三人娘のケンカは続く。

はては決裂して二泊の予定を切り上げて帰ってしまうほどであつ

た。

カメレオンアマッドネスは倒されはしたものの「戦乙女の協調性を失くす」という任務は完遂したことになる。



## EPISODE 32 「嫌疑」 (後書き)

### 次回予告

「堅苦しい挨拶はやめましょ。ノリ」

「偏見じゃなくて事実よ。警察官なんてしていると人の嫌なところがたくさん見えてくるわ。特に男のバカさ加減は反吐が出るわ」

「そうだ。男なんてくだらない存在は、全て女に作り変える。それがこのイノのなすべきこと」

「へっ。こついつ展開なら専門なんだな。無能じゃないところを見せてやるぜ」

## EPISODE 33 「傲慢」

EPISODE 33 「傲慢」 (前書き)

スペシャルサンクス

アマツドネス原案・東方不在さん

### EPISODE 33 「傲慢」

セーラ。ブレイザ。ジャンスのチームワークを強化する目的の合宿はカメレオンアマッドネスの乱入で失敗。

冷却期間を置くことにした。  
しかしどうしても自分ひとりのバックアップも現状では限界がある。

そう思った薫子はセーラを福真署の特捜班にだけでも紹介して協力を取り付けたかった。

だがいきなり清良を連れて行き紹介しても上手く行きそうにない。そこで先に一人紹介して味方になってもらおうと考えた。

清良はそれで呼ばれていた。

夏休みの後半。残り日数もないところで呼ばれて不機嫌であった。しかも場所は福真署の応接室。

応接室といっても一階のフロントの一部を間仕切りしただけでテーブルとソファがあるだけだ。

「いくら不良でもオレは要らないぜ」

応接のテーブルの上のガラスの灰皿を軽口混じりに避ける清良。降りかかる火の粉を払うケンカしていないつもりだが、やはり不良のレッテルをはられている身としては警察署内は落ち着かなかつた。

「お待たせしました。一条薫子巡査長」

ややかすれた印象ある声でした。

もともとの性質というより怒鳴りまくったあげくに喉を潰したかのような声だ。

穏やかでありつつ威圧的な口調がその思いを強める。

制服姿の女性。場所のこともあり女性警察官と見るのが自然だろ

う。

髪の毛を全て後ろへと流して「オールバック」にしている。  
顔立ち自体もきつい印象の女性だ。

よく言えば切れ長の目。悪く言つと鋭く射抜くような視線。女性  
には余りありがたい形容ではない。

鼻もやたらに高く「威圧的」。鷲鼻というより動物の角のようだ。

(なんとなくだが…嫌いなタイプだな)

直感。それ以外の理由は清良にはなかった。  
顔ではなく波長が合わないという奴だ。

「堅苦しい挨拶はやめましょ。ノリ」

もともとフランクな口調の薫子だが年下である清良に対するものよりはるかに砕けている。

見た目で判断した限り同世代と思われる同性ならではか。

「今は職務中です。はじめをつけるべきでしょう」

固い印象は崩れない。

「しょうがないわね」

苦笑する薫子。進行するため彼女が紹介をすることにした。

「ノリ。こちらは高岩清良くん。セー…高岩君。こちらは渡来のり子警部補」

紹介が済んでここで握手でも交わせば潤滑に進むものだが、互いに手を出そうとしない。

「ちよつとノリ。ここは年上のお姉さんらしいところを見せるつもりでしょ？」

「汚い男の手なんて手袋越しでも触りたくないわ」

これに力チンとこないはずがない。

「オレだって警察と仲良くする気はねえよ」

「あたしも警察官なのよ？」

薫子が突っ込む。

「例外つて奴だよ。それにむしろいいように利用されている気がするぜ」

「冷たいなあ。セーラちゃんときは『お姉さま』と可愛く慕ってくれるのに。私も妹みたいのに思っているのになあ」

芝居半分。残りは本気で嘆いてみせる。

清良にはそのときの記憶がある。それだけに顔から火が出る思いだ。

「……やめてくれ。いつつも後で死ぬほど恥ずかしいんだしよ」

本気で赤くなっている。

「二人だけで何を話しているのよ。恋人同士の語らいなら何処か他所でやってくれる？」

からかうというより馬鹿にしたような言い草。さらに続ける。

「これだから男って。しょせん下半身でしか女を愛せないのよ」

「……あんた、ずいぶんと男に偏見あるんだな」

「偏見じゃなくて事実よ。警察官なんてしていると人の嫌なところがたくさん見えてくるわ。特に男のバカさ加減は反吐が出るわ」

こんなことを聞いているとこの女性警察官がしている化粧も、身だしなみや異性を魅了するというより「武装」に思えてきた清良。赤い口紅も「威圧的」に見える。

「それで。一城さん。この男が何の相談？ 暴走族か暴力団を抜きたいの？」

ジョークではなく本気でそう思っているらしい渡来。

「もうちよっとお互いのことを知った方がよさそうね」  
なにしろ協力者に引き込まうというのである。

（大丈夫かな。セーラ様。警察なんかで。揉め事を起こさなきゃいけない）

キャロルが福真署を見上げて心配していた。

黒猫の姿ゆえ街中においても誰も気にしなかった。

それでもよく見ると猫なのに誰かを案じるように見えて不思議な図でもある。

多数の異形を葬った地に出来た街の一つ。福真市。

墓場を抜け出てきた邪悪なる魂がさまよっていた。

導かれるように福真署のほうへと進路を取る。

清良が知った薫子とのり子の関係。

アマッドネス対策班で警視庁からやってきた薫子は、ここで同期であるのり子の存在を知る。

エリート同士ではあるが性格は正反対。それが磁石のSとNのようにはきつけあったのか意気投合した。

プライベートで食事や買い物にでることもあった。

仕事を忘れた付き合いのときは薫子が「カオル」でのり子が「ノリ」と呼ばれていた。

それだけ仲がよくなったこともあり、最初に味方に引き入れようとしたのである。

のり子の方もまずは戦乙女存在を知らされた。

これは噂で知っていた。都市伝説というものと片付けていたが、状況証拠から察するにその方が辻褃が合う。

しかしそれと薫子を通じているとは夢にも思わなかった。

そもそも戦乙女存在自体を半信半疑なのだ。

「そこまではわかったわ。それで。彼は何なの？ 戦乙女の関係者？」

「えーとね…ちょっといいにくいんだけど」

珍しく言いよどむ薫子。上目遣いになっている。

清良の方はあんまり人にばらしたくない思いはある。

なにしろセーラー服。女子体操着。レオタード。スクール水着などに姿を変えて戦っているなんて。

もともと清良も力比べとしてのけんかはともかく一方的な暴力を好む存在ではない。

例え男の姿でも守るための闘いでも誇る気にはなれなかった。

(見つけた。ヨリシロ)

邪悪なる魂はオールバックの女性警官の真上に留まり機会を待つ。

「へ、変身するですって？ その男が？」

知らされて驚愕する。清良の方は赤くなっている。

「まあ信じられないのは無理もないけど、高岩君があたしに協力して戦ってくれているのは本当よ」

「そんなバカな!? 男なんて無能でバカでそのくせプライドだけ高く、頭の中は女を押し倒すことしかないような連中よ」

(偏見もここまで来るとある意味すごいぜ)

本気で感心していた清良である。その「余裕」がさらにのり子をエキサイトさせる。

「私は認めないわ。少なくともこんな不良にそんなことできるもんですか」

ヒステリックな声が響き、事務処理をしていた警官たちが目を向けてしまう。

怒りよりかえって醒めてしまう清良。

「はあ。薫子さん。オレ帰るわ。この調子じゃまだ伊藤の方がマシなくらいだ」

本気で立ち上がり立ち去りかける清良。それに鋭い制止が掛かる。

「逃げるの!？」

既に荒々しい感情で冷静な判断が出来なくなっている。破綻しているがお構い無しだ。

「へいへい。バカで無能な男は有能なエリート様にはかなわないので逃げるとしますよ」

相手にしてられないという思いが言わせた皮肉。それがとどめだった。

「ふざけ……ぐあっ」

突然白目を剥いて止まる。そしてがっくりと頭を下げる。

興奮しすぎてプツンしてしまったかと二人とも思ったが少し足りない。

そう。男を見下す思いがアマッドネスの基本思想にあり、そこでシンクロして取り付かれた。

「ノリ?」

心配して覗き込む薫子。だがのり子は俯いたままだった。

「う? この感触は?」



いつもの感触が「目の前」から。

(まさか!?)

そのまさかだった。

のり子の鼻がツノに変化する。顔も仮面のように。

まるで甲冑を着たかのように姿が変わる。それはまるでサイを人間のようにしたかに見えた。

「そうだ。男なんてくだらない存在は、全て女に作り変える。それがこのイノのなすべきこと」

完全にアマツドネスへと変貌した。その姿を見せた途端にパニツクに陥る福真署。

そしてこの場には警察官だけでなく被害届けや反則金を納めに来た一般人もいる。

銃を抜くことは出来ない。

「死ね」

サイの意匠のライノセラスアマツドネスは目の前の男……清良に向かつて突進する。

だがさすがに戦いなれている清良。簡単にかわす。

まだ復活したばかりで制御しきれないライノセラスはそのまま壁に突っ込んでめり込む。

それを一般人の避難に当たっていない警察官が取り押さえに掛かる。

「警察の中からアマツドネスかよ？」

「信じられない。ノリがアマツドネスになるなんて!？」

愕然とする薫子。かつて友紀と戦った清良としては痛いほどよくわかる感情。だから話しを替えに掛かった。

「なるほどね。何も極端に負の感情がなくてもシンクロさえすれば取り付けるのか。そんなことよりあいつをどうするか？」

仮にも薫子の親友と思しき人物。それを倒すのは……

自分もファルコンアマツドネスと化した友紀に手を出せなかった。

薫子の心情は理解できる。

逡巡しているとライノセラスがその剛力で男子警察官を吹っ飛ばした。

「無駄だあーっ。貴様ら無能な男がいくら束になっても私に勝てないのだ」

いふなりそのツノで眼前の男子警察官の腹を貫こうとしていた。とつさに転がっていたガラスの灰皿をライノセラス目掛けて投げつけた。

それが顔面に命中して気をひいて男子警察官の脱出を成功させた。それには大して気を向けずサイの化物はくぐもった声で言う。

「きさま…逃げるんじゃないのか？」

「へっ。こういう展開なら専門なんぞな。無能じゃないところを見せてやるぜ」

清良は右手を天に、左手を地に向けた。それをゆつくりと水平に運び、脇にひきつけて思い切り前方に突き出して交錯させる。

「変身！」

眩い光が発生し、それが収まるとセーラー服姿の少女戦士が。

「戦乙女えっ。セーラッ！」

名乗りをあげる。

「キサマがセーラだったのか？」

「だからそういつてたたる」

セーラが突撃したのと薫子が建物の中に引っ込んだのは同時だった。

（やはりシヨックだったか。ああいいぜ。見ないでいてくれ。その間に倒すから）

心中は痛いほど理解できていた。ましてや相手は怪人になったば

かりで馴染みきつてない。

だから短期決戦を挑む。

突っ込んだセーラはいきなりスライディングを見舞った。

何も相手のパワー勝負に付き合う必要はない。

ましてや見るからに装甲が厚い。生半可な打撃では無理と判断してだ。

ところが足を掬うつもりがびくともしない。

「なにい!？」

「ふん。やはり男は無能だな」

そのまま踏みつける。

「今は女だっつーの」

精一杯の憎まれ口だ。本当は体がバラバラになりそうだった。

「ミンチにしてやる」

僅かに足を浮かせてそのままセーラを蹴り飛ばす。

地面に寝転がったのが浮き上がる強烈な蹴り。

壁に叩きつけられる。エンジェルフォームの防御力だから耐えられた。

(まずい。結構やつちまったかも)

鉄壁の防御力を誇るはずのエンジェルフォームで受けたダメージに驚愕していた。

(セーラ様。アマッドネスと戦っている最中ですか?)

従者が異変を感じて念を送ってきた。

(キャロル。そうだ。すぐにきてちょうだい)

ちょうど切り替わるあたりだったか口調が男のものから女のものへと。

(判りました。ここは一度体勢を立て直しましょう)

合流地点を定めた。

「くたばれ」

壁のセーラに向かって突進するライノセラス。それにタイミング

を合わせてキャストオフ。

爆ぜたセーラ服に怯む隙に超変身。フェアリーフォームに。そして挑発すべくライノセラスの頭上をひらひらと飛ぶ。

さらには二本の伸縮警棒を変化させた二本のクラブで頭を叩く。これで完全に頭にきた。

まんまと乗せられたアマッドネス。相当頭に血が上っている。駐車場へとおびき出された。

セーラを追ってきたライノセラスが見たのはヴァルキリアフォームで待ち構えるセーラであった。

「キャロル。ぶつつけ本番だけどいける？」

足元の従者に問いかける。

「そちらは問題ありません。しかしセーラ様のお心が」

「それこそぶつつけ本番よ」

だいぶ時間が経ち精神が女性よりにシフトしている。

それが言葉遣いに現れているがキャロルは何かを気にしている。

「何を企んでいるか知らないが、ぶち破ってくれるわ」

とてもベースが女とは思えない荒々しい戦いぶりである。

あくまでも突進あるのみ。小細工すらまとめて打ち砕くというものだ。

セーラは動かない。そして「キャロル。今よ」と叫ぶ。

キャロルが四つのパーツに変化。プールサイドで友紀が着けた鎧の姿だ。

そしてそれを本来の装着者であるセーラがまとう。

「やった。言うなれば鎧をまとうて生まれきた女神のそれ。名づけてアテナフォーム」

高揚するキャロル。戦意もシンクロしている。だが寸前で鎧が外れる。

咄嗟に後方に飛んだがツノをまともに食らったセーラは叩きつけられる。

(くっ。まだこれじゃキャロルとのシンクロが足りなかったのね) もともとかつてのセーラが用いていた「ヨロイ」だが、そのときはセーラは完全に女性。

女性同士ならではのシンクロだった。

現代のセーラは基本が少年のため、それが邪魔をしてこのフォームになれない。

キャロルも友紀の協力を得てなんとかその形態を維持する訓練をしていたが、まだセーラの中の女心が足りなかったらしい。

「ぐふふふっ。もう何も出来まい」

勝ち誇るライノセラス。絶望するセーラ。キャロルは意識を失っている。

「まとめてあの世に送ってやる」

「させないわ。ノリ」

静かに声がしたと思ったら爆音。そして背中に衝撃を感じたライノセラス。

「キ…サ…マ『カオル』」

のり子の意識が僅かに勝る。それが信じられないという表情をさせている。

薫子は逃げたのではない。ショットガンをとりに行ったのだ。

躊躇いなく「親友」を撃った。

「お前、たいした奴だな。親友に銃口を向けるとは」

「やれるわ。例え殺すことになっても、ノリの魂をこれ以上闇に落とすたくない」

このまま止めないでいたら凶行を繰り返し、やがてのり子の魂は心から魔物になってしまっただろう。

それを止める友情であった。

そしてそれはセーラ…清良には出来ないことであった。

(そうよ…倒れてなんていられない。この手をいくら汚しても誰か

を守るのならそれでいいじゃない)

事ここに至って覚悟が決まった。

「セーラ様？」

ふらつきながらキャロルがよってくる。

「キャロル。そのアテナフォームはまだ無理みたい。だから別の手で行くわよ」

にらみ合いを続ける薫子とライノセラス。背後で動くセーラが気になって仕方ない。

「待たせたわね」

セーラはマーメイドフォームでキャロル・バイクモードにまたがっていた。

その手にはマーメイドランスが。

「ふん。馬鹿め。カ比べで私に勝てると思うか」

「やって見なくちゃ判らないわ」

両者同時に突進する。寸前で横にそれてライノセラスの胸を尻ぐ。カウンター気味になったため裂けた。もちろんセーラのパワーもある。さらにキャロルのスピードが加わる。

「効かぬわ」

こちらも半ば意地で踏ん張る。

「一本ならね」

その傷が再生する前にもう一本を変化させたランスを今度は深くと刺す。

「ぐわあああつ」

これはさすがにたまらない。動きが止まる。

それをリフトアップする人魚姫。猛烈な回転をして空中にライノセラスを放り出す。

「トルネイドボンバー」

散々に回転させられて三半規管が狂ったライノセラスはまともに地面にきりもみ状態で激突する。

それでも持ち前のタフさで立ち上がるがそこまでであった。駐車場で爆裂して果てた。

解放されたのり子は即座に警察病院へと搬送された。

セーラは変身を解かなかった。既に福真署の人間に一部始終を見られていたので今更だった。

後にこの件がきっかけで協力体制が整うことになる。

「それにしても油断してました。お姉様」

すっかり少女の人格になったため、いつもどおり可愛い妹分となつたセーラ。

「友紀の例があるのに女だからアマッドネスにならないと思ひ込んでいました」

「それは私もよ。警官がなるとは思ってたわ」

薫子は三田村や軽部の正体を知らない。

「でも取り付くのものにも色々パターンがあるんですね」

キャロルも普通の猫の振りはやめて会話に加わる。これまたばれていたからだ。

「そうね。でももし、正義のために私の体を使いたいアマッドネスがいるなら貸してあげてもいいなと思うな」

「本気ですか？」と尋ねかけてセーラはやめた。

薫子の瞳は強く輝き、本気であることを示していた。

### EPISODE 33 「傲慢」 (後書き)

#### 次回予告

(殺気? しかしアマッドネスのそれとは少し違う)

「だが死に方がよくない。俺は綺麗なベッドでご臨終より、最後の瞬間まで戦い抜いて結果として切り捨てられてどぶの中に沈む方がいい」

「ならば応じましょう。貴女との果し合いに」

#### EPISODE 34 「剣客」



## EPISODE 34 「剣客」

夏休みも終盤の王真市。

そのとある私立高校に王真高校は乗り込んで剣道の試合を行っていた。

名目上は剣道部員でもある伊藤礼は同行。

五人の代表が先鋒。次峰。中堅。副将。大将という順で戦う点取り形式で試合を行っていた。

試合は惨敗である。先鋒から副将まで全員が一本取られて負けていた。

ホームグラウンドでもあるだけに湧き上がる試合会場。

だが大将である礼の試合で沈黙が訪れる。

礼は開始早々に敵の大将の胴を薙いで勝利した。僅か三秒。

ホームグラウンドだけに知っていた。その大将がどれほどの実力者か。

それを秒殺。瞬殺と言い換えてもいい。

まさに赤子の手をひねるように葬った実力に言葉が出ない。

どちらが勝利した陣営かわからなくなった。

(ふう)

勝利した礼も無然としている。チームそのものは敗北だ。

そして試合そのものにも何の気概を抱かなかった。

どこから襲ってくるかわからない化け物相手に戦っているのだ。

道場での試合がぬるく感じるのを傲慢と呼ぶのは酷であろう。

(!?)

まさにその『化物』の感覚を察知した。正確に言おう。その発する強烈な殺気を察知した。

悟られないように無表情のまま礼はそれとなく周辺を見渡す。

相手はすぐに見つかった。大胆にもギャラリイの中に紛れ込んでいた。勝手に入り込んでいたのは想像に難くない。

人の姿をしてもわかる。殺気を隠そうともしていない。少なくともまともな人物ではない。

#### EPISODE 34 「剣客」

その男はひどく痩せていた。

頬はこけ、顔色も優れない。

だが眼光だけは射抜くがごとく鋭さだ。

（殺気？　しかしアマッドネスのそれとは少し違う）

礼も険しい表情を隠そうとしない。

「男」が『こつちにこい』といわんばかりの態度で顎をしゃくる。

「伊藤さん？」

剣道部副部長が怪訝な表情をして礼に呼びかける。それで我に帰る。

「すぐに戻る。先に行つて欲しい」

清良に対するのとはまるで違う友好的な態度で言つと礼は「男」の元へと急いだ。

「よくきたな」

何処かのんびりとした口調で「男」は言う。

対戦相手の高校の裏手にある林。そこに駆けつけた礼は睨みつけるだけだ。

「用件はなんだ？ もっともアマッドネスの用件など一つしかないがな」

敵意を叩きつけながらも礼は辺りを探る。

（ドーベル。敵は何人だ？）

頭の中で黒犬の姿の従者に問いかける。

（ブレイザ様。それが感知できなくて）

珍しく戸惑うような口調で帰つてきた。

「伏勢ならいないよ。ま、信じるかどうかは勝手だが」

思考を見透かされたようでカチンときた。礼は若干トゲのある口調で再度尋ねる。

「もう一度聞く。用件はなんだ？」

今度は本気でわからない。

「果し合ひさ」

「男」は短く言う。これ以上なくわかりやすい用件で、そして胡散臭く感じ取れた。

素が表情に出ていたらしい。「男」が苦笑する。

「どうしても気になるようだな。それならお前が場所を選べ。言っ

ておくが逃げたら無差別に殺す」

「男」は異形へと転じる。

セーラと戦ったファルコン。自身が戦ったイーグルとは違うフォルムの猛禽類のアマッドネス。

「フクロウは夜目が利くが、昼間に何も見えないわけじゃないぞ」  
言うなり高く舞い上がる。

「ブレイザさま」

入れ替わるようにドーベルが到着した。礼はドーベルには目をく  
れず携帯電話を取り出す。

そして王真高校剣道部に同行している森本に電話して所用で離れ  
ると連絡した。

「彼は連れて行かないのですか？」

「果し合いなら一対一だ。お前も手を出すな」

あくまで決闘場所まで運ぶ目的で呼んだ。

その決闘場所は広大な空き地だった。

ビルを取り壊したものの次に建てるはずのビルのオーナーが破産。  
頓挫したまま保留されている。

管理地だけに周辺は工事用の幕で覆われている。人目につかない。  
それでいて遮蔽物がない。

「人が来ないように見ている」

「はっ」

使い魔に命じ隙間から中に入る礼。そして遅れて高空からオウル  
アマッドネスが降りてきた。

人の姿に戻ると上着の背中から木刀を取り出す。左手に持つ姿は  
帯刀する侍のようだ。

「なるほど。いい場所だ。ここなら邪魔はいらんだろう。お前に  
して見れば俺が人質を取ったりする心配もない」

言うなり彼は手にしていた木刀の柄に手をかける。

礼も剣道の試合だけに持ってきていた竹刀。それと一緒に入れて

いた木刀を抜く。

「我が名は伊福部士郎。剣に生き、剣に死す男にして女」

果し合いの儀礼として名乗りをあげる。抜き討ちの体制だ。

「我が名は伊藤礼。または剣の戦乙女。ブレイザ」

木刀を中段に構える。

「いざ」「参る」

宣言と同時に両者共に間合いを詰める。剣の届く範囲で礼が突いて出た。

それを上に払いのける士郎。

しかしそれは計算のうち。上に払いのけられた勢いで上段に構えそのまま振り下ろす。

士郎も振り上げた後で隙を作るようなことはない。振り下ろされる木刀をかちあげた自分の木刀で受けとめる。否。受け流す。まともには受け止めず滑らせる。

そのまま体勢を崩される礼。今度は士郎が上から振り下ろす。しかし礼はそのまま下に体勢を崩すと足で士郎の足を払いにかか

る。

「おっと」

倒されぬように後方に飛びのく士郎。

礼の方もそれが有効な攻撃になるとは思っていない。

互いに間を取り直し体勢を立て直す。

「さすがだな。実戦の剣技。道場剣法ではないな」

「剣道の試合」なら「ルール違反」だがこれは「実戦」だ。

極端な話し飛び道具を相手にすることも頭にいれる必要がある。

「御託はいい。時間がないのだから」

「ほう。見抜いたか」

「ああ。剣は言葉以上に多くを語る」

「このやり取りで感じていた。」

「あんた、長くはないな？」

「さすがに幾人ものアマツドネスをあの世に送り返したただけのこと  
はあるな」

生と死の境目を見た。だからこそ死の近いものがなんとなくだが  
わかる。

剣を交えれば一層はつきりとする。そういうことであつた。

「癒さ。もうあちこちに転移していてじきに体も動かなくなる」

だからやけくそでアマツドネスの誘いに乗つたのか。礼はそう思  
つた。

「死ぬのはいい。人はいずれ死ぬ。遅いか早いか。それだけだ」

まるで他人事のように淡々と語る土郎。

「だが死に方がよくない。俺は綺麗なベッドでご臨終より、最後の  
一瞬まで戦い抜いて結果として切り捨てられてどぶの中に沈む方が  
いい」

「……」

覚悟をして戦っているつもりで礼であつたがそれでもここまでの  
思考には至らない。

迫りに飲まれたといつてもいい。

「そんな時に俺……あたしは出会つたのさ」

不意に異形の姿へと転じる。木刀も異形に相応しい剣へと変化す  
る。

「くっ」

礼には珍しく「慌てて」しまう。

「まだ話の途中だ。だが気になるならお前も変身していいぞ」

礼は木刀を捨てると右手を肩の高さで真つ直ぐ前に突き出した。  
左手はへその位置。

光の渦が出現して小太刀が飛び出してくる。

左手に持った小太刀を腰の位置に。同時に右手を柄にかける。あ  
とは抜刀するだけだが動きが止まる。

「早く変身したらどうだ。不意打ちなんてしないよ」

「……何が狙いだ？」

闘いに身をおく彼にしてみれば当然の考え。そして相手がこの問いに答えるはずがないのもわかっていた。

それでいてたまらず尋ねてしまった。それほどこの「アマッドネス」の行動はわかりにくかった。

「あたしはね、ミュスアシを襲撃する前に將軍に斬られたのさ」

「將軍？ 斬られた？」

仲間割れは理解できる。それより気になった単語が出てきた。將軍？

「ああ。ガラ將軍。アマッドネスのナンバー2。その下に六武衆という飼犬たちがいる」

「六武衆の上にまだ幹部が」

驚いたというよりうんざりしたという方が近い。

「あたしの望みは強いやつとの戦い。合戦じゃなくて果し合いがしたかった。だからミュスアシで名に聞こえし剣士。ブレイザとの果し合いを申しいれようとしたら『不意打ちにならないから』と止められたあげく斬られた」

恐らくその『ガラ將軍』としては情報漏えいを嫌ったのだろう。

礼はそう思った。

「無念だったね。戦う前に死ぬなんて。この士郎も同じさ。だからあたしたちは一つになった」

「貴様らアマッドネスは人間の邪心を繋ぎにして融合するんじゃないのか？」

「少なくとも今まではそうだった。そして大半はろくでもない奴らだった。」

「邪心。そうだな。他の奴らを見てりゃそう思うか。ただ似ていたそれだけだ。だからもしあのスズなら清らかな存在をよりしるにするだろうな」

「スズ？」

將軍の次はなんだ？

「大賢者スズ。將軍と対等の地位の存在。そして変わり者さ。戦争

の虚しさを訴え続けていたんだから。それはあたしらを否定することなのにな」

ここでフクロウの異形は懐かしむように空を見る。

「どうせ味方に斬られるならスズと戦いたかった。あの人は美しい戦い方をする。あたしも美しくなれたかも」

ここで真正面を見る。

「さあ。早く変身しな。あたしの望みはブレイザ。あんたとの戦い。ぎりぎりのところまで命を燃やし尽くしたい」

しかしあるうことが礼は迷いを感じていた。

目の前の相手は邪悪というより純粋な存在。ただ強い相手だけを求めていた。

「踏ん切りがつかないなら……こうだっ」

突然オウルアマッドネスは高く舞い上がった。

けし掛けていた相手が逃亡のはずはない。攻撃だ。となると予想される攻撃がある。

「変身っ」

ここでやっと刀を抜いた。礼はブレザー姿の美少女へと変身した。それと同時に見えない高さから雨あられと羽根の手裏剣がブレイザ目掛けて飛んできた。

「やはりこれか！」

セーラのように飛べず。ジャンスのように撃てないブレイザの苦手とする高所からの攻撃。

だが伊達に合宿で特訓までしていない。

「はっ」

小ぶりな小太刀ゆえに素早くふるえる。長距離ゆえ大多数は狙いがそれる。その身に迫ったものだけ叩き落せば済んだ。

「やるな。それじゃこの距離ではどうだ」

いつのまに十メートルくらいの高さにオウルアマッドネスがいた。我が身を晒すリスクと引き換えに命中精度は高まる。

「くっ」



苦手なタイプに思わず顔をしかめるブレイザ。

それには構わずオウルアマッドネスは手裏剣を投げつける。

今度はさすがに避けるのが精一杯。それでも反撃の糸口を探る。

（投げた瞬間は無防備。そこに一撃を加えれば。だがどうやって）

「逃げるだけか？ 噂に聞こえた剣士も空からの攻撃は手も足もでぬか」

嘲笑にかつとなりかける。だが

（攻撃？ そうか。手段はありますわね）

思考の途中で精神の女性化が完成した。それと同時に精神と肉体のシンクロも完成。

故か反撃の糸口を見つけ出せた。

孤高なる少女剣士は天を見上げ凜とした声で言う。

「あざ笑うならもう一度放ちなさい」

「ほう。どうやら完全に女剣士になったようだな。そして策があるか。ならば勝負」

宙に舞いながらオウルアマッドネスは言う。そして強く羽ばたいた。

同時に羽根手裏剣が放たれる。

「はっ」

ブレイザはそれを鞘で打ち返した。野球で例えるならピッチャー返し。

投げ終わった直後で守備体制に移る刹那の間。それを狙う。まさにそれだ。

羽根手裏剣が真っ直ぐ飛んでくることを考えても追い風はない。

ブレイザから見ての向かい風による防御はないと判断した。

そしてその予測どおりオウルアマッドネスの胸目掛けて羽根手裏剣が飛んでいく。

「ぐっ」

不意を衝かれ防御が間に合わずまともに食らうオウルアマッドネス。墜落する。

ブレイザは慎重に事を運ぶ。闇雲に近寄らない。

むしろ立ち上がるのを待っていたようにも見えた。

「や、やるな。あれだけの羽根と風を掻い潜る一点をめぐり打ち返すとは。ふふふつ。これで弱点が消えたというわけだ」

自分が傷を負ったというのに満足そうに笑うオウルアマッドネス。よろよろと立ち上がる。傷や落下のダメージだけではないようだ。素体とした士郎の肉体が持たないのであるう。

アマッドネスに浸かれた人間は体そのものを作り変えられるが、それでもダメなほど病魔は蝕んでいるようだ。

「あ、貴女はやはりわたくしを高めへと導いていたというのですかね」

うすうすそれを感じ取っていた。だから攻撃を仕掛けなかった。

「気にするな…あたしの望みは強い相手との戦い。それだけだ…いや。死に場所を求めているともいえるな」

純粋な希望。ブレイザはそれを感じ取った。そして何より武人として共鳴した。

「あなたを倒せば少なくとも人間の方は助けられることが出来ますね」  
アマッドネスに取り付かれたものは戦乙女の聖なる魔力で倒されると一度爆散して切り離される。

取り付かれていた人間の方は再生されるものその際は必ず女性になる。

だが病魔も一気に霧散するのが期待できる。

「ならば応じましょう。貴女との果し合いに」

「おお」

羽毛に覆われた顔が喜びに満ちたのが感じ取れた。

両者はおよそ5メートルほどの距離を置いていた。

ブレイザが静かに「キャストオフ」と言うとブレザーの学生服が散り、和服の少女剣士へと変貌した。

防御は手薄になったが攻撃力は段違いに向上したブレイザ・ヴァ

ルキリアフォームだ。

「仕切り直しですわね。でしたら再び儀礼に従いましょう」

その細く高い声で涼やかに彼女は言う。

「我が名はブレイザ。剣の戦乙女」

オウルアマッドネスは感じ入っていた。まさに長年の望みがかな  
おうとしている。

そして儀礼に従うことに異存はなかった。

「我が名はコノハ。アマッドネスの剣士」

それが異形の剣士の本名だった。

「いざ」「尋常に」「勝負」

二人は真正面から激突した。

まるで逢瀬だった。長年待ち続けた相手という点では同じか。

それほど激しく熱い一撃を繰り出し続けるコノハ。

さすがのブレイザも防戦一方である。だが攻撃から攻撃へうつる  
ほんの一瞬の隙を突き反撃に出た。

文字通り突きを見舞い守りに転じさせる。同時にブレイザも攻勢  
に転ずる。

いつもの計算された攻撃ではなく心のままに剣を振るっていた。

二人の間に敵対感情も憎悪もなかった。正確に言おう。あまりに  
熱い風によって吹き飛ばされた。

ただひたすらに無心に剣を振るっていた。

気力と体力の続く限り打ち合う。将棋の言葉で言う千日手になり  
かけていた。

それを嫌ったコノハは僅かな隙に間合いを取り、飛翔しつつの斬  
撃を試みる。

「超変身」

ブレイザは超越感覚の形態。アルテミスフォームへと転じる。

巫女はその卓越した五感でフクロウの異形の攻撃を読み取る。そしてすれ違いざまに刀を抜いて切りつける。居合い斬りだ。だがコノハは居合いの一撃を剣で受け止めていた。アルテミスサベルが食い止められる。

（最初からこれが狙い？）

居合いは瞬時に抜刀して斬撃。そして納刀。これでこそ生きる。だがはじかれたことで納刀が遅れた。攻撃が死んだ。多大な隙ができる。

「もらったあつ」

背後に着地するなり大きな的：胸を狙い切りつけるコノハ。

「超変身」

再び姿を変えた。今度は力の戦士。着流し姿のガイアフォームだ。剣も巨大な斬馬刀。ガイアブレードへと変化。その厚く拵えた刀が盾となりコノハの一撃を受けとめる。

そしてそのまま剣をへし折った。

「なにに？」

剣を失い動揺した。その隙を見逃すブレイザではない。瞬時にヴァルキリアフォームに戻り攻撃を繰り返す。

『剣撃 乱舞』（スラッシュダンス）

一瞬のうちに袈裟斬り。横なぎ。切り上げ。唐竹割。とどめに胸に深く突き刺す。

文字通りの必殺技であった。

あつと言う間に血まみれになるオウルアマッドネス。だがその表情は悦楽に打ち震えていた。

「ふ…ふふふ…長年待った甲斐があった…これほどとは…なんと贅沢な。もう思い残すことはない」

「…コノハ…」

女性的な憐れみの表情が戦闘中というのに出てしまうブレイザ。

「気にするな…闘いの結果だ…それに望んでいたことだしな…」  
口から血を吐く。

「これでも倒すつもりでやってたんだがな……剣に死を求めたあたしと、生を求めたお前の違いか…」

血を吐いた。もう助からないだろう。死に行く勇者にブレイザは礼を尽くす。

「コノハ…私は貴女の名前を忘れません。激しく切り結んだ貴女のことを」

本音だった。コノハはにこりと笑う。子供のような笑みだ。

「ありがとう……」

それだけ言うと灰となって崩れ落ちた。既に爆発するほどのエネルギーもなくなっていたのだ。

残されたのはブレイザと伊福部士郎だった女性。

（これで病魔は消えたはず。しかし剣を失ったこの人はどうやって生きていくのだろう……）

それ以上は考えられなかった。彼女自身も疲れ果て気を失った。

後日談。木枯らしの季節。礼はあるビルの前で一人の女性と遭遇した。

一瞬では誰だか思い出せなかった礼だが、その女性の方が驚いた表情をしていた。

ワンピース姿。化粧がややヘタ。しかしふつくらと女性的な顔立ちが魅力あるものと感じさせていた。

そのせいでこの女性がかつての伊福部士郎と認識できなかった。だが面影はある。それでやっとわかった。

彼女は照れて赤くなる。その左手薬指には光るものが。

「このは。用事は済んだよ」

別の男性が彼女。「伊福部このは」に呼びかけた。その左手にも指輪。

(あのアマッドネスの名を新しい名にしたのか)

それは僅かな間の同胞への敬意と感じ取れた。

まぶしいほどの笑顔を「このは」は顔に浮かばせると「行きましよう」と腕を絡める。

そして去り際に礼に向かって会釈をする。

立ち尽くす礼だが口元に笑みが。

(そうか…女としての幸せを手にしたということか。それでいい。

男として…剣士としてはもう充分に戦ったのだから)

彼もまた満足そうにその場を立ち去った。

## EPISODE 34 「刺客」 (後書き)

### 次回予告

(何で休みの学校で俺が女にしたやつらばかり会ったよ?)

「今は女の子だもん。そしてあたしたちを女にしてくれたのは高岩君だし。そりゃ意識もするわよ。初めての人を」

「うん。女の子のおいじゃなかった。それにスタイルも女の子らしくなくて…」

「オナナの肉体がそんなにえらいわけ？」

## EPISODE 35 「華麗」

EPISODE 35 「華麗」(前書き)

スペシャルサンクス

アマッドネス原案 MONDOさん



EPISODE 35 「華麗」

夏休みも終盤。高岩清良：否。セーラは友紀を含む数名と福真市のとある体育館に向いていた。

セーラの姿はいつものエンジェルフォームのそれとは違う。本来の福真高校の女子制服姿。

メガネにカチューシャ。セーラータイも一年を現す白だった。

「なんであたしがこんな場所に……」

「今になって文句を言わないでよ」

しかしその友紀の言葉には申し訳なさも混じっていた。

セーラはため息をついて入り口の立て看板を見る。

「福真市新体操新人戦」と書かれたそれを。

EPISODE 35 「華麗」

話はやや遡る。清良は夏休みというのに学校に呼び出された。

「あれ？ どうしたの。高岩君」

スクール水着姿のロングヘアの少女が呼びかける。

自分から呼びかけておいて水着姿であるのを思い出してバスタオルで胸元を隠すのが可愛らしい。

「おう。魚住。部活か？」

このロングヘアの少女は魚住美奈子。かつては魚住平という名の少年で、ピラニアマッドネスとしてセーラと戦ったこともある。

その時の影響で現在は少女となった。

「うん。秋になってもシンクロの練習はあるのよ」

水着姿を見られた羞恥心かどことなく顔が赤い。

華奢な少女は上目遣いで背の高い清良を見上げている。

「そっか。俺の方はなんか友紀が用があるってんできたけどな」

「……ふうん」

友紀の名が出た途端に態度が素っ気無くなる。

「あ。あたしもう行かなきゃ。鮎美が待っているし」

平田鮎美。かつての名は平田歩。水泳部のレギュラーをめぐる憎しみあつたのだが事件で共に性転換。

そして憎悪も吹き飛ばされ現在は競泳ではなく二人で出来るシンクロナイズドスイミングに転向していた。

「おう。がんばれ」

清良はさほど興味を示さずに歩く。

「珍しいね。高岩君。休みなのに」

今度は生徒会長の高森雅だ。かつてのバットアマッドネス。

「ああ。野暮用だね」

「そうなんだ。ね。たまには生徒会室にも遊びにきてよ」

「こちらも何故か顔が赤い。夏用のセーラー服。半そでとはいえど露出は美奈子よりはるかに低いのだが。」

「遠慮しとく。生徒会長なら別の学校のと散々付き合っているからな」

「え。それって女の子?」

「何処か咎めるような口調になっている。」

「男だよ」

「そうなんだ。よかった」

「?」

なにがよかったんだ。そう思う清良だった。

「おや。夏休みだというのにどうしたんです? 高岩くん」

メガネを光らせてロングヘアの少女が尋ねる。

今度は風紀委員の飛田翔子だった。元の名は飛田翔一。ホッパーアマッドネスだった。

憎しみ合っていた双子の兄弟は事件後に過剰に仲のよい双子姉妹へと転じた。

「呼ばれたんだよ。友紀に」

律儀に答えると冷静なはずの翔子が急に態度を硬化させる。

「それでしたらすぐに向いた方がいいですよ。あんまり女の子を待たせない方がいいかと」

「わかったよ」

やっと目的の場所。新体操部の練習する体育館に向く。

「あつ。高岩くん」

黄色い声で友紀より先に声をかけてきたのは安楽千由美（元は知由）だった。

（何で休みの学校で俺が女にしたやつらばかり会うんだよ?）  
聞きようによっては危ない台詞である。

千由美はセーラ初陣の相手。スパイダーアマッドネスだった少年のその後の姿である。

「なんで安楽がここにいるんだよ？」

「新体操部の友達に呼ばれたの。1年の代表に負傷者が出て代りに出てくれないかと。でも」

付け焼刃では無理。まして「安楽千由美」は既に「二年女子」として認識されている。

だが「セーラ」は違う。考えがここに至り清良は猛烈に嫌な予感に見舞われた。

「ひよつとして……」

「あ。いたいた。キヨシーっ」

これまた高い声で友紀がポニーテールを揺らして駆け寄ってくる。練習のはずなのに何故か本番用の華麗なレオタードを纏っていた。

一瞬はそれに心奪われるがすぐに切り替えて抗議をする清良。

「友紀。お前まさか俺に1年の代役で新体操をやれとか言うんじゃないだろうな？」

「うわ。すっごおーい。よくわかったわねー」

確かにセーラ・フェアリーフォームなら難なくこなすだろう。

むしろセーブしないとイケないほどだ。人前で飛んでしまった日には……

新体操程度ならエンジェルフォームでも問題なかった。

それを察したから猛烈に嫌な予感がしていたのだ。

「冗談じゃない。俺が何でレオタードなんて……」

ここでそのレオタードに目が行く。

(可愛い……)

それは友紀に対して抱いた思いなのかも知れない。

しかしそこで清良は衣装に対して抱いた思いを感じた。

「レオタードなんて……」

女性的なラインが美しく描き出されている。

健康的な色気。

「そんなこといわないで。どう？ 本番用なの。これ」  
友紀は可愛らしくくるっと回って見せる。

「ああ……それ可愛いな」

つい口走ってしまった。事情を知らないと変質者扱いされるが変身後を友紀は知っている。

「ほんと？ それなら着てみる？ ちょうど1年の代表の子が怪我しちゃって」

「!？」

清良は頭を抱えた。失言自体にもだが男の状態でこの発言をしたことにもだ。

(……伊藤の野郎が男で貧乳を嘆いたことがあったが……俺もそれに近くなっているのか?)

覚醒して一番日が浅いもののそれでもかなりの日数が経っている。ありえる。

(考えてみれば過去に戦乙女から生まれ変わったやつらは覚醒しなかったが俺達の代で変身出来るように。例のクイーンのかけらが少しずつ減っていると言うことなのかしれねえ。だからたまに女としての思考がでるといふことか?)

また恐くなってきた。だから別の事を考える。

(それにしてもやられた……はめられた。わざとこれを見せて誘導したな)

と思う反面、自分が華麗に新体操の演技をするさまを脳裏に浮かべて軽くトリップ。

やはりセーラとしての乙女心が干渉し始めたらしい。

それを悟られまいと悪態をつく清良。

「し、仕方ねえ。別にそれを着てみたかったわけじゃないぞ。困っているのを見捨てるなんざできないからな」

「ありがとー」

本当に困っていたらしく喜びを爆発させる友紀。

元々部員が少なく一年で初心者を除けば代表になれるのが一人し

かいなかったのだ。

（ちやつかりしてやがる…けどまあ、あのファルコンの一件でやらオレに対して「罪の意識」を持っていたみたいだがそれがなくなつたという表れかもな。あれは友紀が気にする必要のないことだし）  
それを見たら満更間違つた選択でもなかった気になってきた。

用件が片付いたところで疑念を口にする。

「ところで安楽。今日は魚住。高森。飛田と会ってみんな態度がおかしいんだよな。やたら顔を赤くしたりなんだか焼きもちっばい態度だったり。なんなんだろうな？ やっぱ恨まれているのかな」

「うーん。あの子達はわからないけど、あたしだったら高岩君のと好きだからかな」

「な？」

これで驚く清良が朴念仁というのは酷であろう。

「だって…お前といいあいつらといい元々は男だろうが？」

そつという理屈である。元は男の彼女たち。ましてや敵対した自分恨まれるならともかく好意。ましてや恋心などありえないと。

さすがに「元・男」が恥じらいを倍化させるのか頬を赤く染め干由美は思いを吐露する。

「今は女の子だもん。そしてあたしたちを女にしてくれたのは高岩君だし。そりゃ意識もするわよ。初めての人を」

「誤解を招く発言をするなーっつっつ」

思わず体育館中に響く大声で怒鳴ってしまう。

不良のレッテルを貼られている割に律儀な清良は約束を反故にはしなかった。練習もした。だからこうしてここにいる。

同じく「部外者」の安楽干由美も事情を知るものということだサ  
ポートで同行していた。

「はあ。もう」

数え切れないほどのため息をついているセーラ。

「ほらほら。ぼやいてないで着替えて」

「気分変えて行きましょ。女の子はスマイルが大事ですよ」

本当に明るく微笑んで見せる千由美。女になってからむしろ明るくなった。

「わかったわよ」

自宅を出る一時間前から変身している。とつくに精神状態は女子そのもの。

そのせいか友紀の態度も女友達に対するそれであった。

レオタード姿のエンジェルフォームになって試合会場に出ると凄まじい応援団がいた。

場所を間違えているとしか思えなかった。どう見ても球場のスタンドの方が相應しいガクラン集団だった。

野太い声で「あ・げ・は・ちゃん」とコールをしている。

むしろアイドルか声優のイベント会場か（笑）

「ありがとー。みんなありがとー」

金をベースに黒いアゲハチョウ。派手なレオタードだった。

顔も派手なメイクである。マツチ棒が五本くらい乗りそうなまっげ。真っ赤な口紅。青いアイシャドウにピンクのチーク。

髪は茶色のソバージュ。ご丁寧には爪は全てネイルアートが施されていた。

女子としてはやや大柄だが派手さでちょうどよかったくらいだ。

（なにあれ？ いくらなんでもやりすぎじゃないの？）

一応は大会用ということでメイクは自由だった。セーラも女性化したらすぐにしていた。

ちなみにこれは「変装」としての意味もある。なにしろセーラのまま新体操をするのだ。

少しでも印象を変えておきたい。だから髪もカチューシャでまとめてある。それで随分とイメージが変わる。

話しを戻すとにかく郡を抜いて派手な「少女」だった。それが

福真高校の面々に気がついてよってきた。

「あなたたちが福真高校の選手？」

「そうだけど」

答えるとド派手少女は値踏みするように清良たちを見る。

「地味ねえ」

「な!？」

別に派手ならいいというわけではないがなんとなく否定された気分になる。

優越感たっぷりはその「少女」は見下した態度で言葉を紡ぐ。

「ご挨拶させていただきますわ。わたしは長野あげは。そう。アゲハチヨウのように華麗な乙女」

(自分で言う?)

ナルシストぶりに辟易していた。友紀も引いている。だがそれは別の理由。

「あたしは…」

名乗られたなら返さないわけには行かない。

「引き立て役の名前なんて別にどうでもいいわ」

あげはは大きく興味を持たなかった。自分の方が派手。それを確認できればそれでよかった。

「はあ!？」

唾然とするセーラ。それを尻目に優雅に挨拶するあげは。

「わたしは他にもご挨拶があるので失礼いたしますわ」

低めのハスキーボイスで挨拶すると、若干ポリウームの足りないヒップを振りつつ立ち去る。

また新たな「得物」に対して優越感に浸りに行くのだろう。

「なにあれ? あんなのあり? そう思わない。友紀」

だが友紀はナルシストなところより別な理由で引いていた。

「あの子……顔の色と体の色が違いすぎるわ」

「だから厚化粧なんでしょ? 香水もひどい匂いだったわ」

「うん。女の子のにおいじゃなかった。それにスタイルも女の子ら



しくなくて……」

「……それってまさか……」

ちよつと恐い考えが脳裏をよぎる。

各校の新体操部の一年生の代表が集まる大会だった。

子供のころから嗜んでいたものはさすがに上手いが、入学してから始めたような女子もいる。

さすがに練習不足が如実に現れていた。

当然ながら「高岩清良」に新体操の経験はない。

フェアリーフォームの戦い方は自然とそれに近くなっているだけだ。

だが僅かな間の特訓でそれらしい動きにはなっている。

後は超人としての身体能力にものを言わせてこなしていた。

五番目の演技でトップに立つ演技を見せていた。

「きゃーっ。凄い凄い凄いやーっ」

はしゃいで抱きつく友紀。既に完全に女の精神になっているので逆に友紀に抱きついて喜ぶせーら。

それを微笑ましく思いつつちよつと複雑な思いで見ている千由美だった。

はしゃいだのもつかの間。問題の長野あげはが演技を始めると声を失う。

女子とは思えない力強さ。名の通り蝶のように高く舞う。

それはまさに華麗と呼ぶに相応しい演技だった。

少女と思えない妖艶な色気が漂う。悪酔いしそうであった。

会場はまさに声を失う。「応援団」すら見とれていた。

全ての演技が終わる。予想通り優勝はあげはだった。

「悔しいけど、あの華麗さでは……」

代役とはいえど代表。力及ばず無念ではあるが負けを認めざるをえないセーラであった。だが

「その優勝は無効よ」

選手入り口から甲高い女声が響く。別の参加校のコーチの声だった。

さらに仰天する一言。あげはをびしつと指差し叫ぶ。

「そいつは男よ！」

蒼白になるあげは。それが凶星と語っていた。

「ええっ？」

「……やっぱり」

驚くセーラと確信した友紀。最初からの女とそうでない存在の違いだろうか。

そしてにやりと笑うコーチ。つかつかと表彰台へと歩み寄る。

まるで名探偵が推理を披露するかのように説明を続ける。

「おかしいと思ったのよ。あまりにも違いすぎる顔と手の肌の色。きつい香水。派手すぎるメイクに体形」

友紀と着眼点が同じあたり女ならではの着想だったらしい。

「そして長野さん。調べさせたけどあなたの学校は一応は募集しているけど女子はいなくて実質男子校のようね」

決め手はそれだった。

「……それが……なんだっていうのよ」

否定しない。ハスキーボイスがドスの利いた感じでつぶやく。同時に

「この感触？ どこに…まさかっ？」

いつもの感触を感じていた。そしてそれを探ると発揮している人物は一番注目されている人物。

「オンナの肉体がそんなにえらいわけ？」

あげはの声が変わっていく。特有のくぐもったそれに。

「だったらこんなのはどう？ 正真正銘の女よ。人間じゃないけどね」

俯きつつ白状した。だが様子がおかしい。

「友紀。千由美。避難誘導おねがい」

それで充分だった。二人は出入り口の確保に走っていく。

セーラは影に行くとキャストオフ。さらにフェアリーフォームへと転じる。

表彰台。暴いて自分たちに有利にしようとした女コーチは異変に青くなる。

なにしろあげはの目が人の目から昆虫の複眼に変わったのだ。

「見て。あたしも蝶になれたのよ。芋虫みたいな男から、華麗な蝶に」

何処か狂気を含んだ物言いであげはが言う。変身：むしろ虫で言う「変態」が続く。

額から触角が飛び出しむき出しの手足が細い毛で覆われる。

口はストロー状のそれに変わる。そして四枚の巨大な翅。

「ひっ」

名探偵気取りの女コーチは無様に尻餅をつく。

「そう。あたしは蝶。アゲハチョウよ」

ひらひらと舞い上がる蝶の異形……パピヨンアマッドネス。

怪物出現にパニックに陥る会場。しかし友紀と千由美が出口を確保していたので脱出に問題はなかった。

それでも逃げ遅れはいる。あげはを応援していた応援団だ。そこに飛来するパピヨン。

「ねえ？ あたしは綺麗でしょう。そういつてくれたわよね」

アマッドネス特有のくぐもった声で妖艶に問い詰める。だが現実  
は非情。

「よ、よるな化物」

正体を知らなかったらしい。

「化物？ 随分とひどいことを言うわね。いいわ。あなたも同じになればそんなことを言わなくなるわ」

翅を振るうとりんぷんがキラキラ舞い上がる。一瞬は心奪われる  
応援団。

すぐにそれは苦悶の表情に変わる。毒を食らったかのように喉を  
掻き篁り昏倒していく。

そして次々と女へと変わっていく。

「うふふ。可愛いわよ。さあ。あなたたちも」

効果の及ばなかった応援団員に迫る。恐怖で彼らは動けない。

「させないわっ」

牽制でのセーラの叫び声。それで動きを止めるパピヨンアマッド  
ネス。

ゆっくりと振り返ると同じ空中にやはり翅をまとう少女がいた。

「そう。お前がアヌ様の言っていたセーラね」

単体で空を飛べるのはセーラだけである。特定は容易い。

「あたしを知っているの？」

「知っているわ。本当は男の子。あたしと同じでね」

それがスイッチだった。セーラは不意に倒した相手を次々と女に  
変えていたことを思い出した。

無論倒さねば犠牲者はさらに増える。だから仕方のないことだ。

だが男から一時的に変る姿が戦乙女かアマッドネスかの違い。

もしかしたら自分も敵と同じような存在なのかもしれない。

そして戦った相手に強制的に女としての人生を歩ませている。

敵としていることに違いはないのではないか。

暴力を暴力で止めているのではないか？

不意にそんな思いが募ったのは、まとめて元・アマッドネスの少  
女たちと顔をあわせたからかもしれない。

「面白い。どちらが華麗に舞えるか。勝負よ」

暴力を崇拜するものの一員が戦いを挑む。空中戦が始まった。

「くっ」

生じた迷いに動きが鈍いセーラ。

高空で戦った場合、相手を無事に着地させないと人に戻しても墜

落しさせるといふのも躊躇の理由。

「友紀と千由美は避難誘導を完了させていた。なにしろパニックに陥っている。だから誘導者の身元など気にしてない。」

つまり同じ学生である彼女たちの指示に何の疑念も抱かずに従ってスムーズに退出していた。

「後は私たちだけ。行きましょう。野川さん」

「先に行つて。私は逃げ遅れた人がいないか確認してくる」

中へと走り出す友紀。すぐに千由美もついてきた。

「安楽さん」

「ウソついてもわかるわよ。高岩君が心配なんですよ」

凶星をさされて友紀は赤面をするが隠している余裕はない。二人は走っていく。

空中戦は躊躇の分だけセーラが後手に回っていた。

それに加えて実際に新体操をしていたパピヨンアマッドネスは動きが素早い。

セーラの方は足場のない空中ではどうしても足を軸とした細かい動作が出来ず、大きな動きでよけることになる。今まではそれで充分戦えたが今度の相手には分が悪い。

さらには厄介なのが毒りんぶん。普通の人間に対するようには効かないまでも動きの自由と視界を遮るには充分だった。

遠目には二人はよく見えるが、当人にしたら煙の中で戦っているようなものである。たまらない。

友紀と千由美が見たのはまさにそんな場面。

「清良!？」

少なくとも見た目はプールで遭遇した三体のアマッドネスよりは恐ろしくない相手に、こんな苦戦をしているのは予想外だった。

「こんなことならキャロルにもきてもらうんだっただわ」

新体操の大会と言うことでつれてこれず。

そして頻出地帯から外れていることから休養と留守番で高岩家に置いてきた。

そちらの方が頻出エリアだったので何かあつたらセーラに連絡する担当だった。

ところが局面は逆。急行しているが友紀がプロテクターを纏うのは間に合いそうもない。

何も出来ない彼女は思わず叫ぶ。

「キ…セーラっ。その人を助けてあげてっ」

意外な一言にパピヨンアマッドネスの方が動きを止めた。

「救う？ 何の冗談だ？ この私に助けだど？」

友紀としてはほとんど考えなしに叫んだ言葉だが、後からちゃんと繋がりが出てきた。

「あなたがそんな姿になったのは心の闇に付け込まれたからでしょう。だから負けないで。弱い自分に負けたりしないで」

どうやら正鵠を射ていたらしい。激昂する。

「キサマに何がわかるっ！？」

「わかるわっ。私だっかってはあなたと同じアマッドネスだったから」

忘れたい過去をあえて晒した。

「だからなんだ？ 私にこの素晴らしい力を捨てるというのか？」

華麗な蝶の化身は醜い憎悪を含んだ声で叫ぶ。

（そつだ。世迷言だ。あの娘の言葉が本当だとしても栄光あるアマッドネスの力をなくした愚か者。美しい蝶である私やお前と違い地を這う虫よ）

同化したはずのアマッドネス・ロウテの言葉があげはこと長野龍彦の心を再び悪へと誘う。

迷いが人としての心と悪魔としての心に分けた。

そしてセーラも迷いを振り切れなかった。普段は考えないようにしていたが今回は頭にこびりついてはなれない。

「セーラさん。あたしのことなら気にしないで」

「……千由美……」

一時は蜘蛛の化物だった少女が叫ぶ。

「あたしが取り付かれたあげく女になったのは全てあたしの心が弱かったから。だからこれは運命だと受け入れているわ」

「な、なに？」

反応したのはセーラではなくパピヨンアマッドネスであった。

「貴様？ 元は男だったというのか？ アマッドネスだったというのか？」

憎悪ではない。ただ妬みに近い感情が含まれている。

それを知ってか知らずか千由美は自分に言い聞かせるように叫ぶ。「そうよ。でも今のあたしは女として人生をやり直しているの。だからあなたも。おねがい。やり直して」

ひらひらと舞う巨大な翅。化物と言うのを忘れるほど美しい蝶の怪人が考え込んでいる。

セーラはセーラで毒りんぷんのダメージもありその場に浮かぶのが精一杯。

「ふっふっふ。そうかそうか」

妙に含みのある笑い声。「悪巧みを思いついた」というのが一番近いイメージだ。

「死ぬ。セーラ」

そんなパピヨンがいきなり攻撃を仕掛ける。

迷っているセーラといえど仕掛けられればかわすし、場合によっては反撃で一撃を見舞う。

段々に戦いが熱くなってきた。皮肉にもセーラに迷っている暇がなくなってきた。攻撃に躊躇しなくなる。

宙に舞いつつボクシングのように打ち合う。

かつてそのファイトスタイルを「蝶のように舞い、蜂の様に刺す」と例えられたボクサーがいたが、まさに蝶そのものが戦っていた。そして時間経過とともにセーラの体内の毒素も解毒されて動きがよくなってきた。

どうやら毒りんぷんの生成が追いつかないのかばら撒かなくなってきたのもある。

「セーラ様」

やっとキャロルが到着した。それも天馬の姿。

通常の黒猫姿ではとてもではないが間に合わない。

夏の空をいいことに白い馬体を太陽光に溶け込ませるべく空を飛んできたのだ。

「キャロル。この子を落としたり受け止めて」

セーラの躊躇はそれもあった。だがキャロルの到着で消えた。

「勝てるつもりか」

パピオンは盛大に翅を振りやっとなまったりりんぷんをばら撒く。だがその刹那に多大な隙が出来た。

（ば、馬鹿な。こんな時に？）

融合したはずの邪悪な魂が不可解な「あげは」の行動に驚く。

そしてその隙を突きりんぷんを避けるべく上に飛んだセーラが、まるで鉄棒を回るようにくるっとな回転。

かかとをパピオンアマツドネスの脳天に見舞う。

「ライトニングハンマー」

いくらセーラ・フェアリーフォームが非力で軽量でもこれはたまらない。

（ど、どうして自分から技を食らうような真似を？）

ロウテの最後の思考は爆発によって遮られた。

全裸の美少女が落下していくがキャロルが空中で受け止めた。

（ああ……またやっちゃったなあ……）

仕方のないことはいえどまた一人の少年の人生を女としての一



生に変えてしまった。

その小さな背中に不似合いな哀愁が漂っていた…のだが。

ゆっくりと体育館の床に着地する天馬のキャロルとセーラ。

そこに駆けつける友紀と千由美。

夏場の体育イベントということでシャワーを想定してバスタオルを持参していた。

それを新しい少女の裸体を隠すために持ってきたのだ。

女になった「あげは」は当然だが化粧はしてなかった。髪も黒いストレートに。

「う…うーん」

やたらに可愛い高い声でうめくと「彼女」は目を覚ました。

そして意識がはつきりしたらいきなり自分の胸を掴んだ。

「ある」

明らかに歓喜を含んだ声。

「ハイ？」

間抜けな声を出してしまうセーラ。友紀。千由美。

それにはおかまいなしで今度は股間をまさぐる元・パピヨンアマツドネス。

「ないわぁ」

なんと今度は涙。それも喜びの表情。

「な…何なの？」

完全に予想外のリアクションに戸惑う三人。

「やったわ。一か八かの賭け。本当に女になれたわ」

つまりそれがアマツドネスにつけこまれた心の隙間だったのだ。

「あ…あー」

どうしていいかわからなくなったセーラ。それを無視して歓喜し続ける「あげは」

「見て。私は女よー」

一糸纏わぬ少女が両手を広げて立ち上がる。嬉し涙を流している。

「ば、ばかっ。隠して」

「女の子だって言うなら恥じらいを持ちなさい」

思わず怒鳴る友紀たち。

(今回はかしは…罪の意識は無用だな…)

悩んでいたのが馬鹿馬鹿しくなってきたセーラであった。

後日談。

この一件で女と化した元・応援団の少女たちを取り巻きとしたあげはが歩いている。

今は戸籍上でも女で「長野あげは」が本名になっていた。

「あげはさん。どうしてそんな地味にしちゃったんですか？」

ギャルメイクの元・少年。現・少女が不思議そうに尋ねる。

今のあげはは黒髪のショートカット。ノーメイクであった。

「いらないわよ。今までは化粧で女に化けていたけど、本物になれた今はむしろ素顔をみんなに見せたいの。あたしは女なのよと」

女になることをみずから望んだ少年に取り付いたのが、ロウテという名のアマッドネスの不運であった。

EPISODE 35 「華麗」 (後書き)

次回予告

「そろそろくたばるか？ それじゃ最後に心臓を」

「お姉ちゃん。お姉ちゃん」

(いた。あのガキだ。あの時は暗かったがそれでもわかる)

「はじめというなら死んでつけたら？ なんならあたしが手伝ってあげるわよ」

EPISODE 36 「少年」

## EPISODE 36 「少年」

十日ほど前。海辺の町。深夜。女は走っていた。

その表情は恐怖に引きつっていた。

後をついてくる男。「変質者」ではない。「殺人鬼」だ。

踵の高い靴をはいていたその女は男を振り切れない。ついには捕らえられる。

殺人鬼は彼女を押し倒すと馬乗りになって左手で口を押さえて固定する。

言うまでもなく悲鳴を上げられないようにするためだ。

そして体や金には目もくれずナイフを振り上げる。

身動き取れない女。その細い肩に登山ナイフが突き刺さる。

「!?!」

悲鳴を封じられているが激痛と恐怖から女はじたばたともがく。

その男は若い女を刃物で貫くことが唯一エクスタシーを感じる方法だった。既に三人殺している。

目的は殺すことそのものではなく刺し貫くこと。

だから急所は最後まで避け時間をかけてじっくりと貫いていた。

二箇所。三箇所。

血を流すたびに抵抗する力もなくなっていく。

「そろそろくたばるか？ それじゃ最後に心臓を」

大きく振り上げる。ここは路地裏。人目は気にしないで良い。その筈だった。

「お姉ちゃん!?!」

一人の男の子が悲鳴を上げる。

少年・芳樹はこの女の弟だった。路地裏は自宅への近道。襲われた女としたらむしろ安全なはずであった。

「ちちいっ」

殺人鬼は目撃者の口封じにかかる。だが強い光が差し込まれる。

「くっ」

まぶしさに顔をしかめると男の声がする。

「そこで何をしている!？」

パトロールの警官が路地裏に入る芳樹を見てついてきていた。そこで殺人現場に遭遇。

殺人鬼は逃亡した。相手は拳銃を持っている。逃げるに限る。

二人組の警官の一人がその場に残り応援と救急車要請。同時に芳樹の保護。

もう一人は殺人鬼を追跡していた。

威嚇射撃を試みようとしたら殺人鬼が痙攣したように立ち止まった。

「うあっ？」

警官は躊躇せずに接近するが殺人鬼の姿がサメを思わせる形に変わる。

「ば、化け物。ア…アマッドネスという奴か？」

既に警察では情報が行き渡っていたが彼は怪人を見たのは初めてだった。

そのスキに「アマッドネス」は海へと消えた。

「お姉ちゃん。お姉ちゃん」

血まみれの姉に駆け寄り寄ろうとする芳樹を警官が止める。

程なくして救急車が到着したが素人目にも助かるとは思えない出血量だった。

十日たってこの日。一台のバイクが海辺の町に停まった。

そのプロポーションからバイクスーツ越しに女とわかる。ヘルメットを脱ぐとそれはジャンス。

「見失っちゃったわね。ウォーレン」

（やっぱ空から行きやよかったかな？）

たまたま百紀市を離れた時に川沿いでアマッドネスの気配を察知。最初は河川敷に敵が潜んでいるかと思っただが、追跡中に状況から川の中と判断。

空を着いてきていたウォーレンがバイクに変形して追跡していたが、途中で川沿いを離れる必要もあり気配を見失った。

ウォーレンはカラスを模してもいるため空を行くロケットモードという形態もあった。

当前だがやたらに目立つ。

かといって高度をとれば川の中の相手を感知するのが難しくなる。だからバイクだったのだが追いつけなかった。

「ちよつとこの辺りをさぐって見るわ」

（休憩がてら…な）

敵がいつまでもこの辺りに潜んでいるとは考えにくい。もういな

いだらうなという思いもあった。

ウォーレンはその場でカラスの姿に。誰にも見られていない。ジャンスも物陰で肩を露出したトロピカルなサマードレスに。海辺のせいかやたらに似合う。

「んー。やっぱライダースーツは暑いわ。これだと涼しくて良いわ」  
風を取り込むべく意図的にスカートをひらひらさせる。

露骨に見るわけには行かない通行人の男性が文字通り目のやり場に困る。

「ふふっ」

悪戯をした少女。そんな表情のジャンスはゆっくりと歩き出す。

歩いていたら海辺の公園で佇む少年。芳樹を見つけた。

まだ小学生なのだが目前で姉を惨殺されたことで憂いに満ちた表情で海を眺めていた。

そのムードにジャンスの胸に甘酸っぱいものが醸し出される。  
そして彼女は声を出さずに心の中で「甲高い声」でキヤーキヤーとミーンハーに騒ぎ立てる。

(可愛いーっ。やだもう。なんて可愛い男の子なのかしら)

元々三人の戦乙女の中では一番女性的。

さらに既に変身して時間も長いため完全に女性の精神になっていたジャンスは何のためらいも持たずに少年を称えていた。

さり気なく近寄る。そのとき時計塔の鐘が正午を告げるために鳴り響く。我に帰った芳樹が気配に振り返る。その目が大きく見開かれる。

「……お姉ちゃん？」

「えっ？」

細かいところを見れば芳樹の姉。美樹とジャンスは似ているわけではない。

しかし低めの身長。豊かな胸。お下げ。そしてメガネと記号が一致していたのである。

亡き姉を慕う小学生が幻を見ても無理はなかった。  
涙が一粒二粒零れ落ちる。そして

「お姉ちゃん。お姉ちゃん。お姉ちゃん」

見ず知らずの少女に抱きついて号泣していた。

「ちよつと？ どうしたの？ ボク」

最初こそ驚いたジャンスだが「母性本能」で少年を優しく受け止めていた。

「そう。お姉さんを……」

成り行きで事情を聞くことになった。だがこれは有効な情報でもあった。

（なるほど。その変質者の魂とアマッドネスの魂が惹かれあつたのかもしれないわね。自縛霊みたいな奴らだけどそれを飛び越すくらい強烈な波動が悪の合体を呼んだのかしら？）

推測の域はでない。そもそも怪人と化した経緯はこの時点ではどうでもよかった。

「うん」

また泣きそうになる。無理もない。目の前で姉を惨殺されたのだ。むしろ精神状態を保っていられることの方が脅威である。

（かわいそうに。この子の姉はアマッドネスの直接の被害者だけど、敵はこの子や家族の心も切り刻んで癒えない傷をつけたのね）

同情？ むしろ敵に対する怒りを刺激された。

「ごめんなさい。知らない人に」

涙を手で拭う。小さいけれど「男のプライド」。女の子の前で泣くまいとするのがいじらしい。

「いいのよ」

少年はこの言葉を「赦された」と思った。実は違う。「許された」のだ。

「たまには男の子も泣いたっていいわよ」



「ぼく泣きません。泣いたらお姉ちゃんに笑われます」  
健気だった。実際は笑うのではなくて表情が曇るのであろう。  
本来は男であるジャンスにはその「意地」が理解できるし、今の  
女の身である彼女には死んだという姉の「弟を思う愛情」も理解出  
来た。

「ぼく新山芳樹です」

ここでやっと名乗ることを思い出した少年は自分の名を告げる。

「芳樹君ね。よろしく。あたしは…」

隠す理由もない。ジャンスという名がまずければ本名の押川順で  
も女の名で通じる。

あるいは適当な女性名でもいい。そのくらいの機転は利く。  
だが「彼女」はあえてどれでもないことをした。

「『お姉ちゃん』よ。今日一日あなたのお姉ちゃん」

「お姉ちゃん」として女扱いされたかった。

あるいは少年・芳樹に同情して亡き姉の代わりを努める。

そんな気持ちが生じた宣言だった。

ここで消えたアマッドネスとの関連性も無視出来なかった。

だから張り込みと護衛をかねてもいた。

(いた。あのガキだ。あの時は暗かったがそれでもわかる)

「男」が近寄る。真昼間だが関係ない。今はもうこそこそする必要  
のない力を得たのだ。

警察官どころか自衛隊が相手でも平気な自信があった。

だから小柄な少女がついていてもついでに殺してやるつもりであ  
った。

「すいませーん」

ワイシャツ姿にカバンの男が笑顔を浮かべて駆け寄ってくる。

イメージとしては普通にサラリーマンだ。

「はい。なんででしょう?」

きょとんとした表情のジャンスが毒気のない声で応じる。

「今、何時ですか?」

半そでのワイシャツから露出する腕には何も無い。

近年ケータイを腕時計代わりにしている人物も多く、バッテリー切れは珍しくもない事態だ。

「ああ。えーとですね」

ジャンスは左手を覗き込む。それを見計らって「男」はカバンに隠したナイフを取り出す。

「ああ!？」

芳樹が怯えた声を上げるときにはジャンスの手に弓が出現していた。

そして振り下ろした腕の手首に攻撃と防御をかねて当てた。

「ぐあっ」

細い部分にカウンター気味に当たればたまらない。「男」は思わずナイフを落としてしまう。

「お馬鹿さん。あたしの視線を下に向けるために時間を聞いたんでしょうけど、時計ならあんな大きいのがあるでしょ? それにサラリーマンというなら会議かなんかの席でいちいちケータイで時間を確認なんてしてられないでしょ?」

いかにも名推理だが、たまたま通りすがりなら時報を聞いてなくて時計塔の存在を知らない可能性はあるし、会議室に時計があれば腕時計がなくても不便はない。

つまりジャンスのはったりだった。相手がミスと思えばよし。精神的に追い込める。

「くくくく。失敗だったな」

あっさり認めた。

「やはり小細工はやめるか。この力があれば無用というもの」

ミスも何もナイフを振り上げたのだ。隠す気なんてとうにない。

「男」は足を広げた体勢で気合を入れる。その姿が異形に転じる。

手足が生えた二足歩行のサメ。それも両目が左右に飛び出たハンマーヘッドだ。

「きゃーっつっ」

突如現れたサメの怪人に昼下がりの公園はパニックに陥る。逃げ惑う人々。

芳樹も恐くてたまらなかったが、この落ち着き払ったジャンスの態度に安心感を抱いて落ち着けた。

「まあ。なんて醜いのかしら」

ジャンスがこんな言い方をするのはまれである。

無差別に女を殺す殺人鬼の邪悪な魂を反映させた姿に心の底から嫌悪感を抱いていた。

遠慮のいる相手ではない。挑発の意味でもある。

「ほざけ。あたしはそのガキを始末する。そいつのせいであたしは人間をやめる羽目になったんだからな。コイツははじめだ」

いいがかりである。そもそもアマッドネスの力を誇ってすらいいたのだから。

無論無差別殺人を犯すものにまともな理屈が通用するとも思えなかったが。

「はじめというなら死んでつけたら？ なんならあたしが手伝ってあげるわよ」

ここに直接の被害者がいるせいかなり好戦的である。ここまでストレートに怒りを表すのも彼女にしては珍しい。

「小娘。お前が死ね」

ハンマーヘッドアマッドネスは飛び掛る。だが

「キャストオフ」

「ギャッ」

バラバラに飛散するジャンパースカートの破片に吹き飛ばされるシユモクザメ。

立ち上がるうとしたら銃が目に入った。

「観念しなさい。この子のお姉さんの分。そしてたぶん他にも殺めたであろう人たちの魂に詫びるといいわ」

先ほどの姿と一変。いわゆるツインテールはともかく、こんな海辺の町では中々お目にかかれないメイドさんが「上から目線」で言う。

だがハンマーヘッドは聞いていなかった。それに反省などするくらいなら怪物にまで身をおとすこともなかっただろう。

異形は自分の思い通りのならない少女の正体に思いがたどり着く。変身した？ 貴様。やはり戦乙女か？」

「ビンゴ。景品はこれよ」

即座に左右の銃を乱射する。大きな的である腹部を狙う。狙いが粗くても動きを止めるのが先決。だが

「……ウソ？」

ハンマーヘッドはその皮膚で全ての弾丸をはじいたのだ。

鋼鉄のように撥ねてはいない。だが硬くて弾力のある皮膚が防弾チョッキのように弾丸を通さない。

物理的ではなく魔力でさえはじくようだ。

「それなら」

彼女は黒いリボルバーを真っ直ぐにするとピンクのオートマチックの銃口にジョイントした。

ガトリングの完成と同時に彼女の姿もメイド服からゴスロリへと変化する。

髪型もツインテールからボブカットへと。頭の上にはネコミミカチューシャが鎮座。

ロリータフォームと彼女の呼ぶ黒い少女は、可憐な見かけと裏腹の荒っぽい攻撃をした。

雨あられと弾丸を撃ち込む。しかし

「無駄だ。いくら量を増やしてもな」

まったく傷一つつけていない。

「だったら」

ガトリングを外して逆に付け替える。リボルバーの銃口にのばしたオートマチックを銃身としてジョイント。

ライフル銃に変化する。彼女自身もピンクのワンピース。ツインテールの上にさらに白いうさぎの耳。アリスフォームへと変る。

狙いは一つ。外皮に守られていない口の中。

だがこのフォームは極度に神経を使うため30秒しか維持できない。連射は難しかった。

(一撃で)

すぐさま構え、即座に狙いをつけトリガーを引く。

銃弾の形をした魔力は真っ直ぐにサメの口を指す。

瞬時に口を閉じるハンマーヘッド。だが唇は閉じず歯を見せたまままだ。

狙いは正確。口には喉には届かなかったが歯に命中。

(まだ間に合うわ。もう一発)

限界ぎりぎりでの開いた隙間に銃弾をねじ込もうとする。

正確無比な狙撃可能なフォームだ。そのくらいできる。

だがハンマーヘッドは口を閉じたまま残りの歯を吹き飛ばした。

「きゃあっ」

こちらは乱射という形だがそれでも怯むには充分だ。

そして限界時間がすぎて強制的にエンジェルフォームへと戻されるジャンス。

歯の全て抜けたハンマーヘッド。それが即座に再生される。

(そう言えばサメは一本でも歯が欠けると全部まとめて入れ替わって何かで読んだわ…アイツの場合それが散弾として使えるほどの勢いというわけね。だからわざわざ歯だけ見せていた…)

「ふふふ…んっ!？」

勝ち誇りジャンスにとどめを刺すべくゆっくりと歩み寄っていたハンマーヘッドだが突然真後ろを向いた。

「?」

この状態で敵に背を? サメの怪人の視線をジャンスが辿るとそ

こには転んだ少女がいた。

膝をすりむいて泣いている。

「ふふふ。血。生き血だ」

サメの特質を持つゆえか？ 血に餓えた殺人鬼ゆえか？

とどめを放り出して僅かな鮮血を求めて背を見せた。そんなチャンスに逃すジャンスではない。

（恨むならその呪われた性質を恨むことね）

矢を敵のかかと目掛けて放った。狙いを外さず貫く。

「ぎゃっ」

文字通りアキレス腱。無防備に背を向けたから。そしてその背中に銃弾が効かないからの選択だった。

さすがにそこは皮膚が薄くダメージがあった。

足をやられただけに戦闘を放棄。陸をジャンプして逃げ海へと飛び込んだ。

ひとまずは殺人鬼の脅威は去った。だが足に重力の負担をかけない海中で傷を、それも短時間で癒すのは目に見えている。

「大丈夫？ お嬢ちゃん」

ジャンスはしゃがんで少女を助け起こすとすぐさまに逃がす。

立ち去ったのを見届けてからよく通るが優しい声で芳樹とウォーレンに告げる。

敵の狙いは芳樹。そして人が大勢いるところだと巻き添えが恐い。場所を変えようと思い立つ。

「とりあえずここから動くわ。ウォーレン」

「あいよ」

舞い降りながらカラスはバイクに変化。

「芳樹くんも乗って」

「うん」

少年をまたがらせる。

ジャンスは何を思ったか殺人鬼の落としたナイフを拾いバイクの

タンクに見せかけてある部分にしまいこむ。

芳樹を抱きかかえるようにして乗っている。運転はウォーレンに任せる。ジャンスは少年が振り落とされないように走っている間ずっと抱き締めていた。

芳樹はこんな事態であるというのに亡き姉を思い出して涙ぐんでいた。

寂れた船着場。ジャンスたちはそこにいた。

既に人間の顔は覚えた。しかし相手はどこから来るかわからない。

ウォーレンが上空で見張りをしている。だが敵は海がテリトリー。そこまでは感知できない。

「お姉ちゃん。これからどうするの？ またあいつが来たら」

不安そうな少年。無理もない。いくら男の子でもこんな異常な体験はたまらない。

手には殺人鬼の残した凶器である登山ナイフ。気休めだが護身用に持たせるべく拾っていた。

「大丈夫よ。あたしがやっつけるから」

ジャンスは優しくにつこりと微笑む。

「でもアイツがまた来るまでずっと待つのか？」

「呼び寄せるわ」

ジャンスにしても持久戦は真つ平だった。

敵はこの少年を付けねらうだろう。出来るだけ速やかに倒さねばならない。

(ウォーレン。敵が後ろから来たら教えてね)

翼持つ従者に指示を送る。そして静かにメイド姿へと転じた。

左の太ももを覆うニーソックスをずらして太ももを露出させる。小学生には刺激が強すぎた。赤くなる。

ジャンスはくすつと笑う。いい感じに緊張感が解けた。

「芳樹君。それをちょっとだけ貸してくれる？」

手にしたナイフを渡すように頼む。持ちなれていない少年は深く考えずジャンスに手渡した。

「ありがと。それからちよっとだけあっち向いててくれる？」

芳樹はジャンスが何か男の目があると困ることをすると思い、素直に後ろを向く。見張りのつもりでもあった。

しかし何か変なおいを感じ取る。潮の香りでない。生臭い。

約束を破って振り返るとジャンスの左足から血が流れ出ていた。右手には血に染まるナイフ。

「お姉ちゃん!？」

「こらあ。約束破つたなあ。着替えていたらどうすんのよ？」

笑顔がむしる痛々しい。

「何してんの？ 自分でやったの？」

少年は混乱している。

「あの時…あのサメのアマッドネスはあたしへのとどめをやめてまで転んだ女の子の血に反応した。これはどうしようもない本能的な物みたい」

ジャンスの顔色が青くなっていく。

「これだけ流れていれば例え罨と頭で理解しても絶対来るわ。そこを仕留める」

喋っていないと気を失いそうだったから普段より口数が多くなる。

「うふふふ。それにしても戦いにも身を投じた以上、敵に傷つけられるのは覚悟していたけどまさか自分でやると思わなかったわ」

傷口自体は小さい。他のフォームに転ずれば「リロード」されてすぐに消えるだろう。

しかし血を流したダメージはそうは行かない。長ければ長いほどダメージが蓄積する。

海の中。銃弾の届かぬ場所でハンマーヘッドアマッドネスは傷の回復を待っていた。

（くそ。あの女。今度逢ったら生き血を全部すすってくれる。そ



う。こんな感じの匂い……)

足のダメージも忘れて泳ぎだす殺人鬼だった怪人。

(なんていい匂いだ。若い女の生き血の匂い。ああ。たまらん)

サメの特性。殺人鬼の性癖のベクトルが一致していた。

その脳ミソを占める思いはもっとこの匂いをかぎたいという思いだけ。

知らずにおびき出されていた。

(来た！)

大雑把だがアマツドネスを感知した時のシグナルが出た。

ジャンスは超変身をする。超感覚を持つアリスフォームだ。

まずは敵の位置を掴む。そのためだ。

しかし鋭敏になった触覚が痛覚にも比例したのか、ふさがったはずの傷の痛みが倍加して思わずよろける。

「危ない」

咄嗟に支えたのは芳樹だった。

その小さな腕で健気にジャンスを支えるいじらしさ。そして小さくても男の子らしい振る舞いにジャンスは母のような姉のような笑みが出る。

「ありがとう。そのままあたしを支えていて」

小さな男の子は無言で頷いた。

(生き血！ 生き血！ 生き血！)

思考とも呼べない思いが渦巻くハンマーヘッド。

ついに源流ともいうべき場所にたどり着いた。

(もっと！ もっと！ もっと！)

もはや他に頭が回らない。勢い余って海面を飛び出した。

そこにはジャンスが待ち構えていた。

照準が自分の顔に合っているのは感覚で理解出来た。咄嗟に口を閉じる。

ジャンスは構わず「歯を狙って」撃った。  
そしてロリータフォームへと超変身。

同時にハンマーヘッドの歯が新しいものと入れ替わるために一度  
全部吹っ飛んだ。

つまり体内を守る歯がない。

そこに荒っぽいジャンスの乱射が見舞われる。それが敵の歯の散  
弾をブロック。

同時に僅かな隙間を目掛けて銃弾が飛び込んでいく。

飛び込んだ銃弾はサメの体内で暴れまわり臓器を破壊する。

「ぐはあ」

皮肉にも自分自身の血で口の中を満たしてハンマーヘッドアマッ  
ドネスは力なく海へと落ちていく。

派手な水柱が上がる。爆発したのだ。

ジャンスは力を使い果たして強制的にエンジェルフォームに。そ  
してへたり込む。

「……ウォーレン。助けてあげて」

分離してしまえばただの人間だ。

「ああ。だが俺たちが言うのもなんだが、そのまま死んだ方が楽か  
もな」

邪念を取り除かれて一時的でも聖人のようになってしまおう元・ア  
マッドネス。

殺人鬼がその状態に陥るということは激しい罪の意識に見舞われ  
るのを意味していた。

この後は罪を悔いながらの一生だろう。

出頭してみずから裁かれようにも性別が変わっているのだ。皮肉に  
も逮捕されることはない。

まだ芳樹はジャンスを抱き締めたままだ。固まってしまっている。  
「がんばったわね。芳樹くん」

ジャンスを離すまいと抱き締めていたのだ。

「もう……もう嫌だもん。お姉ちゃんにまた死なれるのは」  
彼なりに戦っていたのだ。

「あたしは大丈夫よ。でも……もうちょっとこうしていたいな」  
血を流しすぎて回復に時間のいるのもある。

そしてギュッと抱きしめられることに、思っていた以上の安らぎ  
を覚えるジャンス。

「お姉ちゃん……」

亡き姉の面影が重なる。彼はより強く抱き締める。

その行為でジャンスは姉の気持ちと母の気持ちを同時に感じてい  
た。

それはまさに女ならではの。

彼女にとって至福の時間だった。

冷たい風が吹く。夏ももう終わると告げていた。

## EPISODE 36 「少年」 (後書き)

### 次回予告

「ふふふふ。喜べ。お前ら役立たずどもがやっとクイーンのお役に立てるといっわけだ」

「高岩あ。俺は前から貴様を斬りたくて仕方なかった。アマッドネスを壊滅させるまでは利用してやるつもりだったが今日はなんだか我慢できん」

「闇に生まれし者は闇に帰れ。闇に生まれし者は闇に帰れ」

「我が名はスズ。かつては大賢者と呼ばれたもの。そして今はアマッドネスを阻むもの」

EPISODE 37 「魔笛」

## EPISODE 37 「魔笛」

その「女」は深い眠りにあつた。

気の遠くなるほどの遠い昔。

かつて自分を大賢者と呼んでいたその集団の先を憂いたあげく諍いとなり共倒れになったその存在。

地中深く埋められ、軀はとうに土に帰っていた。

だがもろい肉体は滅しても高潔な魂は不滅。

「彼女」がかつての同族のように現代人に取り付くにはより高度な条件が要求された。

なにしろ彼女は戦闘民族のその存在意義を否定したために同士に斬られる派目になったのだ。

欲望。破壊衝動でつながるのはたやすい。だが彼女は慈しみの心を条件としていた。

水は低きに流れる。彼女の志に一致する存在はなかなか現れず、未だに眠り続けていた。

かつてアマッドネスの大賢者と呼ばれた存在。その名はスズ。

## EPISODE 37 「魔笛」

9月。二学期も始まり町に学生がまた溢れてきた。

清良。礼。順たちもそれぞれの学校で新学期を迎えていた。

夏休みの「合宿」の一件から三人は顔をあわせていない。

あの「仲たがい」で協力を仰ぐ気になれなかったのと、ひとりで何とかなるような相手が多かったためである。

一番数を残しているセーラだがライノセラスの一件で完全に福真署の特捜班を味方につけ、そのバックアップもあり順調に敵の数を減らしていた。

経験が積み重なり戦いになれてきたセーラと、やっとヨリシロを見つけて取り付いたばかりのアマッドネスでは話にならない。

もし今ここで初陣の相手であるスパイダーアマッドネスと戦ったら汗もかかずに倒すだろう。

ちなみに男を見下していた渡会のり子はとりつかれるという大失態を演じたこと。

そこをセーラに助けられたこと。

そしてアマッドネスと分離した際に傲慢な部分が吹き飛ばされたのが重なり、清良に対して友好的な態度をしてくるようになっていた。

男全体に対する偏見は元からあったらしく消えてはいないが、尊敬できるに値する相手なら男でも敬意を払うようになった。

ましてや清良は女に変身する。単純に普通の男相手より接しやすかった。

それを聞かされた清良の心中はやたらに複雑であったが。

ジャンスやブレイザも先に目覚めた分だけ手馴れている。

そしてのり子の働きかけでそれぞれの所轄の特捜班に戦乙女の存在を知らされ、全面バックアップとまでは行かなくても影ながらサポートくらいはされていた。

一般人を避難させ巻き添えの心配なく戦えるように。さらにはア

マッドネスそのものを無人のエリアに誘導したりして戦いやすくしていた。

こちらもそれで多忙であった。なにしろ定期的に行っていた情報交換会も中断している始末。

それもあり三人はしばらく顔をあわせていなかった。

それぞれの学園生活が始まればなおさら疎遠になりそうである。

だがそれは一本の電話でさえぎられた。

休み時間にかかってきた電話。発信相手は一城薫子。

内容は埼玉の山中に怪しい老人がいると。

それは警視庁によりアマッドネスの可能性が高いと目される「Bグループ」の一人だった。

Bグループ。それは実際にアマッドネスと言う物証も目撃もないものの、状況から見てその可能性が高い人物たちの仮称だった。

もちろんBに対するAは怪人として暴れた面々である。

そしてかねてよりその風貌から目に付いていたB - 7号。

人間としてはプロフェッサー。アマッドネスとしてはギルと呼ばれる存在の目撃例が寄せられていたので連絡があった。

接触している軽部は巧みに変装していたためB - 5号とはいわれているが軽部とはばれていない。

今まで都内限定で犯行を重ねてきた奴らがなぜか埼玉に。

これは確かめるくらいは必要であろうとの判断である。

屈強な二人の男を従えて「プロフェッサー」は山を昇っていた。

山といってもハイキングに適しているような低いものだ。

しかしロープ姿の老人とスーツ姿のSPと思しき男二人は山には異様であった。

「……ここか」

しゃがれた声で不気味な老人はつぶやく。どこか感慨深げである。  
「はっ」

左耳にピアスをしたサンングラスの黒服が答える。

「ギル様たちのなきがらもこの山に」

「そうだったな。そしてあの忌々しい大賢者もここに埋まっている  
というな」

老人はひどく苦々しい表情をして吐き捨てるようにいう。

無理もない。かつての自分を斬った相手だ。いわば自分自身の仇。  
友好的になど出来るはずもない。

「構わん。深く埋まっているならあの裏切り者に我が魔笛が届くとも  
思えんがな」

ギルが死んでから「大賢者」は「将軍」と相打ちになったのは聞  
かされている。

当時はミュスアシを侵攻するのを優先したため六武衆の「葬式」  
は1メートル程度の穴に埋められただけだ。

これは蘇らせる前に野犬などに食われないための『保管』の意味  
で。

だがその前にクイーンが封じられたので死体は既に土になってい  
る。

裏切り者であるスズはそんな処置をとるつもりもなく、とにかく  
深く掘って埋められた。

万が一にも蘇生しないようにと言う意味でだ。

彼は興味を失い、改めて場所を丹念に探す。

「ここだな」

雑草すらない不毛の土地。不法投棄された廃棄家電の山。冷蔵庫。  
洗濯機。家電ではないがまだ走れそうなバイクまである。

まるで墓標のようにごみの山がそびえている。ここはミュスアシ  
侵攻の前の戦で倒れた下級のアマッドネスたちを生めた場所。



六武衆同様に後に蘇生させる目的で死体を野生動物に食われないように埋めていた。

結局はそれが埋葬という形になった。

「ふふふふ。喜べ。お前ら役立たずどもがやっとクイーンのお役に立てるといっわけだ」

二人の大男にはない。「土」に向かっていつている。

老人は横笛を取り出して口に運ぶ。そして奇怪なメロディを奏でる。

そのころ、遠く離れた位置では清良が友紀を後ろに乗せて。

礼がサイドカーのカーゴに森本を乗せて。

ウォーレン・バイクモードを岡元が駆りジャンスが後ろにしがみついて急行していた。

それぞれ所轄の迎えが行くといわれていたが待つてられず。

放課後になるやいなや使い魔たちの変化したビークルで向かっていった。

清良の場合いくら簡単な調査といえど友紀を置いていきたかったが、本人がどうしても同行すると聞かない。

未だに罪の意識が消えていない。そう思った清良は簡単な調査だし薫子もいる。

気の済むようにさせようと同行を許可したのだ。

問題の山が見えてきた。キャロルが走りながら薫子と連絡をとる。そして進路を定める。

同様にしてきたのであろう。ウォーレンの転じたバイクとドーベルの転じたサイドカーが合流して来た。

合流地点はふもとの駐車場。まだ暑いがドライバーは外で待つていた。

長袖のシャツとパンツルック。山と言うこともありスニーカー。

女刑事だった。

「薫子さん。こんなにいらねーんじゃないの？」

停車して降りるなり一言いう清良。

確かに単なる調査に戦乙女三人は多い。

「うん。でもなんだかB - 7号はお供を連れてくるらしいのよ」

「爺さんのお供なら助さんと格さんだろ」

国民的時代劇に引つ掛けた清良のジョークだが本心のはずがない。本当にB - 7号がアマツドネスとしたらその同行者もその危険性が高い。

そうなる と確かに一人では手に追えない。

市街地なら警察の機能も十分に発揮できる。

だがいくら小さくても山は山だ。街中同様のバックアップは期待できない。

こうなるとこちらも三人いたほうがいいという薫子の判断だ。

「確かにな。こんなバカが一緒ではいつぞやのプールのように足を引つ張られるだけだ」

「ああ？ てめえこそ手も足も出てなかつたらうよ」

いきなり突つかかる礼。そしてきつちり反応する清良。

冷却期間がまるで役に立ってない。

「二人ともお久しぶりい。元気だったあ？」

ほとんど女の子であるジャンスは気遣いが出る。険悪な雰囲気になりかけた両者をその笑顔でいさめた。

毒気を抜かれた2人だがそっぽを向く。握手という雰囲気ではない。

「もう。キヨシもけんか腰にならないの」

ちよつとだけ罪悪感を抱く以前の友紀に戻る。

これまた女の子ならではのムードの換え方。

「だってこの野郎が」

「それはこつちの台詞だ。それになんだ。このひどくむかつくメロ

「デイは？」

「ああ。それは同感だ。なんかやたらに暴れたくなる」

心なしか清良と礼の目つきも凶悪な感じにとがっていく。

「ハイハイ。それじゃみんな行くわよ」

強制的に薫子がそれを流す。2人の仲の悪さを修復するのはまだ時間がある。その場はそう思った。

「ああ。その前に森本君と友紀ちゃん。あなた達は危なくなったら逃げて。他の人を逃がしたり県警相手の連絡を頼むわよ」

岡元。森本。そして友紀がそれぞれの相手と強い絆で結ばれているのはわかっている。

さすがにアマッドネスには及ばないまでも十分超人の範疇にはいる岡元。

礼。そしてブレイザの精神的支えになっている森本の同行は仕方ないと思った。

しかし友紀だけは女子と言うこともあり残したかったが、一人だけ残すのも不安。

それに未だに清良に対しての罪の意識が残っているのも薫子は理解していた。

だからその「罪滅ぼし」の一環として同行を認めた。

同性ゆえに気持ちは理解できると言うことらしい。

上空にウォーレン。前方をドーベル。後方をキャロルが固める形で一同は歩いていく。

埼玉の山中。悪魔の儀式は続く。二人の護衛は「気配」を察した。

「ギル様。どうやらねずみが」

「われらが追い払ってまいります」

一心不乱に笛を吹き悪魔の儀式を進行しているギルは返答しない。しかし腹心二人は心得ていた。

一方の戦乙女チーム。頭を押さえてひどく不機嫌にしている清良

と礼。

「会長。頭痛ですか？」

「キヨシ。お薬ならあるよ」

女性ならではの常備薬。鎮痛剤を友紀が見せる。

「いや。そんなんじやねえんだよ」

これは清良の返答。

「なんかこの…いやな音がいらいらさせる」

「うむ。確かに辛気臭い笛の音がな」

「まるで呪術というイメージですよな」

そう言う岡元。そして森本だが彼らはけろっとしている。

「ジャンスさんはどうです？」

「あたしもとりあえず平気。二人とも変身したらいいんじゃない？」

なるほどと納得は出来る意見だが二人はそれどころではなかった。

とにかくいらいらして仕方がない。そしてむやみやたらに破壊衝

動がつのる。

二人の目が合った。途端に火花が散る。あっという間に喧嘩にな

る。

「高岩あ。俺は前から貴様を斬りたくて仕方なかった。アマツドネ  
スを壊滅させるまでは利用してやるつもりだったが今日はなんだか  
我慢できん」

「だったらいいぜ。殴りあいならつきあってやる。てめえをぶんな  
ぐりゃこの気分の悪さも吹っ飛びそうだ」

互いに言いがかりとしかいえないような言い草でののしりあう。

とうとう互いの胸倉をつかむにいたる。

「ああ。会長。お気を確かに」

「清良もやめて」

「……割といつもと変わらない気がするけど」

空気を読めてないジャンスの一言。

そして二人はつかみあいの喧嘩を始める。

(私の眠りを妨げるのは誰だ……この笛の音は狂将か?)  
深い眠りの魂が地上の騒がしさに目を覚ましかけている。

「見つけたぞ。戦乙女ども。このカーサと」

「ギラが貴様らを始末してくれる」

ギラについていた2人のボディガードが守りでなく攻めてきた。  
やたらに戦意が高い。

「はははは。われらが力を見せてくれる」

カーサと名乗ったほうがいうと2人は黒光りする姿へと転じた。

どうやら甲虫のようだが区別がつかない。同一タイプ?

漆黒の甲冑をまとった騎士。そんな印象。カーサと名乗ったほう  
は太い槍を。ギラと名乗ったほうは半月刀を両手にもっていた。

「ジャンスは我が槍でしとめる。いいな。ギラ」

「それならあちらの2人はわが双剣で殺す」

「あ。そー言うこと。槍のあなたがカブトムシで、二刀流のあなたがクワガタね。メスだから角やあごが小さくてわかり難かったのね」  
相変わらず飄々としているジャンスの口調。

「余裕もそこまでだ」

「だがなぜ貴様は我が主の魔笛に心を乱されん？」

「どうやらこの笛。クイーンのかけらに働きかけるみたいだけど、  
あたしが一番その影響少ないのよね。おまけに普段からやりたい放  
題だから2人みたくストレスもないし」

ある一面でいうなら2人は女の姿を仕方なくとっているわけだが  
順というかジャンスは積極的にとっている。それだけでもストレス  
は違うだろう。

「そしてあなた達は逆にやる気満々になっているのね。なるほど。

それで伊藤さんと高岩さんはあんな好戦的だったのね」

分析して見せるジャンス。にやりと笑うビートルアマッドネスと  
スタッグアマッドネス。

「そして変身すればそのクイーンのかげらは抑えられる。だからあたしは影響受けないわけね」

すべて見抜いていた。

「頭はいいようだな」

「ならば力づくだ」

いふなりカーサことビートルアマッドネスは地面にやりを突き刺して掘り起こす。

「危ない」

そのまま 轟音をとどろかせて投げられた土の塊を自分が盾になって防ごうとする岡元だったが、さすがにそれは受け止めきれず背後の森本。友紀。薫子を自分の下敷きにしてしまう。

「きゃあっ」

塊自体は防いだが岡元の下敷きになったのもあり四人とも気絶する。

「はっ？ 俺たちは？」

「何をしていたんだ？」

瞬間的に正気にかえったもののまだ続く笛の音でまた狂気に犯される清良と礼。だが

「そうか！ ウォーレン」

ジャンスが機転を利かせた。ウォーレンを地面に下ろすとバイクへと変化させる。

そして思い切り爆音を。それが魔笛を無効化した。

「今よ。2人とも」

「お、おう」

再び正気に戻った二人はセーラとブレイザに変身する。

「くっ。3対2」

「やむをえん。引くぞ」

いきなり撤退する2怪人。深追いは厳禁というのがセオリーだがまだ魔笛の影響が残っていて戦意が高すぎる。

「キャロル」「ドーベル」

本来なら気を失った四人の護衛に使い魔をつけるはずの所を、自分たちの戦いの手伝いを優先させた。

使い魔達も心配ではあったが逆らえないし、諸悪の根源である魔笛を始末すればと思い従った。

戦乙女たちは2体を追ってこの場から消えた。

ビートルとスタッグを追っていた三人はギルの下にたどり着く。「見つけたぞ。このやろう」

既に時間が経っているにもかかわらず男の意識のままのセーラ。「貴様を斬れば済むと言うことだな」

ブレイザも伊藤礼としての意識のままだ。

(そうか。あたしたち戦乙女が男にばかり転生するのはこのかけらのせい。いわばかけらがあたしたちの男としての部分をつかさどっている。今はこの笛のせいで活性化しているから意識が切り替わらないのね)

もともと希薄で影響の少ないジャンスには状況がよく見えている。「くくくく。既に变身しているか。それではさすがに魔笛の効果も薄いな」

言葉と裏腹に余裕のプロフェッサーことギル。

「ならばわれも姿を変えよう」

両手でローブを持ち上げて前方に一気に引き下げる。

そこには薄汚い老人ではなく虫の異形がいた。

大きな複眼。屹立する触覚。独特の口元。

「バツタ？ いや…違うな」

「キリギリスじゃないかしら？ それでもホッパーだけど」

「それじゃ飛田たちと紛らわしい」

「だったらローカストとでも呼べ」

既に变身して厄介な魔笛は封じたので余裕。それゆえの軽口だった。

「ふふふ。確かにわれはキリギリスの異形。そしてこの姿で奏でる魔笛は先ほどまでとは違うぞ」

ローカストアマッドネスは今度は自身の体から笛の音を繰り出した。

「ぐあっ」「きゃあっ。なにこれ」「心が…心が壊れる」

既に変身して無効化したはずがもつと強力な魔笛によって心が乱される。

反対にカーサとギラはますます戦意を高揚させる。

それが狂将たるゆえんだった。

「闇に生まれし者は闇に帰れ。闇に生まれし者は闇に帰れ」

暗黒へといざなっている。アマッドネスの本能ともいうべき破壊衝動が極限まで高められる。

「高岩ああああ」

「伊藤おおおお」

戦乙女のまま2人は戦闘を開始する。

かろうじてジャンスは正気を保っていたが今度は平静ではいられない。そこにカーサとギラが襲い掛かる。

気を失った4人。その一人に（力を貸そうか？）と「魂」が呼びかける。呼ばれたほうとしては夢の中。まともに思考できない。

（アマ……ッドネス？）

（かつてはな。だがあんな愚か者どもとは縁を切る）

その「女」が向き直る。現代風に言うならストレートロングの涼やかな美人だ。

（私に体を貸してくれ。君になら受け入れてもらえると思う）

（力に……？）

（約束する。大賢者の名にかけて）

（…ならこちらからも頼む……）

（ありがとう）

そしてひとつの肉体と二つの魂が一緒になった。



「ぐ……」

ジャンスはギラの双剣で挟まれていた。まさにクワガタムシ。

「やれ。カーサ」

タツグ専門なのかコンビネーションが抜群である。武功よりも敵の殲滅を優先。止めを譲っている。

「ああ。奴らの首はお前に譲るからな」

気絶して男の姿に戻った清良と礼。クロスカウンターになったのとこの魔的で疲弊していたためあっさりと気を失った。

使い魔達も巻き添えで戦闘不能に。

ジャンス絶体絶命。逃げようにも両腕ごととはさまれて脱出も攻撃も出来ない。

まさに槍がジャンスの心臓を射抜こうかというとき、フェンシングのサーベルの刀身ようなものがギラの胸に刺さる。

ひるんだ隙にジャンスは脱出に成功した。

「何者だ!？」

すべての戦乙女はここにいる。戦士はいないはずだ。

「ひさし振りだな。ギル。相変わらず下手な笛だ。おちおち寝てもいられない」

その「女」は余裕の態度でいう。

「ま、まさか。われはお前まで蘇らせたと言うのか。その顔」  
ひどく狼狽している。

「ああ。協力してくれた相手が狙われてはかなわないからね。魔力で自分の顔にさせてもらった」

すつきりとした美人。黒髪をうなじで束ねている。衣装は現代風にライダースーツだ。

彼女は左手をわきにひきつけ、その手首に右手の手首を合わせる。そのまま反対側に運び、さらに中央に寄せて前方に突き出す。

上を向いていた右手の甲を下に。反対に下を向いていた左手の甲

が上に。

その瞬間にメタモルフォーゼが始まる。

顔の上半分を覆う仮面のような物。黄色をベースに黒いラインが走る。

黒い複眼。二本のアンテナ。しかし口だけは露出している。赤い唇が成人女性を思わせる。

胸元にもプロテクター。背中には翅の名残が二枚の白いマフラー。右手にもったサーベルを高々と掲げると顔の高さに引き下げ横へとなぎ払い名乗りをあげる。

「我が名はスズ。かつては大賢者と呼ばれたもの。そして今はアマツドネスを阻むもの」

EPISODE 37 「魔笛」 (後書き)

次回予告

「なんだ？ 知らないのか？ 奴らの魂がどうなったか」

「そうか。そのヨリシロ。誰かは知らぬがわれらとかかわりがあるか」

「既にこの拳は血塗られている。貴様らに向けるのにはためらう道理なし」

「まっつて。聞かせて。本当にあなたは何者なの？」

EPISODE 38 「賢者」

## EPISODE 38 「賢者」

「いよいよ狂将さまが出陣かい？」

セーラたちが苦戦するさなかと同じころの都内。警視庁からさほど離れてない場所の路上。

まるで女性のような美貌の男が猟犬のような目をした男に軽い口調で尋ねる。

「こんなところで話しかけるな。そうでなくても最近はお前とギルはマークされている」

死将・アヌの憑いた軽部が麗将・ライと交じり合った秋野をとがめる。

「情報屋と言うことにでもしておいてくれよ」

「ふん。詐欺師だけに口は達者だな」

この発言は軽部ではない。まだ暑いのに皮ジャンを着た男が二人に話しかけた。

もっともブーツにバイクグローブ。オートバイに乗るのであればこの装備ももっともである。

レイバンのサングラスで目元はわからないがニヤニヤとしているのは判る。

大柄である。リーゼントがよく似合っていた。

「容疑はかかっても逮捕はされてないよ。それで、何か知っているのかい？ イグレ」

「中屋敷純郎だろ。この姿の時は」

「ふっ。はぐれ者の名前なんてどうでもいいか」

「気取り屋の秋野がはき捨てるようにいう。」

「そのはぐれものを六人がかりで。しかも闇討ちしたくせにな」

中屋敷は挑発するように言う。いつもは飄々とした秋野も険しい表情に。

「また消してやろうか？ サザモルコもストもヨリシロと分離し

てしまったがもつと相性のいい相手を見つけさえすればすぐに復活してくる。そうしたらお前なんか」

「なんだ？ 知らないのか？ 奴らの魂がどうなったか」

「よせ。イグレ」

路上というのにアマッドネスとしての名前を口走る軽部。それほど拙いことを言おうとしている。

EPISODE 38 「賢者」

埼玉の山中。青ざめるギル。

「バカな？ はるかに深く埋めたはず。例えこの笛の音が届いても蘇られるはずが…そもそも貴様の魂と合致するヨリシロがこの腐れ

きつた世の中にいるはずがない」

「あまり人間を見くびらないことだ。邪心に満ちたものばかりでもない」

「人にそんな存在が……人？」

突然ギルが哄笑する。

「ふはははは。スズ？ スズだと？ その姿のどこがだ。その惨めな姿はどうだ。まさに人間のようではないか。栄光あるアマッドネスの大賢者とまで言われた貴様が惨めなものよ」

おかしくてたまらない。それとは違う。無理に笑って不安を吹き飛ばそうというのが本音。

何しろかつては六人がかりで立ち向かって疲弊させただけ。手傷すら負わせていないのだ。そして自らは斬り捨てられている。苦手意識もある。

だから相手は完全ではないと思いついて精神の平穩を保とうとしていた。

それに対してスズは極めて落ち着いている。大賢者とまで呼ばれた者の風格は伊達ではない。

「そうだな。胸から下は人のままだ。翅もない。顔すらこんな仮面のようだ」

綺麗だが大人びた低い声で冷静にいうスズ。

「だがこれでいい。私は貴様らのような『化け物』の姿はもうとらん。人として戦うから人に近い姿になったのだ」

「戯言を。大方は不完全な覚醒。融合だったのだろう。だからそんな中途半端。違うか？」

ギルのいう通りでもあった。スズの言葉はそれをごまかす「はったり」の側面もあった。

ただし彼女の言うこともまた真実。

「ふん。それよりも驚いたな。一度死んでもこれだけの愚行を繰り返すとは」

「蘇ったばかりでなぜわかる？」

「ここは冷静だったギル。」

「そうか。そのヨリシロ。誰かは知らぬがわれらとかかわりがあるか」

「私が誰であろうと関係ない。問題なのは貴様らの過ちだ」

「ならばとめるか？ 貴様の嫌う戦いで」

「暴力を暴力でとめる。大いなる矛盾。しかし」

「既にこの拳は血塗られている。貴様らに向けるのにはためらう道理なし」

「戦意を形に示すべく剣先をギルに向ける。」

「ふん。どちらにせよ人の部分が大きいならかつてほどの強さはない。あの翅を見る」

「スズの脅威はその飛翔能力にもあった。何しろ高速飛行をするルコでさえ敗れたほどだ。」

「しかし今は肝心の翅がない。飛べないスズになら勝てるとギルは思った。」

「やれ。まずは奴から倒せ」

「指示を受けてビートルとスタッグが襲い掛かる。」

「ギルの切り札である魔笛だがスズもまた一応はアマッドネス。」

「つまりギラとカーサだけでなくスズの戦闘意欲まで高揚させてしまうので使えない。」

「もしもセーラとブレイザが無事なら笛で暴走させて混乱に乗じる手もあったが気を失っている。」

「よりによって自身の魔笛がその状態に追い込んでいた。」

「結局は2人の守護者に頼らざるを得ない。」

「都内。青ざめている秋野。衝撃的な事実を告げた中屋敷はニヤニヤしている。」

「そ、そんなバカな。奴らはもう……」

「ああ。クイーンに『食われて』いるはずさ」

「アマッドネスの異形に転じる力はクイーンから与えられた魔力に

よるものである。

そして女王自身は戦乙女に受けたダメージゆえ完全復活には程遠い。だから力を取り戻そうとしていた。

「嘘だろ。アヌ。こいつの嫌がらせだろ」

いつもの余裕がかけらもない秋野。それに対して軽部は首を横に振る。

「今まで倒されたアマッドネスに与えていた魔力を取り込むことでだいぶクイーンは復調してきている。だがまだ足りない。だからギルはまだ埋もれている魂を掘り起こしに出向いた」

彼はそこまでいうと遠くへと視線を送る。その方角にはとある病院が。

「そ、それじゃアストたちは？」

まったく余裕のなくなった秋野。

「ああ。今度こそ完全にくたばっている。ま、一度死んでいるんだ。ちよつとでも生き帰れていいじゃねえか」

これは中屋敷ことイグレの言葉。

「お前も気をつけるんだな。今度死んだらもうだめだぜ」

その言葉で仮に死んでも別の肉体に取り付けばいいと気軽に考えていた秋野…ライは蒼白になる。

「そんなことを言いに来たのか？」

既にその覚悟は出来ていた軽部ことアヌは騒がない。

「そうだな。本題にはいるか」

真正面から軽部を見据える。

「俺を使えよ。108の魔星も残りわずかだ。ギルが掘り起こしているのはそれに入れず捨て置かれたくずども。そんな奴らでは戦力になるまい」

凶星だった。108と言うのはあくまでミュスアシを実際に攻めた敵兵の数。

実際にはその前に倒れていた者たちもいる。合計で200を上回る。



だが大多数は単純な物理攻撃で倒される程度の「人間より多少はまし」と言う程度の異形だった。はつきり言えば女王が復活のために取り込む目的でギルは下級戦士の墓を暴きに出向いた。

とある病院。人として眠る女王。その顔色が見る見るうちによくなっていく。

彼女は意識しないままにまるで植物の根が水を吸い上げるように下級戦士の魔力を取り込んでいた。

中屋敷がやっと本題に入る。

「そろそろ手を打たないか？ 闇討ちは水に流してやるからさ」  
上へのし上がるうというシンプルな願いだった。

「断る。お前のような危険な奴。われら六武衆の一員に出来るか」  
下手したらガラ。そしてクイーンにすら手を出しかねない。  
だから六武衆総出で闇討ちで葬った。

「六？ 三人だろうが」

「一人でも十分だ。ガラ様には私一人がいればいい。私にとってもガラ様がすべてだ」

忠誠心は女王より將軍に向けられていた。

「おーお。相変わらずお熱いことで」

再びからかうようにいう。あろうことか頬を染める「アヌ」そして「軽部」

（そつだ。誰も私とガラ様の間には入り込めない。例えクイーンであつても）

確かに忠心というよりは「恋している」ような表情だった。

そのとき中屋敷の携帯電話が鳴った。

「ちっ」

彼は舌打ちしてそれをとり通話。終わらせて

「話は後だ。表稼業でお呼びだからな」

「ああ。そついや一斉捜査だったな」

「そつ言うこつた」

中屋敷はふざけて警察手帳を出して見せる。

軽部や三田村同様の警察官が今の社会的身分だ。

中屋敷が去つても秋野は青ざめたままだった。

スズメバチの異形だからかまさに「蝶のように舞い蜂のように刺す」という戦い方だ。

カーサの槍もギラの刀も獲物を捕らえられずにむなしく空を切り裂く。

しかしスズの方も決定打がない。二体相手にかわすのが精一杯に見える。

(ならば)

スズはカーサの槍を巧みにさばきながら背中をギラに向ける。

(がら空きだ)

ギラは二本の刀をはさみのように交錯させる。クワガタのあごのように挟み込む目的だ。

固定したところをカーサの槍が貫く。だが事はそれほど単純でもない。

(くくく。寸前で身をかわして私の槍でギラを貫かせ)

(あわよくばこの剣でカーサを斬りつけさせ同士討ちを狙っているのだろつ。だが)

コンビネーションは抜群。その手の状況の想定は出来ている。

最初からその交錯した刀を狙って貫く。

万が一かわされてもパートナーを刺し貫くことはない。だからためらわずに槍を突いた。

そして予測どおりスズはかわした。

右か左ならそのままギラの刀のどちらかが斬りつける。それ以外ならそのままカーサの槍が再び襲い掛かる。

逆手にとつたはずだった。

なんとスズはその槍の柄に飛び乗った。恐るべき身軽さ。

「飛べないなら跳ぶまで」

皮肉にもギラの双剣がカーサの槍を支えているので安定している。そして槍で押さえられて「はさみ」を解除できない。

「こ、こいつ!？」

そのままスズはカーサの方へと駆けよる。

そしてカーサが槍を手放す前に顔面にひざを追いきり打ちつけ鼻の骨を砕く。

「ぐあっ」

これはいくらなんでもたまらずひるむ。そこへ追い討ちでスズの剣が腹部を十字に切り裂く。

甲は頑強でも腹部は違う。戦闘不能に。

「カーサ」

ギラが援護しようにもその獲物では届かない。その目前でカーサに弾丸が雨あられと浴びせられる。

「なに？」

スズにはかり気をとられていた。ギルが弾丸の出所を見るとジャンスが復帰していた。

いつの間にか超変身までしてロリータフォームで乱射していた。

「ぐおおおおっ」

断末魔の叫びをあげてカブトムシの異形が爆裂する。

「お、おのれ。よくもカーサを」

相棒を失い激昂するクワガタムシの異形。だが時間経過で復活したのはジャンスだけではない。

「「変身!」」

失念していた。これまたいつの間にか気絶から目覚めた清良と礼が変身。

即座にキャストオフ。そしてブレイザはスタッグアマッドネスに。セーラは「ホーネットアマッドネス」に突進する。

「セーラさん。そっちは違う!」

事情を知るジャンスが制止する。

「なにがだよ? アマッドネスじゃねえか」

目が覚めたら異形が増えていた。そういう認識である。

さらに言うならギルの魔笛の影響が両者共に残っていた。だからこんな不意打ちに近い戦い方だ。

そのギルだがビートルアマッドネスのカーサが倒された事で不利を悟る。

(くっ。この姿で魔笛を奏するのは隙を作るだけだ。ジャンスがフリーだからな。ならば間合いをとるまで)

遠方から魔笛による攻撃を試みるべくギルは早々に逃げ出した。

「あつ。くら」

セーラと違いロリータフォームやアリスフォームを長時間維持出来ないジャンスはヴァルキリアフォームになっていた。

あわてて二丁拳銃を撃つがまんまと逃げられた。

「だああああつ」

ブレイザ・ガイアフォームが力任せに斬馬刀を振り下ろす。

攻防一体の双剣で受け止めようとしたギラだが過信だったようだ。剣もろとも唐竹割りに真つ二つ。直後に爆発した。

残るはセーラとスズの戦い。

セーラは拳を見舞ったと思ったたら足技。場合によっては背後をとって投げ技まで試みようとしている。

それを軽やかにかわし続けるスズ。しかし足止めを受けてしまいギルの逃亡を許してしまった。

「よせ。ギルが逃げてしまうぞ」

「なにを寝言を。貴様もアマツドネスだろうが」  
過剰に引き上げられた闘争本能で聞く耳を持たないセーラ。  
すさまじい数の拳を繰り出す。

それを見事に捌ききるスズ。受け流すと言う感じである。

「この」

だがギルの笛の音が途絶えてだんだんに精神の女性化が始まっていた。

そうなると冷静さが戻ってくる。

（あれ？ こいつ…そんなに化け物じみてない？）

化け物どもにしてはフォルムがやたら人間的と気がつく。

間合いをとりつつ視線でけん制。しかし攻撃はやめて問いただす。

「あなたは人間なの？ それともアマツドネス？」

「その答えは後だ。奴に逃げきられたら厄介だ」

既にだいたい距離をとられた。スズは走り出した。セーラが後を追うが意外に速くて追いつけない。

スズの目指したのは不法投棄されたごみの山。

その中のぼろぼろのバイクが目的だ。右のハンドルが折れたのになくなっている有様。

「おまえも私と同じでうち捨てられていたのか？」

優しい口調で語る。

「ならば私と共にこい。鉄の馬よ。私の足となれ」

スズはそのレイピアを右ハンドルの位置に差し込む。

セーラが伸縮警棒をマーメイドランスに変えるのと同様にそのオフロッドバイクが蘇る。

スズの体色と反対に黒地に黄色いラインが走る。

「まるで稲妻だな。よし。闇を破るもの…ダークブレイカーがお前の名だ」

ひらりとまたがるとギルを追跡し始めた。

直接戦闘に長けていないギルはほうほうのていで逃げ出していた。  
（なんと言う失態だ。任務をしくじったばかりか敵を一人増やすとは。このままでは役立たずとしてわし自身が食われる）

ギルは立ち止まり呼吸を整える。

（失態を補うにはなんとしてでもここでスズだけでも始末せねば。  
今なら戦乙女どもとスズだけ。奴ら同士で戦わせる）

ギルは魔笛を奏でるべく構える。それが命取りであった。

「まちなさいよおおっ」

キャロルが戦闘不能のためセーラはフェアリーフォームで飛んで追いかけていた。

しかし山の中ゆえ木の枝が邪魔で思うように飛べない。

スズの方は道を行くのでそう言う障害はない。

ならばと低い位置を飛びたいところだが、自身が作り出す空気の衝撃波を受けてしまうためその手も有効ではない。

結局はついていくのが精一杯だった。

ついていくのが精一杯なのはスズの卓越したライディング技術も要因のひとつ。

（なんてバイクテクニクなのかしら。ヨリシロはバイクの心得がある？）

以前に戦ったホッパーアマッドネスのケースを思い出す。

ただスズはバイクが上手いと言うよりバランス感覚が鋭いと言っべきであるが。

そして両者はついにローカストアマッドネスに追いついた。

「ば、バカな。そんな事まで!？」

バイクの事をさしている。完全に予想外の早さで追いつかれた。

「観念して地獄に帰れ。貴様自身が言っていたのだ。闇に帰れと」

敵対しているからか男言葉のきつい調子でしゃべる大賢者。ひらりとバイクから飛び降りてギルに向かい合う。

「おのれ」

幸いにもセーラがついてきていた。それを暴走させて争わせてまた逃げようと魔笛を奏でようとする。

「無駄だ。もうその手は利かない」

ダークブレイカーの排気音でかき消される。

「うつつ」

ギルが狼狽した隙にスズはバイクからレイピアを引き抜き、そのまま斬りつける。

「ぎゃあああつ」

そこは怪人の姿のときに魔笛を奏でる器官。勝負あった。

「わ、私は生きていたい。このハイワードの持つ知識を吸収したい。それだけだ。もう人間を襲わない。見逃してくれ。スズ」

恥も外聞もなく命乞いを始めた。

「貴様も私もこの時代に生きていていい存在ではない。あるべき所に帰れ」

スズはかがむと右足の脛にレイピアをくりつけける。

「はっ」

短い気合と共に彼女は跳んだ。空中で一回転。翅だったマフラーが躍動感をかもし出す。

「ホーネットステインガー」

高い位置からスピンしながらのキックがギルめがけて繰り出される。

命中したそれはギルの腹を引き裂いた。

「ぎゃああああつっつ」

レイピアの先端がまさにドリルのようにつがつ。

（え、えげつない）

非情な戦いにあるうことがアマッドネス怪人に同情してしまうセーラ。

むしろスズの容赦のなさに反感を抱いたと言うべきか。

「セーラ。最後は君だ。早くしないとヨリシロが死んでしまうぞ」

「あ、あたしに命令しないでよ」

「アマッドネス」に命令されてはたまらない。しかし実際に「虫の息」の相手がいる。

こちらを優先せざるを得ない。

セーラは左手のチョップを見舞う。凍てつくローカストアマッドネス。

「せーのっ」

低空から太陽めがけての炎のアップー。

十字に切り裂いた部分から炎が噴出し、キリギリスの化け物は爆発した。

狂将・ギル。戦死。六武衆の残りは死将・アヌと麗将・ライのみ。

「セーラさーん」

ジャンスの声が聞こえてきた。ブレイザともども走ってきた。

「敵は？」

「倒したわ」

セーラの指し示す方角には老婆が。ヨリシロのハイワードが既に高齢だったため女性化しても美人とは行かなかった。

「終わったな」

バイクにまたがるスズ。

「まって。聞かせて。本当にあなたは何者なの？」

真摯に見つめるセーラ。仮面越しに受け止めるスズ。

「四人目。第四の戦乙女ではだめか？」

スズは軽口をたたく。

「えっ？ 四号？ アナザーヴァルキリア？」

食いつくジャンス。

「もうちよっどひねりなさいよ。勝利への力と言っならVicto



ry Forceで」

「もう少し頭をお使いなさいな。四人目の戦乙女ならValkillia 4thで」

「Vフォース」

綺麗にセーラとブレイザの声が八モる。顔を見合わせる2人。そして

「なにそれ？ 信じられない。だっさいセンス」

「お黙りなさい。セーラさんこそ人のことはいえないのではありませんこと？」

また喧嘩だがギルの笛の音によるものと違いじゃれあいのようなものだ。

「私はスズだ。それだけの存在。そして敵の敵は味方と言うことだ」  
確かにギルはスズを敵視していた。この言葉は信憑性があるなど三人は思う。

「でも信じられないわ。あたしたちを信用させる芝居じゃない？」  
セーラの言葉はもっともである。しかし仮面越しに哀しげな表情が見えるスズ。

「君たちがどう思おうとかまわさない。だが私は君たちの味方だ」  
それだけ言つとエンジンをふかす。

「また逢おうつ」

まさに風のように消えていった。

呆然と残された戦乙女たち。

徒歩で仲間たちの元へと戻ろうとしている戦乙女たちは、スズの正体について話をしていた。

「何者だったのでしょうか？」

「アマッドネスの内部分裂かな？」

「とりあえず信用するのはまだ早いわ。味方なんていつていたけど」

（（（味方？）））

三人とも恐ろしい考えが浮かぶ。

（そう言えばお姉さま。正義のアマッドネスなら体を貸してもいいと）

（あの強さ。番長がヨリシロなら納得だわ）

（まさか森本が私を案ずるあまりあのアマッドネスの言葉に乗ったのでは？）

既に一度憑かれていた友紀は除外されていたものの、きわめて身近な人物が謎の女戦士になった可能性を思うと勝利を喜ぶ気分ではなくなっていた三人だった。

そして都内では

（やってやる。食われる前にこちらが逆に取り込んでやる。そのためには魔力を吸収して強化せねば）

ライが保身のため裏切りを決意していた。そして標的は？

EPISODE 38 「賢者」(後書き)

次回予告

「君もどうせなら男相手の方がいいだろう」

「な、なんて破廉恥な」

「そうよっ。するならあたしにしてくれたらよかったのにな」

「あたしお嫁に行く時はやっぱりドレスね」

EPISODE 39 「喪失」

## EPISODE 39 「喪失」

とある女子高の放課後。

帰宅する生徒や部活動にいそしむ生徒でまだ活気がある。

そこにその「男」は現れた。

「ちよつと？ 誰あれ？」

不審な男に対してもっともな反応を示す乙女たち。

「でもかつこいいかも」

その「不審者」は端正な顔をしていた。

「やあ。君たち。ちよつと頼まれてくれないかな？」

美青年はとろけるような笑顔で甘い声を出す。

「は、はい。何でしょう？」

その「王子様」ムードに酔わされた少女たちはあっさりと警戒心をなくす。

「メッセンジャーになって欲しいのさ。戦乙女たちに対してのね」

「ハイ？」

女子高生たちにとっては意味不明の一言を発すると美青年：秋野

光平は異形へと転じる。

原色で彩られたサイケデリックな体色が毒々しい。

髪型がマッシュルームカットと言うのはしゃれにもなっていない。

その上にベレー帽のように「きのこの傘」が。

秋野：トードスツールアマッドネスがその正体を現すと、少女た

ちはアイドルに向けるのとは違う悲鳴をあげた。

「これはご褒美の前払い」

頭部の傘から発生した毒胞子を伊吹に乗せて少女たちに吹き付ける。まるで「投げキッス」のようだ。

「きゃあっ」「ひゃっ」

毒を吹き付けられて悶絶していた少女たちだが意思の光を失い暴れだした。

「あはははは。いいだろ。受験とか悩みを忘れられてさ」  
芝居じみた口調で台詞のように言うトードスツール。  
(この騒ぎを聞きつけて早く来い。戦乙女ども)

## EPISODE 39 「喪失」

そのころ、清良。礼。順の三人は福真署の応接室で情報交換会をしていた。

警察の協力を取り付けられたこともあり、そして学生を巻き込まないようにとここで情報交換をするようになっていた。

それはもちろん警察に対して情報を流す目的もある。

「薫子さんは？」

「カオルは…一城刑事は別件で今日はこれないわ。代わりに私が参

加するわ」

口調が柔らかくなっているがこれは渡会の子警部補。

ライノセラスに取り付かれた一件で浄化の際にこうなった。

「ああ。いいけどさ」

あまりの豹変に戸惑う清良。気のせいか化粧も身だしなみ程度からもう少し華やかなものになった。

女性である。むしろ私服での捜査ならそのくらいの方が自然。

(変われば変わるもんだな)

この言葉がまさか自分自身に降りかかるとは思いもしてなかった清良である。

「それでは早速ですが」

やましいことはなくても警察署は居心地が悪い。手早く済ませようと順が切り出したが署内に放送がある。

『……女子高等学校でアマッドネス出現。対策班は至急急行せよ。繰り返す。』

「女子高？ 奴らいつもなら男を狙うのに？」

「話は片付けてからにしようぜ」

やはり居心地の悪い清良が飛び出していく。

「三人とも。パトカーで行くわよ」

順。礼は地元ではない。地元の清良とてこの学校には縁がない。まとめて運んでもらえるなら助かるのでその提案に乗った。

警視庁。歯噛みしている軽部。

(どういつつもりだ？ ライ。裏切るのか？)

アヌもガラも指示など出していない。独断だ。

抑えにすぐさま出向きたかったが対策班が出ている以上はいきなり本庁の面々が出向いては不自然。

ゆえに応援要請が入るまでは動けなかった。

「そこまです。アマッドネス」

パトカーから降りてきた三人の戦乙女。

車での移動は変身場所を確保できるメリットもあった。

とりあえず敵の系統がわからないのもあり防御形態のエンジェルフォームの三人。制服姿の戦乙女たち。

それだけ見ていると女子高生がパトカーで送られてきたようだ。

「来たね。お姫様たち」

芝居を続けているトードスツール。

「白昼堂々とはいい度胸ですわ」

早いうちに変身したらしくブレイザとしての口調だ。

「この方が都合がよくてね」

あくまでも優雅に振舞うライ。だがそれはむしろ「あせり」を隠すもの。

「あなたの都合なんか知らないわよ」

気がついてないのかたけるセーラ。

戦乙女たちは攻撃を仕掛けたかったものの周辺に奴隷女たちがいるので様子を見ている。

攻撃してこないのを見越して「芝居」を続けるライ。

「自己紹介をさせてもらおう。僕はアマッドネス六武衆の一人。麗将。ライ」

どこか挑発ともとれるしぐさだ。

「六武衆の残り二人の一人が出てきたわけね」

過去の強敵を思い出して身構える。

「それにしても『僕』？ まだ男の人格が残っているのかしら？」

「いいや。聞いているだろ。アマッドネスは女だけの組織と。そして女同士でいい仲になるものもいると」

「すると」

怖い考えになる本来は男なのに今は少女のセーラとブレイザ。

ジャンスだけはなぜか目を輝かせている。どうやら順の時は「オタク少年」だがジャンスになると「腐女子」のようだ。

「そう。僕はずっと男役。いつしか女の子しか愛せなくなっていて

ね

「へ……変態」

「人の事が言えるのかい？ 体は女で心は男なんて君たちが」

「うっ」

確かに今は男とは言えない。しかし完全に女かと言うと心のどこかに男の部分が残っている。

「それを僕が治してあげるよ」

言うなりライは毒胞子を飛ばす。

「危ない」

セーラは瞬時にキャストオフ。そして超変身してフェアリーフォームに。

リボンを振り渦を巻き空気の壁でブロックした。

「お行きなさい」

ブレイザの一言でパトカーは去った。足手まといにしかならないと察したのだ。

「ちよつと厄介ですね」

弓でけん制しながらジャンスがつぶやく。

下手に爆発させると毒胞子が爆散しかねない。それで射撃をためらっている。

火薬を爆発させての爆発ではないのだ。燃え尽きる可能性は低い。さらに言うなら奴隷と化した女子高生たちがたむろしている。

射撃は弾丸がすり抜けるから問題なくとも爆発は拙い。

不思議な事にたむろしているだけで攻撃を仕掛けてこない奴隷娘たち。

まるで異形を守っているかのようだ。

「だったら奴だけグラウンドに連れ込むわ」

土のグラウンドならスプリンクラーがあるのを期待出来る。それで胞子を叩き落とす。

なかったとしても広い所なら被害をとどめることが出来る。

飛んだセーラは一気に奴隷娘たちを飛び越えてトードスツールに



接近し抱え込もうとしたその瞬間だ。

毒キノコの異形は美青年の姿に戻る。

「えっ？」

戸惑うセーラ。どうして戦闘形態解除なの？

その躊躇いが隙を生んだ。抱え込もうと密着を試みたのがセーラの不運。

「君もどうせなら男相手の方がいいだろう」

いふなり秋野はセーラのあごに右手をかける。左腕をセーラの背中に回すとまさに電光石火の早業で唇を奪う。

「!？」

セーラは大きく目を見開いて驚いている。せめてもの救いは精神が女性化していた事。

男の精神のまま男にキスされたらその屈辱は計り知れない。

「なっっ？」

あまりに予想外の出来事に面食らうブレイザ。女性の精神のためか赤面している。

「ず、ずるいつ。セーラさん」

思わず本音が出たジャンス。色ボケと言うより女として扱われてと言う意味である。

「むーっむむーっ」

当の本人はそれどころではない。男に唇を奪われもがいている。窒息寸前だ。

秋野は文字通り「唇を吸っている」。何かセーラの体内から搾り取られている。

やがてセーラはおとなしくなった。ぐったりとして崩れ落ちる。

その姿がセーラー服姿に戻る。

「ふふ。ごちそうさま」

口をぬぐいながら笑みを浮かべる秋野。

「な、なんて破廉恥な」

「そうよっ。するならあたしにしてくれたらよかったのっ」

「……ジャンスさん？」

「……すみません。つい」

赤くなつてうつむくジャンス。完全に調子が狂っている。攻撃のタイミングがつかめない。

「ふう。さすがにお腹一杯だ。今日はここまで。次はブレイザかジャンス。君たちのどちらをもらうよ」

異形に転じると毒胞子の煙幕に隠れて逃げた。支配を逃れた女子高生たちが気絶する。

「あいつ……なにがしたかつたんですの？」

「セーラさん。起きて。起きてください。キスの感想を聞かせてくださいよ」

「先を越された」悔しさで場違いな事を口走っているジャンス。

「いい加減にためき寝入りはやめてはいかがです？ セーラさん」  
戦乙女たちの変身は意識が途絶えたとリセットされる。

少女の姿を保っていると言うことは気を失っていないと判断しての発言である。

だがセーラは目覚めない。呼吸はしているから死んだわけではない。  
い。

すると眠っているわけだが元に戻らないのは？

「おかしいですね？ 調べましょうか。ドーベル」  
同行していた黒犬の従者を呼び寄せる。

「セーラ様。失礼いたします」

一言断るとその鼻でかき回る。

「ドーベル。私もやるわ」

セーラの使い魔。キャロルも何かを嗅ぎ取ろうとしている。だが見つからない。

狼狽しているキャロル。それに対し元々の性格で冷静に対処出来ているドーベルが報告する。

「セーラ様にはクイーンのかけらがほとんどありません。だから男の姿になれないのだと思われまます」

「つまり奴の目的はあたしたちのクイーンのかげら。そして」  
「セーラさんはずっと女の子のまま……」

とりあえず警察病院へと運び込まれるセーラ。  
徹底して調査されるが健康体そのものである。ただし女性としての。

目覚めないのもあり様子を見るべくベッドに運び込まれる。

「キヨシっ?」

「セーラちゃん?」

連絡を受けて友紀と薫子が駆けつけてきた。

それに静かにするように注意する順。未だにセーラは眠っていた。  
「寝ているのに女の子のまま?」

「そうなんです。どうも男の部分を根こそぎ持っていかれたらしく」  
「そんな……」

目を開けて欲しいが起きてからの変化が怖い。そう思っていた友紀。

だがここでセーラは目覚めた。

「……お姉さま……友紀も」

「お姉さま」…セーラが女性化していると薫子をこう呼ぶ。  
女の心であるらしいと絶望感が友紀を襲う。

「あたし……そうだ!」  
意識がはつきりしたら屈辱的な出来事を思い出した。

「聞いてよ! 友紀。あたし、あたし」  
突然半身を起こしたセーラは目に涙を浮かべて訴える。

「知らない男にファーストキスを奪われちゃったのよ。もう悔しくて」

男でも最初のキスには大きな意味はあるだろう。しかしこの悔しがり方はまったく女の子そのもの。

「忘れよう。ね。そんなの数に入らないし」

あまりにセーラが女の子としての怒りを見せていたため友紀も思わず女同士のなだめ方になる。

「薰子おねえちゃん」

騒ぎを聞きつけて小さな闖入者だ。

「あら。葉子ちゃん」

夏に過労で倒れてこの病院に担ぎ込まれた薰子。

その際に知り合った幼女。未だに入院していたらしい。

「遊びにきてくれたんだね」

嬉しそうに無邪気に笑う。

「うん。お友達のおみまいなの」

しゃがんで視線をあわせて微笑む薰子。

「おともだち？」

葉子はセーラを見る。涙を流しているのを知るとかけだして行った。戻ってきた際に手にしていた一輪のバラをセーラに差し出す。

「これをあげるからもう泣かないで。おねえちゃん」

こんな幼女に諭されるなんて。セーラは恥ずかしくなった。

同時に真紅のバラの美しさに目を奪われる。

（入院患者に花束の見舞いは普通だが）

（バラと言うのはちょっと珍しいチョイスですよ）

バラは香りがきつく見舞いには向いてない。礼と順はそれが引つかかっていた。だが本人は気にしてないようだ。

「ありがとう」

礼をいい受け取ったセーラはとげの有無を確認して髪にバラをさした。

「似あう？」

「お姉ちゃん。綺麗」

「うふふ。ありがとう」

綺麗と言われて優しく柔らかい笑みで返す。普通の女性以上に女性的だった。

検査結果がでて帰宅の許可が出たので退院した。

ベストにブラウス。ロングスカートと秋を先取りした姿に転じたセーラ。

「文学少女風かしら？」

ここまでシックなのも彼女には珍しい。

沈み込む友紀と薫子。礼は無視しているが順はもう我慢の限界だった。

「変身」

小さくつぶやくと一気にワンピースの上からカーディガンと言う姿に転じる。

「セーラさん。お腹空きませんか？ ケーキの美味しいお店を知っているんですよ。いきましょ。女の子どうしで」

セーラがあまりに女の子らしくしていたので自分ももう抑えきれなかったのだ。

「ホント。行く行く。ケーキ大スキ。あ、でも太ったらやだな」

「平気ですよ。あたしたちまだ成長期ですし」

「まだ（胸を）育てる気か？」

完全に蚊帳の外の礼がぼやくように言う。

「礼も変身しちやいなさいよ。女同士で親睦を深めましょ」

「断る。何で貴様なんぞと」

相変わらずの礼だがセーラの反応は違っていた。

礼の腕に自分の腕を絡めてきたのだ。

「……なにをしている？」

「もう。礼ったら。一緒に戦っているんだから仲良くしましょうよ。ね」

最初は口を尖らして。後半は笑顔でセーラが言う。

「……おまえ、何者だ？」

思わず聞きたくなるほどいつもと違う。

「通りすがりの戦乙女よ。覚えておきなさい」

場違いなボケをするジャンスであった。

「とりあえずは平気みたいね。私はいろいろ調査してくるわ」  
薫子は職務に戻る。

「ごめん。あたしは帰るね」  
あまりに女性的な「清良」の姿を見るに耐えなかったのか友紀もその場から去る。

残されたセーラ。礼はジャンスの案内で目的の店に。

とある店のショーウィンドー。礼はいたたまれなくなっていた。  
なにしろ展示してある純白のウエディングドレスにジャンスはともかくセーラもうつとりと見入っていたのだ。

「……いいわねえ」  
美術品にため息と言っ感じではない。明らかに女として夢見る表情。

「いいですよねえ」

「あたしお嫁に行く時はやっぱりドレスね」

「にあうと思いますよ。あたしは番長が望んだほつで」

「嫁に行く気か。貴様ら」

「あら。女の子の夢じゃない」

これはジャンスでなくセーラの言葉。完全に男性性を喪失している。

「まったく…変われば変わるもんだな」

もともと女らしくなるセーラではあったが、ここまでではさすがになかった。

喫茶店でケーキを食べつつアイドルの男の子について盛り上がっていた2人。

礼はコーヒーを渋い表情ですする。

「ここ、いいかしら？」

大人びた声がする。視線を向けるとスーツ姿の女性がいた。黒く長い髪を無造作にうなじで留めている。

「席なら他にも……おまえはっ!？」

素顔を見ていない礼だが声に覚えがあった。

「もしかして……アナザーヴァルキリアのスズさん？」

ジャンスは素顔を見ている。ただし「生前の顔」のためヨリシロの正体はわからない。

「違う。Vフォースだ(よ)」「」

綺麗にハモるセーラと礼。苦笑するスズ。二つ名のことはスルー。失礼するわね」

戦闘でないせいか。あるいはまだ味方と認識されていない相手を刺激しないためか柔らかい女言葉でしゃべっていた。

紅茶を注文するとセーラに向かい「災難だったわね」と慰める。

「べつに。数に入りませんよ。あんなの」

やっと折り合いをつけたのにキスされた事を思い出して不機嫌になるセーラ。

「それよりあなたは敵なの？ 味方なの？」

「信用出来ないのならアマッドネスの敵とでも覚えておいてくれればいいわ。あなたたちの敵にはならないわ」

「それならこいつをこんな状態にしたライとやらについて教えてもらえないかな？」

情報を流すことをためらえば敵に属していると礼は考えていた。

「麗将・ライね。合戦より暗殺とかが得意なタイプ。能力は毒胞子を飛ばしての攻撃。これは吸ったり付着すると大変だけど射程距離はないし付着し損ねた場合は太陽光ですぐに死ぬわ。ただ奴自身は負傷をすぐに再生できるの。そちらが厄介かしら。それと相手のエネルギーを吸収出来るわ」

「そいつは理解している。だからこんなことになっている」

礼の表情が苦々しいのはコーヒートの苦味だけでもない。

「じゃあ昼の広いところで倒せば？」

「被害は抑えられるわ」

「セーラさんの作戦は間違いじゃなかったけど、逆に言えばああならざるを得なかった」

「奴の狙いはまさに俺たち。だから不利な真昼間に暴れておびき出したか」

「でも…奴が魔力を取り込んで強くなるのは問題だけど、あたし自身としてはなんだかさつきりしているのよね」

それまで男と女を行ったり来たりしていたのが女に固定。

さらには戦乙女の関係を打ち壊すようになっていた原因が取り除かれて本来の友好的な態度も蘇っていた。

だから礼に対して腕まで組んで見せた。

「お待たせしました」

スズの分の紅茶が運ばれてきた。彼女はそれを一口のむと本題を切り出す。

「セーラ。過去のあなたはいざ知らず今のあなたたちは少年としての部分もあるのよ。それを簡単に手放さないで」

「話はそれなの？」

意外に感じていた。

「敵の情報をあげたでしょ。六武衆はもう一人生き残りがいるわね」

ブレイザが邪将スストを。セーラが飛将ルコを。ジャンスが剛将サザを。

とどめはセーラだがほとんどスズがギルをそれぞれ倒した。ライを除けば残り一人。

「その名はアヌ。ジャツカルのアマッドネスよ。でも今はライにだけ集中したほうがいいわね。理由はわからないけど奴は魔力を取り込んで強化を試みている。あなたたち2人にも狙いをつけてくるはずよ」

それだけ言うと彼女は立ち去って行った。



そのころ、ライは人知れず苦痛にうめいていた。

(こゝ、これが更なる強大な女王の魔力。なかなか吸収出来ない…)

翌朝。友紀はひどく驚かされた。

なんと学生カバンを手にしたセーラが呼びに来たのだ。

「まさか、そのまま学校にいくつもりじゃないよね？」

「何で？ 学生なんだから学校行かなきゃ」

清良が不良のレッテルを貼られている割に律儀なのは元であるセーラの性格ゆえと理解した。

いくら説得しても聞かず。とうとうそのまま登校をする派目になった。

## EPISODE 39 「喪失」 (後書き)

### 次回予告

「まさか高岩までやられたのか？」

「ふう。やっと吸収できたか。さて。何が出来る？」

「ライ。セーラから奪った物を返してもらっぞ」

「乙女の唇をもてあそんだ罪。うけてもらっわよっ」

EPISODE 40 「少女」

## EPISODE 40 「少女」

男子校だった福真高校が共学化したのは近年で男女比は男7対女3くらいだった。

しかし度重なるアマッドネス事件であるものはアマッドネスと化し、あるものはその被害に。

他にも外部で被害にあう男子生徒が続発。

それもあり現状では男45パーセントに対し女55パーセントと逆転していた。

もちろん逃げ出した者もいるがこの街に住んでいたら同じだからと学校にとどまるものも多かった。

また「被害者」たちがほとんど健康な美少女と化した上に鬱屈から開放されているケースが多いためか「女になっちゃってもいいか」と思う生徒もいたのがこの傾向に拍車をかけていた。

余談だが市内の福真高校の制服取扱店は一時的に女子用が在庫切れを起こす始末。入学シーズンならともかく中途半端な季節に制服が売れたためである。

そんな学校だから前日まで男子生徒だったものが女子生徒として登校してくるのは日常茶飯事であった。

ただそれが野川友紀と共に登校してきたとなるとざわめきが始まる。

そしてそこにいるはずの高岩清良の不在。

「まさか高岩までやられたのか？」

喧嘩無敵のあの男もさすがに怪人にはかなわなかったのか？

そんな思いゆえである。

EPISODE 40 「少女」

ホームルーム。出席をとる。

清良が一年のときに起きたアマッドネス事件のときに女性化した生徒たちに配慮して、現在は男女をわけず五十音順の出席番号である。

もつとも例え区別されていても女子扱いに抵抗感を感じるものはいなかったのだが。

「高岩……はサボりか」

担任は決め付けている。いや。むしろそう思い込もうとしている。「はい」

綺麗な声で一人の少女が拳手をする。

ショートカットをツインテール。そしてめがねと狙い済ましたよ  
うな姿だ。

「あー。君は？」

「高岩せいらです」

ざわめきが起きる。とうとう本人が言い切った。額を押さえる友紀。

(変装の意味がないじゃない)

どうしても登校すると聞かなかつたセーラに示した妥協案が別人としてもぐりこむと言うものだった。

その際に変装していたが無意味に。

両腕にはガントレットを変化させたブレスなど一切のものが無い。つまり「変身していない」と言うことになる。

この姿が基本と言うことである。

短いインターバルにクラスメイトが殺到する。

「高岩？ 本当に高岩なのか？」

「おまえまでまさか!？」

「しかしなんてかわいらしい姿に」

質問の内容がさすがに普通の学校と違う。

「あー。ごめんなさい。実はあたし替え玉なんです」

軽く上目遣いで申し訳なさそうに言うセーラ。

「替え玉？」

「はい。あたしはキヨシの従姉妹で」

「ああ」

安堵したのが本音。高岩はやられてなかったんだと。

「じゃ本人は？」

「なんか喧嘩無頼の旅に出ると言っていました。武者修行かしら?」  
かわいらしく首をかしげるセーラ。

(よくそれだけ嘘八百が…)

友紀はあきれ返っていた。それをよそに納得して行く生徒たち。

「あー。それならわかる」

「あいつならやりかねん」

「でもなんで替え玉が女の子？」

「アマッドネスにやられたことにして清良としてもぐりこめって頼まれて」

男子が女子になる際に極端な変化をおこすケースもあった。それを見越したと一堂は理解した。

「そんないい加減な」

「まああいつは細かいことにはこだわらなさそうだしな」

「本人」の目の前で言いたい放題である。

それを当の「本人」はニコニコと人当たりのいい笑顔で聞いていた。

「なあんだ。それじゃ化物の被害にあったわけじゃなくて普通の女の子なんだ」

この中には男が転校して行き、よく似た名前の女の子が来たら本人の変身した姿と疑うものにはいなかったらしい（笑）

「ええ。あたし普通の女の子ですから」

芝居ではなくセーラは言い切る。

その優しく愛らしい笑顔とてもではないが男の心では出来ない表情だった。

一時間目がすみ二時間目は女子は家庭科だった。

「友紀。行きましょ」

笑顔でセーラが呼びかける。

「ちよつと。男子は技術科でしょ？」

「なに言ってるのよ？ あたしは女の子よ」

「キヨシ……」

うきうきとスキップしかねないセーラの後姿につぶやく友紀。

家庭科は女子のみなのでクラスの半数以下。そのため合同と言う形で行う。

本来は違うクラスである安楽千由美や飛田翔子。そして他にも元・

少年の少女たちが多数いた。

視線の集まる中、調理実習でセーラは見事な包丁さばきで野菜を切り刻んでいた。

「ふうっ。これでよし」

準備完了で息をつくセーラ。その途端に絶賛の嵐。

「わっ。なにになに?」

「すっごーい」

「高岩君。そんな事もできたのね」

「うっっ。あたしには無理だわ」

ちなみにこれはすべて元・少年たちのコメント。

奴隷女にされて解放されてもある程度は男時代の負担が消し飛んでいる。

そのためか女性化をネガティブに考えるものもなく、むしろ男時代より明るくなったものも多い。

もちろん女にも男とは違う苦労があるがそれはまだこれからの話だからかもともとの女性より明るくハイテンションな傾向がある。

今まで背負い込んでいた「男としての気苦労」から解放されてか女性化を受け入れていたものが大半だ。

中にはかつての親友である男子と現在は恋人として付き合っているものもいる。

「大丈夫よ。女の子ですもの。出来るようになるわよ」

優しく柔らかい笑みで言う。戦わないときのセーラはどちらかと言つと優しい性格のようだ。

「でもコツがあつたら教えてえ」

「そうねえ……好きな相手を思つて作つて見たらいいんじゃない?」  
盛り上がる周辺。ただしセーラは「好きな男」とは言っていない。

思った相手が友紀である可能性もあるのだ。

その友紀。そして千由美と翔子はやたら女性的なセーラに苦々しい表情をしていた。

少なからず好意を寄せる彼女たちにして見れば「思い人」がこうまで女らしくては当然の反応だ。

ワンルームマンション。最低限の家具しか置いてない。

これはその「男」。秋野光平が女性の家に泊まり歩くことが多いからだ。

そのベッドで主である秋野が苦痛にうめいていた。

(くそつ。一夜明けても吸収できないなんて……)  
未だにセーラから奪い取ったものを自分のものに出ないでいた。

三時間目の英語を終わらして四時間目の体育。この学校は男女も混合。

その能力で一瞬にしてコスチュームを変化させられるはずのセーラはもたもたと「着替えていた」

さすがにランジェリーは持ってないためこれは能力で変化させているもの。

わざわざ普通のBカップブラを外してスポーツブラに変化させてから付け直している。

あくまで「普通の女の子」として振舞おうとしている。

授業内容は陸上競技であった。残暑もあり軽く走っただけで汗だくである。

「ふうーっ。あつついわねえ」

屈託のない笑顔で同意を求める少女。セーラ。

「ほんとよねえ」

これは元からの女子が返答。まるでセーラもともと女子であったかのように溶け込んでいる証。

「ふう。暑い暑い」

暑さのあまり、そして周りがみんな女子のせいか体操着を開いたり閉じたりして風を取り込もうとしている。



素肌が見える。男子の目が集まる。それに気がついたセーラは「エツチツ」

赤くなつて走り去つてしまった。

どうやら女性としての羞恥心まであるらしい。

同じころ。ライはやつと苦痛から解放された。

「ふう。やつと吸収できたか。さて。何が出来る？」

ために怪人の姿になりイメージをして見る。すると女でありながら筋力のついた肉体になった。

「これはセーラの剛力タイプか。すると」

反対に話に聞くフェアリーフォームをイメージする。果たして俊敏な肉体に変化した。

「これはいい。早速使ってみよう」

クイーンに対しての謀反から討伐される危険性がある。

すばやく次のターゲットのブレイザをおびき寄せなるべく行動を開始した。

お昼休み。中庭の木陰で友紀とセーラ2人で弁当を広げる。

「それ……自分で作ったの？」

「ええそうよ。女の子ですもの。自分のお弁当くらいはね」

これはセーラの返答。ただし見た感じかなり「凝っている」あたりは弁当を作り始めた初心者と思わせる。

(まだ少しは男の部分があるのかしら?)

思わず凝視してしまう友紀。

「なによあ。そんなに見つめられたら照れるじゃない」

本当に頬を染める少女。

「ねえ。キヨシ。本当に自分が男だつて事を忘れたの？」

「ううん。覚えているよ。あたしは男として生まれ、ずっと男として生きてきたと」

この言葉にほつとした友紀。

「でもね、今はなんだかそれが夢だった気がするの」

「えっ？」

希望から絶望へ。

「やっと元の自分に戻れた。そんな感じよ」

「!？」

たわごとで片付けるには重すぎた。

高岩清良は過去の戦乙女。セーラの生まれ変わりだと聞かされていた。

セーラを清良にしていたものをライが奪い取った。だから「元のセーラ」が現れた。

今はまだ「高岩清良」の記憶がある。しかし人格は完全に少女のもの。

完全に取り除かれていたら清良は消滅していた。

そしてそれも既に風前の灯。

この少女は今の姿こそが元の姿と言いつつ切った。

何とかしてライから「力」を奪い返さないとこのまま消えてしま  
う。

そのころ薫子のはり子と仕事の話をしていた。

「中屋敷純郎？」

「本庁のマル暴よ」

暴力団相手の担当警察官のことをさす。

「その人がどうしたの？」

「ええ。私も取り付かれてわかったけどアマッドネスと言うのは何か精神的にシンクロすれば融合できるみたいね」

「セーラちゃんの話だといじめられっこが復讐を考えて蜘蛛の怪人になったこともあると言っけど、それも報復と言っ点ではシンクロするわね」

「歴史に現れないほどの昔から封じられ続けていたんじゃ負の感情もそりゃたまっているわよね。だから負の感情で取り付きやすいと

言うことらしいわ」

「なるほど」

とりあえず薫子は話を全部聞くことにした。口を挟まず促す。

「警察が後手後手なのは突拍子のない話と言うのもあって本腰を入れてなかったのもあるけど、どうも上の足並みがあってないと思っただのよ。それでももしかしたら私のように」

「……警察内部にも奴らが？」

「それでとりあえず『噂』を聞いてみたわ。何かいつも不平をももらしているような奴を。もちろん給料がどうとか対人関係なんてのより思想家のようなのを重点的に」

なるほど。いわれてみればアマッドネスも「軍」だ。そのほうが確率は高い。

「それで引つかかったのが中屋敷？」

「ええ」

しかしあくまで「疑わしい」だけである。何も証拠はないし手は出せない。

そのあたりはのり子も踏まえていた。

頭の片隅にでもと言う程度の話だった。

「ところで彼。高岩君。どうなのかしら？ 治るの？」

「それはなんとも。でも鍵はその美形男子とやらね。今日はモンタージユを取りに行くわ」

本体とも言うべきライが健在なため未だ奴隷女状態ではあるが、被害を免れた生徒もいる。

それに話を聞くべく薫子は部屋を出た。

放課後にあたる時間。

ライはブレイザにターゲットを絞り移動していた。

遠距離攻撃の得意なジャンスは二人のパワーを取り込んでから戦うつもりだった。

だが拠点から移動中に福真市の近く。とある駅前で立ち止まる。

(な、なんだ？ おさまったはずなのに)

再び内部での苦悶が始まる。

たまらず醜い異形姿をさらす美青年。

「きゃあーつつつつ」

その怪物出現に逃げ惑う人々。

「うぐあわわわっ」

本人もまるで嘔吐するように毒胞子を撒き散らす。今度は無差別に奴隷女へと転じていく。

「むっ」

一人の「女」が感知した。

「いたか。ライ」

甲を下にした左腕を右に。その手首に右手首を重ねる。

そのまま右へ運びさらに中央へ。

そしてゆっくりと前方に運び上下反転させる。

スズメバチの異形と言うよりそう言うデザインのスーツとヘルメ

ットのライダーがいた。

彼女・スズは鉄の馬。ダークブレイカーを召還して感じる波動。

「クイーンのかから」を頼りに走らせた。

そのころ。福真高校。中庭で理想の男子について盛り上がっていたセーラと幾人かの女子(全員元男)

「あれっ？」

突如としてセーラの表情が険しくなり怪訝な表情をする少女たち。

友紀は新体操部があるのでこの場にいない。

「どうしたの？ せいらちゃん？」

既にファーストネームで呼びあっている。

「女の子はお嫁に行つて苗字が変わるから名前で呼んで」と本人が言い出していた。

「うっん。なんでもない。気のせいだったわ」  
戦乙女やアマッドネスが互いの存在を感じ取るのは共に同じ力。  
クイーンのかげらのせいである。

だがその大多数を奪われたセーラは感じ取る力が著しく下がって  
いた。

普段なら感じ取れる距離にいるライだが、それがひどく弱々しく  
て確信が持てない。

だから「気のせい」で片付けてしまった。  
そのエリアであるセーラでこの始末。

いくら通常の状態とは言えど礼や順ではなおのこと感知出来ない  
位置だ。

つまり掛けつけないことがない。一人だけを除いて。

暴走するライは戦略も何もなくなただ毒胞子を撒き散らしていた。

そこに一台のバイクが駆けつけてきた。

黒地に稲妻のような黄色いラインの走るそのバイク「ダークブレ  
イカー」が減速なしでライに体当たりを敢行した。

「ぐわあああつ」

比喩ではなく吹っ飛ばされるライ。青果店に突っ込み梨や柿など  
季節のものを盛大にぶちまけつつ飛び込む。

「そこまでだ。ライ」

ブレイザでもジャンスでもなくスズメバチの女戦士がいた。

「き、貴様はスズか？ ギルが倒されたときいていたが貴様だった  
のか？」

激しく狼狽するライ。かつて自分を切り捨てた相手。まして今は  
体調不良。戦いはご免こうむりたかった。

「ライ。セーラから奪った物を返してもらっぞ」

スズはダークブレイカーの右ハンドルから細い剣（銘・ニードル）  
を抜き切っ先をつきつける。

（待てよ。こいつ翹がない？ どうやらヨリシロと相性が悪いらし

いな。飛べないなら)

「丁度いい。おまえの魔力もいたただこうか」  
元は同じ力。こちらでも同じだ。

「正面から戦って私に勝てると思うのか？」

「いつまでも同じと思うなよ」

キノコの異形は一回り大きな肉体になった。

「何？」

「そおらっ」

ライは地面をえぐる。そのまま掘り起こしたアスファルトをサッカーボールのように力任せに蹴り飛ばした。

「くっ」

塊だったのでそれを切り裂いて難を逃れたスズ。

その背後にライが現れた。今度は逆に一回り小さく、そして羽を出していた。拳を見舞うが何とかかわして体勢を立て直すスズ。

「その能力。セーラのものか？」

「どうやらそうみたいだよ。はははっ。自慢の翅がなくては逃げ切れないだろう」

力を取り込んだせいか気分が高揚しているらしいライ。

それに対しあくまでクールに戦うスズ。

「はっ!？」

今度ははつきりと感じ取れた。ライの戦意が高揚してより強く波動が出たからだ。

「この感触…間違いないわ。あいつね」

怒りの表情。つややかな唇にそっと指を当てる。

「ごめん。用事を思い出したの。またね」

いふなり彼女は外へとかけだしていく。そして呼び寄せる。

「キャロル」

「はい。セーラ様」

状態が異常なため学校そばで待機していた。そしてコンビをくん

で長い。すぐさまバイクモードに転じる。

セーラはひらりとまたがるとライダースーツへと姿を変える。

「待ってなさい。ファーストキスの代償は高いわよ」

全開で飛んでいく。

華麗に宙を舞い毒胞子をかわす。そしてスズは剣できりつける。

「ぐあっ」

短い悲鳴をあげて肩を抑えてうずくまるライ。傷自体はすぐに再生したが痛みは残る。

ゆつくりと歩み寄る仮面の女戦士。仮面なのに怒りの形相が見えるのは露出した赤い唇がゆがんでいるからか？

「なんだ？ スズはこんなに熱い奴だったか？」

まるで誰かの仇と狙われたようだ。

「場合によつてはヨリシロごと葬る」

はったりにしては重すぎた。

(こいつは本気だ…戦乙女ならヨリシロを再生できるからその分だけ迷いが少ないが、同じアマッドネスのこいつではそれはない。それでもやる気だ)

迫りに飲まれた。しかし今の自分は前とは違う。

「やれるものならやってみな。僕はもうパワーアップしているのさ」

それを寄り所に立ち上がった。

「ライイイイイイイイイ」

甲高い少女の声がこだまする。

「おまえ？」

ライが振り向くとセーラはその顔面に飛び膝蹴りを見舞った。

「ぎゃあっ」

派手に倒れこむ。それを見下ろす仁王立ちのセーラ。

「乙女の唇をもてあそんだ罪。うけてもらっわよっ」

完全に女の子として怒っていた。

「おのれ」

ライはゆっくりと立ち上がる。どうやらまた体内のものが暴れだしたらしい。

キャロルはここで気がついた。

「（今のセーラ様なら完全に乙女心。ならば）セーラ様。今こそ鎧をまとうとき」

セーラもその意図を理解した。

「わかったわ。キャロル。来なさいっ」

「はっ」

黒猫は飛び上がると体を丸める。

それが光の玉になり四つに別れてセーラめがけて飛んでいく。

鳥を模したヘッドギアは翼がこめかみを。胴体部分が眉間を。脳

天を取鳥の首が守っていた。

胸元には亀の甲羅に似たプロテクターが。

腰にはぐるりと龍が巻きついたようなスカートが。

足にはトラの脚部を思わせるレガースが。

両腕には既に自前のガントレットがある。

「完成。アテナフォーム」

セーラの最強フォームが蘇った瞬間だ。

「やったわ。完全にセーラ様とシンクロできた。例えクイーンのかげらをまた宿しても今度は合体出来るわ」

鎧が甲高い声でまくし立てる。今までは鍵穴が隠れて見つからなかったようなもの。

一度探り当てれば今度はセーラの方の準備が整えばいつでもこの姿になれる。

「こけおどしを。その首をはねてやる」

ライは自分でもどうしてこんな事を思ったのかわからなかった。

ただどうにも取り込んだものが自分を駆り立てる。



「食らえ」

再びアスファルトの散弾を見舞う。それを回避したところに生じた隙を狙う。

だがセーラはまったくよけない。キャロルがすべてブロックするので相手の攻撃を一切無視しての接近だ。そのたじろがない姿にライは恐怖した。

「行くわよ。キャロル」

言うなりセーラの姿がライの眼前から消えた。

「なにい!？」

動揺している暇すらない。廃語から背中を蹴られた。

かと思えば右の頬に「左フック」。

あごを打ち抜く下からの「ストレート」

脳天に見舞われる「アッパー」

まるで影から攻撃してくるかのような「キック」

全方位から体勢を無視した攻撃がくる。

(超高速! それも直線だけではなくあらゆる角度で)

そう。セーラとキャロルの連携により「一人」で「袋叩き」をしている状態だ。

(蹴り殺した……う、ぷっ)

再びライの体内から何かがほとばしる。それは光の玉となりセーラの胸に飛び込んでいく。

セーラはまるで赤ん坊を抱くようにその光を抱きとめ受け入れる。その瞬間、キャロルの変化した鎧がパージしてそしてセーラが清良に戻った。

飛び込んだのはライが奪った物だったのだ。

「オレは……?」

どこか焦点のあつてない瞳の清良。戻ったばかりで本調子ではない。その隙をついてライは逃走した。

大ダメージを受けスズもいたのだ。逃げるしかない。

「戻ったか」

安堵の声でスズが問いかける。

「スズ？ オレは一体？ あの野郎と戦ってからの意識がないんだが……」

首をかしげている。

「なるほど。ほとんど分離していたようなものだからな。ライの体内に取り込まれていたのではな」

「ああ。その間は……うっ？」

ここで分離していたセーラの方の記憶が融合する。

「もう。礼つたら。一緒に戦っているんだから仲良くしましょうよ。ね」

「あたしお嫁に行く時はやっぱりドレスね」

「大丈夫よ。女の子ですもの。出来るようになるわよ」

「乙女の唇をもてあそんだ罪。うけてもらうわよっ」

次々と清良の脳裏に浮かび上がる「とてつもなく女の子らしい行

動」

「ああああ……なんてことを」

あまりと言えばあまりの恥ずかしさに清良は心の奥底に引きこもった。つまり気絶した。

「やれやれ」

どこかほっとしたような口調のスズ。

「まあいい。ライの方もあれだけやらねばしばらくはおとなしいだろう。それに奴は多分裏切っている。こちらに手を出す余裕などあるまい。今は元に戻っただけでよしとしよう」

その声は安らぎに満ちていた。

夜。ぼろぼろの姿で逃避行中の秋野。貴公子が無残な有様であった。

「うつ。くそ。まだブレイザかジャンスの魔力を奪えば」

「残念だがそれは出来ない」

いつの間にかスーツ姿の三田村が秋野の前に。

三田村の背後には軽部と中屋敷。

「將軍……」

「裏切りは死刑だぞ。ライ」

「はっ。よく言う。スズが謀反を起こしたとき僕たちを捨て駒にしたのは誰だ。裏切りはあんたが先だ」

もはや気取る余裕もない。心のままに吐きだす。

「おまえのような野心を持つもの。わらわは嫌いではないぞ」

響き渡る女の声に秋野は背筋に寒気がした。どこか幼さの残る声。だが恐ろしい声。

同時に軽部がジャツカルアマッドネス。アヌの姿に。

中屋敷がタイガーアマッドネスの姿になり臣下の礼をとる。

三田村までスネークアマッドネスに変化している。

その三者に傳かれて現れたのは一人の童女。

一城薫子が入院中に知り合った広瀬葉子だ。

「クイーン……」

「だが役立たずには興味はない」

セーラにバラを差し出したときと声は同じでも口調がまるで違う威圧的なものだ。

表の人格は広瀬葉子としてのもの。

そして真の人格。普段は眠りにについているクイーンアマッドネス。口ゼとしてのものが今ここに。

「や……やれるものならやってみる」

完全に自暴自棄だ。変身してクイーンの魔力そのものを吸収しよ

うと接近する。

しかしその五体にバラの茨が絡みつく。

「吸収とはこうするのだ」

吸血鬼の牙の様にバラのとげが突き刺さりライに預けられていた魔力が吸い込まれていく。

「ああああああつ」

苦悶の声をあげるトードスツール。それが人の姿に。さらに女性のものへと変わっていく。

やがて完全に吸い取り終わると秋野だった女は力なく倒れこむ。

「このヨリシロは女を食い物にしていたらしいな。これからはわらわが下女として死ぬまで使つてやる。名前は…そうだな。光平と言うなら『ひかり』とでもするか」

童女と思えぬ冷たい視線が女王の威厳として現れていた。

それだけ言つと彼女はふらつと意識を失つた。あわてて支えるガラ。否。既に三田村の姿に戻っている。

「眠りにつかれたか」

「われらが女王様も不憫だなあ。生まれつき体の弱い娘として転生なんてするから普段は意識を眠らせっぱなしだ」

これまた人の姿に戻つた中屋敷が敬意のまったくない口調で言つ。

「寝首をかきたければ試してみる。ライの後を追うことになるぞ」

軽部が「忠告」する。

「へっ。なら『忠誠の証』にオレが戦乙女三人の魔力と首をとつてきてやるか」

現時点で直接の戦闘力は皆無。だから前線には出ない。

だが逆らえば即座に魔力を吸い上げられ無力化される。

クイーンの恐怖はアマッドネスを縛りあげていた。

## EPISODE 40「少女」（後書き）

### 次回予告

（困っているなら助けてあげる。その代わりにあなたたちの体を貸して）

「お前らバカだな。こっちにはもっとこわーい『化物』がいるのよ」

「いや。そりゃいいけどよ。こいつら福真二中の生徒？」

「考えていること？ その人があたしたちの味方とは思えないと言っことですよ。セーラさん」

EPISODE 41「強襲」

EPISODE 4 1 「強襲」

繁華街。昼ならともかく夜には学生には向かない場所。

そこに不似合っているだけで補導の対象となる女子中学生二人。

一人はお下げ髪。もう一人はショートカットにカチューシャ。

両者ともに垢抜けない感じと言うか子供っぽかった。

それが恐怖にうち震えていた。理由は明白。

多数の不良学生に囲まれていたからだ。

体だけ大きくなった男たちだ。

「な。いいだろ。俺たちが気持ちいいこと教えてやるからさ」

金ではなく体目当てだった。

好奇心から繁華街に来た二人。お下げ髪が久慈蘭子。ショートカ

ットが赤土竜子。

親の言いつけを無視した事を激しく後悔していた。

(ど、どうしよう)

(困っているだね)

竜子の脳裏に声が響く。

「誰？」

蘭子の声ではない女の物。一方その蘭子も

(困っているなら助けてあげる。その代わりにあなたたちの体を貸して)

「なんでもいいから助けて」

思わず叫ぶ。

「何だあ?」「恐怖でいかれたか?」

だが二人の女子が異形に転じたことで彼らが恐怖した。

「うわあああつ。ばけものだあつ」

おびえて反対方向に逃げる不良たちの前に立ちはだかる一人の男。

夜と言うのにサングラス。皮ジャンパーにズボンと言う姿だった。

タバコを燻らす姿が妙に様になる。

「お前らバカだな。こつちにはもつとこわーい『化物』がいるのによ」

彼。中屋敷純郎はタイガーアマッドネスへと変化した。

「わあああつ！？ こつちにもかつ？」

三体の「化物」に囲まれた不良たちは硬直し、そこをやすやすとタイガーアマッドネスのツメにやられて奴隷女へとなる羽目に。

「よし。そいつらをつれてこい」

なぜかこちらも恐怖でこわばっていた二体のアマッドネス。

女子中学生姿へ戻るように命ぜられて無抵抗で連行される。

(コイツはいい。スズに対して丁度いい手駒だぜ)

中屋敷は新しいタバコに火をつけ、そしてにやりと笑った。

#### EPISODE 41 「強襲」

福真署。そのアマッドネス特捜班にあてがわれた部屋で恒例の情

報交換をしている清良。礼。順。

「最近はこちらもあまり出てこないですね」

「同じだ。もう数え切れないので残り何体かは知らないが」

「それも無理はない。それだけの戦いをこなしてきたのだ。」

「単純に考えてオレのあたりが一番残っているはずなんだが最近は動きがねえな」

「そういえばあのキノコのアマツドネスはどうした？」

礼の悪意か。それともたまたまか清良のトラウマを刺激する羽目に。

「……見つけたら死ぬほど殴ってやる」

どすの利いた低い声で猛獣がうなるようにつぶやく。本気で撲殺しそうだ。

もつともその手を汚すまでもなく既にトードスツールアマツドネスは「処刑」されていた。

「ねえ。高岩さん。男の人とのキスってどんなでした？」

こちらは明らかに興味津々と言う感じの順。

メガネの奥の目の輝きは女子のようだ。

対する清良はやや曇った瞳でうんざりした表情。

「忘れさせるつ。そうでなくても学校でもうんざりしているのによ」

完全に女性化した時にわざわざ登校して「可愛い女の子」として振舞ったのが未だに生徒たちが覚えていている。

全員殴り倒して記憶消去をしたくらいだった。

むしろ逃げ出したいが逃げるといのが癪に障るのは「清良」の

部分。セーラの生真面目さも作用してそれは実行に移さないでいた。

「ふん。油断しているからあんな不覚を取る」

「誰があんなのを想像できるよ」

その言い分はもつともだ。本来は男の清良にしたら「満員電車で痴漢の濡れ衣を着せられる」なら警戒しても「男に唇を奪われる」など考えもしない。

いくらあの時点では心身ともに女子だったと言えどだ。



「確かに予想外だったよねえ。伊藤さんだって心構えが出来てない事態に直面したらわかりませんよ」

「押川は高岩の味方か？」

「ちよっときつい表情になる礼。」

「いいえ。どっちでもないですよ。ただそう言うことは誰にでもありえると」

「それにしても薫子さんおせえな」

「うんざりしてきたので強引に話題を変えに掛かる清良。」

「この日は薫子を交えての情報交換会の予定だった。ちなみに渡会のリ子は別件で出払っていた。」

「じゃ今のうちに」

「清良はトイレに行くべく立ち上がった。」

「用をたして戻る途中で薫子の後ろ姿を見つけた。」

「遅い」と文句を言おうと思ったが薫子の向こうに懐かしいセーラー服姿があったのでそちらに気が向いた。二人いる。

「あつ。高岩くん。ごめんね。ちよっと待っていてくれる？」

「気配に気がついて薫子が顔だけ向けて謝る。」

「いや。そりゃいいけどよ。こいつら福真二中の生徒？」

「知っているの？」

「俺や友紀もいた学校」

「女子中学生の一人が「友紀」の言葉に反応する。」

「友紀って…もしかして野川先輩のことですか？」

「なんだ？ 知ってるのか？」

「はい。バスケ部の先輩でした」

「ショートカットの女子が言う。」

「ああ。あいつ新体操部に入りたかったけど中学になかったんで仕方なく誘いのあったバスケ部に入ったとか言ってたな」

「懐かしむように言う。」

「で、こいつらが何したの？」

「したつて程じゃないわ。夜の繁華街をうろついていたのよ。ただそこでアマッドネス見たと言うから話を聞いていたの」

むろん街中でならアマッドネスなどと口走れない。

その際の隠語もある。しかしこの場は情報を得る相手だ。出しても問題がないので名前を出した。

「なんだと？　どんな奴だ？」

思わず険しい表情。強い口調になる清良。おびえる女子中学生。

「高岩君」

軽くたしなめる薫子。自分の非を認める清良。

「すまねえ。な。教えてくれ。どんなやつだ。きのこみたいな奴か？」

やはり忘れられるはずはない。

だが目撃者の少女は首を横に振る。

「いえ。虎の化物でした。テレビに出てくる怪人みたいなの」

「ホントにテレビの撮影とかじゃなくて？」

「撮影とかの見間違いとか言うおびえ方じゃないわ。それで先にまず私が聞いていたのよ」

「なるほどな」

つじつまが合うなら自分たちにも同じことを話させるつもりだろうと清良は解釈した。

警察病院。

人払いをした状態の広瀬葉子の個人病室。

ベッドの上で半身をおこした葉子。だがあどけない少女ではなくまるで女王のような威厳をかもし出していた。

「イグレが？」

「はっ。戦乙女とスズの首をとると」

傳えているのは警視庁の幹部である三田村。ただし姿こそそうだがここではガラ將軍として来ている。

「ふん。使えるのなら取り立ててやってもよい。よし。お前ら。手

伝ってやれ」

可愛らしい声でそばにいる女性看護士二人に命ずる。

この二人も既にアマッドネスに取り付かれている。

「あ…あの。わたしは…」

病室に恐ろしく不似合いな存在…メイドが気の弱そうな声で訪ねる。

「ひかりか。お前になど何も期待しとらん」

「は、はい」

このメイド。秋野ひかりはかつてのトードスツールアマッドネス。しかし反旗を翻したため融合していたライは「喰われ」、残された人間の方もとぼつちりで女性化。

現在はただの人間の女である。そしてクイーンアマッドネス。口ゼのおもちゃにもなっていた。

元々が「女王」で自分勝手に振舞っていた。

だが動けない身ゆえにこうして憂さ晴らしがいたのである。

同じころ。警察にいる礼と順。清良のいないうちに話を始めていた。

「高岩はあのスズとか言うアマッドネスに助けられたらしいな」

「そうみたい。正確にはキノコ相手にセーラさんスズさんと戦ったと言っ感じみたい」

「あのバカのことだ。一度助けられたら簡単に信用しそつだな」

「……そうかもね」

含みのある順のいい方。これでなかなか狡猾なのである。それを熟知している礼は思ったままに言う。

「貴様もあの女を信用してないな？」

「敵の敵は味方とはいえないもんね。敵同士でやりあってんならともかく、こちらに近づいてきた相手を簡単にはね」

女の子のような顔をしているが順はそこまで甘くはない。

「あつ。でも番長の可能性もあるんだよね。それなら信じるけど」

男姿のはずなのに「乙女」に見えた。  
「俺もあれが森本の可能性を考えている」  
逆に言うならそのどちらでもなければまるで信用できないと言っ  
ことであつた。

薫子と証明されない限りは。

その薫子が目撃者二人をつれて礼と順の所に来た。  
実際の現場に案内することになった。

そこは三人の戦乙女の活動エリア外。だから誰も感知出来なかつ  
た。

同時に福真所の所轄からも外れている。パトカーで乗り込むのも  
やりにくい。

「俺たちだけで行くか？」

「でもそれは危険よ。覆面車で行けば向こうの所轄を刺激しないと  
思う……」

言い終わる前に内線電話が鳴る。これは薫子が取らないといけな  
い。

「はい。一城です。ノリ？ え。中屋敷さんが呼んでいる？」

通話を終えた薫子は困り顔。

「どうしよう」

方やアマツドネスかもしれない男との面会チャンス。

方や待ちにひそむ悪魔についての情報。

「薫子さん。やっぱり俺たちでいくよ」

「仕方ないわね。でも」

「ああ。この二人は手前で下ろすよ」

薫子が目撃者の安全を考慮したのを察して清良は言う。

目的地の近くで二人の目撃者を下ろし、同時にそこから徒歩で「  
敵地」にはいる三人。

「気をつける。畏の可能性も強い」

「伊藤。お前あんなガキまで疑うのか？」

「当人たちに悪意はなくとも畏に組み込まれている可能性はある」  
それを言われると黙るしかない清良。

「変身しときます？」

「…それが無難かな」

物陰で三人は戦乙女へと転じた。

エンジェルフォームの三人。武器はしまい、セーラのガントレットもブレスレットに変えてある。

傍目には学校の違う女子高生三人組だ。

「ウォーレン。場合によっては番長に来てもらうかも知れないから  
迎えにいつてくれる？」

「いきなりだな。ついでに要や友紀もつれてくるか？」

「森本君はともかく友紀さんは危ないからやめましょ」

これは実は確認である。

もしあの女戦士・スズが現れた時ウォーレンが二人の姿を見ている  
ればどちらがスズでないかわかる。

もちろん両者ともに違うとも。

夕方なので繁華街をうろつくのはまだ何とかなる。

補導員でも現れると面倒ではあるが。

繁華街を外れガード下に移動した時だ。

「ギ…」

現れたのは前夜イグレによって意志と「男」を奪われた奴隷女たち。

「やっぱり来たな」

「こいつらは前座」

「幹部が近くにいるはずですよ」

セーラはガントレットを戻し、ブレイザは小太刀を取る。

「ちよつと時間稼いでください。あたしがさぐりますから」

ジャンスはまずヴァルキリアフォームに。そしてアリスフォームの超越感覚で敵を探すつもりだ。

しかしそれは必要なく、そして出来なかった。

恐ろしく速い黄色い影がジャンスを襲う。

「きゃあっ」

防御力に長けたエンジェルフォームなので事なきをえたが続いて別の物が襲い掛かる。

「プールの時と同じ手？」

「いいえ。あの時は分断でしたけど今度は集中攻撃ですわ」

ならばとジャンスを守るべくセーラとブレイザは移動した。

そして攻撃をさばいた上に一撃を与えた。

二体のアマッドネスはひるんで同じ場所に動く。

「誰が戻れと言ったよ」

そこには皮ジャンの男がいた。そしてなんと異形を素手で殴る。

殴られた異形：チーターアマッドネスは人の姿に戻る。

「え？ 看護婦さん？」

そう。ナース服に身を包んだそれであった。コスプレではない。

本職だ。

通常はクイーンである葉子の身の回りを世話している。

「もう一人いるぜ」

中屋敷の指示でライオンアマッドネスは人としての姿に戻る。

「と言うことは貴方も普通の殿方ではありませんわね」

ブレイザ本人が答えはわかりきっていると苦笑する質問であった。

「ご名答」

同時に三体が変身する。

奴隷女たちが近寄ろうともしない。中屋敷：タイガーアマッドネスを心から恐れているのだ。

「これはまた…可愛いネコさんたちだこと」  
挑発目的のブレイザ。

「ライオン。虎。チーター。略してラトラー……」  
ジャンスが言い終える前に三体が襲ってきた。ただしジャンスではない。

「今度はあたし!?!」

遠くの町でアマッドネス出現を感知した者がいる。

(むっ? 現れたか。よし。交代してくれ)

(わかったわ)

物影にいくと瞬時に大賢者・スズの姿に。

ライダースーツ姿になると片ハンドルの愛車。ダークブレイカーを召還する。

それに飛び乗るとタイガーアマッドネスの気配を頼りに戦場へと向かう。

標的がセーラに変わった。一番弱いとみなしたのではなく、他の二人が必殺技のためのフォームチェンジなのに対して彼女はバトルフィールド自体を選ばない。

空から頭上を取られるのを嫌ってらしい。

「この!」

縦横無尽の攻撃に翻弄される。

ブレイザもジャンスも奴隷女に邪魔されて助けに行けない。だがここで救援がきた。

ウォーレン・バイクモードにまたがった岡元と森本だ。そのまま突っ込み敵の陣形を崩す。

さんざんかき回してから戦乙女たちの盾になるように停車する。

ウォーレンはカラスの姿に戻る。

「待たせたな。ジャンス」

「番長」

嬉しそつに声を上げるジャンス。にこやかに応じるが岡元は敵に  
向き直る。

「ここからは俺のターンだ。断罪の番長イックパワー」

「……………」

決め台詞が時を止めた……

「わけのわからんことを」

ライオンアマッドネスが再び強襲敢行。だが

「はあっ」

上からスズが飛び降りてきた。そのままライオンアマッドネスに  
蹴りを見舞う。

（スズ！？ 森本と）

（番長がいるのに現れた。と言うことは）

そう。この二人は違う。

疑惑を察しているのかいないのか考えている場面ではない。戦闘  
中だ。敵に集中する。

「げほっ」

背中からとはいえど不意打ちで一撃食らえば動きも止まる。そこ  
を縦と横の十文字斬。

「セーラ！」

「わかつてますよーだ」

一体減って隙ができた。俊敏性に長けたフェアリーフォームで包  
囲網を抜けた。

そのまま高度をとり空中で一回転。脳天にかかとを落とす。

「ライトニングハンマー」

「ぐおおおっ」

ライオンアマッドネスは断末魔をあげて爆発した。

「があああっ」



フォーメーションも忘れ新たな脅威。スズに襲い掛かるチーターアマッドネスだがこれまた一太刀で斬られる。

(弱い。弱すぎる!?)

獰猛な生物の能力を取り込んでいると思われたが典型的な見掛け倒したった。

「くつ。スズ。お前を…」

「殺す」とでも言いたかったのか。それはジャンスが放った銃弾の嵐にかき消された。

そしてそれはスズに向けても放たれていた。

スズは飛び上がって難を逃れたがチーターアマッドネスは蜂の巣だ。爆裂する。

「ジャンス。何を考えてんのよ」

「考えていること? その人があたしたちの味方とは思えないと言うことですよ。セーラさん」

「なんですつて?」

人あたりのよさで失念していたがジャンスは手段を選ばない。

「そう。岡元でも森本でもないならどこの誰かはわかりませんわ。

そんな相手と共闘なんて無理と言うもの」

いつの間にかヴァルキリアフォームになっていたブレイザが抜き身で迫る。

「薰子お姉さまの可能性もあるのよ」

「だとしても平気ですわ。普通の人間ならわたくしたちの攻撃は無害」

大上段に振り上げた刀を振り下ろす。

それを交差させたクラブで受け止めるセーラ。

「邪魔をする気?」

「あんたこそ正気?」

一時の険悪な関係に戻りつつある。

「ひやははははっ。コイツはいいや。仲間割れか。おい」

馬鹿笑いのタイガーアマッドネスは新たな「兵隊」を呼び寄せた。

「あ、あなたたち？」

スズが狼狽した声をあげる。

案内を果たしかえつたはずの目撃者の少女。久慈蘭子と赤土竜子がタイガーアマッドネスの左右に。

そしてそれぞれホエールアマッドネスとモールアマッドネスに転じた。

クジラの異形は背中から粘着液を噴出。モグラの化けものはその豪腕で地面をえぐり土くれを見舞う。

攻撃が戦乙女たちに迫る。

EPISODE 4 1 「強襲」(後書き)

次回予告

「ナガス。アズ。お前たちどうして？」

「さて。スズさん。お話を聞かせていただけます？」

「あんたたち。スズの弟子なんでしょう！？ 師匠を見殺しにするの？」

「哀れだな。スズ。弟子に裏切られて地獄に逆戻りとは」

EPISODE 4 2 「逆襲」

## EPISODE 42 「逆襲」

迫りくる土くれと粘着液。至近距離にいたセーラは逃げ遅れそうになる。

「危ない」

それを押し倒すようにして避けさせたのはスズだ。

標的を失った粘着液は奴隷女に付着するとその動きを止めさせた。これそのものが毒性はないかもしれないが敵の前で動きが止まると言うことが何を意味するかは考えるまでもない。

「ナガス。アズ。お前たちどうして？」

今までとは違って狼狽した声を出すスズ。

クジラとモグラのアマッドネスは泣き顔に見えた。

太古の時代に縁のある関係だったのか？

「ゆ、許してください。スズ様」

「誰かに憑かないと食われてしまうから体を借りたのですが」

「そこをこのあたしに見つかつたと言うわけさ」

おどおどする二体と反対に得意げなタイガーアマッドネス。

「イグレ。この卑怯者め」

「何とでも言え。学んだんだよ。六人がかりでやられて手ごまの重  
要性をな」

自分の力を過信しているならつけいる隙もある。

しかし油断してないとなると厄介な敵だ。

「ここは一旦戦略的撤退ですね」

のほほんとした口調でジャンスは再びピンクのオートマチックの銃口にまっすぐにしたりボルバーをジョイントさせる。

ネコミミゴスロリと言うアリスフォームに転じると雨あられと銃弾を撒き散らす。

さすがにたまらず敵が守りに回ったところにそれぞれの従者がバイクに転じて駆けつけた。

もちろん岡元や森本も一緒である。

スズもダークブレイカーにまたがり四人の女戦士はその場から消えた。

「ちっ。逃げたか。まあいい。この手が使えるとわかっただけでもな」

不適に笑うイグレは人の姿に戻るとタバコに火をつけてその場を去った。

二人の女子中学生をつれて。

## EPISODE 42 「逆襲」

十分に離れてからブレイザの合図で停車させる面々。  
「さて。スズさん。お話を聞かせていただけます？」

事情聴取でここまで同行したと言う事らしい。その証拠となるのが未だに戦闘形態の衣類である。

「あたしも聞きたいものね。あんたたちの考えを」

セーラが言うのはスズに刃を向けた件。

「そうですね。ちょっと話し合いの必要がありそうですね」

ジャンスの笑顔がやたらに胡散臭く思えた。

「わかったわ。どこか落ち着いて話の出来るところにいききたいわね」  
長い髪をかきあげてスズが穏やかに言う。敵意も戦意も感じさせない。

「そうね。話せばきつとわかるわ」

いつの間にかセーラは完全にスズの味方だ。

「貴女はどこまで単細胞なんですか。少くくらく助けられたからって簡単に信用するとは」

「それを言うならあたしは味方のはずのあんたに斬られかかっているわよ」

「あれは……」

クイーンのかげらの影響だがそれはいいわけじみてブレイザは言うのをためらった。

「いいのよ。セーラ」

どこか哀愁を漂わせたスズの声。

「彼女たちが私を信じられないのは無理もないわ。アマッドネスが過去にしてきた非道を思えば」

「スズ……」

それでもスズはなんとか助けてくれた。悪い存在には思えなかった。

「その罪があるから仕方ないのよ」

「罪」と言う言葉が重く響いた気がした。

一方の中屋敷は車の中にいた。二人の女子中学生も強制されていた。

万が一逃がした場合にそなえて奴隷女をあちこちに配置していた。その連絡を待っていた。逃走するならバイクモード。もし薫子が手助けしたとしても警察車両なら「同業者」だけになおさら調べやすい。

セーラの案内で過去にブレイザと戦った廃工場を会談の場所にしたんだ。

話し合いと言うことで席を外した岡元と森本。

二人は見張りを買って出た。使い魔たちも連絡係と岡元たちのサポートで外だ。

女四人は中へと入る。トラックの出入りをしていたと思われる場所。

そのど真ん中に陣取る。

敵にしたら隠れるところはあるが、それでも飛び道具でもない限り遮蔽物から飛び出す必要がある。

それだけ対処しやすい場所であった。

「ここはあまりいい思い出のある場所ではありませんわね」

渋い表情のブレイザ。

「ここならやつらが来ても回りに被害が及ばないわ。こちらも存分に戦えるわ」

「その人が邪魔をしなければですがね」

森本でなくなった時点でスズに対しての態度は敵に対するものになったブレイザ。

たとえ正体が薫子としても取り付かれた以上は敵になる危険性が大きいと考えている。

そして彼女は葛藤したとは言えど恩師を「斬った」こともある。

敵かもと考えているスズを斬るのにためらいはない。

「さて」

セーラは床に直接ではあるが座って見せた。

座れば動作が遅れる。攻撃された際に不利。

それでもあえて座って見せた。戦意がないと示すべく。例によって脚の間に尻を落としこむ座りかただ。

「そうね。そのほうが落ち着いて話が出来るわ」

呼応するようにスズも座りこむ。足を前に投げ出している。

「まったく。座布団もないのに」

「そう言いつつもブレイザはきちんと正座だ。」

「あー。ジューズとお菓子が欲しいですね」

場を和ませようとしているのか天然発言か判別しかねるがそんなことを口走りながら横に足を出してジャンスも座る。

ただしブレイザの左手には小太刀があり、ジャンスも弓を手にしたままだ。即座に攻撃可能な状態。

話をする意志はあるがまったく信用していない表れでもある。

「二人とも！」

「構わない。そちらの立場で行けば当然の話」

半ば諦めたような口調のスズがセーラを止めた。

「悪く思わないでくださいね」

セーラにはジャンスの笑顔が本心を隠す仮面に思えた。

「話し合っただけでしょ。始めたら？」

ふてくされたようにセーラが言う。会談の始まりだ。

「それでは…最初に聞きたいのですがあのクジラとモグラらしいアマッドネス。お知り合いですの？」

この場に不似合いなお嬢さま言葉が緊張感を和らげる役に立った。

「……アズ。そしてナガス。ともに私の弟子だった」

軽い衝撃。

(悪の組織にも師弟関係ってあるのね)

ジャンスのこれをボケと呼ぶのはいささか酷と言うもの。

無法者たちに師弟関係のような間柄が成立すると思わないのも無理はない。



「あの二人はとてもではないが戦場には連れて行けるようなものはなかった」

「しかし先ほどは手先となってわたくしたちに攻撃を仕掛けてきましたわ」

「気の弱い二人なの。畑仕事の方が好きで平和を愛していた」

懐かしむように語るスズ。

その表情はとても芝居には思えない。

既にばら撒いた奴隷女からの情報を受けて中屋敷たちは移動を完了していた。

「さてと。おい」

あごで命令された竜子はしぶしぶモールアマッドネスへと変身。マンホールのふたを開けて中へと入る。

続かされる蘭子。最後を中屋敷に押さえられて逃亡もかなわない。暗闇で目の利くモールアマッドネスを案内役にして一行は目的地へと進む。

トラックヤード。車座になった四人の話は進む。

「なるほど。タイガーアマッドネスに強要されて」

相槌を打ちつつ別のことを考えるセーラ。

（あの二人がアマッドネスになったのを見て驚いていたらやっぱりスズの正体は薰子お姉さまと思っただけど、アマッドネスの方がスズと知り合いなんじゃそうも言いきれないわね）

薰子は二人の女子中学生が証言者としてあっている。だから面識がありそれが異形に転じたので驚いたと思っていた。

しかしこれでわからなくなった。

「そう言えばさつきクジラの方が『喰われる』とか言ってたけど…  
やっぱりトラさんの方に？」

重い空気を嫌ってか軽くおどけて尋ねるジャンス。

「セーラがクイーンの魔力を吸われて丸つきり女の子になったのは

忘れてないわよね」

「……あれはノーカウントです」

どうやらキスのことを思い出したらしい。顔が赤いセーラ。

「結局は戻ったけど……あれが食われると言っこと？」

ジャンスの問いにスズは無言でうなずく。

「私アマッドネスに所属していたころ、反逆者や使い物にならなくなつた者が魔力を吸い取られて戦闘能力を失っていたことは日常茶飯事だった。それを新しい『怪人』に与えたり恩賞として既にもっている者にさらに与えたり」

「そして今は魂と魔力が長い年月で一緒になつて魂ごと吸い上げられると」

「それを防ぐためにとりあえず取り付いたのいいけど運悪くタイガーアマッドネスに見つかり使われることに……辻褃は合いますかね」

そちらに気が行きすぎ、そして半分は襲撃を警戒していたため自分たちにふりかかる危険性を失念していた戦乙女たち。

そしてそこに考えが至る前に事態は動いた。

派手な音を立ててマンホールが下から吹っ飛んだ。

「しまった。下水道か」

下から来る可能性を忘れていた。これでは見張りの岡元達もわからない。

そしてアマッドネスであるスズといるために「気配」を勘違いしていたのもある。

この時点では人の姿なのだから実際には発していなかったのだが思いこみに軽く舌打ちするブレイザ。

四人は散らばった。そこにマンホールの重いふたが降ってきた。

「見つけたぞ！」

タイガーアマッドネスが飛び出してきた。右手の手のひらに光が集まつたと思いきやそれが撃ちだされた。

「この！」

セーラはとっさに左腕のガントレットを盾として攻撃を逃れた。

続く攻撃に備えようとしていたがタイガーアマッドネスは今度は左腕から火の玉を放つ。

「はっ」

今度はブレイザが小太刀を盾とした。

本物の日本刀ならへし折られているが魔力で作られたものなので一種の防御結界で弾き飛ばした。

「はははっ」

また右腕。今度はスズの所に。彼女はとっさに跳んでそのまま変身した。

「手当たり次第と言うわけねっ」

ジャンスが対抗すべくロリータフォームへ転じようとするがその前にキャストオフの暇を見つけれられない。

（タイガーアマッドネスの攻撃にはわずかにタイムラグがあるわ。

その隙をつく）

セーラは意図的に攻撃を受けてそれをしのいだ。

次を放つ隙を狙ってキャストオフ。続いて放たれたタイガーの砲弾は「ヨロイの破片」に当たり届かなかった。

そしてさらにフェアリーフォームに。高度をとってホエールの粘着液やモールの土砂攻撃を受けないように接近を試みる。

射程距離に入ったところに再びエンジェルフォームに。

飛行能力は失ったが土砂攻撃はしのげる。

タイガーは正対してにやりと笑う。

（いけない！）

スズはとっさに駆け出した。そこに威力の小さな砲弾が命中。小さな分だけためが要らず今までより早く撃てたのだ。

「くあっ」

左足に命中して転倒する。

「引っかかったな。お前の動きはこいつらが教えてくれるんだよ」

「あ…ああ…」

狼狽しているホエールアマッドネス。

彼女の視線がスズの方に向いているのをタイガーが見逃さなかったのだ。

「まずはスズ。目障りなお前からだ」

動きの止まったスズにタイガーが迫る。

(まずい。再生がわずかに間に合わない)

一応はアマッドネスであるスズだ。戦乙女の聖なる魔力でないなら再生は出来るが時間を要する。

「やめろおっ」

助けようとセーラが動くがモールとホエールが邪魔をする。

「あんたたち。スズの弟子なんでしょう!? 師匠を見殺しにするの?」

「か、勘弁してください」

「こうしないとこっちがイグレに」

現実問題として確かにそちらの危険性の方が強い。

その上スズに疑念を抱くブレイザとジャンスは動かない。

「哀れだな。スズ。弟子に裏切られて地獄に逆戻りとは」

「私は死ぬことを恐れない。本来この時代にあるべき存在ではないのだからな。だが罪を償うためにお前たちを一人でも多く倒したいのが出来ないのは無念」

「スズ様!」

セーラを妨害しながらモールアマッドネスが声を張り上げた。泣いているような声だ。

「何をしている。アズ。ナガス。早く逃げろ」

スズは自分より弟子たちの身を案じている。

「けっ。あいつらには逃げる度胸すらない。このあたしの恐怖を味わった以上はね」

まさに地獄の果てまで追いかけると言うものだ。

「お前ら。セーラだけ止めとけ。そっちの二人は動かないしな」

完全に二人を支配したつもりで命じるタイガーアマッドネス。

「一思いに心臓を串刺しにしてやる」

恐怖を味合わせるためかツメを出した右腕を高々と振り上げる。その時だ。

タイガーアマッドネスのいいなりだったホエールアマッドネスがセーラの妨害をやめその粘着液をタイガーアマッドネスに向けて放した。

「うわあつ。裏切る気か!？」

完全に恐怖で縛ったはずなのに。だが続いてモールアマッドネスの土砂攻撃を受けては疑いの余地はない。

そしてセーラが瞬時にその健脚で抜け出してスズを救出する。

「きさまらあつ」

頭に血が昇ったタイガーアマッドネスは自由の利く左腕から火の玉をホエールアマッドネスに向けて放った。

「きゃあつ」

逃げ遅れてまともに食らったホエール。

「ナガス!？」

同胞を案じて動きの止まったモールアマッドネス。そこに右腕の戒めを強引に解いたタイガーのツメが振り下ろされる。

血が派手に出る。明らかに致命傷だ。

「ナガス!？ アズ!」

弟子を案ずるスズの悲痛な叫び。それがブレイザとジャンスを突き動かした。

「「キヤストオフ」」

揃ってヴァルキリアフォームに。ジャンスが二つの拳銃でタイガーアマッドネスを撃つ。

粘着液のせいで動きの止まったタイガーアマッドネスを狙うのは造作もない。

続いてブレイザが駆け寄って斬り付ける。

「貴様らはスズを疑っていたのではないのか？」

それを前提にしていたので狼狽するタイガー。

「今でも信用なんてしてませんわ。けど」

「あんたの方がもつと嫌いだったこと」

まさに敵の敵は味方と言うことになった。

いかになんとて配下に手を挙げたのが二人の「正義の心」に怒りの火をともしたのだ。

「おのれえええっ」

粘着液と土砂攻撃。さらにジャンスの銃弾とブレイザの斬撃。むしろよく持っているほうだ。

「見苦しいですわ」

一刀両断で袈裟斬。ジャンスはタイガーの両手両足を狙って射撃。これで反撃は出来ないし動きも止まった。

「今ですわ。セーラさん。スズ」

「とどめはお二人に任せました」

「二人とも…」

この時間稼ぎが効いてスズは回復した。

「やれる？」

スズに優しく尋ねるセーラ。

「タイミングは私に合わせてもらえると助かる」

「わかったわ」

言うなりセーラはフェアリーフォームになり高度をとる。

スズは逆にかがんで右足にレイピアをくくりつける。

「はっ」

ジャンプして空中回転。その降下のタイミングに合わせてセーラも降りてきた。タイガーの寸前でヴァルキリアフォームに。スズはスピンを始める。

「ホーネットステインガー」

「ヴァルキリーキック」

二人のダブルキックを食らったタイガーアマッドネスは盛大に吹っ飛ばされる。

「くっ…まさか生き返ってまで裏切られるとは…力こそ正義のはずなのにその力にまで…」

恨み言を言い終える前にタイガーアマッドネスは爆死した。

戦いが終わりスズたちはアズ。そしてナガスの元へと駆け寄る。だがタイガーから受けたダメージは致命傷だった。

「二人とも…立派だったぞ」

かすかに二人は笑ったように見えた。

「介錯を務めさせていただきますわ」

ヨリシロを巻き添えで死なせないための処置と言うのが本来の理由だが、最後に逆襲した勇氣に対して敬意を表し苦しまないようにと言うブレイザの配慮だった。

「お願い…」

ブレイザの剣が一閃されると同時に果て、二人のアマッドネスは黄泉路へと。

そしてヨリシロとなった女子中学生二人は岡元たちの手で病院へと運ばれた。

戦いは済んだというのにセーラは厳しい表情で仲間二人を見つめている。

「あんたたちがどういおうと私はスズを信用するわ」

「先ほども言いましたがスズさん対しての疑念はまだ消えてませんけど」

「とりあえずあっちの方を倒すのに手を組んでもいいかなと思って照れ隠しなのか軽い口調のジャンス。

「二人とも」

なんとなく嬉しくなったセーラは一転して笑顔の花をさかせる。

そして右手を差し出す。

その甲にジャンスが手を重ねる。

一応仕方なさそうにブレイザがその上から。

そして最後にスズの手が乗る。

この瞬間、スズは四人目の戦士として認められたのだ。

夜。警察病院。女性化した影響で風体も変わり本人が名乗らない限り中屋敷とはわからない女が昏睡状態だ。

そこに小さな影が歩み寄る。広瀬葉子：否。クイーンアマッドネス。ロゼだ。

彼女はその手からバラのつたを出現させると眠る中屋敷の額にコネクトした。そして何かを吸い上げる。

(ふ。お前の口からいろいろばれると厄介だからな)

翌朝。目覚めた中屋敷だが記憶そのものを失っていた。自分が誰かすらわからない状態に。



## EPISODE 4 2 「逆襲」 (後書き)

### 次回予告

「だがすまない……もう一度、私のために死んでくれるか？」

「やっぱりオレは薫子さんがスズだと思っただよ」

(むっ。この気配はアヌ！)

「私が一人で現れたのは貴様らをまとめて葬れる自身があるからと言っことをだ」

EPISODE 4 3 「正体」

## EPISODE 43 「正体」

アマッドネスがミュスアシを侵攻する直前のスズの謀反。

クイーン守護の任に就いていた六武衆はまず得意の空中で油断した所を「高速飛行はいいが小回りが利かない」と言う弱点を突かれファルコンが羽根を斬られてたたき落とされた。

そのまま高空からスズはスピシながらのキック。

後にホーネットステインガーと名づけたそれを見舞いまずはルコを潰した。

「飛将」を失ったことで頭上を完全に押さえられた後の五人。ならば飛ぶ前にと「剛将」サザが高速回転で突っ込んでくる。それを最小限の動きでかわすスズ。

自爆はしなかったものの高速回転の影響でスズを見失ったサザは位置を確認すべく顔を出した。

そこにスズが得物である細い剣を投げ喉を貫く。

「ぐあっ」

文字通り「喉笛」となり空気が抜ける音がして呼吸困難に陥る。

アマッドネスの再生能力でも酸素が脳に行かなくなれば致命傷だ。だが休む間もなくサザへの攻撃の虚を突きその背後から「邪将」スストが斧を振り上げて迫る。

スズはかわすべく前方に倒れこみ、そのまま足の裏を叩きつける。トラースキックをスストの腹部に見舞う。

くの字に折れ曲がる蠍の異形。斧の重みもある。

そしてその重みを利用してスズは振り下ろされた斧をそのままスストに突き刺した。

「おのれ」

あっという間に三人を倒された。直接戦闘に長けていない「狂将」ギルが逡巡している間にスズはリモートコントロールでサザの喉に刺さる細い剣・ニードルをて元に呼び戻す。

ギルの武器である魔笛も相手が同じアマッドネスでは逆効果。スズにかなわずなす術もなく倒された。

背後から毒胞子を飛ばしてきた「麗将」ライ。だが暗殺のエキスパートである彼女の手口はお見通し。

飛び上がり華麗に空中で舞うとそのまま脳天に蹴りを見舞い動きを止める。そこを降下しながら叩き斬り絶命させる。

とうとう最後のひとりになったジャツカルアマッドネス。「死将」アヌ。

ここに来てモクイーンの守護かガラ將軍は参戦しない。

直前にスズと切り結んだ疲労は取れた。逆にスズは六武衆との戦いで疲弊してきた。

(これが狙いか…)

悟ったスズは大声で叫ぶ。

「アヌ！ お前はガラに利用されているぞ」

無駄を承知で叫んでいたが帰ってきた反応は予想とも違っていた。「だからどうした。私はあのお方のためなら死んでもいい。とことん使われて捨てられてもあの方の愛さえ感じられるなら」

厄介だった。使命感でも義務感でもなく「愛するゆえ」の行動。スズにとって自らが訴えた「愛」が障壁となる皮肉。

アヌとの戦いはその戦闘能力もありスズを大いに消耗させた。

ぐらついたところに勝利を確信したアヌの攻撃。だがその刹那に生じた隙をつき腹部に深々と致命の一撃をくわえる。

アヌは口から血を吐いた。内臓に重度の損傷があったことを意味する。地面に倒れふす。

まるでそれが合図であったかのようにガラが戦いに入った。

(ああ。ガラ様。我々がスズを疲れさせたのを受け休ませずに戦ってくれたんですね)

ガラが自分の犠牲を受け取ってくれたと感涙したアヌ。

共に戦うべくなんとか傷を回復させようとして執念を燃やす。

だがガラはスズと刺し違えた。その死をまざまざと見せ付けられ絶望したア又は今度は悔し涙を流す。

(ガラ様。ガラ様。愛しいお方…スズめ。許さん。許さんぞ)  
そしてア又は將軍の後を追うように命の火を消した。

警視庁。三田村の部屋。

三田村の前にいる軽部は無表情。いや。かすかに頬を染めている。  
「お前も夢に見るのか？」

三田村の問いに軽部は首を振る。

「あなたがいる以上は意味のない過去です。こうして再びおそばに  
いられるのですから」

三田村は無表情だ。困惑しているようにも、何かを言うに言えない  
様にも見える。

「まさか同じような境遇のヨリシロがいたとは。これもまた定め  
でしょうか」

「そうか…」

三田村。そしてその身に宿るガラも苦虫を噛み潰した表情になる。  
だが意を決して言葉を出す。

「だがすまない……もう一度、私のために死んでくれるか？」

「そのお言葉。待ちわびておりました」

軽部。そして同化したア又は本心からそういった。

秋から冬へ。11月も半ばを過ぎて清良。礼。順の三人は百紀高校の一室に集まっていた。

「冷えるな。さすがに」

素手をこすり合わせて清良が凍えた様子を見せる。

「鍛錬が足りないのだ。貴様は」

まぜつかえす礼だがきちんと手袋をしていた状態だ。それを脱ぎながらでは説得力も弱い。

「えー、でも寒いものは寒いですよ。特に僕は太もものあたりはむき出しだから」

「「だつたらスカートやめてズボンを穿け！」」

犬猿の仲の清良と礼がシンクロナイズドを見せたのはこの寒いのかかわらず順がわざわざスカート姿だから。

変身してはいない。女装だ。百紀高校の制服姿なのでスカート丈はやや短い。

「まったく。男なんだからスカートは制服じゃないだろう。この寒いのにわざわざ脚をむき出しにするなんて」

「同感だな」

礼の言葉に清良。そして順が目を見張る。

「どうした？」

「いや。お前がオレの言葉に賛成するとは思わなくてよ」

「ちょっと驚いちゃいました」

「こ、これはあくまで一般論だ」

虚勢をはるがどこか照れ。そして本人も自分に対して驚いている。それをにこやかに微笑んで見ていた順が穏やかな声で言葉をつむぐ。

「僕もお二人と同じなんですよ」

「なにがだよ」「主語を省くな」

またつながった。そっぽを向く二人。

「二人とも最初の頃に比べて険悪な雰囲気はなくなりましたよね」  
指摘されて向き合う二人。言われて見ると前ほどひどい関係でもない。

「アマッドネスと手を組むくらいだ。一応は味方だしな」

もちろんここで礼の言う「アマッドネス」はスズのことである。

「それもそうですけど僕たちの中にあるものが少しずつ削られているんじゃないかと思うんですよ」

順の言葉にはっとなる二人。

「クイーンのこと」「かけらって奴か」

アマッドネスたちの力の源であり、戦乙女たちを女としての転生をさせない…言い換えれば清良や礼。順を男としている存在。

事実それを吸い取られた清良は一時的だが心身ともに少女と化した。

元々男性性の希薄な順は「削られた」影響でますます女性服を望むようにも。

「戦いを続けて経験をつんだのもあるが」

「オレたちが強くなって行ったのは少しずつそのかけらがなくなり」

「本来の戦乙女としての力を取り戻しつつあると言うことなんだと思います」

それは今の自分が過去の存在にとって代わられて消滅することを意味している。

「最近はお女になってもいいんじゃないかって『なりたい』…表現として

は『戻りたい』なんです」

重い雰囲気支配する。

自分たちの存在の消滅が現実味を帯びてきたことと、最後の戦いも近いと言っ点で。

「それはさておきよ」

その雰囲気を変えようと強引な話題転換を図る清良。

「今日はどうしてここなんだ？」

生徒を巻き添えにする危険性を減らす目的と、共同戦線をはる警察に対する情報提供もありここしばらくは薫子のいる福真署が会議室になっていた。

「話題が話題なんで」

警察の人間：ズバリ薫子には聞かれたくないからだった。

同時刻。とある喫茶店で一条薫子と渡会のり子は話をしていた。

こちらに至っては職場から離れた形だ。

両者ともに私服姿。一見するとただの女友達。

「珍しいわね。ノリが勤務時間にこんなところに」

「ちょっと（警察署の）中では出来ない話なのよ」

「どういこと？」

訪ねられるが視線を横にするのり子。彼女には珍しい態度だ。

しかし意を決して話を切り出す。

「妙な噂を聞いたのよ」

「噂？」

確かに内部調査をしていた。噂と言うのは重要な情報源だ。

「カオルの元の同僚に軽部って人がいたっけ？」

「軽部さん？ ええ。いるわ。え？ 何かあるの」

驚いている薫子。ますます言いくそうなのり子だが進まないの  
で切り出した。

「いい。あくまで噂よ。実は彼、ホモなんじゃないかって」

「ええええーっっっ」

斜め上どころではない話の展開。思わず声を上げる。

「カオル。静かにして」

「ご、ごめん。でもびっくりしたわ」

「実は結構前から疑惑はあったらしいのよ。まあ別に性癖は個人の自由だけど…でも、あまり理解されないわよね」

「そうか!？」

アマッドネスは必ずしも邪心で結びつくわけではないのはこのり子が生き証人。

そしてアマッドネスが女だけの集団と言うのはセーラたちから聞いている。

男女の違いはあれ同性愛と言う理解されにくい恋心を抱くものがないとも思えない。そこでベクトルが一致すれば…

「後は車にしない？」

完全密室での対談を希望した。のり子もそのほうが楽に感じて同意した。

百紀高校。三人は本来の目的である話し合いをしていた。

「やっぱオレは薫子さんがスズだと思っただよ」

議題はスズの正体。だから最近使っていた警察署が「会議室」ではないのだ。

「確かに消去法でいけばな」

礼としては清良に賛成するのが癪でも同意せざるを得ない。

「番長と森本君はスズさんと一緒に出てきたから除外。野川さんは一度憑かれているからこれまた除外。そうなると他にいないよね」

無論あの時他に居合わせた人物がいるのかも知れない。

それと一心同体になった可能性もゼロではない。

しかしあれだけセーラのために熱くなって戦ったり、事情に色々詳しいところも考えると薫子がスズの正体と考えるほうがしっくりくる。

「俺がかつて戦ったふくろうのアマッドネスは剣士として死ぬこと



に執着して、同様の剣士と融合した。だから必ずしも邪心がつなぎとは限らない」

スズはアマッドネスを見限っていた。そして正義のために働く薫子とシンクロしても不思議はない。

扉が叩かれる。少女の声で「失礼します」と断りが。

「はい。開いてますよお」

在校生である順がその女性性そのままに優しげな口調で声で入室を許可する。

扉が開かれジャンパースカート姿の長い髪の少女が現れた。

「どうしたの。佐藤さん？」

「押川君。警察の人が」

同級生が警察官の訪問を受ければ案内役の少女がおびえるのも無理はない。

だが不安に反して順は笑顔になる。

「女の人の？」

薫子をイメージしている。

「残念だが一城さんはこられない。だが君達を呼んでほしいと頼まれてね」

現れたのは猟犬を思わせる鋭い視線を持つ男だった。彼は身分を明かす。

「薫子さんの同僚か」

ほっと笑顔になる清良。無表情の礼。

「それじゃ」

順が言うところ三人は立ち上がり軽部に同行した。

百紀高校正門を出て車に乗り込む寸前だ。校門の脇。外壁の前に止めてある車の前。

その前で清良が切り出す。

「ところで…どうしてオレたちがここにすることがわかったのかな

？」

今度は彼に笑顔はない。車は密室。閉じ込められたら不利。うかつには乗り込まない。

「ふ。警察の調査力を持つてすればたやすいですよ」

軽部は動じず冷静に言う。

「ふーん。そうかい。なるほどなあ」

口調と裏腹に笑顔はない清良。

「それじゃあもう一つ。どうして一人なんだ？」

警察は基本的に単独行動はしない。それが一人で現れた時点で疑われていた。

(しまった)

目的が暗殺だ。事情を知らない警官を連れてくるのは面倒だったこともあり単独できたがそれがまずかった。

思案して視線をそらしている軽部。

冷静さを欠いていたのは三田村直々の指示だったからだ。

何しろ彼は三田村に対して秘めた思いがある。それが冷静さをなくさせた。

(くそつ。考えがまとまんつ)

「悪いけどオレ。基本的に警察は嫌いなんでな。何せ不良だから」

女の声が響く。驚いた軽部を見ると既に三人は戦乙女になっていた。

既に緊急事態と認識していたため心が高まり「スイッチ」であるポーズも無しに変身できた。

「ばかなっ！？」 『儀式』も無しに変身だと？

「へえー。ただのおまわりさんが『儀式』と表現するんだあ」

ジャンスの言葉に失態を重ねたことを悟った。

「観念しておとなしく話してもらおうか」

変身直後で未だ男の精神のブレイザがそのお嬢さま風の声で言う違和感があるがそれを気にしている局面でもない。

「くくくく。さすがだな。108の魔星を退けたと言うのは伊達じ

やないな」

もはや隠すつもりも無い。

「だが貴様らも一つ失念しているぞ」

ここで軽部は正体であるジャツカルアマッドネスへと変貌する。乳房こそあるもののエジプト神話の冥界の神・アヌビスに似た姿だ。

「私が一人で現れたのは貴様らをまとめて葬れる自身があるからと  
言うことをだ」

言うなりアヌはその場から消えた。

(むっ。この気配は……アヌ！)

同じ都内だがそれほどは近くない位置でそれを察知した。

「でたの？ それなら代わるわ」

ヨリシロが申し出る。

(頼む)

肉体の主導権がヨリシロからスズへと移る。顔もスズのそれになる。

スズは左腕を甲を下にして腋にひきつけ、その手首に右の手首を重ねそのまま右へと移動する。

そこから中央へと運び前方へと突き出す。

上を向いていた右手の甲が下に。左手の甲が上を向いた時にスズはスズメバチの異形のような姿へと転じた。

そして呼び寄せられていた愛機・ダークブレイカーにニードルと言う銘のレイピアを挿し込みハンドルとすると稲妻のように走り出した。

とっさにジャンスが弓を上に向けた。頭上を取られた可能性を考えた。

セーラとブレイザが背中合わせになり互いの死角をカバーする。

この間にも使い魔たちの召還は忘れていない。

トンツ。いきなり壁にアヌが現れた。壁面に跳びそこで反射する。いわゆる三角蹴りだ。得物のないセーラが狙われた。エンジェルフォームはむき出しの部分もカバーしているがそれでも反射的に顔や喉をガード。

まるで死神の鎌のように薙いだアヌの手はブロックされた。しかし動じることはなくすぐに姿を消した。

戦いの経験を重ねてきた三人にはこれが瞬間的な加速と見当がついた。

あまりに速いため動体視力が追いつかない。なぶり殺しかと思つたが使い魔たちが間に合った。駆け寄りながらビークルモードへと。

三人の戦乙女は地元であるジャンスの先導で戦いの場を変える。

警察無線が百紀市の河川敷での騒動を告げる。

そしてちらほらと犬のような姿の化物の目撃情報が。

覆面パトカーは百紀市へと向かい加速する。

河川敷に誘い込んだのは巻き添えを避けての物と、足場の悪さで敵の超加速を封じる意図だった。

前者はともかく後者はまるで見当違い。まったく衰える様子がない。

それでも壁などがなく立体的な戦闘をさせないだけでも意味はある。つた。

そして戦ううちにわかったことがある。

この超加速は瞬間的にトップスピードになるため目が追いつかない。

だがそれはそんなに長い時間は持たない。どうしても止まることになる。そしてその距離もおよそ10メートル。ごく短距離だがその加速で脅威になっていた。

またこの能力はその性質ゆえ直線に限られる。曲がる時は見える

スピードになるため姿を現す。

そこをジャンスが撃ち牽制している。

セーラは俊敏性に長けたフェアリーフォームになっていた。

動きそのもののスピードには追いつけるが視認した時には別の所に移っておりいたちごっこ。

ブレイザにはアルテミスフォーム。ジャンスにはアリスフォームと言う鋭敏な感覚の形態があるがどちらも30秒しか維持出来ない。ジャンス・アリスフォームなら遠距離を狙い撃てるが動きが鈍くそちらで追いつけない。

打つ手無しであった。

ウォーレンが頭上。キャロルとドーベルがそれぞれの主のそばに  
ついている。

焦れる戦乙女たち。

だがアヌは勝負を急がない。

なぶっている？ そうではなく何かを待っている。

そしてその「待ち人」が来た。

まるでパトカーのサイレンのように轟音が存在感を示し、漆黒のボデイに黄金の稲妻が走る鉄の馬にまたがりスズメバチの異形がはせ参じた。

瞬間的に「切れる」アヌ。

「スズウウウウウウッ！」

それまでは比較的クールに振舞っていたジャツカルアマッドネスが憎悪を隠そうともしない。

呼吸を整える目的もあつてか対峙する。

戦乙女サイドからしたら絶好の反撃チャンスだったが、こちらも強いられる緊張から解かれてそれどころではなかった。

「アヌ……」

仮面のような顔で読み取れないはずの表情がどこか哀れむような感じに見えるスズ。

「討たせてもらうぞ。私と…愛するガラ様の仇を」

アヌはスズに向かって突撃して行く。また姿が消えた。しかし瞬時にスズの眼前で見えた。

攻撃態勢に入ったため足が止まったのだ。

大きく振り上げた手を一気に振り下ろす。

そのスピードが生み出す真空。それがまさに「カマイタチ」を発生させていた。

あらかじめ知っていたスズはそれをかわしていた。

むしろ初見である戦乙女たちに手の内をばらした形だがそんなことはお構いなし。

ひたすらにたぎる憎悪をスズにぶつけていた。

(今なら)

ジャンスがアリスフォームへと転じる。

スズを味方と認識した今は巻き込むわけには行かない。

だから正確にアヌだけを狙い討つ。

そしてセーラとブレイザもそろりと移動を始める。

今ならアヌの足が止まっている。

だがそれは一台の車によって阻まれた。

「セーラちゃん」

車から出てきたのは一条薫子。手にはショットガンを持っている。これに衝撃を受けたのが戦乙女たち。

なにしろスズの正体は薫子と推測していたのだ。ところが当の本人がこう言う形で否定した。

(え？ それじゃスズは一体誰なの？)

戦闘中と言うのを忘れるほど混乱して立ち止まるセーラ。

ここで逆にクールになったアヌ。

まずは戦乙女の一人をしとめるとばかりに超加速でセーラに迫る。  
「危ない」

スズの金切り声で自分に脅威が迫っていると察知したセーラ・フエアリーはとっさに空に逃げた。

そしてそのままスズの元に。

「どういうことなの？ あなたお姉様じゃなかったの！？」

「今はそんなことを…危ないッ！」

セーラを抱き締めるスズ。その背中にアヌの体当たり。

カマイタチだと姿を視認される。だから超加速そのものを攻撃に応用した。

吹っ飛ばされたスズとセーラは運悪く女の急所とも言っべき胸から落下した。

その「女にしかわからない痛み」で一瞬だが気を失ったのか清良の姿に戻る。

「この」

ジャンスが援護で弾丸をばら撒く。そのおかげで清良たちは無事だ。

だがその清良は愕然としていた。

これだけ長い時間を変身していたにもかかわらず男の精神状態に戻っていた。

「そ…そんなバカな？ どうしてお前が…スズの正体だと言っのか？」

スズが吹き飛ばされた場所にはスズメバチの異形の姿も二十台の女性の姿も無い。

福真高校女子制服のセーラー服。リボンでくくられたポニーテール。

新体操で鍛えられ均整の取れたプロポーション。それでいてしなやかさを感じさせる。

顔は見えなくとも幼いころからの付き合いで後ろ姿だけでも誰だかわかる。

清良の絶叫がこだまする。

「お前がスズなのか？ 答えてくれ。友紀ーつつつつ！」

### EPISODE 43「正体」(後書き)

#### 次回予告

(ススト…ルコ…サザ…ギル…ライ…みんな死んだ。もう生き返れない)

「これからここに相手を迎え入れるのよ。逃がせる人は逃がさない」と

「私と同じだったのは『罪の意識』だ」

「やめる。お前まで闘う必要はない」

### EPISODE 44「純愛」



## EPISODE 44 「純愛」

「何いつ!？」

スズの「正体」に動揺を与えられたのは戦乙女サイドだけではない。

闘っていたアヌも驚いた。

本来ならば殺してしまう相手。素性などどうでもよい。

だがさすがにそれが同胞であるルコが憑いていた相手となるとそうも行かない。

(バカな!？ あの娘はルコが憑いてそして元に戻ったはずだ。今はまだ我々が取り付ける状態ではないはず)

その逡巡がまずかった。腹部に焼け付くような痛みを感じて我に帰る。

とつさにその場を離れてから確認するとジャンス・ロリータフォームが銃弾をばら撒いていた。

その「流れ弾」が腹を掠めたのだ。

(くそつ。一時撤退だ)

負傷して戦乙女「四人」を相手にするほど回りが見えなくなっていない。その場から消えた。

「惜しい。脚だったら止めて倒せたのに」

悔しがるジャンスだが変身解除したセーラとスズを援護するために乱射していたのが相手を退けて幸運なのは理解している。

ジャンスはガトリングの前後を分離させてピンクのオートマチックと黒いリボルバーへと戻す。

同時に彼女自身もメイド服姿のヴァルキリアフォームへ。そして制服姿のエンジェルフォームへと。

ブレイザも同様に防御形態に。そして清良たちの元に駆け寄る。そこでは気絶した友紀を抱きかかえ呼びかける清良が。

「友紀。おい。しっかりしろ。友紀」

「とにかくこの場を離れましょう。ドーベル」

ブレイザは使い魔を呼び寄せる。それと同じくして女性警察官一人が駆け寄ってくる。

「どこか安全な場所に野川さんを」

「ノリ。手をかして。友紀ちゃんを運ぶわよ」

「わかった」

覆面車の後部座席に友紀を運び込みそのまま清良とキャロルも同乗する。

走り出す車を守るようにドーベル・サイドカーモードとウォーレン・バイクモードも走り出す。

#### EPISODE 44 「純愛」

ア又は人目を避けて移動していた。

脇腹の傷が痛みさすがに視認出来ないほどのスピードでは走れない。

河川敷だったこともあり放置されている草むらもある。

そこに倒れこみ呼吸を整える。少しずつではあるが驚異的なスピードで傷が消えて行く。

（物理的な攻撃でできた傷など一呼吸する前に治るがさすがに戦乙女の「呪い」がかかるとそうもいかん）

人間サイドでは「聖なる魔力」になる戦乙女の力も、敵対するアマッドネスにしたら呪いだっただ。

傷が消えたら人目につく獣人の姿から軽部司郎の顔に戻る。まだ倒れたままだ。

「彼」はスーツの内側にある携帯電話を取り出し三田村の携帯電話の番号を出す。

通話ボタンを押しかけて迷う。

（声が聞きたい。あの人の声が…だがこんな報告をしたら失望されるかもしれない）

そもそも声を聞きたいと言う時点で自分の「弱気」を認めたようなものだ。

電話を持ったままその手を胸の上に置く。

（ラスト…ルコ…サザ…ギル…ライ…みんな死んだ。もう生き返れない）

倒れた同胞を思い仰向けのまま空を見る。目にしみるほど青い空であった。

（食われなかったら…あの空の向こう側にも行っていたのだろうか）

魂と通じ合えることから「死将」呼ばれるアヌにもわからない。

（私もいずれ死ぬ。一度死んだ身だ。それは怖くない。だがガラ様のおそばにいられなくなるのは死ぬより怖い）

「彼」と「彼女」は乙女のように頬を染めた。

（ああ。ガラ様。警部。私の望みはたった一つ。あなたと結ばれることなのにどうしてそんなことがこんなに難しい。無敵のアマッドネスがたかが愛一つにこんなに苦しむなど）

祝福されない愛と言うのは理解していた。アマッドネスとしては

身分の違い。軽部司郎としては『同性愛』に対する世間の風あたり。  
(この秘めた思いが伝えられないというのならば、やはり私にはあ  
のお方の盾であり矛である生き方しかない)

軽部はやつと身をおこした。

(ならば矛として戦乙女を討ち果たす。それが私のなすべきことだ)  
そして立ち上がり、ゆっくりとだが歩み始める。

走る車の中で友紀は目を覚ました。

「気がついたか」

「きよし…」

ぼんやりと彼女は清良の顔を見上げる。優しく微笑んでとても喧  
嘩無頼とは思えない。

「え？ あたし…」

アングルから自分が清良に抱きかかえられていたことを察する。

「きゃあっ」

瞬間的に恥じらいが生じて悲鳴を上げさせ、そして頬を染めさせ  
る。

「なんだよ。お前が気絶しているから落ちないように抱えてただけ  
だろうが」

怒鳴る清良も頬が赤い。恥ずかしさをごまかしていたのは明白だ。  
さんざん女性化してからやってしまった乙女の言動を男に戻って  
から死ぬほど恥ずかしい思いをしてきた清良だが、これはまた別の  
恥ずかしさだった。

それを理解した友紀は感謝の言葉を告げる。

「ご、ごめん。ありがとね」

「お、おう」

まだ二人は赤い。

「うふふふ。二人とも初々しくて可愛いわあ」

「薫子さんも変なこと言うんじゃないよー！」

いっそ女の姿だったらよかったかもしれないとまで清良は思う。

女同士ならこんな気恥ずかしさはない。

「カオル。あんまりからかわないの」

運転席ののり子がたしなめる。少女のように舌をぺろっと出す仕草の薫子。

おかげで戦いの際の混乱はリセットされた。

「友紀ちゃん。大丈夫？」

今度は案じて尋ねる。

「はい。平気です」

「どうする？ 警察病院に行くつもりだけど」

「それには及ばない」

口調が変わった。それどころか顔も変わった。

「お前：スズ？」

前にあったスズの人間としての姿に変貌していた。

これには女性警官二人も驚いた。何しろ初めて見る。

「どういうことだ？ どうして一度アマッドネスに憑かれた友紀にお前が憑ける？」

「私のヨリシロが友紀と知れば君が必要以上にかばうと判断して黙っていたが、こうして知られた以上はすべてを話したい。出来れば誰にも迷惑の掛からないところで」

「そうね。あのアマッドネスはあなたを狙っていた……と言つか恨みがあったみたいだし。病院じゃ患者に被害が及びかねないわ」

「署はどう？ なにしる警官だらけよ」

この一言で会談場所が福真署で常時使っている場所になった。

「ではお二方には私から」

キャロルがダブルとウォーレンに伝えそこから二人の戦乙女にも伝わった。

一同は福真署へ。そしてその際に一つの手が。

警察無線を自分の乗る覆面車で傍受した軽部。それは薫子達が福真署へ向かうというもの。

瞬時に畏と察した。自分は既に軽部司郎と言う「警察官」の姿を見せてしまった。

この無線がおびき寄せのための物としか思えない。しかし（上等だ。私の任務は戦乙女どもの抹殺。向こうから場所を指定と言うなら警官隊の待つ中に入り込んでやるうじやないか）

異常な決意をした。死に急ぎ始めていた。

情報交換などに使う一室。向かい合わせになったソファ。

片方はジャンスとブレイザがスズをはさんでいる形。

向かいには清良。薫子。のり子は戻るなり警官隊を指揮して再び外に出た。

それどころか人がすごい勢いで出て行く。

「ラッシュアワーだな」

「これからここに相手を迎え入れるのよ。逃がせる人は逃がさない」と

「戦場になるのはわかったからその物騒なものどこか目に付かないところにしまつといてくれよ」

空いた席にはショットガンと散弾銃がある。

理由を聞いたら空に行くアマツドネス対策でおいてあるのだそうだ。

「それにしてもまさか軽部さんがアマツドネスだったとは」

いきさつを車中で聞かされた薫子は動揺を隠せない。

それでも「そうかもしれない」と言う思いで探していたくらいだから幾分は軽い。

「あれだけアマツドネスが派手にやっているのになんか警察が後手後手だと思っていたが内部に幹部がいたんじゃ無理もないな」

「およしなさい。セーラさん。失礼ですわよ」

すでに変身後が長く女性のほうが基準となっているブレイザとジャンスは変身を解除していない。

エンジェルフォームの女子制服姿だ。

「それで本題。どうしてスズさんが友紀さんと？」  
ジャンスが促す。今は女性用スーツ姿に扮したスズが一同を見渡す。

そして六武衆やガラとさし違えたことを伝えた。

そのころ、警察の広報車が走り回っていた。

工事現場から不発弾が見つかり緊急の処理を行うための避難勧告だ。

いつまでもなくこれは方便。

一般人に被害が及ばぬように避難させる。

会談場所。スズが静かに話を進めて行く。

「だいたいはわかった。一つだけ疑問だ。どうして友紀と融合できる？」

当初は邪心と評したネガティブな心情でシンクロすると取り付かれると思っていた。

だからアマッドネスから解放されると男性の場合は女性化と言う代償はあるが心の重荷はすべて吹き飛ばす。

ゆえに二度と取り付かれなれないと思いついていた。

少なくともここまで二度アマッドネスになったケースはない。

「これはこの時代に魂だけで蘇ってから初めての現象なので推測だが…結びつくのに必要なのが君たちの言う『邪心』とは限らないということだ」

「そう言えば…」

ブレイザは激しく切り結んだオウルアマッドネス・コノハを思い出した。

あれは単に強い相手と闘いたい。それだけだった。

邪心と言うより純粹な願い。

清良もパピヨンアマッドネスを思い出していた。

こちらも「女の子になりたい」と言う思いがロウテとのつなぎに

なった。

「じゃあ友紀の場合は？」

「私と同じだったのは『罪の意識』だ」

推測ではなく言い切った。そしてそれで充分だった。

スズはかつてはアマッドネス。その無法の行いで幾人物人の命や財を奪い取った集団の一員だった。

命を直接奪ったのは六武衆を倒した時が初めて。それでもそれまで止めていなかったのだ。間接的に略奪などに加担なしたと言える。友紀は取り付かれていたとは言えど清良を殺しかけている。

共に強い悔恨があり、贖罪を求めている。

それが二人を結びつけた。

覆面車で流しつつ街を見渡すが人が誰もいなくて軽部は驚愕した。人がいないのは理解できる。迎撃前提だ。巻き添えを嫌うなら当然。

しかしいるはずの警官隊までいない。これでは奴隷女として「戦闘員」を増殖することも出来ない。

（くそつ。やられた。どうせ拳銃も通用しない。やつらも避難対象と言っことか。すると）

待ち構えているのは戦乙女とスズだけ。望むところだった。

（ならば奴らの度肝を抜いてくれる）

軽部はジャツカルアマッドネスに変身すると両方のドアを吹き飛ばした。

そして入り口に福真署の入り口に向かって加速した。

実は警官隊は潜んで配置されていた。

その指揮は渡会の子。サポートとして使い魔たちが協力していた。

相手は人外。人の力だけでは太刀打ちできないゆえだ。もちろんアヌ・軽部が向かうのを知らせる目的もある。



しかしそんな使い魔たちもさすがにこれはどきもを抜かれた。

(セ、セーラ様。危ないです)

あわててキャロルが思念を送る。

「だからお願い」

不意にスズが友紀の姿に戻る。彼女が直接伝えたい言葉。

「私も闘わせて。キヨシ」

「ダメだ。危ない」

清良としては当然の反応だ。

「私だけじゃない。スズさんが協力してくれる。私たちは罪を償いたい」

「何度も言っているだろう。あれはお前の……なんだよキャロル。うるせーな。危ない？ なに」

「何がだよ？」と言いかけた所に激しい音が。

驚いて全員がそちらを向くと段差すら物とも乗せず車が突っ込んできていた。

事故にしては正確すぎる。アヌが先制すべく乗り込んだのは想像に難くない。

(むちゃくちゃしゃがる。自爆覚悟かよ?)

清良は恐ろしさを感じた。こうまでして自分たちに殺意を向けるとは。

「キャストオフ」

ブレイザとジャンスがヴァルキリアフォームに。そして立て続けに超変身。ブレイザ・アルテミスフォームで動きを察知。

そしてジャンスがそこを撃つというコンビネーションだ。

「まだ中ですわ」

「了解」

ロリータフォームで運転席めがけて乱射。薫子もショットガンを

撃つ。しかしそれは既にアヌの頭にある。

あらかじめ確保していた出口から飛び出す。そして壁をめがけて飛ぶ。

（またあの反射攻撃？）

壁から自分の方へ向かう直線をイメージして軌道を読む。そこを斬るつもりだった。

しかしとんだのは反対側の壁。そこをさらに蹴る。

超感覚ゆえ追えたが身体能力はアヌの方が勝っていた。かろうじて向き直ったもののブレイザは一撃を食らう。

「くそつ。オレも」

清良は変身しようと立ち上がる。

その隣で友紀が。

「やめる。お前まで闘う必要はない」

「でもこのままじゃみんなやられる」

脅し文句ではない。とにかくあのスピードが厄介だった。最強の防御であり攻撃だった。

「……………ッ！」

友紀を巻き込みたくはないがこのままではじわじわと殺される。

この時点でジャンスロリータフォームは魔力を使い果たして強制的にエンジェルフォームへと戻っている。ブレイザも負傷している。強制的にエンジェルフォームに戻っているがアルテミスで魔力を消費したため闘えない。劣勢だ。

ただし何発かはアヌを掠めていた。そしてこの運動量。さすがに止めざるを得ない。

姿を現すがジャンスもブレイザも攻撃出来る状態ではない。薫子のショットガンを物ともせずゆっくりと迫りくる。

清良はここでやっと踏ん切りがついた。

「仕方ねえ。お前は俺が絶対を守る……………いや」

友紀。そしてスズの気持ちを考えて言いなおす。

「一緒に闘ってくれ。友紀」

「わかったわ。清良」

笑顔でうなずく友紀。

学制服姿の清良は右手を天に。左手を地に向けガントレットを出現させる。

セーラー服の友紀は左手の甲を下に向けてわきにひきつける。その手首に右手の手首を合わせる。

清良の腕が水平になった。

友紀の腕が右へ移動してから中央に。

清良の腕がひきつけられた。

友紀の手が前方へと伸びる。共に叫ぶ。

「「変身」」

清良の手が前方へと突き出され交差。まばゆい光に包まれる。

友紀の手が上下反転すると瞬間的にスズの人間体に。そしてメタ

モルフオーゼが始まる。

セーラー服の戦乙女とスズメバチの異形がそこに現れた。

「拳の戦乙女。セーラァッ」

「我が名はスズ。アマッドネスを滅ぼすもの」

かつてとはだいぶ姿が変わっているがそれでもスズをイメージさせる姿。

「スズウウウウウッ」

瞬間的に沸点に達するアヌ。

これまでは監督する立場で影から冷静に見てきていたが実践に出た事。

そして自分とガラの仇であるスズを見たらどうにも血が滾り抑えきれない。

セーラには目もくれずスズに向かって突進する。まずは動きを止

めるべく体当たりを敢行。

しかしそれはセーラ・エンジェルフォームがその鉄壁の防御力でガードした。

スズに向かっているのがわかっているのだ。軌道を読むのは難しいことではない。

「邪魔をするなあつ」

腕を振り下ろす。セーラがガードするも頭にある。ガードした瞬間の隙を突く。だが

「キャストオフ」

攻撃は最大の防御。ヴァルキリアフォームに転じるべく布のヨロイをふっ飛ばした「爆風」でアヌをふつとばす。

間髪おかずにセーラとスズが攻撃すべく駆け寄る。

セーラの拳。スズの剣が当たらぬまでもアヌを防戦一方にさせていた。

(くっ。とりあえず間合いを取る)

まずは後方の壁に飛ぶ。そこまでは読まれるだろうが反射してしまえばこちらの物。

セーラがフェアリーフォームになるとしてもチェンジに若干の間が掛かる。問題ないと思っていた。

だから思った通りに壁へとバックジャンプする。まるでそれを待っていたかのように薫子の散弾銃が火をふいた。

「ぐおっ」

不意を突かれた形で意外にダメージを受け反射し損ね落下する。

後方と読みきれたのは半分は壁との距離。後方が一番近い。それに後方なら二人の攻撃をさけながら出来るが左右だとどちらかの攻撃を真正面から食らう。

後は半分は見当つけてのばくち。それに勝った。運も味方してきた。

「もらいっ」

動きさえ止まればジャンスの物。まだ回復しないがエンジェルフ

オームの矢を放ち腹部に突き刺さらせる。

一番大きな的を狙ったのであり「逸れて」胸に当たればなおラッキーと言う考えであった。

それでも魔力のある矢で受けたダメージは動きを止めるには充分だ。

「だあああつ」

これまた再度の超変身で傷をリセットしたブレイザ・ヴァルキリアフォームが斬りかかる。

アヌはとっさにかわしたものの脚に深手を負う。最大の武器であり防具である俊足に重大なダメージを受けた。

無様にひざまずく。まるでスズに土下座をする形だ。

「終わりだな。アヌ。友の元に逝くがよい」

「逝けだど？ 私はただガラ様のお役に立ちただけだ。それだけがあのお方へ私の愛を示す手段だ。誰かを愛する事が罪だと言うのか？ ならばお前は罪を説いていたことになるな」

挑発ではない。それは半狂乱が証明していた。

「だがそれで他の者を踏みじめる事など許されない。もう逝け。いずれ私も行く。待っていてくれ」

スズは哀しそうにつぶやいて歩み寄る。まだアヌの傷は癒えていない。逃げられない。

「許せよ」

懺悔の言葉と共に細い剣で心臓を一刺し。いくらアマッドネスでも急所には違いない。

「とどめは頼む」

最後をセーラに託した。セーラは無言でうなずき歩み寄る。

天井の低い室内ゆえキックの高度が取れない。となると技は決まってくる。

「じゅめん」

奇しくもこちららも詫びの言葉を発して左手のチョップ。これで動きが止まる。

そして即座に炎のアップパーカット。クロスファイアーだ。

「あ…ああ…ガラ様。ガラ様。ガラ様あーっ」

最後の最後まで愛しい存在の名を呼んで強敵。アヌは散った。

警視庁。とある一室。

タバコを燻らしていた三田村の脳裏に嫌な電気が走る。

(アヌ…逝ったか)

その表情は抜け落ち、何の感情も見出せなかった。

死将・アヌ 散華 六武衆全滅

いつものように全裸の女性が気絶している。軽部司郎だった女だ。

一応はもう女だ。裸体を晒しておけないので薫子がとりあえず宿直室から持ってきた毛布をかぶせる。

そこで気がついて無線を手にする。

「ノリ。終わったわ。警戒態勢は解除よ」

「逃げて……………いぶ」

薫子は硬直した。あれだけ固執していたガラ將軍。その人間の姿の名前をつわごとで口にしかけている。

一方で戦闘の終了した戦乙女たちはさすがにほっとしている。

「どうしてあの時お二人は謝ったんですの？」

「一応はかつての同胞だったからな。というより」

「かわいそうだったから…だろ。友紀」

不思議なことにセーラは未だ男性精神のままだ。

「うん」

仮面の異形から一瞬だけスズの顔になり、そして友紀の姿に戻る。

「あの人、間違っちゃったんだよね。もちろん人殺しは許されないけど大きな所では好きになった人に愛されたくてあんな風になっちゃったんだよね」

「そつか。歪んでいるけど『純愛』だったのかな」

元から女性的なジャンスはどこか遠い目でそうつぶやく。

「そしてセーラさん…と言うより高岩くんと野川さんも純愛かしら」

一応は友紀の前と言うこともあり呼び捨ては控えたブレイザ。

「な、何でだよっ!？」

「お気づきになりませんか？ あなた男の心のままですわよ」

にんまりと言う感じで笑う。まるつきり女。それも恋の話が大好

きな女子高生そのもの。

「なるほど。友紀さんを思う心が男の心に戻すのね。素敵」

こちらもだった。元が元だけによりひどいトリップをしている。

「ちょ…お前らなあ」

いじり倒されかけてきたがそれを打ち破る緊迫した声。

薫子のそれだ。電話をしている。

「こちら一城。緊急手配を願います。警視庁の三田村健治警部の身柄を確保してください。アマッドネスの大幹部の危険性があります。繰り返します。三田村警部はアマッドネスの危険性があります」

EPISODE 4 「純愛」(後書き)

次回予告

「なっていないな。鍛えなおしてやる。わが配下となれ」

「だったらなおさら離れられるか。友紀も、そしてお前もオレが守る」

「カオル。やはり連絡が取れないわ」

「スズはこないのか？ それならば引きずり出すまでだ」

EPISODE 5 「将軍」



## EPISODE 45 「將軍」

警視庁。外部にならともかく内部に「踏み込む」機動隊員たち。さすがに初めての経験。

まさかここに踏み込む日が来るなどとは夢にも思わなかった。その思いを胸に進攻する。

対して事務職員などは退避している。

目的の部屋の前で機動隊員が盾を全面に押し出してちょっとした壁を作る。通路はふさがれた。

「よし」

完全武装した「刑事」がマイクで呼びかける。

「三田村さん。あなたに容疑がかかっている。任意の出頭で……三番取調室まで御同行願いましょう」

一応は「グレー」だ。敬語で接する。しかしそれでも現職の警部に「取調べするからこい」などと言うのはためらいがでて言いよどむ。

機動隊の者には「これでもぬけの殻なら笑いものだ」と笑みが出ているものもいる。

だが笑い者ならまだいい。下手すると殺される。そう認識しているものに笑顔はない。

しばらく待つが返事がない。

「出た様子は？」

「ありません。しかし通報が事実なら……」

窓から逃げ出すくらい「怪人」には造作もない。そういいたかったが言えなかった。

中から扉をつきぬけて飛んできた「あばら骨」がその警察官を貫いた。

狙ったわけではなくたまたま軌道上にいた不運だった。

「おいつ。しつかりしろ……!？」

男子警官だったそれは見る見るうちに傷がふさがり女の姿へと変わって行く。

意志の光のない瞳で刑事を見据えるといきなり首を締め掛かる。あわてて他の機動隊員が引き離そうとする。そのときだ。中から扉が蹴破られた。

三つ揃えのスーツに身を包んだ三田村がタバコを燻らせながら出てきた。

口ひげがダンディなイメージだがどこか女性的な印象もある。

「騒々しいな。何の騒ぎだ？」

「警部……」

常日頃、上司として認識している相手に逮捕状どころか武器を向ける。

そんな割り切りはなかなか出来るものではない。

「敵を前に躊躇するとは嘆かわしいな。私はそんな風に指導した覚えはないのだが」

紫煙をはきつついう。

「敵？」

「お前たちが私にかけている容疑はこれだろう」

三田村はタバコを投げ捨てた。同時にその姿が女の物に。

それも人の女ではない。蛇のようなうろこで武装している。

大きな金色の目が不気味に光る。

三田村刑事と融合したガラ將軍の戦闘形態。便宜上スネークアマ

ツドネスと呼ばれるそれだ。

「う、撃てーっ」

目の前の存在が「容疑者」から「化物」に変わり「セーフティ」が外れた。

一斉に射撃を開始するが、そのうろこが強度と微妙な角度で弾丸をはじきダメージを軽減する。

「なっていないな。鍛えなおしてやる。わが配下となれ」

ものの十分もしないうちに十数名が殺害され、奴隷女として再生された。

勇猛でなる軌道隊員も指揮を待たずに逃げ出した。

「よし。お前たちは私の手伝いをしろ」

新たに得た配下に命じスネークアマッドネスは悠然と警視庁を出て行く。

## EPISODE 45 「將軍」

福真署のエントランス。ジャッカルアマッドネスとの激闘でめちやめちやな状態だ。

その中に清良。ブレイザ。ジャンス。友紀。合流した岡元。森本。キャロル。ドーベル。ウォーレン。そして一城薫子。渡会のり子の二人の女性警察官がいた。

「はは。ちよつとした被災地だな」

「不謹慎よ。清良」

軽口を叩く清良を友紀がたしなめる。

しかし清良の例えはまさにそのままであった。

壁には弾痕。多数の器物は破損。機能回復に時間が要りそうだった。

た。

すぐにでも掛かりたいところだが二人の女性警察官は連絡を取るのに夢中だ。

「カオル。やはり連絡が取れないわ」

沈痛な面持ちの渡会の子。元々堅物で笑顔をあまり見せないが、この時はより重い表情をしていた。

「早まったかしら……」

こちらも暗い表情になる薫子。早急に身柄確保と通常の犯罪者相手の時の「習性」が出て連絡をいれてしまった。

三田村がアマッドネス。その推測が外れていたならいい。

だが最悪の形的中したのを悟った。

そしてしばらくしてから警視庁が内部からのアマッドネス出現で混乱していたことを知る。

三田村は推測どおりアマッドネスで機動隊員や警官を奴隷女に変えて自分の兵隊に。

そのまま姿をくらましたと知らされた。

二人は本庁へと急行することにした。

「オレたちも行こうか？」

代表して清良がいう。ブレイザ。ジャンスに異存はない。

「いえ。あなたたちはとりあえず帰っていいわ」

「そんな場合じゃ」

「軽部さ…ジャツカルのアマッドネスとの戦いで疲れているはずよ。見つからないのに闇雲に探して体力を消耗させるのは得策ではないわ」

理にはかなっている。

「今は帰って休んでおいて。でもまた」

「わかってますわ。敵を見つけたら」

「その時はあたしたちの出番ね」

今度はブレイザとジャンスが答える。

とりあえず解散となったのでジャンスは岡元にしがみつく形でウオーレン・バイクモードで。

ドーベルサイドカーモードを駆るのはブレイザではなく森本。負傷と疲弊を考慮してだ。

気のせいかなジャンスどころかブレイザまで「女の子の表情」だった。

(けっこう長い時間戦っていたからだよね?)

自分たちの女性化が深い所まで進行しているとは考えたくない清良は、自分で自分をごまかしに掛かる。

「それではセーラ様。友紀様。私がお送りしますので」

こちらも同様に疲労を考慮してキャロルが申し出る。しかし

「いや。キャロル。それはいいや」

主がやんわりと断った。特に不機嫌そうには見えない。

「そう仰られますと?」

疲れているでしょうに。そう思う従者だが清良が友紀の方を向いたのを見て瞬時に悟る。

このあたりは女性としての人格のせいなのかもしれない。

それを知ってか知らずかいつになく優しい声と表情で友紀に尋ねる清良。

「歩いていくか?」

友紀はこくりとうなずいた。

11月半ばだが街はクリスマス一色に染められていた。

ショーウィンドーは雪景色を模した仕様に。

赤と緑があふれかえり、クリスマスナンバーがひっきりなしに掛かる。

「もうすぐクリスマスね。なんだか色々あって忘れていたわ」

商店街を抜けて友紀がいう。

「ああ。本当に色々あったな」

友紀を相手に戦い、そして今度は友紀と共に戦う。そんなことはまったく考えてなかった。

状況がめまぐるしく変わっていく。

そのあわただしさから逃れたい気持ちが一二人でゆっくり歩くといい選択肢に出た。

「そ、それにしてもキャロルの野郎。変に気を回しやがって」

「うふふ。やっぱりキャロルちゃんも女の子なのね」

歩いて帰るといった途端に人間だったら「にやり」と言う表情をしたように見えた。

そして「では何かあればお呼びください」と姿を消したのだ。

「ったく。余計な気を回しやがって。お前の使い魔もどこにいるんだ？」

「使い魔？」

照れ隠しに話題を変えているのはわかる。だからあえて話に乗る友紀。

「勝手に走ってくるバイク。あれは使い魔じゃないのか？」

「残念だがアマッドネスにそういう技術はなかった」

いきなり二十台の女性の姿に変わる。セーラー服の少女ではなく黒いコートの女だ。

「おま…スズ？」

隣がいきなり変われば当然の反応。

「あれは捨てられていた鉄の馬に私の魔力を与えてかりそめの命を与えただけだ」

「へえ。タンクにゃガソリンの代わりに魔力が入ってするっていうわけか。それより何でいきなり出てきやがった？」

言外に「いいムードを壊しやがって」と言う意味が込められている。

「すまない。だがこれだけはいう必要があった」

真面目な表情につられる清良。

「六武衆が全滅した今、恐らく次はガラが出てくる」

「將軍とかいう奴か？」

スズは無言でうなづく。

「ま、將軍様としても面子が有るだろうしな。それに下っ端には任せてられないだろ」

108とばかり思っていたアマッドネスだが、それはミュスアシを攻めた数。

六武衆のようにそれ以外の者がいる可能性も有り、正確な残り人数はもはや不明。

しかし上位とされる幹部級が全滅。確かに將軍自らの出陣もありえる。

「そして奴は私に対して遺憾を感じている。作戦の内容にもよるが戦うならまず最初に私を狙ってくるだろう」

今は潜伏して準備していると言うことかと清良は考えた。

「つまり私といると襲撃を受けると言うことかと清良は考えた。あまり近寄らないほうがいい」

「ざけんな！」

笑顔より怒り顔の似あう少年はそれにふさわしい怒声を浴びせる。「だったらなおさら離れられるか。友紀も、そしてお前もオレが守る」

「私はアマッドネスだぞ。君たちの敵だ」

「あんた自分で言ってたろうが。奴らとは縁を切ったと。そして実際にオレたちと一緒にやつらを倒した。もう仲間だよ」

真剣に怒っている。スズは怒鳴られているのに微笑む。

「な、何がおかしいんだよ。それにその体は友紀のだから。無事に返してもらわないと困るんだよ。だからオレが守る。お前から離れないぞ」

照れてはいるが本気の言葉だった。スズは胸が暖かくなった。

(この気持ちは私の物か。それとも友紀のものかな?)

そんなときに出る表情は笑顔しかない。心を許した相手に見せる無防備な笑顔。

「頼もしいな。そしてうらやましいよ」

「いうなり彼女は清良に抱きついた。」

「な!？」

動揺した清良だがそれだけではとどまらない。その状態でスズから友紀に戻ったのだ。

「ちょ!？ 清良?」

いきなり入れ替わって見たら清良と抱擁。しかも商店街で。赤くなる友紀。

「待て。誤解するな」

(発言は撤回する。友紀。しっかりと守ってもらえ。そのたくましい少年の腕で)

「す…スズさん!？ そんな勝手な」

二人は失念していた。

ここが人でにぎわう商店街と云うことを。そこで抱擁していると云う事も。

「聞きました？ 奥さん」

「ええ。最近の若い子たちは大胆ですわね」

「わー。お姉さんとお兄さん。恋人なんですか?」

「すっごあい。らぶらぶ」

「けっ。リア充が。何が『お前から離れないぞ』だ。見せ付けやがって」

主婦。小学生。大学浪人などが口々に好きなことを言う。

「あわわわわ」

「ま、待て。違うんだ。これはその…」

真相をいえるわけがない。結局その場から逃げるしか出来なかった。

十分に離れて息がきれて止まる。

「大丈夫か？ 友紀?」

「私は平気だけど…あの…そろそろ…」



走ったから頬が赤いわけでもないような友紀が上目遣いになって言う。

「ん？……わああああっ」

清良は走る間ずっと友紀の手を握り締めたままだったのだ。

確かに言葉どおり離れようとしなかった。

「わ、悪い」

「う、うん。平気」

二人は赤くなって離れる。

そっぽ向いているが不仲ではない。

恥ずかしくてとてもではないが顔を見ていられなかったのだ。

ジングルベルの曲が流れる。

二日が経った。しかし依然として三田村の姿は見つけられない。

「そうですか。警部はまだ」

髪の毛の短い女が表情を曇らせる。場所は復旧中の福真署エントランス。

通常は清良たちと会談に使っていたエリアである。

厚手の生地ワンピース。さすがに素足ではなくストッキング着用。

きちんと化粧までしているその顔に面影があった。女性の柔らかい顔立ちに不似合いな鋭い目つきが特に。

かつては軽部司郎だったがジャッカルアマッドネスに憑かれ、それから解放されて女性化したので軽部しのぶと言う新しい名前を名乗っている。

「しのぶ思い」がネーミングの由来のようだ。

犯罪行為は立証されているものこの場合は「責任能力なし」で拘留されていなかった。

大半の元・アマッドネスが善人と化す前例も考慮の上だ。

重要な参考人として証言をしていた。

それで身元不明のまま入院している記憶喪失の女性が、失踪中の中屋敷純郎の変貌した姿とも判明した。

「それでしのぶさん。三田村の潜伏場所に心当たりはない？」

しのぶと呼んだのは当人が女性として扱われることを望んだゆえ。同性ゆえに届かなかった愛。しかし異性と化した今ならば……。

だから積極的に女性として振舞おうとしている。それは衣類にも現れている。

覚悟と言つなら薫子もだ。三田村を呼び捨てにしたのははじめである。

完全に敵と認識している薫子だった。

「いえ。残念ながら」

嘘をついている様子はなかった。ひどく落胆しているのがみとれる。

これまでは常に職場に行けば「愛しい相手」がいたのである。それが所在不明。

しかも追う立場から逃亡者へと転じていけば案ずるのも無理はない。

さらに三日が経ち唐突に事態は動き始めた。

いや。それをいうなら深く静かに潜行していたものが浮上したと言つほうが正しい。

三田村と十数名の奴隷女の潜伏場所はなんとやくざの本拠地だったのだ。

ビルではなく和風の「屋敷」で確かに十数名でもなんとか「匿えそう」だった。

むろんやくざが警察官を匿う道理もない。

だが事情は至ってシンプル。組長を人質に取られていたのだ。

おまけに叩けば埃の立つ身。そして意地もあり、また人質を取っ

ていた「犯人」そのものが警察官だったから警察に知らせなかった。しかしそれは完全に裏目。

三田村：ガラは組長以下すべてを奴隷女へと変えた。それを町に解き放つ。

各地で無差別に暴れる奴隷女。

だが体力がやや一般人より高い程度。

武装した警官になら制圧できた。

しかしそれがすべて同じ組員バッジをつけている。

こうなると出向かないわけには行かない。

そして相手がアマッドネスとなると清良たちにも召集が掛かる。

（挑発か？ いずれにしても居所がわかったんなら出向いてやる）

清良はキャロル・バイクモードを駆り現地へと急ぐ。

スズにああは言われたが友紀を巻き込みたくないので知らせず、単独で出向いていた。

組の屋敷。完全にここの主になった三田村は静かに笑っていた。

「包囲したことは何度もあったが、されるのは初めてだな。こんな気分なのか。ふふふ」

どこか居直った口調だった。

「舞台としては悪くない。後は役者がそろえば私の最後の仕事だ。

やつらのうち一人でも倒せばよし。その後なら例え私が倒されても目的は果たせる」

そこで言葉を切る。

「私が倒される…か。それもいいかもしれないな。アヌ。そしてクインと一つになれる」

腹心の配下の「死」が彼をある意味で「急かしていた」。

「だがその前に奴だけは…あの日の始末だけは」

宿敵・スズの顔を思い浮かべる。三田村のダンディな顔が憎悪で歪む。

「ギ……」

見張りを務めていた奴隷女が報告してきた。

やくざの屋敷だけに襲撃を警戒して防犯カメラなどもある。

その映像に駆けつけた清良。礼。順の姿を認める。

「スズはこないのか？ それならば引きずり出すまでだ」

警察病院。

眠り続ける広瀬葉子を診察する医者。病院ではひたすら異質であるメイド。秋野ひかりがおびえた様子で見ている。

「ふむ。だいぶ体調がよいようですね。もう少して退院出来ますよ」  
医者の方も最初は「メイド」に戸惑ったが、そのイメージから今となってはただの付き添いとしての認識だ。

「そ、そうですか」

かつてはトードスツールアマッドネスであったが、その「力」を「食われた」巻き添えで女性化した元・秋野光平であるメイド。

それだけにこの幼女に親愛の情や慈しみの感情はなかった。

あるのはただ恐れ。

手を出した結果がこうして下女として使われる日々。

逃げても無駄な気がしていた。

すっかり諦めた彼女はただただ葉子の御機嫌をとるばかりの日々。

医師が立ち去った途端に幼女は眠りから覚めた。

「よ、葉子様。お目覚めですか」

もうすっかり板についた女性的な笑みで接するひかり。どこか卑屈さが漂う。

「ひかりお姉ちゃん……私はあと少してここから出られるぞ」

言葉の途中で豹変した。前半は広瀬葉子として的人格だが後半からアマッドネスの長としてのそれに変わる。

「ロ、ロゼ様」

ひかりから笑顔が消える。

それを見てサディステイックな気持ち満たされた口ゼは満足そうに微笑む。

「さすがに六武衆クラスの力ともなると私に戻すにも時間がある。だがアヌの力も私の物に戻した」

長い年月でそれぞれの持ち主に合う「力」へと変質していた物を「消化」するのに時間を要した。

微小な存在ならともかく強大であればあるほど長い時間が必要だった。

しかしそれもあとわずかで仮の復活が出来るところまで蓄積されていた。

「後は戦乙女かスズ。あるいはガラの力。その二人分が戻ればこんなところとはおさらばだ」

だからガラは戦いに望んだ。自分が死してクイーンに力をささげてもよいが、どうせなら敵を倒して同時にクイーン復活を果たしたほうがよい。

そしてそれが怨敵・スズならどれほどよいかと思っていた。

5日の潜伏はクイーンがアヌの力を消化するのを待っていたのである。

屋敷の門をパトカーでふさぎバリケードとしている。付近の住民は避難させてある。

本庁でのミスから警官隊はやや距離を置いている。もちろん防弾チョッキは着用済み。

アマッドネスの力をどの程度防げるかは疑問だがないよりは良い。人間相手でも緊迫感のある場面。ましてや相手は「化物」で、そして警視庁の大物だった男。

異様な雰囲気は当然だ。

そんな入りづらい中に到着した清良たち。

野次馬を整理している警官は所轄ではないが福真署からの応援だ。

つまり清良が戦乙女と知っているから滞りなく彼らは薫子の元にたどり着けた。

ただし警官隊の前で一般人が戦えるはずもない。それゆえ森本と岡元は野次馬と共に見守る羽目に。

「薫子さん」

怖い表情の彼女にためらいなく声をかける清良。

「あ。きてくれたのね」

切り札の到着でさすがに笑みが浮かぶ。

「すごいね。これ。映画みたい。でも本当に…！」

順が言いかけて「いつもの気配」を感じた。当然だが礼や清良もだ。

「なるほど。誘き出された形か」

礼がつぶやくがそれは承知していた。

「御丁寧にいることを知らしめてくれたか」

三田村は意図して中でガラへと転じて見せた。

これで戦乙女たちは自分が中にいることを知る。つまり目的どおり戦える。

「いけ。お前らは露払いだ」

ここでやっと元・機動隊員たちの奴隷女が解き放たれる。

変身前に先制攻撃をくらってはたまらない。三人は車を借りてその中で戦乙女へと。

そしてガラの気配。戦乙女たちの気配を感じ取りスズも戦場へとはせ参じていた。

屋敷は正門から建屋まで中庭のようになっている広いつくり。和風の庭園を思わせる。石灯笼や池まである。

その建屋の門から銃弾が放たれた。

映画のロケを見に来た感覚の野次馬の大半は、これが警察とやぐざのいざこざと改めて認識してとぼっちりを嫌い逃げ帰る。

実際にはもつととんでもないが……そのままいたら「都市伝説」を目の当たりにしていたであろう。

守りの立場でありつつ攻めに出る奴隷女たち。

サイズはあつてないが機動隊の衣類のままだ。

いくら非情に徹しても元の仲間たちを撃つ「覚悟」はない包囲している方の機動隊は防戦一方だ。

そして奴隷女に守られるように「主役」である三田村が姿を現した。

EPISODE 45 「將軍」 (後書き)

次回予告

「三田村さんっ。どうしてこんなことを？」

「スズはいないのか？ そう聞いているんだ」

「危ない。セーラー！」

「す、スズ。友紀。スズ。友紀」

EPISODE 46 「覚悟」



## EPISODE 46 「覚悟」

籠城しているやくざの屋敷。そこになんと「主犯」自らが姿を見せた。

まるで舞台に現れた千両役者。あまりの雰囲気射殺命令すら出せないでいる警察側。

そんな中で女の声が響く。

「三田村さんっ。どうしてこんなことを？」

さすがに当人を前にして感情の制御が難しくなった薫子。ハンドスピーカー越しに高い声で叫ぶ。

「籠城のことかね？ それとも」

舞台役者のように声を上げて返答する三田村。ふしぎとよく聞こえる。

奴隷女たちが牽制でポーズを取るだけで撃たなくなったのも大きい。

「こうしてアマッドネスになったことがかね？」

「またもや一瞬だがアマッドネスとしての姿を見せる。」

「そんな…」

非情な現実には薫子は立っているのがやっとだ。

「どうして…どうしてあなたが邪心を抱いて取り付かれたりしたんですかっ？」

後半は涙声だ。尊敬していた相手か化け物に身を落としていたのだ。涙も落ちる。

「邪心？ 心外だな。私は平和を願っただけだ」

それはあまりにも意外な動機だった。

「たわごとをつ」

直接面識のなかったのり子が代わりに言葉を叩きつける。薫子は打ちひしがれて会話出来る状態ではない。

かつてアマッドネスに憑かれた身としては「恨み」の相手ともいえるので言葉の棘がいつも以上にきつい。

「私はね…うんざりしていたんだよ。なくならない犯罪に」  
意外なほど静かに語りだす。

警視庁の警官として日夜人間の汚い部分を見続けてきた。それで人間に嫌気がさしたというなら若干だが気持ちもわかる。

「だがすべてが一つの価値で統一されればどうだ？　すべてを恐怖で縛り上げればどうだ？」

「ま、まさかそのために」

のり子もその思考の異常さに圧倒されて狼狽する。

「その通り。この東京だけでもアマッドネスの支配におかれれば少なくとも東京の犯罪は消える」

長年隠していた思いを日の光の下でかつての同僚たちの前で吐露していた。

それはまさに舞台役者のようだった。

「あんたバカあ？」

辛らつなのは彼女にふさわしくないがジャンスはそれだけ嫌悪感を抱いていた。

「それで略奪者どもに体をゆだねていては本末転倒ですわ」

待っている間に精神も女性化したブレイザが独特の口調で言う。

「今度はあんたが取調べを受ける番よ。覚悟なさい」

一番短気な清良から変身したせいカセーラがもつとも戦闘的だった。

「君達だけかね？」

「えっ!？」

「スズはいないのか？ そう聞いているんだ」

ジャンスとブレイザは連れて来なかつたいきさつは聞いていた。

そして納得していた。

「まあいい。これも任務。とりあえず小娘どもを血祭りにあげてくれる。そうすればスズも引つ張りだせるし（スズとの）戦いの邪魔も出来まい」

ここで三田村はガラの姿へと。そして雄たけびを上げて突進してくる。

同時に元・機動隊員の奴隷女たちが援護射撃を再開する。

ガラには銃弾など効かないが人間はたまらない。

しかし戦乙女たちの援護もある。銃撃戦になる。

「はっ」

唯一の飛び道具を持つジャンスが矢を放つ。それをなんなく手にした刀で弾き飛ばすガラ。

だがそれで充分。キャストオフを済ませてメイド姿のジャンスが二丁拳銃の乱れうち。

ところがそれがうるこに守られてはじかれる。

「うそおっ?」

盾ならともかく体に当たったのがはじかれればもつともな叫び。  
「ならばわたくしがっ」

和服姿のブレイザが日本刀を手にかけてだす。

奴隷女の射撃をかくぐり間合いに詰め寄りうるこのない部分を  
狙い刀を振り下ろす。

だがガラ自身も剣の達人。そうやすやすとは攻撃を受けない。激  
しく切り結ぶ。

(あのコノハさんよりも強い？　そう言えば彼女を斬ったのが確か  
…)

実力が下では斬る事も出来ない。単純に考えて死闘を演じたオウ  
ルアマッドネス以上の剣豪となる。

「ブレイザ。どいてっ」

超変身には十分な時間があつた。

ヴァルキリアを経てマーメイドに転じていたセーラは常備してい  
る伸縮警防を元に作り出した槍をそのパワーで投げつける。

だがその能面のような蛇の怪人が笑って見せた。

そして手にした刀で正確にセーラにランスを跳ね返した。

投げた後で多大な隙が出来ていたセーラは防御体制に移りきつて  
ない。

「きゃ…」

しかし悲鳴をあげる前に飛び込んできた黒い影がセーラをその場  
からどかした。

「友紀!？」

そう。スズが駆けつけていたのである。「愛馬」ダークブレイカ  
ーで飛び込み、そのままセーラの腕をつかんで槍をかわしたのだ。

「あ。違う。今はスズか。でもどうして？　わざと教えなかったの  
に」

「ふ。私がこうして現世にいるのは後始末のためだと言わなかつた  
か」

感知能力はスズにもあるのだ。

「そしてそれがここにいる」

スズにとつても遺恨の相手。自分の仇であるガラがいた。仮面の騎手は敵をにらむ。そして視線が激しくぶつかり合う。

「ガラ。まだわからないのか？」

スズはダークブレイカーのハンドル部分からニードルを抜き地面に立つ。

再びにらみ合いが始まる。

「ようやく逢えたな。スズ。私と、そして恐らくはアヌの仇。討たせてもらうぞ」

死を飛び越してまで持ち越された因縁である。恐るべき執念だった。

「それは私にとつても同じこと。そしていずれは倒さねばならぬ相手。こい」

スズには珍しく激情をあらわにして向かって行く。ガラも逃げない。

「その首もらったあつ」

まるでギロチンのような厚く拵えたガラの剣がスズの首を狙い振り下ろされる。

スズはそれを軽やかにかわし脇からガラの胸を狙い剣を繰り出す。無論それとてガラの計算にある。左手でスズの繰り出す『ニードル』を横に払う。

軽さがたたり弾き飛ばされる。丸腰のスズにガラの剣が今度は横薙ぎに迫る。

スズはなんとその刀そのものに手をかけ体操選手のように軽やかに攻撃をかわす。

「こ、こいつ」

刀を振り切ったガラに多大な隙が出来る。

「はあつ」

体勢を崩させるように軽いが素早くパンチを見舞う。体重が移動していたところにこれでたたらを踏む。

スズはニードルを拾いにはいかない。行けば多大な隙をさらすことになる。

逆にうってでた。ガラの右手めがけて蹴りを放つ。

これまた軽いが素早い蹴り。軽くても足の力。手首に当たればさすがに重い剣を離してしまう。

飛ばされた剣はくるくる回って石灯籠に突き刺さる。

「これで五分と言う事だ」

「ぬかせ。素手とて負けぬわ」

徒手空拳の格闘になる。

この間に戦乙女たちは何をしていたか？

一般人への被害を防ぐのと戦力ダウンを狙って奴隷女たちを片付けにかかっていた。

性別は戻せないが人間ではある。殺してしまうわけには行かない。セーラ・フェアリーが飛び回りの確に延髄を攻撃して奴隷女たちを気絶させていた。

ブレイザはいわゆる峰うちで。ジャンスもそれほど得意ではないが拳銃そのものを打撃武器としていた。

次々と倒れる奴隷女たち。

それでも屋敷に控えて散発的に狙撃をしてくる奴隷女のために警察は防戦を余儀なくされていた。

「そちらは！」

自分は目の前の相手を倒したブレイザが二人に問う。

「こつちはOKです。セーラさんは？」

「あたしもよ。スズは？」

一対一の戦いをしてきたスズを案じる。

武器を落とされた二人は徒手空拳での戦いを繰り返していた。

俊敏性とスピードに勝るスズと、パワーと防御で上回るガラ。テクニクは互角で達人同士の戦いを繰り返していた。

「超変身」

迷わずジャンスはアリスフォームへと転じた。

流れ弾がスズに当たらないように正確にガラだけ狙ったためだ。

「ちよつと卑怯な気がするけど」

セーラは言うが止めるつもりはない。これはスポーツではない。戦闘なのだ。

「あつちもこんなに戦闘員がいるからおあいこですよ」

笑顔まで作るジャンス。人当たりはいいが抜け目のなさが侮れない。狙撃に移る。

しかしくると踊るように互いの体が入れ替わる。これではいくらなんでも狙えない。

「ああんっ。もう」

神経の疲弊限界寸前。魔力を使い果たす前にジャンスはヴァルキリアフォームへと戻る。

「それならばっ。セーラさんっ」

「あたしたちで行くわよ。ブレイザ」

潜り抜けてきた戦いの分だけわだかまりが消え、このころには戦闘の時は呼吸が合うようになって来た二人。

セーラはフェアリーフォームでクラブを手に頭上から迫る。

ブレイザは駆けつけてガラに太刀を振り下ろす。

にい。そんな不気味な笑みを…文字通り蛇のように浮かべるスネークアマツドネス。

悪寒が走るスズ。思わず叫ぶ。

「危ない。セーラ！」

「えっ？」

叫びに驚いて止まったところの鼻先を掠めて「骨のミサイル」が飛んでいった。

ブレイザもガラの背中から得体の知れないものが射出されたことに驚いて呆然と立ち止まっている。

「な、何？ 今の」

空中に静止した状態のセーラ。危うく串刺しになるところで青ざ

めている。

「くくく。よく覚えていたな。スズ。わが秘策」

「忘れるはずがない。それに貫かれて死んだのだからな」

かつて切り結んだとき、スズはガラが打ち出した肋骨。「サイドワインダー」を全てかわしたものの秘策中の秘策。背中からの一撃に貫かれて命を落としている。

ただしその際にレイピアを打ち出してガラの心臓を貫き結果的に相打ち。

そして間接的にミュスアシで將軍と六武衆を失ったアマツドネスが封印される事態となった。

(それにしてもセーラの身を案じて叫ぶか)

さすがに將軍とまで言われた存在。流しそうな一言もきちんと捉えていた。

(そう言えばセーラの方もスズを何か違う名で呼んでいたな？ もしやヨリシロが？……試す価値はあるな)

(ガラ。何をたくらむ?)

スズは様子を見るべく、そして蓄積した疲労を回復させるべく静かに出方をうかがう。

自前のヨロイとも言つべきガラのうるこの防御力が思いのほか高い。

パワーに欠けるフェアリーフォームでは決定打が打てない。その上に対空射撃まであるのだ。

別の手を講じた。

「キャロル」

「ドーベル」

「ウォーレン」

呼ばれた使い魔たちは共に変形しキャロル・バイクモード。ドーベル・サイドカーモードに転ずる。

セーラはバイクにまたがるがブレイザはカーゴ部分に立つ。そし



てふたり同時に超変身。

セーラ・マーメイドフォーム。ブレイザ・ガイアフォームと共に  
膂力に優れた姿に。

ジャンスはウォーレン・ロケットモードで空中にうく。

小回りの効くバイクのセーラは大回りしてターン。

ガラを基準にして前方のブレイザ。後方のセーラ。

ブレイザは斬馬刀・ガイアブレードを構えている。

セーラはマーメイドランスを。それがハサミのように互い違いに  
前も後ろも逃げられないなら上か下。だがガイアブレードが腰の  
辺りに刃を走らせようとしていた。

下は無理となると上しかない。

だがそこでジャンスの出番。タイミングを見計らい狙撃形態。ア  
リスフォームへと空中で転じる。

「小娘の浅知恵か」

ガラは自分の肋骨を抜き出した。それを盾として二つの刃を食い  
止めた。振り落とされるブレイザとセーラ。

「そんなんっ!？」

狼狽して隙が出来たブレイザの首をわしづかみにすると、そのま  
まジャンスめがけて投げつけた。

「わわっ」

飛翔能力のないブレイザをよければ墜落して大ダメージ。

受け止めようとするが受けきれず撃墜される。

ガラは投げた勢いそのまま後方に振り返るとセーラも壁に向か  
って投げつけた。

「きゃあっ」

背中がめり込むほどに叩きつけられ気を失いかける。

「死ね」

セーラに正対すべく石灯籠の所に位置を構えたガラは残りの四本  
の「サイドワインダー」を放つ。

この場合マーメイドフォームなのがまずい。エンジェルフォーム

と違い露出した部分は守られていない。このサイドワインダーがもろに刺さる。

「危ないッ」

それを承知なのかこれまで同様にセーラの危機にスズが駆けつける。

剣をたくみに使い骨のミサイルを受け流して危機を回避する。

(よし。これで全部使った。しばらくはあれは撃てない)

この間合いでの攻撃手段がないのを知っていた。スズはセーラの無事を確認すべく視線を後方に流した。

その瞬間をガラは待っていた。

飛ばされて石灯籠に刺さっていた刀を力任せに引き抜き、そのままスズめがけて投げつける。

「!?!」

気がついたときには既に遅かった。よければそのまま壁にめり込んだセーラにあたる。そして剣で受け流したもののそれをなしきれず。刺さった場所は…

「う…スズ?」

セーラはかるうじて意識は失わなかったが大ダメージでエンジンルームへと戻っていた。

朦朧としていたセーラがかすむ目で前を見るとスズの後ろ姿。だかどこかおかしい。

「スズっ!?!」

異変に気がついた。スズの背中からガラの刀の切っ先が出ていたのだ。心臓は避けたが右胸を貫かれた。肺が潰れた。

「がはあっ」

仮面の下の部分。むき出しの口から大量に吐血するスズ。崩れ落ちる。

「す、スズ。友紀。スズ。友紀」

大事な二人を同時に失いかけてセーラは涙をぼろぼろとこぼす。

「ふ…ふふふ。ふはははははつ。やった。ついに我が因縁の敵。スズを倒したぞ」

宿願と任務を同時に果たして満悦する將軍。

「それが貴様の言う『愛』がもたらした結果だ。貴様はセーラをかばっていたからな。この状況じゃ絶対に自分の命よりセーラの命を優先すると思つたぞ。それが命取りだ」

倒れるスズと泣き喚くセーラを見下して愉悅に浸るガラ。だが危機に対するアンテナがここで作用した。

ジャンスの射撃を寸前でかわした。

「ガラアアアアツ」

ブレイザが憎悪むき出しでかけてきた。武器をすべて失つた上に奥の手を使い果たしたガラはかわし続けるだけだ。

「スズ。友紀。死ぬな。死なないで」

友紀に対する清良としての意識。スズに対するセーラとしての意識が混在している泣き叫び。

横たわるスズを抱きかかえガラの剣を抜こうとしていた。

「無駄だ…アマッドネスの再生能力でもこれは無理だ…」

死に直面しているのに人事のように語るスズ。

「私はいい。本来この時代にあるべき命ではない。ただやり残したことをしにきただけ。それも帰る時が来た。だが…つれてはいけない」

もちろんそれは一人の少女をさしている。

「セーラ…君の手で私を友紀から切り離してくれ」

「それってあんたを手にかけるってこと？ そんなことが出来るわけがない」

かつて友紀がファルコンアマッドネスに取り付かれたと知った時も、手を出すことがとうとう出来ずジャンスの狙撃で終結している。「やるんだ…君の手で命を終わらせることになるが…それで救われる魂がある事をわかって」

だんだん言葉が弱くなってきた。このままではヨリシロである友紀もろとも死んでしまう。迷っている暇はない。

「わかった…覚悟を決めた」

泣き腫らした目でセーラは決意の表情を見せた。涙は止まった。頼む。それが私と、そして友紀の罪滅ぼしにもなる……」

セーラはこくりとうなずいた。再びスズを地面に横たわらせる。右手のフレイムガントレットが赤く燃え上がる。

「スズーッ」

死に行く盟友の名を叫び、涙と共に炎の拳を撃ち下ろす。

送り火に包まれるスズ。その仮面が取れ、人としての顔が出る。

笑顔だった。

「ありがとう…そして頼む。アマッドネス…彼女たちを闇から救ってほしい…」

既に命の炎を燃やし尽くしていたのか爆発せず何かが抜けて行く。後に残るは傷一つない少女。

セーラは生まれたままの姿の友紀を抱きしめ「許して。スズ。ごめんな。友紀」泣きながら謝っていた。

「セーラちゃんっ」

薫子とのり子が駆けつけてきた。

「友紀を……お願いします」

拳の戦乙女は大事な存在を静かに託した。戦場へと戻る表情。

「わかったわ。でも」

心配する薫子にセーラは背中越しに答える。見えない表情は怒り？ それとも涙か？

「大丈夫です。覚悟なら出来ましたから」

それだけ告げるとセーラはかけだして行った。

「ガラアッ」

一転して激しい怒りを叩きつけてのセーラの叫び。

「おのれ。死にぞこないめ」  
単純な疲弊。特に切り札であるサイドワインダーを使ったのが大きい。

そして精神面ではついに宿敵スズを葬ったことで張り詰めていたものがきれた。

さらに言うと若干欲が出た。この状況は勝ち戦。それを味わうには死ぬわけには行かない。

自分ではなく戦乙女の方でロゼの復活に足りるだけにもって行けばいいではないかと。

戦乙女を一人減らし、自分は生きて女王を補佐する。そちらの方が良いに決まっていると。

つまり命を惜しみだした。守りに入ってしまった。

それで逆にそれまでの優位を保てなくなった。

一方のセーラは怒りにより攻撃モードマックス。

気おされてブレイザとジャンスが攻撃を忘れるほどだ。

「……んっ」

とりあえずのり子の制服の上着で裸体を隠されている友紀が覆面パトカーの中で目を覚ました。

「大丈夫？ 友紀ちゃん」

病院に搬送しようと思ったたら目を覚ましたので優しく尋ねる薫子。

「一城さん。スズさん？ スズさんはどこです？」

沈痛な面持ちになる薫子。頼れる女戦士はもういない。

「友紀ちゃん。残念だけど……」

真実を告げる。それを信じない友紀。

「でも感じます。一体化してたんですもの。スズさんはまだどこかにいるのがわかる」

「えっ？」

どうも状況が違っらしいと薫子は悟る。

友紀は祈る。

(お願い。スズさん。清良を助けてあげて)

まるで目を開けるように黒いバイクのライトが灯る。

怒り任せのセーラの攻撃に対し冷静なガラは自分の体力を回復させつつセーラの消耗を誘っていた。

エンジェルフォームでは守りは固められても決定的な一打がくわえられない。

ゆえにバランスのいいヴァルキリアフォームで立ち回るが、こちらには防御が手薄な分かわす必要があった。

そのためどうしても動きが大きくなり体力の消耗が激しい。

スズの弔い合戦の一念で戦っているが、次第次第に劣勢になる。

「セーラさんっ」

「させるかっ」

「きゃあっ」

加勢しようとするブレイザやジャンスへの牽制も忘れてない。うるこを手裏剣のように飛ばす。

顔を狙ってくるのも有りひるんでしまうのは女ゆえ。だがガラにとって思いがけない攻撃がきた。

黒い鉄の馬。ダークブレイカーだ。それが死角から突っ込んできた。そもそもこんなことは考えもつかない。精神的にも死角と言うことだ。

「ぐあっ」

不意打ちをくらい昏倒する。追い討ちをかけるべきセーラは劣勢だったこともあり立て直しを優先した。

そして何より両者ともに驚愕していた。

(バカな? どうして無人のバイクが走ってくる。コントロールできるスズはこの手でしとめたはずだ?)

ガラは立ち上がりながら考える。

(そう言えば…あのバイクはスズの魔力で走っているとってた。

もしまだそれが蓄積されているのなら…)

セーラは迷いのないはつきりした言葉で叫ぶ。

「スズ。一緒に戦って」

それに呼応してダークブレイカーが走ってくる。ひらりとまたがるセーラ。その手にどこからともなくスズの剣。ニードルが。

(スズ。まだ完全には燃え尽きてないのね)

剣が存在しているのが何よりの証拠。

「キャロル！」

「はい！」

完全に主の考えを読んでいた黒猫は呼ばれる同時に光の玉に変化する。

次の瞬間、四つに別れた光がセーラの鎧になる。セーラ・アテナフォームだ。

「行くわよ」

宣言してバイクを発進させるセーラ。その姿が消えた。

「どこだ……うあっ！」

上から走ってきた。すれ違いざまにニードルで斬りつけられる。

次は折り返すように地面の下から出現。胸元を斬りつけ消える。

そうかと思えばガラの下から出現して斬りつける。

アテナフォームで体勢無視して全方位から攻撃をくわえる技がデイモンシヨンストリームと名づけられていた。

さしづめこれはダークブレイカーのパワーを加えての嵐。

デイモンシヨンハリケーンと言うところ。

ガラはなす術もなく刻まれて行く。だがかるうじて二本の肋骨が撃ち出せる程度に再生された。

(おのれ。調子に乗るな。これで串刺しにしてくれる)

その思惑に乗ったかのように今度は距離を置いた、しかも真正面に出現するセーラ。

ダークブレイカーが加速する。とどめの一撃。

「食らえっ」

ガラが撃ち出したサイドワインダーはバイクの上のセーラには当たらなかった。飛んでいたのだ。

しかも右足にはスズの剣。ニードルが魔力でくつついていた。

(行くよ。スズ。あなたの技で)

セーラは盟友に思いを届ける。

射出して硬直したガラにダークブレイカーが直撃する。そして空中に舞うセーラが高速回転をして吹っ飛ばされたガラに突っ込んで行く。

「ホーネットステインガー」

「ぎゃあああああつ」

スズの必殺技でガラを貫いた。まさに弔いの一撃だった。

將軍の腹部に大穴が空く。勝負あった。

「セーラさんっ」

ジャンスとブレイザが着地したセーラに駆け寄る。セーラは力を使い果たしてエンジェルフォームに。

キャロルも分離して猫の姿に。

スズの魔力を使い果たしたダークブレイカーは元の鉄くずに。

「へ、平気。キャロルがちゃんと着地させてくれたから。そういえばプールでは友紀がヨロイをまもって同じ攻撃をしていたから、元々の得意技だったのかもね」

若干だが気が抜けている。どう見ても勝ったとしか思えないゆえだが

「ふ…ふふふ…見事だよ。戦乙女の諸君」

それを一気に緊張感を戻す声。

「ガラ!? ……じゃなくて三田村?」

そう。人の姿に戻っていた。ただしスーツの腹部は血で赤く染まっていた。

戦乙女がフォームチェンジで肉体の再構成を行い傷をなくすように、ガラも人の姿に転じる事で傷口を塞ぎに掛かったらしい。



それでも間に合わず出血となると致命傷には違いなかった。

「どんな気分だね？ 私を『殺した』のは？」

三人は嫌がらせかと思った。罪の意識を持たせようとしているのかと。

「あなたを闇から救うためよ。性別は変わるけどこれで解放……」

「同じだよ！ この思いが吹き飛び別の肉体になれば死んだのと変わらん。そして戦乙女。君達もいずれそうなる」

それは言われるまでもなく懸念されていた事。

「私を倒した君たちに敬意を表し一つ忠告だ。クイーンとは戦うな。顔すら合わせるな。高岩清良。伊藤礼。押川順のままでもいいのならばな」

「……」

言葉の出ない三人。ここでガラの姿になる。今度はガラとしての遺言だ。

「我が魂を得ればクイーンは立てる。そしてお前たちの魂を奪いにくる。お前らの魂が奪われ完全復活になるか。それともお前たちが戦いを避けて逃げるか。いずれにせよ貴様等に勝利はない。結局は……我々の……勝利なのだあーっ」

まるで万歳をするように両手を挙げて、そのまま後ろへと倒れこみそして爆発を起こす。

後には三田村だった女性が死体のように横たわる。

警察病院。ガラの魂がクイーンに引き寄せられて胸から広瀬葉子の中に。カツと目を見開く少女。

「ひっ……ひiiiiiiiっ」

おびえて腰をぬかすひかり。その眼前で立ち上がる葉子。ベッドの上で20代の女性の姿へと変転。

「ふふふふ。よくやったぞガラ。全てのアマッドネスは私と一つになった。これでやっと動ける」

妖艶な赤い唇が言葉をつむぐ。

「後は貸した物を返してもらっただけだ」

太古の戦いで戦乙女にかけた呪い。そして戦乙女たちを男としていた力。それをさしている。

ガラの死により奴隷女たちは正気に帰り武装解除され事件は終結した。

あわただしく事後処理が行われている。

そんな中で戦乙女たちは制服姿のままたたずんでいた。ガラの最後の言葉が胸に刺さる。怯えが心にのしかかる。女性になりたいと願うジャンスにしても自分でなくなるのは嫌だった。

「ああんっ。もうっ」

その考えを払拭しようと頭を振るセーラ。そのときに衝撃で飛んではいたらしいニードルを見つけた。

「こんなところに。にわか仕込みだから当たったときに外れてとんだのかしら？」

拾い上げたがそれは砂のように崩れ風になった。

「あっ」

「スズさん」

「これで完全に…」

スズの命が完全に消えたと悟った。

脳裏に蘇るのは仮面の女戦士の勇姿。そして人生の先輩としての優しい素顔。

共に戦った「仲間」の死が三人に覚悟を決めさせた。

「そっだ。私たちは負けられないし、おびえてもいられないんだ。あの人のためにも」

セーラの言葉が三人の思いだった。

最終決戦は近い。

EPISODE 46 「覚悟」 (後書き)

次回予告

「さあて。後は預けた物を返してもらおうとしよう。そして戦乙女どもに礼もしなくてはな」

「オレをかばってスズは死んだ。次に消えるのはオレかもな」

「まずい。校内がパニックに」

「約束だよ。必ずそのまま帰ってきて」

EPISODE 47 「女王」

## EPISODE 47 「女王」

12月20日。

街にクリスマスマムードが高まるそのころ。警察病院。

ガラの魂を取り込んだロゼは葉子の姿のまま一日眠り続けていた。それを見守るひかり。見守っているのは決して愛でもなければ忠誠心でもない。恐怖によって縛り付けられている。

(今ならもしかして……)

葉子の華奢な首筋に目が行く。女の細腕でも絞殺は出来るかもしれない。

殺人者となり牢獄に閉じ込められても魂は恐怖から解放されるかもしれない。

だがそれは出来はなかった。ひかりはアマッドネスだったころ反旗を翻した結果、返り討ちにあい現在の状況に甘んじている。

恐怖が刻み込まれている。ライの置き土産だった。

とてもではないが恐ろしくて実行に移すことは出来なかった。

男でなくなっただけで済まず、今度は命を落としそうな気がしていた。

それでもこの呪縛からは逃れたい。二つの思いがせめぎあう。

そして逡巡しているうちに童女が目を覚ました。

「よ、葉子様」

ひかりは自分が間違えたことにすぐに気がついた。

ただならぬオーラをはなっている。威圧感が凄まじい。ただの童女でないのは一目でわかる。

「ふふふ。時間を要したがガラ。そしてスズの魂も消化した。これでわらわは全てのアマッドネスをこの身に取り込んだ」

そのための眠りであった。

「ろ、ロゼ様」

臣下の礼を取る。もはや手は出せない。

死ぬまでこの娘のおもちゃにされる絶望に思わず涙が零れ落ちる。口ゼにして見ればひかりの胸のうちはお見通し。それを「愉しんで」いる。

「さあて。後は預けた物を返してもらおうとしよう。そして戦乙女どもに礼もしなくてはな」

とても童女の口から出ているとは思えない声でしゃべる。そして「ひかり。戦乙女になる穢れた男の『学校』とやらはどこが一番近いか調べる」

手始めとばかりに傍らのメイドに調査を命じる。

## EPISODE 47 「女王」

警察病院。別の病室に二人の女。

一人はベッドに横たわり天井を見つめている。いや。焦点のあわない瞳が上を向いているだけだ。年のころは三十台後半だろうか。ベッドに横たわり背の高さは実感できないが長身だ。

無言ゆえ声はわからない。そもそも感情自体を見せない。

それを傍らで看護し続けるのは軽部しのぶ。こちらは慈しむ目で  
見ている。

だが時折嗚咽を漏らす。

「こんにちわ」

小声で薫子が挨拶をして許可も待たずに入室する。

「薫子さん」

こちらも小声で応じる。

「どつ?」

ベッドに近寄りながら尋ねる。この間も横たわる女は感情を見せない。

しのぶは首を横に振る。ひどく哀しく見える動き。

「警部は……警部の魂も吹き飛んでしまったのでしょうか?」

そう。この眠る女は三田村だった存在。

ガラとの融合がとかれたのはよいがそれから一度も口を開かない心を閉ざした。そうではない。心をなくしたと言うほうが適切だ。

「警部までが女に」

それも落胆に拍車をかけていた。やっと異性になって三田村との間に支障がなくなったと思いきや当の三田村が女性化して再び同性に。

それどころか生ける屍と化していた。

「これではまるで」

「ふん。抜け殻か」

愛らしい童女の声で傲慢な口調の一言。薫子はこの声に覚えがある。

そしてしのぶはもつと深いところを知っている。

「あ、ああああっ」

恐怖で口が回らない。

「しのぶさん? 葉子ちゃん?」

薫子は理解していなかった。この童女が最大の敵だと言うことをだから怪訝な表情だ。

しかし知っているしのぶは違う。

三田村だった女が搬送されたときに警察病院へ搬送をやめさせようとしていた。

しかし理由は頑として語らず。結果的に警察病院に。

そしてしのぶはまるで三田村を守るように付き添っていた。今も守るべく自分が覆いかぶさる。

「ふん。そこにいるのがガラとアヌの抜け殻」

ここで薫子にも事情が飲みこめてきた。とはいえどあまりに予想外。

何しろ愛らしい幼女として接していたのだ。

だが薫子の心情を見透かしたかのように童女は邪悪な笑みを浮かべる。

「で、そしてこの肉体はただの器。女王たるわらわの仮の姿」  
自分の肉体を指差して告げる。

「ま、まさかつ」

これを少女の悪ふざけとは考えなかった。

だとしたらあまりにも口調がしつかりしすぎている。

薫子は素早く拳銃を抜いた。だが相手が幼い娘と言う事で躊躇した。

「むんっ」

「きゃあっ」

薫子は葉子：ロゼの放つ何かの「オーラ」で吹き飛ばされる。

「抜け殻など興味はない。ただとおりすがったただけ。負け犬の顔を見るためにな」

「役立たず」となると徹底して冷たい。まさに女王の威厳。

「いくぞ。ひかり」

メイドを引きつれ立ち去る。

薫子は打ち所が悪かったのかおきあがるうとしない。

同時刻。 福真市。

「よう。調子はどつだ？」

「きよし？」

野川家。パジャマ姿でベッドの上。そんな状態で友紀は清良を迎え入れた。

既にセーラ相手に肌を見せているからなのか。それとも幼馴染だからなのか。

パジャマ姿を恥らう様子がない。

あるいは本調子でなくてそこまで気持ちが悪くないのかもしれない。

「学校は終わったの？」

時間は午後四時。部活に属していないいわゆる「帰宅部」の清良だからこの時間にここにいるのは不思議でもない。

「ああ。退屈なほど平和だったよ」

「そう」

笑顔になる友紀。それが寂しげになる。

「その平和がスズさんの欲したものなのね」

一心同体になっていた存在の死が重くのしかかる。

ガラとの戦いでスズはこの世を去った。

友紀は完全に復元されたがスズの死が精神的に堪え、体調に影響しベッドでおとなしくしていた。

「そうだな。だがそれはスズ自身の犠牲で出来ている。皮肉だな」

自嘲的に笑う清良。彼には珍しい。

それで友紀は清良もいつもの精神状態ではないと感じた。

「結局よ…戦乙女ってなんなんだ？ 確かに化物退治はしている。

だがその化物も元はと言えばただの人間だ」

「きよし？」

「命はあるが途中からそれまで男として生きていたものを強制的に女としての人生を歩ませる。それで誰を救えているんだ？」

「落ち着いて。キヨシ。落ち着いて」

清良にもスズの死が重くのしかかっていた。その重みに潰されそうになっていた。

「キヤロルは戦乙女は女神になったと言っていたが、オレに言わせりゃただの女だ。誰も救えてない」



興奮がひどくなってきた。破滅願望が顔を出した。いや。ここに来て身も心も傷つきすぎて悲鳴を上げている。「オレをかばってスズは死んだ。次に消えるのはオレかもな」盛大な「悲鳴」を上げた。

王真高校。

放課後だが生徒会は会議を開いていた。しかしなかなかまとまらない。

会長である伊藤は目を閉じて座っているだけ。しかも議長席にもいない。

生徒会室の隅に椅子をよせ、黙って会議の様子をうかがっていた。では誰が進行していたのかと言うとそれは森本であった。

現・会長である礼自らの指名でこの会議を任された。

会議の内容は定例のもの。なれていれば無難にこなせるもの。礼なら見事にこなすが、森本では役者不足である。

結局はまとまらず次回に持ちこしとなった。

そしてその責を問われたのは森本であった。

「ひどいですよ。会長。僕にいきなりこんな」

解散して他の役員が退室して二人だけになると、彼には珍しく礼に対して文句を言う。

「俺もいつまでもいるわけではないぞ」

「でも卒業まではまだ充分に……はっ？」

ここで森本は気がついた。

卒業ではない。ないかもれないのは伊藤礼が伊藤礼として存在している時間だ。

「覚悟は出来ていたつもりだったが……ドーベルの言う女神なんかではなくただの人間。普通の女だったようだな」

自分をあざ笑う礼。やはりスズの「犠牲」。そして突きつけられ

たクイーンの恐怖が重くのしかかる。

「森本。笑ってくれ。俺は怖い」

「会長……」

「見ろ」

彼はブレザーの胸ポケットの生徒手帳を取り出そうとする。

ところが取れない。手が震えてつかめないのだ。

寒さではない。恐怖だと森本にも理解できた。

「高岩のことを笑う資格などない。今までは遮二無二戦ってきたから忘れていただけだったんだ。いざ最後の戦い…これで俺が消えてしまうかもしれない戦いが近いと思うと震えが止まらない」

昏く笑う。家族にすら見せない表情だ。

一緒に戦ってきた森本相手だから見せる「弱さ」だった。

百紀高校。珍しくというのもなんだが、順は男子制服姿だった。

比率で言うなら女子制服姿は三割程度だが、そのインパクトと何より似あう事からもっと多い印象があった。

「どうした？ 珍しいな」

岡元のそんな言葉もそれゆえだ。

中庭のベンチ。順と岡元は並んで座っていた。

「うん。番長にはこの姿も覚えていてほしいなと思って」

「おいおい。何だ？ 今生の別れでもあるまい」

「そうだね。でも…覚悟はして置いた方がいいかなって思って」

いつものにこやかな笑顔。変わらないはずなのにいつも以上に女の子らしく見える。

「僕が女になりたい……戻りたい思いはたぶん胸の中のジャンスが言わせているんだと思う」

飄々とした順が不安をもらす。

「クイーンとの戦いで敗れても女になるかも知れないけど、それはまた違うんだ……」

「順……」

「番長。僕は上手くやってきたつもりだったんだけど…結局自分の心はだましきれない。ううん」

ひどく疲れきった表情を見せる。

「だますも何もわかってたんだよね。僕が僕で無くなるのが怖いとそれから逃げていた」

番長は言葉も出ない。黙って耳を傾けていた。こちらも理解していた。

順は清良よりも礼よりも早くに戦いをはじめ、一番長く戦ってきた。

そして男としての自分と、女になりたい、「戻りたい」自分のせめぎあいと言う心の戦い。

疲れ切ってしまった。

いつそクイーンと刺し違えてしまえば楽になれるかな。そんな考えが頭をよぎる。

福真高校。不幸にもここが警察病院から近かった。

「ここが拳の戦乙女の隠れ場所か。ふふ。ならば」

つぶやくロゼにつき従うメイドのひかり。

その奇異な二人は部活などで残っていた生徒達の目を集めるのに充分であった。

「なんだ？」

「メイドと子供？」

不躰な視線が男子から浴びせられる。その男子にバラの茨がからみついた。

「うわあっ」「きゃあっ」

瞬間的に「男であること」と「意志」を奪われ奴隷女と化す。

逃げ惑う生徒たち。ロゼは男子を中心に奴隷女へと変えていた。

「大変ですっ」

青い顔で千由美が生徒会室に飛び込んだ。そこには生徒会長の高

森雅。生徒会の面々。

そして風紀委員長の飛田翔子がいた。

全員顔色が悪い。

「皆さんも感じました？」

「感じた。一時的とは言えどアマッドネスだった私の拭い去りきれない絶対の恐怖」

雅が語るのは本能的なものと言うこと。

動物が火を恐れるようにアマッドネスは口ゼを畏怖していた。

その気持ちだけは心に刻み込まれていた。

「まずい。校内がパニックに」

たまたま風紀委員会の報告でここにいた翔子が中庭の惨劇を見て叫ぶ。

奴隷女は別の男子を捕らえ羽交い絞めに。そこを口ゼが奪い取り新たな奴隷女に。

兵隊を作ると、戦乙女たちを誘い出すために無差別攻撃をしていた。

下校時刻を過ぎていたので帰った男子も数多いが、部活で残っていた男子の九割がたが奴隷女へと変えられた。

福真高校は口ゼの城と化した。

百紀高校。

「お前がお前でなくなる？ そんなことはない」

番長が大声で怒鳴る。恫喝と言うわけではない。地声がでかい。

「少なくとも俺は忘れんぞ。お前と戦った日々のことを」

「番長？」

「お前と言う存在が確かにいた。それは俺が証明する。だから…だから」

頭をかきむしる。

「あーっ。上手くまとまらない。俺にこんな難しいことはわからんっ」

彼らしい言い草だった。

「順。お前はお前だ。男だろうと女だろうと俺の気持ちは変わらん」  
「ありがとう。番長」

かすかに涙声。順は自然とジャンスになって岡元の分厚い胸板に飛び込んだ。

「お、おい」

柔らかい物が押し付けられる。豪腕でなる番長もこの攻撃はなれていない。

「少しだけ、少しだけこうしていたい。今だけ女で」

男同士の友情の握手より男と女としての抱擁を欲していた。

その気持ちは伝わり岡元も優しい笑顔になる。

そつと彼女を抱き占める。

「番長？」

先刻と同じ言葉。そして同様に戸惑う気持ち。

本来は男である自分をこんな風に抱きしめてくれるとは考えてなかった。

予想してなかっただけに直撃した。珍しく頬を染める。

「お前がもし完全に女になったなら俺の所にこい。俺の嫁になれ」  
そんな事にはならない。そんな思いが根底にあるゆえの鼓舞だ。

だが現在は女であるジャンスにはもろに直撃だった。

意図は理解していたのに、その男らしすぎる言い方にジャンスの

「女心」が刺激された。

あわてて離れて変身をといてしまう。

「順。あー……」

やり過ぎたかと考えて謝り掛ける岡元。

「ありがとう。番長。嬉しい」

男に戻ったはずなのに頬の熱さが引かない。

（や…やだ。女になりたい思いつてジャンスの物じゃなくて僕自身の物なの？ 番長にああいわれたとき泣きたくなるほど嬉しかった。あのまま女でいたら押さえが利かなかった）

だから男に戻った。だがまたすぐ女になる羽目になる。

「この感触はっ！ ずっと遠いのに感じる」

一瞬にして「戦士の表情」になる。

「ジャンス。感じたか。この馬鹿でかい悪意」

どこからともなくウォーレンがやってきた。彼は戦乙女よりもっと広範囲を探知できる。

「敵か？」

番長も臨戦体制だ。岡元の言葉に無言でうなづく順。

「非常事態だ。人目を気にしてなんていられないぜ」

ウォーレンは天馬としての姿を晒すと二人を乗せて高々と舞い上がった。

王真高校。二人きりの生徒会室。

小刻みに震える礼の手を見てどうしたらいいかわからなくなる森本。

いつだって伊藤礼と言う存在は自信満々で、後をついて行けば間違いはなかった。

だがその彼が恐怖している。戦乙女である彼が皮肉にもまさにか弱い乙女のように。

乙女のように…そう認識したら森本は自然と礼の手を両手でつかんでいた。

「森本……」

最初は戸惑い。そして安堵が礼に訪れる。

子供のころ母親に抱きしめられたあの気持ちにも似ている。

「会長。信頼してくれてありがとうございます」

「お前、何を……」

「僕を信頼してくれるからそんな言葉も言ってくれますね」

これが森本なりの返答だと礼は悟った。

「ああ。お前がいてくれるから俺は戦える。押川よりも高岩よりもお前が一番俺の助けになっている」

どんなに強靱な精神力の持ち主でも心がパンクしてしまうことがある。

それを防ぐために愚痴をこぼしたりする。

森本は存在しているだけで伊藤礼：ブレイザの支えになっていた。「会長。二人だけの時はいくらでも弱音をはいてください。僕が全部聞いてあげます。それくらいなら僕にも何とか」

普段の礼なら森本にこんな気遣いをさせた事を強く恥じる。

だが今はただ嬉しかった。

心が弱っていたからかもしれない。

それでもいい。こんなときだからこそ暖かい心が気持ちを蘇らせる。

「変身」

礼は森本に手を取らせたまま変身した。いつになく優しい声音の掛け声だった。

そして変身直後の表情もまるで赤ん坊を見る母親のような優しさに満ち溢れていた。

ブレイザはにっこりと笑うと森本を優しく抱き占めた。

「か、会長!？」

自分でも頬が熱くなるのがわかる森本。

「ありがとう」

ブレイザの姿の礼はシンプルな一言で感謝を告げる。一言で充分だった。

残りは全て抱擁する事で感謝の気持ち伝えていた。

「あの…どうしてわざわざ変身を？」

恥ずかしくてそんな質問をしてしまう森本。よく見るとブレイザの方も白い肌がピンクに染まっている。

「男に抱き占められるよりこっちの方がいいだろう。それにお前が……」

今度は森本は青くなる。そして再び赤くなる。

(ま、まさかブレイザさんへの気持ち。気がついていた?)

基本的にこの姿は戦闘のときだけだ。そんな事を気にしている余裕があるはずない。

そう思っていたので焦って青くなり、そして恥ずかしくて赤くなる。

「なんでもないよ」

少しだけ女の子らしい口調で答えるブレイザ。

「今はまだ男の気持ちだからこれが精一杯の感謝のしるしだ。もう少し女になっていたらキスくらいしていたかも知れないが」

何も考えてない。ただ素直に胸のうちを吐露したブレイザ。

「き、キス?」

もう森本は目が回り始めている。

くすつと笑うとブレイザは彼を話し、変身をといた。

そして力強く森本の手を取り握手する。心の支えを再確認した今は怖くない。もう震えていない。

「え…会長?」

男の手で手をつかまれてやっと森本は落ち着き始めた。

「これからもよろしく頼むぞ」

まだあどけなさの残る少年に精悍な顔つきの剣士は頼んだ。

「は、はいっ。こちらこそ」

尊敬する男に一人の男と認められた。女性相手とはまた違う喜びに心が昂ぶる森本。

しかしそれは強大な邪悪のオーラでふきとんだ。

「アマッドネス!? なんて馬鹿でかい。これは」

(ブレイザ様。恐らくは巨大なパワーが遠方で活動しているものかと。そしてこの方角は)

黒犬の従者が脳内に伝えてくる。

「いくぞ。森本」

「はい」

二人は生徒会室を飛びたした。



そして友紀の部屋では。

「キヨシ…そんな…そんな哀しいことを言わないで」

友紀が泣いていた。

「ゆ、友紀……」

こうなると自分の不安どころではない。

変な話、目の前の少女の涙にうるたえるあたり自分がまだ男なんだと実感した清良。

「泣くな。変なことを言っただけ俺が悪かった。だから泣くのは勘弁してくれ」

「だってあなたが消えたら悲しいじゃない。止まらないよ」

「あー。わかった。約束する。俺は死なない。少なくともこの戦いじゃ死なない。これでいいか？」

根拠など無論ない。その場しのぎ。気休めの口からでまかせである。だが

(いや…なんだか俺自身なんとかなるんじゃないかって気がしてきた。よく考えて見りゃ今まで戦ったやつらの上だからって無条件で強いとは限らないぞ。階級が上なだけかも)

気休めは清良自身のためにあつた。

それゆえか彼の表情も落ち着いてきた。

それが友紀にも感じ取れて、次第に涙が止まってきた。

泣いた事で落ち着いた友紀。改めて清良に向き治る。

「清良。清良はいつだって約束守ってくれたよね。私に嘘ついたことないよね？」

「あ、ああ。確かにそーだが」

友紀の迫力に気おされる清良。

「だったらちゃんと約束して」

友紀は右手を突き出す。小指だけ立てている。

「おいおい。ガキじゃあるまいし指切りかよ」

「昔からでしょ。いいから約束して。必ずちゃんと帰ってきて」と  
涙目だ。下から見上げる形で清良は心臓が高鳴った。

「わ、わかったよ。約束する。必ず女王をぶちのめして帰ってくる  
と」

「本当？」

喜びと言うより懐疑心からの言葉。

「そんなに疑うんだったらやってやるよ」

清良も右手を突き出した。そして互いの小指をからめ、子供のよ  
うに歌い約束をした。

「な、なんかガキのころを思い出すよな」

「そうだね。清良は喧嘩をしないとと言う約束以外はちゃんと守った  
よね」

子供のころと同じ行為で昔話に花が咲く。

だがそれはあくまで昔の話なのだ。今は違う。

わんぱく小僧は逞しい青年に。華奢な童女は美しい少女に。

そして「LIKE」ではなく「LOVE」へと気持ちが変わって  
いた。

自然と二人の視線が絡み合い、どちらからともなく顔を寄せる。

互いの戸息を感じられ、もはや目を開けてられなくなったときに  
それを感じた。

ばね仕掛けのように顔が離れ、そして気配を探る清良と友紀。

「こ、この殺気は？」

「私にもわかる」

スズと一体化していた名残だ。

「なんてでかい…そして隠す気のない憎悪だ。これはもしか…」  
ついに最後の戦いになったかと清良は思った。

「セーラ様！」

キヤロルがあわててやってきた。

「ああ。いくぞ」

キヤロルと共に部屋を出ようとする。その背中に「待って」と友

紀が声をかけた。

「……………友紀？」

「約束だよ。必ずそのまま帰ってきて」

「……………ああ。完全な女になんてならないぜ」

約束をした以上は負けられない。それが逆に心の支えになった。

清良はキャロルと共に出ていくと、友紀の家の前からバイクで走って行く。

「わたしも…見届けないと」

ベッドで起き上がり友紀は身支度を整え始める。

高速で走るバイク。清良も振り落とされないようにするので精一杯だ。

「オイ。キャロル。道が違うぞ」

福真高校への道のりではない。

「はい。ブレイザ様とジャンス様を待ちます」

「バカやろう。そんな悠長な事を言ってられるか」

「いいえ。お待ちいただきます。セーラ様。太古の戦いでは戦乙女三人でも相打ちがやっとだった相手なのですよ。一人では死に行くようなものです。そして一人を失えば残り二人の敗北も濃厚。それを回避するには三人揃っての突入しかありません」

「待ってられるか。ええい。もういい。自分で飛んでいく」

清良は変身しようとする精神を統一しようと試みるがキャロルは意図してめちやくちやな走りをして妨害をする。

（チキシヨウ。最初からそのつもりでオレを乗せやがったな）

（お叱りは覚悟の上です。ここはこらえてください）

そして時間稼ぎが功をそうして礼。順たちと合流した。

それは友紀が福真高校へ出向くだけの時間をも与えていた。

福真高校の正門前的大通り。

三台のバイクが並んでいた。

「まったたく。とんだ回り道だ」

清良が慥然として言うが理解は出来ている。怒りはない。

「ここからは全員でないと無理ですよ」

やはり女性的な順が取り持つ。

「総力戦だ。森本。お前はいつものように外を頼む」

「はい。お任せください」

「ザコ掃除はオレに任せろ。お前らは心置きなく戦ってこい」  
番長の申し出だ。

「オレの覚悟は決まったぜ」

「俺も決めなおしてきた」

「それじゃ皆さん。いきますよ」

戦乙女になる少年たちだけで突入する。

入れ替わるように友紀がその場にたどり着いた。

もはやスズではない彼女が戦いの場に現れた事に驚く森本と岡元。帰るように説得するが恐らくは清良の最後の戦いになる。

これを見届けたいという思いは痛い程に理解できた。

いざとなったら逃げると言う約束でその場にとどまる事が許される。

突入した三人をで迎えた者たち。それは無数の奴隷女たちだった。

明らかに若い。そして男子学生服や男子用の競技用の衣類を身にまとっている。

それが何を意味するか考えるまでもない。

特に清良にしたら自分の学校の生徒たち。血が逆流するような気持ちを感じていた。

「クイーンツ！」

清良が叫ぶ。いや。吼える。

むしろよく声がでた物である。

なにしろ男子生徒の大半が奴隷女にされていた。その怒りが叫ばせた。

「くくくく。待っていたぞ」

幼女に似つかわしくない冷たい声。

そしてその両手から出ているバラの茨が、清良の仲間たちを望まぬ性別へと転じさせたのは想像に難くない。

「さすが外道共のトップだな。吐き気がする」

礼がクールさを保てない。

「ええ。とにかく終わらせましょう」

順の声にも怒気がある。

「ああ。吸い取られる前にケリをつける」

清良は怒り過ぎて逆に落ち着いている。

三人ともクイーンへの恐怖を忘れ変身しようとした。

その刹那に茨のつたが三人にからみつく。

「ぐあっ」「うおっ」「ああっ」

苦悶の声を上げる三人。

「バカめ。わらわに負けねばいいと思っていたのかも知れんが、ちよつとでも隙を見せれば吸い取るなど容易いことよ」

「きよしッ」「会長ッ」「順ッ」

それぞれのパートナーも叫ぶ。その眼前で三人は繭のように茨に覆われた。

そしてそこから何かが吸い上げられている。

「ああ。いいぞ。戻ってくる。わらわの力が全て」

女王ただ一人が恍惚の表情だ。その姿が少しずつ大きくなり20台の美女になる。

やがて全てを吸い尽くした女王は、三人の戒めとしていた茨を戻し、自身の肉体を目をのぞき覆い尽くす。頭部からは何本かの茨が髪のように垂れ下がりにうねっていた。

真紅のバラの花弁がいくつにも連なり、ドレスのような形になる。

セーラたちの衣類が「布のヨロイ」ならロゼのは「バラの防御結界」だった。

「戻ったぞ。わらわは完全な姿に」

それがアマッドネスの女王。ローズアマッドネスの真の姿だった。

一方の三人だがいつの間にか戦乙女になっていたらしい。

「らしい」と言うのは見た目が随分と違うからだ。

「きよしっ」「会長!」「順ッ!」

三人がそれぞれの相手に駆け寄り助け起こす。しかし戦乙女たちの口からは意外な言葉が発せられる。

「ここは?」

「えっ」

確かに「セーラの声」だった。だからこそ友紀は戸惑いの声を上げた。

その少女は確かにセーラの顔と声をしていて。

だが衣装はいつものセーラー服ではなくノースリーブでミニのワンピース。ウエスト部分はベルトのようなものが。

両腕のガントレットはそのままだが足元は編み上げ靴。

そしてなにより髪の色が燃えるような真紅だった。

「我々はアマッドネスの女王と刺し違えたのではなかったのか?」  
ブレイザと思しき少女は着流しに鎧と言いついでたちだった。

縦ロールはそのままだったが金髪ではなく栗色の髪。

「セーラさん。ブレイザさん。私たちはどうしてしまったのでしょうか?」

栗色ではなく黒髪のジャンスらしき少女が不安そうに言う。

セーラの衣装に似ているが半袖なのとスカート部分が膝丈なのが違いだった。

さらに弓道のそれと同じなのか胸当てが。

「キヨシ。無事だったの?」

友紀が「セーラ」に近寄るがキヨトンとしている。

「あなたは誰？」

その言葉に友紀が傷つきはしなかった。

なにしろ戦乙女たちは日本語をしゃべっていない。未知の言語を口にしていた。

「会長！ ブレイザさん」

「少年。危ないからさがっている。ここは戦場だ」

あくまで戦士の顔で避難勧告をするブレイザ。支えてきた少年に対する態度ではない。

「ジャンス。どうした？ 俺がわからないのか？」

「ごめんなさい。下がってください」

この中では戦闘の時の関係がもっとも長いジャンスと岡元からしてこれである。

喧嘩でも受けた事のない衝撃を岡元はくらい、友紀と森本は泣きたくなった。

そのたどり着いた答えとは？

「ふふふ。無駄だ。そいつらを男としていた部分はわらわの力。それを取り戻した今、そいつらは元の戦乙女と言うことだ」

そう。高岩清良。伊藤礼。押川順はクイーンに「食われた」のである。

そしていわば真・セーラ。真・ブレイザ。真・ジャンスとなったため現代語ではなく古代の言語を口にしていたので会話が出来ないのだ。

「クイーンっ!？」

先刻男として発したのと同じ言葉を口にする赤毛の少女。

「久しぶりだな。戦乙女ども。完全復活の祝いに貴様らを血祭りに上げてくれる」

口ゼも古代言語で話す。完全に太古の大乱の続きとなった。

「我々の命などくれてやる。だが」

「だれ一人として殺させないでしょ？ ブレイザさん」

「いくわよ。ブレイザ。ジャンス」

「我々も」「まいります」「いくぜえ」

使い魔たちも古代言語ではせ参じる。天馬の姿になりそれぞれの主を背に乗せる。

互いに本来の姿に戻ったアマツドネスの長と三人の戦乙女の戦いが福真高校の中庭で始まった。

それをわずかに離れて、でも遠い外国の風景のように感じつつ三人は見ていた。

「ジャンスよお。俺と一緒に戦った日々も忘れちゃったのかあ」

怒りと悲しみがこもる岡元の咆哮。

「そんな…会長がもういないだなんて…」

森本は膝き涙をこぼしていた。そして

「嘘つき…必ず帰ってくると言ったのに…嘘つき…キヨシの…キヨシの嘘つきーっっっっ」

友紀の涙声がこだましていた。



## EPISODE 47 「女王」 (後書き)

### 次回予告

(……なんでだろう。あの子の叫びが胸に響く。わずかに心に残る何かが震える)

「ジャンス！ お前が忘れたと言うならそれでもいい。だがお前お前だ。約束どおり俺はそのことを忘れん。そして共に戦うともな」

「見えますかブレイザさん。あなたのそばでああなたの戦いを見つめ続けた僕の太刀筋」

「いくぜ。これが最後の变身だ！」

EPISODE 48 「女神」

## EPISODE 48 「女神」

「キヨシの嘘つきーっっ」

友紀の涙声が響く中で始まった女王との戦い。異変が起きた。

セーラの動きが一瞬だけが止まり、ロゼも何故か不適な笑みが凍りついた。

(……なんでだろう。あの子の叫びが胸に響く。わずかに心に残る何かが震える)

(くっ。やはり戦乙女に渡していた力では完全に我が物にするにはいささか時間があるか)

ロゼが力を取り戻すのは同時に過去の戦乙女が完全復活する事を意味していた。

吸収したその場で戦闘になるのはわかっていたものの、一気に命を吸い取るには邪魔な聖なる魔力が増していたのだ。

しかも三人が相手。そこまでは出来なかった。だからあらかじめ兵隊を作っておいた。

福真高校男子生徒を元にした奴隷女たちが戦乙女の邪魔を試みる。相手が一般人である事を使い魔から知らされた戦乙女たちは、傷つけないように地上での戦闘を避け天馬で空からの攻撃に専念した。魔力は無害でも転倒させて打ち所が悪いなどと言うケースもあるからだ。

しかし飛び道具であるジャンスはとまかく徒手空拳のセーラと剣士であるブレイザは動きに制約が掛かる。

結局セーラは自力で飛ぶ。だが飛べないブレイザは牽制程度にか攻撃できない。

ゆえに礼が変身していた時も高所からの攻撃に弱かったのである。そのブレイザを狙って茨のつたが伸びる。

絡め取るうとしていたがブレイザは難なく切り裂いてしまう。

その隙にセーラが突っ込むが別の「触手」が延びる。

「きゃ」

しかしそれは突如飛来した「ボール」によって阻まれた。

「助かった。しかしどこから」

離脱したセーラはボールを投げた人間を探す。それはすぐに見つかった。

校門から友紀が新体操で使うボールを投げつけていたのだ。

「あの子、どうして私を？」

今のセーラにとって友紀との過去の記憶はない。だが胸が熱くなるのを感じた。

## EPISODE 48 「女神」

「友紀ちゃん!？」

その無謀とすら言える行為に校舎内に取り残された千由美が思わず叫ぶ。

「なんであんなものを？」

「たぶんセーラさんのために準備していたんだとおもいます」

フェアリーフォームが非力さを補い、俊敏性を活かすのに新体操の道具がもつとも相性がよかった。それゆえに友紀は自分のものを

持参した。

「それにしても恐ろしいことを」

「あれを無謀と呼ぶか勇氣と呼ぶか。それは私たちの気持ち次第か」  
翔子がつぶやく言葉がその場の元・アマッドネスの少女たちに染み入る。

眼下にはかつての自分たちのように悪の尖兵と化した同窓生が。  
その中の剣道部員だったと思しき面々が緩慢な動きで校門の三人に迫る。

窓から見ていた少女たちは息をのむが

「岡元パアアアンチィィ」

とびながら繰り出される豪腕に奴隷女たちが吹き飛ばされる。

恐らくは奴隷女撃退で持ち出した（まさにミイラ取りがミイラで自分が奴隷女に）木刀を手放して飛んで行く。

それを確認もせず着地してわずかにためをつくり巨漢は飛び上がる。

「岡元キィィィックウウウ」

そのひねりを効かせたドロップキックがさらに蹴散らす。

意志のない奴隷女たちなのに恐怖心が蘇ったのか遠巻きに見ているだけで襲いかかってこない。

敵がこないのを見越して番長は空へと叫ぶ。

「ジャンス！ お前が忘れたと言うならそれでもいい。だがお前は  
お前だ。約束どおり俺はそのことを忘れん。そして共に戦う」

「そ、そうだ」

森本は投げ出された木刀を拾い上げると数人の奴隷女の手首を狙って攻撃を仕掛けた。

華奢な手首である。一撃で攻撃不能に陥る。

「見ていますかブレイザさん？ あなたのそばでああなたの戦いを見  
つめ続けた僕の太刀筋」

それはまさにブレイザの剣の舞にそっくりであった。

常に彼女の戦いをそばで見守っていたからこそ出来る「見取り」である。

ファルコンアマッドネス。そしてスズのベースとなった友紀だが戦いそのものは素人だ。

だがその新体操で鍛えた卓越した運動神経で奴隷女たちの間を潜り抜けかく乱して行く。

それで空白の地帯ができた。

「今よ。地上からいけるわ」

「見知らぬ少女」の健気な態度に戸惑うセーラだがチャンスを活かすことを考えた。

降り立ちかけていく。飛翔に回っていた魔力が攻撃に使える。

「やあっ」

繰り出した拳がクイーンに当たった。いや。その外部で漂う花びらを散らしたただけだ。

そしてすぐに花びらが「穴」を塞ぐ。防御壁だった。

「一撃でダメなら何度でも」

セーラは立て続けに攻撃を繰り出す。

それを奴隷女たちが邪魔しようとしてきた。だが

「えーいつ」

千由美が振り下ろした金属バットで防がれた。

彼女だけではない。翔子。雅らかつて悪の誘惑に負け異形の者に身を落とし、結果として女としての人生を歩む羽目になった元・少年たちが大挙して繰り出してきた。

他にも奴隷女になっていた事のある少女たちなども。

「この子達はいったい？ どうして危険を犯して私を助ける？」

セーラにはその記憶もない。だが何故かやはり胸が熱くなる。

「みんな」

友紀が感動したようにつぶやく。

「まったく。一度はこんな醜悪な存在になっていたかと思うと恥ず

かしくてたまらない」

長い髪を振り乱して、それなのに何故か美しく見える飛田翔子が笑顔で友紀に言う。

「そうよ。この人たちはかつての私たち」

友を妬みピラニアの異形になっていた魚住美奈子が水泳で鍛えた体力で奴隷女たちを食い止める。

「今度は私たちが闇から引き上げる番」

雅も陣頭指揮で参戦していた。

そんな最中でパトカーのサイレンが近づいて福真高校に乗りつけてきた。

これだけの事態だ。それはわかる。

異様なのは出てきた警官が全て女性だったことだ。

「いけ。汚名返上のチャンスは今だ」

マイク越しに指示を出すのは度会のり子。

アマッドネスの手に掛かり奴隷女になった警官ばかりだった。

既に性転換をしている。もはや矢うものはない。だから果敢に奴隷女を取り押さえに掛かった。

「今よ。セーラちゃん」

声が変わった。一条薫子だ。彼女は警察病院で気絶しているとこゝろを駆けつけたのり子に助けられた。

そのまま福真高校の騒ぎを聞き駆けつけたのだ。

「あつっ」

叫んだ途端に頭を押さえて崩れ落ちた。のり子が駆け寄る。

「カオル。無理しないで。車の中で休んでなさい」

「いいえ。戦乙女たちのサポートは私の役目よ」

そのふらつく体で彼女はライフルを構える。

「今度はちゃんとやるわ」

彼女にとって幸いだったのは既に葉子が「バケモノ」に転じていたこと。

童女の姿でなかったから迷わず引金を引けた。

轟音と共に繰り出された弾丸は腹部を狙ったものだ。

正確な射撃が難しい状況だから大きな的を狙った。

期せずして「狙いがそれで」心臓の位置に弾丸が。

それ自体は花びらのヨロイが防ぐができた穴をチャンスが見逃さない。

魔力により弓を変化させて長距離射撃仕様にする。即座に心臓を  
めがけて射出。

「ぐあっ」

防がれはしたがダメージは与えた。花びらが乱れる。

「うおおおおおーっっっ」

天馬から飛び降りてその頭上から唐竹割りとはかりに剣を繰り出す  
ブレイザ。

さすがにまともに食らうほど甘い女王ではないが、防御が頭上に  
集中して背中隙が生じた。

「そいやあっっ」

思い切りセーラが蹴り飛ばす。よろけさせる。そのまま左右の拳  
を女王めがけて繰り出す。

とても女性同士とは思えない荒々しい戦いだ。

「小娘が。調子に乗るでないわ」

戦いは激しさを増して行く。

戦闘開始から一時間以上。互いに決定打が出ない。

戦乙女たちにとって幸いなのは警官隊や有志によって奴隷女たち  
が一扫されたこと。

これによりクイーン相手に集中出来る。

そしてそのクイーンが予想していたより「弱い」ことだ。

正確に言つと本調子には思えない。完全復活のはずが体が重そう  
だ。

（そう言えば…あれは私がまだ男だったころ）

クイーンの呪縛ゆえ逃げるに逃げられないひかりが男だったころ

のことを思い出す。

（あの時もセーラの力を取り込みきれなくてひどく苦しんだけど……まさか女王も？ 元々が彼女の力。それなら私と違って元に戻すだけ。それでこんなに苦しむはずが？）

違和感は当の本人が痛感していた。

（おかしい……わらわは元に戻ったはずではないのか？ 器であるこの少女の病だがそれとてこの姿になればなくなった筈。ならばどうして戦乙女ごときをしとめきれない？）

そして戦乙女たちも完全に元に戻ったはずなのにどこか頼りない。まるで半身を失ったかのようなようだ。

「埒が明かないな」

ブレイザが刀に寄りかかるようにして立ち上がりつつ言う。

「どうでしょう？」

不安そうなジャンス。

「このままじゃこちらが先に倒れて……まずい。女王の力が膨れ上がる」

ごうを煮やした女王が一か八かの勝負に出た。

「このままでは我々の負けだ。いや」

ブレイザは木刀の少年を見る。

（何故だ？ 彼とは何かあったのか。ひどく気になる）

「そうですね。あの勇敢な民を死なせることは出来ません」

ジャンスも岡元を見る。

（あの人には何度も助けてもらっていたような気がする）

「例え私たちの命に代えても守らないとね」

セーラは友紀に視線を送る。

（あの子だけは絶対に守らないといけない……そんな気がする）

「決まりだな」

「ええ」



「いくわよ」

三人は女王を取り囲むように三角形をつくり呪文の詠唱に掛かる。

「セーラ様！ まさかまた？」

「あとは頼んだわよ。キャロル」

太古の大乱のときと同様に三人はとんだ。そして女王と自らを封印すべく蹴りを見舞う。

その蹴りは確かに届いた。

「くくく。学ばぬ者たちだ。再び女に戻れぬまま気の遠くなる年月を過ごす気か？」

戦いの結末を先送りしただけに過ぎないが、女王は嘲笑した。

「構わん。彼らを守ることは出来る」

「私たちはどうなってもいい」

「例え未来永劫続いても」

（冗談じゃねーぜ。そんなの真っ平ごめんだ）

「え？ あなたは？」

以前の時と同様に女王から何かが入り込んでくる。

かつてはひどく不快だったが今度はどこか暖かく、そして懐かしい。

セーラ、ブレイザ。ジャンスはその「何か」に心当たりがある。

（ここで完全に敵を叩く。それしかない）

ブレイザに侵入するものも同様だ。

「お前はまさか」

その答えは残りの一組が示す。

（そう。もう一人の君だよ。ジャンス）

「ああ。思い出してきた。あなたはジュン」

長い年月を戦乙女と共に転生して来た「クイーンのかげら」

それは気の遠くなるほどの年月で浄化され、戦乙女たちの聖なる力へと変化していた。

ゆえにかつてのライはセーラの中の「清良」を取り込みきれず。そして女王にとってはもはや「異物」である三人の魂は取り込まれずに済んだのだ。

（何でも経験しておくもんだな。一度食らってたんですぐにわかつたぜ。だから踏ん張って正気を保ってたぜ）

（正直きつかったがな。戦乙女として戦った日々がなければとりこまれていた）

（お願い。みんな。また僕たちと戦って）

（ええ）

（お帰りなさい。もう一人の私）

（一緒に戦って）

戦乙女たちは優しくうなずくとそれぞれをふたたび受け入れた。

激しい光と共に吹き飛ばされる三人。

友紀の元にふっ飛ばされていたのはガ克蘭の少年。

森本は同じブレザーの少年を受け止めた。

ガ克蘭の岡元はグレーの学生服の少年を全身で受け止めた。

「き、キヨシなの？」

「あつっ。どうやらそうらしいな。ちゃんと男だぜ」

「会長おおおっ。御無事でしたかあああっ」

森本が泣きながら近寄る。

「ああ。足は二本ある。心配かけたな」

「会長…でもどうして」

「順。無事で何より。だが何で？」

「ありがと。番長。でも説明は後。今はあいつを」

「そうだな。いけ。順」

とはいえど今の今まで女王に囚われていたのである。

肉体である戦乙女たちも疲れ果てていた。気力も肉体もぼろぼろだ。

しかし女王も動かない。何かが縛り付けているようだ。

「おのれ。邪魔をしていたのは貴様だったのか」

女王が本調子でなかったのはセーラ達が異物だっただけではない。内部から妨害するものがまだいた。

「あ、あれは…スズさん!？」

一時的に一心同体だった友紀がいち早く見つけた。

半透明でいわば幽霊のような状態。戦闘形態ではなく女性としての姿でロゼを羽交い絞めにしていた。

「私も彼らと同じ。あなたとは違う存在になっていた。あなたが吸収したのは私のアマッドネスとしての力のみ。魂までは奪えない」  
スズが食われた三人をぎりぎりのところでとどまらせていた。そこにセーラたちが強く接触してきたので再接続。送り返しに成功した。

「助かったぜ。スズ」

「急げ。私もそう長くは持たない。早く」

「ああ。わかつてる」

清良は両脇の礼。順を見る。うなずきあう三人。  
もはやチームワークを妨げる物は何もない。

「いくぜ。これが最後の变身だ!」

清良の右手が天を指し燃える炎のガントレットが、左手が地に向けられその手に流れる水のガントレットが出現した。

礼は左手をへその位置に、右手を肩の高さで前方に伸ばした。丹田に光の渦が現れる。

順は弓手を空へと伸ばして、空間から弓を取り出した。

清良の両腕が水平に移動した。

光の渦から短刀が出現して、礼はそれを左の腰に溜め、柄に右手をかけた。

弓を真正面に運んだ順は矢手を光の弦にかけた。

三人で同じ言葉を叫ぶ。

「「「変身！！！」」」

清良の手が思い切り突き出され交差したガントレットが眩く輝く。礼が抜刀すると刀身が光り輝いた。

順が弦を爪弾くと光があふれた。

光が納まるとセーラー服。ブレザー。ジャンパースカートの少女たちがいた。

「拳の戦乙女。セーラー！」

「剣の戦乙女。ブレイザ！」

「射抜く戦乙女。ジャンス！」

最後の名乗りだった。

「おのれえええ」

形相も醜く歪んだ女王が叫ぶ。

結局は戦乙女たちの力は取り込んでなかったのだ。だからそのままの姿だ。

しかし戦乙女たちは今となってはこちらが完全体と言うべき姿に。そして自身はスズに縛られている。それが呪詛の言葉を叫ばせた。セーラとブレイザが制服姿のままかけて行く。その場にとどまる

ジャンス。

防御形態で可能な限り近寄る。阿吽の呼吸でジャンスが矢を放つ。その防御でキャストオフをやるだけの隙を作ってしまった口ゼ。ヴアルキリアフォームになった二人の連携攻撃が次々とバラのヨロイを外して行く。

その隙間を遠方で安全にキャストオフしたジャンスが接近しつつ二丁拳銃で狙い打つ。

さらに超変身。アリスフォームで正確に狙撃。

クイーンが撃たれてひるんだ隙にブレイザはアルテミスフォームに。

やはり超感覚のフォームで宝石でいう石目を探り当てて斬る。

「閃光一閃」(フラッシュシュート)

その間にセーラはフェアリーフォームへと。そして脳天から蹴りを見舞う。

「ライトニングハンマー」

「ぐああっ」

いくら異形の存在とて脳天は急所だ。たまらない。バラの装甲が緩んだ。

「今だ」

セーラは即座にマーメイドフォームへと転じ、バラの女王を高々とリフトアップ。回転し始める。

「トルネイドボンバー」

本来ならそのままの勢いで真上に放り投げるがバラの装甲を吹き飛ばすだけにしてブレイザの方へと投げつけた。

ブレイザも既に距離をとり剛力タイプ。ガイアフォームへと変わっていた。

「豪刀破碎」(ギロチンクラッシュ)

斬馬刀・ガイアブレイドで斬りつける。

それでも立ち上がるクイーンに対して今度はジャンスロリータフォームが銃弾の嵐。

とにかく聖なる魔力と体力が続く限り攻撃を休める気はなかった。その魔力がつきかけて特殊形態を維持できなくなったジャンスは、ヴァルキリアフォームで撃ち続けていた。

しかし二つの拳銃が限界を超えてばらばらに吹っ飛んだ。

「きやあつ」

「まかせなさい」

入れ替わりでブレイザがでてくる。こちらもヴァルキリアフォームだ。

「剣撃乱舞」(スラッシュダンス)

袈裟斬。横薙ぎ。逆袈裟。唐竹割り。突きなどを一瞬で見舞う。

ここでブレイザソードが折れて粉々になった。

「セーラさんっ。後は頼みますっ」

「わかったわっ」

最後に出てきたセーラが左手のチョップを見舞う。凍てつく女王。即座に右手の炎のアップアが。

「クロスファイアー」

「ぎゃああああつ」

燃え上がる女王。

ありつたけの力を込めたのでこれまた限界を超えて両方のガントレットが粉微塵になった。

一度変身を解除して変身しなおせば「再起動」で再生はされる。

だがそれは多大なチャンスを逃すことになる。

徒手空拳となった三人はうなずきあうと三角に位置して呪文を詠唱する。

「貴様ら正気か？ また呪われないのか？」

スズにしばられ、聖なる炎に身を焦がす口ゼがあわてたように言う。

「残念でした。それはありませーん」

「なぜならわたくしたちは一人で戦ってきたワケではないのですから」

「邪悪な力の入り込む余地なんてないわよっ」

その言葉にクイーンは齒噛みしてスズは微笑んだ。次に力強く叫ぶ。

「今こそ邪悪な連鎖を断ち切るとき。災厄の終焉を」

「災厄の終焉」その言葉が戦乙女たちの合言葉になった。

「キャラル。友紀」

「はい。セーラ様」

ここで使うとなれば切り札。アテナフォームだ。

鎧をまとったセーラは友紀に向かって走る。友紀もセーラと共に戦った身。何を考えているかは瞬時にわかった。

「はいっ」

両手を組んで待ち構える。セーラがそこに足を乗せたタイミングで真上に跳ね上げる。

そのアシストでセーラは高く舞い上がる。

「森本。ドーベル」

「任せてください」

ドーベル・サイドカーモードを駆りブレイザの元に。

ブレイザはカーゴにとび乗ると蹴りの体勢を取る。

そのままサイドカーは直進し、女王の直前で急ターン。

遠心力で投げ出された形のブレイザは、その力をもらいジャンピングキックを。

「番長。ウオーレン。お願い」

「よっしゃあ。任せろ」

ウオーレンがロケットパックに変化してジャンスの背中に。

そのジャンスを岡元が抱えあげて勢いよく女王めがけて投げつけた。

それをカタパルトとしてロケットで加速をする。

三人がとんだ。タイミングを合わせるために同じ言葉を叫ぶ。

「クライシス・エンド」

そしてキツクが同時に炸裂した。

「おのれええええ。ミュスアシの戦乙女とその末裔ども。こんなことをしてただで……」

最後までいえなかった。今度は逆に聖なる力がクイーンを蝕む。

大爆発が長い戦いの終焉を告げた。

「キヨシ。キヨシ。しっかりして」

「……………う……………友紀？ オレ」  
清良は友紀のひざの上で目を覚ました。

「会長？ 会長ツ！？ 大丈夫ですか？」

「森本……………ああ。俺なら大丈夫だ。それよりクイーンはどうした？」  
礼は森本の腕の中で気がついた。

「あ…番長。どうしたの？ そんな顔して」

「お…お前…その体」  
どういつわけか岡元は照れている。順は自分の肉体を確認して即座にその理由を理解した。

「セーラ様！」

キャロルのいつもの声が聞こえる。しかしそれは自分に向けられていない。

不思議に思い清良は友紀ともども声を向けられた空を見た。

同様に他の面々も同じ方向を見て、そして仰天していた。



空には五人の女がいた。

中央の檻に閉じ込められている女は先刻まで戦っていた女。ロゼだ。

その傍らにはスズがいた。

そして赤い髪のセーラ。栗色の髪のブレイザ。黒髪のジャンスが薄衣をまとって微笑んでいた。

「キヨシ。今まであなたの体を借りてしまいごめんなさい。でもそのおかげでアマッドネスを全て倒せました」

生まれる前から共にあった存在が自分から離れ天へ上ろうとしているのだ。

一抹の喪失感を覚える清良。

「そっか。今度こそ本当に女神になるんだな」

ブレイザが続く。

「レイ。そしてジュン。キヨシ。我々は君たちの体のおかげでこの世にいられた。だがそれも終わりのときが来た。これより天での修行の日々が始まる」

「そうか……」

礼も言葉が出てこない。

順と分離したがやはり柔らかい印象のジャンスが微笑みながら言う。

「その肉体は本来の持ち主であるあなたたちにお返しします。元に戻してありますから安心して」

「あの……だったらどうして僕はこうなっただんです？」

清良は学生服の。礼はブレザーのそれぞれ長身の少年に。

しかし順だけはジャンパースカート姿。

低めの背丈。華奢な体躯。輝く肌。自己主張する胸の二つのふくらみ。絹のような細い髪。そしてきれいな高い声。

順だけは少女の肉体になっていた。

「せめてものお礼で望む姿にと思ったのだけど…男の子のほうがよくかったかしら？」

「ちよつとだけ迷う順。今ならまだ戻せそうである。だが「彼女は自分の気持ちをもとに確認できた。」

「ううん。びつくりしただけ。ありがとうジャンス。私を女の子にしてください」

順が「本当に女になった」のを嫌だとは思わなかった。

それで自分がジャンスの影響だけでなく本心から女になりたがっていたと察した。

「友紀。君には世話になった。キヨシと二人。いつまでも仲良くな」

「や…やだ。スズさん」

「私はクイーンともども罰を受ける。そして全ての罪を償うべくやはり修行する」

「誰がそんなところに行くものか。わらわは死なん。必ずこの世に戻り、お前たちに復讐してくれる」

「ロゼ様。往生際が悪いですよ。私と共にまいりましょう。この時代は我々のいるべき時ではありません。ふさわしい場所へとまいりましょう」

「嫌だ。死にたくなどない。わらわは生きていたい」

「邪悪の長は見苦しい末路をさらしていた。」

「そろそろいかなくてはなりません。さようなら。ジュン」

「サヨナラ。もう一人の私」

早くも女性的な笑みをつむぎ新たな女神を見送る順。

「もうあつこともないだろう。静かに暮らすがよい。レイ」

「ああ。さらばだ」

「武人同士。簡潔な別れのブレイザとレイ。」

「これからはただの人間。単なる男の子だから無茶してはダメよ。キヨシ」

「わかってるよ。あばよ」

ぶつきらぼうにしないと涙がこぼれてかつこ悪そうだったので悪そうにしていた清良。

共に戦ってきただけにそんなのはお見通しだったセーラはくすつと笑う。

今度こそ女神となった戦乙女たちは高く高く上っていき、そして見えなくなった。

「いっちゃいましたね。ブレイザさん」

落胆している森本だが礼が無事で喜ぶ気持ちも。

「ああ。そうだな」

感慨深げな礼。気が抜けたのかよろける。

「危ない」

それをとっさに支える森本。驚いたように見つめる礼。

「どうしたんですか。会長」

たくましくなったことに驚いていたなんて言えない。だからこういった。

「森本。肩を貸せ」

「はい。会長」

対等な関係に。二人はまさに並び立つたのである。

「あの番長。私、本当に女の子になっちゃった」

今までさんざんくつついたりしていたのは「飯の肉体」だからだつたらしい。

女の子として固定されたら急にその行為が恥ずかしくなってきた順。

「そうか。女には優しくせんといかんな」

岡元は優しく微笑むと順を抱えあげた。

「きゃあっ?」

突然の行為に驚く。そのまま番長は順を「お姫様抱っこ」した。

「疲れただろ」

「……うん」

今はちよつとくらい甘えてもいいかな。そう思った順は身を委ねた。

そして清良と友紀は…

「こら。誰が嘘つきだっつて?」

「え? 聞こえていたの?」

「ああ。おかけでむかついたんで女王に取り込まれないで済んだがな」

茶目つ気たつぷりに言う清良。

「ちゃんと約束は守っただろっ」

「うん」

二人は堅く抱きしめあう。それを複雑な思いで見ているかつてはアマツドネスだった少女たち。

「本当に男の子なんだね。もう女の子になって戦わなくてもいいんだね」

「ああ。俺は男だぜ」

そして友紀は女の子。抱きしめあっていたらいきなり異性を意識し始めた。

色々ありすぎて思考の鈍っていた二人は人目があるのを忘れていた。

「男の子と女の子」それを確認するかのように唇を重ねあっていた。

そのぬくもりと唇の感触に清良が確かに男として戻ってきたことを友紀は実感していた。

「じつして。気の遠くなるほどの長い戦いに決着がついた。

アマッドネス…壊滅

EPISODE 48 「女神」 (後書き)

次回。最終回

EPISODE 49 (エピソード) 「清良」

EPISODE 49 (EPILOGUE) 「清良」

あの決戦から約2ヶ月。二月十四日。

長であるクイーンが倒れたことでアマッドネスは壊滅した。

だが警察としては「残党」も考えられるため警戒の手を緩めず  
いた。

元々不可解な事件だったのもあり、何が起こるかわからないとい  
う思いもあった。

だがそれも二ヶ月もアマッドネスによる事件が発生せず。

そして大半の事後処理も済み薫子の提出した報告書もあり終結と  
判断。特捜班の解散となった。

出向いていた薫子も本来の部署である警視庁に戻る。

そして福真市。拳の戦乙女。セーラとしての戦いの日々を終えた  
高岩清良。

彼は二度と女になることはなく平穏な学園生活の日々を過ごして  
いた。

この日も友紀と共に登校をしていた。

「あれ？ やだ。抜き打ち検査？」

福真高校の正門では風紀委員などによる所持品検査が行われてい  
た。

「なんでこんなときに」

友紀はカバンの中身…可愛く包まれ、甘い香りを放つ贈り物を没  
収されないかと不安になる。

福真署。特捜班の本部では片付けも終わり別れを惜しんでいるところである。

「世話になったわね。ノリ」

こちらに向向いてから親友とも言える存在となった女性警察官に握手を求めぬ。

「寂しくなるね。けどまた逢えるわね」

以前に比べて格段に柔らかくなった渡会の子が寂しげに微笑む。

「そうね。また逢えるわよ」

少なくとも二人は元の姿のままなのだ。

「今日は非番でしょ。どうするの?」

「うん。挨拶回り。色々回るけどなんと申してもあの子達が一番お世話になったからね」

戦乙女たちの勇姿が脳裏に浮かぶ。

「いいわね。私の分もよろしく頼むわ」

「うん。休み取ってあるしのんびりと回るわ」

挨拶回り。それが別離を強調する。空気が湿る。

「仕事で一緒はもう良いけど、今度また飲みに行きましょう」

空気を換えるべく薫子が笑顔で言う。

「そんな事を言っていていいの? 私は強いわよ」

「飲み比べね。受けて立つわ」

朗らかに笑う。湿っぼさのかけらもない別れであった。どこか男性的ですらある。



福真高校。抜き打ち検査は風紀委員長の飛田翔子自らが陣頭指揮を行っていた。

「ほらよ。変なものはないぜ」

清良はカバンを開いて見せる。

「不良」と言われる割に入っているのは教科書だけだ。

翔子は中身を一瞥する。しかしもとより興味がなかったかのようなそぶりだ。

むしろここからが本題だった。

彼女はずいと清良に詰めよる。キスできそうな至近距離だ。

元は男といえど今は綺麗なロングヘアのメガネ美少女。

思春期の少年がドキツとなるのも無理はない。

わかっていても軽く友紀の心に曇りが生じる。

それを知ってか知らずか翔子は小声で清良にささやく。

「高岩君。私と付き合いなさい」と。

どこか上ずった声で言う。頬も赤い。

「はあ？ だから説教されるようなものは持ってないだろうがよ。

まあ喧嘩はちよつとしているけどよ」

「つきあい」をそう解釈した清良。

そしてケンカの数が多いのも事実だった。

まるで以前の調子を取り戻そうとしているかのように見えた。

「……そうね。やはりそう思うわよね。なら間違えないように」

言うなり翔子は清良の首に両手を回した。

「お、オイ。拘束かよ？」

翔子がかつては男である事。そしてそのころから不良である自分にいい感情を持ってないと認識していた清良はそう捉えた。

だが生まれたときから女である友紀は違う解釈をした。

翔子が完全に女。それも「恋する乙女」の表情をしていたと。

そして目を閉じて唇を寄せてくる翔子にさすがに清良も普通でないと理解した。

「だめえっ」

友紀が叫んで翔子の動きが止まる。くすつと笑う。ゆつくりと。名残惜しそうに腕を離す。

「さすがの喧嘩無頼もこう言うのには弱いみたいね」

「なんなんだよ？ まるで女みたいに」

「失礼ね。私は女よ」

演技抜きでためらいなく言いかけた。男の時代に未練はない。

「飛田。お前はもう……」

清良が何か言い書けるのを「さあ。遅刻するわ。行きなさい」諭して行くように促す。

なんなんだ？ そう思いながら清良は友紀と共に校舎内に。

友紀の方はまるでチェックが入らなかった。

二人を見送り翔子は悪戯っぽく笑う。周辺は風紀委員長の「乱心」に絶句している。

翔子は周辺に「からかっただけよ」と一言で。

力押しではかなわない相手だけに「女の色香」を悪用したと解釈した面々。

だが「からかった」は嘘ではないが翔子の真意は別にあつた。

「ちよつと煽り過ぎたかな。でも止められてなかったら人前でもきつと……」

翔子の上着のポケットにも甘い香りを放つものが有つた。

とある喫茶店に薫子はよる。アンティークな雰囲気は渋みであるが若い男が大勢いた。

理由は従業員に有る。

「いらつしゃいませえ……あつ。薫子さん」

メイド姿のひかりが出迎える。ただし以前と違い明るい笑顔だ。

「こんにちわ。あれ？ しのぶさんは」

「お散歩ですよ。潮さんと」

「あら。そうなんだ」

「ええ。もう二人ともラブラブで。妬げちゃうくらい」  
屈託なく笑う。

女王の呪縛から解放されたので明るくなった。

だが「邪心」が吹き飛んだ事で女性を食い物にしていたことを悔いていた。

そのため今度は自分の意志で奉仕する立場へとなった。

その決意表名でメイド服のままである。

そんな心情を知らない男性客が珍しいメイド目当てに大挙してくる。

「ひかり。早くお席に案内しなさい」

ちよっときつい印象のある女性に注意されひかりはぺろっと舌を出した。

そして座席へと案内すると入れ替わりにその注意した女性がお冷とメニューを持ってやってきた。

「いらっしやいませ。御注文は何にいたしますか？」

「ブレンド頂戴。純子さん」

「かしこまりました」

深々とお辞儀をして去って行くワンピースの女性。ショートカットがアクティブな印象だ。

(タバコの匂い全然しないけど、浄化されちゃうとそんなところも変わっちゃうのかしら?)

純子：かつての中屋敷純郎は記憶の大半を抜き取られていた。

しかしタイガーアマッドネスと分離して大半の「元・アマッドネス」同様に善良な女性と化した。

その激しすぎる上昇志向はプロ意識と言う形になってわずかに残留。

短い期間で接客のプロになっていた。

「ただいま。あら。薫子さん」

勝手が存在しないため客同様に入り口から戻ってきたのが軽部しのぶ。セーターとスラックスと言う姿である。

そして手を引かれている和服の女性。三十後半くらいだが生気のない顔。

それをまるで恋人を扱うようにしているしのぶ。

彼女こそかつて三田村警部だった三田村潮である。

「やっぱりまだ…」

「ええ。潮さんは心を閉ざしたままです」

薫子の問いに沈痛な面持ちのしのぶ。

潮を部屋に戻すと自分もカウンターにはいるべくエプロンをつけながら答える。

大將軍ガラとして戦いに挑み、そして敗れた三田村は最後に心まで散らしてしまったのかようだ。

しのぶの手がないと何も出来ない状態である。

「あの…なんていったらいいかわからないけど」

本当に言葉に詰まる薫子。

「でも…こんな事を言ったらいけないのかもしれませんが…私は今しあわせなんです」

強がりでないのはその表情でわかる。そして薫子は警察官の洞察力でなく、「同じ女」として理解した。

自分がいないといけない。潮にとってしのぶはなくてはならない存在。

互いにかけてがえのない存在となった。それでしのぶは満たされていた。

「それに薫子さんがここをお世話してくれたから私達は路頭に迷わなくて済んでるんですよ」

中屋敷。軽部は女性警察官として復職も視野にあったが中屋敷は

興味をなくしていた。

そして軽部は潮の介護のため職を辞した。

「まあ変なご縁だったけど」

その意味は奥から現れた中年男性が謎解く。

「ああ。一城さん」

「どうも。葉子ちゃんお元気ですか？」

そうなのだ。この男性は広瀬葉子の父親にしてこの店のオーナー。自分の愛娘が怪事件を起こした集団のトップであると言う事實はひどく彼を打ちのめした。

その罪滅ぼしもあり「付き従っていた」彼女達を雇ったのである。

「ええ。とても入院していたとは思えないほど元気ですよ」

今にして思えばその肉体でロゼを封印していたのかもしれない。爆発して再生されたことで不具合がなくなり健常体へとなったのだ。

「学校がとても楽しいようです」

僅かずつだが友達が増えつつある。それを聞いて薫子は満足そうに微笑む。

その後は各方面に挨拶をして回っている。非番なのでのんびりしたものだ。

そして最大の協力者である人物がフリーになる時間を待っていた。

福真高校の二時間目。清良たちは体育の授業だった。

男女混合でソフトボール。グラウンドへと移動する。

「あっ、あの。高岩君」

三つ編みの少女が赤い顔で歩み寄る。

「おう。魚住。お前らが一時間目の体育か？」

こちらもソフトボールだったらしい。

しかし体育だと言うのにポーチを持参と言うのは？

半分は女として過ごしていた日々があり、そのあたりに気が回る

ようになっていた清良は不思議に思う。

しかし目の前の少女はもじもじするだけ。

普段は流しているロングヘアを、体育と言う事で編んでいるが、それが恥らうごとに揺れて振りこのようだ。

「ほら。美奈子。勇氣出して」

「ちよ、ちよっと」

シヨートカットの少女に背中を押されるが美奈子は踏み出せない。かつては魚住平。平田歩と言う名の二人の少年は水泳部のレギュラーの座を駆けて憎悪を燃やした。

そこを平はつけこまれてアマツドネスとなった。そして歩も手にかけられてこの姿に。

現在は魚住美奈子と平田鮎美と名乗る少女二人。シンクロナイズドスイミングでのパートナーで親友となった。

この場も親友の応援でいるようだ。

その応援でやっと美奈子は勇氣が出たらしい。

「これっ。受け取ってくださいッ」

勢いよく差し出されたかわいらしい包み。

包装紙越しに甘い香りが。

「これ……チヨコか？」

「そうです。美奈子から高岩君への愛の告白のバレンタインチョコです」

「あ、あゆみっ」

美奈子は耳たぶまで赤くなった。

照れ隠しもあり甲高い声で奇声をあげながら鮎美と追いかけてこを初めてしまい、そのまま清良の前から立ち去った。

（なんだったんだ。あれは？ それにこれ？）

手の中には確かにバレンタインのチヨコレート。

（あいつは元々は男だろう。それが男のオレ相手にこんなものを…もう頭の中身まで女と言うことか？）

チヨコをもらって浮かれるどころか「自分の所業」を再認識して

気持ちに沈む清良であった。

それを影から見つめる黒い影。

放課後。王真高校の生徒会の会議が開かれている。

「来年度の生徒会長だが、この森本を推薦する」

いきなりの現生徒会長・伊藤礼の指名であった。

「会長……」

緊張している森本。だが「いずれは後を任される」と覚悟は出来ていた。

そして尊敬する相手からバトンを託されることを誇りにも。

「森本。頼んでいいな？」

礼にはおとなしい言い回しだが有無を言わせぬ迫力があった。だが森本もたじろがない。まっすぐに受け止める。

「はい。お任せください」

その力強い言葉に礼が微笑んだ。

そしてその笑みは森本を狼狽させた。

（ブ…ブレイザさん？）

目の前で分離して天へと上ったはずの「もう一人の憧れの存在」の幻影を垣間見た。

（びっくりした。会長の笑い方がブレイザさんそのまま。元は同一人物だったといえど…未練かなあ？）

会議は潤滑に進み閉会となった。

礼と森本は二人だけで高校の中庭をあるいていた。

「驚いたか？」

「いえ。いつか言われるとは思ってました」

「そうだな。俺が後を任せられるのはお前だけだ」

ブレイザを追いかけ、サポートを続けるうちに森本もたくましくなっていた。

そしてそれを頼もしく感じていた思いは礼の胸にも残っていた。だから後任に指名した。

礼の任期は三年の一学期いっぱい。その間に引継ぎをすることになる。

「しかし穏やかだな」

成績優秀な礼は既に進学問題はクリアしてある。だが「穏やか」なのはそれだけではない。

「随分いろんな相手と戦いましたもんね」

「ああ。拳句の果ては仲間であるはずの戦乙女とまでな」

その当時としては大問題だったが、無事に日々を過ごす今となつては笑つていえる。

「どうしてますかね？ 高岩さんと押川さん」

「さあな。アマッドネスが出なければ特につるむつもりもない」  
相変わらずのクールさである。

その二人の前に黒い影が。

「お前は！？」

狼狽。そして笑みが浮かぶ礼。

福真高校。一年前は元・男子校の名残で男子の比率が高かったのに度重なるアマッドネス事件。

とどめがロゼがここで多数の男子を奴隷女にしたため現在の男女比は3：7と完全に女子が上回っていた。

仕方のない事とは言えど自分がかかわってこの現象が引き起こされたのを思うと清良の気が晴れない。

だが当事者達はまるで元から女だったかのように振舞っている。すっかり溶け込み新しい性別での生活を堪能している。

考えて見れば同じ人間。別に動物や虫になつたわけではない。

当事者はそう考えるが「変えてしまった」清良としてはなかなか



割り切れない。

「あつ。高岩くん」

清良が「女にした」最初の一人。安楽千由美が笑顔で駆け寄ってくる。

「安楽？　なんか用か？」

友紀の部活が終わるのを待っていた清良。それが目的ではない女の子が来て困惑する。

「うん。これ渡そうと思って」

千由美もチョコレートを差し出した。

「お、お前もか？　安楽。俺は男だぞ」

「知ってるよ。でもあたしは女。問題ないよね」

「い、いや。元々は男だろ？」

「今は女だもん。男としてはぱつとしなかったけど女になったら色々解放されて楽しいんだ。高岩君。女にしてくれてありがとう」

周囲がざわめく。

「性転換」ではなく「大人との階段を上った」と解釈した。

「ずるい」「ひそかに目をつけていたのに」「千由美だけ高岩君に告白なんて」「こうなったらあたし達も」

一斉にチョコを取り出す少女達。大半が性転換組だが生まれたときからの女子も混じっている。

（な、何でだ？　いくらバレンタインだからってなんでこんな？）  
清良は混乱していた。

百紀高校。

校庭のど真ん中で巨漢の岡元とジャンパースカートの制服姿の少女。順が向かいあっていた。

「はい。番長。バレンタインのチョコ」

「お、おう」

実はこれが初めて。いくら女性的だった順でもさすがにこの行為はしてなかった。

しかし完全に女性化したことで堂々と出来る。  
わざわざ校庭でと言うのは堂々としすぎだが。

進学をせず就職した岡元はこの時点ではある程度落ち着き学校にも顔を出せた。

たまたま顔を出したらまさかこんな公開での恥ずかしい思いをするとは思ってもよらなかった。

表向きはアマッドネス事件の被害にあい女性化した事になってい  
る順。

授業などは男女別のが女子の方に移ったが、元々物腰が柔らかい  
上に女子制服姿も珍しくない。

女子に馴染むのも早かった。

さすがに女子更衣室で最初に裸になった時は女子に「これ本物？」  
とその立派な胸をいじられて閉口はしたがそれももう落ち着いた。

そして長年の思いである「女の子に戻りたい」と言う思いがかな  
い、その意味でも心穏やかな順だった。

何よりももう戦わなくていい。それが大きい。

「それからこれはお誕生日プレゼント。18才おめでとう。番長」

「何？別にしてくれるのか？」

バレンタインデーが誕生日と言うこともあり、母など女性からは  
プレゼントがチョコと言うケースが大半だった。

だからいつぺんに片付けられずちゃんと祝われたので嬉しい。

だが表情がこわばっている。

「あれ？プレゼント気に入らなかった？」

順の表情が曇る。現在は完全に女子なので余計にわかりやすい。

「い、いや。そんなことはない。だが俺からも渡すものがあるのだ  
がこんなところでは」

窓から何人かが見ている。

「いいじゃない。ラブラブなところをみんなに見せてあげよ」

それを狙つての校庭でのプレゼントだった。

自分が完全に女である事。そして番長に好意を抱いている事。その二つを知らしめるべくここぞだ。

「そ、そうか。わかった。俺も男だ。覚悟を決める」

「さすが番長。かっこいい」

相変わらずの軽いノリの順だが岡元が取り出した物を見て表情が変わる。

「それって…まさか」

信じられないという顔つきに。

「オヤジに借金して買ってきた。順。これをお前に」

それは指輪だった。

「ば…番長」

いつも飄々としている順が珍しく感極まっている。泣きだしそう  
だ。

「約束だ。お前が完全な女になった今、俺の嫁に迎えたい」

その言葉で限界を迎えた。順の双眸から熱いものが流れ出す。

「いいの？ あたし元は男だよ？」

「今は完全に女なんだろう」

アマッドネス事件のせいで戸籍の性別変更が用意に出来るようになった。なっていた。

現在の順は押川家四男ではなく長女になっていた。

「俺も18になったからな。結婚出来る年だ。こちらの親は承諾してくれた。後はお前と」

「大丈夫だよ。きつとわかってくれる。この人ならあたしを幸せにしてくれるって」

順が完全に女になったのはまさに今、この瞬間といえる。

ダイヤの指輪を左手の薬指にはめる。ぴったりだった。うっとりしている順だったが笑顔で礼を言う。

「ありがとう。番長……ううん。三郎さん  
いい改めた。」

「いつ!？」

不意打ちだった。

「おま……いきなり下の名前と言うのは」

「だって旦那様のことを他人行儀に『番長』なんていえないでしょ?」

いたずらっぽく笑う。そしてそれが合図であったかのように校舎から歓声が。

いくら遠目でも指輪を渡している様子はわかる。リアルプロポーズと察しがつく。

そしてそれが成就したのを見越して声が上がった。

すっかり二人の世界に入っていた順と岡元は我に帰る。

猛烈に恥ずかしいことをしていたのを思い出した。そこに

「よう。困っているようだな」

空から黒い影が。

時間を潰していた薫子のケータイにメールが。

(あら? 久しぶり)

ちよつと御無沙汰な相手からだった。

(へえ。それならそつちでみんなと)

薫子は指示された場所へと足を向けた。

福真高校。清良も男ではある。一度くらいは女に迫られて見たいと思ったこともある。

ただしそれは常識的な人数である。

校内の女子から一斉にと言うのは考えてない。そのうち半分くらいは「元・男」。

セーラとしてではあるがその強さに「男」を感じ、同時に男を異性と感じた自分を「女」と認識した。

それでこんな極端な行動にも出た。

ただしバレンタインである事。そしてある扇動があったのも起因。「ど、どうしたの？ キヨシ」

清良と落ちあうべくやってきた友紀だが、異常なシチュエーションに絶句。

「ゆ、友紀。逃げるぞ」

「えっ。どこに？」

「知るか」

清良は友紀の手を握り締め外へと走り出す。

「やっぱりあの子を選ぶわよね」

「黒幕」は生徒会長。高森雅だった。

なんと生徒会直々の扇動だった。

「ほんとじれったかったもん」

「見てていらいらするのよね」

「それにこれであたしらがもう完全に男時代に未練がないと知ったでしょ」

「気にしすぎよね。仕方のないことなのに」

そういうことであつた。

戦うたびに一人の男を女に変える。それで清良は苦悩していた。

だから自分達がもう女でいることに抵抗がないと知らしめるべくこの行動に出た。

男を異性として意識している。これほど「女ならではの」ことはないと言う認識だ。

そして悪の尖兵として戦った自分達を解放してくれた清良に対する礼でその呪縛を断ち切ろうと画策していたのだ。

「でも、ちょっと本気だったけどね」

何人かは千由美と同じ思いを抱いていた。

中にはしつこく追いかけてくる者もいた。

友紀をつれている手前そんなに速く走れない。

つかまりそうなきに一匹の黒猫が。

「お困りですか？ セーラ様？」

「お前、キヤロル？」

使い魔達はあの最終決戦の後で姿を消していた。

役目を果たした上に本来の主が全て天へ召された。

それでどこかに消えたのかと三人とも思っていた。

「今までどこに行つてたんだ！？」

「いやあ。やっと後始末が終わりました」

今度こそ完全にと改めて封印を施していたのであった。

「それでも我々も隠居の身となりました。もはや転生に備えて眠りにつく必要も無くなりましたので残り五十年ほどは暇になりました。それでとりあえずはセーラ様にお仕えしようかと」

「暇つぶしかよ！？」

思わず突っ込む。だがこれで戦乙女だったころのノリに戻ってきた。

「まあいい。それなら付き合え。オレ達をどこかに逃がしてくれ」

「わかりました。それでは」

キヤロルが変化したバイクに二人はまたがると一目散に逃げ出した。

二月なので四時ともなるとだいぶ日が傾きそして赤い。

そんな河川敷にキヤロルは運んできていた。

「変なところに来たな」

「ちよつと待ち合わせがありました」

「待ち合わせ？」

怪訝な表情をする清良と友紀。

その後から朗らかな声で呼びかけが。

「セーラちゃん。友紀ちゃん」

「薰子さん？…っていうかもうセーラじゃないし。オレ」

「はぁ。そう仰られても癖になつてまして」

「あはは。そうよね。じゃあ高岩君」

正反対な反応の両者である。

「それでキャロル。待ち合わせて薰子さんのことか？」

「いえ。他にも。ああ。いらっしやいました」

大型バイクにまたがる岡元。その後ろにしがみつく女子制服姿の順。

反対方向からはサイドカー。駆るのは礼でカーゴには森本が。

「そう言う魂胆か。ドーベル」

「なし崩しに疎遠になつてましたからな。きちんと終結をさせないといけないかと思ひまして」

「なるほど。ウォーレン。全員集合だね」

「まあ俺等の長いお勤めが終わつたささやかなパーティーみたいなもんなんだがよ」

全員集合どころか清良。礼。順が顔を合わせるのもロゼとの最終決戦以来だ。

そもそも直後に三人とも疲労から倒れ冬休みを静養に費やしていた。

三学期が始まってからも清良はわざわざ礼達に逢いにいく気になれなかった。

どうしても戦いの日々を思い出す相手。

順は自身が女性化でやはり余裕がなかった。

礼にしても生徒会があった。

だから二ヶ月振りであった。

「まだまだ寒いね」

今や完全に少女となった順。それを誇示したいのかストッキングを着用せず「女の足」をさらけ出していた。

なだらかな斜面の短い草の草の生えている辺り。

薫子。友紀。清良。順。岡元。森本。礼と言う並びで座っていた。全員で同じ方向を見ている。

そこには何も無い。ただ平和な光景があるだけ。

命がけで守りぬいた平和があるだけ。

だけどこれ以上ない褒美だった。

「押川。体は大丈夫なのか？」

ぶっきらぼうな言い回しだが心配しているのは伝わる。だから順も明るく答える。

「平気だよ。一昨日終わったし」

「はあ？ 何が終わったんだよ？」

まるでわからない清良。半分は女だったし24時間以上女として過ごした日もあるがさすがにこれは経験してない。

「いいのよ。知らなくて」

友紀が赤い顔をしている。「女同士」で通じ合ってしまったらしい。

「『終わった』……か。俺達の戦いはあの日にどうやらちゃんと終わったらしいな」

礼の言葉で思い起こす。僅か二ヶ月前が何年も前のことのようにだ。

「押川を見ていると信じざるを得ないんだが、オレが女になって戦ってたなんて夢のようだぜ」

「どちらかと言うと悪夢だがな」

礼の本音ではあったが森本が泣きそうな表情しているのを見てい直す。

「倒しても倒しても次から次へと。気の休まる暇もなかった」

これも本音。終わったからこそいえる言葉だった。



「ほんと。頼もしかったわよ。それ以上に三人とも可愛かったわよ」  
茶目つ気たつぷりに薫子が言う。

「やめてくれよ」「勘弁してください」「やだ。可愛いだなんて」  
三人三様であった。

「けどまあ。確かにずっと男だったから見えないものもあつたよな」  
チラツと友紀を見る清良。友紀もその視線をまっすぐに受け止める。

「女同士」としては友情があつた。それゆえだ。

「それは同意せざるをえんな」

礼も森本を見る。当人は赤くなって下を向いてしまう。

礼にしたらブレイザとして感じていた「年下の男の子の意外なたくましさ」を思い出していた。

森本の方はブレイザへの淡い思いを思い出していた。

「あたしはこれからずっと女だけど、ぜんぜん後悔はないよ」

あっけらかんとした順の言葉。その傍らでひどくあわてている岡元の姿。

「そりやお前は男の時からあれだけ……なんだ？ その指輪？」

「えっ？ もしかして岡元さんと？」

さすがに女の子である。友紀が一発で正解を言い当てた。

「えへへへー。ついさっき三郎さんにもらったのーっ」

ひらひらと婚約指輪のは待った左手を舞わせる。

「まあ。おめでとっ」

儀礼的ではなく本心から祝福する薫子。友紀も同様。満面の笑みの順。女になって一番幸せなときだ。

対照的に赤くなる岡元。そして青くなる清良と礼。

（場合によってはオレもあんな風に完全な女になっていたのかも知れない）

もしそんなことになっていたら友紀とは一生友人どまり。それを怖く感じた自分に驚いた清良。

戦いの日々を夕日の中で語りあっていた。

だがそれもそろそろ別れの時が来た。

「なんにしてもみんな元気そうでよかったわ」

薫子が明るくいう。しかし次の言葉は神妙だった。

「ごめんね。あなた達ばかりにづらい思いをさせて。私達には手が届かなかった…」

アマツドネス相手に警察は無力だった。結果として戦乙女達に多大な負担をかけたことをわびている。

「気にすんなつて。サポート。ありがたかったぜ」

雰囲気のせいかな。普段なら照れてしまう言葉がすんなり出る清良。「そういつてもらえると助かるわ。ほんと。みんなお世話になったわね。ありがとう」

この町を去る前にやり残した事。それはこの言葉を伝えることだった。

薫子が去っただけで寂しい雰囲気になった面々。

「さてと。それじゃあたし達も」

「ああ。帰るとするか。順」

自然に腕を絡める二人。冷やかすようにその頭上でウォーレンがとぶ。

その背後から「戦友」に声をかける二人。

「元気だな」

「戦いの終わつた今、もう逢う事もないだろうがな」

「なに言ってるんのよ。結婚式には招待状を送るわよ」

もう完全に「婚約者」になっている。

（女になってそこまで突っ走るか？）

（人生急ぎすぎだろっ）

とはいえど二人の人生。そこまでの干渉は出来ない。

「送るぜ」

ウォーレンが大型バイクに変形。それにまたがる岡元。その彼の胸に両手でしっかりとしがみつくと順。

「じゃあ、またね」

ウイंकをしたのが合図にでもなっていたかのようにバイクは走り出す。

「それじゃ俺達も帰るか。森本」

「はい。会長」

礼と森本も立ち上がる。だが礼は清良の方に来た。身構える清良。

「高岩。正直に言うが俺はお前が大嫌いだった」

「……それはこっちのセリフだぜ」

クイーンのかげら以前に相性が悪かった。

「だが貴様に助けられた部分もあるのは認める」

これは不意打ちだった。まさか礼にこんな台詞を言われるとは思っても見なかった。

「意外だな」

「俺はそこまで傲慢じゃない。戦っていたうちは負けたくない思いからいえなかったがな」

そして驚くことになんと礼が頬を赤らめたのだ。

彼の人生でここまで心情を吐露した事がなかった。それゆえだ。

「ふっ」

清良はなんとなく気分がよくなった。上から見たというわけではない。気持ちに通じていたらしいことにだ。

「負けたくない…か。だったらいつかガチでやるか？」

「望むところだ」

また一触即発？ ひやひやする友紀とキャロル。対する森本。ドーベルは落ち着いている。

「だから次に逢うまで簡単に負けるんじゃないぞ」

「ああ。てめーこそ剣の腕をさび付かせるなよ」

清良は自分でも意識せすい笑顔で語っていた。

そしてそれは礼も笑顔にしていた。

「ああ。また逢おう」

そして彼は照れ隠しのように素早く歩き出す。

主の考えを察したドーベルは即座にサイドカーモードに。

森本は清良と友紀に一礼するとカーゴに納まる。

既に運転をこなせるようにはなっていたが、ここは意地で礼がカーゴになんて納まらないとわかっていた体。

そしてその読みどおり礼はバイク部分にまたがると、後ろを振り返ることなく走り出させた。

その場には清良と友紀。そしてキャロルだけに。

「みんな行っちゃったね」

夕暮れもありさびしい雰囲気。

「ああ。そうだな」

短い言葉の清良。

「あっさりしているのね」

「生きていりゃまたあえるさ」

「そりゃそうだけど」

会話が続かない。逆方向からのアプローチで「怒って見せた」友紀。

「ところで清良。最近ケンカ多いよね」

「そうだな。確かめているんだ」

「確かめて？」

意外な返答に友紀はつい怪訝な表情に。

「拳の戦乙女・セーラではなくただの男・高岩清良である事をな  
いくら戦意を高めても変身もしなければ飛べもしない。それで自分  
がただの男である事を再確認していた。

またただの男相手に対等の喧嘩。これもまた「人である証明」と  
していた。

「あの…清良」

慰めたくても言葉が出てこない。

「一心同体だったからわかるんだ。セーラは優しい奴だった。戦いながらも心の中で泣いていた」

それは清良も常に気にしていたことだった。

「話し合って引っ込んでくれりゃそれでいい。だがやつら…アマツドネスはそうは行かない。暴力に暴力で挑まないといけない」

「清良」

「結果として何人もの男達を死ぬまで女にしてみました。仕方ないと思う。けど…申し訳ないと言う気持ちも消えない」

「でもあなたが戦ってくれたから」

犠牲者は食い止められた。そう言いかけたがそんな安直な言葉でいいのかと自問自答する友紀。

「それもわかる。けどオレが男達の人生を変えたのも本当だ。だからせめてオレはこの思いを背負って生きて行こうかと思う」

人々を救うために拳をふるい、そしてその「罪」を背負うと言う。それはあまりにも重すぎた。

「しかし一人じゃ正直きつい。だから友紀。すまねえがオレのことを支えてくれないか？」

その時の清良は優しい表情をしていた。まるで女の子のようだった。

分離したはずの「セーラ」が残っていたかのようだ。

「うん。清良。ずっと一緒にいてあげる」

友紀もまた「罪」の意識の消えないもの。だが二人でなら軽く出来る。

微笑みあうと二人は自然と抱きしめあっていた。

夕日で二人の影が長く延びる。

時間にすればほんの2、3分だが気持ちの上では随分長くしてい

た感触。

どちらからともなく離れる。

「さあ。帰るか」

友紀としてはまだチョコを渡してないが不満はない。もう既に心は通じ合った。例え遠く離れても途切れれない。そんな確信を抱いていた。

「そうね」

「でしたらわたくしがお送りしましょう」

キャロルの申し出。顔を見合わせる二人。

そうだ。キャロルもずっと長いこと戦い続けてきた。かけがえのないパートナー。

みんなで帰ろう。そんな思いが「頼むぜ」と清良に言わせていた。

バイクモードにキャロルが転じる。

それにまたがる清良。後ろに座る友紀が清良の胸に腕を回す。

両者ともキャロルの用意したヘルメットで表情は見えないが仕草に照れが見て取れる。

「お二人とも。よろしいですか？ 行きますよ」

「私はいいよ。キャロル。清良」

「よしいくか。キャロル。しっかりつかまってオレから離れるんじゃないねえぞ！ 友紀」

友紀は声が上がらずりそうだったので返答せず、代わりにきつく抱きしめた。

それを返事とした清良は合図としてグリップを回す。

二人を乗せたバイクは走り出し、夕日へと消えていった。

もはや怪人の出る事はない平和な町に。

高岩清良ノセーラ

伊藤礼ノブレイザ

押川順ノジャンス

野川友紀

森本要

岡元三郎

キャロル

ドーベル

ウォーレン

一条薫子

渡会の子

三田村健治（潮）ノガラ

軽部しのぶ士郎ノアヌ

秋野ひかり光平ノライ

中屋敷純郎（純子）ノイグレ

スズ

戦乙女セーラ



完

## EPISODE 49 (EPILOGUE) 「清良」(後書き)

完結によせて

『変身』が共通するからか男の子がスーパーヒーローではなく女の子になって戦う話と言うのは割と見かけます。

『戦乙女セーラ』は城弾がそれをやったら…という思いつきではじめた作品です。

最初は全体の構想も立てておらず。戦乙女たちの能力とアマッドネスについての軽い設定のみがありました。

全体の構想。ラストを決めたのはエピソード17「遭遇」のあたりで。

そこまでは女王が何のアマッドネスかも決まっていなかったくらいで。

ちなみにバラ以外の候補では蜂がありました。女王蜂で。

バラに決めてそして『第四の戦乙女』としてスズの設定が出来上がり。

六武衆もこのあたりで。

最後に女王との決戦があるのは当初からわかっていたのでそこで総力戦となる。

早いうちに互いに助け合う展開にするとラストで強さのインフレがおきかねないので、序盤は阻害されているゆえに手を取り合えなかった戦乙女たちです。

終盤に行くほど敵も強くなるけど、戦乙女たちも手を組む障害が消えてきて、そして経験もつんで強くなる。

そんなに無理のある展開にはならなかったかと思ってます。

また主人公達が「人殺し」にならないように。かつTS物としての要素から取り付かれた男が解放されると生きているけど女性化するとしました。

キャラクターについて。まずは主人公たるセーラ。そして高岩清良。

ライダーファンの僕は徒手空拳にこだわり、そのため主人公は肉弾戦タイプに設定。

平成ライダーのパターンであるフォームチェンジも取り入れ戦闘エリアを選ばない戦いが可能にと。

性格はさっぱりしたあまり女の子らしくないタイプ。

終盤に出てきたアテナフォームは主人公補正で。

ただその『主人公補正』に懐疑的な僕はあまり好きでないので、せめていきなりではなく元々あつた能力を取り戻した設定に。

キャラルとの合体と言う形に。

それでも『これだときゃいいじゃん』とならないように制限時間の設定も。

清良が不良だったのはクイーンの影響。それは最初からの設定。

一話で「穢された」後遺症でした。

その時点ではクイーンのかげらと言うのは設定してなかったのですが、上手く拾えたかなと。

ワルっぽいのと変身後が肉弾戦タイプと言うことでケンカッぱやい設定に。

随分と悩ませましたが葛藤あつての物語です。

ネーミングの由来ですが最初にセーラからそう読める漢字の名前。そこからキヨシと男性名で発音出来るこの字に。

苗字は悩んだ挙句「平成ライダー」の主人公ライダーのスーツアクターである高岩成治さんから拝借。

以後このパターンが戦乙女サイドでは定着。

使い魔であるキャラルは解説役でサポート担当。

黒猫なのは「使い魔」と言うイメージから。

キャラルと言う名前ですが「猫」から「キャット」で似た印象の物に。

友紀は当初は単に「守るものの象徴」で。

それが「悪のライバル」になるは「第四の戦士」になるわと作者が驚く展開で（笑）

苗字の「野川」は「野川瑞穂さん」。「友紀」は「小野友紀さん」とスーツアクトレスさんから拝借。

ブレイザ/伊藤礼。伊藤は伊藤慎さん。礼は「ブレイザ」から。

また女性名にもなりえるので。

イメージしたのは『仮面ライダー555』の草加雅人。

主人公が徒手空拳でしたので剣士に。

ブレイザが貧乳と言う設定なのはなるべく可愛げのある悩みどころと。

それも極力「男だと何も感じないが女だと重大問題」と言うタイプの悩み。

それで貧乳に。顔が悪いと言うのは男でも悩むでしょうが、胸がなくて悩む男はいませんか。

これは意識してなかったのですが終盤はそのあたりを揶揄する展開もなかったですね。

前述の通り「主人公補正」に懐疑的なので同様にフォームチェン

ジさせました。

ただアドバイスを受けたのと元から武器を持っているのもあり、必殺技のためだけのフォームチェンジ』として落としどころに。

これはジャンスも同じです。

セーラが学校関係なのに対しこちらは剣士のイメージから和服で。

ドーベルはズバリドーベルマンからで。精悍なイメージもありますが割りと飄々とした性格。

キャロルが一番神経質かも。

サイドカーに転じるのは草加の変身するカイザが駆るマシンがサイドカーなことから。

それに森本を乗せられますし。

パートナーは可愛い年下の男の子（笑）森本要。

名前が思いつかず伊藤さんの演じたライダーの変身前の役者さんから拝借。

永徳さんから取らなかつたのは「高岩」と「大岩」では似通つてと言う理由ですが、森本と岡元もたいがいな気が（笑）

序盤の礼が高圧的なのもあり、それを和らげるキャラとして設定。ブレイザに淡い思いを抱くと言うのは最初から。

ジャンスノ押川順。

徒手空拳。剣士ときたので射撃で。

平成ライダーでは銃使いに縁のあつた押川善文さんから苗字をいいただきました。

順はジャンスに似たイメージで。

当初から最終的に女性化するのが決まっていたので、最初から男女どちらのイメージでもある順と言う名前です。

性格がしたたかなのはやはり黒い部分として。

ただ人をうまく使っちゃうタイプなんで清良と礼の衝突を上手く回避させられたかなと。

ジャンスが巨乳なのはブレイザの正反対で（笑）  
それから女性性の強調。

メガネは単にバランスだったかな？

こちらはジャンパースカートからの連想でワンピースで統一。  
そこからメイドになり、サブカルのイメージでピンクハウスとゴスロリで。

そのせいかオタクキャラにも。

まあ「変身」「キヤストオフ」「超変身」と言う掛け声の理由付けで、最初に覚醒した順がそうだったんですが。

使い魔のウォーレンですがカラスと言うことでクロウ。そこから元・巨人のウォーレン・クロマティ氏（愛称クロウ）を思い出しネーミングしました。

オンロードタイプの大型バイクになるのはオフロードのキャロル。サイドカーのドーベルと違わせるためで。

同じ歳の少女。年下の男の子と来たので最後は年上の男で。

岡元と言う苗字はやはりスーツアクターの岡元次郎さんからで。

下の名前は次郎から来たのと彼が「ハカイダー」を演じたことから（ただしそのハカイダーの人間の姿の時の名はリョウ）

主演の多い人なのでそれならみのセリフをたくさん言わせて。

一城薫子はあるやり取りから出てきたキャラ。

警察側の代表で。

名前は『仮面ライダークウガ』の一条薫（男性です）から。

敵側で。アマッドネスはアマゾネスとマッドネスの合成語。女王・ロゼはバラと決まった時点でネーミング。かなり直球です。基本的にアマッドネスは取り付く側。取り付かれる側共にモチーフの生き物から。

例外がファルコンアマッドネスの友紀。スコピオンのドクトル・ゲーリングなど。

警察の動きを鈍らせるべく内部の敵と言うことで大將軍・ガラを設定。

怪人としてはフォルムはだいぶ違いますが『仮面ライダー』に登場した地獄大使の「正体」であるガラガラランダから。

そこから下の名前は地獄大使役の俳優さんからいただきました。

最後にスズ。

敵の敵と言う形でいわば「第三勢力」で。

ただ戦乙女の味方と言うのは揺るがず。

本当の所は薫子になる予定でした。しかし友紀だと意外性も出し、そして罪の償いと言う点でもしっくりくる。

そこから友紀との融合に。

EPISODE 48で出てきたのは予定外。

本当は単に清良たちが異物となって一体化を免れていたんですが、スズをまとめて葬るのがしのびなくてあえました。

登場した時点でガラに殺されるのは確定してましたが、多くの物を残せたのではないかと。

思いつきで始めた割にはたくさん応援をいただけまして。  
それがなければラストにたどり着けたか疑問です。  
無事に終わらせられたのは皆様のおかげです。  
それに多いなる感謝をささげて「戦乙女セーラ」の幕を引かせて  
いただきます。

お読みいただきましてありがとうございます。

2011/5/17 19:00・自室にて。城弾。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9423k/>

---

戦乙女セーラ

2011年5月29日08時10分発行